

アルフィミィちゃんに
なってスパロボ時空で
暗躍する

アルフィミィ好き

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アクセル達の世界にいるアインストの女王によって生みだされたアルフィミイちゃん、どうにか力を集めて生き残りつつ、世界を救うためにできる限り頑張る。

キョウスケとエクセレンの世界のオリジナル・アルフィミイちゃんに触手でいたずらするのが目的のお話。つまり、二人のアルフィミイがキャットファイトを行う（嘘）

スーパーロボット大戦をメインに考えています。今年のPS4番新作まだかな？

参戦作品は何かいいか考え中です。ナデシコとコードギアスは確定。それ以外は考え中です。

目次

第12話
第11話
第10話
第9話
第8話
第7話
第6話
第5話
第4話
第3話
第2話
第1話

173 151 140 119 105 91 66 50 42 30 11 1

第25話
第24話
第23話
第22話
第21話
第20話
第19話
第18話
第17話
第16話
第15話
第14話
第13話

425 401 385 373 352 331 317 301 272 252 227 212 185

第38話 第37話 第36話 第35話 第34話 第33話 第32話 第31話 第30話 第29話 第28話 第27話 第26話

682 667 644 627 591 566 551 533 520 512 488 474 456

第51話 第50話 第49話 第48話 第47話 第46話 第45話 第44話 第43話 第42話 第41話 第40話 第39話

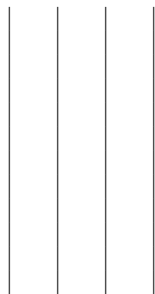
884 867 852 840 819 802 789 777 758 743 727 716 703

第 55 話

第 54 話

第 53 話

第 52 話



941 928 907 897

第1話

世界はいつだって思い通りにならない。それはその通りだと思うし、現在進行形で俺は理不尽な状況に置かれている。だって、目の前にある全てが赤黒い肉の塊であり、無数の触手によって構成されている部屋に捕らえられているのだ。それも裸で拘束されている。つまり、18禁状態だ。それもかなりやばい状況といえる。

何故なら視線を下にやれば俺の髪の毛ではない長い青色の髪の毛が動き、更にその下は胸が微かに膨らんでいる。そう、身体は女の子にされているのだ。俺は男だったはずなのにだ。

故にやばい。手足は肉の壁に飲み込まれていて、頭しか動かない。こんな状況が少し前から続いているので、何度も泣き叫んでいた。そもそも最初は完全に肉の中で、顔から段々と外に出て行く感じだった。

何度も泣き叫んで涙が枯れてからは何故俺はこんな目にあっているんだろうかと自問自答を続けた。だが、答えはない。それに俺の記憶は複数人の記憶がとびとびで

存在しているのが一つに集約されたかのようなようだ。

しばらくぼくと周りを確認していると、肉の壁から足が抜け落ちた。それは綺麗な肌をしていて、まるで生まれたてかのようなようだ。暴れて抜け出そうとするも、痛みがあるだけで動けない。

諦めて待つっていると、次第に腕も抜けて正面から肉の地面へと激突する。

「ぶぎゃっ!?!」

そのまま肉の地面から触手が伸びてきて、身体を拘束して肉の中へと引きずり込んでいく。思わず悲鳴をあげるが、抵抗する事などできなくて目の前が真っ暗になっていく。

『目覚めよ』

声が聞こえて目を開くと、そこには数百メートルはありそうな巨大な植物の身体をした化け物が存在した。上半身は鎧で顔は昆虫のような感じで、身体の奥底から恐怖が湧き上がってくる。

「ひっ!?!」

慌てて声を上げて暴れるが、両手と両足は緑の触手によって拘束されていた。恐怖で漏らしそうになるけれど、そのまま引き上げられて化け物と視線を合わす事になる。

『どうやら無事に身体の生成は完了したようだな』

「……あ……」

『どうした？　もしや生成に失敗したか？　ならば破棄せねばならぬな』

「あがあっ!!」

答えに困っていると、新しい触手が首に巻き付いてくる。慌てて声を出す。ここで答えなければ問答無用で殺される。そんなのは嫌だ。死にたくない。死にたくない！

「まつ、待ってください、ですの……」

必死になって声を出すと、口から自然と言葉がでてきた。それもかなり可愛らしい声だ。

『ふむ。どうやら問題はないようだな』

「あ、あの、貴女は誰ですの？」

『我は貴様を生み出した造物主である』

「お、お母様ですの？」

『違う。貴様は我が外を調査するための駒だ。故に調査対象の場所で住む一番怪しまれぬ者を捕らえ、その者のDNAを基にして創造した』

「な、なるほど……？」

よくはわからないけれど、とりあえずは人型で良かった。中身は人じゃないかもしれないけどね。

「ち、力はあるのですの？ 貧弱な力ではどうしようもありませんのよ。」

『問題ない。DNAを基にして設計したとはいえ、貴様の身体は我等と同じ物だ。故にその力は存在している。沢山の物を取り込み、収集すればおのずと力が増えよう』

「……わ、わかりましたの」

『念の為、貴様の体内と影に護衛を仕込んである。その者達を通して我に報告せよ。それでは行け』

目の前が真っ暗になり、身体が何処かに引つ張られる感じがしていく。



少しの浮遊感を感じた次の瞬間、痛みが走る。目を開けると目の前には鼠色の地面と臭い感じの臭いがしてくる。顔を上げると室外機やゴミ置き場が近くに見える。その少し先には人が大勢歩いている姿も見えて、少しほっとした。

そして、すぐに顔を真っ青にする。何故って？ 俺は、私は身体を起こして、下を向けば綺麗な白い肌は何かで隠すこともなく、生まれたままの姿でいるのである。つま

り、今は裸なのである。

「やばいのですの。これはやばいのですの。どう見ても裏路地のような場所で女の子が裸で座り込んでるとか、事案まったなしのですの」

思わず声に出してしまうほどやばい。見つければ襲われるか、警察に通報されて保護されるかのどちらかだと思われる。そして、身分証もないし、化け物の事を考えると警察に連れていかれるのも詰みな気がする。

「服、服を寄越せですの」

そうすると体内から触手が出て来て、身体を覆ってくれた。触手服とはこれまた十八禁くさい。そんな事をしていると、足音や話し声が聞こえてくる。思わず周りを見渡してゴミ捨て場にあるゴミ箱の中身を出してその中に隠れる。

「(ちっ)」

「(どうした?)」

「(ゴミが散乱してやがる)」

「(最悪だな)」

何かを喋っているみたいだが、理解できない。きつと英語とかそんなのかもしれない。どちらにせよ、彼等が通りすぎるのを待っていると、ゴミ箱が蹴られて思わず悲鳴を上げそうになって口を押える。

「っ」

「(あ?)」

「(なんか隠れてやがるな)」

ゴミ箱が倒され、中から転がり出ていく。顔を上げると外国人であろう男性が二人。彼等は私を見ると驚いてから、ニヤリと笑って手を出してくる。

「(売れば高そうな上玉だ)」

「(色々と楽しめそうだな)」

好色に見られ、身体が本能的に恐怖と気持ち悪さを湧き出させてくる。

「いやっ！ こないでっ！」

「(何を言っているのかわからないが、気にしなくていいだろう)」

「(そうだな)」

腕を掴まれて引き上げられ、顔を至近距離から見られて首に折りたたみのナイフを当てられ、頬を舐められそうになる。叫び声をあげようとすると、異変が起こった。

「え？」

私を掴み上げていた男の身体から何か熱い物がかかった。もしかして、男が出すアレかと思つて恐怖しながら下を見ると、男の服から真っ赤な血が出ていた。それも緑色の触手が男の身体を貫いている場所からだ。次の瞬間には男は口からも血を吐いた。

「(おい、どうした!)」

男が倒れ、私も地面にへたり込む。すると私の影から緑色の植物みたいな物が複数、出ていた。それはもう一人の男にも殺到していて、悲鳴をあげるその男の喉を貫いて声を出せなくした。更に触手の先端が食虫植物のように開いて男達の身体を捕食していく。

「うっ……」

気持ち悪くなって吐きそうになるけれど、胃の中は空っぽだ。だから何も出ることはなかった。ただ、それも頭痛が襲ってくるまでだ。

「あぎいっ!? いっ、痛っ、痛いっ!」

頭を押さえていると、次第に痛みが治まってくる。その次の瞬間には私が知りえない知識が手に入っていた。触手によって食べられた相手の名前や年齢、住所、職業などプライベートなんて関係なく全てを知る事ができた。こいつらは買春を斡旋しているような連中みたいで、殺した事には罪悪感を感じなくて良さそうだ。どちらにせよ、会話などの言語知識が手に入った事が嬉しいし、ここが地球であることも理解できたのが嬉しい。

自宅に戻ればTS少女として生活すればなんとかなるかもしれないからだ。まあ、日本ではないみたいなのでどうしようもない。それにしてもこの吸収能力は結構便利で

はある。色々と気持ち悪い知識や記憶も手に入ってしまうのが難点だが、言語が理解できるとできないのでは難易度が全然違うからだ。

「あ、彼等の服……」

そちらを見ると、綺麗に無くなっていた。残っているのは血痕くらいだ。財布も服も何もない。もうちよつと残す物を残して欲しいとは思う。記憶によれば数万\$が入っていたはずだから。

そう思うと身体の中から財布がぼろつとでてきた。どうやら、捕食した物は取り出せるみたいだ。試しに死体を思い浮かべるとそれは出てこなかった。

「き、君っ！ 大丈夫か！」

「だ、誰か警察を呼べ！ いや、救急車だ！ 少女が襲われているー！」

声がした方を見ると、こちらを見つけた大通りにいた人達が慌ててやってきて、男性の一人が服を脱いで渡してくれる。その男性も触手は攻撃しようとしたので、慌てて停止命令を出すと大人しく身体の中に引っ込んでくれたのでほつとする。

「もう大丈夫だ。だが、この血は……」

「あ、それはその……」

やばいと思つて手を後ろにやりながらナイフを出すように念じる。すると触手がナイフを渡してくれた。なので、それを見せる。

「それは……」

「こ、これを奪って反撃しましたの。それで傷を負って逃げて……」

「な、なるほど。こちらに渡してくれるか？」

「は、はいですの」

とりあえず、ナイフを渡す。これからどうなるかは怖いが、まあ護衛が使える事がわかったので警察に捕まってもどうにかなるだろう。むしろ最初は病院だろうし、そこで逃げればいい。

そんな感じである意味では楽観視しながら決めていると、ポリスマンがやってきて事情を話す。女性警察官の人達に連れられて病院に連れていかれる事となった。

パトカーに乗せられて、ふと窓を見るとそこには水色の青みがかかった髪の毛に真紅の瞳をした可愛らしい少女の姿が映し出されている。目と頬の間に特徴的な紋様が左右にあり、何処かで見た事がある気がする。そつと髪の毛を上げてポニーテールにしてみる。すると服装こそ白と黒のレオタードではないが、スパーロボット対戦のインスト・アルフィミイに非常に似ていた。いや、どこからどう見ても、彼女にしか見えな。それに影や身体に潜んでいる植物のような化け物。その特徴からしてインストである可能性が高い。ましてや私を生み出したあの巨体は……アインストのノイ・レジセイアだと思われる。

「どうしたの？ 大丈夫？」

「だ、大丈夫ですよ」

あははは、つまりこの世界は私の知っている地球ではなく、創作の地球である可能性が高い。それもアルフィミイという事はスーパーロボット大戦の世界というわけで、多種多様な勢力に襲われる絶望の未来の中、愛と勇気、友情と魂を使って打ち勝つ世界だということ。うん、セーブ&ロードはあるかな？

ない、ない。そんなのではない。つまり、私に待っているのは絶望の未来というわけだ。主人公勢力次第で運が良ければアクセルと一緒に助かるかもしれないけれど、基本的にアインストの女王のノイ・レジセイアが殺されたら一緒に消えることになる。そんなの嫌だ。

しかも男から女に変わっているから、アクセルとそういう関係になるのもごめんこうむりたい。いや、アクセルは良いキャラだし、仲良くはしたいかもしれないけど男女の関係はノーサンキュー。ま、まあ、まだここがスパロボ時空だと決まったわけでもないから、大丈夫大丈夫。きつと多分。

第2話

「ご報告いたします。空間転移の反応があつた場所ですが、そちらで少女が一人保護されましたが、記憶が混濁していて身元は現在わかつていないようです」

「そうか。精密検査と言つて血液を採取しろ。外見は人でも中身は別物の可能性がある」

「了解しました。もし、人でない場合は……」

「こちらで引き取るようにしろ。Wシリーズの改造に使えるかもしれん。他の連中に取りられないように手を回せ」

「はっ！」



皆さんこんにちは。アルフィミーですの。まあ、偽物なんですがね。さてさて、さくて。そんなアルフィミーちゃんはポリスメンに連れられておそらく警察病院と思われる場所に連れられて行きました。

その病院にある診察室でかろく問診を受けております。でも、何故かかなり嚴重になつてゐる。明らかに軍人の連中が数人居て、手にアサルトライフルまで持つてゐる。いや、P90とかのPDW《Personal Defense Weapon、パーソナルディフェンスウエポン》みたいなですね。

そんなのを装備した明らかにエリート軍人さんが達が扉の外や病院の外に居ます。ちなみに外には戦車までみられ、大きなロボットまで見えました。アレはゲシユペンストみたいで、とつてもカツコイイ！ まあ、そんな事よりも問題はあるんですが。

「では、精密検査をいたしましょうか」

白衣を着た紫色の髪をした綺麗なお姉さん。その顔は画面越しに見た事がある。つまり、やらかしてゐた。誰だよ、病院やポリスメンだったら簡単に逃げだせるとか言つたの。どう見ても地球連邦軍特殊任務実行部隊の施設じゃないですか、ヤダー！

「必要ありませんの。怪我なんてどこにもないですし」

「いえいえ、頭を打つてゐるかもしれないし、ついでだからね」

「お断りしますの。見ての通り、とても元気ですし」

椅子から立ち上がったてびよんぴよん跳ねて元気な姿をアピールする。この人に精密検査をさせてはいけない。外見は人でも中身はアインストだ。それにDNAを調べられるのもまずい。私はエクセレンを基にして作られたのがアルフィミイである。そして、この目の前に居る人はこちらの世界のエクセレンを基にして作られた人造人間だ。

そう、こちらのエクセレンはシャトル事故で死亡しているので、彼女の両親が遺体と人造人間開発プロジェクトのマテリアルを使って彼女を蘇生させている。しかし、記憶と人格までは完全に蘇らず、レモンという存在となつて生まれ変わっている。つまり、彼女と私は人とアインストの違いはあれど、互いに蘇つた存在だといえなくもない。

それと疑問なのだけどLemonという単語には欠陥品という意味もある。記憶と人格が蘇らなかつたことを示しているのかな？

「……早く着替えを買いに行きたいですの。この借り物の服も返さなくてはいいけませんし、下着とかも必要なのですから。それとも、お姉さんも上着一枚で過ごしてみます？」

「……確かにそれは嫌ね。すぐに服を用意させましょう」

「いえいえ、自分で選びますの。他人が触れた物つて嫌ですのよ」

「あらあら、潔癖症なのかしら？」

目が笑っていないし、とつても怖い。どうにか逃げないといけないけど、これつてど

う考えてもバレてるよね？ 少なくとも精密検査を要求してくる事から、私が人でないというのは気付いているのかもしれない。

「そうかもしれないですね。どちらにせよ、そろそろお暇させていただきませうの」

「駄目よ。だって、貴女は身分証を持っていないもの。身元を証明できない女の子を放りだすなんてできないわ。常識的に考えて」

「ちっ」

「ふふふ」

「わたくし、ストリートチルドレンという奴で、身分証なんて初めからありませんの。ですから、お気遣いなく」

「そもいかないのよね。行く先がないのなら、こちらで保護します」

「保護、ですの」

「ええ、保護よ」

もう諦めるか。どうせ引く気もないだろう。泳がせるために逃がす可能性もあるけれど、レモンは私の身体を検査したくてうずうずしているだろう。そうなる最低でも血液などの体組織を提供しないといけない。

そして、提供してしまえばWシリーズに使われる事は目に見えている。そうなるとWシリーズがアインストの系譜になり、レモンが居るこちらの世界におけるキョウスケ・

ナンブのように暴走してしまう。つまり、災厄へと進化する可能性が存在する。この世界がレモンの世界であるのなら、あちらの世界に転移するまではアインストの体細胞を与えるわけにはいかない。少なくともこちらの世界にアインストが出現するまでは絶対に駄目だ。

「でしたら、衣食住とあそこに見えるロボットに乗ってみたいのですの」

「ゲシユペンストに乗ってみたいの？」

「はいですよ！ とつてもカツコ良くて面白そうですねよ！」

「民間人に軍事機密のロボットを乗せる事はできないわね」

「でしたら用はありませんので、帰らせていただきますの」

「衣食住だけじゃ駄目なのかしら？」

「駄目ですよ。いえ、自分で機体を作ってもみたいですから、勉強させていただけるので

したら、それもありませんの」

「……どちらにせよ、軍事機密よ。軍人になるなら、いいわよ？」

「軍人になるのは嫌ですよ。拒否権がありませんから」

「ちつ」

どうせ、わたくしが軍人になる事を認めれば精密検査を健康診断と言ってさせるのは確実だ。だから、軍人になる事はできない。

「レモン、何を遊んでいる」

扉が開き、声が聞こえてきた方を向くと22、23歳ぐらいで赤髪のクセツ毛がある人がいた。タレ目が特徴的で紫色の瞳をしている。彼こそはスパロボット大戦Aの主人公にして、OGでキョウスケ・ナンブのライバル。アルフィミイの相棒となる存在。「アクセル」

「お客様が来られたようですので、これで帰らせていただきますの」
「待て」

そう言つてアクセルに背後から肩を押さえられる。そう簡単には逃がしてくれないか。だが、貴様にも被害を受けてもらう。

「いやああつ、犯されるううっ!」

そう叫びながら前に倒れるようにしてレモンに抱き着き、即座に背後に回つてガタガタと震える。

「おい!」

「アクセル、あなたそういう趣味があつたの?」

「待てレモン! 誤解だ」

「誤解であるとなんだらうと、女の子の肩を掴むのは問題よ? それにこの子は襲われていたのだから、こういう反応するのは当然でしょ?」

「わかった。確かに触れるのは駄目だったな。だったらこれでいいだろう」
「ひっ」

アクセルが向けてきたのは懐から取り出した拳銃だった。拳銃なんて産まれてこの方、玩具しか見た事がない。モデルガンは本物ではないけど、アクセルが持っているのは本物だろう。それが私に向けているので、普通なら怖くなる。でも、この身体はアルフィミイちゃんのものであり、アインスト製となる。つまり、銃弾なんて怖くない。そのはずなのだけれど、怖いものは怖い。まだ私の、俺の精神がアインスト化物に変わっていない証拠でもある。

「アクセル?」

「どちらにせよ、ソイツが怪しいのは確実だ。監視カメラを確認したが、裏路地から出てきた奴等は居ない。発見された血液の量から見てもそう遠くには行けるはずもないし、動けば必ず血痕が残る。それすらないとすると、一度だけ確認された転移反応の場所に居た怪しい存在、その餓鬼だけだ」

「まあ、確かに精密検査も拒否しているし、身元も証明できない。怪しいのは違いはないわね。貴女もそろそろ本当の事を話してくれないかしら? そうでないとこちらとしても穏やかでない手段を取る事になるわ」

「それはこちらと同じですよ?」

「ほう」

「生身でわたくしと数メートル範囲に居るのですよ？ 何時からわたくしのキルゾーンに入っていないと錯覚していましたの？」

「っ!？」

「ちっ」

レモンに抱き着き、後ろに隠れながらアクセルに告げてやる。相手側もこちらを警戒している。レモンは冷汗を浮かべているし、アクセルはより一層警戒してこちらを見ながら兵士の方へと合図を出そうとする。だから、こちらもレモンの首に手をやる。

「逃げられるとも思っているのか？」

「逃げられないと思っていればのこのことこんな場所まで来ませんのよ？」

「はい、そこまでにしなさい。遊びは止めよ」

「レモン？」

「アクセル、大丈夫よ。だって、この子震えているもの」

ばーれーてーまーすーのー。そう、私の手は震えている。だって滅茶苦茶怖いし、仕方がない。死にたくない。確かに生身ならアクセル達はどうとでもなる。ただし、外に居るパーソナルトルーパー^T達は別だ。低級のインストなら滅ぼせる。なんせビーム兵器を持っているし、質量攻撃自体がやばい。このアルフィミイはエクセレン世界のア

ルフィイミイではないみたいだし、どのような力があるかはわからない。

「なに？」

「だから、貴女も止めなさい。しつかりと話し合いましょう？ 悪いようにはしないから」

「やれやれ、わかりましたの。こちらの素性を話しますので、人払いをお願いしますの。できれば私とレモンだけがよろしいのですが……」

「無理だな」

「でしたら、お話はできませんの。これはわたくしたちに関わるプライベートな話でもありますし、部外者に話すつもりはありませんのよ。特に少女趣味の変態殿方に伝えるのなんて無理ですの」

「どうやら喧嘩を売っているようだな」

「事実しか言ってますの。わたくし、身の危険を感じましたのよ？」

「アクセル」

「駄目だ。最低でも俺は残る」

「そうですか。レモンと結婚するか恋人になるなら認めてあげてもいいのですの」

「は（え）？」

これから話す事はかなりプライベートな内容だし、レモンにとってはかなり辛い事で

ある。だから、アクセルに教えるのは問題がある。

「そんなにプライベートな話なの？」

「出自に関するものですよ、お姉様。いえ、おば様？」

「あくそっち関連ね。わかったわ。アクセル、席を外して頂戴。それとお姉様にしてくれるかしら？」

「はいですの」

「おい、どういうことだ？」

「とりあえず、私だけでいいわ。どうやら、本当にプライベートな話でもあるし、後で話すわ。そうね、一応保険として周りをPTTで囲んでおけば大丈夫でしょう」

「だが……」

「お姉様の恋人になるのなら、教えて差し上げても問題ありませんのよ？」

「こいつ……」

「貴女、そんなにアクセルと私をくつつけたいの？」

「ええ、もちろんですの。そうすればこの人に襲われる可能性が激減しますのよ」

ふつつつつつ、アクセルとレモンのカップリングとか、鉄板で最高だ。さあ、私に見せてくれ！

「レモン、もういい。無理矢理聞き出す」

「やれるものならやってみやがれですの。お姉様を連れて撤退してやりますのよ」

「止めなさい。私がアクセルと付き合ったら問題はないのね？」

「ですの」

「おい」

「わかつたわ。それでいきましよう」

「レモン、何を言ってるんだ」

「実際の問題として、この子は怖がっているけれど絶対的に自分は安全だと思っている節があるわ。隠し玉を持っている事は確実なの。私もまだ死ぬ気はないのよ」

「ほらほら、後はアクセルが男気を見せるだけですの」

「……わかつた。言う通りにレモンと付き合ってる。それで文句はないな」

「でしたら、誓いの口付けを……」

そう言ったら、あっさりとかくセルがレモンにして、レモンも受け入れて舌まで絡めだした。それを顔を手で隠しながら見詰めていく。

「ほら、これでいいだろう？」

「そうね。アクセルが残っても文句はないわね？」

「はいですの。では、お教えしますので他の人は席を外させていただきますの」

「ええ。貴方達、一度下がりがなさい」

「はっ」

命令に従って下がる兵士の人達。それを確認してからレモンをアクセルの方に渡してから、レモンが座っていた場所に座る。

「では、まず精密検査を拒否している理由は至極単純。わたくしが作られた生命体であり、普通の人間ではないからですの」

「やはりな」

「ええ、そこに居るお姉様。欠陥品のレモン・ブロウニングと同じですの」

「お前……」

「いいのよアクセル。事実だもの。私はエクセレン・ブロウニングとして人造された生命体であり、記憶と人格を継げなかった欠陥品だもの。で、貴女は私と同じ為に生み出されたのかしら？　でも、それはおかしいわよ。あの計画に関わった者や資料は全て消したのだから」

「完全に消す事など不可能ですよ？　例えば職員がエクセレン・ブロウニングのDNA MAPを盗み出していたり、ハッキングされていたり、存在してしまった技術はなかなか消せませんの。それに私が作りだされたのはお姉様を作り出した方々とは別ですの。これもお姉様が欠陥品なのにある意味では成功体だからこそですよ？」

「どういう事だ？」

「私が優秀すぎたってことかしらね」

「その通りですの。エクセレン・ブロウニングのDNAから作り出した貴女は研究分野で多大な成果を上げました。でしたら、他の方々がどう思うかなんて至極単純ですの」「ちっ、どんどん増やすってか」

「ですの。さて、人の欲望は留まる事はありません」

私は人ではないが、アインストによってエクセレン・ブロウニングのDNAを基にして作られた生命体であるのは変わりない。嘘も言っていない。

「だが、転移反応はどう説明する」

「わたくしの前に現れた化け物の事です」

「化け物？」

「二人は知っていますの？ この世界には多種多様な宇宙生物や地球でも発見されていない存在が居ることを」

「異星人ね」

「知っている。俺はお前がそうだと思っている」

「知っていたのでしたら、そこまで隠す必要はなかったですの」

「もしかして、隠していたのって信じてもらえないからかしら？」

「その通りですの」

流石に頭のおかしい子とか、思われたくはない。いや、ある意味ではあっている。私には色々な意味で頭のおかしい子なのだから。

「さて、先程のアクセルの質問に関する答えですが、当たりであり、ハズレでもありますのよ。私は地球人にある生物のDNAを混ぜて生み出された存在ですの。言つたでしょう、人の欲望に留まる事はないと」

「人体実験の成果というわけね」

「だが、転移反応はどうなる？」

「一部であれ、同族の気配に惹かれてやってきたのか、偶然かは知りませんが、あの時に現れたのは事実ですの。私を襲おうとしていた者達を殺して、こちらにやってきたので食べてやりましたの」

そう言つてから、緑色の触手を生み出して二人に見せる。同時に素早くアクセルが持っていた銃に嘯みつかせ、そのままボリボリと食べさせる。

「言つたでしょう、ここはわたくしのキルゾーンであると」

「事実なわけね」

「まいったな」

「さて、わたくしが精密検査を拒否した理由ですの。こんな化け物を操る力なんて気味が悪い上に研究者たちはこぞつて人体実験をしますの。だから、私はわたくしの目

的のためにこの力が必要な時は容赦なく振るいますの。それが例え半分とはいえ、同じDNAを持つているお姉様であつてもです」

「やはり危険だな。これはますます逃がす事はできない」

「逃げられないとも思つてますの？」

実際問題、こうなればもうアインストを召喚して暴れさせて、その間に逃げるしかない。その場合、互いの被害は凄まじい事になるだろう。私としては嫌だが、アクセルとレモンは殺さなくてはいけない。何故なら、ここで見逃せば必ずPTなどに乗つて追いかけてきて、私が殺される。いくら好きなキャラとはいえ、私は自分の命の方が大切だ。こんなのアルフィミイじゃないかもしれないし、ファンとして失格かもしれないが……死にたくないのだから仕方がない。

「ねえ、貴女の目的は何？」

「わたくしの目的は簡単ですの。自分専用ロボットを作つて乗り回し、知的好奇心の赴くままに改造しまくつてやりますの！」

「それつてかなり伝手が必要よね？ それに追われているでしょう？」

「まあ、そうなりますの。だから、少し困つておりますの。そんな訳でお姉様。わたくしを雇つていただけませんか？」

「雇う、ね」

「はいですの。条件としては衣食住と安全な研究施設や資材が欲しいですの。もちろん、わたくしへの人体実験や体液の採取はお断りしますの」

「代価はなんだ。今のはそちらだけのメリットだ」

「はいですの。見ての通り、わたくしは色々と処理するのは得意ですの。ですから、死体処理や廃棄品の処理など汚れ仕事をしますの。ああ、ただ殺すのは腐敗した者達や悪人だけにして欲しいですの」

ノイ・レジセイアに言われた調査命令も忘れていない。女王様であり、お母様である彼女の命令を遂行しなければ用済みとして消される。そうならない為にも裏の仕事をやってしつかりと報告する。同時に生き残るために知識を収集し、戦力を溜め込む。

少なくともノイ・レジセイアにアクセルとレモンが居るんだ。この世界はアインストが確定され、インスペクターとエアロゲイターも確定だ。この三勢力から生き残るのは生半可な手段では不可能。そもそもアクセル達について平行世界に行かなければこの世の地獄を味わう事に……あ、アインストだからならないか。

ただ、そうなると地球は滅んでしまう。それは地球人として、ファンとしてはやっぱり嫌だ。ならば、私がやるしかない。他の誰でもない、アルフィミイちゃんがやってみせる。偽物だろうと関係ない。このログアウト不可な恐怖ゲームを攻略してやろうじゃないか。

「それでどうしますの？　ここまで話したのですから、わたくしとしては受け入れてくれると嬉しいのですの。流石にお姉様達を殺したくはありませんのよ？」

「選択肢はないってか」

「私の研究には協力してくれるのかしら？」

「もちろんですの。むしろ、積極的に協力させていただきますの。戦力強化はこちらとしてみてもありがたいのですから」

「そうね。私としてはいいと思うけれど……」

「ヴェインデルに報告してみる」

　アクセルが携帯端末を取り出して連絡をしている間、レモンに謝っておくか。

「先程は欠陥品とか言ってごめんなさいですの。お姉様はお姉様。エクセレンではありませんの。ですから、欠陥品などでは決してありませんの」

「わかってるわよ。私とエクセレンは別物。それは貴女にも言えることよ。そう言えば名前はまだ教えてくれないのかしら？」

「もう隠している理由もありませんの。わたくしの名前は……そうですね、アルフィミイ。アルフィミイとしますの。苗字は無いのですのよ」

「よろしく、アルフィミイ」

「はい、お姉様」

「ヴィンデルから許可は出た。レモンの妹として扱うから、とりあえず、連れて来いだよ」

「わかったわ。でも、その前に服を買いに行きましようか」

「ですの。流石にこの恰好は色々と問題がありますの」

「アクセル、荷物持ちをお願いね」

「なんで俺が……」

「お兄様になるのですから、お願いしますの」

「やめろ」

「どちらにせよ、わたくしへの監視は必要ではありませんか？」

「ちっ」

舌打ちしてきたアクセルを連れてレモンと一緒にアクセルの運転でお買い物へ行く。正直、女の子に必要な物なんて何も分からない。そもそも必要なかもわからないが、怪しまれないためにもレモンにお願いして用意してもらおう。

「さて、一から用意しないといけないけれど、どんな物が好みかしら？」

「えっと、動きやすく男物のような服装が……」

「却下ね。女の子なのだから、しっかりとおしゃれをしないとイケないわ。それにこれから一緒に居る妹が可愛らしい服装をしていないのも問題なのよね」

「別に迷惑は……」

「私のやる気が削がれるわね」

「……はあ……まあ、お任せしますの」

「ええ、任せてちょうだい」

数時間後、私は自分が発した言葉に後悔した。四件ほど店を梯子させられ、数時間もの間いろんな服を着せられて着せ替え人形にされることになった。下着とかも全て女性用で、基本的に服はスカートとなり、どうにかスパッツだけは手に入れた。

まあ、気に入ったのは楽な恰好で可愛い肩紐タイプの黒いワンピースだ。所々にリボンや透明なフリルがあしらわれていて、首元にもフリルのチョーカーを取り付ける。髪型は黒いリボンでポニーテールにすると、姿見で見た姿は完全にアインスト・アルフィミイだ。それも狙い通りにバンドイが出しているカードゲームに出て来た浜辺の波打ち際で遊んでいる服装になった。

第3話

下着を含めた服やその他、様々な生活必需品を購入した。化粧品とかシャンプーとかもレモンが使っている物と同じ物が用意してもらおう。それにいくつか要らない物も買った。

買い物が終わりに、軍事施設の一つへと連れていかれた私はそこである人物の下へと通された。そこは執務室で、入った瞬間に緑髪をした軍人の男性が見える。

「お前がアルフィミイ・ブロウニングか」

「ですの。貴方がお姉様とお兄様の上司ですの？」

「お兄様？ レモンの事はわかるが、アクセルの事か？」

「ですの。お二人は付き合うことになりましたの」

「そうなのか？ それなら目出度いが……」

「待て。これには事情がある」

「あ、アクセルはお姉様を騙して用が済めばポイ捨てるような男だったのですの!？」

「黙れ」

「今度は妹にまで手を出すなんて……」

アクセルが私の頭を鷲掴みにして力を込めてくる。なのでこちらも両手で掴んで離させようとするけど、余力力はいれない。

「まあ、実際は私達の個人的な理由をアクセルが聞くための理由作りね」

「そうか。まあ、そういう事は好きにすればいい。それよりも、自己紹介をしよう。私はこの部隊を率いているヴァインデル・マウザー少佐だ」

「少佐、ですの？」

「何か変か？」

「いえ、なんでもありませんの」

私が知っている情報ではヴァインデル・マウザーは連邦軍特殊部隊シャドウミラーの指導者であり、階級は大佐だった。もしかしたら、まだシャドウミラーは結成される前で、その前準備の段階なのかもしれない。そうでないとアクセルとレモンが一緒に居る理由がないし。

「アクセル、報告は間違いないんだな？」

「ああ、そうだ。本人の話ではな」

まあ、あくまでも私が話しているだけの事だし、疑われるのは当然。ただ、それにしではレモンの情報をしっかりと知っていることが、こちらの話について信憑性が増して

いるので虚偽だとはいえない。

「そうか。人と異生物の融合実験とは腐敗極まれり、という奴だな」

「強化人間を生み出す計画なんていくらでもありますのよ」

「そもそも、レモンだって人造人間のWシリーズを作り出しているし、シャドウミラーはその人造人間を運用するのだから、あまり人の事は言えない。」

「それもそうだな。そちらの要望は理解している。衣食住と研究施設などの提供だな」

「はいですの。代わりに消したい悪人を消して差し上げますの。法で裁けない悪人はアルフィミイちゃんにお任せですの。特に人体実験とかを行っている連中は最優先でぶち殺してやりますので、教えてくださると嬉しいですよ」

「……今のところは問題ない。アクセル」

「なんだ？」

「彼女をお前の下につける。特殊部隊の人間としての技術を叩き込め。特異な能力があるとしても、どんなところからボロが出るかわからん。それにパーソナルトルーパーに乗りたいたいから、お前が適任だ」

「了解した。だが、レモンのところはどうする？」

「両方やらせればいい。できるな？」

「大歓迎ですの。時間は有限。詰め込み教育をお願いしますのよ」

この身体はアインスト・アルフィミー。それもデータを収集して自己進化していくアインストの女王が人間のデータ収集するために作り出した存在だ。なら、例え私自身の才能がなくても、アインストとしての才能はあるはず。自己進化と自己改造を行い続ければなんとかなると思う。

「じゃあ、朝からアクセルの下で訓練して、夜は私の所でお勉強ね。今日はゆつくりと休んで、明日からかしら？」

「お言葉に甘えさせていただきますが、基礎知識に必要な情報だけは先にいただきたいですの。パーソナルトルーパーのマニュアルとかは特に必要ですの」

「そうね。ヴィンデル、携帯端末を一つ、アルフィミーに渡したいのだけど、いいかしら？」

「……ネットワークに繋げないような物なら許可する」

「それなら、まずはパーソナルトルーパーのマニュアルからの方がいいわね」

「辞書や教科書も欲しいですの」

「わかったわ」

「部屋は用意してある。案内してやれ」

「はっ」

兵士の一人がヴィンデルに命令された。彼についていけばいいみたいなので、荷物を

持って後をついて行く。多すぎるので兵士の人にも手伝ってもらおう。



与えられた部屋に入る。この部屋は殺風景でデスクとベッド、天井に照明があつてトイレやシャワー、クローゼットも存在している。

そんな部屋に大量の荷物を持ち込んで整理していく。まずレモンが選んで買ってくれた服をクローゼットに仕舞いこむ。

次にベッドの上を買ってもらった大きな熊と兎のぬいぐるみを配置。これは俺の趣味ではないが、アルフイミイが持っていたら可愛いと思つたので買った。それと中身はいずれ改造してアインストを仕込む予定。つまり、監視されているであろうシャドウミラーを出し抜く為の武器とするわけだ。

「失礼します。こちらがパーソナルトルーパーのマニュアルと資料になります。食事はダンボールの中に入っていますので、好きな時にどうぞ」

「ありがとうございます」

部屋の整理をしていると、兵士の人がダンボールを持ってきてくれた。中には大量の書類が入っていて、どれも極秘扱いの物だ。ただ、作成年数は数年前のもので、本当に

ゲシユペンストのマニュアルみたい。今使われている量産機はゲシユペンストMkⅡなので、ひと昔前の物になる。まあ、こればかりは仕方がない。

「さてさて、お勉強しますの」

ベッドに寝転がって下に熊のぬいぐるみを敷きながら仰向けになる。そのまま足をパタパタさせながらパーソナルトルーパーのマニュアルを読んでいく。当然、よくわからないので資料を色々見ながら頑張るしかない。まあ、頑張るしかない。裏技はあるにはあるけれど、それに頼るのはある程度の技術が身につけてからの方がいいと思うし。

◇◇◇ アクセル

「それで、アルファイミイをどう見る?」

俺達はヴィンデルの執務室に残り、アルファイミイの部屋に仕掛けた監視装置で彼女を確認しながら話をする。

「作業員としては落第だな」

「部屋の鍵も確認していないものね」

「そもそも鍵など意味がないのかもしれないがな」

「自分が絶対に安全だと確信しているのかもしれないな」

あの馬鹿は片付けが終わったらベッドに寝転がりながら資料を読んでいる。こちらの監視なんて気にもしていない。

「監視を続けるしかあるまい」

「いいのか？ パーソナルトルーパーでなら殺せる可能性は充分にあるぞ」

「そうね。私達の計画を失敗させようとするのなら殺すしかないかもしれないわね」

「だが、逆にこちらが懐柔できれば戦力になる。彼女自身も腐敗した者達なら自らの手で殺すと言っているのだ」

「自分が人体実験をされたから、か」

「でしようね。おそらく、ちゃんとした知識もないから女の子としては赤子みたいな知識しかなかったわ。なんというか、偏ってるのね」

「時々、まるで自分の身体ではないかのように戸惑い、確認している場面もあった。おそらく改造されたのは事実だろう」

「ならば、彼女も腐敗した者達の被害者かもしれない。殺すのは明確に邪魔になったらで

いいだろう」

「事実とはわからんがな。それよりも、アルフィミイが居たであろう研究所はわかったのか？」

「不明だ。だが、証拠隠滅の為に皆殺しにされた施設など今時珍しくもない」

現状、行方不明者が増えている。誘拐されて金持ち共の玩具になるか、科学者達の人体実験体になるかだが、それ以外にもテロに巻き込まれたという場合もある。DC戦争とインスペクターを退けてからの長い平和とインスペクターからもたらされた恐怖が色々な者達を腐敗させ、欲望のままに動き出している。

その一つが過剰なまでの軍備増強だ。パーソナルルーパーを始め、特機と呼ばれる対異星人用の兵器開発。これ自体は問題ないが、インスペクターの技術を吸収し、進化し続けているソフトとハードから様々な問題が噴出した。機体が高性能化するに従って、パイロットである人間に限界が見られだしたからだ。そもそも乗るパイロットの事などほとんど考えずに作った試作機を乗れる値までダウングレードする必要すらある。

また、ベテランはインスペクターとの戦いでほとんど殺され、新人が多くなっている。そんな状況で兵器の力を十全に發揮できる存在を作り出すには身体能力を上げた強化人間の方がコストが下がる。その為、国策として遺伝子改造を行ったデザインチャイルドがどんどん作られた。その一つがコーディネーターと呼ばれる者達だ。そのコー

デイナーターは当初の計画通り、パイロットとして優秀であり、また様々な分野で頭角を現してきた。

しかし、そのことに反感を抱く者達が現れ、薬物による強化など人体実験を繰り返す者まで現れている。その一つがアルフイミイが言っていた人ではない別の生物との融合。キメラを作りだす実験だろう。本来成功するはずのないものが、成功した存在。それがアルフイミイだと思われる。あくまでも奴自身が語った内容から考査すればだ。

「それよりも問題なのはこっちらだ」

ヴィンデルが取り出した資料は数日前に俺達がとある施設を襲撃し、盗みだしたデータだ。このデータは政治家と犯罪者の癒着が証明される証拠だ。

「それがどうした？」

「証人も死体で発見され、提出したデータは証拠不十分として消去された」

「揉み消しじゃない」

「上の奴等も囁んでいたか」

「麻薬から人身売買までやっていたが、その顧客に俺達が知らなかった大物が居たのかもしれない。すまん、無駄足になった」

「いいさ。ヴィンデルのせいじゃない」

「そうね。それよりも目を付けられたんじゃない？」

「だろ。俺が作る部隊の話が立ち消えかけている」

「それにしても余裕じゃないか」

「こんな物を渡されたからな」

新たに送られてきた資料を携帯端末で確認すると、狙っていた者達と敵対する派閥の存在が映し出された。簡単に書かれた内容を言えば、ソイツが裏取引をする情報だ。

「つまり、これは私達にアイツ等の手伝いをして汚点を晴らさせてこと？」

「そういう事だ」

「で、受けるのかしら？」

「ああ、受ける」

「どういうつもり？」

「だから、アルフィミイを受け入れたのか」

「そうだ。俺達は命令通り、全戦力で現場を押さえにかかると。その間、アルフィミイにはこちらの処分をさせる。彼女は俺達の部隊に所属する人間でもないからな」

「そういうこと……」

法で裁けないのなら、アルフィミイに殺させればいい。証拠さえ残さなければ俺達が疑われることはない。

「いずれは腐敗を一掃するが、今の俺達にそれだけの戦力はない。確実に任務をこなし、

力をつける。だが、その間に犠牲者が出るのも事実だ。そこをアルフィミイに対応させる事で間引く。だから、アクセルは一ヶ月以内にアルフィミイを使えるように仕上げろ」

「いいだろう」

「私達は何時か地獄に落ちるでしょうね」

「何を今更言っている」

「そうだ。我等は青き清浄なる世界の為になさねばならない。その為に多少の犠牲ならば受け入れる」

「塵掃除は必要だ」

「わかったわ。一ヶ月で最低限の知識を叩き込んで送り出しましょう。アルフィミイも望んでいるみたいだし」

訓練プログラムを作り出さなければいけないが、その前にまずはアルフィミイの身体能力を調べないと。体力と運動能力。それに対G性能を調べればどれだけ化け物な身体なのかもわかるだろう。

「ところで、一つ聞きたいのだけど……」

「なんだ？」

「アルフィミイの部屋を監視するのはいいのだけど、監視カメラがトイレとかにもある

のはどうかと思うわ」

「だが、無い場所で何かをされたら事だ」

「そうね。だから、監視は女性隊員でして、男性は見ちゃ駄目だからね」

「わかつている。当然だ」

「こんな餓鬼に興味なんてないからな」

「じゃあ、監視は私の方で手配しておくわ」

「それはいいとして、アルフィミイにつける首輪はどうする？ 爆弾でも仕込むのがセ

オリーだが……」

「拒否されるでしょうね」

「彼女が搭乗する機体に仕込むくらいか。それとあの大きなぬいぐるみ。アレにも監視

装置を仕込んでおけ」

「了解した」

「でも、意外よね。アルフィミイがあんなのを欲しがると……」

「アイツも餓鬼だつてことだろう」

「そう、ね……」

レモンが何か違和感を感じているようだし、一応警戒しておくか。

第4話

朝五時にアクセルにたたき起こされ、そのままお外にあるグラウンドに連れて行かれて30kgくらいある荷物を持たされて三時間くらい全力でひたすらグルグルと走らされた。しかも最初の一時間は普通に走っただけだったけれど、その後は模擬弾をアクセルから撃たれる中で走らされるという酷さ。明らかに今までの恨みがあると思う。

「ちっ、化け物め」

「ふっ、この程度、アルフィミイちゃんにとっては超余裕ですよ」

「その割には余裕がなさそうだな」

「そ、そんなことはありませんの……よ？」

実際問題。かなりキツイかった。精神的にくるし、身体もかなり限界だ。それでもどうにか回避しながら走り続けたつもりだ。実際は回避できなくて何度も転んだ。むしろ、ここまで持ったのは流石、アインスト・アルフィミイの身体といえる。

「まあいい。大体の身体能力はわかった。これから一時間の食事休憩を与える0900

までに終えて部屋にいろ。そこから次の訓練場所へ移動する」

「了解ですの。シャワールームってどこにありますの？」

「それなら部屋に戻れ」

「わかりましたの」

部屋でシャワーを浴びながらゼリー飲料を流し込んで身体を洗う。かなり適当に洗ってから外に出て、着替えをする。着ていた服は洗濯に出し、髪の毛を乾かしながら貰った資料を読み込んでいく。

パースナルトルーパーの運転はだいたいゲームで作られた戦場の絆を難しくした感じだという事がわかったので、このまま覚えていく。それに確かスパロボ時空ではパイロット適性のある人を見出す為にシミュレーターをゲームセンターとかに配置していたはずだ。それもやらせてもらおう。

「入るぞ」

「……アクセル、ここは女性の部屋ですの。ノックぐらいしやがれですの」

「女性って年齢か。だいたい時間は伝えていたはずだ」

「つと、もうそんな時間ですのね」

「何をして……PTのマニュアルか」

「まずは動かせるようになってから、内部のOSとかを理解しませんとチンプンカンプ

ンですの」

「まあ、俺としては使えるのなら何でもいい。今から対G訓練をして、座学だ。それが終われば訓練施設でクラッキングなどのやり方を教える」

「了解ですの」

アクセルと一緒に移動して、シミュレータールームへと連れていつてもらった。この場所はしっかりと覚えなさいといけない。

シミュレータールームに入ると沢山の球体が置かれていて、とても楽しみになってくる。なんせゲームするのと同じなのだ。

「このシミュレーターは何時でも使えますの？」

「キラキラした目で言っても俺と一緒に使えないからな。事前に申請が必要だしな」

「……専用機が欲しいですの」

「無理だな。というか、そもそも軍人でないお前が使えるわけがない。今回は対Gを測るためだけに許可を得た」

「そんな……」

「まあ、どうしても欲しいのなら、それなりの結果を出してから頼むんだな」

「……ぐうの音もでない正論ですの」

欲しければ結果を示せ。当然の事なのでやるしかない。そんな訳でアクセルが用意してくれたシミュレーターの中に入り、説明を受ける。

「シートベルトを締めて操縦桿を握っている。後はこっちで操作する」

「わかりましたの」

「それとグレイアウトでは止めずにブラックアウトまで行くから、覚悟しておけ」

「畏まりましたの」

「精々頑張れ」

ハッチが閉められ、操縦席の中が暗くなる。すぐに灯りがついてスクリーンに青空が映し出される。周りを見ると滑走路に居るようで、今にも離陸しそうな感じだ。機体は残念ながらわからない。

『聞こえるか?』

「問題ありませんのよ、アクセル」

モニターの一部にアクセルの顔が映し出され、声もしつかりと聞こえてきたので問題ないと伝える。画面のアクセルは軽く頷いてから、何かを操作していく。

『じゃあ、これから対G測定を始める。楽しんでいろ』

「はいですの」

身体から力を抜こうとしても、ワクワクしてきている。だって、身体はともかく心は

男の子だもの。そう思っていると、シミユレーター全体が振動しだし、モニターに映し出される映像が動いていく。

すぐに離陸し、身体に正面から後ろに引つ張られるような感覚が湧いてくる。モニターも空に上がり、どんどん加速していく。

『離陸は終わった。これより加速プログラムを始める』

「バッチコイですよ」

『まずは軽く10Gから行ってみるか』

「あ、あれ？ 確か対Gスーツを着て12Gぐらいが限界と聞いたような？」

『いつの時代の話だ。今なら対Gスーツがあればそれぐらいはいける。まあ、生身だとそんなに変わらんが』

「つまり、生身でも結構きついレベルのような……」

話している最中も加速し、どんどん身体にかかる圧力が上がっていく。シミユレーターなので実際は少し違うけれど、かかって来る圧力は本物と変わらない。どうやってるかは知らないけれど。

『10Gじゃ余裕か』

「確かにきつくもなんともありませんの」

最初に身体が引つ張られる感覚があっただけで、もう慣れてきたのかなんともない。

本当にこの身体はおかしい。

『次は15Gまで上げる』

「それもおそらく余裕ですので、20Gまで上げてくださいですの」

『いいだろう……』

どんどんGが上がっていき、20Gで身体が悲鳴を上げて視野が狭くなってくるし、色も失ってくる。これがグレイアウトという現象で、身体にかかる圧力によって脳に血液が行かなくて起こる現象らしい。

確か、時速100キロは0.94(G)で、約1G計算。つまり20Gというのはざっくり2000キロという頭のおかしいレベルになる。実際はもう少し低いけど、これぐらいになる。

『これ以上はシミュレーターではできん』

「……そう、ですの……」

『かなりきつそうだな』

「……身体が、軋んで、吐き気も……」

『まあ、そうなるだろうな。そもそも20Gを生身で耐えられるほうがおかしいんだがな』

「流石、アルフィミイちゃん、ですの……」

『とりあえず、15Gまで下げろぞ』

「はいですの……」

15Gまで下がるとかなり楽になってきた。肉体が強化されていないレベルでこれなら、進化を続けていけば20Gだって普通に活動できそうではある。

◇◇◇

しばらくすると、アクセルがシミュレーターを停止させてハッチを開けてくれた。なので、シートベルトを外して自分で外に出る。アクセルが少し驚いていたけれど、どうしてかわからない。

「次の訓練はなんですか?」

「言った通り座学だ。まずは基礎的な知識を身に付けてもらおう」

「畏まりましたの。ではさっさと始めますの」

「わかった。ついてこい」

みっちりきっちり、徹底的にアクセルに教え込まれる。ここは特殊部隊なので、侵入方法や破壊工作を行う方法などをしっかりと教えてもらった。また、銃の扱い方や効率的な人の壊し方なども教わっていく。そのくせ、ロボットには乗せてくれないという悲

しい現実があつた。

まあ、教わっている技術だけでもお母様に報告できるので問題はない。あくまでもアル・ファイミイの目的は人類の調査ですの。

第5話

朝、三時。目が覚める。見覚えのある天井と周りに散乱している寝る前までに読んでいた資料。一部は寝返りで少しぐちゃぐちゃになってしまっているが、どれもコピーなので問題ない。そんなベッドの上に散乱している資料の中で覚えた物は触手ちゃん達の餌として食べさせる。

食べさせた情報は強制的に頭の中に入ってきて、それが適応される。事前に自ら身に付けるのは知識の定着をより強固にすることと、学ぶ事を忘れないため。それにこの方法で行って得た情報は全てお母様であるノイ・レジセイアに筒抜けになる。それではないざという時に困る。私は、俺は地球人類の滅亡を望んでいないのだから当然だ。

「おはようございますの」

声に出して監視者の人達に挨拶してから、寝汗を流す為にシャワーを浴びる。寝間着として着ている男性物の白いぶかぶかのワイシャツを脱ぎ捨てる。これの下はショーツだけで、後はなにも着けていない。なんでこんな恰好をしているかと言えば、私の

……いや、俺の趣味である。裸ワイシャツのアルフィミーとか、最高じゃないだろうか？ 異議は認める。

「馬鹿ですの……」

何故か口から勝手に出た言葉を気にせず、全部脱いで洗い物の場所に入れておく。それからトイレと一緒にになったシャワールームへと入り、出すのを出すように見せてから流していく。その後、シャワーを浴びて眠気を吹き飛ばし、身体を綺麗に手で洗っていく。

もつとも、この身体は燃費効率がいいので老廃物なんてほぼ出ない。摂取した物は全てエネルギーに変換されるからだ。だから、シャワーを浴びるのはただの人としての習慣と監視者に見せるためのものだ。

お湯を浴びていると意識が完全に覚醒し、風呂場なので当然のようにある大きな鏡に映るアルフィミーの姿が視界に入る。うん、今日も可愛い。

ただ、髪の毛が少し痛んできているし、肌も一部に激しい訓練で染みや傷ができていく。こんなのはアルフィミーには必要ないので、意識して細胞を活性化するように促して修復する。お肌の染みや傷は綺麗になり、生まれたてのような玉子肌へと変化。髪の毛も光沢のあるサラサラした物に修復される。

「よし、ですの」

せつかくの美少女であるアルフィミイちゃんなので、肉体美は維持しないといけない。そうする事でこの綺麗な身体を好き勝手にできるといふモチベーションが保たれる。

つと、そんな事をしていると、アラームが鳴ったので外に出てタオルで髪の毛を拭いて、次に身体を拭いてから着替えだす。

一ヶ月も過ぎれば流石に女の子の身体にも多少は慣れがでてきているので問題は無い。最初は着替えの時だつて恥ずかしかつたから、できるだけ見ないようにもした。それでもトイレやシャワーの問題もある。目を瞑りながらなんてできないし、男として美少女であるアルフィミイの裸はみたいという欲望もあつたので色々確かめてドキドキしていた。まあ、流石に一ヶ月も経てば少しは慣れた。

ただ、流石に下着やスカートとかは未だに慣れないので、レモンに買ってもらった黒いワンピースを着て、スパッツを付けている。これなら、アルフィミイのコスプレみたいな感じに思えてまだ我慢できる。

着替えを終えてから外に出る。髪の毛はまだ乾いていないので、触手を呼び出してドライヤーに巻き付かせて乾かす。その間に食事として高カロリーのゼリーを口に流し込みつつ、時間を確認する。現在の時刻は0345。睡眠と食事、着替えに使った時間は165分。睡眠時間は2時間だけどそこまで問題ない。それはこの一ヶ月で証明さ

れている。

そういうわけなので、15分でここ一ヶ月の復習を行うとしよう。そう、レモンとア
クセル、ヴァインデル達にお世話になった間にした事はひたすら訓練だ。身体と心を虐め
抜いて鍛え上げ、アルフィミーに適合する身体の使い方を模索すること。そのお陰で
アインストの力を使わなくてもある程度は戦えるようになった。まだ怖いけどやるし
かない。

「つと、時間ですの」

時刻が0400になったので、部屋から外に出てアクセルに呼び出された場所へと移
動する。移動した場所はブリーフィングルームで、そこにはアクセルだけでなく、レモ
ンとヴァインデルまでもが居た。

「アクセルだけじゃないのですの?」

「一応、伝える事があるからな」

「私はアルフィミーへのプレゼントを用意したのよ」

「それは楽しみですの」

不思議に思っていると、ヴァインデルが資料を取り出して私に渡してきた。それを不
思議に思いながらも受け取って、中身を確認していく。それはとある政治家の汚職につ
いて書かれている。

「これをどうしろというのですの？」

「それはもう要らん資料だ。破棄しておいてくれ」

「……畏まりましたの」

「それはそうと、俺とアクセルは部隊を率いてテロリスト殲滅に出向く事になった。その間、お前には大人しく部屋で過ごしてもらおう。絶対についてくるなよ」

「大人しく、ですのね」

「ああ、そうだ」

「これはフリですのね。絶対についてくるなという事は忍び込んでついて来いと言われているはず。関係ない資料まで見せられたのだし、确实だろう。」

「レモン、アルフィミイにアレを渡してやれ」

「ええ、わかったわ。アルフィミイ、受け取ってちょうだい」

「ナニコレ……ですの……」

渡されたのは可愛らしい鈴がついたチョーカーと可愛らしい兎の耳がついた携帯端末、熊の顔があしらわれたお財布だった。

「完全に子供扱いですの！」

「カモフラージュ用だからよ。ちなみにこのチョーカーには発信機と通信機が取り付けられているからね」

「……こちらの行動を監視するためですね」

「当然だ。お前は危険な存在だからな」

「否定はしませんの」

「こら、アクセル！」

「悪かった。謝る代わりに俺からもコイツをくれてやる」

そう言つてアクセルが渡してきたのは何かの数字が書かれていた。

「これはなんですか？」

「その携帯端末の爆破コードだ。そいつはこんな外見だが、俺達が使うクラッキングツールも入っている。もし、奪われてロックが解除されるようなら爆破する仕掛けが施してある。それにいざとなればこのチョーカーからでも爆破指令を送れる」

「なるほど、それは便利ですね」

「後はこのリボンもあげるわね。針金が仕込んであるから、色々使えるはずよ」

針金入りのリボンは脱出や侵入とかに使えそうだけど、私にはあまり必要ないかな。暗殺には使えそうだし、太股にでも結んでおこう。

「ヴィンデルからは何もありませんの？」

「要らんだろう。それよりも、わかっているな？」

「もちろんですよ」

「ならばいい。では部屋で待っている」

「はいですの」



さて、鍵が閉められた部屋に戻ってから、貰った装備を確認していく。それが終われば部屋にある通信端末に携帯端末のコードを繋げてクラッキングを行う。こちらは事前に作られているセキュリティホールから侵入する。そこで用意されていた私が問題なく部屋でくつろいでいる映像を再生して録画するようにしておけば問題なし。

部屋のロックも解除し、誰にも見つからないように進む。事前に警備ルートは教えられている。何度も訓練したので問題ない。むしろ、これは訓練用の警備体制になっている。

そんなこんなで離陸する輸送機へと乗せられる荷物がある場所に到着した。そこにはこれ見よがしに一つの大きなトランクケースが置かれている。携帯端末をかざすと自動で開き、中に酸素マスクなどが用意されていた。ですの、そこに入って蓋を閉め、待機する。アインスト・アルフイミーであるこの身に酸素マスクなど必要ないし、そもそも催眠ガスとかを使われても効かない。

「アクセル隊長、このトランクケースは……」

「必要な物だ。俺が持つていく」

「了解しました」

しばらくすると、アクセルがやって来てトランクケースが運ばれていくような感覚がしてくる。その後に輸送機が離陸するような感覚にも襲われた。

不安ではあるが、どうしようもないので少し眠る事にする。どうせやる事はないのだ。



「ああ、少し扉を開けるぞ」

「あの、今は高度2000ですが……」

「なに問題ない」

「は、はい……」

そんな声が聞こえて目が覚めると、嫌な予感がしてくる。扉が開けられるような音が聞こえ、風圧によってケースがガタガタ動く。

「おっと、手が滑った。いや、足か」

その声と同時にトランクケースが滑ったのか、空中に放りだされたみたいで急激に落下していく感覚に襲われる。

「アクセルウウウツ！」

落ちる中、チョーカーが通信機になっている事を思いだして、操作するとすぐにアクセルに繋がった。

『空の旅はどうだ？』

「ふざけるなですの！ このままじゃ落ちて……」

言葉の途中で、急激に落下速度が収まる感じがする。

『パラシュートが開いただろう。これで多少の衝撃は感じるだろうが、問題なく着地できるはずだ。だいたい20Gを生身で耐えられるのだから、その程度では死なん』

「それはどうかと思いますの……」

『どちらにせよ、そのまま大人しく落ちていろ。地上にいたら携帯端末に入っている住所に向かって、デザインからの紹介で仕事の斡旋を受けに来たとマスターに伝えればいい。後はそいつらが勝手に連れていってくれるはずだ。それとできれば髪形と色は変えておいた方がいいぞ。監視カメラは消せても肉眼の記憶からは消せないからな。皆殺しにするのならそれはそれで構わんが』

「了解しましたの」

改めて資料を思い出すと、相手は人身売買もしているのでひよつとしたら助け出すべき存在までいるかもしれない。ただ、その場合は助けた存在をどうするかという問題も出てくる。助けられるからと言って助けてそれで終わりというのはいただけでない。その後の生活とか、普通に考えて無理だ。色々と権力者達の不都合な事だつて知つてしまっているだろうし、誰かの庇護がいる。

「ところで、助けられる被害者はどうすればよろしいのですの？」

『目撃者は殺せ』

「アクセル……」

『俺達に助けるメリットはない』

「逆にメリットがあれば助けてもよろしいのですのね」

『そうだ』

「でしたら、アクセル達が運用する部隊の人員としてなら、連れて帰っても問題ありません？ どうせ人手不足は目に見えていますの。助ける事で恩を売り、こちらに依存するように仕掛ければ優秀かどうかはさておき、従順な人手が入りますの。それに子供でしたら英才教育を施せばいい戦力になりますし、人造人間に学習させるプログラムを人間用に調整したりもできるかもしれませんの」

『ヴァインデルとレモンに相談してみる。三時間くらい経ってから好きなタイミングで連絡しろ』

「了解しましたの」

話が終わる頃には地面に激突する感触がしてきた。トランクケースの一部がひしゃげているようで、叩いても何をしても開かない。しかたないので触手を生み出して内側から破壊して外に出る。

「ふう〜空気が美味しいですよ」

トランクケースの外は森のようで、木の途中に引つかかっていた。どうやら、地面に落ちた感触は気のせいだったみたい。途中で引つかかっていたからこそ、身体も痛くないのかも知れない。

「どうですのー!」

周りを確認してパラシュートのワイヤーを取り外してトランクケースの中身を回収する。その後、飛び降りる。

地面に着地したら携帯端末を操作してアクセルに言われた場所へナビゲーションシステムを利用して移動する。目的の街は徒歩二日の場所にあるみたい。

なので、まずは森の中を走って街道まで出る事にする。流石に森の中を二日も行軍するのは疲れる。いくら街から見られないためだとしても、こんな場所に落とされたので

アクセルには後でお仕置きしてやる。できるかは知らないけれど。とりあえず、街道に出てからヒッチハイクをしながら目指すでしょう。



一日ぐらいで無事に街道に到着した。そのまま歩いていると、車が止まってくれた。窓が開いて中に居る男性が話しかけてくる。

「お嬢ちゃん、こんなところを一人で歩いていると危ないぜ」

「ご親切にありがとうございますの。でも、この先にある街にどうしても行かないといけませんの」

「どうしたんだい？」

「田舎から出稼ぎのために出てきているのですが、面接までの時間があまりないのですの」
「なるほどね。だったら乗っていくかい？」

「よろしいのですの？」

「ああ、構わないよ」

「ありがとうございますの」

車に乗せてもらい、目的の場所を伝えて連れていってもらおう。もつとも、ちゃんと目

的通りの場所に連れていってくれるかはわからない。

「しかし、あの街に行くのは危険かもしれないよ?」

「どうしてですか?」

「何人も若い子が行方不明になっているんだ。警察に連絡して捜索してもらっているが手掛かりがない。おじさんの娘も行方不明になって今も探しているんだ……」

「そう、ですの……でも、お金を稼がないといけませんの」

「そう、だよね」

しかし、行方不明がそれなりに出ているのは問題だよな。何をされているのか、考えるまでもない。まあ、これはこれで潰す理由はできた。けれど問題はPTに負ける程度この身ではやり方が限られる事だ。アインストの本隊から増援を要請すればどうにかできるかもしれないが、それでは余計にアクセル達に怪しまれてしまい、行動しづらくなる。少なくともアシユセイヴァーなどの情報は欲しい。ゲシュペンストのMKⅢとかもちよつと欲しい。まあ、この辺りは完全に趣味の話になるのだけだ。

「おじさんの娘さんはどのような子ですか? 出来る限り、私も探してみますの」

「ありがとう。この子だよ」

運転しながらパスケースを見せてくれる。そこには可愛らしい女の子の姿が映っている。金色の髪の毛に茶色の瞳。

「名前は？」

「ステラって言うんだ」

「ステラちゃんですのね」

スパロボ時空でステラと言うと機動戦士ガンダムSEEDデイスティーヌで出て来たステラ・ルーシェが思い出される。ステラの容姿を思い出せば、この幼い少女は確かにステラの面影がないこともない。

できたら、ハズレてくれる方が嬉しい。スーパーロボット大戦オリジナルジェネレーションだけでも大変なのにガンダム作品まで入ってくると、絶対にゲッターとかマジンガーとか入ってくるかもしれない。あんな化け物たちとやり合いたくはない。

まあ、助けられるなら助きたいし頑張ろう。帰れる場所があるのなら、帰った方が幸せになれるだろうしね。というか、ステラ・ルーシェだったら不幸な目に会う事は確定事項になる。

そもそもステラ・ルーシェは地球連合軍第81独立機動群、通称ファントムペイン所属のエクステンデッドという強化人間の少女だ。

幼少の頃から、ロドニアの研究所で最適化と呼称されるナイフや重火器を扱った実戦訓練、シミュレーションでの戦闘訓練、定期的な薬物投与及び記憶操作の調整が行われている。

そのため、軍からは生体CPUと呼ばれる消耗品のMSパーツ扱いであり、パーソナルデータはすべて消去済み。年齢すら、推定扱いで正確には分かっていない。なににより、薬物によって身体と心が壊されて逃げる事も考えられず、助けるためにも薬物をどうにかしないといけない。そして、戦場で暴れて街を壊滅させて殺されるといった結末になる。

このような事になるので、できれば助けてあげるのが好ましい。ステラは好きな子だから、労力を惜しまずに頑張ってみようとは思う。

「わかりましたの。それでは連絡先を教えてくださいませんか？」
「ああ、わかったよ」

携帯端末を借りて私の物と連絡先を交換しておく。ただし、相手の所だけに登録して、こちらには登録しない。奪われた場合の事を考えると暗記しておいた方がいいからだ。

「つと、到着だ。それじゃあ、俺は警察署に行ってくる」

「はいですの。娘さんが見つかる事を願っておりますわ」

「ありがとうございます」

おじさんと別れてからお店で染めるための道具を購入し、廃墟へと移動する。そこでまずは髪の毛の色を金髪に染める。それからカラーコンタクトを購入してそちらも付

けておく。

金髪美少女のロリエクセレンの完成です。ただ、髪形はツインテールにしておきましよう。いえ、このままだとバレやすいですから、もうちよつと変化させて、金色の鬘という暗殺者の金髪美少女にしましょう。触手達も髪の人に偽装させれば使える。

それに闇ちゃんはT O L O V Eのキャラなので、スーパーロボット大戦とは一切関係ありません。彼女がこの世界に存在することはない。ナノマシン技術を使えばイヴの方なら作れそうな気がしますが、大丈夫なはず。

「名前もイヴにしましょう。それなら、アルフィミイとバレる事ありませんの」

コードネームは金色の闇。名前はイヴ。うん。これでいこう。準備ができたし、頑張ってお仕事をやっていきましょう。

第6話

コードネームと名前を決めたので、アクセルに指定された住所に携帯端末を見ながら向かう。本当はネットカフェとかで情報を収集したいのだけど、このチャーカーによってアクセル達に位置を監視されている。それに持っている携帯端末も同じようにアクセル履歴は確認されているはずだ。

なので、今は大人しく進んでいく。手にスーツケースを持ち、明らかに旅行などで来たように見せながら移動していく。

「こっちは完全に……」

端末に従って進んでいくと、裏路地に入る。そしてどんどん人気も無くなって危なそうな雰囲気のある場所に入ってきて来る。道端に何人か座り込んでいる人達からもじろりと見られる。何せ美少女だから仕方がない。

「ハハ、ですね……」

思わず声を出してしまうほど怪しさが感じられる薄汚れた場所。そこにある階段を降りて扉を開くと、酒場があった。中ではいかつい怖い男達に透けるような薄い衣装を着た若い女性達がしなだれかかって奉仕したりしている。

もしかして、ここはそういうお店なのか？

いやいや、そんなはずはない。いや、例えそうだとしてもこのアルフィミイちゃんの身体は私の、俺の物だ。だから他の男になんて絶対にくれてやらない。むしろ、そういうことなら一片の慈悲も容赦なく、ただ無残にぶち殺してやるですの。

「ここはお嬢ちゃんが来るような場所ではないぞ」

声をかけられてそちらの方を見ると、カウンターにオールバックの男性が居た。おそらく、彼がマスターなのだろう。そう思ってそちらに近付いて、トランクケースからアクセルに渡された紹介状を出す。

「ディザイアさんから、こちらで仕事の斡旋が受けられると紹介されてきました」

アレ、ロールプレイをしているせいか、口調が「ですの」じゃなくなっている。いや、意識をしているからかもしれない。つまり、ロールプレイが重要ということなのかも？

「ディザイアからか……」

そう言つてマスターは私の頭から下まで値踏みするかのようないやらしい視線で見詰めてくる。

「いいだろう。こっちだ」

マスターがカウンターからグラスと何かの瓶を持ちながら出てきて、私を先導して奥

へと連れていってくれる。扉を二つ進んだ後、一つの部屋に案内された。部屋の中にはテーブルとイスがあり、それだけだ。窓なんて一つもない。

「コイツを飲んでここで待っているろ」

「わかった」

イスに座るとマスターがグラスを置いて瓶から飲み物をくれる。赤色の物で、どんな物かはわからない。

「未成年だけど……」

「ワインじゃない。ただのぶどうジュースだ」

「なるほど」

グラスを持って臭いを嗅ぐと、確かにぶどうジュースみたいだ。そういえば、この身体に毒物が効くのかはわからない。まあ、何があってもカウンターウエポンの護衛アインストちゃんがいるので問題ない。そんな訳で口をつけて飲んでみる。

「それじゃあ、待っていてくれ」

「了解」

マスターが部屋を出ていき、扉を閉めて鍵をガチャリと閉めた。一応、女の子としては確認しなくてはいけないだろう。そんな訳で扉まで近付いてドアノブを掴むけれど、開かない。やはり、閉じ込められたみたいだ。

仕方がないのでそのままイスに座つてぶどうジュースを楽しむ。携帯端末を出して確認すると、残念ながらというか、当然ながら圏外になつている。

待つていると部屋全体が少し動き出す。それに床から少しずつ薄い霧のような物が出てくる。おそらく睡眠薬とかそういうものかな。まあ、しばらくしても全然眠くならないので、ジュースを飲んでからそのままテーブルに寝そべるようにして目を瞑る。これで寝ているふりをしていればいい。

それにしても、この振動から感じる限り、この部屋自体がエレベーターになつていてみたいだし、思ったよりも大掛かりな連中みたい。一応、保険としてテーブルの下にアインストの一部を仕掛けておく。いざとなればコレをマーキングとして数体呼び出して暴れさせてやる。ここが普通のところなら、暴れさせはしないけれどね。



しばらくすると、扉が開いて男達が入ってくる。放置していると、私の腕を掴んで持ち上げて、顔を覗いてきた。

「ほう、随分と別嬪じゃないか」

「ここいつもコーデイネーターなんだろ？」

「そうらしいな。何も知らずに仕事を探しに来たみたいだぜ」

「馬鹿な奴だよな。ディザイアってブローカーなのによ」

「そう言うなよ。それにコーディネーターは美男美女になるように調整されている。その分、楽しめるだろう」

「だが、俺達にはこないだろう」

「まあ、金持ち連中の玩具になって、飽きられたら実験体行きだろうよ」

連中は私を運びながら物騒な話をしていくが、まだ何もしない。今すぐぶち殺したいけど、ターゲットに接触するまでは何もできない。逃げられたら困るし、ここで全滅させた方が根伐りも可能かもしれない。それに人質が居るかもしれないのだから、ここは気持ち悪くても我慢するしかない。

しかし、それよりも問題なのはコーディネーターという言葉。これはもうSEED作品の参戦は決定しているのかもしれない。ただ、そうなると原作よりも地球連邦軍は強化されている事になる。何せ既にパーソナルトルーパーが作られ、部隊まで存在してインスペクターやDC戦争を経験している。

ゲシユペンストMK-IIIに乗り、アインストに汚染されたキョウスケ・ナンブが敵として存在するという事である。

ザフトにとってどう考えても絶望である。だって、考えるだけでキョウスケ相手に勝

てるのって居ない。ラウ・ル・クルーゼでもおそらく、勝てたとしても運が良くてアクセルぐらいだろう。ただ、キヨウスケには絶対に勝てない。それはつまり、どう考えても負けが確定だ。

そういう意味では気にしなくてもいいかもしれない。いえ、ザフトを使って地球連邦の戦力を下げ、アクセル達の勝機を作れるのかもしれない。

まあ、それは置いておいて、運ばれていった先は牢屋だった。そこに放り込まれたので、その衝撃で起きたようにみせてそちらを見る。すると男達はニヤニヤと笑いながら牢屋を閉じていく。私の荷物は全部取られてしまったようで、牢屋の外にトランクケースが置かれている。それに両手と両足に枷が嵌められていて、動きづらい。

「……何を……」

「まだ騙された事がわかってないのか？ まあ、どうでもいいか。どうせすぐに覚える。67番、新入りにここでの生活を教えてやれ」

「は、はい……」

そう言われて返事をした女の子の声に周りを確認すると、牢屋の中には私以外にも可愛らしい見目麗しいであろう少女達が何人も居る。彼女達は皆、ボロボロの服を着ていて、身体中に殴られた痕やみみずばれのようなものがある。

「あの、ハハハ……」

青色の髪の毛に水色の瞳をした女の子がこちらに話しかけてきた。彼女は片方の目を包帯で隠しているし、身体にも包帯が沢山巻かれている。

「ああ、別にここの説明はいりません。わかっていますから。それよりも、この中に居るのが全員ですか？」

「いいえ、他に何人かいます……」

「そうですか。ところでこの中にステラという女の子は居ますか？」

聞いてみるけれど、皆が首を振る。

「聞いた事がないので、居るとしたらその子はナチュラルですね。別の牢屋だと思いません。ここは遺伝子改造をされたコーデイネーターかその人が居るだけですから」

「なるほど」

遺伝子改造をされた子達というわけだ。だから皆、手枷と足枷をつけられ、中には繋がれている子もいる。しかし、私に話しかけてきてくれる女の子は何処か見覚えがある。

「あの、お顔を近くで見せてもらってもいいですか？」

「どうぞ」

彼女の頬を両手で挟み込んで至近距離から見ると、やはりどこかで見た感じがする。それになんとなく彼女からは嫌な感じすら伝わってくる。アインストちゃん達も同じ

で彼女をかなり警戒しているみたい。

「貴女、名前は？」

「名前はありません。ここでは番号で管理されていますから。貴女は125番です」

そう言つて首輪につけられたプレートを見せてくる。相手の番号は67番となつていて私は125番みたい。

「あつても無駄。どうせ記憶も消されたり、弄られたりするだけ……」

「ふむふむ」

他の女の子が教えてくれたけど、完全に番号しかないみたい。それに記憶を薬などで消すというのにも納得できる。消してしまえば逃げられる確率も減るのだから。

「とりあえず、ここで行われる事を詳しく教えていただけますか？」

「わかりました。気をしっかりと持つてください」

67番の女の子は震えながら教えてくれた。基本的に拷問されたり、奉仕させられたり、お金持ちの玩具にされるみたい。67番の子は片目を抉り取られたらしい。

「私はもうすぐここから居なくなりませう。今日のステージからは帰つてこれないでしょう」

「何故ですか？」

「ステージが終わつた後、身体の一部を失つた子は施設に送られるからです。そこで幸

せになれるらしいです」

それはきつと嘘だろう。薬品での強化実験か何かにされるらしいし。もしくは死こそが幸せという感じになるのかもしれない。

「皆さんはここから逃げたりしないのですか?」

「無理です。逃げようとしても、酷い目にあわされるだけです。それに取り付けられている首輪には爆弾と発信機がついています。逃げようとした子は罅られて殺され、他の子達はお仕置きされます」

「連帯責任ですか」

「こくりと頷く彼女を抱きしめ、頭を撫でてあげながら色々聞いていく。

「皆さんはもしも助かるのなら、人を止める覚悟なんてあったりしますか」

「ないです……」

「逃げるなんて考えられない」

「どうやら、すでに心が折れている様子。仕方がないのでこのままにしておこう。いざとなれば行動を起こせばいい。期限は67番の女の子が連れていかれるまでとする。

後は怪我をしている女の子達の治療をしよう。幸い、アクセルからも怪我人の治療方は教えられている。それをして少しでも痛みがなくなれば幸いだ。彼女達のほとんどはされるがまま、言われるがままの状態だったので治療自体は簡単に終わった。それ

に仕込みも簡単だった。



その日の夜、複数の男達がやってきて私達を連れていく。目隠しをされて車に乗せられ、VIPルームみたいな豪華な部屋へと案内される。そこではかなり悲惨な状況になっていた。

天井から伸ばされた鎖に女の子達が吊るされ、鞭で打たれたり、殴られたりしている。ステージでは様々な拷問器具や拘束台が取り揃えられていて、白衣を着た連中が薬品などを準備している。

「逃げようなんて考えるなよ。その首輪で一瞬でボンツだ」

私と67番の女の子は首輪につけられた鎖を引っ張られ、ひととき高い位置にある豪華な席の場所へと連れていかれる。その席ではくつろいでいる男性二人と、その背後に護衛だと思われる黒服たちがアサルトライフルを持って待機しているのが確認できた。

その男の一人はターゲットで、もう一人は見覚えがある男だった。なんでここに居るのかは知らない……いや、こいつだったらコーデイネーターを拷問して殺すためだけに来ているもおかしくないか。

「コネア議員。アズラエル理事。新入りのコーディネーターです」

そう、ここに居る一人はSEEDで出てくるムルタ・アズラエル。ブルーコスモスという遺伝子操作した存在を排除しようとする政治団体・ブルーコスモスの盟主。古くから反コーディネーター運動に最大の出資をしてきたアズラエル財閥の御曹司でもある。また、国防産業連合理事の任にあり、デトロイトに本拠を置く大手軍需産業の経営者。

「おやおや、新しい玩具ですか。いいですね」

「どちらが先にお試しになりますか？ 見ての通り、見た目もいいですから色々使えますよ」

「理事からどうぞ」

「そうですね……まずは昨日、抉り取った瞳でも犬のように食べさせますか」

「それもいいですが、まずはあちらのコーディネーターに立場を教えるためにも67番の瞳を抉り取らせるのもどうですか？」

「ああ、いいですね。どうせ本日の実験体なわけですし……」

男共の話を聞きながら、周りを確認する。出入口を確認する。出入口は一つで、その前にもアサルトライフルを持った護衛が立っている。こちらはどうしようもない。壁は透明な防弾ガラスのような物で覆われているので普通なら逃げる事はできない。

「では、貴女。彼女の目を抉り取りなさい。ああ、自分の目を代わりに抉り取ってもいい

ですよ」

「あの、こんな事をして警察や軍が黙っているとは思えませんが……」

震える67番ちゃんを抱きしめて、頭を撫でながら他の連中を見渡す。連中はニヤニヤと笑っている。

「ご心配なく。私は連邦の理事をしていますね。しっかりと抑えて込んであります。ですから、私達が捕まる事ありません」

「まったくですな。まあ、先日は危なかったですが、理事のお蔭で実働部隊を手に入れました」

「ええ。特殊部隊を作ろうとしていた彼等を支援し、結成間近までいったのは良かったのですが、まさかコネア議員を潰そうとするとは思いませんでした。ヴィンデル君も我々ブルーコスモスの一員だったのですが……」

「まあ、これでこりたでしょう。今は反対派の排除に……」

「なるほど、わかりましたの」

「そうですか、それじゃあ……」

「はい、殺しますね」

円卓会議ならぬ脳内会議を行った結果、全ちびつ子アルフィイちゃんによる会議で、相手は悪であり、人類の為にならない。また、残しておく必要はないと、自分勝手

な判断で殺す事を決定しました。偽善？ 独善？ おおいに結構。何故ならアルフイミイちゃんはやんば身体を持たない純粹思念体とも呼ぶべき存在であり、かつて地球に生命の種子を蒔き、生命を生み出した全ての源であるノイ・レジセイアによつて生み出された監視者であり、裁定者。

本来、アインストは生命体の成長を監視することを目的とし、その動向を見守り続けてきた。しかし長い時の中でその目的は徐々に狂いを生ずるようになり、更に、撒いた種より生まれた生命体・人間が無意味な争いを際限なく続ける様を目の当たりにしたことで、思念体は彼らを生命体として不適切な存在であると判断した。

実際にアインストは12000年前にもこの活動を起こしており、地球はかつて一度アインスト・レジセイアが送り込まれている。この際に人類はライディーンの活躍により、ムー大陸の沈没と引き換えにアインストを撃退している。

そこで猶予を与えたというのに人類は未だに外宇宙からの外敵が居なければ延々と争っている。

そんな訳でもう一度滅ぼす決定をしたのだが、また同じ過ちを犯さないために人間を知り、確実に滅ぼすためにアルフイミイを生み出した。

まあ、この世界でのアルフイミイがそうだとはいわれない。何せさつきのはあくまでもIMPACTの設定。OGではもう一つの異なるルーツの生命が地球に干渉したた

め生じた危険な力や混沌を見かねて、始まりの地である地球から不純物を取り除くことにした。そのためにエクセレンを参考に新たな人間を自分で創造しようとしたが、それが失敗に終わったと判断したために新しい宇宙で1から新たな生命を創ろうとした。ちなみにこの新たな人間というのがアルフィミイだ。

「ふふ、面白い事を言うお嬢さんだ」

「ええ、まったくですな」

「知っていますか？ 大切な者を傷つけられた人は手段を選ばないと」

「ええ、もちろん知っていますよ。だからこそ、確実に消して……」

「法で裁けないのなら、法じゃない方法で裁けばいいだけ。例えば——」

手を大げさに振り上げると護衛達は既に私に銃口を向けている。でも、今、撃つていないのは駄目だ。だからこそ影から生えた触手に食い千切られる。

「なっ!?!」

影から現れた無数の触手達がアサルトライフルごと腕を抉りとり、むしゃむしゃと食べっていく。

「馬鹿な、コーディネーターとはいえこんな事ができるはずが……」

「い、殺しなさい！ 早く!」

議員とアズラエルがあたふたとしている間に護衛達は腕を放置して懐から銃を取り

出して撃ってくる。また、別の者は応援を呼ぼうとしているので、そちらから潰す。応援を呼ぼうとした男には髪の毛を変化させてブレード状にして切断。こちらに放たれる弾丸も髪の毛に変化させたアインストで全て弾く。

「わたくし、とつてもお腹が空いてますの。肥え太った醜い豚さん達。わたくしたちのご飯になってくださいな」

「ふざけるな!」

「化け物めっ!」

「失敬ですの。こんな可愛い美少女を捕まえて化け物なんて……それに私を生み出したのはあなた方、人間ですよ?」

ゆっくりと恐怖を煽るように近づきながら、拾った拳銃を撃ちながら逃げようとする議員。それとアズラエルの身体を拘束して、残っている銃を拾って抱きしめている67番の女の子を見詰める。

「ねえ、貴女はこいつらに復讐したい? 殺したいのなら、殺させてあげます。どちらにせよターゲットは確実に滅ぼすのですから、手段はなんでも構いません」

そう言いながら、彼女の手に銃を握らせてあげる。

「や、やめろ! 金なら払う! だから止めてくれ!」

「止めてと言われてあなた方は止めましたか?」

「もちろんだ！」

「そうですか。でも私は仕事なので止めません。残念でした」

「67番、止めろ！ そいつを殺せ！ そうすれば助けてやる！」

「私は……」

拳銃を持つて67番ちゃんは議員に向けて構えた。震えているので、手を添えて上げて口の中に銃口を入れる。これで外れることはない。

「ひゃ、ひゃめ……」

「後は引き金を引くだけ。怖ければ止めてもいいですし、あなた方は私が保護します。

さあ……」

「っ！」

銃声が響く——ことはなく、彼女は撃たなかった。まあ、そっちの方がいい。

「た、助かっ！」

「それでは私が残さずに食べましょう」

触手を生み出し喰らわせる。すると奴の記憶と知識が入ってくる。それは今は置いておいて、もう一人の方を見る。すると奴は携帯端末を操作していた。

「ちっ」

指示を出して即座にアズラエルの両手両足を喰らわせる。悲鳴を上げるなか、67番

ちゃんから返してもらった銃をアズラエルに向ける。

「っ!？」

身体が触手に捕まれて強制的に引つ張られる。私がさつきまで居た場所には大きな光の柱が現れていた。その柱が移動し、大きな穴が生まれる。光の柱が消えると今度は巨大な機械の手が入ってきて、強制的に天井を押し開いていく。

「ひやはははは！ 殺せ、そいつを殺せ！」

『アズラエル様を最優先に確保して離脱しろ!』

アズラエルが大きな機械、パーソナルトルーパーの手で周りごと持っていかれる。

「逃がしませんの!」

慌てて飛び乗ろうと触手を偽装した髪の毛を放った瞬間、光の柱が壁を貫いてきて触手を焼いていく。それに伴い、即座に飛び退くと、相手も引いて外がはつきりとわかるようになった。

「こんな街中でゲシュペンストを持ちだしますか!」

外にはゲシュペンスト Mk-III のタイプ R が二機いて、その内の一機の手には光の柱を発生させていたプラズマキャッターが握られている。しかし、まだ中に他の人も居るのにこんな風にするとは驚きだ。

「ひっ」

登っていく。

コクピット付近まで登ればもう楽勝。アクセル達から貰ったマニュアルに書かれていた手順で緊急開閉用の操作をしてボタンを押す。するとハッチが自動で開いて中の人とこんばんわ。

「っ!？」

相手は流石に軍人だけあって即座に拳銃で反撃してくる。だけど、無駄。身体を隠しながら触手を伸ばす。触手達は何度も銃弾をその身に受けるけれど、そのままパイロットの男に噛みつき、血液を吸い取っていく。血液が吸われたことで抵抗が少なくなれば大きな口を開いた触手がバリバリと食べていく。ちよつとグロいのでしばらくお外で待機。

喰らったパイロットの知識と記憶が脳内に入ってくると、入ってきた物からゲシュペンストの操縦方法を呼び出して習得する。

「さて、と」

ゲシュペンストの中に乗り込むと、少し血液が残っているだけで後は何も無い。なので操縦席に座り、記憶通りの操作をしていく。

「アインストちゃん、お願いしますの」

「こちらは護衛部隊のフェアリー03。対象の殲滅を完了。増援の必要はなし」

仮面を被った男がサウンドオンリーで他の部隊にパイロットだった男の声で送信していく。

『了解した。そちらも帰投せよ』

通信を切つてアインストちゃんを労つてから手に入れた機体をアインストちゃんに浸食させ、データの回収と擬態を命じておく。残念ながら、今のアルファイミイちゃんは機体があつてもどうしようもない。流石にこれを持ってシヤドウミラーに帰投するわけにもいかない。そんな事をすれば誰かに見られて私がやったことが露見するからだ。

「とうとうか、一つ疑問なのですけど……もしかして、ゲシユペンストMk-III・タイプRって食べられたりします?」

アインストちゃんに聞いてみると、巨大化してぱつくりと飲み込んでいく……なんてことはなかった。流石に無理みたいだ。まあ、このまま連中に回収されればその基地とかのデータも調べられる。

「つと、時間がありませんの」

コクピットから飛び降りて、施設の中に戻る。まず、67番の女の子のところに向かう。するとそこには……

「え?」

下半身が周りの建物ごと消し飛ばされている女の子の姿があつた。守っていた触手

達も大半が消し飛ばされ、生き残っている子達は彼女の下半身に蠢いている。

何故こんな事になったのかと思えば、思い出すのは相手の攻撃を回避して突撃した時。プラズマカッターが振り下ろされたその先にこの子達がいたのだろう。私の冷静な部分がそう考える。

「助けられたと思ったのに……なんで……」

いや、本当はわかっている。私が全て悪い。油断して調子に乗っていた。あそこで遊ばずに殺していたら良かった。いや、そもそもアクセルやレモン達と出会って一緒に居たいがためにアインストとしての特性をほぼ封じている。やるなら全力で最初からアインストの兵力を召喚していても良かった。

「本当、私は馬鹿ですの。何処かでゲームをプレイしているような感覚だったのかもしれません。この世界にセーブもロードも、リセットボタンもありませんのに主人公のように勘違いして、私なら助けられると本気で思っていましたの。その結果がこれ……」

そもそも私が世界を守ろうなんてちゃんちゃらおかしいですの。わたくしはアインスト・アルフィミイ。人類を滅ぼす尖兵だというのに……何時まで中途半端な感性でいますの、わたくし。

「……優先順位を決めますの。最優先はわたくしが生き残る事。次に楽しく気持ち良く生きる事。その為の手段は力と知識の吸収」

『でしたら、やることはわかっておりますよね、わたくし』

「はいですの。この子を、この子達を喰らってわたくしの血肉に変えますの。ごめんなさい」

残っていた身体を触手を使って取り込むと、彼女の情報が流れ込んでくる。そして嫌な、致命的な情報と吐気を催す気持ち悪さが同時に襲われ、強烈な頭痛に見舞われていく。その間に彼女が忘れていた記憶を追体験し、両手に爪を食い込ませながら四つん這いになって何度も地面に両手を打ち付ける。

暴れに暴れてようやく落ち着き、自分で壊していたボロボロの手足が急速に再生して元の綺麗な身体へと戻った。立ち上がってから、ボロボロになった服を破棄して別の服を作りあげる。アインストの能力は精神支配や生命体や物質の複製。この物質の複製を利用して触手を身体に巻き付けて服へと変化させる。どうせなら金色の闇と同じ服にしておく。

「貴女を守れなくてすいませんでした。ですが、クスハ、貴女の力は私が有効活用させていただきますの。借りパクになってしましますが、許してくださいですの」

両手を合わせて彼女の冥福を祈った後、残りの生き残りを探します。生きている小奇麗な服を着た金持ち連中は殺して喰らい、その知識と記憶を頂きました。生き残っていないみずぼらしい服装の女性や子供達、被害者は助けますの。

「た、たすけて……」

「頑張つて」

瓦礫を触手で持ち上げ、それでも無理なのは頭の痛いを我慢しながら、クスハから貰った念動力を使って補助し、退かしていきます。

成長したクスハがやってみたいに意識確認をしてちゃんと治療していきますの。それから死にたいと願う人は痛みもなく殺して取り込んでいきます。

生きたいと願う人の中で問題が無い人はそのままにして、問題がある人はアインストの力が結晶化した赤い宝石を埋め込む。赤い宝石によって精神支配を行つてから失つた身体をアインストで代用させました。精神支配を行う理由は単純です。化け物が体内に居たら狂つてしまう。そうならないためにも怪我をしたという記憶そのものを消す。

「仮初の身体ですが、これでいいでしょう」

何れ彼女達はアインストに浸食され、その身体を人ならざる者へと変化させていく事になる。その時に死にたいのなら、改めて殺してあげます。ただ、化け物である自分を受け入れてでも生き残りたいのなら、その時は歓迎しますの。

さて、救助活動はこれぐらいにして次の仕事に入る。今日殺して手に入れた知識を使つてここに隠されている不正の証や金などを全て回収します。生き残っている端末

で隠し口座にアクセスして、彼等が持つ全ての口座から全額を送金し、世界中にばら撒く。その中にある大部分は隠し口座に入金させて後で回収すればよしですの。

他にも研究データなどは全て回収して取り込んでおく。彼等が行っていた人体実験のデータは色々と役に立つ。いや、むしろ役に立たせないと死んでいった彼女達が無駄になりますの。

流石にこんな事をしていると、警察がやってくるので精神支配した人達を連れてさつさと逃げる。エレベーターに仕込んでいたアイNSTは爆発させて注意を引きながら、別の隠し通路から逃げるですの。

隠し通路の先も同じような裏に関わっている連中だとわかっているの、容赦なく念動力の実験体として身体を圧縮して箱状にして殺す。そして、それもしつかりと食べさせますの。もつたいないおぼけが出たら困りますものね。

念動力は使えば使うほど身体に馴染んでいく。アイNST達は嫌がっているみたいですが、この力は便利なので諦めてもらいます。例えば気持ち悪くても使わせてもらいますの。

彼等が持っていたお金や銃器類は回収し、同じく彼等の車も拝借してそれで逃亡しますの。あ、そういうえば端末の回収を忘れていたので、爆発コードだけは送っておきましよう。ポチつとな。

するととても大きな爆発が遠くで起きましたの。アクセル、殺意が高すぎますのよ？
まあ、そのお蔭で逃げられるのでよしとしましょう。

「あ」

車運転中にあるお店を見つけたので、アインストちゃんに指示を出して車を停止させます。そこから降りて買い物に行きますの。

「鯛焼き50個、味は10個ずつでお願いしますの」

「はいよ。すぐに焼くから待っていてくれ」

「超特急でお願いします」

「ああ」

聞ちゃんと言えば鯛焼き。これは外せませんの。というわけで、鯛焼きを買ってから逃走します。どうせアクセルが回収に来るまでに時間がかかりますし、これでいいでしょう。

というわけで、回収予定地まで移動したら、そこで鯛焼きパーティーをしながら待つことにしますの。後、ついでなのでお墓というわけではないですが、お供えもしておきましょう。南無阿弥陀仏。

第7話

アクセル達に回収されてから数日。ヴィンデル率いる地球連邦軍特殊任務実行部隊は無事に結成されました。それもアズラエル財団の肝煎りで、ですの。

原因はムルタ・アズラエルが重症を負い、下手人を始末するためと今回のような事が二度と起きないようにという事もあります。つまり、テロリストなどに対抗するための特殊部隊として作られたという事ですの。まあ表向きは対テロリスト部隊ですが、裏は連邦軍に不都合な事を闇から闇に葬る組織ですわね。

通称、シャドウミラー。連邦政府の闇。しかしてその実態は……正義のミカタ。なくんてことはありませんの。殺害対象や排除する対象を調べ上げ、生かすべき存在ならレモンお姉様の技術を使つて姿を変え、暗部としての力で新しい戸籍を与えて組織に加える。そんな組織……の予定らしいですの。

「さて、部隊は無事に結成され、落ち着く事ができました。そこで先送りしていた問題について話し合いを行う」

ヴィンデルに呼び出され、彼の執務室に来たのですが、アクセルとレモンお姉様まで

いますね。その状況でヴィンデルは机の上に両手を置いて所謂、エヴァンゲリオンの碇ゲンドウのようなポーズをしておりますの。

「アルフィミイちゃんの事ね」

「そうだ。随分と派手にやらかしたみたいだからな」

「ええ、油断してムルタ・アズラエルを取り逃がしてしまいましたの。ましてや、そのせいで助けるべき、助けなくてはいけなかったお方を殺してしまいました」

クスハはスーパーロボット大戦の主人公であつたお方。それはつまり、この世界において重要な役割を持ち、人類を救済する立役者の一人。そんな彼女が死んでしまったという事はRTAなら完全にリセット案件ですの。本当、現実なのが恨めしいです。ただ、クスハを取り込んだ事で劣化、クスハには成れましたが、念動力のレベルは低い。クスハがレベル9だとしたら、こちらはレベル5程度。

それでもどうにか頑張らないといけな。クスハを殺してしまった責任は取らなくてはいけませんの。

「でも、ターゲットの議員は始末したわよ」

「そうだ。故に依頼自体は達成だ。それにムルタ・アズラエルを取り逃がしたおかげで、シャドウミラーへのスポンサーがついた」

「それ、わたくしは指名手配されてませんか？」

「される予定だ。通称はどうする？」

「じゃあ、金色の闇がいいですの。これから派手に襲撃を仕掛けていきますから、そのコードネームでお願いしますの」

「了解した」

指名手配はヴィンデルが手を回してくれるので、問題なし。変な名前とかつけられた困りますものね。

「それで、助けられた他の子達に関してはどうなのでしょうか？」

「そちらに関してはレモン」

「ええ。全員、現在は治療中よ。どんな実験をしていたか、データがないからわからないけれど、肉体に変化がみられるわ」

実験データはレモンお姉様に提供せず、私の懐に仕舞いこみましたの。これにより、私がムルタ・アズラエル達によって生み出された可能性も提示でき、私がアインストだと疑われにくくなりますの。

「それは問題ないのか？」

「強化された兵士としてはかなり優秀でしょうね。素体のほとんどがコーディネーターだったというのものもあるけれど、繁殖能力はほぼ無くなっているわ。ただ、寿命は計算したところ……何故か増えているのよね。細胞が崩壊と再生を常人の数倍の速度で繰り返す

返しているのに意味がわからないわ」

「それはつまり、訓練すればするだけ強くなるという事か？」

「……アクセルの言う通りよ。兵士としては素晴らしいでしょうね。ただ、心の問題が色々あるから……」

「どちらにせよ、兵士として育てるにしても、メンタルケアはしっかりとお願いしますの。それと彼女達の要望をできる限り聞いて頂けると助かりますわ」

「もちろんよ。いいわよね？」

「ああ、構わない。彼女達は連邦に知らせない我々独自の固有戦力とする。アクセル、希望者をしつかりと鍛えてやれ」

「了解した」

さて、あの子達の処遇が決まったのなら、次はこちらの要望を聞いていただきましょう。

「一つよろしいのですの？」

「なんだ？」

「今回の報酬として、アズラエル財団が関わっている研究所の場所と、研究内容を教えて頂きたいのですの。それと自由行動を行う許可もいただけると幸いですわ」

「アルフィミイちゃん、あなた……」

「てつきり操縦技術を頼んで来ると思ったら、そっちか」

「今なお苦しんでいる子供達を先に解放してあげたいのですの」

「ふむ。我々にメリツトはあるか？」

「助けた子供達はこちらに連れてきますし、そこで研究されていたデータはお渡ししますの。レモンお姉様でしたら、有効活用できるかと」

「それに俺達の需要も高まるな」

「わかった。許可しよう。ただし、お前には別の拠点を与える。そこで活動する事と事前に襲撃する場所を教える事が条件だ」

「かしこまりましたの。あ、それと戸籍を用意して欲しいのです。表向きはアルフイミイとして科学者や研究者を目指しますの。これなら、こちらに来てても怪しまれませんしね」

「そちらも用意しておこう。拠点には使用人も用意しておくから、生活の心配はない」
「ありがとうございますの」

ヴィンデルが優しいですが、当然の様に監視はつけられるでしょう。さて、レモンお姉様の方を見ると、ニコニコと楽しそうにしている。

「一緒に研究できるのは楽しみね」

「はいですの。いっぱい凄い機体を作りあげますのよ」

「戦闘技術は高いから構わないが、操縦技術はどうするつもりだ？」

「シミュレーターで訓練します。実機は相手の施設に忍び込んで新型機などで遊ばせてもらいますの」

「それは良い考えだ」

「では、準備ができるまでしばし待て」

「それではお姉様のところでお勉強していきましょう」

「確かにその方が無駄にならなくていいわね」

とりあえず、人造人間の研究とパーソナルトルーパーの知識を蓄えないといけません。そのため到手っ取り早いのは違法研究者達を取り込む。本当はノイ・レジセイアに知識を与えたくはないのですが、そうも言ってられません。少なくともクスハの代わりをしないとイケないのだから、スーパーロボット大戦のように無双できるぐらいに鍛えあげないといけませんの。それがクスハを殺してしまった俺の責任だ。

その為到手っ取り早いのはアインストとして人や知識を吸収し、身も心もアルフィミイに近付いていくこと。だからこそ、ロールプレイをしていく。そうすると不思議と力が湧いてくるのがわかったので、継続している。やはり、俺は、わたくしは偽物とはいえアルフィミイである事に間違いはない。

さて、レモンお姉様の研究室でお勉強しましょう。時間は待つてはくれません。ステ

ラの事もありませんし、時間はあまりありませんの。



「要望を聞いて良かったのか？」

「監視はつける。それにこちらとしても技術情報が手に入るのは都合が良い。それにここに閉じ込めたとしても突破される可能性がある。少なくとも戦闘情報を見る限り、生身でパーソナルトルーパー機を倒せる力はあるからな」

「それにまだアルフィミイのバックはわかっていない、か」

「そうだ。それに彼女はまだ利用できる。アルフィミイが暴れるだけ暴れば、俺達の必要性も増える上に隠れ蓑になるからな」

「資金を引き出しやすくなるのは助かるわね。それにアルフィミイちゃんは悪い子では……いえ、悪い子のようにだけど、私達の敵ではないわね。今のところはだけど」

「互いに互いを利用するのは当然の事だ。だが、最後に勝つのが私達になればいいだけだ」

「まあ、そうなるようにするか。アルフィミイについてはしつかりと首輪を嵌める。いいな?」

「ああ、人員を含めて全てアクセルに任せる。アルフィミイが裏切った場合、確実に殺せ」

「わかつている。与える拠点についても爆破できるように仕込んでいく。レモンも協力してくれ」

「仕方ないわね……」



要望を聞いてもらってから数日。わたくしはレモンお姉様の研究室で黒色の肩だしワンピースに白衣を着ながら手持ちのタブレットに表示したファイルを確認しています。目の前にある培養槽に浮かんでいるのは機械を頭部につけた人型の存在です。

顔が人じゃないおかげで女性の裸体だというのに興奮はしません。これがレモンお姉様やアルフィミイちゃんのような美少女なら男の心を持つので興奮すること間違いなしです。まあ、この身体は女の子なので百合百合になりますわね。

「ええっと、身体の生成は完了。問題は培養槽から出したら急速に細胞が劣化して死亡する事……原因は急速に成長させている事も原因ですよね？」

「そうね。細胞分裂を促進させて成長させたから、寿命は一年も持たないわ。解決策としてコーディネーターのように赤ん坊から時間をかけてゆつくりと育てる事も一つの正解なんだけど、それじゃあ使えないの」

「兵力としては問題ですわね」

「それに戦闘に耐えられるほどに肉体の強化と知識を定着ができないと意味がないの。知識に関しては機械を使う事でどうにかなるのだけど、肉体強度と寿命が問題よ」

肉体の強化も寿命の問題もアインストの細胞を使えば両方解決できそうだけど、それはそれで問題がありますの。まず、暴走の危険性。確かに戦闘能力は格段に上昇するでしょうが、最後は牙をむかれることになりますの。更にお母様であるアインストの女王様に全てが筒抜けになる可能性があります。最低でも位置情報などは全て確認されると思いますので、そこにアインストの兵力が転送されてきたらもう大変。基地や母艦が内部から襲撃されてしまいます。

「やはり技術情報が足りないのですか？」

「まあ、私の方でも色々と考えているのだけれど、まだ物になるまでは時間がかかるわね」

「思ったよりも進んでいませんか?」

「人間の脳を解析して機械で再現するところから始めたのだから、仕方ないのよ。実際にある程度は再現できるようになったのよ? まあ、流石に人格を形成するような事はできないのよね。どうしてもAIのようになってしまおうし、まだまだ私の理想とほど遠いわね」

「いや、脳の構造を再現するだけでもやばすぎですよ!」

「簡単なように言っていますが、最低でも脳死状態の人間を作り出せるという事です。肉体の方に関してはまだ問題があるみたいですが、こちらはクローン技術が使われておりますの。解決策として考えられるのは一つ。」

「いっそ、完全に機械化したサイボーグとかにするのは駄目ですよ?」

「それも考えたんだけど、その技術ってまだないのよね」

「パーソナルトルーパーの技術ではできませんの?」

「小型化させるのにどれだけの労力が必要か、わかっているのかしら?」

「なるほどですよ」

確かに小型化するのはかなり大変だ。パーソナルトルーパーほどの力は必要なくとも、人の身体として考えると難しいかもしれない。

「でしたら、その辺りの技術を手に入れてきましようか」

「あれば助かるわね」

「でしたら手に入れてきましょう。代わりにレモンお姉様の技術を教えてくださいませう。そして、二人で新しい人を生み出しましょう」

「ええ、そうしましょう。でも、アルフィミイちゃんも私と同じ目的があるの?」

「そうですね。わたくしもレモンお姉様と同じ……いえ、少し違いますか。できないかも知れませんが、死者の復活を試してみたいのです」

「死者を……? それって……」

「レモンお姉様と私達が生まれた技術を完成させますの。オリジナルには会ってみたくですし、誰かが死んだ場合の保険になりますの。まあ、別人になる可能性がとても高いです」

「それでも目指すの?」

「まあ、ただの目標ですの。実際に作れるとは思っていません。でも、自分と同じ知識と記憶を持った同じ子が居れば作業とか、色々とはかどりますの」

ナルトの影分身とか、とても便利ですの。ですので、できればやってみたくと思えますの。それにスペアボディというのは必要なのです。できればクスハの復活をできれば最高ではありませんの。

「それってかなり危険な事よ。とって変わられる場合もあるだからね」

「わかっていきますわ。でも、それもわたくしでしょう？　なら、それはそれでありではありませんの？」

「いや、ないからね？」

「まあ、そうですわよね……」

「まったく……そんな危険な事はやらないですよ？」

「まあ、所詮は理想論ですの。そんな技術力はアルフィミーにはありませんの。だから、頑張つて知識を収集しますわ」

「ありがとう。それじゃあ、もっと勉強しましょうか」

「はいですの。一通り教えてくださいですの」

「ええ、任せなさい」

そこから始まったのは地獄と言えるほどスパルタ訓練ですの。間違えば容赦なく叩かれますし、教えられる知識も高度過ぎてチンプンカンプン。嘔み砕いて教えてくれるので、完全に暗記しないとイケません。

「頭のスペックはいいのだけれど、要領が悪いわね。覚え方がまずなっていないわ」

「うう……」

駄目だしされるのも仕方がないですの。この身体はアルフィミーちゃんなのでスペックはチート級。模倣によつて自己進化と言えだけの強化ができるアインストで

もあります。でも、わたくしにはアルフィミイちゃんの身体を使いこなせていません。そもそも凡人である俺とは身体の使い方が違いますし、生物としても半分は人ではありませんの。

だからこそ、この身体の使い方を覚えなくてはいけません。それには同じエクセレン・ブロウニングから生まれてきたレモンお姉様は模倣先としては最高になりますの。それに技術チートと言っても間違いではない人なのですから、家庭教師としても一流なんでしょう。

「私の言う通りの方法で覚えなさい」

「はいですの」

教えてもらった方法で必死に勉強すること一ヶ月。予想通り、私にも馴染んでいきました。どんどん頭が冴え渡っていき、色々な情報が入ってきますの。睡眠時間はほぼ削り、ただひたすら勉学に励んだかいがありました。

これで人類の守護者となるはずだったクスハ達の方まで、頑張って頑張って成果を上げ続ける可能性が生まれました。何もしなければ待っているのは絶望の未来だけなのです。

判明しているだけでも敵はキョウスケ・ナンブを有する地球連邦軍とアインスト、エアロゲイターは確定。この世界がスーパーロボット大戦オリジナルジュエネレーシヨンの世界なら、魔装機神や超機大戦SRXも確定している可能性があります。つまり、魔装機神は重力の魔神グランゾンとシユウ・シラカワ博士と戦う事も考えないといけないのです。どれだけの絶望ですか！ ネオ・グランゾンとかだつたら、絶対に、ぜくたいに勝てる気がしませんの！

私と人類の未来のため、ありとあらゆる方法を試していきます。鬼畜外道といわれようが構いません。アルフィミイちゃんは理不尽な未来に立ち向かつて勝利する事を目指すのです！

それとようやく準備が出来たとの事でアルフィミイ・ブロウニングの戸籍と拠点……いえ、秘密基地と研究所になる場所も貰えました。そこは戦争時に破壊され、倒産された工場施設みたいでしたが、修理していけば色々と使えるでしょう。

地下倉庫もとっても広いので、色々と改造していかないといけませんね。とりあえず、仕掛けられている監視装置と爆弾だけは解除しておきますの。流石にちよつと女としての意識が芽生えてきているのか、他人に生まれたままの姿を見せるのは嫌ですよ。

第8話

新しいお家で過ごし、一週間が経ちましたの。生活空間は整える事ができました。少なくとも寝室と研究室、食堂、お風呂、トイレなど生活に必要な物は用意しましたし、特にお風呂に関しては大きめにしてある。

基本的なライフラインはヴァインデル達が用意してくれているので、追加や改造をするだけで良かったのが一週間でできた理由でもありますの。

流石に工場の方はほぼ建て替えになるのでまだ時間はかかりますが、こちらは今の所は問題ありませんの。そちらの手配はヴァインデル達がやってくれていますしね。

それに警備も派遣されてきたアクセルの部隊が居ますし、私の監視としてやってきた者達がメイドとして世話もしてくれるので、基本的に家事も問題なし。なので基本的に研究と情報収集に明け暮れている。

「お嬢様、食事の準備が整っております」

「かしこまりましたの」

最初はお嬢様呼びもどうかと思って言ってみたのですが、ブラウニング家は普通に資

産家の一族でしたの。そうでなければ死んだ娘を人造人間開発プロジェクトのマテリアルを使って甦らせるなんてできません。つまり、わたくしがお嬢様になるのは確定的に明らか。そういうえばご両親が何をしているかは知りませんの。まあ、生死なんてどうでもいいですわね。所詮は赤の他人ですの。

「それと本日の予定はどうなさいますか？」

「お出掛けしますの。ですから、家の事は任せますのよ」

「お供します」

「必要ありませんの。貴女達は今日、届くはずのシミュレーターをセッティングしておいてください」

「……かしこまりました」

議員達から貰った隠し財産を使って建物を修復し、ネットワークに接続したシミュレーターと物理的に隔離したシミュレーターの二つを購入した。ネットワークを接続した一号機は普通に操縦技術を鍛えるためであり、バーニングPTをやるための物です。二号機の方は機体を開発するために使います。ペルゼイン・リヒカイトを作らねばなりませんし。

「出掛けるのは構いませんが、お風呂に入って着替えてから行ってくださいね。かなりだらしない恰好ですから」

「……わかり、ましたの」

お風呂に入ると鏡に映るのは13から14歳といった綺麗な女の子。後頭部で縛ることでポニーテールにしてなお腰まで届くほどのポリュームのある青い髪。宝石のよう綺麗な赤い瞳を持ち、幼さが残る顔立ちは将来美人になる事が確定しているほど整っている。

そんな美少女が一糸まとわぬ姿で鏡の前に立っている。微かに膨らんだ胸や大切な場所までもが見えて罪悪感が湧いてきます。じっと見詰めていると興奮してきますので、さっさと身体を綺麗に洗っていきます。アルフィミイちゃんの身体なので、しっかりと手入れしないとイケません。ゆるふわウェーブは特に気を使いますの。

身体を洗ったら、広いお風呂に入って身体をぶかぶかと浮かせながら楽しんでから、シャワーで身体を洗い流して抜け毛とかも綺麗にして外に出る。

今回用意したのは無数の赤い宝玉がついた白と黒のレオタード。つまり、原作に出てきたアルフィミイと同じ服装です。それに加えてしっかりと白色のスカートを用意してあるので、そちらもつけておく。しかし、作って見たけれど……いやらしいですね。

ただ、よりアルフィミイに近付いたせいか、しつくりとくるような感じはある。

「やっぱり普通の恰好にしておきましょう」

ただ、黒のワンピースは可愛いけれど、そればかりも飽きるので別の物を用意しますの。白色のチェニックブラウスとジーンズ。無数の赤い宝玉をあしらってアクセントとしますの。

「さてさて、行きますの」

鞆の中に雨合羽を入れて移動しますの。



さてさてさうて、本日やってきたのは大きなショッピングモール。ここから監視カメラをクラッキングして映像を差し替えます。わたくしが適当にショッピングモール内を移動している感じの映像を流し、トイレの中で用意しておいた物で髪の毛を茶色に変えて服装も変更。パーカーとズボンでボーイッシュな感じにしつつ帽子を被って移動。

電車で目的地の近くについたらパーカーを被って公衆トイレに移動。そこで着替えとスプレーを使って髪の毛の色を変更。服装も闇ちゃんのものに変えてから上にパーカーを着込んでフードを被りながら移動します。

近くのマンホールから下水道に入り、雨合羽を装備して移動を開始。どんなに嚴重な

研究施設であろうと、水を運び込み、排泄物を取り出す必要がありますの。まあ、吸い込み式とかならそんな事をしていない可能性はありますが、幸い、ここは作った業者や政府をクラッキングして見た設計図と公開されていない資料から確認したら、普通に繋がっています。

それに……緊急脱出用の隠し通路とか、死んだ実験体の処理とか、色々と便利らしいですの。これらの記憶も議員さんが他の人から説明を聞いていましたので確実です。

そんなわけで、アズラエル財団が所有する研究所。その地下へと繋がる隠し通路の前におります。扉の前は普通の壁のように見えていますが、こちらは偽装されているだけですの。それにひそかに配置されている監視カメラもありますから、当たりです。

監視カメラは触手を使って接触し、クラッキングを完了。映像を数分前の物を延々とループさせます。続いて偽装されているパネルを開けて、そこにレモンお姉様特製のハッキングツールを携帯端末から使用。そして、議員のパスワードを入力して、網膜認証と指紋識別をクリアすると開くので、後は開いたというログと議員の使用履歴を消せば問題なし。

「本当、平和ボケしていますの」

死んだ人間のIDとパスワードをそのままにしてやがるんですから、呆れますの。まあ、アルフィミイちゃんのような存在を想定していないだけとも言えますの。さて、変

更していた網膜と指紋を戻しながら移動します。

隠し通路を進むと電源が入っている警備ロボットの発見。こちらは実際に正規の手続きで入っているので警備ロボットは起動していませんの。その子達にハッキングツールを使って警備システムにアクセス。クラッキングして施設内の監視カメラの映像を全てこちらの端末でも見られるようにしておきますの。

監視カメラを確認していくと、予想通りというか、なんとというか……白衣を着た大人が少年少女達に薬品を投与したり、殺し合わせたり、嫌がる子達をGの体験装置に入れて固定し、気絶したら電撃を流して強制覚醒させたりといった非人道的な行為が繰り返されております。

薬の拒絶反応などで死んだ子供達は焼却炉へ行くのではなく、開発されている生物兵器、品種改良した狼達の餌にしておりますの。死体の有効活用ですね。無駄のない精神は素晴らしいのですの。この狼達は警備用としても地下に放たれているようで、本当にイラつきますの。

「クラッキングしても、コイツラには関係ありませんものね」

そう、この子達が居る限り、警備システムを掌握しても殺されるだけ。装着されている首輪にある爆発装置を使うか、電撃で一定時間動けないようにするかの二つに一つ。つまり、緊急事態の時は一時的に電撃で麻痺させ、その間に通りぬけるだけ。そして、敵

に突撃させて巻き込んで自爆。

「可哀想なワンちゃん達……でも、大丈夫ですの。アルフィミイが貴女達を無駄にはしませんの。生きなさい、クノツヘン、グリート、行きなさい」

私の命令に従い、影からアインストであるクノツヘンとグリートが現れて、突撃してきます。すぐに狼達の悲鳴が聞こえてきますが、気にせずアルフィミイちゃんはゆつくりと歩いて進みます。いや、やっぱり五月蠅いので両手で耳を押さえておきますの。

クノツヘンは名前の通り、骨で構成された獣のような姿をしたアインストですの。骨をブーメランのように射出したり、鉤爪を巨大化させて攻撃します。

グリートは名前の通り植物のような蔦の塊で構成されたアインストで、蔦による鞭打や、高出力のビーム照射による攻撃を行います。

どちらもアルフィミイちゃんの護衛ですの。大きさは通路に合わせて3、4メートルくらいですが、本来はもっと大きくもなれますのよ。今まで使つてこなかったのはアクセル達の監視があつたから。でも、ここではありません。ちやくんと撒いてきてますからね。

さて、制圧が完了したみたいなので、進んでいくと広いドームのように着きました。わたくしが到着した場所は5メートルほど上に作られた通路で、その下には狼達が沢山います。どうやら、柵が開かれない限りはこの通路に出られない設計みたいです。

下は死体の廃棄場みたいで、更に数メートル上から今も子供が落ちてきました。その子は触手を伸ばして受けとめ、こちらに運んで確認してみますが、身体中を弄り回されたのか痙攣してビクンツ、ビクンツと跳ねています。身体中が腫れていて、誰かはわかりませんが……とりあえず死んでいるのは確実なので食べてしましましょう。

「貴女達の死は無駄にはしませんの」

触手を生み出し、彼女の身体をパクリと食べます。下に居る狼達や残っている骨も全部食べます。残さず綺麗にキツチリとですの。そうでないと彼女達の死が無駄になりますしね。

さて、取り込んだ者達を解析していきます。彼等は薬物が色々と投与されているので、そちらを解析して耐性を得ておきますの。特殊な力はありませんし、悲惨な実験を受けた記憶を全て引き継ぎました。この子達に積もった恨みつらみも引き受けていきますの。

本当は嫌だけど、やらなくてははいけませんの。少しでもステラちゃんの情報を得るために必要ですし、実験の結果などを身をもって知れるのはこれからの研究においても便利ですの。そう思い込むことしかありません。

まあ、こちらは置いておくとして、狼ちゃん達はとても便利ですの。彼等を解析して外見は狼のままにして内部をアインスト化。アインストは基本的にドイツ語なので、ア

インスト・ヴォルフ。アレ、これはやばすぎですよ！　だって、アインスト・ヴォルフって、ようはキョウスケの機体ですよ。

「よし、気にしない事にしますの。それよりも、始めますの。さあ、皆さん。復讐の宴を始めましょう。精々、わたくし達と踊ってくださいですよ。ポチつとな」

警備システムを使用し、全ての出入口を封鎖。厳戒態勢にして通信手段も全てシャットアウト。これで誰も出られませんの。なにせ緊急用の出口は私が封鎖していますね。後は狼さん達を解き放つだけの簡単なお仕事ですよ。

「さあ、我が同胞よ、殺し尽くすですよ」

既にこの研究所の凶面はわかっているの、効率良くぶつ殺してやりますの。そんなわけで狩り出しは狼達に任せて、アルフィミーちゃんは目的の相手を目指しますの。

さて、子供達が捕まえられている場所へと移動すると、そこですでに研究員が何人も居て、どうするか話していた。

「どうするんだ！　出口はどうなっている！」

「駄目です。対テロリスト用の防衛システムが起動しています！」

「外部への連絡は？」

「全部封鎖されています。携帯も圏外になっていますし……」

「いったい何が……」

「た、大変だ！ 狼達が出てきてる！」

「ちっ！ 助けがくるまでに実験体を処分しろ。揉み消しはできるだろうが、面倒な事になる。実験データの吸いだしはどうだ？」

「バックアップと今日の分の結果はこちらのディスクに……」

「それは助かりますわ」

「っ!？」

髪の毛で作ったナノブレードでディスクを持った男の腕を切り落とす、もう一方の髪の毛の手で掴んで回収します。男は腕を切り落とされて叫び声を上げるのですが、五月蠅いので心臓を貫いて殺しておきますの。

「お、お前は……あの方を殺した！」

「ひっ！ た、確か金色の闇って賞金首！」

「正解者には死をさしあげます」

その場でクルクルと回転して髪の毛をブレードにして切断する。悲鳴が上がリ、中には銃を取り出して私に向かって放ってくる。放たれた弾丸を死体を蹴り上げて防ぎ、その後ろから銃を持った相手を髪の毛で貫いて攻撃する。相手は即座に離れますが、足元から伸ばした触手が貫いて殺します。

「所詮は研究者。わたくしとやり合いたければパーソナルトルーパーを持つてくるので

すよ」

複数の研究者達を殺して触手が喰らっていくのを見て、残りが必死に命乞いをしてきます。

「頼む、助けてくれ！」

「金なら払う！ だから……」

「残念。これは貴方達が殺して来た子供達への鎮魂歌でもありません。ですから、皆殺しです」

「いやだつ、死にたくないいいいいっ！」

「俺達の研究は人類のために……」

「ああ、安心してください。貴方達の研究はわたくしがちゃんと引き継ぎますの。そうしないと死んでいった子供達が報われませんもの。ですから、その為に……大人しく食べられてください」

「いやああああああああああっっ!!」

頭からぱっくりと食べたので、残さないように綺麗に取り込みます。後は機器を調べて本当に全部のデータが回収できているかを確認。また通信記録なども含めて全てを吸いだし、ステラちゃんの居場所を探します。すると彼女の死亡データがありました。

「……また、助けられなかったですの……」

データをしっかりと確認すると、誘拐されてから実験を受けて一度は成功し、次の実験で暴走して脳死。ホルマリン漬けにして保存しているようですの。

「……待つですの。ホルマリン漬けでも脳が残っているのなら……まだ助けられますの……」

身体を機械とアインスト、培養したクローンで形成すればなんとななるかもしれないです。第二……いえ、第三のアルフィミイちゃんになるかも知れませんが、それはそれでよしとしますの。

「こうしてはいられませんね。必要な資材や機械は貰っていかないといけませんし、まずは脳の確保ですの」

保管庫に移動すると、沢山のホルマリン漬けが置かれていたので、その名前を確認すると……ステラ以上にやばい人の名前もありました。リョウト・ヒカワ、リュウセイ・ダテの脳。経歴を確認すると、インスペクター戦で活躍するも、作戦途中に大怪我を負う。その特異な能力から細胞からクローンを作成。しかし、想定された能力値を下回ったので、本体をホルマリン漬けにして保存。ODEシステム一つの機体が得た敵機の戦闘データを即座に処理、僚機へ伝達し戦闘に直結させることで、相手の戦闘パターンに対し部隊レベルで即座に最適な対応を取ることを可能とする。を搭載したバルトールなどで使用する。しかし、度重なる実験によって脳に破損がおき、能力が低下。サンプル

として念の為に保存することですの。

即座に状態を確認しますが、どう足掻いても脳が耐えきれない状態。念動力で確認しますが、もはや意思などは微かにしか存在しませんでした。

「お二人様、どうしたいのですの？」

『……もう、休みたい……でも……』

『……皆を、守らないと……』

「それだけに特化されるように調整されたのかもしれませんが……お二人の力、わたくしが貰いますの。ですから、お休みください」

流石に身体を与えてこれ以上戦わせるのは可哀想ですの。それにこの二人は脳の劣化や損傷が激しくて、新しい身体を作っても適応できないでしょうし、何よりアインストに乗っ取られる可能性がとて高い。そうなるのとただの人形になってしまいますので、ファンとしてそれは認められませんの。

『……ありがとう……』

『……頼む、ぜ……』

身体を取り込むのではなく、二人の魂をわたくしの物と合わせるような感じで彼等の念動力を一部譲渡してもらおう。それによってインスペクターとの戦いの記憶が流れ込んできますの。リュウセイは戦闘技術。リョウトは技術情報が多いですが、どちらも大

変動かりますの。何より、念動力のレベルが上昇しましたね。クスハ達とも引けを取らないレベルになりましたの。

「これで三人。どんどん重くなつていきますのね……さて、流石にもう問題はありませんよね？」

そう思つたのもフラグでした。まず、ステラちゃんやんの脳は無事に問題ない状態で確保できました。ですが、そこにもう一つだけやばい人物がこの施設に囚われておりました。その人物の名前は……ルリ・ホシノ。つまり、機動戦艦ナデシコのヒロインちゃんです。この世界、木連と戦うのも決定ですの？

とりあえず、助けに行きましよう。手遅れになつたら困りますの。

第9話

私の名前は星野ルリ。遺伝子操作されて生まれてきました。両親だと信じていた人は映像だけの偽物でシヨックを受け、遊び相手だったロボットにのめり込みました。

そのせいか、ネルガル傘下のAKATUKI電算開発研究所に勤める養父母、星野夫妻に引き取られ、星野ルリとなりました。彼等は建造中であつたナデシコのオペレーション訓練を受けさせられていました。多額の養育費と引き換えにネルガル重工へ引き渡される予定だったので、インスペクターの襲撃によってネルガルがなくなり、代わりに地球防衛軍の施設に引き渡されました。

そこでは同じく遺伝子操作された子達が日夜、実験によって命を無くして廃棄されています。私の実験はネルガルが残したイメージフィードバックシステム、IFSの実験素体です。

このIFSは体内にナノマシンを注入することで、脳と電子機器をリンクさせる補助脳を形成します。これによって人の思考を直接入力できるインターフェースです。

作成されている狙いは主にパーソナルルーパーや戦艦の機体操縦などに用いられる予定らしいです。操縦者のイメージのみで機体を操作することができれば、煩雑な操

作を簡略化することを可能として機体を自分の身体のように動かすことができるからです。

しかしナノマシン注入には不快感を伴いますし、ナノマシン処理中は精神が不安定になりやすく、場合によっては幻覚や幻聴を伴うこともあります。それに使用中は闘争本能を高める副作用があるらしく、軍としては有用らしいです。

今の所、適応できるのは私を含めて遺伝子操作をされたコーディネーターばかりなので、薬で強化された一般人、ナチュラルにも適応させる実験をしています。

性能を強化する実験は私達、コーディネーターが使われ、身体を弄り回されて沢山のナノマシンを入れられています。どこまで入れられるかという実験も兼ねているようです。

「七度目のナノマシンを注入する。今回は情報処理に特化させた新型だ」
「これでこの子も終わりだろうか」

度重なるナノマシンの注入により、身体の内面で機能不全を起こして動かない身体を手術台に縛り付けられています。最初は泣き叫んでいましたが、今ではもう諦めて少しでも楽になれるように早く終わって欲しいと思っています。

「施術を始める。準備はどうだ？」

「完了しています。何時でも」

「開始する」

腕に注射が打たれ、ナノマシンが体内に入ってきました。吐き気と身体を作り変えられる苦しみに襲われ、意識が朦朧としている中、経過観察の為の部屋に運ばれたことだけはわかりました。

そこで研究者達に囲まれながら呆けていると、扉が吹き飛んでいきます。

「何事……っ！ 馬鹿なっ！」

「何故、狼が出ている！」

「逃げろ！」

廊下から大きな狼達が入ってきて、唸り声をあげて威嚇してくるような感じがしました。私はすぐに研究者に身体を掴まれて額と身体の一部に赤い結晶を持つ狼達の方へと投げ込まれます。動く視界を見ていると、同じようにこの場所に居た実験体の子達も狼達に投げられました。

これで楽になれると思うと、狼達が開けた大きな顎も気にならなくなりましたが、狼達は身体から生やした緑色の蔦みたいな物で私達の身体を空中で受け止めてくれました。そのまま後ろへとそつと置かれて不思議に思っていると、研究者達が銃を取り出して狼達に発砲していきます。しかし、放たれた弾丸は狼達の鋼のような毛に弾かれ、天井へと跳弾していきます。

「ありえない！ 銃弾を弾く硬さなんてないはずだぞ！」

「それ以前になんだあの蔦みたいなのは！」

「まさか自己進化したというのか！ 興味深い！ 捕まえて解明せねば！」

「馬鹿野郎！ そんな悠長な事を言ってられるか！」

「さっさと起爆コードを送れ！」

「送りました！」

狼達……狼さん達の首輪から電子音が響いてきたので、私は朦朧としてきた意識の中で部屋の中にある機械に飛びつき、すがりつくようにして制御パネルに手を触れ、IF Sを操作して起爆コードを妨害します。妨害はどうか成功したようで、狼さん達の首輪は爆発しませんでした。

「……や、ちゃ、え……」

「死にぞこないが余計な事をしやがって！」

私に向かって銃弾が放たれますが、射線に割り込んできてくれた狼さん達が防いでくれます。別の狼さん達が研究者に噛みついて、その身体を抉り取りました。これでもう終われると思いましたが……

「首輪を直接撃て！」

「そうか！」

「あつ……」

首輪を撃たれた狼さん達が爆発して光に包まれました。そこから、首が吹き飛んだ狼さん達が現れ、研究者達はホツとした表情をしました。

「嘘、だろ」

「なんだこれ……」

しかし、胴体と首の両方から蔦が伸びて来て、その二つが結合して重なり合いました。そうなるのと切れた痕が少し残るだけで健在でした。

「ひいいいっ！ ぞ、増援は！ 兵士は何をしている！」

「だ、駄目です！ どこも狼達に襲われているみたいで繋がりません！」

殺到する狼さん達によって研究者達が貪り喰らわれ、私達は放置されます。でも、おそらく食べられた後は私達でしょう。そう思ったのは他の皆も同じで身体を震わせています。

「いやだ、死にたくない、死にたくない……」

「助けて、ママ、パパ……」

「良い子にします、だから殺さないで……」

「あははははー！」

中には恐怖で漏らした子もいます。いえ、私も含めて皆でした。それほど生きながら

食べられる光景は死ぬ事を望んでいても凄く怖かった。

そして、少しするとその恐怖が現実の物になりました。研究者達を食べ終えた狼さん達が私達の方へとやってきたらからです。

その時、外から足音が響いてきました。誰かが来たのかと思つて、扉の方を見るとそこには金色の髪の毛をした14から15歳くらいの女の子が居ました。彼女は狼さん達を気にせずに部屋の中に入ってきて、クルリとその場で回転してから私を見詰めました。

「みつけた」

「っ!？」

その人は私の傍にやって来て座り込んでいる私の前でしゃがんできました。そして、私の頬を両手で挟んで顔を上げさせて視線を合わせてきます。

「貴女がルリ・ホシノですか？」

「……」

後ろを気にしながら、こくりと首を動かすと、彼女が無表情からうつすらと笑みを浮かべ、次の瞬間には抱き着いてきました。

「やっと生きてる状態で一人救助できましたの!」

抱きしめられて、頬擦りまでされて意味がわからないし、鬱陶しくも思える。でも、不

思議と嫌な感じはしなくて、涙すら見えると、心の中から暖かい物が湧き上がってききました。そういうえば、玩具にされた事はあつても人に優しく抱きしめられた事なんてありませんでした。そう感じた瞬間、胸が苦しくなつて喉の奥から込み上げるものがあつて吐きます。

「……………」

「え？ 血、血を吐きましたの！」

口から出た血が女の人にかかるのを悪い気がしていると、次は手からも血が噴き出していき、次第に全身から血が流れだしてきます。

「いやあああああああああつっ!! 死なないでくださいですの！」

ナノマシンの拒絶反応。身体がナノマシンに蝕まれて私はもう長くない事がわかる。だから、どうにかして彼女を見て触れようと手をあげると崩れました。身体がどんどん崩れだすと、彼女の絶望した表情が見えて少し悲しくなりました——

「ふふふふ、この世には神も仏もいませんでしたね。いえ、居るには居るのですが、連中はほぼ全てが敵でしたか。例外は一部のみ……それなら、鬼畜外道や悪鬼羅刹に落ちようが、どんな形であれ人類を守護するのであればよしとしましょう」

——泣いていた顔からどんどん表情が抜け落ちて、とても怖い感じに変化していきま

「よし、決めましたの。ルリルリ、いえ、ルリちゃん。恨んでくれてもいいですの」
「……………？ うら、まない、です……………」

「いえ、これから恨むんですの。だって、今からルリちゃんには私のエゴで人を止めてもらいますの。だから、恨むといいですよ」

不思議がつっていると、女の人は顔を近づけてきて、私にキスをしてきました。そのままされるがままになっていくと、次に舌が入ってきて口内を舐めまわしていきます。

ぼくとしながらキスを受け入れていると、彼女の口から太くて硬いような、弾力がある肉のような物が口の奥に入ってきてきます。それから身体を貫くような痛みに襲われました。

違和感を感じて霞む視界の中、腕を見るとそこから無数の蔦が出てきていた。それらが絡み合って腕の形へと変えていきます。

「ステラと違ってルリちゃんはまだ身体がちやんとありますの。身体の崩壊は体内へと過剰に入れられたナノマシンが機能不全を起こした事が原因なのは連中の記憶からわかりました。でしたら、私がアインストの力で作り変えてしまえばよいですの。

身体を壊さないようにナノマシンを喰らって複製し、ルリちゃん専用のナノマシンへと構造からソフトまで適応させ、肉体を再構築しますの。幸い、人体実験のデータとレモンお姉様から貰ったデータ。それにルリちゃん本人のデータを使えば人としては無

理でも、アインストとしてならば生きる事は可能と判断しましたの♪」

「……なに、を……言つて……」

「簡単に言えば、これからルリちゃんのをわたくしだけの物にしますの。簡単に言えばわたくしが主人で、ルリちゃんが使い魔になりますの。拒否は断固として認めませんが、ある程度は自由にさせてあげますの。例えばここに居る子達の身の安全とか、ルリちゃん次第でしっかりと保証してあげますのよ」

私に得は全然ありません。ですが、一緒に励まし合つて実験を耐え抜いてきた大切な友達。妹のように感じられる子達だっています。どうせ死ぬはずだった命ですから、守つてあげるのもいいかもしれません。どうせ拒否は認めないと言つているのですし。

「……わかり、ました……だから助けて……」

「契約成立ですの。後は任せてください。ルリちゃん達が幸せに過ごせるように頑張りますの。例えば何を犠牲にしても」

彼女に抱かれながら、私は一度死んで、新しい私に生まれ変わる事になりました。



歌姫であり、テロリストになって勝利したクス・クラインが言いましたの。力だけでも、想いだけでも駄目だと。確かにその通りだった。

私には想いだけがあり、力は我を通すだけの物がありませんでした。クスハに始まり、リユウセイ、リョウト、ステラ。この四人を殺し、ルリちゃんまで殺すところ……いえ、殺しました。

人とアインストのハイブリッドになったルリちゃんはもう前のルリちゃんではありません。彼女は死んで新たに生まれ変わったネオ・ルリちゃんなので殺した事には変わりありません。

他者を圧倒できるだけの力が無い私では流石に一人で全てを救うどころか、一人だつてまともに救う事はできません。ですから、鬼畜外道や悪鬼羅刹に落ちようと最早構いません。

ルリちゃんを含めないとしても五人も失っているのです。これがゲームならリセット案件間違いなし。ですから、リセットします。いえ、強くてニューゲームを目指します。その為にすべき事はルリちゃんが居る事で確定した機動戦艦ナデシコから、ボソングジャンプのメカニズムと演算ユニットを手に入れる事。このボソングジャンプは時間移

動すら可能なので、過去に戻って助ける事ができますの。

そして、オリジナルジュエレーションの世界から考えて、もう一つ方法があります。それは時流エンジン。こちらは時粒子と呼ばれる物を使って、時が流れる場所でなら永久的にエネルギーが手に入る代物ですの。そしてなにより、こちらもタイムトラベルが可能という優れたもの。つまり、アルフイミイちゃんが目指すべき場所は時間と空間を超えた超越存在ですの。何せ相手は神様みたいな連中がゴロゴロいますからね。その筆頭が破壊の大王とかですの。

この二つを手に入れるか、最低でも一つを手に入れます。その為にルリちゃんには協力していただきます。彼女の情報処理能力は私にとつて、とても有用です。情報を集めてもらったり、侵入するための工作をしてもらったり、やってもらいたい事は多々あります。それにルリコンの一人としては是が非でも助けて傍に居て触れたいですの。

特に母艦を作った場合、艦長として彼女が適任だと思うのです。ラピスでもありますが、どちらにせよワンマンオペレーションシステムを使って人数は最低限にする予定です。

ちなみにこのネオ・ルリちゃんはグランゾンがネオ・グランゾンになるみたいに超絶パワーアップはしています。

何せ肉体強度は人類の数倍から数十倍！ と、言ってもルリちゃんは演算能力特化型

ですの、肉体強度は数倍程度ですの。

頭脳はナノマシンを取り込んで複製したことによってほぼ全身が演算機器みたいなものになっているので、ワンマンオペレーションシステムプランも問題なくできるはず。

「より良き世界にするために犠牲は必要です。ですの、タイムトラベルを前提にした作戦を行うにあたって……この世界は強さを得るための物だとし、知識と技術の収集を行いますの。本番はあちら側の世界。そこでも負けたら過去の世界……まだまだチャンスはありますの、シユタインズ・ゲートは未だに……って、これ負けフラグですの！」

落ちが付いたところできりあえず、ルリちゃんことルリルリをはじめとした生きている子達と機材や研究機器などをトラックとかに詰め込んで運びだす準備をします。荷物運びは狼さん達。運ぶ人は殺した人の身体を使つて狼達に人型を取らせればいいですの。

それが終われば施設から脱出して爆破コードを入力。施設が完全消滅して証拠隠滅。あ、もちろん、この施設がどんな非人道的な事をやっていたのかは録画データをネットに流しておきます。こちらはアズラエル財団へのダメージを与えるためですの。

さて、複数のルートを移動して貼り付けたテクスチャで監視カメラの映像を差し替えてバレないように姿を戻してからアルフィミイの状態で帰宅。複数回に分けてトラッ

クを本拠地に置いていきます。荷物は降ろして自宅にルリちゃん達を連れこんでから、後はメイドさんにお任せ。トラックの中身は研究室の方に運び込んで必要な物を設置。

どう考えても電気代が馬鹿みたいにかかるので小型の発電機みたいなのを作らないといけませんの。仕方がないのでそこらはレモンお姉様にお願ひし、最低限でも脳を生かす処理……なんてしません。ステラちゃん以外の脳は全て喰らい、ステラちゃんの物だけを維持します。アルフィミイちゃんはエゴイストなので、勝手に価値を決めてたすけるたすけないではなく、この身で選別しますの。だからお礼なんて言うんじやありませんの。余裕ができたらちゃんと身体を作つてあげますから、待つていてくださいですの。

その内……あ、戦術人形つていい感じだと思ひますの。そうです生体ロボット兵器を作ればいいですの。アンドロイドとか。よくし、研究目標もできました。

「まあ、その前に調べないといけない事がありますの」

研究室にあるネットワークが接続されているパソコンの前に座り、最初にネルガルと火星関係について調べます。ネルガルは……インスペクターの襲撃によつて工場施設を徹底的に破壊され倒産。その技術はマオ・インダストリーに吸収されたみたいですよ

の。

ルリちゃんはネルガルに買われずにアズラエル財団の研究所に回されてきたと……つて、やばいのです。ネルガルが無いとナデシコができませんし、木蓮の相手とかボソソジャンプが無いときついです。ああ、でもパーソナルトルーパーや地球連邦にはキョウスケが居ますし、それこそアクセルだっていますの。なら、大丈夫……不安ですの。

相手はデイスティーションフィールドとかグラヴィティブラストとか、重力関連技術を持っていきます。まあ、グランゾンほどでは……あれ、待てよ。確か、クロニクルの方に魔術があるシユウ・シラカワ博士の出身世界、ラ・ギアスに向かう方法が書かれた書物があったはず。まずはそちらを手に入れてあちらの世界に渡り、魔術と錬金術を収めるのもありですわね。

でも、まずはパーソナルトルーパーや戦艦を用意しないと話にもなりません。それに光学迷彩や電子妨害の技術も開発しないとダメですね。そうになると、
Anti ^対 Sensor ^感 and ^知 Radar ^装 ^置 ^球 ^状 ^フ ^ィ ^ィ ^ド ^ル ^ド、A S R S
を開発しないとダメですね。

この技術はディバイン・クルセイダースが研究していた高性能ECMで、周囲に電磁波を発生させてレーダーに感知されない効果があります。アースクレイドルではさら

に高性能のASRSが開発され、視認可能な位置からも探知不可能で、テスラ・ドライブの加速装置ブースト・ドライブとの併用により更なる効果を発揮しました。

隠密行動が必要な私にとつてはとても便利な技術ですの。これさえあれば侵入はもちろん、アクセル達に隠れて暗躍ができますの。例えばザフトがブリッツガンダムに搭載されていたミラージュコロイド可視光線や赤外線をはじめとする電磁波を偏向させる効果を持つ架空の特殊粒子である。可視光線や電磁波を偏向する特性があるため、このコロイドを表面に定着させる事で自機の姿を背後の景色にカモフラージュする事ができ、機体の隠匿が可能となる。要するに迂回型の光学迷彩の一種である。目視捕捉の基本となる対象物の光の反射が行われなため、これを展開されると相手側からは視認が行えなくなり、電磁波もレーダー反射しなくなるため電子的な索敵も困難となる。を使って大量破壊兵器のジェネシスを隠れて建設してました。それと同じ事をしたいと思いますの。後、ジェネシスも原作キャラ通りなら作られるですよね……とつても欲しいですの。だって、ガンマ線レーザーなのでアニメと違って色も無いはずですよ？ 不可視の攻撃とか不意打ちは最高ですよ。

と、今はASRSですよ。プランとしてはこの世界のASRSを手に入れる事です。こちらの世界もD・C戦争は経験していますので、ASRS自体はすでに存在しているはずですよ。アースクレイドルは無いので、強化はしないといけません、ミラージュコ

ロイドはあるので、そちらも手に入れて二つを合わせればいいでしょう。

これらの事を考えると、やはり研究所を襲撃するのが理にかなっていますね。狙うとしたら、マオ・インダストリーとテスラ・ライヒ研究所、時流エンジンを開発している時流研究所、イスルギ重工、モルゲンレーテ、ザフト。北米支部ラングレー基地のATX計画。こちらはゲシュペンストMK-III、アルトアイゼンとヴァイスリッターなのでそこまで重要ではありません。ああ、襲撃の最優先候補の一つは特殊脳医学研究所（特脳研）ですね。確実に非人道的な実験をしていますし。それとラングレー基地を除く地球連邦の各種研究施設。こちらはアズラエル財団などがメインですね。

よくよく考えたら、ほぼ全ての研究施設ですの。

「やれやれ、我ながらとっても欲深いですの」

まあ、やるしかありません。それにネルガルを復活させてナデシコを作る必要もあります。火星にも行きたいですし、A級ボソソジャンパーを取り込みたいです、もちろん、アキトさんやユリカさんは幸せになつて欲しいので手助けをする程度にします。ルリちゃんは貰いましたので、二人がくつつけばいいのです。アルフィミイちゃんはルリちゃん派なので、ごめんなさい。

「さてさて、やりますのよ、アルフィミイ。求める幸せな未来のために私という犠牲は必要ですの」

必要技術情報を手に入れるためにはそれが何処にあるかを知らないといけません。どのような手段で調べるかと言われたら、一つは情報屋。もう一つはアクセル達地球連邦軍の内部から。もう一はハッキング。

一つ目の情報屋は正直当てにならないですし、そもそも場所を知りませんので却下。アクセル達には既に研究施設の場所を教えて貰っているのです、問題ありません。ですが、教えてもらったのはあくまでもアクセル達が取捨選択をして、私に見せて手に入れた問題ない範囲となります。つまり、彼等を出し抜く事は不可能となります。最後にクラッキングですが、これが一番現実的なのです。

では、クラッキングにたいして何が必要かと言われると……高性能なスパコンと動力炉。強靱なネットワーク回線。そんなの、普通に開発や購入したらお金も時間もかかりませんが、インストールであるわたくしには裏技があります。

そう、模倣ですの。インストール達、その物をナノマシンとスパコンに変化させて設置させれば複数の高性能演算装置が出来上がりです。

そんなわけで、まずは研究施設の床を配管などを避けるようにしてクノツヘンにぶち抜かせて地下を拡張。連れてきた狼達も使つて地下を侵食。インストールの空間として掘り進めます。

50メートルほど掘り下げたら、横に広げて全てをインストールの蔦で覆つて補強し、

研究施設から頂いてきた一部の機械を護衛の一体、グリートをゲシユペンストMK-IIタイプRのプラズマジエネレーターに模倣させ、動力炉として設置。プラズマジエネレーターはメテオ3から得られたEOT解析により、重力制御理論が前進した事で炉心のプラズマ封じ込めに重力場を用いることになった。これにより優れた出力と発電効率を実現しています。あちらの世界では。こちらの世界ではメテオ3が落ちてないの、どのように開発されたのかはわかりませんでした。ただ、ネルガル重工とシユウ・シラカワ博士の重力理論がありますので、そちら方面からもたらされた可能性がとても高いです。

どちらにせよ、プラズマジエネレーターを設置する事で、動力炉を確保できました。これならステラちゃん以外の脳達を保存できると言われるかも知れませんが、それは無理ですの。ここで生まれるエネルギーはレモンお姉様やアクセル達には内緒ですので、メイドさんに知られる脳達は破棄するしかありません。それにそっちの方が使われた薬品などの解析も捗るので、生き残った子供達の治療に使えます。

死んでいった者達よりも生き残った子供達を優先するのは当然。それに死んでいった子供達はアルフィイミイちゃんの中で生き、新たな生命体として生まれるのです。それまでお待ちください。しっかりと産んでさしあげますからね。アレ、これってわたくしと俺達の子供になりますの？ やだ、少し興奮してきますの。

「つと、遊んでる暇はありませんの」

地下は遠隔で操作しつつ、上に戻ってルリちゃんの手体から頂いたナノマシンを私の身体にも適応します。それからIFSを使って調べていきます。まず一般のネットワークで時流エンジンの論文についてを調べます。すでにフェル・グレーデンによって発表されていました。

その論文を補助脳、ブレインコンピュータにダウンロードしてフェル・グレーデンにメールを送っておきます。内容は時流エンジンの研究に興味があるので、一緒に研究してみたい。その代価として4億\$を出資させて欲しい事。代わりに時流エンジンを一つ、実物で頂きたい事もつけておく。これだけでは信じてくれないでしょうから、前金として1000万\$ほどメールに書いた、彼の口座に送金しておいてあげます。もちろん、相手が教えていないはずの口座に送りつけた事で警戒されているでしょうが、相手は話に乗るしかありません。むしろ、乗らなかつたら色々とお話をさせていただきます。例えばご家族の事とか。

最悪、フェル・グレーデンは取り込めますの。何せ彼は地球連邦の高官によって暗殺されます。ですから、殺されたタイミングを見計らって喰らえば時流エンジンの基礎技術はゲットですの。もちろん、こちらに協力してくれるのなら、お助けさせていただきますが、そうでないのなら容赦はしません。なんとしてでも時流エンジンは手に入れな

ければいけない代物なのですから。

「お嬢様、お食事ができました」

「わかりましたの。連れてきた子達はどうですか?」

「彼女達はまだ眠っております」

「そうですか……薬のデータをレモンお姉様に送りますので、中和剤などを用意してもらって受け取ってきてください」

「こちらで作られないのですか?」

「まだそこまでの技術と施設がありません。工場の方が完成しないと何もできませんのよ」

「かしこまりました。食事の方はどちらでお取りになりますか?」

「こちらで取りますの」

「では、お待ちします」

メイドさんが少ししてから持って来てくれた。今日のご飯はポトフとパンみたいなので、それを食べながら、テレビをつける。するととんでもない映像が飛び込んできた。『皆さんお待ちいたしました! 全宇宙の覇権を懸けてファイター同士が、地球をリングに戦う武闘大会がはじまります! 戦って! 戦って! 戦い抜いて! 最後まで勝ち残った者がシャッフル同盟の榮譽と栄光を手にすることが出来るのです! そ

れでは！ スーパーロボット対戦・レディイイイゴオオオオオオ！』

言葉と同時に画面では激しい戦いが始まります。格闘戦や射撃戦を行う熱き戦いが始まりました。パーソナルトルーパーやそれ以外のロボットを含めてがガチで戦い合うスーパーロボット対戦。大戦じゃなく、対戦ですの。そして対戦者の一人が、叫んだ。『流派！ 東方不敗は!! 王者の風よ！ 全新！ 系列！ 天破！ 侠乱！ 見よ、東方は、赤く燃えている!!』

『ウオオオオオオオッ！』

クーロンガンダムっぽいのが流派東方不敗を使って相手をボッコボコにしている映像が流れており、わたくしは思わず食べるのに使っていたスプーンを落としましたの。

「Gガンダムとかやめるですのおおおおおっ！」

アルティメットガンダムならぬデビルガンダムが確定していたと知った瞬間でした。この世は間違いなく地獄ですの。

第10話

デビルガンダム。正式名称はアルティメットガンダム。Gガンダムの主人公、ドモン・カッシュの父、ライゾウ・カッシュ博士が開発したモビルファイターです。このガンダムの名前は究極というアルティメットがつくだけあり、自己進化、自己再生、自己増殖の3大理論を備えた機体です。

元々はガンダムファイトにおけるメンテナンスフリー等を目的とし、U細胞を導入した機体アルティメットガンダムとして作られていたが、地球環境の再生のために転用されず。

しかし、カッシュ博士の才能に嫉妬したミカムラ博士と軍事兵器として目を付けたネオジャパン軍部のウルベ・イシカワの共謀により、アルティメットガンダムは軍に奪われそうになります。軍の手から逃れるため、キョウジ・カッシュは母ミキノ・カッシュの犠牲を払いながらも、アルティメットガンダムと共に地球に脱出しますが、急な大気圏突入で機体は1年間もの再生を余儀なくされたうえ、落下のショックから人類を地球

環境浄化の障害と捉え、全人類の抹殺を遂行せんとするデビルガンダムに変貌しました。

それに伴いU細胞はDG細胞へと変化しました。DG細胞は無機物、有機物を問わず入り込む性質を持ち、機体のエネルギーや構造材を生産する事さえも可能としています。また、生物の細胞組織に入り込むことが可能であるため、その形質を掌握する事さえ可能となります。ただし、この技術は人間の精神に反応するデイマリウム合金の特性を利用しているため、デビルガンダムは生体ユニットとして人間を取り込む必要があります。これに選ばれたのがキョウジ・カッシュです。

まあ、アレですの。簡単に言えばあらゆる物を取り込み、自己増殖を行うだけでなく、負傷しても周りの物を取り込んで自己再生します。また、取り込んだ物体や負傷した時の経験などを得て自己進化していきます。

さて、そこで問題ですの。これってアインストとどう違いますの？

アインストは対象物を理解するため、新たな生命を生み出す参考とするためなど、様々な理由でコピーを作成します。アルフィミイちゃんもその内の一つですよ。さてスパロボシリーズと無限のフロンティアではその力に違いがあります。前者では不完全な紛い物にしかありませんが、後者の場合はオリジナルの外見や能力の完全コピーはおろか、それ以上の能力を付与することすら可能であります。もちろん、私が目指す

のは後者なのです。

まあ、こちらは置いておいて、デビルガンダムの話に戻しますの。デビルガンダムを倒し、その力を手に入れられたとしても、自己進化、自己再生、自己増殖の3大理論はアインストにもあります。自己進化は対象を解析して模倣する事で自らをどんどん進化させていきます。まあ、女王様は古き姿のまままでいらっしやいますが、アルフィミイちゃんはどんどん適応していくので自己進化と言って問題ありませんの。自己再生は言うに及ばず、元からアインストには備わっております。自己増殖も同じ。対象に寄生して内部から作り変えます。

つまり、ぶっちゃけて言えば必要ありませんの。そのくせ、放置するわけにもいきません。特に時流子研究所を襲われたらたまりませんの。デビルガンダムが時流エンジンを手に入れてしまえば、過去、現在、未来で猛威を振るい、物凄い勢いで進化して手が付けられなくなります。言ってしまうえば私の到達点へ先にたどり着かれてしまうことですね。それに時流子研究所は警備もザルというか、あくまでも個人の研究所なので、フェル・グレーデンが死んでからしばらくしないと機体すらありません。つまり、防衛戦力が一切ない状態の場所に恰好の餌が転がっておりますの。

「……ん〜いつそ、カッシュ博士ごと殺しますか……」

椅子の上で足をばたつかせながら、唇に人差し指を当てて考えた事を呟きますの。

実際、ドモン・カッシュのご両親を纏めてぶち殺して取り込んだ方がアルフィミーとしては楽です。正直、ミカムラ博士とウルベ・イシカワを始末したところで、別の連中が同じような事をする可能性が高いですの。

特にこの世界の政府や軍部はやつてもおかしくありませんの。ちなみにGガンダムでは軍事兵器として目を付けたウルベが所属するネオジャパン軍部はこの世界では地球連邦軍極東地区所属となります。

そんなわけで、ちよくとデビルガンダムに関しては見逃せない状態なんですよね。それこそ開発しているコロニーごと消し飛ばしてしまうのも手ですの。

「まあ、流石に問題ですの」

コロニーごと潰すのが一番安全ですが、無差別虐殺はできませんの。ただ、研究施設とデビルガンダムを完全に確実に潰す為にアインストの出動要請もしましょう。確か、地上に落ちてから一年間の猶予が……あれ、待つてください。モビルアーマーでもない、パーソナルトルーパーの扱いなんですよね。だったら、原作通りに動くかどうかはわかりませんの。

というか、そもそも既にデビルガンダムがコロニーから出て地球に落ちたのか、それともまだコロニーに居るのか、どちらかわかりません。

「まずコロニー事件から調べないといけませんね。落下物は後回しですの」

ああ、もう！ 本当に厄介な存在ですわよ、デビルガンダム！

「あの、お嬢様……」

「五月蠅いですわ！ 今忙しいのですの！ 下手をしたら数万じゃ利かない被害者が出ますのよ！」

IFSを使って地球連邦政府が所有するコロニーハッキングで調べ上げ、そこから軍事施設を確認しつつ、カツシユ博士が居る場所を探す。監視カメラや移動履歴を漁って調べていきます。膨大な作業量ですが、全身をナノマシンに作り変えたので、どんどん作業は進みますの。それでも時間は全然足りません。

「あ、あの、それならレモン様達に協力を要請したらどうですか？」

「……それもそうですの。ナイスですわ」

思考は調べながら、携帯端末を取り出してレモンお姉様に緊急用の連絡コードを入れます。これでレモンお姉様に直通ですの。

『どうしたの？ 緊急用のコードなんて穏やかじゃないけれど』

「看過できない情報が入りましたの。これがガセならそれでもいいのですが、違えば地球が大変な事になりますの」

『わかったわ。まずは情報を教えなさい』

「はいですの。まずは……」

レモンお姉様にカツシユ博士達が作っている機体について説明し、それからウルベ達の狙いも教えます。

『地球再生用に作られた機体を軍事転用しようというのね。でも、確かに有用な能力ではあるわ』

「コントロール出来なければただの災厄ですよ、お姉様」

『確かにそうね』

「それで、手伝ってくださいますの？」

『構わないわよ。私もその技術が欲しいから』

ああ、レモンお姉様だったら真っ先に飛びつく技術の一つですわよね！ 人造人間のWシリーズをデビルガンダムを生体ユニットにしてしまえば量産すら可能かもしれないわ。うわあ、戦いたくありませんわ。

『はい、調べたわよ』

「はやつ！」

『こっちは正規のルートだもの。それにバックドアも長い時間をかけて色々と仕込んであるから』

「ですわよね〜」

『まず、カツシユ博士だけど、極東地区が所有しているコロニーの一つに居るみたいね。』

アルフィミイちゃんの言う通り、開発しているのはナノマシンを使った大型機体。でも、地球再生用というより、テラフォーミング用の機体として申請されているわね。そもそも火星をテラフォーミングしたナノマシン技術も使われているみたいだし……」

なるほど。確かに地球を再生させるだけでなく、テラフォーミングに使うのは十分にありですわね。

「まだ生きていますのですね。ウルベの方はどうですか？」

『どうやら、そのコロニーに向かっているみたいよ』

「……至急、スペースシャトルを一つ、用意してくださいです。このままではカツシユ博士達が暗殺される可能性があります」

『軍が大事な科学者を殺すと思う？』

「今の軍が逆らう者を生かしておくと思えますの？」

『すぐに用意するわ。そうね……パーソナルトルーパーの宇宙空間での実験としておくわ。それとカツシユ博士達は死んでもらいなさい。連中の手元に置いておくのは危険よ』

「お姉様？」

『帰りのシャトルには十分に余裕があるから、しつかりとね』

「なるほどですの」

つまり、死体が残らないように殺せということです。そして、死んでもらった方達は、私と一緒に地球に戻ってシャドウミラーで新しい戸籍を貰うということ。

「ちなみに機体はなんですか？」

『実験機体として欠陥機を用意したから、アルフィミイちゃんが使ってたね』

「いや、妹に欠陥機を押し付けるってどうなんですか？」

『普通の人間が耐えられないような物なんて、欠陥機でしょう？』

「ぐうの音も出ないですの」

コンセプトは装甲が厚くて、高機動型で、射撃と少しの近接を行える万能機体。加速は各部に設置された大型のスラスターとかで行うらしい。

『データを送ったから、試してみなさい』

「ああ、受け取りましたわ。この機体……マジですか？」

『ええ、マジよ。言っただでしょう、欠陥機だって』

「これならまだゲシュペンストMKⅢの方が欲しいですの。いえ、嬉しいですよ？」

ただ、これを支援AIなしで扱えとか、レモンお姉様は鬼畜外道ですよ？」

『アルフィミイちゃんならできるわ。大丈夫』

「……信頼が辛いですの」

データを見た限り、既存の機体フレームにあり合わせの装備を付けた急造の機体で、

機体バランスは劣悪。パイロットの負荷など考えられておらず、各種パーツの耐久性等の問題も抱えておりますの。ぶっちゃけ、機体の完成度としてはかなり低い状態でありますわね。

ただし、スパロボファンなら、この機体は嬉しいですよ。この機体は別名、空飛ぶ武器庫、武器に手足が生えた機体、果ては失敗作と酷評されるほどです。これだけの問題を抱えた欠陥機の本機が実戦投入できるのは、搭載された制御OSの優秀さのおかげであります。

そもそもゲームでは劣悪な機体バランスとは何だったのかと言わんばかりの高めの運動性と装甲を備えており、おまけに盾持ちな上に修理装置まで備えている至れり尽くせりの機体。武装も遠近Pとそつなくそろえており、EN制・弾数制の使い分けによって高い継戦能力も発揮します。

死角がない万能さを持つ反面、火力はやや控えめであり、ある程度武器改造しなければ討ち漏らしを出してしまう事もあります。

「結論から言わせていただきますと、使いこなせるのならアリですよの」
『でしよう？』

「使いこなせれば、ですの！ できるかあ！」

『大丈夫、大丈夫』

もうスパロボファンの方にはお分かりでしょう。アルフィミイちゃんに用意された機体はシステム99ちゃんによって生み出された機体。スーパーロボット大戦Vの主人公機、ヴァングレイちゃんですの！　ただし、ナインちゃんは居ないですの！

「武装は何がありますの？」

『武装は電磁加速砲・月光、可変速粒子砲・旋風、大口径陽電子衝撃砲・迅雷などね。近接武装はゲシユペンストからプラズマカッターを二本だけ装備させておくから、安心しなさい』

「安心できないのですが……」

『それと事態を重く見て、明日か明後日には手続きが終わってシャトルを用意できるから、そのつもりでね』

「一日で動かせるようになれとか、無茶苦茶いますの！」

『まあ、頑張りなさい。私は私で貴女が送ってきた薬を作ったりもしないといけないから、そろそろ切るわね』

「よろしく、お願いしますの」

『ええ。お土産を楽しみにしているわね。あ、それと機体の名前は決めておいてちょうだい』

「かしこまりましたの」

携帯端末を切つてから、シミユレーターにヴァングレイのデータをインストールしていく。さて、デビルガンダムと戦うには流石にヴァングレイだけではどうしようもないのです。というか、ナインちゃんが居ない状態で操れるはずがありません。

と、言うところですが、ぶつちやけIFSがあれば思考で操れるのである程度はナインちゃんが居なくてもなんとかあります。ただ、火器管制から何から何まで自分でやらないといけません……あ、そうなのです。ルリちゃんをナインちゃんの代わりに乗せればどうにかできるかもしれません。

「いっそ、作りますか」

って、これつてもしかして……超文明ガーデムの連中まで参戦してきますの？ それつてもう、ボスのオンパレードじゃないですか！ いやいや、流石にないですわよね。いくら機体があるからって、ガーデムまで存在したら大変ですわ。あ、でも連中のアンドロイド技術はちよつと欲しいのです。それによくよく考えると、オリジナルジェネレーションの新作が出たら、出てきてもおかしくない連中なのです。それも第八艦隊ではなく、本体の方がきたら……やめやめ、流石にない、はず……きつと多分……

第11話

ガーデイムの事は放置して、今は時間がないのでバーニングトルーパーに接続していない方のシミュレーターを使いますの。

さて、コクピットに座りながら操縦桿に触れます。当然、IFSに適応はしていませんので、アインストとしての力でシミュレーター自体を解析して、操縦システムを改造してIFS適応OSに書き換えますの。

二時間ほど改造してから起動し、バグを排除していきます。幸い、ナノマシンを研究していた人達を取り込んだ事で、ナノマシン技術はかなり飛躍しております。そこに高度な演算機能も合わせればシステムを構築して追加するなど可能ですの。

スーパードーデインーターであるキラ・ヤマトだって戦闘中にOSを書き換えて……キラ・ヤマト？ あ、忘れておりましたの。SEEDの世界も含まれているのなら、コロニー・メンデルがあるはずですよ。

このコロニーは確か、C・E・30年に建造が開始され、L4宙域にあるはず。禁断の聖域、遺伝子研究のメッカと呼ばれ、ドーナドーナイター出産を一大産業としていた高

度遺伝生殖医療研究所の所在地だったためです。

「コーディネイター出産を“商品”とする一方、より先進的なコーディネイターを生み出す研究も行われていました。人工子宮研究のほかにクローンに関する研究も行われており、キラ・ヤマト、ラウ・ル・クルーゼ、レイ・ザ・バレルらはこの研究所で生み出されたのです。」

キラの父、ユールン・ヒビキ博士はこの研究所の主任研究員でした。また、CE60年頃にはギルバート・デュランダルが研究員として勤務していたはずですが。また地球連合とも何らかの繋がりがあつたと見られ、連合の依頼で戦闘用コーディネイターの研究していました。

開戦以前に同研究所で発生したバイオハザードのため、放棄され、コロニー全体は当時X線照射により消毒されており、今は無害となつていると思われませんが……実際に起こっているかは調べないとわかりません。どちらにせよ、スパーコーディネイターであるキラ・ヤマトのDNAや生み出した理論は魅力的ですし、破棄されたコロニー自体もアルフィミイちゃんの研究拠点としては充分に使えます。これは確保しなくてはなりません。

「ちょうど宇宙に出るので、その時に確保してしましましょう。」

「まあ、まずはヴァングレイを使いこなせるようになりませんか」

まず、ヴァングレイの機体データは全高16.4 m、重量28.2 t。OSはゲシュペンストMK-IIIの物が入っております。ぶつちやけ、ヴァングレイはアルトアイゼンに射撃武器を多くして修理装置とかつけた感じですね。

しかし、この世界にある地球連邦軍は本当に正気を疑います。いくらゲシュペンストシリーズが地球連邦軍の主力量産機として長年に渡り正式採用されているとはいえ、発展型であるゲシュペンストMK-IIIもまた正式採用するなど狂気の沙汰です。

だって、この機体は絶対的な火力を以て正面突破を可能とする機体をコンセプトとした、言わば強攻型の機体です。武装のほとんどを近接と中距離戦用の実体（実弾）兵器としており、分厚い装甲と陸戦機にあるまじきハイパワーブースターによる爆発的な加速とで非常に高い近接戦闘能力を持ちます。そのすさまじい加速能力は、突撃魔神のキョウスケですら初操縦時にはその加速性に驚き、ステークのトリガーを引き損ねてしまったほどです。そもそもコンセプトを文章通り解釈するならば、実弾を撃ち尽くし正面突破を果たしたら仕事は終わりという、有人特攻兵器ですよ？

まあ、流石にレモンお姉様もこの問題点をどうにかする為にヴァングレイを作ったみたいで、射撃武器がかなり多めになっております。

「OSのシステムに問題はありませんが、火器管制システムが全然駄目ですよ」

I F Sを通してヴァングレイの武装データが全て脳内に入り込んでいきます。ヴァン

グレイの武装は下記の通りですの。

両腕のシールド裏に装備しているハンドガンの電磁加速銃・月影。

右腕に備える電磁加速砲・月光。

両肩部に懸架している可変速粒子砲・旋風。

背面に懸架している大型の陽電子衝撃砲・迅雷。

両肩部に搭載されているブースターポッドミサイル。

両脚部に懸架しているミサイルポッド。

胸部に備えるマシンキャノン。

腰にある近接武装のプラズマカッター二本。

流石にステークは無いようですが、後々つけるとしましょう。アルフィミイちゃんの目的としてはこの機体を一般人でも使えるようにするのがベストでしょうね。

「はい、無理ですの」

ヒツケバインのグラビティ・システムを搭載しない限りは不可能でしょうね。機体の加速性能に人体が耐えられませんから。

まあ、それでもやってみるしかありません。そんなわけで、シミュレーター、起動ですの。

『戦闘開始』

正面のメイン画面が宇宙空間に代わり、どこを見渡しても岩などのデブリが存在するだけ。他には何も無く、ターゲットすら出ておりません。まあ、ただの訓練モードですからね。

「それでは、アルファイミィ・ブロウニング、行きますの」

IFSを通して機体を加速させ、まずは全速力を出してみます。即座にスラストから推進力が生まれて身体が吹き飛ばされるような殺人的な加速で画面がどんどん動いていきますの。

画面では即座に10Gを超え、瞬時に時速6000キロまで加速しました。そこからスラストを操作して無理矢理機体を上に動かします。身体にかかるGも20近くまで上昇して、吐き気や眩暈といった物が感じられません。もっと無茶苦茶な軌道を行っても大丈夫そうですの。

おそらく、ナノマシンや複数の人を取り込んだ事で身体が強靭になってきているのだと思いますの。

「ふふふ、どんどん無茶をしますの!」

フルスロットルで加速させながら、マップを岩が沢山浮いているアステロイドベルトに変更。そこに突撃して上下左右、前方後方に移動して駆け抜けていくと、流星に気持ち悪くなるうえに何度もぶつかって大破判定を受けました。

「い、怖すぎますの……」

顔を真つ青にしながら、シートの上に三角座りをして震える足を抱きしめます。顔は真つ青になっているはずですよ。

目の前に岩が迫ってきて、次の瞬間には衝撃を受けて隕石の中に突入していますの。当然、機体は爆発してロスト。アルフィミイちゃんも死亡扱い。

「し、思考操作が出来るとはいえ、フルスロットルで突っ込むのは馬鹿でしたの……そ、速度を下げてやってみましょう。高速戦闘は絶対に覚えなないけませんし……」

ヴァングレイを操るにはこれぐらいは必須。この機体を最初からある程度は扱える主人公は本当に化け物ですよ。

まあ、慣れるしかないもので、何度もアステロイドベルトに突撃し、回避軌道を身体に覚えさせていきます。速度と目の前に映る映像から速度が落ちないように計算してなんとか突破を図ります。

80分ほどで、どうにかアステロイドベルトを時速100キロ以下で駆け抜ける事はできるようになりましたが、まだまだ速度を上げないといけません。それに回避軌道を取ると減速してしまうので、シャア・アズナブルがやったように小惑星を踏み台にして加速する方法も試さなくてはいいけません。

『お嬢様』

「どうしましたの?」

視界に映る映像を瞬時に処理して回避しながら、開いた通信画面には一切、視線をやらずに答えます。コースレコードを更新させたいので、手が離せませんの。

『お連れした方々がお目覚めになられました。現在、体調を確認してから湯浴みをしてからお食事を頂いております。その後ですが、どうなさいますか?』

「……それでしたら、食べ終わってからでいいので星野ルリをこちらに連れてきてくださいですの」

『畏まりました。それとお嬢様もご休憩ください。シミュレーターの一時間以上の連続使用はお勧めできません』

「それは……」

『集中力が途切れております。コースレコードを確認すれば一目瞭然です』

コースレコードを全て表示させると、確かに段々とミスが多くなってきたけどどんどんアイテムが落ちていつている。

「……わかり、ましたの……」

シミュレーターを終了させ、外に出るとすこしふらついて倒れそうになりましたが、狼が身体を滑り込ませて防いでくれました。モフモフの毛に火照った身体を埋めるとも気持ちが良いので、そのまま身体を預けます。

「ありがとうございますの。貴方達にも名前をつけないといけませんわね」

身体を起こしてから、狼の頭を撫でると嬉しそうに頭を擦りつけてきます。大変、可愛らしいです。少し撫でていると、身体がクールダウンしてきます。汗もいっぱいかいているみたいで、少し寒くなりました。

臭い的にはいい匂いしかしませんが、汗は流しておきましょう。ルリルリに嫌われたくはありませんからね。そんな訳で、シャワーを浴びて汗を流してから、黒い肩紐のワンピースに下着をつけてソファアに座ります。

手に携帯端末を持ちながら、IFSでネットワークへ接続し、コロニー・メンデルについて調べます。メンデルでは既にバイオハザードが起きて多数の死者を出したみたいです。一応、X線照射により全域が消毒されたためコロニー内環境は無害となったみたいですが、G. A. R. M. R&Dは慰謝料などで多額の負債を抱えて倒産したようです。

その時にコロニー・メンデルや関連技術は売りに出されています。一応、現在の所有者を探してみましよう。

検索してみると、地球連邦政府が現在も所有しているみたいなので、購入させていただきます。色々と裏から手を回して偽造に偽造を行って、販売した事にして金額を振り込んでおきます。それから、所有権をアズラエル財団などに所属する会社から会社へと

どんだん回し、偽名で購入した事にしておきました。購入者の名前はイヴにしておきましたとも。これでアインストが使う宇宙での拠点候補は確保しましたね。

後はお母様に連絡して、追加のアインストを送ってもらいましょう。それもある程度、遠くからデブリに偽装して移動してもらおう必要があります。そうでないと転移反応で気付かれる可能性がありますからね。ちゃんと理由も説明しておきますの。

「お嬢様、お連れしました」

「どうぞですの」

「失礼します」

「……失礼、します……」

扉がノックされ、メイドさんが扉を開けて中に入ってきました。その後ろにはルリルリも一緒です。ルリルリは私の前に立ち、メイドさんは飲み物を用意していきますの。ルリルリの服装はメイド服で、髪形はツインテールですね。11歳の女の子がメイド服を着るとか、ある意味では事案ですの？

「ふむ。何故メイド服なんですの？」

「対外的に使用人という事にしておいた方が都合がいいですから。それにどのようによ扱つかは指示されておりません」

「確かにそうでしたね。メイドなのはわかりました。ですが、彼女は私の妹として扱っ

てください」

「かしこまりました。それでは私は他の子達の面倒を見てきます」

「お願いしますね」

「はい」

メイドさんが出て行ったので、立つてこちらを見詰めてくるルリルリ。彼女の身体は微かに震えていますね。まあ、私が怖くてもおかしくないですの。

「さて、ルリルリのこれからについて、お話をしましょうか」

「ルリルリ？」

「ルリちゃんか、ルリルリ、どれがいいですか？」

「ルリでお願いします」

「わかりましたの。それではルリ。ついてきてください」

「わ、わかりました」

ルリルリを連れて地下へと向かいます。そこなら監視は届きませんからね。そんなわけで入口まで連れてきたのですが、ここでやる事がありますの。ルリルリが止まりました。まあ、目の前に床が開いて真っ暗な穴が現れたら怖いですわね。

「あの、この穴に降りるのですか？」

「そうですの。飛び降りますの」

「……」

「あ、死ぬなんてことはないので大丈夫ですよ」

「え、ま、まさか……」

ルリルリをお姫様抱っこして穴に飛び込みます。50メートルもの深さがあるので、ちよつとした紐無しジャンプですよ。だからか、ルリルリはしっかりと抱き着いてきます。ええ、役得ですわね。

着地すると普通に痛みで死ぬるので、途中で触手を伸ばして速度を落とすし、地面も柔らかくして衝撃を殺します。このタイミングで穴が無くなり、これによって部屋の中は真っ暗になりますが、すぐに灯りが灯ります。

「はい、到着ですよ」

「ここは……」

「わたくしの秘密研究室ですよ。ここなら話してもバレません。ちゃんとジャミングもしてありますし」

ルリルリの服や体内に仕掛けられている監視装置はルリルリ自身のナノマシンでクラッキングして、映像や音声は入れ替えてあります。内容は私がルリルリにエロエロな事をする感じの合成音声ですよ。流星にそういう事をしてる時に入ってこないでしょうしね。

「では、改めて自己紹介をしますの。私はアルフィミー・ブロウニングですの。しかし、その実体はアインスト・アルフィミー。人ではない化け物ですの」

「……異星人、ですか……？」

「そうとも言えるような、言えないような、ですの。私たちアインストは地球に生命を作り上げた存在でもありませんしね。まあ、私とルリの身体は人とアインストのハーフですから、地球人とも言えますわね」

「わ、わたしも？」

「ええ、そうですの。ルリは私が殺し、アインストとして甦らせました」

「もしかして、あの時ですか……？」

「そうですの。あ、この姿ではわからないのは仕方ありませんの」

指を鳴らして様式美である変身シーンを再現して、金色の闇ちゃんに変身してみせませす。

「あの時、助けてくれた人……」

「ルリは間に合いませんでした。ごめんなさい」

しっかりとルリルリの前で頭を下げて謝りますの。

「いえ、他の皆さんが助かったので構いません。それにあの時、私は貴女の物になると決めました」

「それは嬉しいですわね。説得の手間がなくて助かりますし」

もう一度指を鳴らして変身を解除し、アルフィミイ・ブロウニングの姿に戻りますの。
「代わりに妹達を守ってください」

「畏まりましたの。他の皆さんは私が責任を持つてお守りいたします。ですが、それにはルリも協力してくださいることが条件ですの」

「協力、ですか？」

「ええ。正直に言いますが、私は死にたくありませんの」

「それは誰もがそうだと思います」

「まあ、大前提ですわよね。その次に助けたい人を助けたいですし、地球人類を出来る限り守ろうと思います」

「出来る限り……」

「これ、後からバレたら、ルリに嫌われるかも知れませんが、先に言っておきます。私を作ったアインストの女王様、お母様からは人類を調査し、裁定せよとのご命令を受けております」

私から教えるのと、後で状況を知られるのでは全然印象が違いますしね。ただ、完全に心の内を伝える事はできませんの。何故なら、ここには監視役もいますからね。

「その結果次第で人類の敵に回るといふ事ですか？」

「そうですね。そうならない為にも、必要の無い者達……地球の寄生虫だと判断した物は容赦なく殺し、間引きますの」

「間引く……それは……」

「はい。傲慢にも程がありますが、現状ではそれしかありません。力が足りないのだから仕方ありませんの。ご理解とご協力をお願いします。それに助けた子達は最悪、全員をインストールにして生命を繋ぎます。ですから、人類が滅ぶ事はないのです。それだけはなんとか防いでみせます。ですから、協力してください」

「少し、考えさせてください」

「構いませんが、明日までにお願ひしますの。明日か明後日にはここから宇宙に移動します。そこにルリはついてきてもらいますの」

「宇宙、ですか」

「ですの。その宇宙でとつても危険な看過できない兵器が作られております。今回の目的はその兵器の破壊または奪取。そして開発者を死んだ事として救出することですの」

ルリルリの脳内にあるブレインコンピュータへと情報を送信します。送信する情報はカツシユ博士とご家族。それに敵対する事になるウルベやミカムラ博士達の情報も提供します。後、ヴァングレイのデータも送っておきました。それと簡単にアクセスル達の事や監視についても記しておきますの。

「それらの資料に目を通して、覚えておいてください」

「……覚ええました」

「はやっ!」

「この機体に私が乗るのですか? 正直、無理です……」

「あ、機体は乗ってもらいますが、操縦は私になりますの。ルリには火器管制などのサポートをお願いしますね。情報を処理して補正したりしてくれると助かりますの」

「それぐらいなら、多分可能だと思います」

本当にルリルリは優秀で、偽物の私とは全然違いますの。流石、未来で火星のほぼ全域をクラッキングして、機動兵器を停止させる偉業をやつてのけただけはありませんのよ。

「後、話す事は……あ、当然ですが、私達が殺される可能性も高いですの。相手は私達以上の実力者揃い。ましてや無茶と無謀を超えてくるような連中まで居ます。ですので、急ぎつつも隠密行動で技術と力を手に入れる必要があります。ちなみに我が陣営は私とルリの二人だけですのよ」

「……ダメダメじゃないですか……」

「まあ、これから増やしていきます。ですので、妹さん達を引き込んで構いませんの。むしろ、私としてはそちらを推奨します。緊急時、アインスト化しているのとしていな

いのでは戦力の比率が違いますし、助ける優先度にも変化がでます。まあ、その辺りはルリに任せますわ。後……ルリの妹さんの名前は誰ですか？」

「ラピスです」

「ね、年齢は？」

「8歳です。ちなみに血は繋がっていません。ただ、私と同じコンセプトで生み出されて改造されています」

ラピス。ラピス・ラズリ。機動戦艦ナデシコく The prince of Darkness に登場するヒロインです。ルリと同じく、遺伝子操作によって生まれた紫色の髪の毛にルリルリと同じ金色の瞳を持つ少女。火星の後継者によって拉致されていたところを彼等を追っていたアキトによって発見、救出されました。その後、感覚を失ったアキトをサポートするために行動を共にするようになります。

作中ではほぼ全て無表情かつ無口で、感情が無いような無機質で抑制的な雰囲気醸していましたが、決して感情が無い訳ではないようです。原作では11歳ぐらいでしたが、劇場版の3年前だと考えると確かに8歳くらいになりますね。

「わかりましたの。では、その子を含めて私の妹になってもらいましょう。ですから、ルリはこれからルリ・ブロウニングですわね。ラピスはラピス・ブロウニングでお願いしますの。それと私の事はお兄ちゃんと呼んでくださいな♪」

「え？ お兄ちゃん？ お姉ちゃんじゃなくて？ 馬鹿なんですか？」

「ち、違いますの。私の心は男なんですのよ。ですから……」

「外で呼んでは不味いのでは？ 聞きましたが、ブロウニング家は格式高いお家ですし

……」

「……お姉ちゃんでお願ひしますの。ああ、でもやっぱりルリルリにお兄ちゃんと呼ばれるのも捨てがたい……」

「やっぱり馬鹿です」

「ぐふっ」

「はあ……二人っきりの時はお兄ちゃん、それ以外の時はお姉ちゃん、いいですか？」

「それでお願ひしますの」

くっ、ルリルリに呆れられてしまいました。まあ、仕方ありませんね。だって、男の子だもの。可愛い妹、それも義妹なのですから、仕方ありません。ルリやラピスが妹なら、猫可愛がりする自信がありますの。そんなわけで抱き着いて思いつき撫でてあげますの。こうしていると、レモンお姉様が私の頭を撫でてくる気持ちはよくわかります。

「鬱陶しい、です」

「我慢するですの。現状、ルリが私の癒しなのですから」

「……選択肢、間違ったかもしれません……」

「残念ながら強制イベントですので、諦めてください」

「……ばかばつかです……」

「私だけじゃないんですの？」

「……受け入れている私も馬鹿ですから……」

「なるほどですの。つと、そろそろ戻りますよ。休憩時間は終わりなので、訓練に戻りますの。ルリは好きに過ごしてください構いません」

「わかりました。ラピスのところに行つてから戻つてきます」

「何か有れば連絡をください。最優先で対処しますから」

「お願いします」

ルリルリを抱き上げて天井から蔦を伸ばさせ、それで運んでもらいますの。外に出たら、早速、シミュレーターに移動します。

「頑張ってくださいお姉ちゃん」

「はいですの」

ルリルリは出て行きましたが、彼女の応援のおかげでやる気百倍なので頑張りますの。あ、レモンお姉様に副座式にするように連絡を入れておきますが、怒られました。私達は小さいのでスペース的には問題ありませんが、作るのが大変みたいです。一日や

二日で用意できるわけがありませんものね。そう思っていたのですが、普通に用意できるらしいのでお任せしました。ただ、ソフトに関してはお私の方で対応しないといけない事になったので、頑張らせてもらいます。

「さあ、お姉ちゃんとして頑張りますの!」

とりあえず、集団戦闘ができるようにターゲットを出現させて停止した状態からの狙撃や回避しながらの射撃などを訓練していきますが……停止状態は問題なく微調整を繰り返せば命中させられます。

こちらは精密機械のような物ですから、データさえ取ればどうとでもなりますが、流石に戦闘経験がないので最適な殲滅ルートとかわかりません……それなら開発してしまえばいいではないですか。

そう、禁忌の未来予測システム。あのウイングガンダム・ゼロに搭載されていた Zoning and Emotional Range Omitted System を作れば勝手に機械が最適な殲滅軌道を計算してくれます。

超高度な情報分析と状況予測を行い、毎秒毎瞬無数に計測される予測結果をコクピットの搭乗者の脳に直接伝達するインターフェースです。

また、コクピットの高性能フィードバック機器がパイロットの脳をスキャンし、神経伝達物質分泌量を制御し、急加速や急旋回などで起こる通常の人間では決して耐え切れ

ない衝撃を緩和、または欺瞞させ、通常不可能とされる制御行動が可能になります。この機能を搭載した機体は他の機体と一線を画す驚異的な性能を保有できました。

ちなみにこのシステムは基本的に相手を倒す事を目的としたもので、目的達成のためならば人道や倫理などお構いなしで、他人や仲間の犠牲、更には自分の自爆ですら躊躇せずひとつの可能性として提示します。やばいのです☆

それに未来を予測できるほどとてつもない情報量は、精神力の弱い者には、時に現実なのかシステムの予測なのかわからなくなるほどのものでして、パイロットの精神的負荷は計り知れません。そのため、ゼロシステムに精神が負けてしまうとシステムが提示した行動のまま暴走を始めるか、耐え切れずに精神を破壊され、最悪死に至る可能性まである危険な代物です。

ですが、アインストであり、身体がナノマシン化しているアルフィミイちゃんには一切関係がありません。所詮は人間を乗せる事を前提としたシステムなので、どうとでもなるでしょう。

「早速作ってみますの」

高速で組み上げてみましたが、普通に使えませんでした。模擬戦データで敗北しましたし、そもそも経験値が足りませんでした。ですので、仕方ありませんが、経験値を溜めさせる事にしました。自動で模擬戦をし続けるシステムを構築し、私の身体データ

とヴァングレイのデータを入力しました。

とりあえず、高速化した仮想の宇宙空間で100戦ずつ一気にやらせましょう。シミュレーターを二つ使い、どちらもネットワークから切断して争い合わせます。戦闘の経験が溜まれば自動更新されるシステムにしたので、延々と強くなっていけます。最初は一对一、次に一对複数でやります。

やってる事はナルトの多重影分身ですわね。だって、ゼロシステムが経験した戦闘データは全て私に適応させるので勝手に強くなります。もちろん、ソフトを超えるような連中はゴロゴロしているので、その人達と戦う時を考えたら、自動戦闘に頼れないので自力を鍛える必要はあります。ですが、新兵としたら充分ではないでしょうか？

ちなみに模擬戦に入ってるデータはアクセルのもあるので、そちらも使わせてもらいます。あ、地球連邦軍にもクラッキングしてキョウスケのデータをもらいましょう。吸いだされているはずですがものね。よくよく考えたら、手っ取り早く強くなるのってキョウスケのデータをインストール経由で貰えば手っ取り早いのです。

アルトアイゼン・ナハトを量産して、インストール・ヴォルフに改造するのもいいですわよね。というか、あちらがアルトアイゼンを使うなら、こちらはヴァイスリッターを使うのもありですわね。ライン・ヴァイスリッターの量産部隊。すぐくかつちよいですの。

まあ、前衛が少ないのでやっぱりアインスト・ヴォルフは必要ですわね。この二機を連携させたアルフイミイちゃんの意味で動く無人機部隊。対処は結構、簡単そうですね。何に置いてみずヴォルフを飛ばさないといけませんし。

まあ、この辺りは捕らぬ狸の皮算用なので、放置しますの。ただ、採用されなかったヴァイスリッター自体がどうなったのかはわからないので、調べて手に入れてみましょうか。

ああ、それとケンゾウ・コバヤシ博士の研究所には襲撃をかけないといけませんわね。T-I-N-Kシステムがないとせっかくの念能力が意味ありませんし。機体の操作はIFSで可能ですが、思念の増幅度次第では触感に近い第六感が広範囲にわたって展開され、空間内に存在する敵機の捕捉も可能となりますので便利です。ASRSすら見破れますしね。それに念動フィールドも使えるので是非とも欲しいです。

それにやっぱり武器を飛ばして攻撃するのはロマンですの。あ、ロマンといえば刀も欲しいですわね。ペルゼイン・リヒカイトが使う鬼蓮華とか、作るのは大変そうですの。そうなるにあの人に弟子入りするべきですわね。後、Gガンダムが入っているのなら、マスターアジアに東方不敗を習うのはありかもしれません。やれやれ、本当にやる事が多すぎますの。でも、止まるんじゃないやねえぞ、ですの。やってやりますわよ、団長！

第12話

ルリちゃんと別れてからレモンお姉様に副座式について相談した後、ただひたすらヴァングレイに乗って訓練です。ゼロシステムが体験した模擬戦のデータを自らの経験として適応し、実際に機体を動かしていきましたの。

何十、何百、何千、何万という模擬戦を経験したデータなので技術力はかなり上がりましたが、その程度ではアクセルやキョウスケ達には勝てませんの。ぶっちゃけ、数万のほとんど全部が私の負けですの。それも開始から数分でコロコロされちゃいます。

やっぱり、あの二人は真正銘のエースパイロットですの。本物のアルフィミイちゃんなら勝てるかもしれませんが、偽物の私ではこんなものかもしれません。それでも諦める事はできそうにありませんし、諦めた時点で全てが終わりですの。

「あの、お姉ちゃん……時間って、メイドさんが……」

「ん……わかりましたわ」

ルリルリの声で画面を見れば、メイド服から白いワンピースになった彼女が映し出されていましたの。その横にある時間を確認すれば、すでに時刻は朝七時。つまり、昨日

の夜からぶっ通しでシミュレーターをやりまくっていたみたいです。効率を考えたら休まなくてはいけません、仕方ありません。

シミュレーターの外に出て、ルリルリの方を見ると彼女はタオルを差し出してくれましたの。

「シャワーと着替えをしてから朝食を食べてくださいって言われました」

「わかりましたわ。ルリはもう食べましたの？」

「まだです」

「でしたら、すぐに入ってきてきますから一緒に食べましょう」

「はい。あの、ラピスもいいですか？」

「構いませんよ。あの子も私の妹ですからね」

私の言葉にルリルリがほっとしたような感じがしました。表情は変わっておりませんし、よくわかりませんが追々わかるようになるでしょう。

食事を食べるためにさっさとシャワーを浴びてから、ルリルリとラピスの二人と一緒にご飯を食べます。食堂で出会った幼いラピスはラピスでとても可愛らしく、無表情の人形みたいです。情緒教育はしっかりとしないといけませんね。ルリルリもですが。

「あの、この子がラピスです」

「そうですか。アルフィミイです。これからよろしく願いますね、ラピス」

「……ん……」

しやがんで視線を合わせながら伝えると、ラピスもしつかりと頷いてくれました。本当に可愛いのでついつい、撫で撫でてしまいます。この子達を実験体として扱うなんて、どうかしていますの。

「お嬢様、時間がないので早く食べてください。この後、レモン様の所に向かい、少ししてから宇宙へと行かれるのでしょ？ 準備に時間がかかりますよ」

「それもそうですわね。本日の朝食はなんですか？」

「フレンチトーストとハムとレタスのサラダ。コーンスープ。フルーツのデザートでございます」

「そういえばお米とかはありませんの？」

「お米……アジアで食べられているものでしたね」

「日本料理、和食が欲しいですの」

「でしたら、ご自身で取り寄せてください」

「むう……」

まあ、そろそろ日本を調べないといけない時期になっておりますの。本当は怖すぎてもつと後回しにしたいのですが、そうも言つてられませんね。そもそも魔境である事が確定している日本を調べたら私の精神が絶望に染まりそうなので放置してきましたが、

ルリルリとラピスの加入で癒しがあれば頑張れる気がしますの。

「それでは取り寄せておきますの」

フレンチトーストをナイフとフォークで食べて牛乳を飲みながら、同じく食事をして二人をみますが……テーブルマナーが全然です。ラピスはほぼ手掴みで、ルリはフォークで突き刺して食べています。これが本物のメイドなら注意するんでしょうが、ここに居るメイドさんはなんちゃつてのメイドさんで、本職は軍人ですからね。

「テーブルマナーから教えないといけませんのね」

「ごめんなさい。教えられていなくて……」

「構いませんですの。手取り足取り、しっかりと教えてさしあげますわ」

まあ、実際に教える手間はありません。ルリルリはマナーの教本データをあげたら後は覚えてくれるはずですよ。問題はラピスですね。

とりあえず、ラピスを膝の上に乗せて食べ方を教えていきますの。

「(う)う……う……」

「はい、そうですね。よくできましたの」

教えた通りにできたら、ラピスの頭を撫でてご褒美にメロンを食べさせてあげます。すると少し嬉しそうにしました。

「ルリもあ〜んですの」

「あ、あくん」

ルリルリにもメロンを食べさせてあげます。どんどん教えていき、成功したらご褒美をあげます。褒めて伸ばすのが私の教育方針ですからね。

「お嬢様。本日の予定は基地へと向かい、そこで機体の受け取りと実機での訓練を行います。また、治療途中の子供達を連れて行き、レモン様の研究施設へと預ける予定です」
「そうなん、ですか？」

「ああ、大丈夫ですの。ここでは治療用の設備が整っていないので、お姉様の所で治療します。様々な薬物が使われていますので、早めに治療しないと大変ですからね。それとラピスも一時的に預けます」

「え？」

「これから向かうコロニーは危険な場所ですからね。巻き込まれたら死んじやいますの。ですから、安全な基地に居てもらおうと思いますの」

「確かにそうですね。でも、その……」

「ああ、お姉様は大丈夫ですの。それにどちらにせよ、ラピスも治療しないといけませんのよ」

「わかりました。ラピス、大丈夫ですか……？」

「……平気……」

ラピスも頷いてくれたので、これはよしですの。ルリルリの方はやはり心配そうですが、こちらはこちらで対応しないといけませんの。

「二応、ラピスとは毎日連絡を取り合えばよいですの」

「いいんですか？」

「構いませんの。どうせ定時報告はしないといけませんから、その時にレモンお姉様に連れてきてもらいますの」

「ありがとうございます」

「ふふ、それじゃあ……」

「お嬢様、もう時間です。車を表に回して来るので手早くお願いしますね」

「わかりましたの」

食器を下げてもらってから、三人で歯磨きをして着替えをしますの。私は黒いワンピースで、ルリは黒いゴスロリのワンピースドレスで、ラピスは白いワンピースドレスですの。

その状態で用意されたリムジン・アルファディアに乗り込みますの。横座りになつている席に座り、隣にルリとラピスに座ってもらいながら、二人の頭を撫でて楽しみます。そうじゃないと心が折れる可能性が高いんですもの。

「ん」

「もつと……」

「任せてくださいですの。ここがよろしいですの？」

「そこがいい」

「わ、私は……」

可愛いいルリとラピスを可愛がりながら、脳内にナノマシンで作成されているブレインコンピュータを使い、無線でネットワークに接続。連邦政府の内部データに教えてもらっているシャドウミラーのコードで接続し、極東……日本にある研究所を調べますの。

まず、高確率で存在している光子力研究所……ないですの。やった、これでマジンガーはないですの！ あれ、日本の近くに変な島が存在しますの。これは重力障壁ですの？ 内部情報が一切不明ですの。とりあえず放置しますの。

次、ゲッターロボの研究所、早乙女研究所は……存在しました。つまり、恐竜帝国は存在しているので、皇帝ゴールは存在していますの。さて、ゲッターがどのステージかわかりませんの。コレが真が終わった後なら大変ですが……地球連邦に情報があるはずなので、そちらにアクセスします。どうやら、ゲッターは火星に向かっていて、消息不明らしいですの。あれ？ やばい、やばいですのおおおっ！

「どうしたの？」

「震えますが……」

「だ、大丈夫ですよ。ええ、アルフィミイちゃんは大丈夫ですよ……」

島はわかりませんが、ゲッターは少しだけわかりますの！ これ、ゲッターエンペラーが人類以外を滅ぼしに来るフラグですよ！

ゲッターエンペラーは超未来でゲッター軍団を率い、人類以外を滅ぼす規格外のゲッターロボ。劇中では拓馬達が飛ばされた未来の戦場から30光年ほど離れた所で戦っているとのこと。操縦や変形にパイロットの世代交代が必要なほど巨大であり、インタビュによると大きさは太陽系と同程度と言われております。アンドロメダ流国が地球に侵攻する直接の原因でもあります。

劇中で全ての武器が登場することはありませんでしたが、ゲットマシン一機に相当する艦の砲撃が敵艦隊を惑星ごと破壊し、ゲッターチェンジの予備動作がビッグバンに匹敵するエネルギーと計測不能な量のゲッター線を放出しました。当然、周囲の星々を砕きながら合体完了。アンドロメダ流国との戦況を終結させることになりましたとき。そればかりか艦の特攻に数十回耐える強固なシールドや未来予知の能力まで持ち合わせていますの。エンペラーを構成する三隻のほかにも巨大なゲッター戦艦と呼ばれる母艦が運用されているらしいです。

勝てるかですのおおおつ！

ええ、相手は太陽系と同程度つてなんですの！ 化け物にもほどがありますのよ！

こんなの、ゲッター線を克服するしかありませんの。いえ、ゲッター線自体を崩壊させるのもありですの。どちらにせよ、ゲッター線をどうにかする為に研究しないといけませんの。

とりあえず、最低でもこちららも時間軸の移動方法を覚えなければいけませんね。最悪、逃げ続けながら力を蓄えるしかありませんし。

他に、変な組織は……NEERV^{ネルフ}がありましたの。地球連邦政府直属の超法規的武装組織。汎用人型決戦兵器・人造人間エヴァンゲリオンを保有し、人類の敵、使徒の調査と研究、そして殲滅を主要任務としているようです。

使徒の襲来によって予測され得るサードインパクトを未然に防ぐという大義名分の下、国連から広範囲な特権を与えられており、使徒殲滅作戦時には国連および日本政府から戦闘指揮権のほぼ全てを委任されている他、戦略自衛隊の試作兵器の徴発、事後処理である報道管制など、様々な超法規的措置を行う権限を認められていますの。

その一方で、上位組織である秘密委員会・人類補完委員会を通じたゼーレによる人類補完計画遂行のための組織という裏の顔も持ち合わせている。ただしこれは極秘事項であり、一般大衆はもちろんNERV職員達もこの事実を知らされていません。

本部は第3新東京市の地下空間に位置し、米国に第1・2支部、ドイツに第3支部を

擁し、その他にも中国など世界各国に支部を持ちます。また、長野県・松代の第2実験場など関連施設も数多く存在しているらしいです。

使徒さん、こんにちはですの！ お願いですから帰ってくださいなんでもしますの！

「ひいひいひい」

これでマクロスまであるなんてことは流石に……あれ、移民船団計画が地球連邦政府にありますの。それも、インスペクターの技術を使って巨大な都市宇宙船を作るって計画が……良かった。こちらは頓挫しておりますの。

地球はこれぐらいで宇宙は……というか、火星はどうなってますの？

火星……地球連邦政府からの締め付けや腐敗した事もあつて火星は搾取されていきます。そのため、火星ではレイレガリア・ヴァース・レイヴァースを中心として独立する運動が活発化しており、もうまもなく独立を宣言する可能性があるとの事。なお、火星人はほぼIFSを持ちが多いです。そのため、ブルーコスモスを中心に嫌われておりますの。

はい、これで火星のヴァース帝国が確定しましたの。レイレガリア・ヴァース・レイヴァースは古代火星に存在した高度文明の管理システムから「継承者」として認められ、軍事的・政治的に強大な力を得ることになりました。その超古代火星文明から得られた

アルドノアという動力に関する利権をめぐり、経済的な圧迫を加える地球側に反感を覚え、ついに開拓民を扇動して帝国を建国したはずです。こちらでもたいして変わらないみたいですよ。わっふー！

ちなみに火星で、古代文明ってどこかで聞きましたわね。具体的にはナデシコとか、ナデシコとか！ つまり、連中はボソンジャンプを既に手に入れてる可能性がariusです。火星の後継者？ そんなちやちな連中じゃありませんの。もつと恐ろしくなっておりますのよ！

さて、肝心の木星はどうなっていますの？ 流石に地球連邦政府にもほぼ情報がありませんし、ネットワークも繋がっておりませんの。

それにここは宇宙世紀のガンダム世界ではないので、クロスボーンやシロツコなんていませんの。でもでも、木星って太陽炉が作れたりもしますのよね？ ないですよね？ 流石にSEEDとOOの共存とか止めてやがってくださいね！

イオリアは流石にいませんよね？ お願いします、居ないでくださいですよ！ もうお腹いっぱいですよ！

検索結果 イオリア・シュヘンベルグ。結果、一件。

ああ、もう、これで宇宙金属生命体ELSも確定ですよ。まあ、まだ出会っていませんし、大丈夫ですよ。しかし、この世界……ガチで終わってませんか？ ガンエデンにイ

ンスペクター、エアロゲイターなどなど。地球は比較的、ましですか？

あ、OOがあるのならPMCも調べないと……うわあ、ミスリルとかもありますの。フルメタルパニツクも確定？ 流石にもうない……いや、あってももう知ったことじゃありませんの。この魔境は諦めて次の世界に逃げた方が絶対に無難ですの！ もうお家かえりますのおおおつ！ 帰れませんけれどね！

第13話

さて、続いては南極ですの。ここにはとくても危険な物があるはずですよ。というのも、月と同じでスーパーロボット大戦では南極は色々とありますの。

まず一つ目が南極にあるコーツランド基地で行われた地球と異星人との会談が、グランゾンに搭乗するシュウ・シラカワの反乱によって決裂した南極事件。

こちらは地球に落ちた隕石、メテオ3から得られた超技術EOTを管理していたEOT特別審議会。彼等はメテオ3を落とした異星人が本格的に地球に攻めて来た場合、到底勝ち目はないと判断。和平交渉ではなく、無条件の完全降伏をするべきと主張したのでした。しかして、彼等の目的は審議会が無条件降伏を果たした功労者と異星人側に認められれば、異星人支配下の地球で審議会が特権階級につくことでした。そのため地球の情報を沢山売りましたが、結果はエアロゲイターを装ったゾヴオークでした。ちゃんちゃんですの。ゾルダーク博士とシュウ・シラカワ博士に滅ぼされて当然ですよ。

二つ目。地球とセフィールの境界がスーパーロボット大戦Tでは生まれ変わったらしいのですが、詳しくは知りませんの。

三つ目。これが本題。フェリオ・ラドクリフ博士らリ・テクノロジスト達の手によって南極遺跡の最深处で発掘されました。ここにはこの世界と異次元とをつなぐ門、クロスゲートやファブラ・フォレースと呼ばれる物が存在していたのです。

彼らが意図せずしてファブラ・フォレースを起動してしまったため、門を通じて別世界からルイーナが出現しました。このルイーナは異次元のエネルギー生命体が生み出した勢力で、ファブラ・フォレースを拠点に指揮官に当たるメリオルエッセを使役し、世界各地に基地を敷設して兵器を製造しては、人類やその施設に攻撃を仕掛けていきました。

彼らの目的は破滅の王と呼ばれる存在をこの世界に現出させること。そして破滅の王が顕現するとルイーナもろとも宇宙の全てを滅ぼします。ルイーナ自体はそれを目的として生み出された仮初の存在のためその事に疑問を持つていないのです。

以上の事を持ちまして、基本的に南極もやばいのです。なので、とりあえずフェリオ・ラドクリフ博士達が存在しているかを確認します。はい、確認が取れました。現在、遺跡を発見したばかりのようです。

破滅の王とか、ゲッターエンペラーと戦って滅ぼし合ってくださいですの。と、言いたいのですが……正直、ルイーナとか邪魔なのでさっさとぶち殺しておきましょう。運が良ければ、ジヨシユア・ラドクリフやクリアーナ・リムスカヤは生き残れるのです。

はい、ごめんなさい。主人公とはいえ二人と地球どころか世界の生命を考えると……安全策を取らせていただきますの。というわけで、お母様。エマーゼンシーですの。『破滅の王か。この世に顕現させるわけにはいかぬ。そのファブラ・フォートレスは破壊するか』

『破壊はいけませんの。取り込んで別次元に隔離しておきましょう。それと起動せずに解析して、永遠に封印しちゃってください。我々アインストなら可能ですの』

『いいだろう。破滅の王を封印している力は興味深い』

『よろしくお願いいたしますの。ああ、そこに居る人達は汚染されていなければ適当に放りだしておいてくださいですの。汚染されていたらこちらで精神支配をして、それでも無理なら滅しておいてくださいですの』

『面倒だが、いいだろう』

さて、これで南極の対処は終わりですの。後は経過観察だけでよろしいでしょう。他に危険な場所は……やっぱり月ですの？ 一応、調べた限りはマオ・インダストリーの会社やイスルギ重工の会社があつたりしますね。もちろん、地球連邦軍の施設や都市もあります。あ、地球連邦政府がムーンクレイドルの計画を始めておりますの。アースクレイドルも一緒ですか。ここから数十年、数百年したら、月は出ているかって遊びが出来ますの。

「到着しました」

「お疲れ様です」

メイドさんが基地内に入り、車を止めて扉を開けてくれたのでルリ達と一緒に出ますの。建物の入口には驚いた事にレモンお姉様とアクセルがいますの。ですので、ダツシュしますの！

「レモンお姉様！」

「あら」

レモンお姉様にダイブすると、ちゃんと受け止めてくれました。柔らかく大きな胸に顔を埋めて心を落ち着けますの。

「どうしたのかしら？」

「ちよつと、絶望的な事が色々と判明していますの。ぶつちやけると、火星がマジヤバですのよ？」

「火星？ 確かにきな臭いけれど、そこまでなの？」

「こちらの情報では建国までされますの。そして、そこから戦争ですわ」

「戦争か？ だが、地球連邦軍と火星の軍事力じゃ差は圧倒的だぞ。例えばプラントを味方につけてもな」

「アクセル、知ってますか？ 基本的に勝ち目のない勝負をする人はいません。それに

火星にはアレがあるじゃないですの」

「古代文明の遺跡ね。確か、アルドノア・ドライブだったかしら。アレは結構なエネルギーを生み出すし、安全なのよね。プラズマジエネレーターより、汚染される可能性は少ないわ」

「ちなみにそのアルドノア・ドライブの他にも火星には特殊技術があるはずですよ。それは月面にあるハイパーゲートが証明していますの」

「月面で発見された地球圏と火星間の相互瞬間移動が可能な古代文明の遺産ね。まさか、異星人みたいに転移攻撃を仕掛けてくる可能性があるの?」

「そうなたら、大変ですって話ですよ。まだ実用化はされていないと思いますが、遺跡からその技術を得ている可能性も否定はできません」

「……まあ、可能性の話だ。まだきな臭いってだけだ」

アクセルはそう言いますが、端末を取り出して色々と指示を送っております。ちなみにこの月面にあるハイパーゲート。戦争開始時に暴走して月の半分をふっ飛ばしますの。可哀なお月様ですわね。

「ところで、そつちの二人を紹介してくれるかしら?」

「はいですの。こちらは妹にしたルリとラピスですよ」

「そう。ブラウニング家を名乗らせるのかしら?」

「そうしようと思っておりますが、大丈夫ですか？」

「優秀なら問題ないわ。養子としておけばいいだけだし」

「ありがとうございますの」

「あ、ありがとうございます……」

「……あり、がとう……」

「いいのよ。私はレモン。よろしくね」

二人とは問題ないようですわね。一応、ルリとラピスのデータは送信してあるので、ラピスはともかく、ルリが優秀だという事はレモンお姉様もわかっていきます。

「それで、急に副座式にして欲しいと言われたけれど……」

「流石に無理でしたの？」

「いいえ、したわよ」

「え、マジですか!」

「といっても、別のパーソナルルーパーに使われていた副座式の奴を無理矢理あの機体……ヴァングレイだったかしら、アレに組み込んだからOSとかソフトは無茶苦茶よ。そっちの修正は自分でなさい。全方位モニターと子供用のリニアシートを使えるようにするまでが限界だったわ」

「充分ですよ」

「ちなみに突貫工事だから、どうなるかは保障できないの。だから、必ずパイロットスーツを着なさい。空気漏れで死ぬなんて可能性もあるから絶対よ」

「りよ、了解ですの」

とりあえず、ヴァングレイにIFSを実装して、コクピット周りを改造しないといけませんね。無線と有線、どちらがいいか、悩みますが……やっぱり有線ですの。無線だと妨害されたら終わりですしね。

「言われた機械は用意してあるから、そちらは好きにしてちょうだい。それで治療しないといけない子達はラピスとあの子達ね」

「はいですの。事前に渡したデータ通りの薬品が使われているはずなので、どうかお願いしますの」

「任せなさい。それとIFSのデータは逐一報告してちょうだいね」

「もちろんですの」

シャドウミラーとしても、IFSの技術情報は欲しいはずですの。それだけ、パイロットとしてこの技術は便利ですよ。まあ、火星に居る相手も使ってきますの！

「じゃあ、その子達を連れていくから……アクセル。格納庫にアルフィミイちゃん達を連れて行ってちょうだい」

「ああ、わかった。こっちだ」

「わかりましたの。ルリ……は、ラピスについていくといいですよ」

「いいんですか？」

「こちらは私一人でもなんとかなりますしね。最初はラピスも不安でしょうから、そちらの方がいいでしょう」『ただし、ルリの身体は調べさせないように願いますの。貴女の身体にはアインストが含まれております。それがバレるのはいささか困りますので』

「わかりました。ありがとうございます」

「おい、早くしろ。置いていくぞ」

「あ、待ってくださいですの！」

慌ててアクセルの後を追っていくと、大きな格納庫に到着しました。そこには無数のロボット達、パーソナルトルーパーやアーマードモジュールが並べてあります。それを見るだけでもワクワクしてきます。こればかりはこの世界に転生して嬉しい事です。敵勢力は地獄でしかありませんが。

「こつちだ」

アクセルに呼ばれて地下へと移動していきますと、そちらにも大きな格納庫がありました。そこには骨組みされた機体があります。

「コイツがお前の機体だ」

「これが実物のヴァングレイ……最高ですが、まだちゃんと出来ていませんのね」
「誰かさんが副座式がいいと言ったからな」

「ごめんなさいですの」

「まあ、こんな無茶な機体なら二人で運用するのがいいだろうさ。それにIFSだったか。思考で操作できるのなら、この無茶苦茶なコンセプトもどうにかなるだろう」

「まあ、贅沢を言うならリボルビング・ステークとスーパーパーニアが欲しいですわね」
「お前、どう考えてもぶっ壊れるぞ」

「問題ありませんの」

リボルビング・ステークはアルトアイゼンの物で、スーパーパーニアはトールギスの物になりますの。まあ、今は必要ありませんし、パーツの耐久性を考えると空中分解しそうで怖いのですの。ちなみにトールギスの加速は15G以上でマツハ2を軽く超えて回避行動とかがしますのよ。如何にライトニングカウンタが化け物かわかりますわね。

「射撃系のするものじゃねえな」

「でも、この重装甲なら行けそうですの」

「確かにな」

ぶっちゃけるとヴァングレイってアルトアイゼンに射撃武器満載にしたようなものですしね。目指すなら、どちらもできる機体がいいですわね。幸い、乗るのはアルフィ

ミイちゃんとルリちゃんですので、どちらもアインストの力で強化されておりまして、まあ、ルリちゃんはスーパーバーニアまでつけたら無理かもしれませんが……おいおいなれてもらいますの。

「さて、案内はした。後は乗ってシステムを弄ったり、改造したりは好きにしろ。俺はヴィンデルに報告してくる。それとさっきの情報は信憑性はどれぐらいだ？」

「高確率といたいたいです、予想も多分に入っておりますので詳しい事はわかりませんの。でも、来るなら月面が大変な事になるのは確実ですよ」

「一応、月面基地には警戒するように伝えておく。じゃあな」

「あ、アクセル。貴方のライバルになりそう……いえ、貴方を超える化け物を見つけたので、そのデータを送っておきます。模擬戦を繰り返すといいですよ」

「ほう……面白いじゃねえか。楽しみにしておいてやる。もし嘘だったら、覚悟しておけ」

「アクセルこそ吠え面を拜んでやるから、覚悟しておくとよろしいですよ」

「なら、賭けるか」

「いいですよ」

賭けは普通に食事を奢ってもらおうとかではなく、模擬戦を頼んでおきました。経験値が欲しいので、訓練をいっぱいしたいですからね。後、子供達の安全も欲しいので、ア

クセルを煽って両方認めさせましたの。まあ、あちらのお願いを何でも聞くことになりましたが、問題ありません。だって、用意したのはベーオウルフになったキョウスケのデータですもの。つまり、アインスト化してますのよ？

「これで契約成立ですの」

「ああ……ん？」

いきなり警報が鳴り響きましたの。アクセルはすぐに壁にある端末を操作して、オペレーターを呼び出しました。

「何があった」

『南極で大規模な転移反応を確認しました』

「識別は？」

『アンノウンです。現在、現地の部隊と交戦中とのことですが……全滅するのは時間の問題ですね。基地にある戦力が戦艦一隻とパーソナルトルーパーとアーマードモジュールを合わせても50機前後です。それに対して相手は700を超えているそうです』

「約14倍の戦力差か。これから俺も指揮所に向かうとヴェインデルに伝えてくれ」
『かしこまりました』

どうやら、お母様も本気を出しているようです。まあ、相手が相手ですから仕方あ

りませんね。まあ、私には関係がないので、ヴァングレイちゃんを改造していきますの。「すいません、機械の使い方をレクチャーして欲しいですの」

なので、白衣を取り出してフリルのついた黒い肩紐ワンピースの上から着て、近くに居た人に機械の操作方法などを聞いていきますの。

一時間ほどで全ての操作方法を教えてもらいました。教わった内容は音声と映像を全てナノマシンで作り上げている補助脳、ブレインコンピュータによって録画してあるので見返しながらやれば問題ありませんの。

さて、ヴァングレイは一応、外側は完成していますので、コクピットの中に入って色々と弄ります。リニアシートの手摺部分を一部切り落として、そこにIFSを機体に伝える機械を溶接して、コードをコクピットの下にあるハッチを開けて内部の回線に接続。

それから基礎プログラムを手動で書き換え、機体の操作方法を手動とIFSによる二つの方法でできるようにしますの。次にもう一つの椅子の方もしつかりとしておきます。

「しかし、なんで全方位モニターだというのに椅子の位置は両方、前を向いているんですの?」

どう考えても副座式なら一人が前、もう一人が後ろを向いていた方が死角が潰せますの。まあ、全方位モニターが新技術というのなら、納得ですが。むしろ、球体のシート

にして動かせるようにすれば全方位を確認できますし、そちらの方がいいかもしれません。酔ったりするかもしれないが。

どちらにせよ、これでIFSは適応できましたので、開けていたハッチを閉じてからリニアシートの接続した部分で怪我をしないように滑らかにしておかなくてはいいけませんの。ルリちゃんの柔肌に傷がついては駄目ですよ。

「アルフィミイさん、組み終わりました。実際に腕とか動かして試してみてくださいませんか？」

「はいですよ」

リニアシートに乗って、機体の動力が問題ないかを確認してから機動しますの。次に手動で動かしてみます。操作方法はシミュレーターで覚えていきますので問題ありません。普通に動いて両手をにぎさせます。問題なしですよ。

最後にIFSで操作してみますが、思考と同時に動かす事はできませんでした。反応速度が鈍かったからです。IFSの感度を上昇させると、性能自体を上げるしかありません。それでも手動で操作するよりは断然速いですが。

『次は歩行訓練を行います。拘束と連絡通路を動かすので気をつけてください』

「畏まりましたの」

モニターの一つに映った整備の人に言われた通りに行動します。今度はIFSで動

かしてみますが、足が動かないので、プログラムにミスがあったようです。ですので、そちらを速攻で修正します。そうすると別の所もおかしくなって……二時間ほどかかってどちらのリニアシートからでもIFSと手動、どちらの操作も可能になりました。沢山の研究者を取り込んだだけあって、アルフィミイちゃんの技術力はうなぎ登りですの。

本当は機体にゼロを搭載する事も予定していましたが、流星にそれを搭載するとすると最初から設計し、作り直さなくてはいけないのでブレインコンピュータ内のアプリとして入れておきますの。これならパイロットである私とルリルリは問題ありませんからね。

それにしても、本当にゼロシステムは実装した方がいいかもしれませんの。だって、よくよく考えると……火星の騎士ってほぼ全員がIFS搭載機で来るんですよ？

中にはボソソジャンプまでしてくるんですから、機体の性能と操作性、どちらも上とか悪夢じゃありませんこと？

機体の性能は微妙かもしれませんが、それでも操作性で負けている話は話にもなりません。数だって相手は無人機を使ってくるでしょうし。ふむ。いっその事、火星側に味方として潜入するのもありですわね。古代文明の遺跡に接近してしまえば勝ちですし。まあ、その前に月にあるハイパーゲートが欲しいですの。

『こちらでは問題は確認できません。そちらはどうですか?』

「こちらにも問題ありませんの」

『では、外で走ってみましょう。次に武装のチェックです』

「了解です」

機体を格納庫から地上に移動させるため、エレベーターに乗せますの。そこから地上に出て歩いたり、走ったり、射撃をしたりといったテストを行っていきます。しかし、一人で動かして装備を選択していくのは面倒です。ナインのサポートが必要だということもわかりますの。

ルリルリには悪いですが、私と一緒に乗ってもらいますの。それに戦艦が用意できるまではラピスも乗せる事を考えないといけないかもしれないかもしれませんね。

◇◇◇ 南極 連邦軍基地 レフィーナ・エンフィールド

ダンディライオン二号を抱いて寝ていたら、警報の音でたたき起こされて急いでモニ

ターがある場所まで移動し、電源を入れます。

「何事ですか！」

『艦長、大規模な転移反応が南極で確認されました』

「インスペクターですか？」

『彼等が使う転移反応とは違います。まったく別の勢力かと思われま』

「わかりました。規模はどうなっていますか？」

『不明ですが、艦隊規模のようです』

「そんな……こちらの戦力はあまりないのでですよ！」

『基地指令が既に救援要請を出しました。ヒリュウ改にはすぐに出撃して防衛ラインを構築するようにとの事です』

「わかりました。すぐに向かいますので、準備が出来次第発進してください」

『はっ』

急いで軍服に着替えてブリッジへと向かいます。その間に端末を使って情報を見ますが、基地にある戦力はゲシユペンストMK-IIが30機、ガーリオンが20機。それにヒリュウ改とヒリュウ改に乗っているオクトパス小隊のカチーナさんとラツセルさんが乗るゲシユペンストMK-II、二機とタスクさんが乗るジガンスクード、レオナさんの乗るヒュツケバイン009です。これだけの戦力なら普通は対処できますが、相手

が転移技術を持つ異星人であったのなら話は別になります。

急いでいた事もあり、ブリッジに到着して艦長席に座り、副官であるショーンさんが状況を詳しく教えてくれます。

「艦長。相手はどうやら南極にあるリ・テクのマザーベースを狙っているようです」

「確か、南極で見つかった古代文明の遺跡を調査しているんですけどか……」

「はい。そこから救援要請が届いております」

「すぐに助けに行きましょう」

「それは無理です。基地の司令官より、この基地の防衛を優先するように命令されております」

「あちらには民間人も居るのでですよ！」

「こちらが偵察機からの情報です」

「表示します」

ショーンさんの指示でオペレーターのユンが映像をメインモニターに映し出してくれます。するとそこには数百を超える生物と植物が融合したような存在が居ました。

「骨のようなフォルムが特徴の存在は全高18.5メートル。植物のようなのは20.6メートルですね」

「待って。あれがそれぐらいだとしたら、あの山のようなのは……」

「計測したデータでは111.1メートルもあります。それが複数体確認できておりますので、相手側の戦力は……」

「ジガンスクードは全高70.3メートルでしたが、それよりも更に高い相手が複数体。これは司令官の命令もわからなくはありません。」

「救援要請を受けた部隊が来るまでの時間はわかりますか？」

「二時間で中隊が到着できますが、それ以上になると更なる時間がかかります」

「どうすれば……」

艦首超重力衝撃砲を使って道を開いても戦力差が圧倒的すぎて、すぐに埋められるでしょう。ヒリユウ改ならそこに突撃して到着する事はできるかもしれませんが、助ける時間もありません。この基地の全ての兵力を出したところで焼け石に水でしょう。

「艦長。基地より通信です」

「つないで」

「はい」

『レフイーナ・エンフィールド中佐。これより命令を伝える。当基地を破棄し、一時的に南極より撤退する』

「それは彼等を見捨てるという事ですか!？」

『そうだ。連邦政府は南極に現れたアンノウンに対して核による攻撃を決断した。この

ままでは我々も巻き込まれる』

「そんな……」

「それで倒せない可能性は？」

『当然ある。だから、最終手段としてブラックホールエンジンを暴走させる用意をし、ミサイルに乗せて放つ。南極は誰も立ち入れなくなるだろうが、ここで封じ込められれば問題あるまい』

重力異常による転移妨害も狙っているのでしょうか。ですが、他に方法は……

『リ・テクを助けに行く事は考えた。だが、それは不可能だ。君達なら敵陣を一時的に突破して基地に数秒は居られるだろう。だが、それだけだ。収容している時間はなく、アンノウンに撃墜されるか核の雨が降り注ぐ』

「わかりました。撤退の準備をします」

『すまん。殿はこの基地で行う。出来る限り、敵を吸引して自爆する。その間に撤退してくれ』

「それは……」

『連中が撤退中の部隊に襲い掛かってくるかはわからんからな。まあ、生き残る可能性を作ってくれるのなら、主砲をぶっ放してから撤退してくれると助かる』

「了解しました」

『では、諸君等の検討を祈る。地球を任せたぞ』

通信が切れたので、これからどうするかを考えます。

「新しい情報はありますか？」

「ええつと……あ、ミサイルが敵陣に向けて突き進んでいます！」

「え？」

「まさかもう核を？」

「違います！ これはH L Vです！」

「まさか、宇宙から攻撃するつもりですか！ いえ、それならば可能性があります。発進準備！ これより本艦は敵陣を突き破り、リ・テクの基地の上を通って撤退します！」

「艦長！」

「無茶ですぞ」

「でも、やるしかありません。H L Vにこちらが通るルートを通信しておいてください。もしも、助かりたければ彼等は勝手に乗って来るでしょう」

「……それならば可能でしょう。D C戦争と同じ事をすればいいだけですからな」

「はい。オクトパス小隊には甲板に……」

指示を出して作戦を実行する為に基地指令にも話を通してミサイルの援護を頼みますよう。

◇◇◇ H L V

『大尉。今回の任務は……』

「俺の独断だ。文句があるのなら降りて構わん」

俺の中にある何かがここに来るように伝えて来ている。だからこそ、プラントや火星、月面を警戒するために地球の傍で待機していた。近頃、火星の連中が動いているらしいから、念の為だ。

そんな状態で頭に響く声と母艦に送られてきた緊急通信を受けた。俺はすぐに緊急事の場合に限り認められている独立行動権を行使し、搭載していたH L Vを使って降下する事を決断した。

『いや、もう無理ですから』

「それにお前もアンノウンが気になるから来たんだらう？」

『ええ、そうです。クスハの手掛かりがあるかも知れませんが。他の連中は知りませんけどね』

『俺達はそりや……暴れられたらいいんでね。ですが、脱出手段の防衛はどうします?』
「それなんだが……面白い通信が来た」

機体に送られてきた暗号通信を解析し、表示された艦の名前とルート、タイムスケジュール。それらを考えると自ずと答えは見えてくる。

「予定は変更する。H L Vを守る必要はない。このまま連中にぶつけて爆発させる」
『撤退方法はあるんですか?』

「ああ、別の部隊が俺達の足を務めてくれるそうだ」

『どこ誰です。そんな物好きで無鉄砲な連中は……』

「ヒリユウ改だ」

『なるほど、ヒリユウ改なら可能ですね』

「ブリット、部隊指揮は任せる。俺は連中の狙いを調べてくる」

『了解です。くれぐれも乗り遅れないようにしてくださいよ。それとクスハも……居たらお願いします』

「適当に確保してきてやる。運があれば狙いの奴かもしれないな」

『そう願います』

「時間だ。全機発進。忘れものはないようにしろよ」

『『了解!』』』

ゲシユペンストMK―Ⅲを動かし、HLVから外に出る。全員が出てからHLVのパラシュートを切断し、蹴り落として加速させながら突撃させる。相手も気付いてビームを撃ってくるが、その前に爆発させて目くらましにする。

「全機、突撃」

スラスターを全開にして爆炎を突き抜け、迎撃に放たれてくる攻撃を空中で無理矢理スラスターの操作で回避する。

『来たか。こちらに來い』

目標の100メートル級の化け物にリボルビング・ブレイカーを叩き込んで破壊し、そのまま体内へと入る。体内を突き進んで衝撃を殺し、五連チェンガンで穴を開けて外に出る。

「降下完了。全機、時間まで好きに暴れろ」

命令を伝えてから施設へと突撃し、邪魔な連中を両肩の積層指向性地雷レイヤード・クレイモアで蹴散らし、そのまま入る。

声に従って進んでいくと、後頭部で縛りポニーテールにしてなお腰まで届くほどのポリリウムのある青い髪に、寶石のように綺麗な赤い瞳を持つ13から14歳といった幼さが残る顔立ちをした少女が空中に浮いていた。彼女は無数の赤い宝玉がついた白と黒のレオタードを身にまとい、周囲には鬼の面を浮かべている。

「ようこそお越しくださいましたの。ベーオウルフ、キョウスケ。何年ぶりの再会でしょうか?」

「何を言っている。いや、それよりも貴様がこの件の元凶か?」

「そうとも言えますが、そうとも言えませんの」

「そうか。どちらでも構わん。お前を殺すだけだ」

「できるものならやってみるとよろしいですの。ですが、お勧めは出来ませんわ。それに時間もありませんでしょう?」

「生身を殺すなど容易い」

女を五連チェーニングガンで粉々にしようとしたが、弾丸は見えない壁によって空中に固定された。

「返しますの」

「ちっ」

空中の弾丸が方向転換してこちらに迫ってくる。左腕部に取り付けられたシールドをパージと同時に仕込んであるクレイモア爆発させ、すぐに距離を取る。

まあ、無駄だろうが、目くらましにはなるだろう。そう思った瞬間、嫌な予感がして即座にスラストスターを全開にして左に避ける。直後、巨大な何かが通り過ぎ、床もろともゲシユペンストMKⅢの左腕を切断した。

「まだお話は終わっていませんのよ？」

視界が晴れると、宙に浮かびながら刀を構えている女がコクピットの中に居た。そう、俺のすぐ前にだ。即座に拳銃を引き抜いて発砲するが、全てが止められる。

「無駄ですの。今のお父様では私を殺す事など不可能ですの」

「どうやらそのようだな」

「あら、お父様という発言は無視ですか。まあいいですの。こちらも要件が終われば帰りますから」

「俺に何をさせる気だ」

「こちらを渡すだけですわ」

そう言つて虚空に手を突つ込むと数人の男女を掴んでこちらに放り込んできた。

「なんだこいつらは……」

「ここの生き残りですよ。ああ、ちゃんと除染はしておきましたのでご安心くださいな」

「……研究者とその家族か」

「はいですの。では、これにて要件は終わりましたので、お引き取りくださいですの」

「待つ——」

「待てと言われて待つ人は居ませんの」

「道理だな」

気がつけば地上に転送されていた。

『隊長！ 時間です！』

「わかった。これより突撃してくるヒリユウ改に乗って撤退する。各自、タイミングをミスるなよ」

『『はっ！』』

ルート通りに重力砲が通り、敵が綺麗に一掃される。そこに突撃してくるヒリユウ改にタイミングを合わせて乗り込む。全員がアンカーを射出して機体を固定。そのままヒリユウ改が突き進んでいく。

『全員、後方にありつたけの攻撃をくれてやれ』

全員の攻撃を行う。無事に敵陣を突破できたので部隊員を確認する。誰も死んでいない。いや、機体の数は減っているが、しっかりと回収したようなので問題はあるまい。

『これでゲシユペンストMK-IIIを貰えたらいいんだがな……』

『馬鹿な事を言ってるじゃねえよ。ちゃんと起爆準備はしたんだろうな』

『もちのろんよ。あと数秒で……アレ？ 解除された』

『始末書ものだな』

『そんな〜！』

『ご歓談中失礼します。すぐに艦内に入って機体を固定してください。これより本艦は反転して主砲を使い、離脱します。そこに居たら死にます』

「聞いたな。即座に中に入るぞ」

『了解！』

全員で中に入り、整備員に従って艦に固定する。ついでに助けた連中を衛生兵に預けてしばらく待つと急激な加速がかかった。おそらく、アンカーを使わずに主砲の反動で脱出したんだろう。

第14話

お姉ちゃんと別れた後、私はレモンさんに連れられてラピス達と一緒に彼女の研究所にやって来ました。そこで私以外の子達は皆、培養槽の中に入って生命維持装置を付けられて緑色の液体に満たされていきます。

「そんなに心配しなくても大丈夫よ。アルフィミイちゃんから貰ったデータ通りなら、一週間から一ヶ月ぐらいでよくなるわ」

「良かったです……」

「それよりも、ルリちゃんの方は大丈夫なの？」

機械を弄りながら、こちらを見ずに聞いてくるので、しつかりと答えます。

「大丈夫です。私はナノマシンにちゃんと適応していますから……」

「そうなのね。なら、問題はラピスちゃんだけね」

「ラピスに何かあるんですか？」

「直ぐに問題は表面化しないけれど、この子は他の子よりも急激に成長させたみたいで

寿命がかなり減っているわ」

「それって……」

「細胞分裂を促進させたせいで、テロメア遺伝子に異常をきたしているの。症状は老化と短命になるのかしら？」

「な、治るんですか？」

「今の技術では延命はできても治療は無理ね。それこそ完全なサイボーグにするぐらいよ」

「そんな……」

「まあ、アルフィミイちゃんもわかっているでしょうし、私の研究テーマも似たようなものだから私達に任せなさい」

「あ、ありがとうございます」

「そうは言っても、早ければ早いほどいいから、アルフィミイちゃんがやってる技術情報の収集に期待かしら」

「技術情報……」

「そういえば研究所を襲ったのも私達を助ける以外にも技術を集めて力を蓄えるという事も言っていました。それを手伝って欲しいとも。」

「わかりました。私も全力でお手伝いします」

「お願いね。それとアルフィミイちゃんを支えてあげて」

「お姉ちゃんを、ですか？」

「あの子、結構無理しているわよ。貴女達の前では弱みを見せていないかもしれないけれど、必死に外面を取り繕っているだけなの」

「そういえば……」

お姉ちゃんがレモンさんに抱き着いた時を思い出し、ブレインコンピュータから記憶データを確認するとお姉ちゃんの身体は震えていました。それに車の中での事も取り繕ってはいたけれど、恐怖で表情が引きつってもいました。

「まあ、あの子は色々と隠し事は多いみたいだけど、悪い子ではないと思うの」

「確かに……まるで小動物みたいな感じですよ」

「必死に怖いのを押し殺して威嚇し、立ち向かおうとしている子猫みたいなものね」

「なんだか、納得できません」

お姉ちゃんも必死にアインストと人の狭間で抗っているんですね。

「アルフィミイちゃんの事はルリちゃんに任せるから、行き過ぎるようなら止めて頂戴。ブレーキが壊れる可能性があるから」

「わかりました。出来る限りのことはします」

「それでいいわ」

話をしていると、電話の呼び出し音が鳴り響きました。

「ちよつとごめんね」

「はい」

レモンさんは電話に出て誰かと話していきます。

「わかったわ。すぐに行くから。ルリちゃん、悪いけれど私は緊急の会議に呼ばれたから行くわね。機械を触られるわけにいかないから、外に出てもらう事になるわ」

「確かに知識のない私が勝手に触ったら大変な事になりますね」

「ええ。薬は毒にもなるから、容量を間違えたら最悪死ぬわ。だから、アルフィミイちゃんの間でも行くといいわ」

「わかりました」

「案内をつけるわ」

「はい。ありがとうございます」

研究室から出て、少し待つと兵士の方がやって来たので、その人に連れられてお姉ちゃんの所に向かいます。でも、途中でお腹がなっっちゃいました。

「可愛い音だ」

「……これは……」

「食事を先にした方がいいだろう。行き先を変更しよう。まず食堂行って補給をす

る。サンドイッチとかを買って持っていくのもいいだろう」

「そうですね。確かにお姉ちゃんもお腹が空いているかもしれない」

「研究者の連中は寝食を忘れて没頭するし、食堂まで来るのが面倒くさいと言うからな」

「……そう、ですね……」

研究所に居た人達も何時までも私達の身体を玩具にしていた事が思い出されます。

「悪い」

「いえ、大丈夫です。それよりも案内をお願いします」

「わかった」

食堂によつて先に軽く食事を取つてから、ドリンクとサンドイッチが入ったランチボックスを貰つて格納庫へと移動していきます。



お姉ちゃんが居る格納庫に到着し、場所を訊くとお外みたいです。

「もうすぐ戻つてくるから、ここで待っているといい」

「わかりました」

少し待つと、大きなエレベーターが到着して鋼の巨人が歩いてきました。その巨人は

指定された場所に入ると、身体が拘束されていきます。その次に連絡通路が取り付けられ最後にコクピットの部分が開いて白衣を着たお姉ちゃんが出てきました。

「火器管制装置に少しERRORがありましたわね。武装と機体の接続が上手くいったいみたいですね」

「了解。修正する」

「頼みますの」

通信機を使ってやり取りをして、すぐにコクピットに引っ込んでしまいました。私はどうしようかと考えていると別の整備員の人が手を引いてくれました。

「今から上に乗るからおいで」

「ありがとうございます」

「いよいよ」

リフトがある場所に到着し、機械を操作してリフトを呼び寄せました。それから私達が乗ると上へと登らせていきます。

「じゃあね」

「ありがとうございます」

整備員の人と別れて連絡通路を通って、お姉ちゃんが居る場所に向かいます。

「お姉ちゃん……」

声をかけると、床に寝そべりながら床の部分に何かをしていたお姉ちゃんがこちらを振り向きました。その顔は所々に黒い汚れがあります。白衣にも汚れがついています。

「あら、ルリですか。もうラピスはよろしいのですの？」

「大丈夫です。それにレモンさんが緊急会議で居られなくなつたので、こちらに来ました」

「そうですか。それなら丁度いいですわね」

「なんですか？」

「ルリもこの機体に乗ってもらうので、リニアシートとかの調整をしないといけませんの。IFSの関係もありますし、私とは少し違うでしょうから」

「わかりました。でも、その前にお姉ちゃんにご飯を食べた方がいいと思います」

「……そう言えば食べていませんでしたわね。でも、食べに行くのも面倒くさいですの……」

「そう言うと聞いたので貰ってきました」

「それはありがとうございますの。でも、見ての通り、手も汚れていますから……」

「なら、私が食べさせてあげましょうか？」

「それはいいのですの！是非ともお願いします！」

「は、はい……」

凄い勢いで食いついてきたので、ちよつと引いてしまいます。それでも、気を取り直してお姉ちゃんにサンドイッチを食べやすいサイズに千切つて口に持つていつてあげます。

「ここはあくんと行って」

「馬鹿ですか？」

「ルリちゃん、いけずですの」

しばらく見詰めあつていても、動く気配がないので、口にねじ込もうとしましたが、口を開けません。

「はあ……あ、あくん」

「あくん。美味しいですの」

「そうですか」

仕方ないので、恥ずかしいですが言われた通りにします。まるで親鳥が雛鳥に餌を上げているみたいな感じです。少し、可愛いですね……つて、私まで馬鹿になっています。このままだと馬鹿ばっかになつちやいます。それは駄目なので、手早く食べてもらいます。

「そう言えばルリちゃんにもサポート用のAIを作らないといけませんわね」

「AIですか？」

「はいですの。名前はオモイカネ。これは決定事項ですわね」

「オモイカネ……」

「まあ、それはこちらで作ってプレゼントしますのでもうしばらくお待ちくださいですの」

「わかりました。それで、私はどうすれば？」

「まずはリニアシートに座ってくださいですの」

「はい」

言われた通りに座ると、お姉ちゃんが椅子を調整していきます。無理矢理接続されたようなIFSの制御装置になっている赤い宝玉に触れます。すると身体の中に電気が走ってきました。

「っ」

「大丈夫ですの？」

「平気です。少し、ビリっとしました」

「精査して、ERRORを修正してくださいですの。機体に合わせるのではなく、ルリに合わせるようお願いしますね」

「いいんですか？ 機体の方を弄らないといけなくなりますが……」

「ルリの方が優先ですの。それに戦闘中に一々痛みを感じていたら話になりませんの。」

コマンド数秒の内にコマンドを入力しないといけないかもしれないのですから」

「わかりました。修正してみます。でも、わからない場所があるので……」

「ルリがわからない?」

「お、教えてもらってないので……」

「え? あの電子の妖精がわからない……あつ」

不思議そうに聞き返してきたお姉ちゃんが一瞬で、顔を青くしました。それから何かに気付いたようです。

「すいませんの。教えていませんでした。すぐに全てのデータを送信しますの。それから手取り足取り、教えさせていただきます」

「お願いします。ところで、電子の妖精ってなんですか?」

「ルリのコードネームですの」

「……わかりました。お姉ちゃんのコードネームはなんですか?」

「私のは……鬼面の者?」

「鬼面なんて持つてるんですか?」

「まだ持つてませんの。というか、考えてもみませんでした。いっそ、左右に鬼面でもつけますか」

「止めておいた方がいいと思います……」

「それもそうですわね」

お姉ちゃんに教えてもらいながらIFSを使って私に会うようにシステムを構築し直していきます。お姉ちゃんは私に教えながら外の人と会話しながらどんどん修正していきます。ナノマシンに関しては白衣も合わさってまるで専門の研究者みたいです。

「あ、モニターが六枚ほど死にましたね。ヒューズが飛びましたわね。動力炉の制御システムから修正しないと……ルリ、動力炉の調整はルリの仕事になりますので、どんな感じがいいか考えておいてください」

「……やる事が多いです……ちよつと、自信がありません」

「まあ、私も初心者ですからあまり自信はありませんの。ですが、やらなくてははいけません。それに安全装置もちゃんと施してありますので、慣れるまではこれでいきますの」
「わかりました。頑張ります」

それから、システムを修正して私の思う通りに動かせるようになりました。とりあえず、ソフトを作って効率化できるようにすればいいと、お姉ちゃんから学び取りました。照準補正プログラムとかも組まないといけないらしいですが、近接戦闘用のは必要ないみたいです。そこらはお姉ちゃんが連邦軍から無断で貰ってきたそうなので、それを改造するみたいです。

「だ・か・ら、リボルビング・ステークを取り寄せて両手に装備させますの。ゲシユペン

ストMK-IIIに使われているのですから、簡単でしょうか？」

『これ以上機体バランスを崩してどうするんですか!』

「接近された時の対策としては優秀な火力ですわよ! 何よりロマンですよ!」

『それはわかりますが、とりあえずすぐには無理です。諦めてください』

「ちつ、何処かで鹵獲してきましようか……」

『これから宇宙に向かうので諦めてください』

「わかりましたの。それとテストラ・ドライブは手に入れておいてください。アレは絶対に必要です」

『宇宙から帰ってこられるまでにはなんとか頼んでおきます』

「よろしくですの」

お姉ちゃんはお話が終わったか、通信を切ってこちらに来ました。

「そちらの状況はどうですの?」

「こちらは終わりました。こんな感じですよけれど……」

「……はい、問題ありませんの。流石はルリですよ。ただ、この部分はあえて長くして含みを持たせ、キャンセルできるようにしておいてください。無駄の無い綺麗なプログラムですが、相手の行動次第によっては別の装備に変える必要もありますしね」

「確かに……でも、よくわかりません」

「なら、格闘ゲームをしましょうか」

「えっと……」

「まあ、後回しでいいですよ。それじゃあ、次は一緒に動かしてみるですよ」

「……はい……」

緊張しながら、お姉ちゃんに言われた通りに操作してヴァングレイを動かしていきま
す。歩いたり、走らせたり、出て来た敵の情報を分析したり、色々な事を試してその都
度修正を入れていきました。

気付けば深夜になっていて、格納庫にあるヴァングレイを動かしてトラックに寝かせ
て乗せます。そのままトラックでエレベーターに乗せて外に運び出し、滑走路の方へと
移動しました。

そちらではスペースシャトルが用意されており、その機体にヴァングレイを乗せてい
きます。これでもうやることはなくなり、ホッとしたら急に力が抜けてきました。

「さて、今日はもう寝ますの。明日の朝一で出発になりますからね」

「そうですね……」

「ごめんなさい。今すぐ出てちょうだい」

「え？」

振り返ると、レモンさんとアクセルさん。それに見た事のない男性が居ました。

「どういうことですか？」

「南極で異変が起きた。現れたアンノウンに対処するため、軍は核を使用した」

「思い切りましたわね」

「それだけ相手の兵力がおかしい。今もなお増え続けている。最初の連絡では700だったけど、既に3000を超えた」

「最初に聞いた時は愚かだと思ったけど、相手の戦力が想定を軽く超えてやがる」

「まあ、核がどこまで有効なのかもわからないし、ほぼ効いていないみたいだけど」

「私はお姉ちゃんの方を見ますが、表情は変わっていません。」

「迎撃されたものではありませんの？」

「だろうな。ほとんど撃ち落とされたらしい」

「どちらにせよ、連邦は正気ですか？」

「残念ながらも。南極にそこまでメリットがないというのも理由の一つだろう。それにアンノウンが海を渡ろうとしたら、次はブラックホールまで使う気だ」

「理解に苦しみますの。地球が崩壊する可能性がありますのよ？」

「それよりも、政府や軍の上層部は火星やプラントを警戒しているみたいだ」

「それにもう一つ連中が強気なのは理由がある。だが、それは教えられん」

「わかりましたの。そちらは良いとして、何故今から行かなくてはいいけませんの？」

「俺達に南極の近くで全部隊を持ってアンノウンを警戒せよって命令が届くからだ。で、そうなるまで戦力の全てをそちらにまわさないといけない。シャトルでヴァングレイを運ぶ事だつて無理になる」

「ヴァングレイも戦力に数えられるから……」

「そういう事だ。そんな訳で、さっさと行つてもらおう。これなら、まだ言い訳が立つしな」

ヴァングレイをコロニーに届けたら、シャトルは戻せばいいだけだからでしょう。後は偽装するだけですな。

「では、今から出発するとしますの。ルリもいいですか？」

「大丈夫です」

「着換えなどはこちらで用意しておいたから、問題ないでしょう。気をつけて行ってらっしゃい」

「ラピスの事をお願いします」

「お姉様、皆の事を頼みます」

「ええ、任せてちょうだい」

それから、見送られながらスペースシャトルに乗り込みました。私は席についたらすぐに眠ってしまいました。

第15話

スペースシャトルに乗ってしばらくすると、大気圏を突破して無事に宇宙へと到着しました。窓にかかっていたシャッターも上がり、外の景色が見えてきましたの。同時に身体も軽くなり、シートベルトがないとフワフワ浮きそうな感じがします。

「これが宇宙……凄いですの！」

思わず窓にへばりついて外を見て感動しました。前世を含めて地球を出た事なんてありませんの。そもそも、前世では宇宙飛行士ぐらいしか、地球の外に出た事はありません。いえ、金持ちはあるかもしれませんが、私はお金持ちではありませんでしたので、映像でしか見た事ありませんの。

「そして、あちらが……母なる大地、地球……」

移動する関係である程度旋回するため、青く綺麗な地球の姿が見えますの。まるで綺麗な宝石のようでとても大切な物であると思えます。南極の方を見ると真っ黒な雲で覆われていますの。そのせいか、見ているだけで涙が溢れてきます。

あの黒い雲は核兵器によるものでしょう。ろくに考えもせず使用するなんて愚かで

しかありません。しかも、次はもつとんでもない物を使おうとしていますの。これは対策を取らないといけませんの。

さてさて、どうするべきか……考えていると、肩に衝撃を感じました。そちらを振り向くと、隣に座っていたルリが眠ったようで、肩に頭を乗せておりました。彼女の温もりと匂いを感じられて少しドキドキしますの。まあ、今は到着までの時間で色々と動きましょう。まずは現状の報告を聞きましようか。

『お母様、そちらはどうですの？』

『人間共の排除は完了し、封印装置もろとも異空間へ隔離する準備を進めておる。そちらはどうだ？』

『今、宇宙に出ましたの。これからコロニーに向かって、地球に被害をもたらす物への対処をするところですよ』

『やはり、人間共は地球には必要ないのではないか？』

『その判断はまだ早いかと思われますの』

『だが、奴等は地球を更に汚したのだぞ？ ましてや、お前から伝わってきた情報では更に愚かな事をしようとしているのだろう？』

『まあ、そうですね。そこで一つ提案がありますの』

『聞こう』

『人は未知の物を恐れます。ましてや、彼等にとつてアインストはいきなり現れた意味不明な存在。その目的もわからず、いきなり南極を奪われたのでは強硬手段を取るのはいくらも、仕方ありません。そこで、堂々と全人類に向けて宣言しますの。』

我々、アインストは地球の守護者であり、管理者である。人類が南極にて世界を滅ぼす危険な遺跡を発掘した為、強制的に介入して封印を行っている。封印が終わり次第、撤退するが、そちらから手を出した場合は地球に有害な存在と認定し、報復する。

こう宣言して、全世界にアインストを転移させ、数分で戻します。これで脅しは十分でしょう。もし、実際に攻撃してきたら、その場所に所属している主要都市を破壊しましょう』

全世界に転移させるついでに地球全土の地下に小型化した情報収集能力に特化させたアインストを潜ませ、ネットワークを構築するのもいいかもしれません。確か、ゲッターやマジンガーには地底人や爬虫人類の人達が居たはずですし……あれ、あれは普通のマジンガーとゲッターでしたっけ？

まあ、どちらでも構いませんの。情報収集と資源確保に働かせればいいですし、この世界はガンダムSEEDが入っておりますのでこのまま行けば開戦した次の2月14日連邦軍がコロニーに核を打ち込んだ“血のバレンタイン”が起きます。その報復として4月1日に地球全土にニュートロンジャマーが打ち込まれるエイプリル・フール・

クライシスがありますの。

このニュートロンジャマーは影響下であれば自由中性子の運動を阻害するフィールドを発生させられます。その効果内ではすべての核分裂が抑制され、核ミサイルをはじめとする核分裂兵器、核分裂エンジン、原子力発電などは使用不可となります。

よくよく考えると、スーパーロボット大戦では基本的にSEED陣営以外は無視されてきましたが、現実となつているので下手をしたら原作よりも強化されている可能性がありますの。そうなりますと、核融合炉であるプラズマ・ジェネレーターすら停止する可能性があります。

また、副作用として電波の伝達が阻害されるため、それを利用した長距離通信は使用不可能となり、レーダーも攪乱される。これによつて精密誘導兵器が使用不可能となり、戦場は再び有視界接近戦闘の時代を迎えます。ぶっちゃけるとミノフスキー粒子の代わりに使われて、ロボットが活躍する土台を作る舞台装置ですわね。まあ、どこの勢力でもジャマーは基本的に使つてくるので目視戦闘を行うしかありませんが！ ジャマーが無い勢力なんてただの的ですの。

長距離の弾道ミサイルはもちろん、戦闘機でちよつと行つてミサイルを落とせば終わりですしね。なんなら、戦闘機状態からパーソナルトルーパーに変形して、ソロモンよ、私は帰つて来た！ つて言つて核ミサイルでもぶち込めばいいだけですの。

話を戻しますが、ニュートロンジャマーによる被害は全人類の10%が死亡したと言われております。人類は太陽光発電などで解決したそうです。まあ、数十メートルや数百メートルも地中深くに潜ったニュートロンジャマーを破壊する事は、撃った本人達もできないらしいです。もちろん、ハッキングやクラッキングの対策も取られていて遠隔では一切の操作ができないらしいです。もちろん、設定ではです。

では、アインストではどうか？ 答えは楽勝です。地中をモグラやワーム、果ては微生物までアインスト化させて数の暴力で探査し、妨害電波を発している物体に接近して破壊し、取り込めばよろしいです。これにて地球は救われます。ちなみにエイプリルフールクライシスは起こしてもらった方が私としてはうまあじです。ニュートロンジャマーを開発した事にして発表すればプラントやザフトに発表される前なら名声などが得られますからね。

『それで止まるほど、人間共は賢いか？ やはり、我にはそうは思えぬ』
普通なら止まらないのです。ですが、今は普通の状況ではありません。

『絶対に止まりますの。何故なら、今の状況で勝てるかと判断しても戦力を減らすのは嫌なはずですよ。何せ、火星とプラントが控えているのですから、おそらくその二つが片付くまでは静観してくるか』

『愚かな……』

『人類は愚かですが、それは一部の者達だけです。ですので、全てを滅ぼす段階ではまだありません。それに我々も異星人共との戦いが控えております。そいつらを滅ぼす戦力として使うのなら、こちらがやる必要はありません。他の勢力が疲弊したところを襲えばこちらの被害は少なく済むのです』

『いいだろう。どちらにせよ、我はこの忌々しい門を欲望の届かぬ何も無い異空間に封印せねばならぬ。そちらは任せる』

『畏まりましたの。ですが、私にももうちよつと戦力を頂いても構いませんか？ 色々やらねばならぬ事がありますので……』

『良からう。レジセイア二体を与える。後は自ら増やせ』

『ありがとうございますの。吉報をお待ちください』

『うむ。それと布告はお前に任せる。好きにせよ』

『承ったですの』

さて、レジセイア二体を追加で貰ったので、全世界に転移させるタイミングでコロニー・メンデルと月へ転送させますの。月は火星と繋がるハイパーゲートの他にも、イオリア・シユヘンベルグによって、西暦2100年頃に建造された量子型演算処理システム・ヴェーダが存在しているはずですよ。

なので、その二つを狙います。まず月への転移は適当なアインストを月全面に転移さ

せ、中心部へと転移させるレジセイアの転移反応を隠しますの。これによって内部からこつそりと浸食し、月自体をアインストの巢へと作り変えます。こちらはいざとなればお母様が顕現する依代にもできるでしょうから、問題ありませんね。ああ、月の内部にはブラックホールを作り出す仕掛けをちゃんと用意しておかなければいけません。

宣戦布告もやるように言われたので、こちらは電脳世界にアバターを作ればいいでしょう。もつとも、私の、アルフィミちゃんのままでやる訳にはいかないですし、金色の闇もアクセル達にバレてしまいますの。そうなる……ああ、いい人が居ましたの。闇ちゃんからの繋がりでマスター・ネメシスにすれば丁度いいですね。表向き、アインストを操る存在、私の分体として作りあげましょう。これなら、私が私と戦う状況ができて、疑いも逸れるはずですよ。

それに人材の確保も平行してやっていかないと、手が回りませんの。そう考えるとベストなのは……居ましたわね。比較的、簡単にこちらに転がりそうな危険人物がちよつと扱い方をミスると人類が滅亡してしまいますが……今ならまだ問題はないかもしれません。

とりあえず、一人は決まったので暗号通信で送っておきましょう。

『貴方が背負っている問題を解決できますし、貴方をスーパーにできますの。どうか、私達と手を組みませんか？』

こんな感じの文章を暗号化して、色々な言語を使わないと解読できないようにして送っておきます。彼ならこれでも解読してくれるはずですよ。

これでよし。メールの中にフェル・グレーデンからの返事があったのでそちらも読みます。どうやら、歓迎してくれるようで、是非とも共同開発者になつて欲しいとのことですよ。それほどまでに研究資金がヤバイようなので、約束通り四億\$を振り込んでおきます。追加のお金はしばらく待つてもらわないといけない事も告げておきましょう。

これで時流エンジンの確保は可能ですよ。問題はデユナミスとその配下の三人。デスピニス達は可愛いから仲間に入れたいですよ。ただ、デユナミスはどうにかしないと不可能でしょうが。そう考えると……デユナミスは取り込んで、そこから彼女達を手に入れた方が楽ちんですわね。

それにイルイ・ガンエデンも探して協力関係を築かないといけません。もしも破滅の王がアインストの封印を破つてでてきたら、彼女の力が必要ですよ。

まあ、とりあえず急ぎで考えるのは人類の統一ですよ。プラント、火星、木星、月。最低でも太陽系は纏めないと話にもなりません。

差し当たっては火星のヴァース帝国、木星、プラント、地球連邦政府、イノベーターの腐敗を取り除きますよ。それから銀河連邦政府を作りあげて異星人などに対処する。これがベストでしょうが、絶対に上手くいきません。理想は理想。

「本当、地獄ですよ」

髪の毛を指でクルクルさせながら、呟きます。そこでふと思いつきました。手摺をあげて、ルリちゃんのスーツベルトを外してルリちゃんを膝の上に誘導して頭を乗せませす。後は撫でるだけです。

「と、東方不敗の居場所も調べないといけませんか。弟子入りしたいですし」

後は……ああ、アルドノア・ゼロの主人公である界塚伊奈帆（かいづか いなほ）やGガンダム（ジーガンダム）の主人公、ドモン・カッシュなどの居場所も調べないといけません。ドモン・カッシュはともかく、伊奈帆には専用機を用意してあげるのも手でしょう。原作では連邦が作ったカタフラクトにパーソナルトルーパーの技術が使われるはずなので、結構いいのに乗る可能性があります。

後はオーブ連合首長国にあるモルンゲンレーテやコロニーのヘリオポリスも見張らないといけません。コロニー・メンデルで手に入らなければ、戦争が始まる前にヘリオポリス行ってキラ・ヤマトのDNAを手に入れる必要があります。

いえ、翌々考えたらそこまでではありませんの。SEEDの力は効率化ですから、ゼロシステムのような物です。ニュータイプとはまた違うのですから、そこまでこだわら必要はないかもしれませんが、素体という意味ではどう考えても東方不敗マスターアジアの細胞を手に入れて培養した方が強き的に上なのは間違いありませんね。とりあ

えず、キラ・ヤマトは放置しましょう。敵にならなければ一般人になっても問題はありません。

あくエヴァンゲリオンの事も考えないといけません。ATフィールドをどうやって突破するとか、結構重要ですよ。ゲームだからこそ、一定ダメージを超えたら攻撃が通りましたが、この世界までそうとは限りません。そうなると使徒の細胞を……ラミエルでしたか。アレ、凄く欲しいですわね。最低でも介入して手に入れましょう。武装の一つとして、ファンネルの代わりに小型ラミエルを大量に扱うとか、凄く楽しそうじゃありませんか？

たしか、ウィザーズブレインという小説で使われていたD3という武器が似ていますね。生身でも使えるようにしないとイケません。絶対に確保してみせますの。私の趣味の為に！

あ、レイちゃんのDNAも貰っておきましょう。いえ、DNAじゃなくても一人ぐらい貰っても問題ないかもしれないですね。レイちゃんは量産型でいっぱいいますから。いつその事、改造してシスターズにするのもありですよ？

まあ、しばらくは様子見しておきますの。それよりも、マスター・ネメシスを作り出して世界へ通達しておきましょう。遠隔操作できるように設定して、お母様に作ってもらえばそれ終わりですよ。

『当機は間もなくコロニー・ネオジャパンに到着致します。安全の為、シートベルトの着用をお願いいたします』

考え事をしているともう到着したようなので、寝ているルリちゃんを元に戻してシートベルトをしてから待ちます。シャトルは指示通りに宇宙港へと入港し、無事に到着できましたの。

「ルリ、起きるですよ」

「ん……お姉ちゃん……ここは……」

「シャトルの中で、無事に到着しましたの。ですから、起きてくれると嬉しいですよ」

「んく眠い……」

「仕方ありませんの。よっと」

ルリちゃんをお姫様抱っこしてそのまま外に出ます。荷物は降ろしてもらえばいいですしね。ルリちゃんはまだ寝ぼけた状態で私の方に手を伸ばしてきます。小さな子みたいでとても可愛らしいですよ。いえ、小さな子でしたわね。まだ11歳……下手したらもつと下ですし。

こんな子を戦争に連れていくなんて、私は地獄行き確定ですわね。まあ、いっぱい殺

していますから、いまさらでしょうけれど。

コツコツと靴音を鳴らしながらシャトルから外に出て、連絡橋を渡ります。すると目の前には沢山の軍人さんが待つておりました。流石に武器は構えておりませんが、肩にアサルトライフルを持っています。

「ルリちゃん、ここからは一人で歩けます?」

「ん、大丈夫です……」

流石に目が覚めてきたようで、顔を赤らめながら頷いて来たので降ろしてあげて後ろをつついてきてもらいます。服の裾を掴ませておきましょう。大変可愛くてグッドですの。

「失礼。貴女が連絡にあったプロウニングの方でしょうか?」

軍服を着た黒髪長髪の中年男性が声をかけてきたので、こちらもしつかりと敬礼して答えますの。というか、さっそく、Gガンダムでは薄いと言われた黒幕さんとの出会いですのね。

「はいですの。地球連邦軍特殊任務実行部隊所属の技術開発員のアルフィミー・プロウニングですの。こちらは妹で助手のルリ・プロウニングですよ」

特殊任務実行部隊とは言っても、色々あるので名乗っても問題ありませんの。問題があつたとしても、そんな部署は存在しないと言われるだけですからね。書類上は一

切、存在しない部隊ですから。ただし、権限はしっかりと与えられておりますし、任務の指令書もありますの。

「…………どうも」

「私はこのコロニーを担当している地球連邦宇宙軍所属、ウルベ・イシカワ少佐だ。今回の件は急に決まったようなので、詳しい内容を教えていただけるとありがたいか？」

「構いませんの。今回、我々の目的は持つてきたパーソナルトルーパーであるヴァングレイを宇宙でテストすることですの」

「それだけですかな？」

「表向きはそれだけですの」

「本来の目的もお聞かせ願えるでしょうか？」

「このコロニーで開発されている危険物の査察ですの」

「そのような物は…………」

「隠そうとしますが、ナノマシンの材料を含めて運び込まれている資材や使われているエネルギー量と報告された値の矛盾。更にもろもろの調査でわかっております。これらは全部、レモンお姉様達があ突貫で調べてくれましたの。流星はシャドウミラーですの。」

「ああ、既に確信は得ていますの。ナノマシンを使ったテラフォーミングと地球の環境

を再生させるためのアルティメットガンダム。ナノマシンはご存じの通り、使い方次第で確かに地球を再生させる事だってできるでしょう。ですが、人体を分解してドロドロに溶かす事もできますの。そんな危険物を連邦政府も軍も放置はできませんの」

「それはもちろんです。ですから我々が監督をしております」

「少佐だけでは上が納得しませんので、ナノマシン技術に精通している我々がテストをするついでに来ましたの。それに少佐はあくまでも軍人。技術者ではないでしょう？」

「こちらにも信頼できる技術者はおりますが……」

「貴方が用意した技術者など信じられません。そうお偉方は考えたのでしょうか。何せ下手をしたら地球が滅んでしまうのですから、無理もありませんの」

今回の件はガチ目に地球連邦政府のお偉方が関わっております。ヴィンデルはレモンお姉様を作ったもしも暴走した時の被害予想を使って上を説得しました。もちろん、本来は即座に停止させるのですが、テラフォーミングや地球の再生は彼等にとつても利益があります。それに開戦が間近に迫っているので軍としてはアルティメットガンダムを軍事利用したい思惑がありますの。

「まあ、そのような理由で今回の査察が入りましたの。また、軍としては技術は欲しいので開発はそちらと我々、両方の監視下で続けてもらいますの。もちろん、私も開発に参加させてもらいます。暴走した時の対策も組み込まねばなりませんからね」

ぶっちゃけるとアルティメットガンダムはこのまま破棄するのは勿体無いので、インスト化して乗っ取るのがベストです。そもそもデザイナーはインストをデビルガンダムを基にしたとも言われております。こちらは生体であちらは機械ですが、どちらにせよ危険物ですので最悪はヴァングレイで特攻をかましても破壊します。ただ、上手くいけば私の経歴にも書き加えられるので、名声が増えて動きやすくなります。相手を信頼させるには実績が必要ですね。

「……」

ウルベ・イシカワはこちらを見詰めながら、どう私を処理しようかと考えているんでしょうね。まあ、無駄な事ですの。

「あら、いがみ合う必要はありませんの。カッシュ博士の望み通り、作ってもらった後は彼等に運用を任せればよろしい」

「それでは軍が使えないではないですか？」

「何のために私達が開発から参加すると思うのですか？ 別に一号機に拘る必要はありませんの。二号機や三号機を作ればよろしいのですから。必要なデータは余すことなく回収しますので、問題はありません。今回の件が片付けばその報酬もあなた方に支払われるでしょう。こちらは技術が手に入り、そちらは昇進する。なんら問題ありませんわね？」

「それは……」

「ここが手の打ちどころではありませんの？」

これ以上望むなら、首を切るといふ事を動作で示してあげると彼も納得したようでも、頷いてくれました。そも、既に上層部にバレていますし、こちらの申し出を断れば反逆者として本当に処分されます。アルティメットガンダムが手に入っていない状態ではどう足掻こうと無理ですの。

「仲良くしますの。互いの目的の為に」

「わかった。だが、そちらは本当に大丈夫なのか？ まだ子供みたいだが……」

「ご心配なく。完全記憶能力もありますし、ナノマシン技術を使って身体を若い状態に整えているだけですから」

「なるほど。見た目通りではないのだな」

互いに握手しながら、ウルベ・イシカワの質問に答えますの。彼の疑問はもつともで、派遣されてきたのが私とルリちゃんの子供二人組だと信じられないのも無理はありません。

「ああ、それと部屋はアルティメットガンダムがある研究施設で構いません。どうせ寝ても覚めても研究と実験ですから」

「了解した。では、まずは開発メンバーを紹介しよう。ついてきてくれ」

「はいですの。ルリ、行きますの」
「うん」

ルリちゃんの小さな手を握りながら、移動しますの。カツシユ博士達とミカムラ博士達と会う事になりますが、相手側の反応が楽しみですわね。

◇◇◇

しばらく歩き、車に乗って移動し数十分。検疫処置などを受けましたが、そこはクラッキングして情報を書き換えた事で問題なしとして処分させました。コロニーは密閉された空間なので病原体の持ち込みは厳禁ですの。

全ての検査が終わると研究所のある区画に連れて行ってもらいました。ウルベ・イシカワ少佐の後ろについて部屋に入ると、中に居た人達全員の視線が私とルリちゃんに集まってきます。

それを無視して周りを確認すると到着した場所は管制室のような場所で、ガラスの向こうは無重力の空間になっております。そこに鎮座しているガンダム頭部を見て、すぐにルリちゃんの手を引いてそちらに向かいますの。

「ルリちゃん、こっちですの」

「……アレがそうなの?」

「はいですの。アルティメットガンダム……私達の目的の一つですよ」

「大きい……」

ガラスに張り付くようにして製造現場を見ると、アルティメットガンダムの身体が作られているのがわかりますの。大体、基礎フレームが作られている所ようですわね。武装などは全然できていませんが、それでも30%から40%ぐらいは完成しているかもしれません。

「カツシュ博士、ミカムラ博士。お話していた方々をお連れした」

「ああ、話は先程、別の者から聞いていたが……本当にこの二人がアルティメットガンダムの監査役なのかね? それにしては……」

「そうらしいです。実際、軍の者と一緒に来ています」

「大丈夫なのか?」

「上はいったい何を考えているんだ……ここは子供が来るような場所ではないのだぞ……」

ドモン・カツシュやキョウジ・カツシュと似た三白眼を持つライゾウ・カツシュ博士とミカムラ博士がこちらを見詰めてきていたので、振り返って改めてしっかりと挨拶しますの。

「私はアルフィミイ・ブロウニング。こちらは助手のルリ・ブロウニングです。若輩者ではありますが、よろしくお願いするですの」

「よろしく、お願いします」

ルリちゃんと一緒に頭を軽く下げてから、お二人を見ますが、やはり警戒されておりますわね。まあ、子供に危険な精密機械を触らせるわけにもいきませんしね。

「本当にナノマシンを扱う技術を持っているのか？」

「ええ、持っていますわよ、カッシュ博士。そもそも私達の身体には大量のナノマシンが入っておりますので、扱えなければ人の形すら保ててはいないかもしれません」

「なんだと？」

「まさか、コーデイネーターなのか？」

「はいですの。私達は遺伝子を改造されて生み出された存在です。実際、私は見た目通りの年齢ではありませんのよ？　ただ、この姿の方が可愛らしいからしているだけですよ」

「若すぎないかね？」

「何をいっていますの！　アルフィミイちゃんはこれで完成しておりますのよ！」

「そ、そうなのか……」

カッシュ博士達が引き気味ですけど、知った事ではありませんの。ここで重要な

は、私が見た目通りの年齢ではないと教える事ですの。実際に前世を合わせると……複数人が混ざっている可能性があるために普通に100を超えるかもしれない。含めなければ生まれて一年未満の赤ん坊ですよ？

「とりあえず、ナノマシンの技術に関してはかなり自信がありますの。パーソナルルーパーなどのロボット技術は勉強中ですが、ナノマシン技術に関する事なので問題ないかと。そうですね……簡単にどれくらいかと言いますと、ナノマシンを操作できますの」

懐から硬貨を取り出して見せた後、それをナノマシンで浸食して分解して一部を砂のような状態に変えますの。

「このように操作が可能ですの。それでも認められませんか？」

「いや、問題ない。失礼した」

「確かに、これなら……だが、そちらの子はなんなの？ 助手とのことだが……」

「ルリは持つてきた機体に私と一緒に搭乗してもらうんですの。あの機体は一人ではまともに扱えないので、情報処理や武器の調整などをしてもらいますの。彼女もナノマシンを操作できるので、私共々問題はありませんの」

「任せてください」

「わかった。アルティメットガンダムの開発と君達が持つてきた機体のテスト、両方を

やるのだね？」

「はいですの。アルティメットガンダムはあくまでもカツシユ博士達が作っているものですし、私の仕事は監査と安全対策が取られているかどうかを調べる事ですの。安全が十分に確認できない場合は本計画の凍結もありえますの」

「それは……」

「これは地球を再生するために必要な研究だが……」

「その研究で人類が滅んだり、地球が死滅してしまつては意味がありませんの。先程見せた分解を地球規模で行えるようになるのが、このアルティメットガンダムですよ？」

ルリ、これを画面にお願いしますの」

「はい。ちよつと借りますね」

ルリちゃんが機械をハッキングして操作し、私が送ったデータを表示させますの。それは人がドロドロに崩壊していく動画ですの。ルリちゃん達が居た研究所に保存されていた物で、ナノマシンが暴走するとどうなるかという事が克明に記されております。

「人体にこのように影響を及ぼす危険物を地球全体に放つなど、狂気の沙汰であり、とても認められませんの。ですの、幾重もの安全策が必要です。特にアルティメットガンダム仕様を調べさせてもらいましたが、どう考えても人だけでは現行のインターフェースを使つても操作はできません。AIを使う予定ですよ？」

「ああ、そうだ」

「そのAIが地球を再生させるのに人類を不要と判断する可能性がありますの。もちろん、対策は取るのですが、人がやる事なのでミスが存在します。また、不確定要素がかかわってきますの。例えば大気圏突入でシステムにバグが生じるなど、可能性は様々ですの」

これらは全て、原作で実際に起こったことです。ウルベ・イシカワとカツシュ博士に嫉妬したミカムラ博士が共謀して事件を起こしました。それによってカツシュ博士は奥さんが死亡し、キョウジ・カツシュはアルティメットガンダムに乗って地球へ逃亡。当然、彼等を追って派遣された軍と交戦し、負傷を負ったアルティメットガンダムはそのまま大気圏に突入して致命的なバグを発生させますの。

そのバグによって人類を必要ない者と判断し、アルティメットガンダムはキョウジ・カツシュを生体コアとして取り込み、一年の間を地下で潜んで傷を回復させると同時に進化を行いました。そして、地球を再生させるはずだったアルティメットガンダムはデビルガンダムへと変貌したのです。

「しかし、そのような事は……」

「起こりえるというのか?」

「可能性としては低くありませんの。そもそも地球の環境を破壊しているのは人類がほ

とんどですの。地球を再生する役目を持つAIが人類を必要ない存在だと判断するのは当然ですの」

「プロテクトをかけたとしても、常に思考し続けければ論理破綻に陥るか……」
「そうなれば暴走する事は確実だ……」

流石にカツシュ博士もミカムラ博士もすぐに理解してくれたので、対策を話し合っ
ていきますの。今ならまだミカムラ博士も闇落ちしておりませんね。少し嫉妬を感じ
ているくらいみたいです……原作前は最高ですの！

「以上の事から安全策は必須ですの。まず自爆装置は鉄板として……」
「あの、そもそもAIで操作をするんじゃないやなくて、IFSでイメージした通りに操作をす
ればいいんじゃないや……」

「いや、それがこの機体はスーパーロボット対戦に参加するためにも作られていてね。
人の動きを真似るトレースシステムを搭載している。格闘家が実力を発揮できるよう
にするためのものなんだが……」

「いや、ミカムラ君。IFSは確かイメージを全て機械に伝えて操作する物だったはず。
それならナノマシンを制御する時だけ、トレースシステムからIFSに変えればいける
のではなからうか？」

「残念ながらその、スーパーロボット対戦の条約でコーデイネーターの出場は禁止とさ

れました」

ルリちゃんという言葉で博士達が溜息をつきますの。あくまでも、アルティメットガンダムはガンダムファイト、スーパードット対戦用の機体という事ですよ？

「あの、一つぶつちやけていいのですの？」

「ああ、構わないが……」

「その方がいい意見がでるかもしれないからね」

「アルティメットガンダムでどちらもする必要なくありませんの？ ファイターとしてのアルティメットガンダムと地球再生用のガンダム。二体作ればいいのですの。これならIFSを使っても問題ありませんし……ああ、それこそ戦艦みたいなのを作ってファイタータイプを修理や補給できるベースにしたらどうですか？ これならナノマシンで修理が可能ですよ……」

「なるほど……確かに一つに纏めるよりも二つに分けた方がいいかもしれない」

「だが、戦艦を作る知識は流石にないぞ？」

「それでしたら、上に掛け合ってみますの。ひよつとしたら、戦艦の設計図が手に入るかもしれませんし、資金援助も受けられるかもしれませんの」

言ってしまうえばメンテナンスフリーの戦艦とモビルファイター……パーソナルルーパーが手に入るの、軍も喜ぶはずですよ。それにこれは私としてもナデシコを作

る参考にもなりますし、是非ともやらなくてはなりませんの。

それにしても、このまま上手くいけば……デビルガンダムはアルティメットガンダムのままで戦力になりますの。ただ、そうなるとせっかく戦力になるドモン・カッシュが育たない事になってしまいますが、そこはキョウジ・カッシュが現役で活躍できると考えれば何の問題もありませんわね。

あれ、結果的にGガンダムは参戦してくれていて助かりましたの？　これはやったー！　案件ですの！　原作前のGガンダム最高ですの！

第16話

ミーティングルームで現在起こっている事態を確認する。メンバーは俺とレモン、ヴィンデルの三人だ。正面にある大型モニターには南極とアンノウンが展開されている。防衛網が衛星からの映像によってリアルタイムで映し出されている。確認されるだけでも、相手の数は既に千を超えて万に達しているようだ。

南極に現れたアンノウンに対する核攻撃。それらは全てが失敗に終わった。南極に配置された無数のアンノウンから放たれるレーザーが核を搭載したミサイルを到達する前に撃ち落としたからだ。それにゴ丁寧にも発生した放射能は植物みたいなアンノウンによって全て吸収されている。

本部ではパーソナルトルーパーやアーマードモジュールによる殲滅作戦も核攻撃前に提案されていたそうだが、それは火星やプラントとの戦争を考えると戦力の消耗を嫌った上層部が却下した。

アンノウンが制圧している南極はほぼ人が退却し、おもだった資源もないために核攻撃を判断したのだろうか、アンノウンの力を甘く見たということだ。

「アクセル、これからどうなると思う？」

「当然、あちら側からの反撃だろう。反撃でなくとも、何か動きがあるはずだ。無ければ次はブラックホールによる攻撃だろうが……連中の敷いている防衛線を突破するのは難しいはずだ。最低でもP TかA Mで迎撃戦力を突破するか、それこそ自爆特攻して連中の防衛線を突破して発動するしかないな」

「どちらにせよ、被害は甚大になるでしょうね」

「上の連中がしっかりと理解していたらいいがな」

何せ、インスペクターとの戦いは既に遙か昔だ。数十年も経てば仕方がないのかもしれない。そう思っていると、アラートが鳴り響く。

「不味い事になった。世界中に大規模な転移反応が確認された」

「アクセルが言っていた通り、相手側からの反撃かしら？」

「空間転移の妨害はどうなっているんだ？」

部隊の連中に出撃させる。こちらにも来ているから、対処しなくてはいけない。

「作動させているのでしようけれど、インスペクターが使っている転移技術とも違うし、先の大戦でも手に入れられなかった技術なのだからまだそこまで進んでいないはずよ。テスラ・ライヒか、どこかで研究していたはずだけど、進んでいないわ。まあ、転移反応を観測する程度はできるけれどね」

「ちっ、仕方ないか」

「映すぞ」

モニターを見ると、世界中の映像が区分けされて映し出された。まだ何も映っていないが、すぐに地震が起きる。足元が揺れ動き、倒れそうになるレモンを支えてやる。

「大丈夫か？」

「ええ、ありがとう」

地震の揺れが収まると、モニターの画面には数十メートルを超える骨の化け物や植物の化け物が現れて道やビルとビルの間を塞いでいた。どうやら、相手側の反撃は世界規模のようだ。

「インスペクターよりも酷いわね」

「連中の転移技術は纏めて大量に送る事しかできなかったが、こいつらは違うようだしな」

「ええ。こいつらの外見から以前から地球に存在していたのは確定ね。アルフィミイちゃんの身体に使われている遺伝子はおそらくだけど、このアンノウンと同じ物よ」

「アイツが使っている植物と似ているからそうではないかと思っただが、やはりか」

「詳しい事はわからないわ。でも、あの子の髪から自然に抜けた毛とヒリユウ改が持ち帰ってきた物を調べたデータを見る限りは同じ物よ」

「怪しいな。本人はどうしている？」

「コロニーに到着したそうさ。つけている監視から連絡が来ている」

「アイツがメツセンジャーになる可能性もある。警戒だけはしておけ」

「わかっている。それよりも連中がどう動くかだ」

見た限り、攻撃はしていないようだ。ただ、地面や電線に植物の蔓のような銀色の物体を巻きつけたり、地中に銀色の物体を突き刺したりしている。

「連絡が来た。だいたい均等に1キロの間を開けて大量に転移させたようだ。基地ですでに戦闘が始まっている場所もあるが……俺達は どうする？」

当然のようにここにも敵が転移してきている。即座に部隊は出撃しようとしているが、どうなるかはわからん。

『隊長、迎撃システムが動きません！ 隔壁も動きません！』

「レモン！」

「やられた！ 施設が乗っ取られたわ！ すぐに対処するから数分だけ時間を頂戴！」
「直接転移してきたのは基地の掌握の為か」

「それだけじゃないわ。どうやら、ネットワーク自体を押しえられてるみたいよ！」

「まさか、アルフィミイにバックドアでも仕掛けられたか？」

「違うわよ！ そんなミスはしていないわ！ 単純なスペックの違いよ！ 数億、数百億を超える高性能演算機で物理的に攻められてるの！」

「数の暴力かよ……」

「映像だけこちらに出せるか？」

「任せて」

レモンがヴィンデルに答えて映し出してくれた映像には他の街と同じような光景が映し出されているのを確認した。対策を考えていると、いきなり画面が切り替わる。そこに映し出されたのは黒い髪の毛に金色の瞳をした幼い少女だ。長い髪の毛は赤いリボンでツーサイドアップにしている、確か日本の民族衣装である黒い浴衣に赤いスカートをしている。

彼女の身長は140cmくらいで、後ろの背景には空が移り込んでいる。それに連邦政府議会と彼女の隣にゲシュペンストの頭部が移り込んでいるのがわかる。

『私は裁定者アインスト・ネメシス。人類及び地球に住まう者達へ、しばし時間と場所を頂くが許せ。さて、現在行われている戦闘行為を全て停止せよ。そちらが攻撃しない限り、こちらは反撃しない事を女王陛下より全権を頂いた私が保証する。そちらが何もしない限り、こちらは伝える事を伝えれば一部地域を除いて即時退却させる事を約束しよう。主要都市からも即座に引かせる。ああ、救助活動などは好きに行つて構わないぞ。なんなら、少し手伝つてやつてもいい』

俺はヴィンデルの方を見る。するとヴィンデルも頷いたので部下達に指示を出す。

『戦闘行動を中止し、救助と被害状況を確認しろ』

『了解しました』

「レモン、今のうちに施設を取り戻せ」

「やってるけど、相手はまるで地球全ての演算機器を集めたような存在なのよ……物理的に破壊する事も覚悟しておいて」

「それは避けたいな。相手は話をするだけみたいだが……」

「とりあえず聞くだけ聞こう。時間をくれるみたいだからな」

「そうだな」

通信機器も制圧された現状、上からの命令も伝わってこない。そうなると俺達は好き勝手に動ける。戦う必要すらないのかもしれない。

『さて、会話する知能もない愚か者共も鎮圧出来た事だし、話をしようか。私はめんどくさい事は嫌いだ。だから単刀直入に告げる。数日から数カ月の間、南極には一切の手出しを禁じる。貴様等は気付いていなかったようだが、南極にある古代文明の遺跡には地球どころか、宇宙……世界を滅ぼす危険な存在、破滅の王が封じられている』

「『は。』」

『我々アインストは地球に生きとし生ける生命の種を撒いた者として、地球の守護を担っている。故に地球ごと世界を滅ぼす危険な存在を愚かにも解き放とうとした南極

に居た連中は看過できない。だが、破滅の王は精神支配を行う。故に除染が完了し、遺跡を異空間に封印を行えば我々は南極からも撤退する。それまでしばし待て。待てぬという愚かな種族は裁定者として地球に不要な存在として排除も視野に入れることになる。

ああ、それとこれは警告だ。貴様等は地球を壊し過ぎだ。これ以上、破壊が続くようならば如何に我等が子だといえど排除の対象になる。実際、女王様は排除せよとおっしゃっている。だが、私は貴様等が作り出した文化は好きだ。故に待って頂いているが、そろそろ止めるのは限界だと心得よ。特に隕石やコロニー、資源衛星を落とすなどもつてのほかである。そもそも何故、同じ人類で争うのだ。外敵である宇宙人共とやり合っておればよからう！ この世界にはインスペクターと言われているウォルガ以外にもゼ・バルマリイ帝国やアンドロメダ流国、使徒など、地球を狙っている連中はうよ居るのだぞ！ 敵を履き違えるでないわ！』

コイツの言っている事が本当なら、地球を狙っている連中はまだまだ居るようだな。『ごほん。少し本音が漏れたが気にするな。さて、聞いての通り、敵はまだまだおる。そう遠くない内にやってくるだろう。特に内乱などしている時は連中にとつては好機である。精々、人道に則りながら技術開発に邁進せよ。貴様等が生かされているのは地球を守るための先兵としてだ。そうでなければとつくの昔に爬虫人類共と同じように天

変地異でも起こして排除している。何故、この地球を含める太陽系に古代文明の遺物がごろごろしているかよくよく考えよ。以上だ。今回の事は貰った慰謝料で許してやる。次はない。地上に展開している全部隊に告げる。即時撤退……いや、建物が崩れないように処理してから撤退せよ』

通信がブツンという音と共に切れた。レモンの方を見ると、彼女は溜息を吐く。

「全システムの掌握が出来たわ。もつとも、連中が手を引いたからだけだ。それとやられたわ」

「何をだ？」

「こつちが作つてた機体のデータとか何からなにまで持つてかれたわ」

「それが慰謝料か」

「通信はどうだ？」

「回復したわよ」

「わかった。連中が撤退したのなら被害状況を確認し、システムを洗い直してくれ。バックドアが仕掛けられていたら困るからな」

「了解。ついでにシステムの構築をし直し、新しい高性能コンピューターの開発も考えないといけないわね」

「ネットワークに繋げなくても、物理的に繋げられたらどうしようもないか」

「それと転移技術の開発は必須ね」

「予算はどうか確保しよう」

「お願い」

これから忙しくなるが、とりあえずは上が馬鹿でない事を願うしかないな。わざわざ優しい事に忠告までしてくれたんだ。本来ならここで俺達を滅ぼす事もできたはずだ。すくなくとも首都や大都市を全て破壊され、ネットワークを寸断されたら俺達は孤立して殺されるしかなかった。それを相手はしなかった。本人の言う通り、文化と先兵としての役割を期待されているからだろうな。

「……上層部は本気か？」

「ヴェインデル？」

「おい待て。まさか……」



ネメシスで忠告してから数日後。人は信じた物しか信じない。誰かがそう言いましたが、どうやら事実のようです。ネメシスでちゃんと警告してあげたのになんで南

極に手を出そうと南アフリカに戦力を集めているんですの？

ちゃんと監視網を作っているのだから筒抜けですよ？

火星とプラントの相手しろよ。わざわざインスペクターのウォルガ以外にもアンドロメダ流国やゼ・バルマリイ帝国が存在するんだって教えてあげましたのに……もうやだ、この地球。幸い一部だけのようですが……これ、報復しないといけませんのよ？

と、いうわけで、報復は可愛らしい悪戯にしますの。えい♪

「お姉ちゃん？」

「なんでもありませんわよ」

ネメシスちゃんの名前で動画を投稿。彼等の基地や自宅、施設などから貰ったデータを解析し、上層部の不正をネットワークに大量放出ですの！ ちゃんと彼等が南極に攻撃を仕掛けようとした会議のデータも一緒にです。ちゃんと世論を味方につけるようにしておきます。そもそも誰もネットワークを解放するなんて言ってませんの。そんなわけで、毎日ちびっ子のネメちゃんアイコンを作って全世界にばらまき、不正や人道に悖る行為は全世界にばら撒き続けるとあら不思議。色んなところでデモが起りますの。そもそも自分達の命の事を考えてくれていますしね。政治家たちは自分の場所だけ軍備を固めて、それ以外の戦力は南極に送れとか、とつても笑えますの。

「お姉ちゃん、こっちの準備はできました」

「ありがとうございますの。では、これよりヴァングレイのテストを開始します。そちらの準備はどうですか？」

『何時でもどうぞ』

「了解ですの。アルフィミイ・ブロウニング」

「ルリ・ブロウニング」

「「出ます（の）」」

IFSの操作によって電磁カタパルトに乗ればすぐにカウントダウンが始まり、そのタイミングで発進台詞を言って宇宙へと出ます。電磁カタパルトによってヴァングレイが打ち出され、高速で宇宙空間に出ました。

全天モニターには地球の姿と宇宙空間や衛星の姿が見えてとても綺麗です。宇宙を自由に泳ぐ事はとても楽しいですの。

「ルリ、空気は大丈夫ですか？」

「問題はないようです。各部のチェックも問題ありません。お姉ちゃんの方はどうですか？」

「こちら全システムオールグリーンですの」

「それじゃあ、次は訓練プログラムの開始ですね」

「はいですの。実機での訓練は初めてですが、まあ大丈夫でしょう」

「計算上は空中分解しないはずです」

私達はちやんとパイロットスーツを着ております。とつても脱ぎたいですが、流石に試作機というよりも実験機体でそれをやるのはまずいのです。空気漏れとか空中分解が起こったら死んでいない事に不思議がられますしね。

「訓練プログラム起動ですの」

「起動を確認しました。まずは加速しての機動テストですね」

「腕がなりますの。ルリ、覚悟はよろしいですか？」

「大丈夫です」

「では、いきますの」

スラスターを動かし、徐々に加速していきますの。段々と身体に負荷がかかってきますが、私もルリちゃんも問題ありません。スラスターを全開にして最高速度に達したら、次は上下左右に動かしていきます。瞬間的に20から24Gほどまでかかりましたが、なんとか耐えますの。

「ルリ、大丈夫ですか？」

「……」

「返事がない、屍のようですよ」

数十分、無茶苦茶な軌道で動かしましたが、流石にブラックアウトしたようです。

推進剤が無くなったので、一度戻ってから補充します。その間、ルリちゃんを膝枕しながら、機体の各部に異常がないかを確認しますが……関節部に異常だらけでしたの。幸い、空中分解をするほどではありませんでした。流石はレモンお姉様の作品ですの。

パーツのすり減り具合とかを確認したら、それをシミュレーターに入れて最適な動かし方を模索しますの。関節部の消耗をすくなくしないと長時間の戦闘はできませんからね。

「お姉ちゃん……」

「起きましたの？」

「うん……」

「もう少し寝ていますか？」

「大丈夫です。まだやれます」

「わかりましたの」

ルリちゃんが起きたので訓練を再開。もちろん、部品は取り変えてあります。取り変えた部品はナノマシンの修理装置に入れて、試してみます。こちらはカツシユ博士達が作った品物なので、そのテストを兼ねています。

ルリちゃんがブラックアウトするまで続けて機体の限界を調べていきますの。

三日も繰り返すとルリちゃんも慣れてきたようで、普通に加速に耐えながら会話や操

作ができるようになりました。流石はアインストの因子ですの。

「次のテストに移行しますの。的を出してくださいですの」

「了解。モニターに出します」

直に全天モニターの至る所に敵を示すマークが現れますが、どれも動きませんの。これはあくまでも全天モニターに表示しての的がそこにあるかのように見せかけているだけですの。攻撃も実際には放たず、システムが命中か外れかを判定しているだけです。

そんなわけでコースを瞬時に設定して加速し、射撃しながら一通り回ってみますが、滅茶苦茶外しましたの。

「やはり、移動しながら射撃は止まっている敵が相手でも難しいですの」

「私も武器を選択したり照準するのが難しいです」

「まずはゆっくりとやりますの」

「それがいいですね」

二人で領いてから、速度を落としてゆっくりと丁寧に武器を選択してもらい、それを持って撃っていきますの。段々と速度を上げていきながら最適化をしていきます。流石にアインストの身体でも上手くいきません。まだまだ息も合っていないので仕方がありませんの。

二人で訓練を続けるしかありませんの。この上のレベルは的が動き、その次は反撃し

てくるのを設定しています。シミュレーターで上手くいっても、実機だとその場で宇宙空間のコンディションとかも変わるので大変です。デブリとかもありますしね。

「ルリ、大丈夫ですか？」

「な、なんとかですが……」

「それなら、お風呂まで連れていきますの」

「はい……お願いします……」

ヴァングレイのkokopittから何時もの通り、ルリちゃんをお姫様抱っこで連れ出してお風呂場に向かいます。ヴァングレイは一緒に付いてきている技術者の人にお任せします。ちゃんと運びながらデータを整理して送っていますので問題ありません。細かい調整や改造、OSの調整などは私も手伝います。基本的に見つかった問題はここ施設を使って潰させていただきますので、日に日にヴァングレイは完成へと近づいていきます。武器もちゃんと実際に使って改善点などを上げていっているのでこちらも問題はありません。

さて、動けないルリちゃんを借りている部屋に連れ込んで服を脱がせて素っ裸にします。私も裸になってルリちゃんを抱えてお風呂へと入ります。このコロニーは日本所有だからか、ちゃんとお風呂があるので訓練が終わる時間に湧くように調整してあります。

シャワーで汗を流したら、抱き着きながら泡立てた手でルリちゃんの身体を隅々まで綺麗に洗っていきます。身体のマッサージも兼ねて綺麗にしてあげたら、ルリちゃんを先に湯船に入れてから手早くアルフィミーちゃんの身体も綺麗に洗います。

その後はルリちゃんを膝の上に乗せてゆっくりまったりと癒しタイムです。ちなみに早朝から夕方までカッシュ博士とミカムラ博士と一緒にアルティメットガンダムの開発を行います。夕方からヴァングレイのテストです。食事はコクピットの中で取りますし、寝る前に食べたりもします。どうせこの身体は太りません。カロリーは全てエネルギーへと回せますので便利です。

お風呂では癒しタイムなのでお仕事の話はせずにただくっついてまったりするだけで、終わればしつかりとお仕事です。食事をしながら反省点を洗い出し、ルリちゃんと相談してより良いやり方を模索して、開発計画なども考え、近況報告も兼ねてレポートに纏めてレモンお姉様に提出。お姉様から許可ができればこちらで作ってヴァングレイに反映させますの。

これを提出してから少しすればラピスやレモンお姉様とお話タイムです。お姉様はとても大変そうですが、頑張ってください。こちらも送られてきたデータを処理したり、改善点を出したりしてお手伝いしますの。

日付が変わればルリちゃんと一緒にベッドに入って、彼女を抱きしめながらルリちゃ

んが眠るまで頭を撫でてあげますの。ルリちゃんが寝てからはアインストとしてのお仕事ですの。

まず、月に放ったレジセイアは順調に月と同化しながらハイパーゲートとヴェーダを調べてもらっております。

ハイパーゲートはその構造と技術を調べ、ヴェーダは位置を調べている状態ですね。

コロニー・メンデルの方はレジセイアと同化が完了し、内部で世界中から頂いたデータを使って色々と実験をしております。例えばナノマシンの製造工場だったり、アルティメットガンダムの自己進化、自己増殖、自己再生のナノマシンを使った人造人間の肉体を開発したりですね。こちらは戦術的に扱える機械兵士として戦術人形アンドロイドを目指しておりますの。イメージとしては完全に金色の闇やメア、マスター・ネメシスと同じトランス兵器ですね。ドラマで言うトスミス？ あれはまた違いますか。

それと事故による緊急事態で施設が放棄されたため、内部には様々な情報が手付かずで残っていましたの。ラウ・ル・クルーゼやキラ・ヤマトなどの情報はありましたが、残念ながら実物のDNAなどは死滅しておりました。ただし、DNAMAPなどは暗号化されて隠されておりましたので、それから培養する事は可能ですの。ただ、ブレインコンピュータを搭載するか、機体にゼロシステムやエピオンシステムを搭載したらあまり変わらないと思いますの。SEEDが発現された際は空間や環境の把握、認識力が劇的

に向上するだけでしてゼロシステムとたいして変わりません。ああ、でも基礎スペックが上がるので有効といえれば有効ですの？

単体同士で比べたら同じ力でも、併用すればより効果は高まるはずですし……種で潜在能力を覚醒させ、ゼロシステムで更に倍率ドン！

思ったよりもいけそうですの。人の事を一切考えなければですが。やつちまいますか。やつちまうしかありませんの。よし、キラ・ヤマトK 細胞を培養してアインストにも適応させましょう。正直、アインストは雑兵には勝ってもエースにはそれなりのダメージしか与えられませんしね。潜在能力を引き出してやればもつとやばくなりますの。ただ、これをするともし、私とお母様が争う時には敵側が強化されますの。そう考えると……止めておきましょう。作った戦術人形だけにしておきましょう。

あ、ステラちゃんの身体を作るためにもキラ・ヤマトの遺伝子を合わせるといいですわね。金色の髪の毛的にはカガリですが、彼女はちよつとアレですし？ 最終的には問題なくりますが、最初は本当にお転婆で立場考えてつて言いたくなりますの。お姫様がテロリストになるのは問題ありすぎます。

やつぱりキラ・ヤマトのDNAが最有力候補ですわね。あ、研究して必要な部分だけ引き抜いて強化しておきますの。クスハやリュウセイ達の遺伝子を使うのも忘れませんの。スーパーコーデイネーターならぬハイパーコーデイネーターにしますの。念動

力装備のアンドロイドコーディネーター・ステラちゃん！ 属性もりもりですの。でも許しますの。ちゃんとシン君と出会わせてあげます。カップルになるかはわかりませんが、二人には幸せになって欲しいですからね。

ラウ・ル・クルーゼにもメールを送っておかないと手遅れになりますわね。彼は優秀なので是非とも仲間に引き入れたいのですの。それに彼が仲間になればザフトを裏から操れますしね。そうなると火星ですが、あそこもお姫様が婚約する前に伊奈帆とくっつけないといけませんし……アレだけは認められないのですの。

しかし、こうなると地球連邦に協力するのも考えものですの。いつそ、ザフトや火星に協力して内部から技術情報を貰うのも考えましよう。

「はあくそれにしても、やっぱリルリちゃんは可愛いですの」

ナデナデして癒されながら、何か忘れている事はないかと考えていたら……オモイカネを作っておりませんの。それにナデシコの建造もしないといけません。まあ、戦艦やEOTのデータは貰ったので、それを使ってつくりましよう。その為にはドックから作らないといけませんし、資源が足りません。ちよつとメンデルから小型アインストを派遣して資源衛星を確保するとしましょう。後は、宇宙海賊やジャンク屋をするのもありますわね。ウォルガとの戦いで出来たデブリが残っているかもしれないしね。



「む、メールか。送り主はアインスト・ネメシス？ 詐欺か？」

第17話

火星 レイレガリア・レイヴァース

現在、私、レイレガリア・レイヴァースが居る場所は火星。そこにある古代文明の遺跡。その深部で主だった者達を集めて話し合いが持たれている。

私の前にあるモニターには現在の地球の状態が映し出されている。地球ではアインスト・ネメシスとその支配下にあるであろうアインストと呼ばれる生命体が地球と月、周辺の宇宙空間に出現して地球人類に対して警告を行った。我々はこれについて話し合いをしているというわけだ。

「父上。連邦政府は南極に進攻しようとした事で報復として高官が腐敗している証拠を世界中にばら撒かれたようです」

「警告か」

「おそらくは……」

息子であるギルゼリアが私に報告してくる。この部屋に居るのは私とギルゼリア。それに火星の軍として用意する騎士達だ。

「陛下。現状、地球は各地でデモが起こり、混乱しております。今ならば建国も容易くできましよう」

「否。そもそも陛下と我等火星騎士の力を持つてすれば容易い事！」

「実際に転移技術による奇襲の有用性はアインストが証明してくれました。ボソンジャンプを使えばどうとでもなりました」

「ボソンジャンプか……しかし、A級ジャンパーは数が少ない。大規模な転移はハイパーゲートを使わねばならぬ」

古代文明の管理システムより私は継承者として認められた。だが、それはジャンパーとしての素質があったからだ。現在、火星に住んでいる王族は全員がA級ジャンパーとなっているが、騎士達はB級ジャンパーだ。A級とB級はボソンジャンプをする時に思った通りの場所に跳躍^{転移}できるか、できないかの違いだ。

「どちらにしろ、ハイパーゲートの確保はしなくてはならないだろう」

「その前にですが、アインストの語っていた事は事実ですか？」

「事実である。システムがそう言っていたが、もう一度聞いてみるとしよう」

私は実際にシステムをここに呼び出して聞いてみる。

「アインストについて知りたい。答えてくれるか？」

『畏まりました。アインストは我等の文明より遙か太古から存在する精神生命体です』

「精神生命体……身体を持たないのか？」

「だが……」

『彼等はその地球に生命の種を撒き、生物の進化を見守ってきました。しかし、それが一定以上の文明になり、地球に害となると判断され、幾度も文明を滅ぼしては生命の種を撒き直しております』

「それでは箱庭ではないか！」

『その通りですギルゼリア。アインストは滅ぼす過程においてその生命体を取り込み、解析して研究し、自らに適応させて進化している事が我等の文明では判明致しました』
「収穫の時期が来たら刈り取るというわけか……目的は進化か？」

『不明です。代弁者を名乗る存在はその都度現れましたが、かの者達は地球を守る事に固執しており話になりませんでした。また、まれに代弁者を説得できたとしても女王の命令は絶対のようで、不必要と判断された場合は消滅させられた記録があります』

「破滅の王に関しての情報はあるか？」

『ごいけません。しかし、アインストがあそこまで必死になるのであればその可能性が非常に高いと思われます。その者に対抗する為にひたすら進化を繰り返しているというのなら納得できると思われます』

「確かにそうだな」

「ああ」

しかし、古代火星文明を滅ぼしたのがアインストであるのならばこのままでは不味い。我々がアインストと戦つて勝てればいいが、勝てる可能性は限りなく低い。何せ、我々はアインストに滅ぼされた古代火星文明の技術を使っているだけなのだ。敗北する可能性の方が遥かに高い。

「では、どうしますか？」

「地球を破壊しないように制圧するのは可能か。いや、それ以前にアインストを滅ぼす方法はあるのか？」

『アインストを滅ぼす方法は単純です。延々と戦力を送り込んでくる女王が居る空間へと攻め込み、勝利すれば良いのです。その為にはアインストの転移反応を解析したり、ビーコンを打ち込んで回収させたりなどがあります。我々はアインストに対抗するために延々と技術開発を続けております。木星でも200年ほど前にやってきた人類に力を貸しました。データでは特殊なエネルギーを生み出す炉心の開発施設を提供したと残っております』

「ならば木星に連絡を取り、同盟を結ぶ」

「そこは我等が支配するのでは？」

「それでは連邦政府と変わらん。我等はあくまでも連邦政府の横暴な態度に我慢できず

に立つのだ。プラントや木星の者達も我等の同胞として迎え入れ、地球とアインストを撃ち滅ぼす」

「畏まりました。ですが、まずはハイパーゲートを確保しなくては話になりません。奴等はこちらに転移して核を打ち込んでくるでしょうからな」

「いや、それならこちらから閉じれば良いのではないか？ 木星やプラントと同盟を組み、準備が整うまではプラントに地球連邦軍の相手をしてもらえば我等に被害は少ないだろう。代わりにこちらは兵力を提供すればよい」

「プラントならば兵力よりも食料や資源などの方が喜ばれるだろう」
「であるな。システムよ、ハイパーゲートを閉じる事はできるか？」

『了解しました。アクセスを開始します。エラーが発生しました。原因を解析します』
「どういふ事だ？ 今までシステムにバグがあったことなどない。これはかなり不味い状況かもしれん。皆も不安がっておる。」

『判明しました』

「して、どうじゃった？」

「ゴクリと唾を飲み込みながら聞いてみるのだが、システムから帰って来た返答は——
『該当施設であるハイパーゲートは……アインストの浸食を受けています』

「！！！！」

『その為、こちらからアクセスして停止させる事ができません。偽装されていて気付けませんでした。月に超大型アインストの反応を確認。排除を要請します』

「要請を受託した。これより、我々は独立を宣言し、月へと攻め込む準備を行う。狙いはハイパーゲートの奪還もしくは破壊だ。良いな?」

「はっ!」

「全軍の指揮はギルゼリア、お前が取れ。王族となるならば、皆に自ら先頭に立つて示さねばならぬ。良いな?」

「お任せください! 必ずや父上のご期待に答えてみせます!」

『進軍準備を開始します。こちらはどうにかハイパーゲートの防衛を行います。余り時間はありません』

「ああ、わかっている。頼むぞ」

『そちらも子供達をよろしくお願いいたします』
「うむ」

古代文明が残したシステム。それを十全に運用するには言語すらも違う我々ではまともに意思疎通ができない。それを解決する方法はただ一つ。人体をヒューマンインタフェースとして中継器とする事だ。故に私は病によって死にかけているアセイラムの母親を差し出した。彼女はシステムによって生かされたが、同時にそれはシステムの

一部として延々と生きる事になる。彼女の意思でもあつたが、それが良かったのかは未だにわからない。



ネオ・ジャパンコロニー　アルファイミイ・ブロウニング

今日も今日とてネオ・ジャパンの名前がついているコロニーで楽しく、楽しく研究ですの。アインストの事もあり、政府は非常事態宣言を発令し、軍備増強に舵を取りましたの。これによって軍事技術に関する事に予算が大幅に増額されました。

「はい、アルティメットガンダムシステムチェックが終わりましたの。これで問題ありませんわ」

「うむ。ようやくここまでできたか……」

「まだ戦艦は終わっていないが……」

「あつちはほぼ既存の品を改造するだけだからな」

私が渡したデータを確認しながら、カツシユ博士は視線をドックの方へ向けます。こちらでは現在、アルティメットガンダムが組み上げられていますの。といっても、シャイニングガンダムみたいな普通の大きさではなく、かなり大きくて太くて硬いのですの。

その隣には大型の戦艦が設置されています。こちらは地球連邦政府から驚きの設計図が渡されました。なんとトライロバイト級万能戦闘母艦ですの。こちらはシャドウミラーが使用する大型艦で、宇宙・空中・水中での運用が可能ですの。というのも、スペースノア級万能戦闘母艦に対抗して建造された艦なので当然です。この子は武装よりもステルス性と搭載能力を重視した設計になっており、テスラ・ドライブで航行しますの。そう、新型のテスラ・ドライブですの。

テスラ・ドライブは重力制御と慣性質量を個別に変動させることが出来る装置であり、小型化と高性能化した事で今作られている機体には次々と乗せられて標準装備となっておりますの。でも、残念ながらヴァングレイちゃんには装備されていませんの。まあ、突貫機体ですから、仕方ありませんの。

ちなみにこのトライロバイト級万能戦闘母艦は無茶苦茶改造されています。まず巨大なアルティメットガンダムがドッキングしたり、シャイニングガンダムなどを格納できたりするようにしてあるので更に大型化しておりますの。追加されている物としては物質を分解してナノマシンを製造する工場。そのナノマシンで修理するパーツの

生産上場と地球環境を解析して修繕するナノマシンを作成する工場。自動でナノマシンが母艦と機体を修復してくれるドックの改装。カタパルトシステムもテスラ・ドライブを利用した電磁カタパルト。テスラ・ドライブは重力制御と慣性質量を個別に設定できるもので、合わせる事で超加速を可能としますの。

発射された機体はテスラ・ドライブでフィールドを展開しないと空中分解待ったなしですが、何も問題ありませんの。正直、まともなパイロットはただの弾丸になるのです。……モビルファイターなら問題ないでしょう。私とルリちゃんでも数回の気絶と何十回も吐きましたが……テストしたキョウジ・カツシュさんは二回で慣れました。化物ですの。

ちなみに武装はVLSミサイルランチャー、ターニング・ビーム、DOBキャノン、拡散粒子弾が多数配置。バルカン砲も対空装備に用意してあります。艦内にも無人防衛システムを多数配備。そして防衛系のエネルギーフィールドと小型化した最新式テスラ・ドライブと大型の戦艦用高性能テスラ・ドライブを更に追加したことでフィールドも展開可能。外側はテスラ・ドライブのフィールドで銃弾やビームの方向を逸らし、貫通してきてもエネルギーフィールドで防衛しますの。そして、肝心のエネルギーですが、プラズマジエネレーターを複数連結する事で膨大なエネルギーを生み出しております。本当は時流エンジンとか搭載するといいいんですが……

「いや、これはもう新造のような物ですの」

「はい。原型をとどめていません。というか、お姉ちゃん……やりすぎでは……？」

「……やっぱりですか？」

「はい」

「デビルガンダムをイメージしたガンダムヘッドの戦艦ちゃんは資材回収用の触手もある……これ、どう見ても合体したらデビルガンダムですの。」

「ヤツちやつたですの」

「馬鹿ですか？ マッドなのですか？」

「テヘペロ」

「……」

「ああ、ジト目は止めてくださいですの！ 新たな扉を開いちゃいそうですのよ？」

「はあ……ちゃんと対策はとつてありますよね？」

「自爆装置と緊急用の強制停止コードに加えて自壊コード。脱出装置なども完備してありますが……あくまでも人が操作しないとけませんの。まあ、最低でも10人以上のIFSを持つ人が必要ですわね。十全に動かすなら100人くらいは欲しいですの」

まあ、工場類は全部AI制御させればそこまでの人数は必要ありませんの。ただ、暴走した時の被害がとんでもないので最低でもナノマシンに関する場所には人が欲しい

ですわね。ああ、ちゃんと人を取り込むような機能はつけておりませんの。

「アルティメットガンダムテストをする。アルフィミイ君、ルリ君、手伝ってくれんか？」

「畏まりましたの博士」

「わかりました。ヴァングレイの用意をします」

「お手柔らかに頼むよ、二人共」

「こちらにやってきた男性が私とルリちゃんの肩に手を置いてそう言ってきました。上を見上げればそこにはアルティメットガンダムのパイロットであるキョウジさんがいます。イケメンでムカつきますの。」

「はい、任せてください……」

特にルリちゃんの頬が少し赤くなっているところが気に入らない。そんなわけで、ルリちゃんを抱きしめて威嚇しますの。

「シャアー」

「悪かった。それよりも頼むぞ」

「ポッコボコにしてやりますの。武術ではポッコボコにされていますからね」

「仕返しか」

「ですの」

「お姉ちゃん……」

せつかく、キョウウジさん……シユバルツ・ブルーダーの中身が居るんですから格闘術に関して修行をつけてもらいました。その時にこのアルフィミイちゃんの美少女ボディーを無茶苦茶お触りしてきますの。

「いろんなところを無理矢理触られた恨みは返しますの」

「キョウウジさん？」

「違う。誤解だ。殴ったり蹴ったりしたただけだ」

「お姉ちゃん？」

「嘘は言っていないませんの」

「まったく……お姉ちゃんがごめんなさい」

「いや、構わない。それにこの頃はかなり強くなっているから、俺もいい修行になる。ド

モンに会わせてみたいぐらいだ」

「是非、お願いしますの」

「なんだ、弟に興味があるのか？」

「ええ、とつてもありますの。流派東方不敗に」

「そつちか」

「私は女の子が好きなのです。男なんて必要ありませんの」

「おいおい……ルリちゃんは大丈夫か？」

「私はどうでもいいです。お姉ちゃんとラピスが居れば……」

「ルリちゃん！」

思わず強く抱きしめてしまいましたが、仕方がありませんの。まあ、実際問題としてアインストは単為生殖たんいせいしよく一般には有性生殖する生物で雌が単独で子を作ることを指す。有性生殖の一形態に含まれるができるので本当に男が必要ではありません。ですから、ルリちゃんに男は私達以外に必要ありませんの！

「スリスリ止めてください。それと痛いです」

「あ、ごめんですの」

「仲が良いのはいいが、余り可愛いがりすぎると嫌われるぞ」

「実感が籠っていますの」

「もしかして弟さんですか……?」

「ああ」

「なるほどですの。私も気をつけましょう。それはそれとして、私にもアルティメットガンダムを乗せて頂けますか？ 開発者の一員として自分で動かして問題点を改善しないといけませんの。キョウジさんからの言葉では伝わりにくいことでも、私が実際に動かすことでわかる事もあるでしょうしね」

「親父達に聞いてみるか」

「お願いますの。こればかりは博士達ではできないですの」

「確かにな」

「お年を召しておられますから、危険ですね」

「そもそもモビルトレースシステムがそのように出来ていないからな」

モビルトレースシステムは完全に人を選ぶ格闘家などの武術家用のシステムですしね。

「何をしている！ 早く移動せんか！」

カツシュ博士からお怒りを頂いたのでさっさと移動しますの。

「怒られたから急ぐか。パイロットスーツはちゃんと着ろよ」

「でも、パイロットスーツは窮屈ですの」

「宇宙なんだから一応な」

「は〜い。ルリ、行きますの」

「はい。それではまた後で」

「ああ」

キョウジさんと更衣室の前で別れ、中に入ってからパイロットスーツへと着替えますの。キョウジさんの方も一応、モビルトレースシステム用の宇宙服に着替えます。こち

ら、ヘルメットつきの奴ですが、宇宙空間でも普通に活動できる奴ですね。原作ではありませんでした。流石に宇宙空間で顔出しは不味いです。いくら何重にも安全対策を取られているとはいえ、コクピットが壊れて空気が抜けたら終わりですしね。

「お姉ちゃん、このパイロットスーツはどうかと思います」

「あら、とっても可愛いのです」

「でも、これは……」

ルリちゃんのパイロットスーツは猫耳のフード型です。緊急時にはボタン一つでヘルメットに早変わり。前の部分もしっかりとシールドに覆われるので酸素供給もできます。何より猫耳に演算機器を、籠手にワイヤーアンカーを。猫の尻尾部分にはレザーなどの器具が取り付けてあるので色々と便利になります。まあ、偽装用ですね。私のは普通の奴です。あんな可愛い着る勇氣はありません。ちなみにナノマシン技術がふんだんに使われていて、お値段はなんと一着四千万です。性能的にはとても便利ですが、正直ハイエンドモデルです。

「さて、行きます」

「はあ……わかりました」

更衣室から出てヴァングレイがあるドックまで移動します。ここ数日でヴァングレイの調整も終了し、テスラ・ドライブも小型化した奴を左右のミサイルポットに取り付

けが終わっていますの。後、トールギスを真似て作ったスーパーバーニアも背中に設置してありますので、ブースターマシマシですの。これぞ高難易度の超高速戦闘ができる馬鹿みたいな機体ですの。普通のパイロットが乗ると死にます。ああ、コウ・ウラキなら生き残れて適応するかもしれませぬ。

「お姉ちゃん、やっぱりこれは止めない?」

「問題ありませんの。慣れれば楽しいですよ? それに私達は進化していきます。ですから、大丈夫です。というか、これくらいの速度を出せないと普通に落とされてしまいますの」

化け物みたいなエースパイロットに対抗する方法として、手っ取り早いのが馬鹿みたいな速度で移動することですの。射撃のタイミングだけ速度を落として長距離狙撃。それも緩急をつけることで相手に予測させないようにしますの。ルートはゼロシテムを使って構築し、途中で適当に遊びも含まれますの。これでこちらも予測不可能にしてやりますの。

「射撃技術も格闘技術もない私達がエースに勝つためには急制動、急加速を使った高速戦闘ぐらいですね。大丈夫。テスラ・ドライブによるフィールドもあるので基本的には攻撃は防げますし、壊れても修理装置もあります。それに敵の中心部で適当に弾幕を張って逃げればいいだけですし?」

「うう……」

正直、戦争が始まりそうなのでこれぐらい馬鹿みたいな事をしないと本当に勝てませんの。相手はボソソジャンプと特殊能力を使ってくるカタストロフですしね。

「慣れれば楽しいですの。それに最高速度で慣れてしまえば普通の速度では物足りなくなりますの」

「それはないと思います」

ヴァングレイのコクピットに乗り込み、対G対策が施されたりニアシートに座りますの。シートベルトをしつかりと閉めてIFSを起動します。ルリちゃんと二人で全てのシステムをチェックし、機体を動かしてみても問題ないかを確認しますの。

「こちらは問題ありませんが、そちらはどうですか？」

「こちらも大丈夫です」

発進シークエンスを開始して、カタパルトで撃ちだしてもらいます。まず慣らし運転に200Gで移動していきますの。テスト・ドライブの重力制御などによるフィードとパイロットスーツなどでGはかなり軽減されていますが、それでも多少はかかってきます。

「慣れました。上げてください」

「了解ですの」

スラスターを上げて更に速度を出しますの。回避軌道を含めて練習していきます。ちなみに全部のスラスターとブースターを使えば最高で $3^{1,059} \cdot 0^{1,182} \text{ km/h}^8$ が限界ですの。基本的に私が十全に操れる状態で戦闘行動を開始するのは $2^{245} \cdot 5^{166} \text{ km/h}^8$ からです。これ以下では軽く潰されてしまいます。だいたい25Gから30Gで頑張つて動き続けないとアクセル達クラスになるとすぐに撃墜されますの。

なお、ナノマシン技術による強化がないとデブリとかは問題ないですが、隕石や小惑星に突撃して埋まります。下手をしなくても機体がヤバイことになって回避とかできませんの。

というか、テスラ・ドライブ二基搭載したら、外宇宙探査船開発計画プロジェクトDと同じ事をしていますの。それに加えてスーパードライバーまでつけていますので、アイビスとフィリオの先に居る事になります。ただ、あちらが凄い事はツイン・テスラ・ドライブを生身の人間であるアイビスが行うということですね。彼女も正真正銘の^{ニス・オラ・ニス}化物ですの。キョウスケやアクセルと同じレベルになりますの。

「目標地点に到着まで約20秒です」

「はいですの」

機体を逆噴射で制動をかけて停止させます。ツイン・テスラ・ドライブを停止させるのにスーパードライバーが必要とも言えます。どちらも相殺させないとまともに止まれ

ませんしね。まさしく動く棺桶ですの。

「来ます」

ネオ・ジャパンコロニーの方から高速で接近してくる機体は電磁カタパルトとテスト・ドライブで打ち出されてきたアルティメットガンダムですの。こちらの数倍はある大きさで武装も色々とはばいのですの。

今回、アルティメットガンダムは上半身はそのまま、足の部分に赤い装甲パーツをつけてバランスを取った形ですの。装甲パーツには色々とは掛かけがありますので、戦闘にも十分に使えますの。

『待たせた。相変わらずおかしい速度をしているな』

「それが売りですもの」

「お姉ちゃんはやりすぎだと思えます」

「だって、そうじゃないと負けますもの！」

「まったく、負けず嫌いなんですから……」

『そうだね』

「キョウジさんもです」

とりあえず、二人して明後日の方向を見ておきますの。そうしながら機体を動かしてリングの中に入っていきますの。少し待つと、モニターに画面が現れます。

『注意事項を良く確認してください。』

1. 頭部を破壊された者は失格となる。
2. 相手のコックピットを攻撃してはいけない。
3. 1対1の戦いが原則である。

構いませんか?』

「『問題なし(です)』」

このリングは宇宙空間に設置されているもので、機体が入ると自動的に流れて中継されます。要は模擬戦用のバトルフィールドですね。これがある場所では戦闘行為が行われていても申請さえしていれば問題にはなりません。

『これより、スーパードボット対戦を開始いたします! 対戦者はアルティメットガンダムVSヴァングレイ! それでは! スーパードボット対戦・レディイイイゴオオオオオオオ!』

「『っー』」

声と同時に後ろに全力で下がり、加速していきます。というのも、相手との距離は結構近いので、加速する時間がありませんもの。キョウジさんもそれがわかっているのので、初っ端から全砲門を開いて一斉射撃してきますの。

「ルリちゃん!」

「はい。チャフを放ちますー」

即座にヴァングレイの足にあるミサイルポットからミサイルが放たれ、相手のビームによつて爆発します。そこからチャフがばら撒かれて誘導用の電子システムを崩します。それに目隠しにもなりますので、これで逃げられます。

拡散粒子弾が無数に追ってきますが、ツイン・テスラ・ドライブとスーパードアの加速性能でマニューバーを行いながら回避し、フィールドを展開したら即座に弧を描くようにして反転して突撃しますの。

「お姉ちゃん、月光です」

「OKですの」

右腕に備えるレールガンを放ちながら、念の為にシールドを構えて突撃します。相手もそれを読んでるので、こちらに両手を構えてきますの。ある程度接近したら両肩部に懸架している可変速粒子砲、疾風を放つて逆に下がりますの。このまま行ったら、投げられるだけですからね。そのまますぐに直角へと上がってから相手の上を通るコースへ移動。ゼロシステムから無数の拡散粒子弾の軌道が送られてくるので、それを回避するようにして相手の背後に周り、背面に懸架している大型の陽電子衝撃砲を右腕に構えてポジットロンカノンを発射しますの。

「行けですのー」

狙うのはアルティメットガンダムのスラスターですの。でも、それも相手が高速移動で回避されるのがゼロシステムでわかっているの、突撃しますの。ポジットロンカノンはルリちゃんが直してくれて、次にプラズマカッターを用意してくれます。

アルティメットガンダムは無理に避けた体勢になりますが、すかさず裏拳を放ってきますの。それを斜め下に下がるようにして横を回転しながら通り、プラズマカッターで切り裂きます。

「ダメージはどうですの!?!」

「軽微です。もう治りましたね」

「ちっ。自己再生は反則ですの」

「こちらも搭載してますよ、お姉ちゃん」

「それはそれ、これはこれですの。というか、プラズマカッターの出力が低すぎますの」

「これでも最大です。テスラ・ドライブ二機とスパーパーニアにエネルギーを回しているんですから」

「動力炉だけはどうしようもなかったから、仕方ありませんの」

テスラ・ドライブとプラズマジエネレーターの重力制御理論は地球連邦の施設から奪ったデータと実物である程度はインストール経由で理解できました。しかし、動力炉の高性能化と小型化は難しいですの。

「お姉ちゃんー！」

「つと」

アルティメットガンダムの尻尾がこちらに放たれていました。それを慌てて回避すると、そこに尻尾の先端にあるビーム砲が火を噴きます。ツイン・テスラ・ドライブのフィールドで防ぎながら、なんとか逃げます。モビルファイター相手に接近戦とか自殺行為ですし仕方ありませんの。

「偏差射撃してもアルティメットガンダムの装甲が硬すぎますの」

「それに再生されませし……」

こちらの攻撃で有効なのはやはり大口径の陽電子衝撃砲・陣雷ことポジトロンカノンですの。それ以外のはたいしてダメージを与えられませんわね。

「仕方がありませんの。ルリ、アレをやりますの」

「わかりました・アサルトコンバットパターン・烈火。開始します」

両肩に搭載されたミサイルの煙幕弾、閃光弾、通常弾を発射し進行方向に煙幕を形成しますの。発射したミサイルをくぐり抜けつつ煙幕の中から右腕のレールガン・月光と両肩部に懸架している可変速粒子砲・旋風で攻撃を行いますの。

煙幕を出た閃光弾がアルティメットガンダムをかく乱したところで旋風が着弾。次にミサイルが着弾する中で、敵を円の動きで追い込みそこへ両腕のシールド裏に装備し

ている電磁加速銃・月影とカバールをずらして展開した胸部マシンキャノンによる集中砲火、パージしたミサイルポッドへ追い込み遠隔操作で背後から攻撃しますの。これを超高速でランダムにした軌道でやります。宇宙空間なのでミサイルポッドも浮かせられますし、大丈夫ですの。

「これでやりましたか？」

「ルリ、それはフラグ、ですのおおおっ！」

爆炎の中から伸びて来た腕を回避しますが、パージしたミサイルポッドが捕まれて光になって消えますの。

「ごめんなさい」

「いや、ルリのせいではありませんの」

しかし、本格的に完成したアルティメットガンダムには勝てませんの。それこそ、禁止されているコクピットにポジトロンカノンを叩き込むか、突撃して自爆のようにするぐらいですの。こっちの高速マニューバーも弾幕で対応されますし。

「うーん、火力が足りませんの」

「ヴァングレイを改造するのはこれぐらいが限度です」

「これ以上の改造はもう別物ですものね」

それに正直言って、プラズマカッターよりも実体剣の方がいいかもしれませんの。

「まあ、よいですの。こうなれば格闘訓練といきますよルリ！」

「わかりました。頑張ってください」

「はいですの！」

スラストターとスーパーバーニア、ツイン・テスラ・ドライブを全開にして音速のゲシユペンストキックならぬヴァングレイキックを放ちますの。相手が反応できる速度を超えて放つ必殺技はアルティメットガンダムのエネルギーフィールドで減速し、相手に向かいます。そのタイミングでアルティメットガンダムの尻尾から高出力のビームが放たれてこちらのフィールドで激突して、軌道をずらされましたの。

そこで光る腕に足が捕まれてアルティメットガンダムごとグルグルと回転していきますの。こちらもいつその事、回転の速度をあげて相手を逆にグロッキーにしてやります。速度は圧倒的にこちらが上ですが、パワーはアチラの方が上。そしてそのまま隕石にぶつけられそうになります。

「お姉ちゃん」

「はいですの」

ポジトロンカノンを取り出してそれを腕にあてて至近距離から放って破壊してやります。こちらもポジトロンカノンが使用不可になりましたが、問題ありません。その辺に放り捨ててから距離を取り、牽制に月光を放ちます。

「このまま逃げていけばポイント勝ちができますが……」

「模擬戦でそんな事はできませんの。それなら敗北の方が経験が稼げるのですの」

「わかりました。じゃあ——あ、待ってください。広域通信です」

「キョウジさんに連絡して模擬戦を中断。広域通信を確認しますの」

「はい。こちら、電子の妖精。広域通信を受信したため、戦闘行動を停止します」

「了解した。こちらでも停止する。父さん、構わないか？」

『ああ、問題ない。こちらでも確認する』

ポジトロンカノンやミサイルポットを回収しながら広域通信を聞きます。こんな緊急事態でしかありませんからね。

『我々は地球連邦政府の火星に対する経済的な圧迫などにより、我慢の限界が来た。』

よって、我々火星の後継者はここに地球連邦政府より独立し、ヴァース帝国の建国を宣言する！ 我が名はレイレガリア・ヴァース・レイヴァース。ヴァース帝国皇帝である！』

『遂に来たか』

『そうですの』

『あの、どうしますか？』

『一度戻ってきてくれ。これからの事を話し合わないといけない』

「そういえば、一応、博士達も軍属でしたの」

「お姉ちゃんもですよね?」

「本部に確認してから行動を起こしますの」

まったく、もう数年は動かないでいて欲しかったのです。まだフェル・グレーデンとも直接は会っていませんしね。ラウル・クルーゼともメールを送っただけです。会に行かないといけません。まあ、こちらはネメシスちゃんを遠隔操作すればいいだけなのですが。

『我々ヴァース帝国は月にあるハイパーゲートを回収する。これは古代火星文明をはじめとした数々の文明を滅ぼしたアインストが月へと浸食を開始しているためである。このまま手をこまねいておればハイパーゲートを始め、月はアインストによって奪われる。よって、地球連邦政府は邪魔をしない事を望む。邪魔をするのであれば人類の敵として排除する』

バレてますの!? なんて!? どうして!? おのれ火星文明! 大人しく転移技術を寄越しやがれですのおおつ! はい、ごめんなさい。そりや抵抗しますわよね。火星文明を滅ぼしたのが私達アインストだったのなら当然ですの。というか、私は知りませんでした。もしかして、私達もその技術を持っていますの? お母様、教えてください!

『お母様、火星文明が持つ転移技術などは滅ぼした時に取っていませんか?』

『既に破棄した。転移技術は我等が持つ方が優れているからな。それにボソンジャンプは我等には使えなかったしな』

『それはそうですわよね』

ボソンジャンプはチューリップクリスタルとA級かB級ジャンパーが必要です。でも、既に優秀な転移技術を持っているアインストからすれば必要ない技術でしょう。時間移動に関して知らなければ必要ありませんわね。

『では、こちらで対処しておきますの』

『任せる』

『はいですの』

さて、月面を奪われるのは美味しくありませんわね。アインストの部隊を動かしましょう。それで地球連邦政府側として参加して、アクセル達が私にかけているであろう疑いを晴らせば一石二鳥ですの。

「必要な物の回収が終わりました。お姉ちゃん、次はどうしますか?」

「撤収して補給と修理を受けますの。これから月面での戦闘に参加しますから、覚悟をしておいてくださいですの」

「わかった。次は実戦なんですね」

「ヴァース帝国とアインストが相手ですの」

「頑張ります」

「本当にこの世界はままならないですの。どうかメンデルはバレてませんようにお願
いしますのよ？」

第18話

急いでネオ・ジャパンコロニーへと帰投し、ハンガーにヴァングレイを移動させて固定します。それからハッチを開けてシートベルトを外して立ち上がります。それと座席の下に置かれている冷蔵庫からドリンクを取り出してルリちゃんにも渡しておきますの。

飲みながら機体の状況をチェックしていると、外からメカニックではない軍属の方が入ってきます。この方はシャドウミラーから送られてきている監視員なので問題ありません。

「プロウニング技術少尉。ヴィンデル少佐から緊急通信が入っている」

「了解ですの。ルリ、後の事はお任せしますの」

「わかりました。こちらは任せてください」

「お願いするですの」

メカニックの人達に修理と弾薬やエネルギーの補充などをお願いだけして、シャドウ

ミラーの方と無重力空間を抜けて一緒にとある一室へと移動します。ここはネオ・ジャパコンロニーの中でシャドウミラーが借りている部屋で、盗聴対策などをしっかりとしています。

シャドウミラーの方が機械を操作するとモニターにヴィンデル少佐の姿が映し出されました。その後ろには色々と作業をしておられる方の姿も見られますの。大変、お忙しいようですわね。

『時間がないので要件だけ聞く。ヴァングレイのテスト状況は聞いているが、戦闘に耐えられるレベルか?』

「可能ですが、最新鋭の重装甲機体にエースパイロットが乗っていればきついかもしれませんが。正直、火力が足りません。先程もアルティメットガンダムとの模擬戦で敗北しましたしね」

『データは貰っている。これを見た限りでは問題ないと判断できる』
「でしたら、一つお願いがありますの」

『なんだ?』

「月面で火星と地球連邦が戦いますわよね?」

『高い確率でそうなるだろう。実際に我々も援軍に駆けつけるべく、準備をしている』

「それ、私も参加させてくださいですの」

『ほう?』

月面で行われるハイパーゲート攻防戦。これが月面全体に普及するのなら民間人の救助を理由に施設に堂々と入れますの。それに月面にはマオ・インダストリーの施設がありますのでそこから技術情報を頂ける可能性があります。

「ヴァングレイの実戦テストもそうですが、月面にある技術情報は我々シャドウミラーにとつても欲しいものでしょう? ハイパーゲートやマオ・インダストリーが隠匿している技術があればレモンお姉様を作る機体も強化できます」

『確かにそうだな。だが、それは問題がある』

「建前は民間人の救助ですね。もしくは戦闘中に試作機の機体が制御不能になってさらに墜落するとか」

『いいだろう。月面作戦への参加を許可する。ただし、常にアクセルと一緒に行動するようにしろ』

『俺がか?』

「お守りをお願いしますの、アクセルお兄様」

『自分でいいやがるのか……』

『アクセル』

『わかった。合流ポイントは月の手前でいいか?』

「はいですの。こちらからヴァングレイを打ち出して加速をすればある程度は問題ありませんしね」

『それはお前達だけだ。なんだあの機動は……本当に人間か?』

「改造人間ですもの」

『まあいい。合流ポイントまで来たら詳しい話をするぞ。それとお前が欲しがってた物もレモンが手に入れて用意してくれた。感謝しておけよ』

「もちろんですの!」

両手を握りしめて喜びを再現しますが、アクセルはなんとも言えない表情をしています。まあ、物が物ですので、アクセルとしては嫌でしょう。

「アクセル（が持って来てくれる物）、太くて硬い身体の中に入れる棒、期待しておりますわ」

『アクセル……』

『待てお前! その言い方だとまるで俺が……』

「おやおや、どういう事かアルフィミイちゃんはわかりませんの。俺がなんですか?」

『よし、後で覚えてろよ』

「キヤー犯されるですの」

『遊びはその辺にしろ。アルティメットガンダムと戦艦の方はどうなっている?』

アクセルで遊ぶのはこのぐらいにして、しっかりとお仕事のお話をしましょう。

「アルティメットガンダムはほぼ完成しております。戦艦は現在組み立て中ですね。ここから実際に動かしてテストし、合体機構も試す予定ですの」

『問題はないのだな?』

「今の所はありませんの」

『監視は置いた方がいいか』

「それはもちろん必要ですの。ウルベ・イシカワ少佐がどう動くかわかりませんしね」

『カツシユ博士達の監視も必要だろう』

「暴走の危険性はしっかりと教えしましたの。流星にそこまで愚かだとは思えません
が……」

『一応、つけておく』

「わかりましたの。どちらにせよ私は月面に行かせてもらいますしね。ここで欲しい技術情報はほぼ手に入れましたので、後はこちらで作る時に他の技術との兼ね合いです
の」

『別の監視員を送っておく。そちらで得た技術情報はレモンに送っておけ。アルティメットガンダムの機体データもな』

「畏まりましたの」

『以上だ』

『時間は余りない。急げよ』

「了解ですの」

綺麗な軍人式の敬礼をしてから部屋を出て、必要な物を準備していきますの。着替えとかこちらで買った事物とかです。といっても、流石にルリちゃんの分まで許可なく片付ける事はできませんの。私は身体が女でも心は男なので、色々と問題ですの。まあ、一緒にお風呂とかも入っているので今更でしょうが。

『ルリ、月面に赴き火星の連中を叩きに向かう事になりました』

ブレインコンピュータを通してルリちゃんに連絡をし、ヴィンデル少佐とアクセルの二人と話した内容を伝えますの。

『目的はわかりました。それで他にもあるんですよね？』

『ここを引き払いますから、部屋にある服とかの私物を片付けないといけませんの』

『ヴァングレイの修理と補給がまだ終わっていないので、お兄ちゃんの方でやっておいてください』

『いいのですの？』

『はい』

『そちらのお手伝いは要りますの？』

『大丈夫です。後20分程で終わりますから』

『了解ですの』

ルリちゃん荷物も一つのスーツケースに纏めます。もう戻ってきませんし忘れ物はないようにしないといけませんの。ちなみにスーツケースに入らない物が一つだけあるので、それは私が直接運びますの。

さて、荷物を纏め終えたらモニターで携帯食料と飲み物を注文して格納庫に届くようにしておきます。

「よし」

部屋を見渡して改めて確認しますが、綺麗に片付いて忘れ物は一つもありませんの。これで問題ないので、次はネオ・ジャパンコロニーの内部に仕込んであるバックドアやこっそりと追加した監視装置なども確認しますの。

こちらも確認が終われば隠蔽をしっかりとしてアクセスログとかを完全に綺麗にします。こういうのは私よりもルリちゃんが得意なのですが、流石にこんな汚い事をさせるのはどうかと思いますので私がやりますの。幸い、模倣などで進化するアインスト・アルフィミイに自己進化・自己増殖・自己再生をするナノマシンを適応しているのでもルリちゃんを教師にして二人で電子戦をやっていけば互いにどんどん成長できますの。ちなみに勝敗は1258戦して1246敗ですの。12戦だけ盤外戦術で勝ちました。

やった後にルリちゃんから凄い目で見られましたので、もうやりませんの。

「ん」

スーツケースを持って部屋から出て格納庫を目指します。通路で出会う職員の方々と挨拶をしながら格納庫に到着すると、ルリちゃんがちょうどヴァングレイから出てきました。手に端末を持ちながら、作業をしているようです。

「ルリ」

「お姉ちゃん、それを手に持ってきたのですか？」

「誰もツツコんでこなかったですの。はい、ルリちゃん」

「はあ……これ、ラピスのお土産なんですが……」

ルリちゃんに渡したのは白い兔と黒い兔の大きなぬいぐるみですの。ルリちゃんぐらゐの小さな女の子だと一抱えするぐらゐですわね。耳と足を含めると一メートルくらいですし。

「残った片方はルリちゃんのも物ですの」

「要らないって言ったんですけど……」

「気にしないでですの」

ヴァングレイのコクピットに備え付けてある収納スペースにスーツケースを入れまゐす。その次に届いた携帯食料と飲み物を補充しておきます。ちなみに濾過装置も入つ

た緊急時用のサバイバルキットとかもありますの。これ、いざという時に聖水を飲むためにも使うそうですの。まあ、大人のオニイサマ達には残念なお知らせですが、アインストである私達は使わないですの。

「修正はできましたけれど、追加武装が来るんですよ？」

「そうですの。黒くて大きくて太い棒が手に入るんですの」

「黒くて大きくて太い棒……ですか？」

「二人で一緒にぶち込んでやりますの」

「はあ……」

やはり、ルリちゃんにはまだわかりませんわね。無表情ですけど、ずっと一緒に居るのでだいたいわかるのですが……これは本当に理解していませんの。周りのメカニックスの人は咳き込んだり、顔を赤くしたりしていますが。

「データは後で送ってもらおうとして、今は博士達の下へ挨拶に向かいますの」

「わかりました。お世話になったのでしっかりとお礼を言っておかないといけませんね」

「ですの」

ルリちゃんは受け取ったぬいぐるみ二匹を私と自分のリニアシートに乗せていきました。アレ、これってもう片方は私の物扱いされませんか!?

「それじゃあ、挨拶しに行きましょう」

「そうですね」

ルリちゃんに手を握られて引かれていきますの。そのまま博士達が何時も居る場所に移動したのですが、そこでは当然の様にカツシュ博士とミカムラ博士、キヨウジさんや研究者、メカニツクの人達も居ます。ですが、普段は居ない者までも沢山居ます。

「ウルベ・イシカワ少佐」

そう、この部屋に普段は来ないウルベ・イシカワ少佐までもが居たのですが、まあ理由はわかりますの。

「君か。軍部の命令は届いている。月面の防衛線に参加するのだろうか？」

「そうですね。ですから、お別れの挨拶をしに来ました。生き残りはするでしょうが、次の任務が与えられる可能性は高いですからね。正直、完成まで居たいのですが、後はソフトウェアなどの微調整ですので、開発という意味では丁度いいです」

「確かにそうだ。開発はほぼ終わっている。後は合体機構と戦艦を組み立てて実験するくらいだ。ソフトウェアも完成しておるしの」

ソフトに関しては私とルリちゃんが徹底的に協力しました。それに戦艦部分は元からトライロバイト級万能戦闘母艦の物を使っていますし、追加した物はほぼブロック機構で付け加えてから更に装甲をマシマシにした感じですよ。そのせいか、まるでムカデ

みたいになりましたの。はい、本当にデビルガンダム第二形態みたいですよ。ええ、ヤツちやいました。最悪、この工場ブロックとかは破棄しても自爆させる事もできますの。

「シミュレーションは完璧ですが、実際に動かすとどうなるかはわかりません。一応、マニュアルと考えられる修正パッチを作っておきましたので、使ってください」

「助かるよ」

「本当に二人の能力には驚いた。悔しいぐらいだ」

カツシュ博士とミカムラ博士が私達に話しかけてくれました。その内容がちよつとどころじやないほどやばいのです。具体的にはミカムラ博士がこちらにも嫉妬してきましたの。これはちよつとお話をしておかないと不味いですの。キョウジさんの台詞を奪う事になります、仕方がありませんの。

「ところで、イシカワ少佐。ネオ・ジャパンコロニーから戦力は出しますの？」

「いや、今回ネオ・ジャパンからは出さない事になった」

「何故ですか？」

「アルティメットガンダムが完成していないし、スーパーロボット対戦ではないからだ」
「それはあくまでも建前だ。それにアルティメットガンダムは完成している。戦艦の部分は確かにまだだが、充分に戦える。実際に模擬戦で彼女のヴァングレイに勝っている

のだから実績はある」

「イシカワ少佐の言葉にキョウジさんが反論しました。確かに戦艦は完成していませんが、アルティメットガンダムの上だけでも馬鹿みたいに強いんですね。」

「それでもだ。今回、我々は戦力を派遣しない。理由は他の不穏分子を警戒しなくてはいけないからだ」

「プラントか」

「ええ、カツシユ博士の言う通り、プラントが怪しい動きを見せています。また、アインストがどう動くかもわかりません。地球の全勢力を月に差し向けるわけにはいきません」

「くっ……」

「凄く納得できる理由ですの。わかりました。それでは戦艦の方で採用するテスト・ドライブを使った電磁カタパルトだけは使わせてくださいですの」

「わかった。試射の実験も兼ねて許可しよう」

「ありがとうございます」

カタパルトが使えれば速度が全然違いますの。キョウジさんの扱うアルティメットガンダムが無いのは戦力的に痛手ではありませんが、まあいいでしょう。私が望むのは地球連邦軍の勝利でも敗北でもありません。手に入れる技術を回収できればよいので

す。現状、地球と火星ではどちらの戦力が高いかどうかもわかりませんし、ベストは両陣営の膠着状態。月でハイパーゲートを壊さない程度に覇権争いをして欲しいのです。

「しかし、アルフィミイとルリちゃんが居なくなると寂しくなるな。ルリちゃんだけでも置いていかないか？」

「それはいい」

「うむ」

「ノーコメントだ」

キョウジさんもちやんとした理由なので諦めたようです。しかし、ルリちゃんを引き抜こうとは不逞輩ですの。それにミカムラ博士以外、全員がルリちゃんを置いてけと止めてくださいのですの！ まるで私が要らないみたいなのですの！

「それは仕方がありませんの、ルリちゃんが居なければ私はとつても困りますの！ぶつちやけると体当りしかできなくなりますの！」

ルリちゃんを抱きしめて彼女の頭を首筋に埋めながら必死に守りますの。

「お姉ちゃん……大丈夫ですよ。私もちゃんとついていきます。お姉ちゃんだけだと心配ですし」

「うう、ルリちゃん……」

「やれやれ、流星に諦めるしかないな」

「私もキョウジさんに負けたままここを去るのは嫌なんですけど、命令なら仕方ないですの。軍属ですし」

「よく言うな。殺す気で来られたら負けていたのはこちらかもしれないだが……」

「いえいえ、そんな事はありませんの。私はまだまだ素人でエースの方々には全くもって敵わないですの」

「本当に何時か、絶対に超えてやりますの！ いくらアインスト・アルフィミイの身体を持つていたとはいえ、本当にこの世界のエース達は化け物ばかりですしね。」

「いやいや、あの速さで突撃してくるのは色々可笑しいからな」

「苦肉の策ですの。あ、私はミカムラ博士と話がありますので、ルリにアルティメットガンダムの照準システムについてお話しをしてあげてくださいですの」

「はい。どうかよろしくお願いします」

「そうか。照準とかはルリちゃんが補正してくれますからね」

「わかった。預かろう」

さて、ルリちゃんを預けてからミカムラ博士の場所まで移動するのですの。

「ミカムラ博士、ちよつといいですか？」

「あ、ああ、構わないよ」

ミカムラ博士を連れて少し離れた所に移動して話します。

「ミカムラ博士はカツシユ博士に嫉妬などなさりますの?」

「え? な、何を言っているのかな?」

「カツシユ博士は自己進化・自己再生・自己増殖のナノマシンを開発なさいました。ですが、ミカムラ博士は……」

「ああ、そうだ。私は嫉妬している……カツシユ博士だけじゃない。君達にもだ。君達はこのナノマシンの分野とプログラミング技術がやばい。いや、正しくは演算能力が凄まじい。本場にデザインチャイルドやコーディネーターと言われるだけはある」

バレてますわね。ただ、それで問題ありませんの。今の私はあくまでもナノマシン研究所に居た研究者達、それに念動力を使った直感。後は馬鹿みたいな演算能力を使った膨大な数のシミュレーション。その結果、技術は飛躍していきますの。ちなみにソフト面ではルリちゃんに全く勝てませんの。彼女は魔法使い級ハッカーに超高性能な演算機器。対してこちらは同じく超高性能な演算機器は変わらずでもただの初心者ハッカー。こうなればもう結果はわかりきっていますの。一般人が魔法使いに勝てるはずありませんの。

「確かに私達は特別かもしれませんが、それはミカムラ博士も変わりませんの」

「なに?」

「私達が専用機みたいな物を作るのに才能があるように貴方は誰にも使いこなせる量産

機を作り上げる才能がありますの。特にシャイニングガンダムはともかく、ライジングガンダムでしたか。あちらは格闘家などでなくてもモビルトレースシステムを使える素晴らしい機体のようですね」

「何故それを……いや、君達の役割を考えれば当然か」

「どちらにせよ、沢山の人に使われるのはミカムラ博士が開発した物ですの。アルティメットガンダムなんて特殊機体はそんな数は用意できませんの。資金や資材の関係もありますからね。そもそも天才同士が同じ分野とは限りませんの」

「だが……」

「貴方は間違いなく天才ですよ」

何せシャイニングガンダムどころか、ゴットガンダムをほぼ独力で開発しきつただ。この人も間違いなく天才です。

「少なくとも私はそう思っております」

「ありがとうございます……しかし、そうか……量産機か。頑張ってみよう」

「お願いしますの」

これできっと大丈夫ですの。カッシュ博士とミカムラ博士は大丈夫でしょう。アルティメットガンダムはデビルガンダムにならなくてよかったですの。

怖いのはウルベ・イシカワ少佐だけですの、監視は継続してもらいましょう。

第19話

カツシユ博士とミカムラ博士、それにキヨウジさんとお別れして私とルリちゃんはネオ・ジャパンコロニーから月面へとヴァングレイに搭乗して移動しておりますの。テスラ・ドライブを利用した電磁カタパルトを使うのは輸送機では使えません。そこまでの大型化は作れておりませんし、あくまでも機体を打ち出す為ですから。

「第一加速が終了しました。続いて第二加速を開始してください」
「了解ですの」

テスラ・ドライブとスーパーバーニアを使い、一瞬だけ速度を速めて後は慣性の法則に従ってそのまま流します。ただ、身体にかかる負荷はある程度すれば楽になりますの。

「ルリちゃん、少し運転を任せて構いませんか？」

「構いませんよ」

「ではお願いします」

「はい」

目を瞑りながら、精神だけをもう一つの身体、ネメシスの方に移します。といっても、

思考を割く程度ですの。それにやることは簡単です。

『レジセイア。月面での争いは参加せず隠密行動に徹しながら引き続きハイパーゲートとヴェーダの解析を続けよ。全ての兵力は月面内部に仕込ませ、指示があるまで待機せよ』

『了解した』

擬態まで使えば問題ないでしょう。これで地球連邦軍はアインストを見つけられる可能性がかなり低くなりますの。見つからなければ確実に攻めてくる火星の者達との関係は崩れて戦闘が開始されますの。そもそも地球連邦としては火星の独立なんて認められませんから、第三者であるアインストが介入しなければアルドノア・ゼロの原作と同じ事が起こるでしょう。つまり、月の半分を消滅させるハイパーゲートの消失。ならば、やる事など一つですの。

『お母様、お願いがありますの』

『なんだ？』

『タイミングを見計らって月面にあるハイパーゲートを回収したいのですが、私にも自由出来る亜空間を作って頂けませんか？』

『ふむ……破滅の王を見つけた報酬ということであれば構わん。しかし、それだけでよいのか？ もう少し与えてやってもいい。破滅の王とはそれだけ危険な存在だからな』

『でしたら、こんな事もできますか？』

計画をお母様にお話すると、お母様は少し考えこんだようです。

『かまわぬ。手伝ってやろう。このままお前の想定通り行けば地球に被害は免れん』

『ありがとうございます。頑張ってお母様の期待を超えるよう誠心誠意努力するです』

『うむ』

よし、これで自由にできる空間が手に入りましたの。まあ、言ってしまうえばアイテムストレージやアイテムボックスです。それでも、これがあると無いとでは全然違いますの。

さて、月面はこれでいいとして……次はフェル・グレーデン博士の方ですね。こちらはちゃんと資金を振り込んであるので問題ありません。彼から論文や現在のデータを送ってもらって、そちらを演算して問題点を上げて送り返しておきますの。私では問題点を上げる事はできませんが、新たな事を生み出す事なんてできません。ですので、後はフェル・グレーデン博士の頭脳と閃きですわね。ああ、念の為にアインストの護衛をつけておきましょう。

といつても、クノツヘンとか大きすぎますし、人型のアインストもそこまで手に入れているわけでもありません。そもそも人型だとフェル・グレーデン博士達にどうやって

説明するかも考えないといけません。それに身分証もありませんから職質されたら終わりです。そう考えると見付からずにスパイ活動や護衛ができる素晴らしくも鬱陶しい存在が世界には居ますの。

コードネームはインセクト^{昆虫}。スパイウェアとしても十分でしょう。蚊や蠅のアインストを作り出し、地球上に放てば色々と情報を収集できますの。護衛としては近くに殺戮用の蜂を用意しておけばいいでしょう。蚊だと血液サンプルの回収もできますので、とても便利ですわね。それに昆虫ならどこに居てもおかしくはありませんしね。

とりあえず、昆虫を採取するように命令し、それを模倣させてナノマシンを体内に埋め込んで毒性を強めて放っておきますの。護衛としてもフェル・グレーデン博士達の家族には一人10匹ほどつけておけば大丈夫でしょう。ついでに人探しもさせればいいでしょう。探すべきは東方不敗マスターアジア。ガンダムマイスター、人工生命体イノベイド。ギリアム、イングラムなど……まあ、違法研究者達がいる秘密研究所とかも調べさせましょう。ネットとリアル、同時に操作するにはこれが最善でしょうね。それと管理が面倒なので指揮ができる個体も必要ですがルリちゃんとオモイカネに丸投げしておきましょう。

次はラウ・ル・クルーゼですが、彼から返信がきました。話が聞きたいとの事でしたのでこちらの手札として、アインスト化と身体サイボーグ化などを提案し、私達の味

方にならないかと伝えておきます。もちろん、テロメアについて解決策を考えている事もしつかりとお伝えしておきますの。

まあ、ラウ・ル・クルーゼはこちらの味方になってくれればうれしいですが、そうではないのなら原作通りに殺してから取り込ませて頂きますの。彼のキラ・ヤマトに匹敵する操縦技術は欲しいですからね。流石にキラ・ヤマトを殺すわけにもいきませんし、彼の代わりですの。

「お姉ちゃん避けてっ!」

「っ!?!」

ルリちゃんの言葉へ即座に反応して回避行動としてヴァングレイを斜め下に動かし、念動力で嫌な予感がしたので盾を斜めに構えておきますの。するとそこに極大の粒子ビームが飛んできてフィールドで少し歪曲しながらも貫通して盾で滑るようにな上へとズレていきました。もしも回避しながら盾を構えていなければコクピットに直撃でしたわね。

「対象は!」

「駄目です! ジャミングされているみたいでレーダー系統が何も使えません!」

「では目視ですの! ルリちゃんは相手の射角から計算……っ!」

全天モニターをしつかり見ながら話していると、嫌な予感がしたので急制動をかけて

即座に更に上になると、今度は細いビームが飛んできましたの。

「計算終了しました。出します！」

「あつちですか！ ゼロシステム起動！」

ルリちゃんが示した方向に突撃すると、デブリが沢山見えてきます。同時に念動力が嫌な気配を伝えてくれるので、それとゼロシテムによる演算した未来予測で行動を選択しながら高速で駆け抜けていきます。25Gまで瞬時に上げて接近すると、あちらからも正確無比な精密射撃がどンドン飛んできます。

「お姉ちゃん、このままじゃデブリに……」

「それで構いませんの！ まずは隠れている子猫ちゃん達を炙り出してやるですの！」

「わかりました。ミサイル、発射します」

突撃しながら両肩部にあるブースターポットミサイルと脚部ミサイルを目の前に迫ってきているデブリに発射し、即座に上へと加速して逃げますの。後方ではでかい爆発が起きてデブリは吹き飛んでいきますので、ある程度距離を取れたら高速で反転して停止。それからルリちゃんが出てくれた大口径陽電子衝撃砲・迅雷ちゃんを構えて出てくる奴をしつかりと見ながら先を予測して撃つ準備をしますの。

「目標を確認しました」

「狙い撃ちますの！」

爆発の光から出てくる影の移動先に向かってポジットロンカノンを連射し、冷却が必要になったら両手の盾にあるハンドガンの月影と右腕の電磁加速砲の月光を放ちながら突撃しますの。

相手はポジットロンカノンを何かのフィールドで防ぎますが、二発目で貫き、三発目で分厚い装甲によって防がれました。ですが、かなり吹き飛んだようですわね。

「ちっ」

しかし、その後ろから別の機体が出て来て狙撃してきます右にスラストで機体を移動させながら、即座にスーパーバーニアで加速して接近します。そこで相手の姿が見えましたの。

「はっ？」

思わず口から出てしまったのはそんな声でしたが、無理はありませんの。ダツテ、マサカ相手ガ彼等ダナント、ダレモ思イマセンノ……



「今回のターゲットを伝えるわね。ターゲットはネオ・ジャパンコロニーから月面方面へと高速で移動中の機体よ」

「この速度で移動つてマジかよ？」

画面に映し出されているのは信じられない速度で移動している機体だ。確かに瞬間的には出そうと思えば出せるが、常にあの加速で動かしているのは普通はもたない。

「ええ、信じられないけれど事実みたいね」

「まさか、疑うのか？」

「いいや、それよりもなんでコイツを狙うんだ？」

「コイツがインストール・ネメシスである可能性が高いからだ」

「ほう……」

「調べた限り、このアルフィミー・ブロウニングという少女は本来存在しない者だ。出生記録はもちろん、全てのデータが改竄されている」

「それだけじゃ実験体にされた奴やデザインチャイルドだって線もあるはずだ」

青いパイロットスーツの刹那が画面に表示された水色の髪を持つ綺麗な少女を見ながら告げる。

「それは有り得ない。彼女が確認された時にインストールが使ったと思われる転移反応も

確認されている。すぐに姿を消したようだが、その前に彼女の存在が近くにある監視カメラに全く映っていないかった。確実に転移してきたことの証明だ」

「その子はと言っているんだ？」

「どこかの施設で実験体にされていたらしい。そこで植物のような物を埋め込まれて使えるようになったと言っていたが、そのような研究施設は未だに発見されていない。破壊された物も調べてはいるが……」

「それだけじゃ、確定とは言えないな」

「その通りよ。もしかしたら、彼女はアインスト側に捕まって実験体にされただけかもしれない。でも、今はそうも言ってもらえない状態なの。実はヴェーダがアインストに襲撃を受けているみたいなの」

「なんだと!」

「事実だ。このままではアインストにヴェーダが乗っ取られる可能性がある。その月面に高速で移動する怪しい存在というわけだ」

「ヴェーダの解答ではアルフィミイ・ブロウニングは黒よ。アインスト・ネメシスの喋った言葉とアルフィミイ・ブロウニングを調べた結果、声紋や姿は違って喋り方などは共通する部分があったわ。まるで両方とも誰かを演じているみたいだね。どちらにせよ、彼女がアインストと繋がりがあある事は確定なの。だから、捕獲を優先して行動する

わ。これで彼女を助けにアインストが出てきたら、敵だと確定するようなものだしね」「了解した」

とまあ、こんな感じでガンダムマイスター三人で月面へと通るルートで待ち伏せて襲撃を仕掛けた。最初はヴァーチェによる長距離砲撃。相手は撃つた直前でこちらに気付いて回避しやがった。テスラ・ドライブによるフィールドを貫通させる最低限の仕事はできたが、それだけだ。

まあ、回避された時の事も考えて俺が合わせるように狙撃したんだが、それすらも回避された。そして、俺達が潜んでいるデブリ帯に近付いてきたので、刹那が奇襲しようとしたが、その前にデブリ帯ごとミサイルでぶち壊しやがった。俺達は即座に回避して、デブリの散弾を避けた。同時に重装甲であるティエリアのヴァーチェを盾にして爆発から出たんだが、当然のように待ち構えていてヴァーチェに弾丸を当ててくる。その威力はかなりの物で、ヴァーチェのGNフィールドと重装甲が無ければやばかった。実際に装甲がひしゃげているのも見て取れた。

相手はこちらに突撃してくるので何発か撃つてみたが、直前までこっちの攻撃を知っているかのように回避してきやがる。

ヴァーチェのパイロットであるティエリアもGNバズーカを放つが、構えて撃つ前に既にそこにはおらず、一瞬で数百メートルを移動している。俺とティエリアによる弾幕

も右に避けたと思っただけで左に居たり、気付けば下に居たり、とんでもない速度だ。宇宙空間にスラスターの光で無数の線が出来てすらいる。

「刹那！」

『任せろ』

近接戦闘用の機体である刹那のガンダムエクシアなら、対応できる。その間に俺達は距離を取って援護するのだが……相手はエクシアとは戦わずに距離を取り、弾幕を放ちながらこちらへと突撃してくる。それに対応して撃っていくが、相手は回避していく。ヴァーチェの攻撃はGN粒子の関係であまり連続で撃てない。

だから、こちらが狙撃して近づけないように撃っていく。それに刹那が後ろから襲うのだが、相手はまるで後ろにも目がついているかのように回避してからエクシアの後ろに周り、胸にあったマシンキャノンをぶっ放してくる。エクシアは剣を盾にして相手に蹴りを放つことで防ぎ、距離を取る。そのタイミングで俺とヴァーチェが攻撃するが、相手も即座にスラスターを使ってじぐぎくに無茶苦茶な軌道で回避しやがる。

「大丈夫か？」

『問題無い。相手の練度はそれほどじゃない。ただ速いだけだ。俺とエクシアなら勝てる』

「そうか。確かに射撃技術もどちらかというと面に対する攻撃だしな」

だが、その速度が恐ろしいんだが……まあ、慣れてしまえばそれまでだ。

「テイエリア、粒子残量はどうか？」

『問題ない。回復した』

「了解。それじゃあ、狩りを再開しようか」

そう思ったら、相手から広域通信がきた。

『こちらは地球連邦軍所属、アルフィミイ・ブラウニング少尉ですの。貴官らの所属と目的を教えてくださいませんか？』

「今更かよ」

『応じる必要はない』

『こちらは月面に向かっているだけなのですが……つと！ 問答無用ですのね！』

即座にテイエリアが攻撃を開始し、刹那が突撃する。俺は一度隠れてタイミングを見る。

『あははは、そつちがその気ならやるだけやってやりますの！』

通信が切れると馬鹿みたいに速度が上昇しやがった。それも戦い方がやばい。刹那の攻撃をわざと受けてGNソードを掌に受け止め、至近距離から突撃してエクシアを抱きしめやがった。そのままエクシアを盾にしながらヴァーチエに突撃する。ヴァーチエも流石に撃つわけにいかずに逃げるが、それを馬鹿みたいな加速でおいかけていき

やがる。

刹那は逆に速度を落とそうとなんとかしているが、それよりも相手の加速度が凄い。ヴァーチエは逃げられずにデブリへと突撃していく。どんどん埋め込まれていくヴァーチエとエクシアだが、それは逆にチャンスでもある。

『ヴァングレイとガンダムマイスター二機。とつてもいい計算ですの。さて、ルリちゃん、自爆させてこの辺り一帯消し飛ばしますわよ。脱出準備をしますわ』

『了解』

ちっ、相手はこのまま自爆してエクシア達を葬り去るつもりのようなのだ。流石にそれはまずい。狙撃してもおそらく意味はないので、このまま近付いて相手を蹴り飛ばす。

『助かった』

『すまない』

「いいさ。それよりも相手は……」

『問題ない。相手の腕は斬り落とした』

宇宙空間に漂う相手を見ると、両腕は既になく、足もかなりボロボロだ。これなら確保ができるか？

『三人共、撤退して』

『どういふことだ？』

『連邦軍の艦がやってきてきているわ。時間切れね』

『了解した』

『おい、どこに行くつもりだ？』

いつの間にかそこには2メートル前後の青と白の機体。データでは確か、フレモンド・インダストリー社が開発した連邦軍の指揮官用の強襲人型機動兵器。搭乗者の脳波パターンを解析・記録し、機体側からフィードバックをかけることによつて半強制的に同調させる究極のマン・マシン・インターフェイスシステムを搭載しているとヴェーダの情報にあつた。

『せっかく俺の部下を可愛がつてくれたんだ。無料で返すわけないだろうが』

『きゃくアクセルお兄様ステキですよ！ あ、敵の解析データはこんな感じですよ。ルリちゃんか吐きそうなので後はお任せしますの』

『ああ、任せておけ』

そこからは地獄だった。連邦軍の中でも腕利きのように機体性能で勝っているというのにアルフィミー・ブrouニングに善戦されたこともあり、ヴァーチェが装甲をパーズする事でどうにか逃げる事ができた。しかし、ヴァーチェがあんな物だったなんて知らなかつたな。

第20話

ガンダムマイスターの人達にもうちよつとでやられかけた所を王子様のごとくアクセルが駆け付けてくれました。正直、かなりやばかったです。通常のヴァングレイじゃ無理なので、プラズマジエネレーターやスーパーバーニアなどのリミッターを解除して暴走状態でヤツちやいましたの。

当然、こんな事をすれば爆発したり、機体が耐えきれずに分解したりしますが……ヴァングレイってナノマシンを使った修理装置も搭載しているのでそれで誤魔化しながらやりました。ただし、その代償は大きく、もはやプラズマジエネレーターから取り換える必要があるレベルですの。

「ルリ、大丈夫ですか？」

「うう……しんどいです……」

「まあ、そうですわね」

1,200.33396km/h/s
3 4 G

出してエクシアと抱き合いながら、ヴァーチエと追いかけてこしましたからね。私はあばら骨が何本か折れて肺に刺さりました。すぐにナノマシンとア

インストの再生能力で再生しました。ルリちゃんも同じですね。これでナノマシンがより強い身体に作り変えてくれますの。

「まあ、ゆつくりと休憩するですの」

「は……」

私は私で全天モニターに映るアクセルとガンダムマイスター達の戦いを見ますの。基本的にはアクセルがソードブレイカーを放ちながら、アシユセイヴァーのレーザーブレードとガンレイピアを持ちながら突撃しておりますの。

エクシアをガンレイピアで牽制しながら、ヴァーチェをレーザーブレードで斬り刻んでいってますの。デュナミスの方はソードブレイカーで絶えず攻撃して常に動き回らせて狙撃をさせないように戦っております。もちろん、こちらへ攻撃もさせないようにしてくれるイケメンっぷりですの。

相手の得意距離で戦わないようにしているだけでなく、連携もさせない立ち回りですの。どう考えても私がボッコボコにされた時よりも操縦技術が上がっておりますの。

参考にするために録画しながら離れていくと、ヴァーチェが至近距離に居るアシユセイヴァーに向けて装甲をパージし、吹き飛ばしつっどの機体かはわからないですがフラッシュグレネードのような物を使って目を晦ませますの。ですが、その程度ではアクセルは止まらずに光の中、銃撃を続けておりますが見えない場所からいきなり砲撃を受

けて仕方なく後退しました。

ガンダムマイスター達は何時の間にか消えていました。おそらく、母艦であるプロトレライオスが迎えに来ていたのでしょうね。フラッシュの間艦に入って即座に逃げたみたいですよ。どうやら、ASRSのような光学迷彩機能も既に搭載しているようです。まあ、どこもかしこも魔境であるスパロボ世界なら無いと死ねますしね！

「アクセル、追撃はしませんの？」

『必要ない。俺達の目的はあくまでも月面だ。ここで戦力を下げる訳にはいかないからな。それにどんな隠し玉があるかもわからん』

「まあ、それがいいですよ」

『貴様と餓鬼は無事か？』

「こちらは大丈夫ですよ。本当に助かりました」

『構わん。それより帰投しろ。レモンのお説教が待っているぞ』

「あく機体を壊しましたものね。つと、アクセル。その装甲は回収してくださいな」

『わかっている。レモンからも頼まれているからな。科学者という奴等は好奇心が旺盛で困る』

「未知の探究こそが楽しいですよ」

正直、装甲から何かわかるとも思いませんが……それでもEカーボンとかの加工技術

はわかります。後は粒子の採取もしておきたいのですが、こちらは可能かわかりませんね。

「一応、伝えておくと相手の機体から未知の粒子が出ていましたの。おそらく、それがレーダー系統を乱す原因だと思われれますの」

『それは確実なのか？』

「調査した結果ですが、確証はありませんの。ただ、できれば採取して欲しいですの」

『そんな機材はない』

「ですよね」

『まあ、レモンに聞いてみる』

「お願いしますの。後、スラスターなどが完全に死んでるので牽引をお願いしたいですの」

『わかった』

通話を終えてから、追いついてきたアクセルの部下の人達に運ばれていきます。その間にリニアシートから降りてルリちゃんの様子を見ますが、まだ気持ち悪そうにしています。一応、ブレインコンピュータを通してルリちゃんの状態をモニタリングしているオモイカネからデータを貰いますの。

「オモイカネ、ルリのデータを出してください」

貰ったデータを確認すると、ちよつと刺さったりして気管が不味い事になっていきます。放つておいても再生するのですが、ここは抱きしめて背中を撫でながら私のナノマシンを注ぎ込んで治療してあげます。アインストの細胞も活性化してあげれば一瞬ですの。

「あ、ありがとうございます……」

「やはりリミッターを解除するのは無茶でしたの。ごめんなさい」

「いえ、ああしなければこちらが倒されてしまいましたから仕方ありません」

「でも、自爆は怖かったです……助かるとわかっていても……やっぱり……」

「それは仕方ありませんの。良く我慢しました」

ルリちゃんの頭を胸に抱き寄せて優しく撫でてあげます。ちなみに自爆しませんでしたが、私達は逃げる事は可能ですの。転移もできますし、しなくてもその辺のデブリを盾にして生き残る事だってできますの。流石に宇宙空間に放り出されると人間ベースの私達は辛いのですぐに救助が来なければ転移しました。

まあ、アクセル達が近付いていたのはわかっていたので、そちら方面に誘導して戦っていました。アクセル達も私達の事をしっかりと監視しているので、いきなりGN粒子で通信などが使えなくなつてシグナルが消失したら何か有つたとわかりますの。突然、私が姿をくらましたと思うのは当然ですね。そして、私達が来る方向を調べれば戦闘の

光が観測できません。こうなると流石にアクセル達も増援を派遣してくれます。まあ、計算ではもう少しかかる予定でしたが、随分と早く来てくださったので助かりました。

「とりあえず、ドリンクでも飲んで休憩しましょう」

「はい。それじゃあ、いちごオレを……」

「わかりましたの」

いちごオレをルリちゃんに渡してから、私は自分のクリームソーダを取り出して飲みます。甘みと炭酸が疲れた身体に効きますの。

「お姉ちゃん、ヴァングレイ……壊しちゃいましたけれど、大丈夫でしょうか?」

「あく怒られるかもしれませんが。いえ、不可抗力ですし? きつと大丈夫ですの。たぶん」

「流石にアンノウンに襲われるのは想定していませんでしたし……大丈夫ですよ?」
「信じましょう」

まさかガンダムとは思いませんでした。襲われるとしたら低い可能性で宇宙海賊か、火星の者達。プラントのザフト、エアロゲイターことゼ・バルマリイ帝国の先兵……あ、この他にも可能性があるので結構多いですの。本当に嫌になりますね。

とりあえず、ルリちゃんをもふもふして癒されておきましょう。しばらく抱きしめてルリちゃんをひたすら撫でていきますの。

「……………」

ルリちゃんも気持ち良さそうに目を細めています。何せ私のナデナデはルリちゃん
の反応を見ながら、如何にルリちゃんが気持ち良くなり、私も気持ち良くなるかに重点
を置いて解析してゼロシステムで予測しながらやっておりますの。つまり、進化するナ
デナデですの。これぞナデポ！

馬鹿な事を考えながらルリちゃんと戯れていると我等がシャドウミラーの旗艦であ
るトライロバイト級万能母艦のギャンランドが見えてきましたの。ちなみにOGでは
ネバーランドとワンダーランドも運用していたようですが、まだ一隻しか無いみたいで
す。まあ、新設したばかりの部隊ですから、一隻で十分なんですけどね。

格納庫にヴァングレイが止められ、即座にデータが吸いだされて解析が始められてい
きます。私達もそちらに参加すべきなのですが、コクピットから外に出た瞬間に襲撃を
受けました。

「ひゃっ！」

ルリちゃんが可愛らしい声を上げたので、そちらを見ると紫色の髪の手をした幼女が
ルリちゃんに抱き着いているではありませんか。

「ラピス、元気でしたか？」

「ん、元気」

「良かったです」

二人の尊い空間にフラフラと引き寄せられていると、私も後ろから抱きしめられました。とても大きな胸が首に当たっています。上を向けばそこにはレモンお姉様の顔があります。

「アルフィミイ。なんでヴァングレイがここまで壊れているのかしら？」

「それはアンノウンに襲われましたから」

「もうちよつとどうにかならなかったの？ 流石にこれはもう修理できないわよ」

「無理ですの。相手は三機も居るのにパイロットの腕も機体もこちらより上ですの」

「そうだったの？」

「速度で翻弄していただけですしね。こちらの速度に慣れられたら終わりますの。特に狙撃タイプはやばやばですよ」

「まあいいわ。でも、月面作戦に参加できなくなるわよ」

「別の機体を借りられたりは……できませんよね」

「無理ね」

流石に無理でしょう。今から習熟訓練しても作戦には絶対に間に合いませんの。あ、ゲシユペンストタイプRでしたらどうかできそうですの。アレなら兵士を取り込

んでいますしね。

「なんてね。大丈夫よ、新しい機体を用意してあるわ」

「本当ですか？」

「ええ。アルフィミイとルリちゃんが集めてくれたヴァングレイのデータを基にして改造しておいたわ。突貫の試作機から一応の完成型と言えるのかしら？」

「ヴァングレイIIですか」

「そう、なるのかしら？」

「ヤッターヴァングレイIIですよ！ あ、当然スーパーバーニアとツイン・テスラ・ドライブは装備していますのよね？」

「設計の段階からツイン・テスラ・ドライブとスーパーバーニアも入れてあるから、前よりは安定性が増して加速する時間も短くていいの。それにアルフィミイが求めていたリボルビング・ステークを両方の腕に装備させてあるから、近接戦闘も充分に可能よ」

「おぉー！」

「ただ、動力炉は普通のプラズマジエネレーターじゃ足りないから機体自体が少し大きくなって重量が増えてしまったわ」

「原作だと重量が三分の一になっていますが、こちらではそう上手くはいきませんの。アレは本当に色んな作品の技術を使って重量を削減していますからね。それにどう考

えても動力が足りませんでしたし、これからはかなりマシになりそうですの。

「まあ、仕方ありませんの。それとすぐにヴァングレイⅡは動かせますか?」

「まだ無理よ。ヴァングレイの方からデータを吸いだして移行させないといけないんだから。それに貴女はヴィンデルに報告があるでしょう?」

「そうでしたの。こればかりはちゃんとしないといけないのですの」

「ええ、そうよ。アンノウンの事もあるのだからね」

「はいですの」

「ルリちゃん、ラピスちゃん、私はアルフィミイと一緒にヴィンデルの所に行ってくるけれどどうする?」

「えっと……」

「……ルリお姉ちゃんと居る」

「それでしたら、この艦を案内してもらったり食事をしたり、とにかく休憩するといいですの。かなり無茶をしましたからね」

「わかりました。ラピス、案内してくれますか?」

「大丈夫。任せて」

ラピスちゃんとルリちゃんが二人で手を繋いで外に向かっていく姿を見て、私も一緒に行きたいと思ってしまうの。

「駄目よ」

「顔に出ていましたか？」

「ええ、羨ましそうにしていたわ」

「まあ、お仕事優先ですよ」

「そうよ。シャワーも後回しね」

「マジですよ？」

「マジよ。ほら、行くわよ」

「あゝれ々ですよ」

無重力空間なので、レモンお姉様に手を引つ張られていくとそのまま身体が浮いていっっちゃいますの。それからヴィンデル少佐が居る艦長室へと移動します。艦長室ではシャドウミラーのトップであるヴィンデル少佐、実行部隊の隊長であるアクセル・アルマー、技術部のトップであるレオン・ブロウニングの御三方が揃いました。

「まずは長期の任務ご苦労様だった。報告は聞いている。良くやった。お前がもたらしたナノマシンは我々にとってかなり有用だ」

「ありがとうございますの。ですが、使い方を間違つては災厄にしかならない事をしっかりと覚えておいてくださいですよ」

「心得ている。肝に銘じて運用する。レモンもそのように頼むぞ」

「わかっているわ。地球を破壊する訳にはいかないものね」

「そうだ」

「一応、運用するのは俺達実行部隊になるんだろうが、扱い易くしてくれよ」

「わかっているわ。基本的に使うのは機体や艦の修理やメンテナンスの予定よ」

「なんでしたら補助脳を作成してIFSを適応させるのも手ですの。今回の事で自己進化、自己増殖、自己再生のナノマシン技術を手に入れたので前よりも危険なく補助脳を作成できますの。また、体調管理や薬物治療にも使えますわね」

「そうなのよね。流石に試してはいないけれど、人体実験のデータは豊富にあるからそれを基礎として作ればかなりの短縮になるわ」

「私とルリちゃんみたいな直ぐに成長できる兵士を作れ出せますの。もつとも、志願制にしないと不味いですが……」

「言ってしまうえばIFSは阿頼耶識システムと同じ物です。もちろん、鉄血のオルフェンズの世界よりも安全にできます。あちらは喪失した技術を無理矢理使っているだけですから、一から作っているこちらは大丈夫ですの。ひよつとしたら、この世界の先に鉄血のオルフェンズがあるのかもしれない」

「その辺りは技術部に任せる。実験体は問題無い者を使い。宇宙海賊とかな」

「コイツ等、だな」

そうやってアクセルがモニターに表示したのはソレスタルビーイングのガンダム達です。それぞれ01、02、03と表示されていますの。

「アルフィミイが遭遇したこのアンノウンは有人機だ。異星人の物か古代文明の物かそれとも新型か。どれかはわからないが、動きからして有人機である事は間違いない」

「それなんだけど地球圏で作られた事は間違いないわね。Eカーボンが使われているし、装甲も地球の技術よ。ただこの粒子だけはまだわからないわね」

「そう言えばアルフィミイ」

「なんですの?」

アクセルが私の方へ移動して肩をガツチリと掴んできました。声をあげて抵抗しようとうと――

「セクハ――」

「お前、連中の事を知っているな?」

「――何を言っていますの?」

「通話ログを確認した。ヴァングレイとガンダムマイスター二機。とつてもいい計算らしいいな?」

私の馬鹿! テンション上がって調子に乗った発言をしてポロを出してしまいましたの。

「アルフィミイ?」

「……詳しい事は知りませんの。確定情報でないので伝えるのはどうかと……」

「答える。それを判断するのは俺達であってお前ではない」

「わかりましたの。まず、偽装情報を掴まされていなければ連中の名前はソレスタルビーイング。戦争を武力でもって根絶する事を目的にして生み出された私設武装組織ですの」

「戦争を根絶とはまた随分な事をお題目に掲げている連中だな」

「まったくくだな。それで構成員や拠点は?」

「わかりませんの。私知っているのは彼等が使う物が太陽炉と呼ばれる特殊な炉心で、それから発生する粒子がレーザーなどをジャミングする効果を持つ事。また、機体の名前にガンダムという名前がつく事。それを操る存在は優秀な軍人などをスカウトし、ガンダムに乗るガンダムマイスターと名乗っている事ですな」

「ふくん、太陽炉ね。見た限りではパーソナルトルーパーともアーマードモジュールとも違う理論で作られている機体だけど、それがガンダムなのかしら?」

「彼等はモビルスーツと呼んでいるみたいですよ。まあ、あくまでも研究施設に出資していた資産家の人達をクラッキングして手に入れた情報なのですが……」

「そういう繋がりが」

資金を探っていたら、資産家にたどり着いたのでそちらを調べたら知りました。という感じで誤魔化しておきますの。嘘は言っていませんし、問題ありませんの。

「そいつらの情報を渡せ」

「わかりましたの。後程、纏めて渡しますの」

「もしかして、探っていたからアルフィミイは狙われたのかもしれないわね」

「可能性は充分にあるだろうな」

「名前はわかるか？」

「そこまでのデータはありませんでしたの。ただ、コードネームは必要ですから、見た目からソード、ランチャー、スナイパーライフルとか、武器で適当に決めるといいかもしれません」

流石に名前まで知っているその後々、調査が入った段階で詰みますからこちらも提示しませんの。

「まあ、今は置いておく。必要なのはガンダムの戦闘データだ。アクセル、ソレスタルビーイングだったか。コイツ等は月面の戦いに介入してくると思うか？」

「多少は叩いておいたが、そこまで破壊したわけではない。乱入してくる可能性はどちらとも言えんな」

「なら、全員に到達しておけ。次に現れたら鹵獲しろと」

「了解だ。で、月面作戦については何か言ってきたか？」

「初戦は我々の敗北だ。連中は特殊なシステムを使っているらしい」

ヴインデルがモニターを操作して映したのは月面における戦闘でした。そこではヴァース帝国の機動兵器、カタフラクトが防衛部隊を蹂躪している映像でした。まあ、それも無理ありませんの。

相手は18メートルクラスですが、巨大なマント状の腕を使った格闘戦を行っております。おそらく、スーパーロボット対戦の出身者なのかもしれません。

「ただの格闘戦を得意とする機体じゃないな。なんだこの理不尽な防御力は……まるでアイツじゃねえか」

「おそらく、特殊なフィールドを展開しているんでしょうね」

機体表面に特殊なフィールド、次元バリアを展開し、光線を含めた全ての物理現象を吸収・消滅させ、敵からの攻撃を無効化するといったチート能力を持つニロケラス。

「空間転移技術を防御と攻撃に使っていますの。流星は古代火星文明の技術ですの。現行の私達を遥かに超えていますのよ。ああ、とつてもゾクゾクしますの」

「ええそうね。とつても調べたいわ。アクセル。これ、鹵獲してちょうだい」

「是非ともお願いしますの！」

「無茶苦茶言いやがるな……見た限りではビームも弾丸も無効化しているんだぞ」

「何か方法を考えないといけないわね」

「そんなのとっても簡単ですの」

「ほう。何か思いついたのか？ それとも知っているのか？」

「いえ、見ていたらわかったのですが……このバリアってビームを含む物理攻撃を吸収して無効化しているのですよね？ でしたらなんで月面に立っていられますの？ よしんば立てるとしても……攻撃する時に踏み込んでいますわよね？」

「……足はバリアを展開できないのか」

「確かに全部をバリアで覆ったら、地面の部分も吸収するはずよね。細かく設定できるのなら別でしょうけれど……」

「それと光も通さないのならどうやって視界を確保していますの？ 歪曲するだけなら補正すれば視界を確保できますが、完全に吸収するなら……」

「アクセル。コレ」

「浮遊型の外部カメラか。となると受信する部分にもバリアは展開できないと見るべきか」

「ピンポイントでの狙撃か有無を言わさない全包围からの攻撃がベストか」

「映像を受信しているのなら、クラッキングはできるわ。意外と簡単に手に入れられるかもしれないわね」

「それがそうもいかん。他の連中もやばいのがあるからな」

ニロケラスの傍には装甲が薄い機動力がずば抜けている機体、アルギユレと巨大な腕を六本装備しているヘラスが護衛をしています。ヘラスの方は腕をロケットパンチとして放ちますが、この腕が無茶苦茶硬いみたいでゲシユペンストのプラズマカッターなど平気で弾いて破壊しています。確か、分子を操作してものすごく硬くしているんだね。

「他にも色々特殊な機体が居るようだ」

「質で量を凌駕されたか」

「ああ。初戦は私達の敗北だ。だが、このまま手をこまねくことはない。司令部から通達が来た。コイツ等を排除しろとの事だ」

「了解した。さて、どうやるか……」

「アクセル。この速いのは任せてくださいですの」

「やれるのか？」

「速さで負けるつもりはありませんの」

「……それが無難か」

「じゃあ、私はこのバリアを持つ奴を相手するわ」

「なら、俺は残り物の六本腕か。まあ、これぐらいならどうとでもなるか。しかしヴィン

デル。他の連中はどうするんだ？」

「地球連邦軍特殊鎮圧部隊である三つのウルブスが他の部隊と共に担当する事になるだろう」

デューカリオンは重力制御ができるので私が欲しいのですが、まあ地球に落ちてくれればこちらから手を回しましょう。

「そういえばアルフィミイ。本当にお前が渡してきたシミュレーターの詳細は正しいのか？」

「正しいはずですが……まさか、ペーオウルフにぼろ負けしましたの？」

「ちっ」

「ボロボロに負けているわよ。それでこの頃暇さえあればシミュレーターに籠っているの」

「あらあらまあまあ」

「本当にミスはないんだらうな？」

「はい。キョウスケ・ナンブが本気を出したデータがアレですの。いえ、まだ可愛いぐらいかもしれません」

「本気を出したら、か。野郎、今まで手加減してやがったのか」

「でも、アクセルも凄く成長しているみたいでしたの」

「そうよ。最初は三分も持たなかったけれど、今は十分以上戦えるようになってるもの」
「それはそれで凄いのですの」

流石は主人公。成長速度が半端ないのですの。もしかしたら、ラスボス仕様のキョウスケ・ナンブにも勝てるかもしれないわね。

「私は旗艦で指示を出す。増援要請があれば部隊を率いて出るが、基本的にはアクセルに任せる」

「了解した。他の連中と詳細を詰めておく。アルフィミイは新しい機体の習熟訓練をしっかりとやっておけよ」

「もちろんですの」

「レモンは……」

「私はコイツの攻略方法を考えておくわ。弱点はわかったから、後はどうやってつくかよね」

「決まりだな。ヴィンデル」

「ああ。我々シャドウミラーとして本格的な総力戦だ。各自、ぬかるなよ」

「ああ（ええ）（はいですの）」

艦長室から出て、早速相手のデータを予測演算で作り上げてから、その倍の能力を設定しておきますの。これで後れを取る事はないでしょう。実戦で練習通りの行動がで

きる事なんてありませんもの。これぐらいやっておいて損はないでしょう。

第21話

さてさて、ヴィンデル達との会話が終わり、さつそく訓練しようかと思いましたが……ふと漂ってくる臭いに忘れていた事を思いだしたので、ルリちゃんとラピスちゃんに連絡を取って与えられた部屋に移動しました。

「お姉ちゃん、洗いますね」

「……私も……頑張る……」

「お願いしますの」

部屋に移動して合流した二人と一緒にシャワーを浴びますの。二人は既に入っていたみたいなので、私だけが洗ってもらいます。敏感なアルフィミイちゃんの肌を美少女二人に裸で洗ってもらおうというご褒美状態。最高ですの。

隅々まで綺麗に洗ってもらってから身体を拭き、下着をつけた状態で部屋の中に戻り、椅子に座りますの。後ろからルリちゃんが髪の毛を乾かしてくれます。その間にラピスちゃんを膝の上に乗せて彼女のお腹に腕を回し、もう片方の手で彼女の髪の毛を乾かしてあげます。

「ラピス、レモンお姉様に酷い事はされていませんか？」

「……大丈夫……皆、良くしてくれてる……」

「そうでしたのね。良かったですの。他の皆も元気ですか？」

「ん。元気。もうリハビリ、始めてる……」

「それは良かったですの。ルリも安心ですわね」

「はい。レモンお姉様、本当に良くしてくれているみたいです」

まあ、レモンお姉様がこの子達に酷い事はしないとは思っていましたが、ラピスの様子から本当に問題ないみたいですよ。やはり本人達から聞き取りしないと不安ですからね。通信だと近くに監視が居るので本音も話せないでしょうし。

私のルリちゃんとラピスちゃんに対する溺愛っぷりを考えると手を出すのはとても危険ですもの。レモンお姉様達もそれをわかっているでしょう。故にラピスちゃんは私とルリちゃんに対する人質になりますし、大切にしますの。

「……お姉ちゃん達は……これから戦いに行くの……？」

「ですの。でも、大丈夫ですよ。私とルリは必ず帰ってくるですの」

「はい。必ず帰ってきますから安心して待っていてくださいね」

「……うん……ずっと待ってるね……」

とりあえず、不安そうなラピスちゃんを可愛がりながら、まったりしているとルリ

ちゃんが髪のを乾かしてくれました。ただツイントールにされてしまいました。これはこれでいいですの。

乾いたのでラピスちゃんをベッドに寝かせてぬいぐるみを抱かせ、今度は私がルリちゃんの髪のを乾かしてあげますの。

それが終わつた後、改めて服を着るのです。今回は初めての戦争なので気合いを入れてアルフィミイちゃんの身体に含まれている力を出来る限り引き出しますの。なので今回ばかりは原作アルフィミイちゃんの服を用意しましたの。寸分たがわぬハイレグなので黒いスカートを用意してありますの。これがないと下半身の防御力が皆無ですしね。ルリちゃんはネルガルの制服ではなく、スーパーロボット大戦のニンちゃんが着ているゴスロリですの。

さて、着替えが終わつたらヴァングレイⅡの訓練ですが、基本的な事は変わらないので問題ありませんの。月面まで数時間しかないので、ブレインコンピュータを使って何度も訓練します。相手はチート機体ではありますが、速度で負けるつもりはありませんの。というか、速度で負けたらもう勝ち目なんてありませんの。

ただ休息も必要なのでラピスちゃんとルリちゃんと一緒に少し仮眠を取ります。寝ている間に身体をガンダムマイスターとの戦闘で得た経験を最適化させる事も忘れません。もちろん、その間もシミュレーターはゼロシステムを使いながら動かし続け、戦

闘経験値を積み上げていきますの。最適なコースとかがわかるだけでもかなりいいですからね。普通ならシミュレーターだけではゼロシステムの未来予知も失敗します。ですが、ここにクスハヤリユウセイ達から受け継いだ念動力を使えば弱点は補えます。基本的にはゼロシステムの未来予知で予感が働いた時だけ念動力で回避しますの。これが生き残るためにベストですよ。



時間になり、アラームで意識を覚醒させます。睡眠時の最適化も終了してきますので、起きてから服装を整えて軽くチューブで食事を取りますの。ルリちゃんトラピスちゃんも起きてきたので、三人で仲良く手を繋いで格納庫へ向かいます。すでにトライロバイト級万能母艦ギャンランドは作戦宙域へと到着しているようで、壁にあるモニターに映し出されている外の映像には沢山の地球連邦軍の軍艦が見えますの。まさに大艦隊といったところで、いくつかギャンランドと同じトライロバイト級万能母艦すら何隻もありますの。

「凄く沢山……」

「連邦軍の七割が集められているみたいですよ」

「総力戦ですね」

まあ、地球連邦政府にとって月面はそれだけ重要な場所なので仕方ありませんの。外の映像を見ながら移動していると、すぐに格納庫に到着しました。格納庫では沢山の兵士さん達が動き回っております。

ヴァングレイⅡの隣にはゲシユペンストMkⅡやアシユセイヴァーが置いてあります。反対側には何故かゲシユペンストMkⅣとして予定されていたヴァイスリッターまでありますわね。そちらの方は誰が乗るかは知りませんが、あの子のデータも欲しいですね。ライン・ヴァイスリッターを作りたいですし。なんでしたらヴァングレイⅡの次はアレを貰ってもいいかもしれません。

「ブロウニング少尉。こちらへどうぞ」

呼ばれたので私達はヴァングレイの前に移動し、そこに居る整備兵さんに状態を聞いてみるのです。

「システムの移行は終わりましたのですか？」

「はい。問題なく終わりました。後は細かい調整ですが、それはそちらでお願いします」

「はいですの。ルリちゃん、微調整を終わらせて出撃準備をしますの」

「わかりました。ラピス、ここでお別れです。良い子にして待っていてください」

「……お姉ちゃん……」

「大丈夫ですの。すぐにとは言いませんが、必ず倒して戻ってきますからね」
「わかった。良い子にして待つてる」

「はい」

しゃがみ込んでラピスちゃんを抱きしめた後、頬をに軽くキスをします。柔らかい感触がとてもいいですの。

「ほら、ルリも」

「はい」

ルリちゃんもラピスちゃんに同じようにする百合百合しい姿を鑑賞してから、ラピスちゃんとはお別れですの。流石に幼すぎる彼女を連れていくわけにはいきませんし、三人用にはできていませんもの。

「また後で」

「ん、またね」

ルリちゃんと二人でコクピットに入り、システムチェックを行ってから問題のある場所を修正し、それが終われば次は実際に軽く動かしてみても微調整しますの。両手を握ったり、屈伸してみたりといった感じですよ。

「ルリ、そちらはどうですよ?」

「こちらは大丈夫です。火器管制システムもリアクターの制御システムもほぼヴァング

レイと変わっていません。両腕が変わった事ぐらいですね。お姉ちゃんの方はどうですか?」

「速度が前よりも出やすくなっています。ルリが出力調整を気を付けてくれないと爆発しちゃうかもしれませんの」

「頑張ります。大型の高出力タイプだから結構大変かもです」

「まあ、オモイカネも一緒に頑張ってくれたらいいです」

『任せて』

オモイカネも答えてくれたので、二人にお任せしますの。私はただ撃ち貫くだけです。の。武装チェックなどもしっていると、モニターにアクセルの顔が映し出されました。

『準備が出来次第、順番に発艦しろ』

全体命令でしたので、私達もヴァングレイⅡを動かしてカタパルトに乗りながら発進します。

『発進どうぞ』

「ヴァングレイⅡ、アルフィミイ・ブrowning及び」

「ルリ・ブrowning。発進します」

カタパルトから宇宙に射出され、全天モニターに無数の戦艦とパーソナルトルーパー、アーマドモジュールの姿を確認できますの。

「お姉ちゃん、合流ポイントが表示しました」

「ありがとうございます」

ルリちゃんのナビゲートに従って移動しますの。少しするとアシユセイヴァーやヴァイスリッター、それにゲシユペンストMk-II達が集まってきました。それからそれぞれが手で触れ合って接触回線で会話を行うのです。こうする事によって盗聴の可能性を減らしてあります。

『全機揃ったか?』

アクセルの言葉に皆が答えていきます。全天モニターも人の顔でいっぱいになってしまいますのである程度は後方に回します。そもそもオモイカネで一枠は使っていませんもの。ただレモンお姉様もいらつしやるのでアクセルとお姉様だけは前の方に置いておきますの。

『揃っているようだな。ではこれから移動を開始する。まず陽動として連邦軍が動く。それに釣られた火星の軍団を左右から別れたウルブスが襲撃する。俺達は好きなタイミングで紹介していいらしいので、背後に回る。そのため移動は基本的にスラストは使わずにデブリ帯を抜ける。全員、暗視モードでついて来い。光は出すなよ』

『『了解』』

暗視モードに切り替える事で内部もかなり暗くなります。他の人達はゴーグルを付

けたりして対応するのですが、私達は必要ありません。暗視は標準装備ですしね。

「アクセルが進んでいったので、私達もついていきます。ですが、ヴァイスリッターの動きが少し遅れておりますの。」

「大丈夫ですか？」

『流石に普通の訓練だけじゃこんな特殊なものはきついわね』

「ヴァイスリッターに乗っているのはお姉様ですので、それも仕方ありませんの。私はルリちゃんを軽くみると頷いていましたので、私達が運んで差し上げる事にするですの。」

『ごめんなさいね』

「いえ、研究者が特殊部隊と同じ動きが出来るのはおかしいですよ」

『でもアルフィミイちゃん達はできるじゃない』

「お姉ちゃんが異常なだけです」

「失礼ですの。私は自分が作られた役目を全うしているだけですのよ？」

『そうね。アルフィミイちゃん達は……』

「頼りにしてくださいお姉様。あの速いのも片付けてすぐに援軍に向かいますの」

『頼りにしているわ二人共』

「はい」

「頑張りますの」

アクセル達がデブリを蹴って移動していくので、それをヴァイスリッターを背負いながら真似ていきますの。まるで赤い彗星やフル・フロンタルみたいですよ。

「ところでお姉様はあのデカブツの攻略方法は思い付きましたの？」

『まずはカメラを潰して受信アンテナの穴から狙撃……する技術はないからハッキングかしら。浮遊型のカメラから逆アクセスをしてシステムダウンを狙うのだけど……』

「それってかなり無理がありますよね？」

『ルリちゃんの言う通り、無理があるわね。向こうのシステムがわからないんだもの。解析する時間もないし、仕方がないから最終手段として地面を吹き飛ばす事にしたわ。どうせ相手は月面から動かないのでしょうし』

「まあ、それが最終手段ですよ」

『それに一応、他にも考えている事があるから心配しないでいいわよ。それよりもそっちは大丈夫なの』

「ご心配なく。ちゃんと倒す方法はありますの」

「お姉ちゃん、結構無茶苦茶するから不安です……」

『言えてるわね』

「酷いですよ」

『ヴァングレイを壊してくれたのは誰だったかしら』

「私ですの……」

「ふふ」

ルリちゃんも笑ったので頬を膨らませておきます。今もシミュレーターをしていですが、勝てる確率は80%を超えていますの。ぶつちやけRTAができるレベルで楽勝ですの。それほど相性抜群ですよ。

『始まったわね』

「たまや〜ですよ」

「あははは……」

煌めく光の輝きが少し離れた場所からでもしつかりと見えます。また爆発が起きました。アレの一つ一つに最低でも一人一人が居ますの。戦艦なら数百人単位で消えます。

火花を見ながら進むと、デブリ帯の中にはついこないだの戦闘で出来たであろうパイソナルトルーパーなどの破壊された物や人の死骸が漂っていたりします。勿体ないので後で回収しておきましょう。一応、ナノマシンを散布しておきます。これで近付いて電波を発進すれば位置がわかりますからね。

しばらくすると目標宙域に到着しました。相手の後ろ側ですので、そこから月面にあるハイパーゲートに向けて進みます。何時でも戦闘を開始できるようにしながらです

が、当然のように相手も防衛戦力を配置しておりますの。

『貴様等のような小賢しい地球人の事など分かりきっている』

わざわざ全域通信でこちらに向けて伝えてくれたようですよ。

『どうやら敵さんがおいでなすつたようだ。アルフィミイ、ルリ。殺れるな?』

「任せてくださいですの」

「お姉ちゃんと一緒に殺れます」

『じゃあ任せる』

現れた敵は腕部の大きさに対して異様に細い脚部を有し、頭部に三本の角を備えたそのシルエットは白い甲冑。つまり、火星騎士ブラドが搭乗するカタフラクトですの。

「ルリ、やりますわよ」

「了解です。戦闘システム起動。オモイカネ、サポートをお願いします」

『マカセテ』

スラストーとツイン・テスラ・ドライブ、スーパーバーニアを使って速攻で突撃するですの。

『愚かな。このヴラドとアルギュレに正面から挑むとは……アルドノア・ドライブ最大。』

抜刀』

相手は当然のように対抗して腰のビームサーベルを引き抜いてきますの。こちらに

向けて巨大なビームサーベルを振り抜いてきますので、背中にあるスラスターを全開にして瞬時に上に移動して足のミサイルポットからスモークグレネードを発射します。すると即座に相手もスラスターを使ってスモークの中から出てきましたの。

『飛び道具とは無粋な！』

正確にこちらの位置を把握して突撃してきましたの。アニメで見た速度よりも宇宙空間だからか圧倒的に速いですが……それでも私とルリちゃんが操るヴァングレイIIの敵ではありませんの。

「お姉ちゃん、予想より遅いです」

「これなら楽勝ですの。破壊から鹵獲に切り替えますの」

月光を撃ちながら距離を取ります。相手はビームサーベルを振るってこちらの攻撃を斬り飛ばします。撃った弾丸は全て溶かされているようですの。その直後にこちらに突撃してきたので、スラスターで下に移動します。すると念動力による嫌な感じがしたので即座にスーパーパーニアを使って移動しますの。

『抜刀』

先程まで居た場所がもう一本のビームサーベルで斬り払われました。こちらも負けてはいられません。

「ルリちゃん」

「はい。プラズマカッターです」

「ありがとうございますの」

相手の下を通る時にプラズマカッターで斬りますが、装甲が微かに焼けただけで相手のビームサーベルで防がれましたの。ダメージはほぼありませんね。

「ダメージほぼゼロですね」

「止めですの。やはり接近戦は危険です」

即座に離脱するのですが、相手はスラストターを全開にしてこちらに肉薄してきます。なので、ツイン・テスラ・ドライブとスーパーバーニアを使って直角に急上昇して相手の攻撃を回避。そのまま弧を描くように反転してミサイルを放ちますが、それも相手はビームサーベルで切断してきますの。

『その機動力は驚嘆に値する。しかし、そのような機動が何時まで持つかかな?』

「ご心配には及びませんの」

それに私に集中しているようですが、すでにアクセル達は月面に向かいました。ですのので、私達の役目はアルギュレを撃破する事。いえ、鹵獲する気満々ですが。

『そうか。では高速戦闘と参ろう』

「よろしいのですの? 他の部隊はもう月面に向かっておりますのよ?」

これだけ相手がアクセル達のところに向かおうとしたら後ろから殺つてやりますの。

『あちらには他の騎士達が居る。何も問題はない。それに貴様を殺してから進めばいいだけだ』

「なるほどですの」

「お姉ちゃん……」

「わかつておりますの」

接近戦に付き合ってやる理由はなし！ 疾風と月光、月影を使って弾幕を展開しながら高速で移動します。ですが、相手も20Gは軽く超えて出してきましたの。どう考えてもアニメよりも強いのですの！ なんですか、スパロボ世界になったからレベルと改造が適応されたんですの？ もしくは強化パーツ？ 私にも欲しいのですの！

ビームサーベル二本で斬りかかってくるアルギュレをバレルロールやインメルマンターンを使いながら、ルリちゃんとおモイカネが相手の行動パターンや性能を解析し、ゼロシステムに渡していきますの。私はゼロと念動力を使いながら相手の行動を予測して回避しながら反撃しますが……やはりダメージが碌に通りませんの。アニメと違ってやはり強いのですの。

とりあえずやる事は一つです。弾幕を展開して相手の剣技を抜いてダメージを与えるか、それともエネルギー切れを待つか。どちらも無理っぽいのですの。というか、ヴァングレイIIの事を気にしないでもいいのなら、特攻して相打ち覚悟でいくらでも潰せるの

ですが、それをやると回収しても旨味がないですし、アクセルはともかくお姉様の援護に行けなくなりますの。

「お姉ちゃん、私に考えがあります」

「ふむ。ルリを信じましょう」

「内容を聞かなくていいんですか？」

「お任せしますの！ 正直、考えている暇はつ、ありませんのよ！」

ビームサーベルがすぐ横を通り過ぎ、十字になるように次は横薙ぎがきます。それをマトリックスのような回避行動をして難を逃れ、離脱します。その時にミサイルを撃つて斬られる前に爆発させますが、それも切り払われます。本当、えげつない熱量ですの。

「じゃあ、こつちです。デブリ帯に逃げ込んでください」

「了解ですの」

デブリ帯の方へ逃げて行くと、相手は停止して止まりました。流石にデブリ帯まで着いてはこないようですの。しかも月面の方へ向かおうとしました。

「来ませんの」

「別に大丈夫です。今の中に陣雷を用意します」

「高速戦闘中じゃ出せませんものね」

「はい」

ポジットロンカノンを取り出して相手に向けますが、後ろ向けで下がっているのでおそれらく無駄でしょう。

「それでどうしますの？」

「次は私達らしい方法で無力化します」

ルリちゃんの提案はいたって簡単ですの。ヴァングレイⅡの機能を十全に使うだけの簡単なお仕事ですの。

「なるほど、面白そうですね」

「できますか？」

「逃げていけばいいだけなので余裕ですの！」

「ではお願いします」

「お姉ちゃんに任せるですの！」

こちらに向いたままに月面へと向かっているアルギユレの方へは移動せず、一度上に移動して加速距離を確保して突撃します。当然、こちらはこちらに向けて行動を起こしますが、周りを物凄い速度で飛び回るだけで攻撃はしませんの。

『小娘共が、何を企んでいる？』

その途中でスモークを焚いてついでに他のもばら撒いていきます。相手は適当にビームサーベルでスモークごと薙ぎ払ってきませんが、問題はありません。

「準備が、整いました、た……何時でも、やれ……ます……」

グワングワン揺れまくっているコクピットの中で苦しそうに答えてくれます。まあ、現在ヴァングレイⅡは90度ターンは当たり前で35度とかもやっておりますの。つまり25G以上の負荷が身体にかかります。つまり早い話が苦しすぎますの。

「こちらは何時でも構いませんの」

「オモイカネ……」

『開始』

『む？　なんだこれはっ！』

アルギユレの周りに散布された修理用ナノマシンが発光し、兜を中心に全体が閃光で埋め尽くされます。これこそがスモークと一緒に撒いた理由ですの。さて、相手のメインモニターが頭部にある事はアニメで確認しております。そして、相手が回復する前に突撃して背後から強襲をかけますの。

『舐めるなっ！』

ゼロによる先読みを使ってビームサーベルを持つ両手をアルドノア・ゼロの主人公である界塚伊奈帆がやったように両腕を掴んで止めます。

『愚かな！　力でこのアルギユレに勝てるはずがないというのに！』

「力では勝てないですの」

「使うのはこちらです」

ヴァングレイⅡにはヴァングレイと同じくカバーが上下にズレて砲身が展開する局部マシンキャノンがありますの。

「えい」

二人で容赦なく至近距離からマシンキャノンを連射します。あ、ちゃんとダメージ量は計算してコクピットの部分に穴が空く程度に留めておきます。マシンキャノンによる腹部の破壊。マシンキャノンだけでは足りないので肩にある疾風も使ってコクピットの装甲を削っていきますの。アルギユレは次元バリアとかそんなのありませんもの。

『おのれ！ 貴様に騎士の誇りはないのか！』

「生憎と騎士ではありませんの」

「むしろ、お姉ちゃんは暗殺者？」

「それが正解ですの。そう、アルフィミイちゃんは時に科学者、時に軍人！ しかしその実体は暗殺者ですの！ というわけで、ちよつと殺してきますのでコクピット開けますね」

「いつてらっしゃい」

シートベルトを外してからコクピットを開きます。酸素が急激に吸い出されてなくなります、問題ありません。そのまま外に出ると、アルギユレのコクピット部分には

微かに穴が空いています。そこにパイロットスーツの指の先から腕を変化させてドリルへとナノマシン構造を変化。後は突っ込んで削り出して行きますの。

「なんだそれは！」

「知る必要の無いこと need not knowですの」

中にお邪魔したら、アルギユレのパイロットであるヴラドさんは近くに置いてあつた刀を引き抜き、斬りかかっていますの。ですが、パイロットスーツの表面を分子配列を弄って硬質化して金属へと変えると簡単に弾けます。私のスーツはナノマシンで出ていますもの。これぐらい容易いのです。

「化け物めっ！　もしや貴様は——」

「いただきます」

「——っ！　やはりそうか……」

身体を触手で貫き、その血液から肉までしつかりと喰らいますの。

「ただでは負けぬ！　ヴァース帝国に栄光アレ！」

何かのボタンを押すとアルドノア・ドライブを暴走させる事で自爆する仕掛けのようです。仕方ないので機体ごといただきます。アインストの力、舐めるんじやありませんの。アルドノア・ドライブがあるとどこまで触手を伸ばしてそれを取り込んでやりませす。それからナノマシンのエネルギーとして暴走した力を使って増殖を行いますの。

本来ならエネルギーを使う事はできないのでしようが、こちとら先程ヴラドを取り込んだ事で彼のDNAマップを手に入れました。これによって正規ユーザーと誤認したアルドノア・ドライブは私の掌ですの。

「はい、お疲れ様でした。貴方の力はわたくしが地球の為、人類の為に使わせていただきますの」

増殖させたナノマシンで壊した部分を修復させてアルドノア・ドライブも元に戻しますの。コクピットの方もある程度修復すればやる事は簡単ですの。

「ルリ、解析を手伝ってくださいですの」
「わかりました」

アルドノア・ドライブとアルギユレを解析したデータをヴァングレイに移したら、アルギユレに私が乗ってヴァングレイIIを掴みながら移動しますの。何をやるかって決まっていますの。敵機を鹵獲したら騙し討ちは基本ですの！

あ、抜刀さんの刀はわたくしがちやんと貰っておきますの。いや〜アルフィミイと言えば刀ですし、欲しかったんですよね。ありがとうございます。

第22話

月面 ハイパーゲート付近 アクセル・アルマー

さて、アルフイミイが敵の一体を引き付けている間に俺達は月面に到着した。流石にハイパーゲートへの直通ルートではないので、月面を進むしかない。直通ルートはウルブスが三方向から進軍中だ。そちらに火星人共も力を割いている。そうでなければ連中が軽く突破してくるだろう。ムカつく事だが、俺達の部隊はまだまだ力不足だ。だが、今回の戦いを経て更なる力を手に入れる事ができるはずだ。

「全機、着地したな」

『『はっ』』

「これより強襲を仕掛ける。遅れるんじゃないぞ」

『『了解！』』

アシユセイヴァーを進ませる。俺が先頭を歩き、その後ろを量産型ゲシユペンストMk-IIが△の形で着いてくる。真ん中にはレモンが乗るゲシユペンストMk-IVだ。

こいつはトライアルに出されたが、選考落ちしたのをレモンが確保してきた。

『アクセル、手筈通りでいいのよね?』

「ああ。一機は俺が引き受ける。お前達はレモンを手伝ってやれ」

『『了解』』

月面を進むとハイパーゲートの巨大な壁が見えてきた。同時にその前に立つ二機の存在。火星から発掘されたアルドノア・ドライブを搭載したカタフラクトとかいう機動兵器。

その内の一機は六本の巨大な腕部ユニットを有し、全長22メートルもある。攻撃方法は巨大な六本の腕を飛ばしてくる事。この拳は強度が凄まじく硬いのは判明している。通常の弾頭では意味がなく、ビーム兵器でも少しのダメージしか与えられない。そんな理不尽な機体だ。

もう一機はずんぐりむっくりした展開式の大型アームを持つ機体でコイツが一番やばい。次元バリアとかいうふざけた物を持っている。俺達が狙う最優先目標はコイツだ。

『妾の領土に土足で踏み込むか。アルドノアを持たない劣等種が』

『フェミーアン伯爵。ここは私が鼠共を始末してみせましょう』

『良からう』

わざわざ全体通信でそんな事を言ってくれる。一機だけでくるのならそれはそれで好都合だ。

「全機。ジャミング開始し、カメラを破壊しろ」

俺の命令に従い、クラスタミサイルとチャフをその辺りにばら撒いていく。するとこちらの想定通りに相手は動きを止めた。そこをガンレイピアで撃ってみるが、弾丸は消失した。やはり、事前情報通りか。

『隊長、カメラを破壊しました』

「了解した。近付かないようにだけ気をつける。それと再度射出される可能性もある。奴が打ち出した物は全て破壊しろ」

『『了解』』

足場を破壊してこけさせる事ができれば解除しなければそのまま月の中心へ頭から落下する事になるだろう。逆に空を飛ばうとしたら下から足を破壊すればいい。起き上がるためにはバリアを解除しないといけないのだが、そのタイミングでなら攻撃が通る。しかし、それだと必要以外の、俺達の欲しい部品まで壊れる可能性がある。故に次の手段だ。

『アクセル、やるわね』

「ああ、やってくれ」

次の攻撃はレモンが行う。グレネードをダンゴムシの上に放つ。ソイツが爆発すると赤い塗料が撒き散らかされる。レモンが使ったのはペイント弾だ。これによってアルフイミイが言っていた仮説が正しいのなら、どこを攻撃すればいいのか容易く判明する。

『アルフイミイちゃんの仮説が正しかったわね』

「ああ、そうだな。全機、赤色のペイントがある場所を狙え」

大量のペイントを浴びればどうなるか。答えは簡単だ。バリアが展開されていない場所は赤く染まり、それ以外はなんともない。物質はおろか運動エネルギーや電波、光、音なども吸収する性質を持ちあわせているのは先の戦いで散っていった同胞が身をもって知らせてくれた。なら、対策は立てられる。

『ここまでのようね』

『まだやれます！』

『無理よ。行きなさい、我が眷属達』

まあ、当然のようにもう一機が動く。六本腕から四本の腕がこちらに飛来してくるのでソードブレイカーを放つ。こちらのビームはやはり弾かれる。

「全機、回避を優先せよ。それとレモン」

『わかっているわ。スモークをたやすなって事でしょう』

「そうだ」

六腕に関しては映像が見れるのだから、そちらから情報を送られては叶わん。だからこそ電波妨害もしているが相手は古代火星文明の技術を使っているからどうなるかはわからん。故に俺達がやるのは単純だ。徹底的にスモークを焚いて情報を与えずに六腕を相手する。

「俺が相手をするから、その間にお前達はソイツを仕留めて持ち帰れ」

『了解』』

さて、本気で相手をするか。まず相手のロケットパンチはソードブレイカーを始めとした俺の装備では弾けない。正面からではどうしようもない。だが、俺達の^{シヤドウミクラフ}技術^{レモンレアルファイミ}班は優秀だ。アルフィミーに関しては油断はできないが、分析と解析、それに情報収集能力に関してはかなり高い。

飛んできた拳を後ろに下がって回避する。地面が貫かれる。同時に別の拳が飛んでくるので右、左と移動して回避する。普通の銃弾では無理だが、そのまま引き付ける。

「イヤだ」

目の前に飛んできたものを飛び上がる事で回避する。その先にあるのはダンゴムシだ。いくら硬かろうと次元バリアならば排除できるだろう。

『ちつ、邪魔にしかならんとは……』

『申し訳ございません！　しかし、今解除する訳には……』

これで二つは破壊できた。残り二つ。いや、四つか。スラスターを使いながら滑るよ
うに移動し、回避と同時に推進部をガンレイピアで狙撃する。いくら装甲が硬かろうと
推進部は弱点たりえる。

『おのれ！』

次の場所はこちらか？

『ちよつとアクセル！　最低でも一つは残しなさいよ！』

「わかつている」

六腕に接近して斬りかかるが、こちらもダメージが入らない。やはりアシユセイ
ヴァーでは火力が足りんな。相手は両手で殴りかかってくるので後ろに下がる。だが、
その瞬間には拳が飛んできた。腕を盾にして防ぐが吹き飛ばされていく。背後からも
腕が迫ってくるが、ソードブレイカーを使って推進部を破壊してやる。

モニターの位置を目掛けてガンレイピアとソードブレイカーで攻撃して操作をかく
乱させ、スラスターで拳から逃げる。どちらにせよこれで残り二つだ。

『劣等民族がああつ！』

「その劣等民族に負けるんだ。これがな」

接近しながらソードブレイカーを操作し、残りの腕を狙わせる。流石に相手も警戒し

て簡単には飛ばせない。故に近付くと攻撃して来るが、飛ばしてはこない。逆にこちらはレーザーブレードで応戦するが、生半可な手段ではどうにもならないな。

やはり狙うとしたら関節部か。飛んでくる拳を避けながら足の関節部を攻撃しようとするると行き成り浮き上がって変形しやがった。そのまま空へと飛び上がり、弧をかいで戻ってくる。速度もかなり出ているが……

「遅いな」

アルフィミイが操るヴァングレイと比べるまでもない。そもそもこれは失策だろう。たった一つの大きな腕になったのだ。確かに相手が普通の機体なら問題ないだろうが、こちらにはソードブレイカーがある。故に背後からエンジンを狙撃すればいい。

「終わりだ」

アルフィミイとキョウスケの戦闘軌道と比べればこの程度、なんてことはない。

『馬鹿なっ！ この妾が劣等民族ごとくに！』

ソードブレイカーでエンジンを破壊し、墜落してきた奴の上に移動し、レーザーブレードをコクピットに向ける。その瞬間、空からもう一機が降ってきた。

『抜刀』

「ちっ。アルフィミイめ、しくじりやがったか」

バックステップをしながら空中でスラストを使って距離を取る。先程まで居た所

を極大のビームサーベルが薙ぎ払ってきたので、ソードブレイカーで迎撃する。だが、相手はビームサーベルを器用に使って全ての攻撃を落とした。

改めて距離を取ってから確認すると、降りてきた機体はアルフィミイとルリが押さええているはずの奴であり、腕にはヴァングレイが担がれている。

『アクセル、どうするの?』

「知るか!」

ここは見捨てるのがいいか。どちらにせよ簡単には死なないだろう。あの二人はナノマシン技術によって肉体が強化されている。それによって人とは比べ物にならない程の耐久性を得ているのだ。コクピットをやられたら不味いだろうが、それ以外では問題ない。まあ、最悪運が悪かったと思ってもらおう。

『ヴラド卿! 助かったぞ!』

『うむ。こちらも鹵獲したが、こちらも鹵獲されたようだな』

『すまぬ』

『機体は動くか?』

『いや、無理だ』

『では、こちらに乗り移れ。業腹だが、コイツを盾に一時撤退する』

『卿ならばコイツ等を排除できるであろう! 撤退するなどあり得ぬ!』

『理解しろ。汝等は敗北したのだ。さっさとこちらに移れ』

そう言いながらヴァングレイを盾にしてくるが……

『アクセル、動かないでね』

「レモン？ どういうつもりだ？」

『いいから。私を信じて』

「ちっ、了解した」

向こうで何かを話している間に……あちらのкокピットが開いた。そこから女が出ようとするが、その前に止まった。

『そちらのкокピットを先に開けてくれ』

『了解した。これでいいか？』

やってきた機体もкокピットを開き、互いに姿を見せた所で――

『違う！ 誰だ貴様！ ヴラド卿が捕虜を取るなどあり得ぬ！』

『ちっ』

舌打ちと同時にビームサーベルが瞬時にкокピットの部分を薙ぎ払い、кокピットの外側を器用に切断した。もうこの時点で理解した。何故、レモンが止めたのかもだ。

『まあ、分子構造の変更などは腕の方があればいいのだが、構わんか』

кокピットから男が出て来てあちらに飛び移ったと思ったら通信を通して悲鳴が聞

こえてくる。

『ひっ!? なんだ貴様っ! ばっ、化け物めっ! や、やめろおおおっ!』

画面に緑色の蔦が移り、真っ赤な物が画面を塞ぐ。次にぐちやぐちやと何かを食べるような音が聞こえた後、緑色の蔦がコクピットから出て来て頭部と心臓が無くなった死体が放り出される。

『制圧完了……ですの』

「アルフイミイか」

『Y e s。本当は決着つく前に鹵獲したアルギユレで背後からドスツとするつもりでしたのよ? でも、その前にアクセルが決着をつけてしまいましたから、慌てて綺麗に手に入れる方法にしたんですの』

つまり、俺は良い所を根こそぎ取られようとしていたわけか。まあ、鹵獲できたのなら旨味は充分にあるから構わん。

『ルリちゃんも無事かしら?』

『はい。大丈夫です。少し気持ち悪いですし、身体中が痛いですが大丈夫です』

『そう。良かったわ』

「しかし、アルドノア・ドライブは俺達では起動できないのではなかったのか?」

『その通りですの。ですから、彼等のDNAを頂きました。ナノマシンでDNAを保存

して正規ユーザーと誤認させておられます。どちらにせよアルギュレとヘラスはゲツトしました。そちらはどうですか?』

「レモン」

『こちらでもダンゴムシを手に入れたわ。パイロットも確保しているわ』

『ダンゴムシ……それはニロケラスという名前みたいです。早速、そちらを解析しませんと……』

「お前達、まだ任務中だ。鹵獲機体は後程……いや、それも無理か」

上から複数の物体が降ってくる。一つはヒリユウ改で、他は多数のパーツナルトルーパーだ。その中には奴も居る。そいつらはハイパーゲートに直接降りていつている。

『アクセル。ここは任せてマオ・インダストリーに行きませんか?』

「マオ・インダストリーか」

『何か嫌な予感がありますの。出来る限り、ハイパーゲートから離れた方がいいですの』

「……いいだろう。このまま行っても手柄は確保できん。民間人の救助を優先する。アルフィミイ、お前とルリは部隊の半数を率いて向かえ。俺とレモン。それに残りは鹵獲した機体をキャンランドに運ぶ。ここで奪われたら最悪だからな」

『『了解!』』』

しかし、事前情報があったからこそ楽に勝てたが……前の戦闘映像とアルフィミイの

思い付きがなければ何人かは確実に死んでいたな。いや、そもそも思い付きか？ それにしては断定しているような言動だったが……もしかしてスパイか？ それに機体の名前を知っているのもおかしい。解析したにしては情報を得るのが早すぎる。

いや、スパイならコイツ等を確保させる理由はない。ましてや俺達に技術提供するなどありえん。敵になればそれだけ厄介な事になるからな。だが、確実に俺達には言っていない何かがあると判断できる。少なくとも火星についての知識はあるはずだ。どちらにせよ、利益があるのだから泳がせておくとしよう。火星のカタフラクトに使われている技術は俺達にとっても欲しいものだ。ペーオウルフに勝つためにもアシユセイヴァーを超える機体を用意してもらわねばならん。

第23話

アクセルの許可を頂いたのでアルギユレをアクセル達に預け、私はヴァングレイに戻ってからマオ・インダストリー社月面作業用ロボット「リイウロン」を製造しているほか、地球連邦軍の人型機動兵器パーソナルトルーパーの開発と量産も行っている。また、テスラ・ライヒ研究所の協力の下でEOTを搭載した特別仕様の機動兵器の開発も行うなど高い技術力を持っており、ゲシユペンストやヒユツケバイン、SRXなどの様々な名機を世に送り出している。フランスにも活動拠点を置いており、首都であるパリに支社、オルレアンに工場が存在している。の本社を目指しますの。

もちろん、半数のゲシユペンストMk-II六機がわたくしについてきますの。小隊二部隊ですわね。レベルは精鋭ですがエースではないのでスパロボ世界のレベル換算でだいたい20から30前後だと思えますの。アクセル達は50くらいありそうです。キョウスケは99とか100かもしれませんが。まあ、あくまでも予想です。そもそも現実なのでステータスとか存在しませんし。

「お姉ちゃん。最短ルートを構築しました」

「ありがとうございます。各機にルートを渡してください。各機に通達しますの。時間がありませんので後から追ってきてくださいですの。一小隊は退路の確保を任せます。もう一つの小队はマオ・インダストリー社の本社周辺の探索をお願いしますの。火星のカタフラクトを発見次第、交戦を避けて撤退。すぐにわたくしに連絡し、次にアクセル隊長に連絡を入れてください。あくまでも身の安全が優先、命を大事にですの。いいですわね？」

『『了解！』』^ヤ

「では先に突貫しますの」

ツイン・テスラ・ドライブとスーパーバーニアを最大まで使って一気に加速して戦場を突き進みますの。戦場である月面には当然のように火星のカタフラクトだけでなく、火星カタクラフト用の戦術輸送機スカイキャリア後部に展開式のカーゴを有し、カタフラクトや人員輸送用コンテナを搭載する事が出来る。輸送機ながら機銃やミサイル、榴弾砲などを装備している事からそれ相応の戦闘力があり、カタクラフトを搭載したままドッグファイトを演じるといった芸当も可能など、その運用の幅は広い。そのシルエツトから「蝙蝠」と称されている。も多数存在しています。それらをゼロシステムに従って撃ち落としながら移動しますの。

「目標への到着まで三分四十秒です」

「敵勢力の配置は……」

「流石にジャミングが酷くてわかりません」

「ですよ。火星の技術解析はまだ始まったばかりですから仕方があり、ませんの！」

上から榴弾砲が雨あられと降ってきたので、隙間を縫うようにして抜けながらバレルロールをして電磁加速銃・月影と電磁加速砲・月光でスカイキャリアを撃ち落としていきます。流石に全てを撃ち落とす事はできませんし、する必要ありません。何故なら後ろから追ってきているゲシュペンストMk-IIの方々撃ち落としてくれるからです。

「お姉ちゃん……アレ、何ですか？」

「アレは……」

マオ・インダストリー社の本社があるはずの場所。そこにあつたのは月面都市に突き刺さったお城でした。つまり、私達の目の前に現れたのは揚陸城と呼ばれる高位の火星騎士に与えられる航宙艦です。城と称される通り、騎士達の基地であり住処としての意味合いを持ち、航宙艦というよりも要塞施設・拠点という表現が相応しいですね。

原作では城自体を質量兵器として地球へ落下させその衝撃波で周辺を掃討し、その後城を戦略拠点として部隊を展開し版図を広げる事が火星軌道騎士達の軍事行動におけ

る初手となっております。もちろん、多数のミサイルやカタフラクトを搭載しており、また外郭も大気圏突入と地表激突に耐えうるだけの剛性を誇りますの。

「やばっ!」

相手から多数のミサイルや対空砲が放たれてくるので、慌てて上に逃げようとするの。でも、ゼロちゃんが前に逃げろと言っていますし、念動力の方もその方がいいと言っている感じがしますので前進あるのみですの。そう、わたくしは念動力の奴隷ですの!

「ひっ!」

怖がるルリちゃんには悪いですが、全力で地面スレスレを飛行して突撃しますの。それと勘で適当に月光を撃って砲門を壊しておきますの。

しばらくミサイルの雨の中を駆けると月面都市のゲートが見えてきました。当然、ゲートは閉まっておりますの。

「ルリ、生体反応はありますか?」

「えっと、ありません……」

「わかりましたの」

ポジットロンカノンを取り出して引き金を引きますの。発射された陽電子はゲートに直撃して破壊。大きな穴を開けたのでその中へと入ります。

月面都市は本来なら空気と重力が存在するはずなのですが、中にはそんな物は存在しませんでした。そこら中に車やビルなどの瓦礫が浮き上がって漂っております。

「……ひどい……」

ルリちゃんの言う通り、かなり酷い光景が目の前に飛び込んできました。まず、車の中に人が居ます。宙にも漂っております。肉片となっただけの人達もいます。どの人達も皆、等しく死んでおりますの。それもどう見ても民間人の人達ですの。中には小さな子供だっているのですの。

「これが戦争ですのね」

「……うん……お姉ちゃんっ！」

「わかっておりますの！」

壊れたビルとビルの間から現れたのは騎士の鎧を思わせる優美な外観を有し、両腕に各種兵装を搭載したシールドを装備した機体。

「まるでウミネコみたい」

その姿はまるでウミネコのように見えてきます。その機体が機銃を放ちながら突っ込んできますの。ですから、こちらでもゼロで対応します。

「こんなところでエンカウントしないでくださいですのおおおっ！」

よりにもよって相性の悪いタルシスと速度を生かせない月面都市で遭遇とか、ヤバす

ぎるのです！

タルシスは未来予知が可能なカタフラクトでそれ以外は特にこれといった特殊能力が無く、全体的に高性能でまとまった機体ですの。それもそのはず……ぶっちゃけアルドノア・ゼロのラスボス、スレイン君が乗ることになる機体ですので普通に強いチート機体ですの。

こちらの回避を知っているかのように機銃を撃ってくるので、盾で防ぎつつ月光でこちらも攻撃しますが、瞬時に射線から回避してきますの。何発撃つても当たりません。

「ルリ、コイツはとっても難敵ですの。ですから、ゼロシステムを最大にしますの」
「わかりました。オモイカネ、手伝って」

『く』

「さあ、暴れるですの」

私とルリちゃん。それにオモイカネの演算能力を全てゼロシステムに注ぎ込んで未来予知の精度を上げますの。念動力も使ってブーストをかけ、全力全開の戦いです。本当、アクセルにアルギュレを預けるんじゃないやありませんでした。アルギュレなら、まだどうにかなったのですが……

スーパーパーニアを操作して目の前に迫ってきたタルシスのブレードを紙一重で回避しながら、こちらの右腕のリボルビング・ステークを叩き込みます。タルシスはそれ

をシールドでいなして回転し、ブレードで斬りかかってきます。そちらの攻撃も予測しているので回避軌道を取りますが、それも更に予知されてこちらも予知して素早く高速に機体を操作していきますの。

そして、至近距離でタルシスの機銃とヴァングレイのマシンキャノンでゼロ距離から砲撃。互いに予知していたので瞬時に下がりますが、予知の精度では相手が上なのでこちらに機銃が命中します。ですが、ヴァングレイの装甲はかなり分厚いので多少のダメージにしかなりませんの。

しかし、それでも動きは硬直するので相手が後ろに回ってブレードで斬りかかってきました。しかし、ツイン・テスラ・ドライブを使って前に逃げると同時に後ろに倒れるようにして移動。目の前のビルを蹴って方向を転換し、スーパーバーニアで加速。更にツイン・テスラ・ドライブとスラストターボも使いつついでに足のミサイルを撃って爆風も加えて加速して突撃。流石の相手も正気を疑ったのか、シールドをクロスしてガードしてきました。予知を信じていれば避けられたのでしょうか、足を犠牲にしてこんな馬鹿みたいな行動をとるとは思わなかったようですの。

「撃ち貫けえええっ！」

「行っつて！」

シールドに右のリボルビング・ステークを六発叩き込むと、流石にシールドを貫通し

ました。相手も後ろに下がって威力を削ごうとしましたが、それよりもこちらの速度の方が圧倒的に高いですの。加速だけは負けませんの。もう一枚のシールドに幻の左手によるリボルビング・ステークを使い、撃ち貫くですの。

「アレ？」

カチンカチンと反応しません。

「ジャムりました……」

「このタイミングですの!？」

シールドを貫けず、リボルビング・ステークは中途半端に刺さったまま。ダラダラと嫌な汗が流れてきます。当然のように相手は待つてくれずにブレードで斬りかかってきますので左手腕をパージして月光で腕を狙撃。ジャムった弾丸ごと爆発させるついでに全てのミサイルを発射。相手に命中する前に途中で起爆させることで未来予知に關係なく周りの建物ごと崩壊させますの。発生した砂塵に隠れてながら近くの壊れたビルに突撃し、身を隠します。

「ルリちゃん、ここまでのようですの。データをコピーしたら自爆装置をセットして、ここからは生身で行きますの」

「うん……流石にアレは無理ですね」

「相手が油断してくれていましたからどうにかなりましたが……アレで仕留められな

かったのは痛恨の痛手ですの」

必要な物を回収してからコクピットを閉じ、自動戦闘システムを発動させて私達は月面都市の地下通路を使って逃げますの。これで限界まで戦って自爆するのでタルシスのクルーテオ伯爵からしたら私達が死んだと思うでしょうね。

『陛下から賜りし我がタルシスを甘く見るな、小娘』

目の前がブレードで斬り裂かれて髪の毛が数本散りましたの。

「ヴァングレイちゃん！」

『ちっ』

もはやどうのこうの言ってるレベルじゃないのでさっさとマオ・インダストリー社の本社を目指しますの。クルーテオ伯爵は三つ巴の戦いを楽しんでいてくださいですの。

「やっちゃんえヴァングレイアですの」

命令を出すと月の内部に潜んでいたレジセイアからアインスト達が月面全体へと転移してきますの。もちろん、ここも例外ではありません。

『やはり現れたかアインスト！ 陛下の命により滅する！』

ああ、ちなみにアインストはヴァングレイも攻撃しますので、ヴァングレイも反撃しますの。つまり、アリバイ工作はしっかりとやっておきますの。

「お姉ちゃんって抜けてるところもあるけど、結構汚いですね……」

「かはっ!? ルリ……? お姉ちゃんは汚くなんてありませんの……」

「そういう意味じゃないです」

ルリちゃんと楽しいお話をしつつ抜刀おじさんから貰った刀をアインスタ化しつつ目の前の壁を切断し、触手で固定しながら進みますの。

「抜刀ですの☆」

しばらく進むとマオ・インダストリー社の本社の地下へと到着しました。ですので、壁を切断して地下の下水道などから侵入ですの。マオ・インダストリー社も地下に工場やシエルターをしっかりと用意しているので意外に簡単に入れました。ここには空気がまだ存在しているので、開けた穴はキッチリと応急キットの鳥もち弾みたいなので穴埋めしておきますの。

「揚陸城も欲しいですが、まずはこっちですの」

「はー」

手っ取り早く生きているシエルターを探していますが、幾つかのシエルター確認してみても穴が空けられていたり、中の人々が皆殺しにされていたりしますの。

「ルリ。貴女はノーマルスーツを脱いだら駄目ですよ?」

「お姉ちゃんは……」

「私は毒物でも平気へっちゃらですの」

誰がやったのかはわかりませんが、空気中に毒物が散布されております。成分を解析しながら進んでいくと工場区画へと到着しました。そこにある端末をルリちゃんとおモイカネに任せながら、私は格納庫を探索してみます。やはり生存者は無く、工場も無残に破壊されておりますの。

「お姉ちゃん」

「何か有りましたか？」

「目ぼしいデータはありませんでしたけれど、ここの地図は手に入れました。それによると隠しプロックが存在しています。それと監視カメラの映像が……」

「くださいですの」

「わかりました」

ルリちゃんから貰ったデータを確認すると、最悪な事が行われていました。映像にはスーパーロボット大戦Fの主人公、リン・マオが拷問されて殺される姿がしっかりと映し出されてしまったの。

「くそっ、くそっ、クソつたれめっ！」

怒りのまま拳が壊れるのも気にせずに壁を殴りつける。骨まで外に出たとしても瞬時に再生するのでまた殴る。リン・マオ。私が、俺達が好きなキャラであり、何人かは初めてやったスーパーロボット大戦の主人公。思い入れがあり、出て来ただけで一喜一

憂したり、使いまくったりしていた。何よりスーパーロボット大戦初のクールなツンデレキャラである。そんな彼女を拷問して殺すなど許していいはずがない。絶対にユルサナイ。

そう考えていると、ルリちゃんが後ろから抱き着いてきた。

「駄目です。もうやめてください。それ以上は……」

振り返るとルリちゃんは涙目になっていました。

「……そうでしたの。今はこんな事をしている暇はありませんでしたね。ルリ、この映像の場所はわかりますか？ 彼等の死体を全て回収しますの」

「お姉ちゃんそれは……」

「大丈夫ですの。彼等の生きた証はわたくしがしつかりと引き継いで一切無駄にしませんの」

「わかりました」

ルリちゃんに調べてもらっている間にワンワン達を影から取り出してこの施設や月面都市で死んだ人達を取り込むように命令します。これはレジセイアが生み出した者達にも通達し、全てをこちらに転送してもらいますの。

賢い私の猟犬たちは命令を忠実にこなしてどんどん喰らって私にその知識と経験、想いを与えてくれますの。必要ないのですが、彼等の事はしつかりと心に刻み込んでいき

ますの。

転送されてくる死体を取り込みながら、ふと鏡を見るとそこはウエーブのかかった豊かな水色の髪の毛をポニーテールにして銀の髪飾りを四本刺した紫と紅の色に黒が混ざったまるで混沌とした瞳をしたアルフィミイが写っていました。宇宙のようにすら感じる瞳を覗き込んでいるとその中に無数の何かが見えた気がしました。

「お姉ちゃん？」

「あ、すいません。すこしぼくとしていたようです。それで見つかりましたか？」

「はい。見つけました。こっちです」

「案内よろしくお願いします」

ルリちゃんから珍しく手を繋いできたので、握り返しながら進んでいきますの。しばらくすると、拷問を受けて身体がボロボロにされて吊るされているリンさんや研究者の人達を見つけました。その人達を降ろして寝かせてから、両手を合わせて黙禱を捧げます。

その後、しっかりと取り込ませていただきます。溢れ出てくるリンさん達の地球を、人類を守りたいという強い思いやヒュツケバインに対する思いなど、様々な情報が入ってきます。

「リンさん、貴女達が作り上げた技術は人類の為に使わせてもらいますの」

そう思いながら掌にデータチップを生みだしますの。

「それはなんですか？」

「リン・マオの子宮に隠されていたデータチップですの。受信と読み取り専用みたいで、逐一電力とデータを送信していたのでしよう」

「凄い事をしますね……」

「まったくですの」

子供はいたのかわかりませんが、凄い執念と言えます。確かにこんな所に隠されていたら普通はわかりませんの。私も取り込んでいなければ見逃していたでしょう。彼女達、マオ・インダストリーが長年培ってきた重力制御技術とネルガル重工の残した重力制御技術。その二つを融合させた技術を既にリンさんは開発していたようでヒュツケバインMK-IIIの設計に使われているみたいです。

ただ、この世界での主流はあくまでもゲシユペンスト。ヒュツケバインは試作機だけ作られているようです。暴走事故があつたので地球連邦軍に拒否され、量産はされていません。それでもなんとかMK-IIIまで設計したのはとても凄いのです。性能的にはヒュツケバインの方が高いですしね。αではSRXを超えて活躍しましたし。

「それじゃあ、逃げますか？」

「いえ、その前に貰う物をもらって行きましょう」

「貰う物ですか？」

「マオ・インダストリーが開発した相転移エンジンですの」

本当に惜しい人を亡くしました。ネルガルの技術を引き継いでいたとはいえ、まさか相転移エンジンまで作り出しているとは思いませんでしたの。しかもこのリンさん。大型の相転移エンジンを小型化してやがったのです。

相転移エンジン以外にもお宝はございますの。メテオ3がないのにトロニウムが何処からか持ち込まれたという事実がこの世界にあります。ですからトロニウムエンジンも作られております。

ただ、トロニウムエンジンは出力が不安定でとても危険なため、普段使いとして相転移エンジンを開発したみたいなんです。そう、マオ・インダストリーは何を考えたのか、トロニウムエンジンが生み出したエネルギーを相転移で更に増幅して扱える状態に作り変えて小分けすればいいじゃないか！ というところでも理論で安定させる事に成功しやがりました。ただし、生み出される出力がちよつとシャレにならないレベルのよう
で、戦艦に搭載してその生み出したエネルギーを相転移させて機動兵器に使わせるとい
うナデシコ形式にする計画のようでした。相転移トロニウムエンジンとかマジで発想
がやばいのですの☆

試作型小型相転移エンジンと普通の相転移エンジンをデータと実機を貰い、武装とか

作業機械とか残っている物も含めて取れるものは全部貰ってきます。せっかくお母様が亜空間をくれたのでしまい込みますの。

第24話

マオ・インダストリーにある隠しブロック。そこから試作型相転移トロニウムエンジンとかいうとんでも品や作業機械を貰いました。ついでに特許とか土地の契約書とか、色々な重要書類や資金なども貰いましたの。どうせここにあっても消滅するだけですし、有効活用しますの。

「それでこれからどうするんですか？」

「決まっていますの。憎いあん畜生共に目にモノ見せてやるですの」

「えっと、それってつまり……」

「揚陸城へ……」

「アルドノアの技術は宝の山ですの。この場を逃がせませんのよ。後、敵討ちですの」

「……わかりました。援護はしますが、期待はしないでください」

「いえ、むしろルリはわたくしが何があっても守りますので、クラッキングと解析の方をお願いですの」

「そちらの方が無難ですな」

アルドノアの技術が欲しいのも敵討ちも理由ではありませんが、他にも理由があります。火星騎士が化け物みたいに強いのはあくまでもアルドノア・ドライブの力。つまり、機動兵器の力です。そうなると生身の人間は地球人とほぼ変わりません。精々、IFSなどを使うために補助脳を作成しているぐらいでしょう。

「ロボットで勝てないならば使わせないようにして勝てばいいですの」
「まあ、その通りですね」

転送されてくる死体を回収したので、ワンちゃん達を戻しますの。彼等に乗りながら地下を進み、揚陸城が突き刺さっている場所まで移動しますが、やはり上手くは行きません。

「お姉ちゃん……」

「静かに……」

手鏡を取り出して通路の先へと差し出して曲がり角の先を確認するとヴァース帝国の兵士達が警備をしております。手にはアサルトライフルを持っていて、機関銃まで備え付けられておりますので無策で突っ込めば蜂の巣ですね。相手もここから侵入してきたので、見張りがいて防衛戦力があるのは当然と言えば当然ですの。

「どうしますか?」

「普通に攻めてもいいのですが、ここは任せてくださいですの」

目を瞑って身体の構造を変化させます。女性の身体から男性の身体へ。服装もヴァース帝国の軍服になり、腰に刀を差せばどこからどう見ても抜刀おじさんですの。

「あ、あく……ふむ。問題ないな」

正直、身体は重くなって力が出ません。それにアインストとしての力も使えないので確実に肉体としては弱くなっておりますが、まあいいですの。一応、ワンちゃん達は数匹だけ戻して襲撃させる用意だけしておきます。

「ルリ、すまない」

「はい。大丈夫です」

ルリには気絶した振りをしてもらいますの。気を失った彼女を片手で持ちながら、堂々と通路へと躍り出ます。相手は即座に銃を構えてきますが、こちらがヴァース帝国の軍服を着ているので即座に射殺されることはありません。

「止まれ。どうしてここに居る！」

「私は火星騎士のヴラドだ。クルーテオ伯爵に確認してくれてもいい」

「確かにヴラド様だ」

「しかし、ヴラド様はアルギュレで出撃したはずですよ。どうして歩いてここに居るので
すか？」

「クルーテオ様には申し訳ないが、連邦軍に不覚を取り、アルギュレが破壊された。私は

「この者に案内させてここまで来たのだ」

「そうでしたか……念の為にIDとパスワード、生体認証をお願いします」

「わかった」

兵士の一人が近付いてきて、何かの機械をあててきますが、この身は完璧に模倣しているので問題ありません。IDとパスワードもブラド本人の知識と記憶からしっかりと入力できますの。

「ありがとうございます。本人と確認できました。お帰りなさいませヴラド様」

「うむ」

「そちらの地球人はどうしますか？」

「この者は私が連れていく。コイツのお蔭で助かったのだから、多少は面倒を見てやるつもりだ」

「かしこまりました」

ロリコン趣味だと思われたのでしょうか、問題ありません。わたくしはロリも好きですもの！

というわけで、揚陸城へと無事に潜入できましたので、そのままヴラドの部屋へとルリちゃんを連れて移動します。部屋に到着すればルリちゃんをベッドに寝かせてから、監視装置が無いかわかります。監視装置を排除してルリちゃんに合図を送ります。

「……」

「どうした？」

「このベッド……汗臭いです……」

「あはは、仕方ないですの」

「その姿でその口調は止めてください」

「おっと、これは失礼した」

話しながらもルリちゃんは部屋にある端末に触れました。私も同じように触れて端末にIDとパスワードを入力して情報を引き抜いていきますの。まあ、アルギユレの詳しいマニュアルがあったのですが、これは貰っておきます。続いてこの揚陸城の案内図もゲットしました。

「ここからでは制御はできませんね。管制室を押しさえるしかありません」

「だろうな。監視映像はどうだ？」

「そちらは数分前の映像とループさせられます。ただ、それも近くの場所でないといけません」

「なら、近場から行くでしょう」

「わかりました」

一応、ルリちゃんの護衛としてワンちゃん達を呼び出してから、手短に近くの部屋に

居る人を訪れていきます。ちゃんとチャイムを鳴らして堂々と面会します。

「すまない、ちよつといいか?」

「これはヴラドさん。どうぞで」

部屋の中に入り、即座に腕を変化させて貫き手で相手の心臓を貫いてそこから喰らっていきますの。

「なん……で……」

倒れた兵士を影の中から生み出した触手で引き摺り込んで証拠を隠滅します。一応、銃は貰っておきますの。近場の部屋を制圧しました。ルリちゃんを次の部屋に移して、そちらから監視カメラを掌握してもらって入れ替え、何事もなかったかのように偽装します。

次に歩兵用の武器庫へと移動します。こちらは中身を全て奪い取って亜空間に仕舞っておきます。こんな感じで管制室までの道を安全確保しました。

「さて、行くぞ」

「はっ」

管制室の前に到着したので、普通に入ります。オペレーターの人達はこちらに視線を向けてきましたが、即座に正面に向き直りました。というのも、現在進行形でここはアインストの襲撃を受けておりますの。巨大モニターにはクルーテオ伯爵の姿が映し出

されていて、彼はアインストとボロボロのヴァングレイ相手に無双しております。一応、アクセル達にルリちゃんが救難信号は送っていますが、どうなるかはわかりません。『ヴラド、戻ったか』

「申し訳ございません。遅れを取りました」

『良い。卿ほどの武人が遅れを取ったのなら相手を褒めねばならぬ』

「ありがたき幸せ。ですが、何の役にも立てぬのなら騎士ではいらませぬ。どうか、ここは私に指揮を任せて頂き、伯爵様はアインスト共の殲滅に集中なさるがよろしいかと……」

『確かにその方が効率的だな。わかった。そのようにさせてもらう。これより揚陸城の指揮を任せる』

「管理コードを頂けますか？」

『うむ。コードは……』

揚陸城の指揮権を貰ったので、敬礼をしながら通信を切れるのを待ちました。しっかりと通信が切れた事をオペレーターに確認したら、全員を立ててこちらに並ばせませぬ。自動迎撃システムもあるので短時間なら問題ありません。並ばせてた彼等の前で抜刀して首を刎ねてあげます。

「ぎゃああああああああつ！」

「な、なにをしてっ!」

「いやあああああつ!」

吹き出る血潮に阿鼻叫喚の地獄絵図になります。気にせず効率よく全滅させます。その為に姿をアルフイミイに戻し、触手と影から出したワンちゃん達で管制室をしつかりと制圧。捕食させながら入って来たルリちゃんをオペレーター席に座らせ、私は知識からクルーテオ伯爵が座る位置に座り、管理コードを入力して揚陸城のシステムを掌握しますの。

「掌握完了。管制室以外に地球人が囚われている場所は……」

「第四区画です」

「でしたら、通信を全て遮断してジャミングを施設内に展開。第四区画と管制室に繋がる隔壁を閉鎖。第四区画と管制室以外は生命維持装置を解除。その後で必要な場所以外の全隔壁を開放します。一気に皆殺しですの。ルリちゃんはこちらにアインストを迎撃しておいてください。適当で構いません」

「わかりました」

空気を抜いている間に揚陸城の発進シークエンスを開始しますの。これ以上月に居ればハイパーゲートの暴走に巻き込まれますしね。

ヴェーダも欲しいですが、そちらはレジセイアに任せます。一応、そちらを確認する

とハイパーゲートでは複数の火星騎士達がウルブス達と激しい戦いを繰り広げております。流石のウルブスも火星騎士達のチート機体には苦戦しているようで、互いに何機も落とされていますの。

そんな戦場に宇宙空間から高速で接近する四機のアンノウン……連中が来たようです。エクシア、デユナミス、ヴァーチエ、キュリオス。第三世代の太陽炉搭載型ガンダム。彼等はヴェエダが存在する場所へと降りていきました。そこはこことは違う月面都市ですが。そちらでも地球連邦軍とヴァース帝国が戦っている場所に第三勢力が乱入したので更に混沌とした戦場になりました。

彼等は戦うつもりはないのでしょうか、ヴァース帝国は容赦なく攻撃していきますので、彼等も応戦するしかありません。連邦軍の方はとりあえずガンダム達がヴァース帝国の所属ではないという事と都市を奪い返しに来た事を伝えたのか、共闘するようです。普通は共闘なんてしません、彼等が降り立った場所に居たウルブスはレフィーナ・エンフィールド率いるヒリユウ改の部隊だったのでこうなったようですの。

「やれやれですの」

本当は彼等も八つ当たりでなんとかしたいのですが、そうは言っても彼等も主人公とその仲間達。死なれては困る候補です。ですが、嫌がらせくらいは良いですよね？

「クルーテオ伯爵。よろしいでしょうか？」

振り返って周りを確認してから姿をヴラドおじさんに変化して、周りを写さないようにしながら通信しますの。

『どうした？ 発射シークエンスを行っているようだが……』

「二度上がってからまた降下して纏めて滅ぼすためです。それよりもこちらは対処しますので、あちらの都市に援軍へ行行って頂きたいのです。新たな増援が現れ、あちらの都市が落ちそうです」

『ふむ。しかし、アインスト共は……』

「それに殿下を死なせるわけにも行きません。あちらで戦っている兵力を手早く片付けて援護へ向かわなければなりません。いざという時はこの城と共に自らを爆破してもアインスト共は滅ぼします。どうか、ヴァース帝国の為に殿下をお守りください！」

『はっ』

もう死んでまゝ☆なんて言えませんの。通信が切れたのでアルフィミイの姿に戻りつつアインスト達に指示を出して適当に戦ってもらいますの。

「お母様。そちらは問題ありませんか？」

『問題ない。ちゃんと用意しておいてやった』

「ありがとうございますの。もしも予想通りになると地球の被害がシャレになりません

からね」

『うむ。そちらは任せる』

「お任せください。必ず地球は守りいたしますの」

お母様と連絡を終えるとルリちゃんがこちらを見ていました。

「どうしましたか？」

「揚陸城にある生命反応が第四区画とここを除いて消滅しました……」

「ありがとうございますの。辛い役目を任せてしまいましたね」

「いえ、いいんですが……やりすぎじゃないですか？」

「これぐらいは必要ですの。それに彼等は月面都市の人間を大量に殺していますの。ですの、これぐらいはやり返される事を覚悟していて当然ですの。ルリ、貴女も心しておきますの。殺つて良いのは殺られる覚悟がある人だけですのよ」

「はい……」

「まあ、他の人が言った言葉なんですけどね！」

「お姉ちゃん……台無しです」

生命反応が消えたみたいなので、調べてから捕食しましょう。一応、生命維持装置を再開させ、酸素の供給も始めますの。

「ルリ、少し席を外しますが通信は無視していいですからね」

「わかりました。行つてらっしゃい」

「行つてきますの」

さて、管制室から出たら格納庫を目指しながら私の猟犬たちを解き放つてヴァース帝国の軍服を着ている奴は容赦なく喰らつていきますの。それ以外は保留しておきます。

もしも月面都市の人なら死んですぐでしたら蘇生が可能ですよ。アインストとしてですが……待つですよ。アインスト化できるのですから、比率をアインストに上げてヴァース帝国の者にしてあげばヴァース帝国こそがアインストと繋がっている様になりますか？ 実際に繋がっていなくても、その疑惑を与えるだけでもとても有効ですよ。そもそもヴァース帝国の技術は不明なのでどういう扱いになるかもわかりませんが、不和の種を仕込んでおくぐらいやっておいて損はありませんの。

「あ、この人は生きていますね。さようなら」

微かに息をしていた人にトドメを誘うとして、ふと思いついたので首の横に突き刺すだけにしました。生きているのなら捕虜として連邦軍に引き渡せばいいじゃないですか。技術者でない軍人なんてわざわざ取り込む必要ありません。いえ、取り込んだ分だけ強くなれるのでその方がいいかもしれません……流石に一人も捕虜を取らずにこれ以上殺すのは問題になりそうですの。

適当に捕虜を取つてヴェインデル少佐にあげましょう。手柄になりますしね。この揚

陸城もシャドウミラーの本拠地とすればとつても便利ですしね。

探索すると十一人が生き残っていました。それ以外は生きていても技術者だったので死んでもらいました。彼等を吸収して更なる進化へと突き進んでいきます。そもそも火星の連中は隕石爆撃とかやってくるので容赦はしなくて構いません。

「よし、とりあえず制圧は完了ですの」

ワンちゃん達も戻ってきたので仕舞いこんでから第四区画へと移動します。そこらは牢屋や拷問施設もありました。連邦軍の軍人さんや民間人の人が囚われており、キツイ取り調べを受けていたようです。

それと当然のように第四区画にも見張りの兵士などが居ますの。彼等はいきなり区画が閉鎖されて通信も繋がらなくなつたのでとても混乱しております。そんな中で隔壁が開いて可愛らしい少女が入ってきたらとても驚くのは当然でしょう。

「助かつたのか？」

「君は……」

反応される前に一足飛びで接近して銃を持つ腕を斬り落とし、奥に居る奴等の盾にしますの。

「敵だ！ 撃て！」

「くそっなんでこんな所にいやがる！」

「防衛装置を動かせ！」

銃弾の雨を死体で防ぎながら言われた通りに防衛装置を遠隔で動かして彼等を射殺します。ここにある防衛装置は基本的に逃亡を防止するための物ですが、牢屋の中にだけ設置されておりませんの。

「なんで俺達に……」

「ま、まさか……管制室が……」

「ありえない！ 地球人にアルドノア・ドライブが動かせるはずがない！」

「いいからどうにかしろ！ さもないと皆殺しだぞ！」

「そ、そうだ人質を……」

防衛装置に攻撃を仕掛けたり、回避したりするためにそちらへと向いた瞬間に接近して下から上へ一度鞘におさめた刀を再度抜刀して首を飛ばします。そのまま背中を蹴って別の奴にぶつけて体勢を崩させ、もう一人に刀を向けますが、既に銃をこちらに向けていたので念動力で放たれた銃弾の速度を遅くしつつバックステップで下がります。同時に防衛装置で銃弾を放つてある程度始末しました。

「動くな！ 動けばコイツを殺すぞ！」

「別に人質など意味は……」

無いと言おうとして身体が硬直して止まりました。何故なら、その人は左目の上から

類にかけて大きな傷跡を持つ歴戦の勇士。原作キャラなのです。彼は機動戦士ガンダム〇〇に登場する人物で人類革新連盟に所属し、ガンダム討伐の功績を持って地球連邦軍の大佐となった人。セルゲイ・スマイルノフなのだ。

「どうやら人質の意味があるようだな？」

確かに地球連邦軍として既に統一されているのですから、彼がここに居てもおかしくはありません。おそらく部下を逃がすために殿となつて捕らえられたのでしょう。

「構わん。私ごと殺れ」

「貴様っ！ 立場がわかつているのか！」

「わかつているからこそだ！」

「ちっ。お前達、投降すれば命は助けて差し上げますの。いえ、なんでしたらここから脱出もさせてあげますの。ですから、大人しく降伏なさい。すでに揚陸城は私達の手勢が制圧しております」

「愚かな……我等にはクルーテオ伯爵が要る！」

「彼ならここには居ませんよ。別の都市に移動しましたから」

「どうするっ？」

「いや、信じられん！」

「とにかく……」

仕方ないので撤退しますの。即座に亜空間からフラッシュグレネードを取り出して使います。私を中心にして光が埋め尽くし、彼等の意識がそれた間にすぐ通路を移動して姿をブラドに変えます。それからその辺の死体に私のテクスチャを張り付けるようにナノマシンの使つて見た目だけ変えますの。それから剣戟の音と悲鳴を上げて偽装。

それらが終わつてからブラドの声で無事かどうかを聞きながらアルフィミイの死体を掴んでそちらへと向かうと、相手はホツとしたような表情をしました。セルゲイさんは苦虫を噛み潰したような表情ですが、そのまま近付いて彼等と話してからセルゲイさんを殴りますの。

「牢屋に入れておけ」

セルゲイさんが気絶したので次の指示を出しますの。

「はっ」

「生きているのはこれだけか？」

「はい……ここに居るのが全員です」

「そうか」

銃で近くの奴の頭を撃ち、刀で心臓を突き刺す。同時に防衛装置を動かして再度掃射する。

「な、なぜですか……ブラドさん……」

「やくい騙されやがったのですの」

姿を戻してやると、彼等は絶望した表情で死んでいきました。とりあえず、確実に殺すために心臓と喉を突き刺して死んだ事を確認します。これらが終わってからセルゲイさんを見ると目が覚めていました。

「……起きていましたの？」

「気絶したふりだ。いくらなんでも怪しすぎたぞ」

「ちつ。私は、EFA Special Task Force team地球連邦軍特別任務実行部隊の一員ですの。今の技術は見られてはいけない物ですの。おわかりですわね？」

「私は何も見なかった」

「ええ、その通りですの」

刀を振るって鉄格子を切断し、彼を助け出しますの。他の人も助けるために刀を振るって切断し、捕まっている人達を救助します。

「皆様、救助しにきました。この城は既に制圧してあります。ですが、外では現在も戦闘が続いているのでコレを使って月面から離脱致します。ですので、今は何も言わずにこちらへついてきてください。貴方もよろしく願いますね」

「わかった」

皆、身体がポロポロですが、とりあえず管制室に連れていきますの。彼等を纏めるの

セルゲイさんに頼めばよいので、そちらはお任せですわね。

管制室に到着するまでにそこら中にある血痕に気持ち悪そうにしながらも一般人の人は軍人の人達が奪った銃器で警戒しながらついてきてくれます。

「お帰りなさい、お姉ちゃん」

「ただいまですの。現状はどうなっていますか？」

「発進シークエンスは完了しました。外のアインストも撤退を開始したみたいです。飛ぶなら今ですね」

「では出発進行ですの」

「はい」

「これから月面を離脱します。各自、何かに捕まるようお願いしますの」

「待て。君達だけなのか？」

「そうですの。別の者達は現在、外で戦っておりますの。我々の目的は民間人の救助です。故に彼等は置いていきますの」

「それなんです、暗号通信を送っておいたのでこちらにきています」

「ナイスですの！ 収容は？」

「収容はしていませんが、揚陸城の上に乗ってもらって防衛してもらっています」

「じゃ、何も問題ないですわね」

振動が強くなり、揚陸城が浮上していきますの。周りを確認していると、ヴァングレイちゃんはやはり居ません。やられてしまったのかもしれない。せっかくナインちゃんの原形を仕込んでおいたのですが……ここでお別れですわね。ありがとうございました。おやすみなさい。



ルリちゃんと二人で席に座りながら揚陸城を操作していると、流石にセルゲイさんが訝しんできますが無視しますの。そんな事よりもアクセル達への通信が必要ですし、こちらが逃亡しようとしているのはクルーテオ伯爵達もわかるでしょう。

「アクセル達の現在位置は？」

「まだ遠くです」

「地球連邦軍はどうですか？」

「そちらの方が近いですね」

「それは不味くないか？　これは敵の船だ。攻撃されるぞ」

「ですわね。全員に聞きますが、この中で連邦軍のお偉いさんに連絡を取れる人は……」
「私だけだろうな」

「でしたら、通信をお願いしますの」

「了解した」

近くの連邦軍の艦隊に通信を送ります。ちゃんとシャドウミラーの識別コードとセルゲイさんの識別コードなどを載せてです。すぐに地球連邦軍の艦隊から通信が帰ってきました。

「モニターに出します」

目の前に大きなモニターに地球連邦軍の軍服を着たお偉いさんが映し出されました。というか、この人ってカティ・マネキン大佐じゃないですか。艦隊司令やってるんですか。というか、この識別コードはウルブスの一つですね。ああ、納得できますの。つまり、こちらの世界のウルブスはレジーナ・エンフィールド、カティ・マネキン、キョウスケ・ナンブによって率いられておりますのね。

『セルゲイ中佐。無事だったようだな』

「はい。この者達に助けられました」

「初めましてですの。私の所属は送ったコードで確認してくださいな」

『お前達の動向はこちらも掴んでいた。敵前逃亡かと思つたが、まさか敵の城を奪うと

は思わなかった』

「私達はウルブスの方々がハイパーゲートに突撃していく姿が見えたので、人命救助を優先させていただきました。今回の計画ではこちらの作戦もありましたでしょう？」

『うむ。問題はない。しかし、戻った部隊についてはどうだ？』

「彼等は一度、補給に戻っただけです。火星騎士との戦いで弾薬とエネルギーをかなり消耗しましたしね。私達はまだ新設されたばかりの部隊ですし、ウルブスのように補給も戦力も充実しておりませんの」

鹵獲した機体については何も言いません。この揚陸城に関してはどうしようもありませんが。

「今もこちらに向かってきてきているはずですよ」

『確かに確認している。して、これからどうしたい？』

「我々の部隊が来るまで保護をお願いしますの。ここには民間人も居ますし、守るのは軍人の役目でしょう？」

『了解した。詳しい事は……』

「それは私ではなく、指揮官であるヴェインデル・マウザー少佐にお願いしますの。この揚陸城は我々が手に入れたものなので、所有権は我々にありますの。ですが、守って頂いたのであればそちらへの便宜ははかってくれと思いますの」

『それもそうだな。セルゲイ少佐。そこに居る残りの軍人を率いて民間人を守れ。戦艦を三隻つけるが、貴様はそこで療養している』

「はっ！」

通信が切れたので、これで全て解決ですの。火星騎士達もこちらが敵の手に落ちたとわかったのか、必死で奪い返そうとしてきておりますの。

「さて、ルリ。ここはお任せしますの」

「お姉ちゃんはどうするの？」

「戦いたりませんので、ゲシユペンストMk-IIを貰って火星騎士達に喧嘩を売ってきますの」

「止めてください。死んじやいます。ヴァングレイもないんですよ」

「……わかりましたの。仕方ないので城の解析をしておきましょう。特に治療施設に興味がありますしね。いえ、それよりも観測装置の方が必要ですね」

「それでお願います」

ルリちゃんを膝の上に乗せながら揚陸城を丸裸にしていきますの。二人で色々調べていると、月面からクルーテオ伯爵が乗るタルシスも含めて複数の機体がこちらに突っ込んできますが、カティ・マネキン大佐が処理してくれます。それに加えてシャドウミラーの精鋭も合流し、被害を出しながらも防衛は順調です。

しばらくしてベーオウルブスがハイパーゲートへ突入したので計画を発動しますの。偽造もしてあるので問題なし。準備は完了。

「全空域に居る地球連邦軍に告げます。敵にハイパーゲートを暴走させる計画があるのを発見しました！ 実際に重力異常を感知しております！ こちら、被害予想のシミュレーションです」

カティ・マネキン大佐を含めて全体に向けてデータを送信。カティ・マネキン大佐は即座に撤退を決めて月面から後退していきます。

そしてハイパーゲートが暴走……なんてことはなりません。ですが、実際に重力波がまき散らかされ、大規模な転移反応が起きます。視界が完全に衝撃でブラックアウトし、次の瞬間にはかなりの衝撃が来て艦隊などが流されていきます。そして月は消えて、また戻りますの。

「は、ハイパーゲートが消失しました……」

「月はどうですの？」

「け、健在です……でも、形が少し変化しているみたいですよ……」

「なるほど……」

ヴィンデル少佐やアクセル達に連絡を取ってこの揚陸城を一時的な拠点とし、地球連

邦軍を收容して被害の確認などをしてはどうかと進言してみますの。

『許可する。こちらから大佐に連絡する。先にアクセル達を招き入れておけ』

「了解ですの」

リンさんは助けられませんでしたが、それ以外はおおむね計画通りですの。ハイパーゲートで月が欠ける前に亜空間に転送し、月の形に加工した衛星をそっくりそのままの場所に戻します。これで欠ける事によつて地球の自転が変化して動植物が死滅することも防げました。

ソレスタルビーイングがヴェエダを持ちだしていなければそれもゲットですの。そう、ハイパーゲートごとお月様、ゲットですの。それに月面に墜落したり、破壊されたりしたジャンクもあるのでウハウハです。後は月の全てを兵器工場に作り変えれば戦力は増やせますの。

第25話

ヴァース帝国　クルーテオ

陛下のボソンジャンプにより、我々は地球から揚陸城に乗って火星へと一気に戻った。揚陸城にはチューリップクリスタルが備え付けられており、陛下のお力によつてカタフラクトとそのパイロットが揃つておればボソンジャンプが可能である。ただし、カタフラクトとパイロットが揃つていないため、私の城は取り返す事ができなかった。私
が乗り込めていれば転移できたのだが、一生の不覚である。

火星に戻つた私達は他の騎士達と同じく陛下の前で跪いて報告する。ハイパーゲート奪還の失敗。更にはギルゼリア様を守れなかつた事。私に關して言えば揚陸城を失うという更なる失態がある。

「この度は誠に申し訳ございません。陛下から頂いたタルシスを損傷させるばかりか、揚陸城まで奪われるとは……このクルーテオ。腹を切つて陛下にお詫び申し上げます」

「良い。地球連邦軍がこちらの想定よりも遥かに強かった。全ては儂の奢りが招いた結果である」

「いえ、陛下の落ち度があるはずがございません。全ては我等火星騎士の実力不足。故に……」

「ならぬ。勅命を持って命じる。自害は禁止だ。無駄な命を散らすならば精進して鍛えよ。我が子、ギルゼリアの仇を討つ牙を磨け」

「御意」

陛下のご命令通り、タルシスをより使いこなすよう訓練せねば。揚陸城を取り戻しに向かった時に現れた地球人共の兵器はタルシスよりも性能は下であった。それなのに私が揚陸城を取り戻せなかったのは数はもちろんの事、パイロットとしての技量が地球人に劣っていたからだ。

「陛下。恐れながら申し上げます」

友であるザーツバルムが陛下の前に歩み出る。

「申してみよ」

「はっ。地球と一時休戦を行い、月に残された者達を救助すべきです」

「ザーツバルム卿！」

「貴様っ！」

「火星と地球では距離ができました。我等が敗北した理由はカタフラクトの数が足りず、数で押されたこともあります。地球人と停戦し、その間に戦力を増やすべきかと。それに奪われた揚陸城の返却を求めるのも良いでしょう。一度、クルーテオ伯爵から権限を剥奪すればアルドノアは停止するはずです」

「……確かにその通りだ。停戦などしたくはないが、こちらの戦力を整える時間は稼がねばならぬ。連邦軍のウルブスを甘く見ていた。我等はアインストとも事を構えねばならぬだから、地球人に構ってはおれぬ」

「では、揚陸城の返還と捕虜交換を打診するのはどうでしょうか……」

「捕虜交換はならぬ」

「何故ですか!」

「揚陸城がほぼ無傷で奪われたという事は火星騎士の中に裏切り者が居たという事だ」

「「っ!」」

裏切り者……もしや、ヴラド卿か。私は彼に全権を預けた。で、あるならばあの場から揚陸城を操作できたのは彼しかいない。いや、彼に限って裏切るなどあるはずがない。なら地球人が何らかの方法で揚陸城を操作したと考えるのが自然である。

『いえ、火星騎士の中に裏切り者はおりません』

「どうしてそう言える?」

『タルシスに残されていた映像の解析が終わりました。こちらをご覧ください』

空中にモニターが投影され、そこに私と話していたブラド卿の姿が二つ映し出される。片方は出撃してからの会話であり、互いにタルシスとアルギュレに搭乗している。もう一つは城からの通信だ。アルギュレを失って戻ってきた時のものだ。会話になってもおかしいところはない。

「これがなんだというのだ？」

「やはりヴラドが裏切り者なのでは……」

『わかりませんか？』

「まさか、地球人がヴラド卿に成り代わっていたというのか！」

『その通りですクルーテオ伯爵。生体認証を解析したところ、全て本人であると一致しました。ですが、こちらの映像を確認してください。鹵獲された揚陸城から引き抜いた情報を解析し、書き換えられていた映像を修復したものです』

「「おおお」」

火星に居ながら地球にある揚陸城から情報を引き出すとは、流石奥方様です。

映し出された映像には揚陸城の中でヴラドが兵達を斬り殺していく姿。そして、小さな少女と共にそのまま進んでいき、管制室に到着して私と話していく。私が権限を与えると同時にオペレーターの者達を並べたヴラドはその者らを惨殺した。それも緑の

植物みたいな物を使ってだ。姿もヴラドのような屈強な男から可憐な少女の姿へと変化していく。その後も彼女達が行った行動ログが表示される。それはおぞましきものだった。

「おのれ地球人めっ！」

「許さぬ！」

「このような虐殺を行うとは……」

「生命維持装置を解除して強制的に窒息させるか。少数の兵で拠点を制圧するには確かに有効な手段ではあるな」

「いや、それよりもこの者は……」

『アインストです。少なくとも身体は人間のようですが、身体の一部は確実にアインストとなっております』

「では、地球連邦はアインストと繋がったということだな」

『アインストは調査する時に対象を模倣し、学習します。その事を考えるとこの者はアインストの端末である可能性が高いと判断します。またあの転移事故はアインストによるものだと判明しました』

我々はアインストの手によって踊らされたという事か。もしか、地球連邦は既にアインストに支配されている可能性もある。

『今はまだアインストは地球にしか興味がないようです。ですので今の間に戦力を蓄える必要があります』

「アインストを警戒しつつ、地球連邦とは停戦を行う。その間にアルドノアドライブを量産し、開発を行う。捕虜交換はアインストが擬態して送られてくる可能性を考えて行わないこととする」

「しかし！」

「ザーツバルム卿。抑えよ。陛下のご命令だ。卿の気持ちはわかるが、これ以上は不味い。それに彼女はアインストが起こしたであろうハイパーゲートの暴走に巻き込まれたのだ。もはや生きてはいまい」

「く……」

ザーツバルム卿には申し訳ないが、婚約者のオルレイン卿が生きている可能性はほぼない。先にも言った通り、ハイパーゲートを地球人が操れるとは思えない。ましてや既にアインストの浸食を受けていたのだ。その事から考えるにおそらく転移した先はアインストの空間であろう。

「だが、戻って来た月は何も無かったのだ。だったらまだ可能性は……」

「戻せるのなら陛下のお力で戻されている！　だが、それができぬのだ。ハイパーゲートと共に座標を完全に見失えばもはや……」

「宇宙空間に漂い、窒息するだけだといふのか！」

「そうだ。母艦もないディオスクリアだけではもはや助からぬ。この恨みはアインストと地球人共に向ければよい。彼女の弔い合戦だ」

「……わかつた。陛下も申し訳ございません」

「よい。其方の気持ちは良くわかる。私も息子の事を思えば腸が煮えくり返るような思いである。改めて命じる。これよりヴァース帝国は戦力を増強する！ 皆のより一層の働きを期待する！」

「「はっ—」」

御前での会議が終わり、謁見の間から我々はそれぞれ行動する。私は友であるザーツバルム卿と共に訓練に励むとしよう。

月面 オルレイン

月面で地球連邦軍と戦い、一度敵を退けた時でした。

『大規模な空間歪曲反応が起きている！ 離脱するぞオルレイン！ 月面は危険だ！』

ザーツバルムの言葉にデューカリオンを操作しますが、モニターに表示されるのはエラーのメッセージ。すぐにシステムを確認して原因を探します。

『どうしたオルレイン！』

「時空の歪みが反重力デバイスに影響を与えていて飛ばません！」

『今助ける！』

「なりません！ もはや手遅れ！ 私に構わずお早く！」

『オルレインイン！』

叫びながら時空転移の衝撃で飛ばされる彼を見送りました。

目を覚ますと、そこは真つ暗な世界でした。痛む頭を片手で押さえながら制御装置を操作し、アルドノア・ドライブを再起動します。モニターに光が灯り、周りの光景が映し出されます。中は問題ありませんでしたが、どうやら機体は倒れているようで、真つ暗な空間が見えました。

反重力デバイスを操作し、機体を浮き上がらせて回りを確認しますが、遠くに所々光

が見えます。モニターを操作してみると、それは墜落した地球連邦の船だったり、スカイキャリアだったりしたのが燃えているみたいです。更に遠くの方から幾度となく爆音が響き、大きな衝撃が走ってきます。

「一体何が……っ!? ザーツバルム! ザーツバルムは無事なの!?!」

計器類を使つて周りを急いで確認してみますが、ザーツバルムが乗っているディオスクリアの反応はありません。近くに居ないという事は無事に脱出できたみたいです。

「良かった。彼が無事ならまだ救われます」

後は私も助ければ最高です。ですが、そうは行かないでしょう。転移反応はおそらくハイパーゲートの暴走だと思えます。アインストから攻撃を受けていたので間違いないでしょう。つまり、ここは何処かわかりません。とりあえず、上に行つて確かめてみましょう。

浮上していきますが、何処まで行つても真つ暗なだけで、先程まで居た地面も見えなくなりました。それでも進み続ける事はできませんでした。方角を見失えばもはや戻る事はかないません。デューカリオンに残された酸素と食料の備蓄を考えると人が居るであろう場所に到達できる保証はありません。そもそも星々の光が一切届いていないという事は地球も火星もコロニーもここにはないのかもしれないかもしれません。

「静寂の世界でございますか……怖いですね」

一度、地面がある場所に戻りましょう。幸い地面の位置はわかりませんが、燃え続けている光は確認できます。それもほとんど消えていつています。備蓄されていた酸素が尽きたのでしょうか。

「急がねばなりませんね」

地面がある場所に戻り、通信の周波数を色々と試しながら周りを探索していきます。同時に地形データを収集していく事でここが月面である事がわかりました。どうやら、月ごと転移したようでございます。

このような大規模な転移などアルドノア・ドライブでも可能かどうかわかりませぬ。ですが、アインストならば可能かもしれません。

『……………の……………て……………奴……………ポイント、 β ……………』

どうやら私以外にも生き残りがいるようで、通信に反応がありました。こちらも周波数を合わせて応答します。

『生き残っている奴は地球や火星、関係なくポイント β に來い。こちらはシエルターを確保した。食料と酸素がある。目印として定期的に上に光を出す。繰り返し……………』

上を確認していると確かにビームの光が放たれました。その発射位置に向かって移動を開始します。できれば火星の皆が無事であればいいのですが……………今の所、生体反応はありません。いえ、今反応がありました。

破壊されている地球連邦軍の軍艦と我々火星の輸送船のようです。その周りにはスカイヤリアとゲシユペンストMk—IIもあります。どちらからも救難信号が発進されています。

「こちらデューカリオン。無事でございますか？」

『子爵！ ご無事でしたか！』

「はい。そちらは……」

『輸送船は駄目です。あちらの連邦軍も同じです。食料は無事ですが、酸素が……』

「わかりました。酸素がある所へ移動しましょう。地球連邦軍の方々も牽引しますので持ちだせる物は持ちだしてください」

『感謝する』

流石にこの状況で争っている場合ではありません。それに彼等が持つ食料と酸素は私達にとつてもありがたいですから。

双方の脱出艇を牽引してポイントβへと到着すると、そこは月面に埋め立てられた建物でした。私達が近付くと地面が開くようにして入口が現れました。そこに入つていくと、地球連邦軍の戦艦が一隻だけ止まっています。それ以外は多数のゲシユペンストMk—IIやスカイヤリアです。火星のカタフラクトの姿はありません。

誘導に従ってデューカリオンを止めて外に出ます。ここはすでに空気があるようなので問題ありません。どうせデューカリオンを動かす事が出来るのは私だけなので、奪われてもどうにかなるでしょう。それに火星騎士と連邦軍の人が一緒にいるので大丈夫だと思います。

「こんな時だからこそ歓迎する。ようこそムーンクレイドルへ」

「ありがとうございます。貴方は？」

「鞠戸孝一郎。地球連邦軍の大尉をしている。そちらは？」

「オルレインと申します。火星の子爵でございます」

「お偉いさんのようで助かる。悪いが火星側を纏めてくれるか？ こっちは連邦軍の方を纏めている」

「かしこまりました」

火星の者達が居る場所へ移動し、それぞれ話を聞いてきますが私と特に変わらない現状です。一応、ここには酸素と食料が三ヶ月分、備蓄されているようです。ただ、開発中の施設だったようで何れどちらもなくならないらしいです。

不安はあれど、皆を纏めてとりあえず休みます。先程まで激しい戦闘をしていたのですから、仕方がありません。しばらくすると鞠戸大尉から呼ばれ、現状についての話し合いを行います。互いに情報を提供しました。

「ハイパーゲートの暴走がアインストの仕業って事は納得した。あんた等も巻き込まれているしな。それにここが月しかないって情報は助かった。こつちからの情報はハイパーゲート付近にはアインスト共がうようよいやがるって事だけだ」

「なるほど。ハイパーゲートはアインストに支配されましたか」

「ああ、そうだ。ハイパーゲートならこつちから出られる可能性がある。なにより、あそこには酸素と食料の生産施設がある」

「それは大きいですね」

「まあ、アインスト共を突破しないといけないがな」

「だからでございませうか。火星も地球も関係なく集めているのは……」

「それもある。だが、一番はこんな事になれば協力しないと生きていけないだろう」

「……そうでございませうね」

火星の大地では一部の者を除いて皆が協力しながらでないと生きていきません。ですので、彼の言いたい事は理解できます。

「それに民間人も居る。彼等はなんとしてでも助けてやりたい」

「私共には関係のない事でございませうね」

「そうだな。だが、そちらも現状では打つ手が無い。違うか？」

「そちらの戦力次第です」

「こっちはゲシユペンストMk-IIが23機だ。そちらは？」

「デューカリオンとスカイキャリアが四機のみです」

「アンタの機体は強いのか？」

「はい。ですが、アインストの力に勝てるかどうかは保証できかねます」

「だろうな」

「とりあえず、数日考えさせてもらいます。もつと戦力を集められるかもしれませんし」

「わかった。部屋は大部屋になるが、男性と女性で別けてある。そこは安心してくれ」

「はい」

案内された女性部屋に行くと、沢山の人が居ました。ほぼ全員が地球人であり、入ってきた私を睨み付けてきます。私は彼女達を無視して壁の方にあるベッドへ移動し、少し仮眠を取ります。拳銃を握りながら寝れば遅れはとりません。そもそもデューカリオンの力をあてにしているので襲われることはないでしょう。本当はデューカリオンの中で寝たいのですが、酸素の関係でそれも無理です。補充には専用の機械が必要ですので、地球とは規格が違うためにできない可能性がありますからね。



数日。私はハイパーゲートへ向けて何度か単身でアタックしてみましたが、こちらの兵力ではすぐに跳ね返される事がわかりました。

「お姉さん。ご飯ですよ」

「ありがとうございます」

食事を持つてきてくれた彼女は栗色の長髪をした可愛らしい幼い少女。何処かの学校であろう制服を着ています。最初は邪険にしていたのですが、諦めずに話しかけてきました。それも他の人に止められたり疎まれたりしながら、私に構う姿に辛くあたることができなくなりました。

「あの、オルレインさん。私達は戻れるんでしょうか……?」

「わかりません。現状では難しいとしか言えないでしょうね」

「そうですか。お母さんやお父さん……それにお兄ちゃんも心配しているだろうな……こんな事なら月にこなければ良かったかも……」

「月面に住んでいないのですか?」

「私、社会科見学に来たんです」

「なるほど」

「これがお兄ちゃんです」

二つ折りになったピンク色の携帯電話を開いて見せてくれた画像は黒色の髪の毛を

した少年と腕を組んで写っている姿でした。

「お姉さんは大切な人はいますか？」

「ええ居ます。彼は私の婚約者です。もうまもなく結婚する予定です」

「それなら絶対に帰らないといけないですね！」

「はい。その為にも頑張ります」

私もザーツバルムの写真が入ったペンダントを見せながら、互いに話していきます。彼女はだんだんと悲しくなってきたのか、涙が流していきます。ですが、それでもなんでもないかのように元気に振る舞って私を元気づけてくれました。

ああ、子供を持つというのは良い物なのです。私も彼との子供が欲しいです。この願いは叶わないかもしれませんが、それでも……

「お姉さん？」

「マユ。貴女は兄にもう一度逢いたいですか？」

「うん。逢いたい。大好きなお兄ちゃんとまた一緒に買い物したり、遊んだりしたい

……」

「私もです。んっ」

私は決意を込めて頬を両手で叩きます。

「ど、どうしたの？」

「なんでもありません。それよりマユ。ちよつとしばらくの間、膝を貸してくれませんか?」

「うん、いいけど……」

「ありがとうございます」

彼女の膝枕で眠らせてもらいます。彼女が悲鳴を上げるまで。でも、私が起きるまで結局悲鳴も何もあげませんでした。私が起きた後はまともに立てなくなっていたので、ツンツンして悲鳴を上げさせました。

「ひ、ひどいよ〜」

「ふふ、私は満足しました。それじゃあ、さようならです」

「さようなら? 行つてきますじやないの?」

「そうですね。行つてきます」

「行つてらっしゃい」

手を振つて見送つてくれた彼女と別れ、洗濯させておいた軍服の上着を羽織つてデューカリオンへと向かいます。既に準備は完了しています。後は私が動くだけ。

「覚悟は決まったか?」

「鞠戸大尉。決まりました。作戦を執行します。我々の全戦力を持つてハイパーゲートへ向かいます」

「了解した。俺達が必ず送り届ける。だから頼むぞ」

「はい」

互いに帰れない事はわかっていても、やらなければなりません。ここで座して死を待つなどできるはずはないのですから。

◇◇◇

生き残っているスカイキャリアにデューカリオンを乗せ、それに反転させたスカイキャリアを溶接した無茶苦茶な物で出撃する準備を整えます。すでに鞠戸大尉達が出てアインストへ攻勢を仕掛けました。

『子爵、準備はよろしいですか？』

「デューカリオンの準備はできてございます」

『生き残ったら、どうか息子達をよろしく頼みます』

『私は祖父母をお願いします』

「わかりました。必ず火星の民に救いをもたらします。ですから、貴方達の命を私にください」

『この命、姫様のために捧げましょう』

「私は姫様ではないですよ。不敬です」

『いえいえ、我等にとつては姫様です』

『違うない』

「まったく……聞かなかったことにします。行きますよ」

『はっ』

スカイキャリアが発進し、全力で加速します。すぐに鞆戸大尉達が戦っている場所を超え、ハイパーゲートへと突き進みます。そんな中、アインストから砲撃が行われ、機体が崩壊する限界まで加速したスカイキャリアはタイミングを見計らって砲撃の間にデューカリオンを運びます。

『それでは良い旅を』

『因果の交叉路でまた会いましょう』

「はい」

デューカリオンを発進させて少しした直後。スカイキャリア二機が爆発して更に私を加速させます。同時にゲシユペンストMk-II達も無茶な突撃をしながらこちらへと援護射撃をしてくれます。

「デューカリオン！」

反重力デバイスを操作し、移動しながらアインスト達を浮遊させて弾き飛ばしていき

ます。これで後続への道もできるので一石二鳥です。そのまま進むと巨大なアインストが現れました。ソイツはハイパーゲートの前に陣取っております。人型の上半身と巨大な爪状の下半身を持ち、体の各所に骨や植物の蔦や血管が絡まったような物が鎧を着ています。

ソイツに近付くにつれて恐怖が湧き上がり、首に掛けたペンダントを掴みながらザーツバルムやマユの事を思いだして心を奮い立たせます。

次の瞬間。頭部から光線が放たれました。それを反重力デバイスを操作して作ったバリアで下に下がりながら受けることで軌道を逸らします。更に腹部からも光線が放たれますが、こちらは機体を回転させることでバリア自体を回転させて流してあげます。

すると光線が効かないと判断したのか、蔦が伸びてきます。それを回避しながら、相手を弾き飛ばします。ですが、巨体である相手にそんな物はできませんでした。また無数の蔦が地面を貫いて根を張っているのでどうしようもありません。ですが、問題はありません。

『全機、投擲後攻撃開始！』

鞆戸大尉の声と同時にゲシユペンストMk-IIの破損した機体が投擲され、そこに攻撃がされると大爆発を起こします。これによつてアインストの身体に穴ができます。

ですが、すぐに再生を始めるのでそこに私が入り、反重力デバイスを操作して押し広げます。

『全機、突撃！ 体内からぶつ壊せ！ 既にベーオウルフが実際に試して成功してやがる！ いざとなったら自爆しろ！ この一戦に命を燃やせ！ 俺達の後ろには守るべき民間人が居るんだ！ ひよつてんじやねえぞ！』

『『おう！』』

反重力デバイスを操作して彼等が突撃してくると同時に解除。私は離れて彼等を排除しようとする蔦や光線の相手をします。ですが、全てを防げるわけではありません。

アインストの右腕から巨大な光の球が発生し、それを私に放つてきました。光は重力フィールドごとデューカリオンを拘束し、そのまま握り潰してきます。機体が軋み、足や端っこの部分から崩壊していきます。

「こんなところで死んでやるつもりはありません！ デューカリオン！ 貴方の力を私にください！ アルドノアアアアアッ！」

リミッターを解除し、壊す勢いで重力を崩壊させるほど重ねていきます。それでもアインストの押し潰す力はどんどん増えてきます。

「まだです。まだでございます！ 私はザーツバルムにもう一度っ！」

『だったらここで死ぬな』

「なっ!？」

デューカリオンがゲシユペンストMk-IIに蹴り飛ばされ、私が居た場所にゲシユペンストMk-IIが入りました。潰される直前に自爆装置を発動させたのか、アインストの両手が弾き飛ばされました。更にアインストの体内からも複数の爆発が起きて周りに肉片が撒き散らかされて最後には顔だけになります。

周りを確認するとゲシユペンストMk-IIのコクピットが近くに転がっているのが見えました。そこからは鞆戸大尉の姿が確認でき、私はすこしホッとしました。

何故、地球人の心配など……そう思っているとアインストの残った頭部から光線が放たれます。狙いはゲシユペンストMk-IIのコクピットのようなだったので、普通なら放置します。ですが、身体が勝手に動いてデューカリオンを射線に移動させていました。光線を受けたデューカリオンは限界を超えて行使していた反重力デバイスとアルドノア・ドライブが限界がきて爆発します。私も脱出装置を使うと爆発と合わせてハイパーゲートへと激突。その衝撃でコクピットが壊れて破片が脇腹へと突き刺さりました。

ですが、生きているので救急セットで破片を周りごと固めて止血をして、外に出ます。そこはすでにハイパーゲートの中でした。

そのまま身体中から止めきれない血を流しながら管制室へと進んでいきます。視界が霞んで、どんどん寒くなっていきますが、ここで止まるわけにはいきません。それで

も限界がきて床へと倒れ――

「まだ死ぬな。俺はこの施設を操作できないからな。お前が頼みなんだ」

「まだ、死ぬないのでございます……」

「そうだ。まだだ。俺達はまだ任務を完遂していねえ！ だから死ぬな！」

「……地球人に言われるとは……ですが、その通りでございますね。諦めてなるものですか！」

「その意気だ」

――地球人の同じく傷だらけで血を流している鞆戸大尉に肩を支えられて進んできます。管制室に到着すると、モニターの前に座りながら機械を操作している少女の姿が見えました。その少女はこちらに気付いたのか、くるりと座っている椅子を回転させて振り返ります。

「おや、まさかレジセイアを超えてくるとは素晴らしい」

その少女は地球の民族衣装に身を包んだ小麦色の肌をした黒い髪の十代の少女は金色の瞳で私達を見詰めながら、手に持ったりんご飴をしゃくりと食べます。

「アインスト・ネメシス……」

「なんでこんなところにいやがる！」

「なんでも何も、君達が私の領域に乗り込んできたのではないか」

「なに?」

「この亜空間は私による、私の為だけの空間だ。まあ、地面がないのは流石に困ったので月を頂いた。ああ、安心してくれ。別の月を用意してちゃんと入れ替えておいた。だから地球にはなんの影響もない」

「ここがアインストの本拠地ですか?」

「違う。ここは私がお母様から頂いた場所だ。君達が倒してきたレジセイアだったか、アレがダース単位でうようよしている場所が本拠地だね」

「マジかよ……」

自爆すら厭わず、アルドノア・ドライブを使い潰してようやく倒せたあのアインストがダース単位でうようよいるとか、どんな地獄でございますか!」

「ところで君達はそんな重症を負ってまで何をしにきたんだ?」

「何をつて決まってるだろう!」

「私達は自分達の星に帰るために……」

「ああ、それならもう少しで演算が終了する。後、五時間くらいか。生きている人間を地球に転移させられるよ」

いま、コイツはなんて言いました?

「おい、待て! 俺達を地球に転移させると言ったのか?」

「ああ、そうだ。この空間は先にも言った通り、私の空間だ。私は自分のパーソナルスペースに有象無象が居るのは嫌だ。これからここを開発していく予定なんだ。予定外の客にはお帰り願うのが当然だろう?」

「……それってつまり、私達がここに来たのは……」

「ああ、全くの無意味だね。だからこそ、わざわざアインスト達に全力でここを警備させて近づけさせないようにしていたのだが、なんできたんだ」

「聞いてねえからだよおおおおおつ!」

「いやいや、普通に考えて突破できる特級の戦力などないだろう。君達は奇跡でも起こさない限り、ここには……待て。おい、貴様はオルレインだよな? デューカリオンのパイロットの」

「……そう、ですが……」

「デューカリオンはどうした? まさか壊したなんて……」

「残骸になって転がっております」

「なんてことしてくれてんだ!」

「お前のせいだよ!」

「ええ、ええ。そもそもデューカリオンは私の物でございます」

「クソつ。まあいい。アルドノア・ドライブさえ無事ならシステムの構築ぐらいどうと

でも……」

「それは……」

「待て。黙っておけ。これ以上機嫌を損ねたらまずい」

「確かにそうでございますね」

アインスト・ネメシスはりんご飴をガリガリと食べながら片手でキーボードを操作していきます。もう片方の手で髪の毛を掻きむしりながら聞き捨てならない言葉を吐きました。

「揚陸城の確保は成功したのに自分達は失敗した。アルギユレ、ニロケラス、ヘラスも奪われた。クソつ、デューカリオンが狙い目だったんだが……他のアルドノア・ドライブ、落ちてないか？ 後で調べないといけないな。ああ、もう面倒だし、アインストの補充も考えないと……お母様から貰うのは流石に不味い。どうすれば……」

そうして、俯いた彼女はこちらを見詰めてニヤリとしました。いえ、そんなことよりもアルギユレ、ニロケラス、ヘラスが奪われた？ 揚陸城の確保が成功した？ あり得ません。そんな事……いえ、アルギユレ、ニロケラス、ヘラスはまだ可能性があります。揚陸城は脱出装置まであるはず……いえ、ヘラスはフェミーアン伯爵が乗っていたはず。そうなるのと彼女が乗ってきた揚陸城は月面に放置されたままになるはずですよ。もしやそれですか？

「よつと」

ネメシスが私達の方へやってきて、周りをくるくると移動します。私達は彼女が死角にならないように見るしかありません。

「ふむ。お前、オルレインだったか」

「なん、ですか？」

「もうすぐ死ぬな。その出血量では持たん。痛み無く殺してやろうか？」

「結構、です」

「そうか。まあ、好きに過ごすがいい。私は生きた人間を返すための演算に戻る。邪魔をしないでいるなら、好きに過ごせ」

「聞きたい事があるが、いいか？」

「ん？ まあ、別に作業の邪魔さえしなければいい」

「何故俺達を返してくれるんだ？」

「言っただろう。私は人類が生み出す文化が、アニメや漫画、ゲーム、食べ物が好きだ。だから出来る限り人類を生かす。今回の月はペナルティだとも思え。それにこのまま戦っていればハイパーゲートは確実に暴走し、月を破壊した。そうなれば地球に居る生命体の半数は絶滅する事が確実だ。そうならないためにハイパーゲートごと月を私が管理し、代わりの月を用意した。お前達が戦争を始めなければそのままだったのだ

「が、わざわざ警告までしてやったのに愚か者が多いようだ」

人類の味方ではあるようですが、全てのとういわけではないのですね。おそらく気に入った者は助ける。そういうった類の存在でしょう。民にとっては危険極まりないようでございます。

「火星もまあ、人類だ。まだ私が守るべき範囲に収まっではいる。だが、異星人共は違う。数年もしない内に襲い掛かってくるぞ。しっかりと戻ったら伝えておくんだな。お前達は気付いていないようだが、この世界は間違いないく地獄だぞ」

「そうか。伝えておくよ」
「うむ」

彼女はキーボードの操作に集中したので、私は鞆戸大尉に向かってお願いをする。

「鞆戸大尉。もしもザーツバルムに遭う機会があればこれを渡してください」

「縁起でもない……いや、そうだな。わかった。だが、信じてもらえるか……」

「それなら、これを使い。ビデオメッセージという奴だ。これなら遺言を残せるだろう。後悔をしないようにな」

「ありがとうございます」

「なに代金はデューカリオンを貰う事で相殺する。気にするな」

私は受け取った機材を使つてザーツバルムに最後の言葉を残します。

「貴女と結婚し、幸せな家庭を築きたかったです、それはもう無理なようです。ですから、どうか私の事は忘れて幸せになつてください。私は貴方の事をずっと……見守つて……」

だんだんと身体から力が抜け落ちていき、目がもう見えなくなつていきます。それでも、最後に一言だけ――

「愛しています……ザーツバルム……や……ぱり……最後……もう一度……あい……それ、に……」



「クソつたれが!」

「死んだか」

「っ!?!」

「どうした？ 火星騎士が、憎い怨敵が死んだだけであろう。それよりもほれ。お前は
この機材を持ち帰って皆に説明してこい。それとこやつのようにビデオメツセージを
撮って間に合わぬ者達の遺言を残してやるがよい。私が返すのはあくまでも生きてい
る者だけだ。死んだ者はここに残る」

「わかった」

「それとお前はしばし軍から離れて教官などをするのもいいかもしれんな。優しすぎる
ぞ」

「忠告感謝する」

「うむ」

さて、行ったか。ああ、それにしても本当に余計な事をしてくれた。レジセイアまで
殺してくれよってからに。これで残るは一体のみ。せめてデューカリオンを壊して欲
しくなかった。大人しくしておれば無事に帰れたものを……まあ良い。損失は貴様自
身で埋めてもらうぞ、オルレイン。

「なに、お前の願いも叶えてやる。その為に貴様がやることは一つ。我が敵を全身全霊
で撃て。そしてザーツバルムを殺せ。さすれば貴様等は永遠に共に居られるだろう」

生み出した種子をペロリと舐めてから服を破き捨てて胸に種子を刺し込む。とりあ
えず、ナノマシンとゼロシステム。他に何を入れようか。

「ん？　これは……アハハハハ！　そうか、そうか！　ああ、そうなのか！　ああ、ああ、確かに可能性はある。あるとも！　いいさ、いいぞ！　見つからぬはずだ。うむうむ。ああ、これは最高だ。リンさんを殺した貴様等火星人共の罪を許そう。主人公には主人公で相殺するのが普通だな。楽しい改造タイムとまいろうか。ベースは人のままでとりあえず、アイオーンの瞳でも作って叩き込もう。後は腕や足を戦闘用を考えて仕込み刀や銃器を内蔵させるべきか。いや、トランス兵器で問題ない」

ハイパーゲートに培養槽はないが、機材は持ち込んでいる。早速作り出そう。脳が壊死するまでなら間に合うのだから。楽しい楽しい始まりだ。ああ、アルドノア・ドライブを小型化して入れるのもいいかもしれない。デューカリオンのがここにあるのだし……つて、ぶつ壊れてやがる！　まあ、いいか。これなら丁度いいのでなんとできるはず……ですの。

第26話

トライロバイト級万能戦闘母艦ギャンランド 艦長室

「今、なんと言いましたの？」

アルドノア・ドライブを解析していると、いきなり揚陸城からシャドウミラーが母艦として使っているギャンランドへとルリちゃんと一緒に呼び出されました。そして、艦長室でヴェインデルから言われた言葉はちよつと聞きたくない内容でした。

「何度も言わせるな。我々シャドウミラーは揚陸城及びアルギュレ、ニロケラス、ヘラスを明け渡すことになった」

「ちよつと待つてください。アレ等は私達が鹵獲した物ですよ？」

「一ヶ所に集めて研究すると連邦軍の上層部が政府と協議して決定した」

「……それ、私も参加できますわよね？」

「無理だな」

「ちよっ!? どういうことですかの! ヘラスとニロケラスはともかく、アルギユレと揚陸城は私とルリちゃんが単身で鹵獲したのですのよ!」

「わかっている。こちらとしても遺憾ではあるが、上からの命令だ。我々が一律昇進する事と引き換えになった」

「そんな物よりも、揚陸城をシャドウミラーの拠点とした方が便利ですよ?」

「そうとも言い切れないのだ」

「ふえ?」

「よく考えてみる。揚陸城なんて物は目立つだろう。連邦軍の裏である我等シャドウミラーが使うよりも、表の戦力であるウルブスが使った方が都合がいい」

「うっ……それはそうですの……」

施設や戦術的には便利ですが、戦略的にいえば地球連邦軍に一つしかない揚陸城とか滅茶苦茶目立ちますの。裏側で活動するシャドウミラーとしては駄目ですわね。施設はとつても捨てがたいのですが……

「それと連邦軍及び連邦政府はお前の、お前達の事を問題視している」

「はい?」

「考えてもみろ。お前達はたった二人だけで敵軍の拠点を無傷で制圧したのだ」

「それが……って、もしかして……やりすぎましたの?」

「そうだ。端的に言えばやりすぎた。お偉方の一部からお前を拘束し、その変身技術について解析しようという話も出た」

変身技術がバレた……もしかしてセルゲイおじさんですか? オレノ、許スマジ……と言いたいですが、他の人も居ましたからね。報告されてしまったのでしよう。これはもう連邦軍を切る事も考えないといけないのですの。

「ホルマリン漬けですか?」

「そうなる可能性はある。また、お前自身が実験体であり、連邦に恨みがある可能性も考慮されている」

「いやいや、恨みなんてあつたらむしろ火星に協力しているのですか?」

「だろうな。それにお前の能力が敵に渡つたら厄介だ。二人で軍事拠点を襲撃した力よりも、仲間うちで疑心暗鬼を起こさせることの方が怖い。その辺りも考慮してしっかりと説得させてもらった。どうせお前もそうなつたら逃げるだろう?」

「当たり前ですの。報復までキツチリと倍返しでやってやるですの。周りの連中を殺してから人混みに紛れてしまえば私の力でどうとでもできますしね」

そう言うのとヴィンデルは溜息を吐きました。

「わかつていたが、本当に厄介な力だな。安心しろ。連邦軍は手を出さない。お前の安

全を確保する代わりに揚陸城、アルギュレ、ニロケラス、ヘラスを引き渡す事になった。だから、ここは納得しろ」

「むう……気に食わないですの。それなら私も研究に参加させてくれないじゃないですか……」

「それは無理だ。今回得られた火星の兵器は全てテスラ・ライヒ研究所に集められる」

「テスラ・ライヒ研究所ですの？ でも、いくらあそこでもそこまでの広さや科学者の数はいないはずですが……」

「そうだ。そこで拡大して大規模な研究都市を作る事になった。世界中から有力な科学者連中を集めるというわけだ。本来は月面に作りたかったのだが、あそこは更地になつてしまっているからな」

「それなら私達もいけませんか？」

「シヤドウミラーからはレモンを派遣する。お前はパイロットとしての実績は有るが、科学者としての実績がないからレモンの助手としてもねじ込めない」

「アルティメットガンダムは……まだ完成していませんものね」

「そういう事だ。論文も発表していないし、後ろ盾がブロウニング家しかないとお前を送り込む事はできない」

「……わかりましたの。でも、それならテスラ・ライヒ研究所に入社するとかは可能です

の?」

「可能だろうな。少しすれば一般からも公募するらしい。だが、試験はかなり厳しくなるだろう」

人類の頭脳を結集して色々とガラパゴス化でも起こそうとしていると思いますの。まあ、別に構いません。彼等にアルドノア・ドライブを解析できるとは思えませんし。そもそも起動できないじゃないですか。

「しかし、あれですの。今回は骨折り損のくたびれもうけですのね……」

「階級も何も外部協力者だからな」

「つまり、有効と思えるかどうかも怪しい安全だけですのね」

「ああ。それなんだが、出来る限りの便宜を図る。何か願ひ事はあるか?」

「ん〜お金ですか? 揚陸城とアルギュレを奪取し、連邦軍と民間人を救助した報酬を頂きたいですの」

「たいした金額は出せんぞ」

「それなら……あ、良い事を思い付きましたの」

「嫌な予感がするが言ってみろ」

「私、これからルリちゃんと共にシャドウミラーを離れますわね」

「何?」

「本格的に起業したいと思いますの。月面の再開発もしないといけないでしょうし、作りたい機体や戦艦もございいますの。ですの、作った物を買取って欲しいですの」

「それは可能だな。だが、製造許可はどうする？」

「それなら当てがありますの」

「ならいいだろう。ただし、護衛はつけさせてもらおうぞ」

「別に要らないのですが……」

「駄目だ。監視の意味も兼ねて報告しなければならぬ」

「……わかりましたの。では、準備をさせていただきますの」

残念ですが仕方がありません。ですが、アルドノア・ドライブを確保できる可能性はまだあるので大丈夫です。月面に居たデューカリオンと破棄された敵の首魁が使っていた機体は壊されて月面に放置されているかもしれませぬ。アインストを派遣して情報収集は続けていますし、生き残っている民間人や軍人の方々を救助しないといけません。やることはいっぱいのですの



月面で火星人と戦ってから数日が経ちました。私達は地上に降りずに未だに宇宙空間で作業をしております。シャドウミラーの皆は事後処理に忙しく、地上にある基地へと戻る事はできませんの。

ですが、私とルリちゃんにとっては出て行くので関係ない事ですの。そういうわけではらくゆつくりとさせていただきました。かなりしんどかったのでルリちゃんとうらピスちゃんの二人と一緒にお部屋でゴロゴロとしております。まあ、表向きはこれですが、実際は手に入れた月面での作業をしております。ほとんどこちらには居ない感じですよ。

さて、月面ですが……デューカリオンのゲットはならず。正直、修復とか無理なほど残骸になりましたの。反重力デバイスも壊れに壊れていますので、オルレインをアインスト化してから反重力デバイスの情報を引き出し、その知識を使いながらこちらが持つネルガルとマオ・インダストリーの重力技術に加えてナノマシン技術による修復を試してみましたか……はい、無理でしたの。

もうここまで色んな技術をつぎ込んだら全くの別物になりますから仕方ありません。そもそもデューカリオンの反重力デバイスはアルドノア・ドライブありきの能力なのでアルドノア・ドライブが無いと意味をなしません。プログラムの参考程度にはなり

ますが、こちらもオルレインの記憶だけという悲しみですの。

本当にオルレインと鞆戸大尉は余計な事をしてくれました。二匹しかいない私以外
のインストール量産機のレジセイアを殺し、アルドノア・ドライブを破壊するなど万死に
値しますの。人がせつかく無事に帰してお姫様暗殺フラグを破壊し、オルレインとザー
ツバルムのイチヤラブを外から生暖かく見学しようと思ってましたのに！

仕方がありませんので、お二人をインストール化して我々の戦力として迎え入れます
の。正直、レジセイアの代わりに前線指揮官が手に入ったと考えたらよしとしますの。
レジセイアが死んだので下級インストールの増産能力が半減したのは痛いですが、長期的
に見てよしとしますの。

ちなみに鞆戸大尉を始め、月面に残っていた方々は地球へと無事に転移させました。
もちろん、兵器類は全て置いていってもらいました。着ている物と手荷物ぐらいです
ね。エネルギーを発生するような物は全部、残しておきました。計算が非常に面倒にな
るので、仕方がありません。

そんな鞆戸大尉達は検査を得て一ヶ月ほど隔離されるそうですが、大丈夫でしょう。
ただ、鞆戸大尉達が上げた種子島レポートになるはずだった物はルナレポートとなり、
しつかりと提出されたそうです。ですが、地球連邦はこれを握り潰しましたの。彼等に
とって、この報告とは即ちインストールに完全に踊らされていたことの証明でもありま

す。それに地球連邦軍が火星の者達と協力してアインストを撃破したことについても、ほれみたことかと火星側を調子づかせることになるので隠すのは当然でしょう。

なまじウルブスやシャドウミラーが活躍して火星騎士達を局地的に押し返して敵の司令官を討つたので倒せない事はないと判断したのでしよう。

さて、月面の開発計画です。こちらは単純です。まず廃墟となった複数ある月面都市は更地に変えて資材へと変換します。次に軍事基地や研究施設など重要施設は一部を除いてこちらも資材へと変換。残すのは地球連邦政府と軍が開発していたプロジェクト・アーク宇宙規模の脅威に対して、地下冬眠施設で人類とその遺伝子を生き延びさせようという一連の計画の一環として開発された月の大規模施設ムーンクレイドルですの。

ムーンクレイドルはアースクレイドルの対となる存在として作られました。人類とその遺伝子を保存するのが主な目的であり、地下に人工冬眠施設があります。また施設を守るための防備として軍事施設が存在していますの。

このムーンクレイドルはOGシリーズではEOTI機関が設計し、マオ・インダストリー社が建設を担当しました。ちなみにDC戦争の段階では未完成でありましたとさ。インスペクターとの戦争に勝利した事によって平和となり、予算の削減から現在も建設をしていたようです。

こんな重要な施設を放置なんてできませんの！

というわけで、有難く使わせてもらいます。どうせ月は内部まで私の軍事拠点に作り変えるつもりでしたので、OGシリーズで疑問だったどこまでがムーンクレイドルで、どこまでがマイクロウェーブ送信施設で、どこまでがD・O・M・E.なのか。これについて私からの回答は全てとしますの。

ようは人類の保存ができてマイクロウェーブ送信施設があればそれはもうムーンクレイドルとD・O・M・E.は同じになりますの。マイクロウェーブで送信するのは相転移トロニウムで生み出したエネルギーを転送してやればいいだけですの。

全方位にマイクロウェーブ送信施設を作れば色々と便利なので作るつもりですよ。

でも、開発するのが先です。まずは生産施設を作ってトロニウムを解析し、模倣すれば量産ができますの。アインストになら可能なはずです。うふふ、トロニウムの大量生産とかとつても面白いと思いますの。最終的にはSRXの大量生産ですの。これが上手くいけば戦力の問題は解決できますしね。

まあ、今はムーンクレイドルとマオ・インダストリー本社と繋げるようにしておきましょう。マオ・インダストリー本社の地下にあった地下施設はある程度は無事ですから、こちら也使わないわけにはいきません。今の所、私の目的としてはムーンクレイドルとマオ・インダストリー社、ハイパーゲートの三ヶ所を繋げる事から始めましょう。

でも、レジセイアを殺された事で開発に使うアインスト達が足りません。ですのでメーデルに派遣しているレジセイアをこちらに戻し、開発用の重機型とナノマシン生産用のアインストを増産させましょう。

月面の開発計画はこんな感じで進行させ、オルレインの治療とアインスト化も順調。私がこれから生き残るために仕込みはしっかりとしておきますの。本当にやる事はいっぱいで大変ですの。ある意味ではアルギュレ達を奪われたのは良かったかもしれません。研究がある程度終わってから頂けばいいのですから。



一ヶ月が経ちました。順調に月面を開発が進んでいますが、あくまでもゆっくりとしか進みません。月ほど巨大な衛星を開発するのがそう簡単には終わりませんの。まあ、ナノマシンを増産してアインスト達に穴を掘らせながら建築もさせていますので数はどんどん増えていきますので、後は時間をかけておけばいいのですの。

「お姉ちゃん……ハハハはっ。」

「芸術の都パリですの。後で色々と服を買いましょうね」
「ん。楽しみ」

というわけで、今、私達は地球へと戻りました。それも芸術の都パリです。色々と観光所が……あつたはずですが、色々と壊されております。現在、修復が終わつたのもいくつかはありますので観光は可能です。

「ルリとラピスは観光でもしててくださいいな」

「うん。わかつた」

「何処からいきますか？」

「ノートルダム大聖堂がいい」

「それでは護衛はよろしくお願いいたしますの」

「はい」

シャドウミラーから派遣されている人の一部に二人の護衛を任せつつ、パリにやってきた目的の一つ。ある家を訪れます。

「貴方達はここで待機しててください。私だけが中に入ります」

「それは……」

「これは命令ですの。それとも強制的に気絶させましょうか？」

「わかりました。ここで待機しております」

「ええ、お願いします」

インターホンを鳴らすと、女性がでてきました。家政婦さんですね。

「お待ちしておりました。こちらへどうぞ」

「はいですの」

家政婦さんに案内してもらった先には初老の男性が居ますの。彼こそが私の目的であり、次へと進むために必要なピースですの。

「はじめまして。私はアルフィミイ・ブラウニングですの。この度は急な訪問を許して頂き感謝いたしますの」

「ああ。あんな事を言われたら会わないわけにはいかない。私はご存じの通り、ティン・マオだ。さあ、教えてくれ。娘の事を……」

「はいですの」

私が来た目的はただ一つ。マオ・インダストリーの社長であるリン・マオが死んだ後釜を狙っての事ですの。私が彼女の後を継ぎます。そのために彼の父親へと会いにきました。ですので、事細かに教えていきます。彼女が思っていたことも含めて全て。

「ありがとう。娘の最期を看取ってくれたのだな……」

「いいえ、私はまた間に合いませんでした。むしろ、私は彼女の遺体を辱めた側ですの」
「確かに褒められた事ではないだろうが、君のお蔭で娘が残っていた物が日の目を見ることになる」

「はい。精一杯頑張らせていただきますの。ですから、マオ・インダストリーを私にください。私がリン・マオの後継者となり、彼女の遺志を継ぐですの」

「それは……」

「先程伝えたのはあくまでも彼女が遺したご家族へと向けたもの。私はリン・マオさんが遺していたマオ・インダストリーの技術データを含めた全てを持っております。これがアレばまだ再起は図れますわよね？」

「……確かに可能だ。だが……」

「言っておきますが、私はヒュッケバインを世に出すためにもマオ・インダストリーを外部から手に入れる事も辞さないですし、それに……」

「マオ・インダストリーに拘る必要もないだろう……何故だ？」

「彼女の遺志を継ぐためとマオ・インダストリーの方々が生きていた証を残すためですの」

「……月面にあった本社も無くした。残ったのはパリの支社とオルレアンの工場だけだ。それでもいいのかね？」

「ええ、構いません。むしろ、月面に大きな土地を持つている事が重要ですの。再開発で
きますもの」

「そこまでやる気なのか……」

「はい。ですからくださいですの」

「いいだろう。ただし、条件がある」

「条件ですか？」

「ああ。簡単だ。私の娘になってくれ。その方が役員とかを説得しやすい」

「おおぅ……まあ、構いませんの」

「交渉成立だな」

ブラウニングの姓に拘りはありませんが、レモンお姉様達との繋がりは残しておきた
いので家名を増やしておきますの。つまり、アルフィミイ・マオ・ブラウニングとか？

「あ、ただお姉様達に聞かないといけません。無理なら私の妹をそちらにお預けします。
可愛い子ですので、心配はなさらず」

「あくまでも継ぎやすくするための措置だ。後から抜いても構わん。しかし、孫を見る
ことはできなかつた。私の代でマオ家は終わりだな……」

「いえ、それでもありませんの」

「リンは子供を作らずに死んだのだぞ？」

「いえ、ムーンクレイドルに彼女の卵子が残っておりまして。ちゃんと自分の遺伝子を保存していたんですの」

「だが、ムーンクレイドルは消滅したと……」

「ところが、しっかりと持ちだしておきました。今も保存してありますの」

「おお……」

「さて、契約するですのお爺様♪」

「……悪魔のようだな……」

「悪魔らしいやり方でやらせて頂いておりますの。そうでないと地球と人類は守れませんか」

「そうだな。倫理に反しようとも構わない。やってくれ」

「はい。男性側のDNAですが、リンさんと親しかつた人に心当たりがあるので、その方を使わせて頂いてもよろしいですか？」

「……彼か。彼もリンが死んで悲しんでいる。怒るだろうが、私が説得しよう。後を追われてもリンは喜ばんだろうしな」

「お願いますの。彼女が一人前の女性になったらマオ・インダストリー社の部分は譲りますの」

「それは別に構わない。好きにしてくれ」

さて、マオ・インダストリーが手に入ればネルガルも問題ありません。むしろ、ネルガルとマオ・インダストリー名前を合わせてネルガル・マオインダストリーにでもしましょう。略称はNMですの。

とりあえず、正式にマオ・インダストリーを貰ったら、コロニー・メンデルをこちらの所属にしてアインストは撤退。あちらで作っていたアインストは月へ、施設などはNMで使います。キラ・ヤマトの遺伝子情報を入れたステラちゃんの身体を作っているの、一緒にリンさんの娘さんも作ってしまいますの。彼女がリンさんの代わりになってくれる事を願いますよ。

さてさて、忙しくなりますの。プラントにも行かないといけませんし、時流エンジンの開発も手伝いにいかないと。グレーデン博士達はNM社に引き込んでこちらで安全に研究してもらわないといけません。彼が死ぬのは損失ですからね。ただ、開発が終わったら始末しないといけないかもしれない。タイムマシンってシユタイムズゲートなどでも描かれているようにとっても、とっても危険ですからね。

それに加えてゲッター線や地球上に存在している重力異常の島もどうにかしないと絶対にやばいです。放置していたら地球の崩壊まったなしですからね。アレ。重力異常……？ ショータイムだ！ なんてなりませんよね？ もしくはデモンベインとか

……あ、デモンベインで思い出しました。ラ・ギアスに向かうための書籍を確保しておきましょう。東方不敗マスターアジアにも弟子入りしないとダメですね。

これ、人手を増やさないとガチで過労死しますの。むしろ、ここしばらく寝たのって何時でした？ ヴァングレイを手に入れてからほぼ寝ていませんし……少なくとも一ヶ月以上不眠不休で働いておりますわね。アインストの労働環境は超ブラックでしたの！

第27話

色々と面倒な手続きを全て終えるまでの間、私はルリちゃんとラピスちゃんの二人を連れて色々なところを観光しました。後、二人を着せ替えて可愛らしく着飾るのは面白かったです。逆に私も同じようにされてしまいました。他の子供達の方も含めて沢山の服を買いました。下着とかはルリちゃん達にお任せしておきました。ルリちゃんやラピスちゃんを始めとした子供達には何不自由なく過ごして欲しいです。

さて、ルリちゃんとラピスちゃんの二人に癒されたらまたお仕事です。マオ・インダストリーの社長に就任するためにパリにある支社へとティンお父様と共にやってきました。

支社にある会議室には本社から脱出できた役員とパリの支社に残っていた役員の人達、重要な技術者の人達が居ます。彼等を見ると……ちよつと驚きましたの。

まず居る人物としてはユアン・メイロン。彼は常務であり、 α シリーズの主人公であるリオ・メイロンの父親です。リオ・メイロンは正義感が強く、明朗な面見のいい少女であります。思い込みも激しいのが難点です。デイベイン・クルセイダーズ（DC）に所属して性格が気弱なりョウト・ヒカワを当初は嫌っていましたが、DCから捨て駒

にされたリヨウトを放つてもおけなかったようで、その後はパートナーとなっていています。現在はわかりませんが、リヨウトが死んでいる事から、一緒に行動していたであろう彼女はわかりません。

次の一人はラーダ・バイラバン。彼女はマン・マシン・インターフェイスの研究に従事しています。機動兵器のテストレポートやパイロットのメンタルケアなどを担当してくれている方です。一度彼女のヨガを受けると、長時間のレクチャーを受ける事になるので注意が必要です。また予知能力を持つているのでかつては連邦軍の実験施設において被験体として扱われていました。後に研究員のクエルボ・セロによって不遇な立場から助け出され、クエルボと共に特脳研に移籍して研究に従事することになりました。一時期は恋人同士だったようでしたが、クエルボは更に良い条件で研究を進める為にEOTI機関へ移ってしまい、関係もそこで切れてしまいました。おそらく予知能力で事前に察知し、リンさん達が殿となったことで非戦闘員と共に多少は月から脱出できたでしょう。もしくは最初から地上に居たか、ですね。

ここまではマオ・インダストリーの社員ですから普通に納得できます。次の人はネルガル所属の方々なので微妙に納得できません。

ネルガル陣営はまず説明お姉さんことイネス・フレサンジュ。彼女はナデシコの医療と科学を担当しております。金髪の白衣美人さん。身長172cm、体重は……おつと

睨まれたので秘密ですの。一部の艦内クルーからはドクターと呼ばれていました。無類の説明好きで、艦内放送「なぜなにナデシコ」の解説役も務めます。なにかにつけて専門用語を交えた解説を行うせいで、クルーたちから「説明おばさん」と揶揄され煙たく思われていました。その癖、皆が説明を求める状況では現れないなどかなり屈折しています。8歳までの記憶を失っているせいか、他人に対しては極めてドライな性格となっておりす。

元々はネルガル所属の科学者で、相転移エンジンやグラビティプラストなどナデシコのメインシステムの研究開発にも大きく関わっており、やはり科学者だったアキトの両親とも知己の関係でありました。火星の生き残りでナデシコが火星を訪れたときに乗り込むこととなる。ボソソジャンプの基礎理論を立証した有能な人物であります。実は、アキトが火星時代に出会った少女、「アイちゃん」の成長した姿であるという秘密もあります。簡単に言えばタイムトラベラーですね。

次に本名不明のプロスペクターさん。本人曰くプロスペクターという名は「ペンネームのようなもの」。艦内では「プロスさん」と呼ばれている。ネルガル重工からの出向者として艦内では会計・監査役を担当していました。高度な能力を持つが性格に問題があるナデシコクルーの人選を担当した人物でもあります。ノリは軽いが計算高く切れる人物で、重要な局面では度々その鋭さや意志の強さを覗かせます。会計担当らしく経費

絡みの話にはうるさく、なぜか電卓ではなく宇宙ソロボンを愛用していました。ナデシコを取り戻す際、率先して行動を起こし、肉体的な強さを披露したり、ラーメン屋台を引いたりと芸達者な一面も見せました。

ネルガル陣営の最後はエリナ・キンジョウ・ウォン。彼女はネルガル会長秘書。非常に上昇志向の強いエリート志向のキャリアウーマンであり、いずれはネルガルのトップに立つという野望を抱いています。こちらで言えばマオ社のトップでしょう。自らの出世の為ならば他人を犠牲にする事も厭わない人です。基本的には真面目な委員長タイプでなにかと口うるさく、仕切りたがりです。思い通りにならないとすぐにヒステリーを起こし、一応上官であるユリカに対しても怒鳴り散らす事が多かった印象です。ネルガルの発展と自らの出世の為に、最初はアキトを貴重な生体ボンジャンプのモルモットとしか見ていませんでしたが、いつの間にか異性として意識するようになっており、メグミと入れ替わる形でアキトに好意を見せ始めました。さて、今回で言えば確かに優秀なんでしょうが……地雷でしかありませんの。だって、私は完全に彼女の思惑を邪魔しますしね。

さて、次にどうしてここに居るのかわからない人です。その筆頭はレイフ・エイフマン教授。世界的に有名なユニオンの技術者で、機械工学、材料工学などあらゆる工業分野に精通しており、その見識の深さを見込まれて対ガンダム調査隊に技術主任として招

聘されました。グラハムの依頼を受けてフラッグの強化改修を行い、わずか一週間でカスタムフラッグを完成させるといった化け物っぷりです。麻薬を紛争の原因として心底嫌っており、タリビアにガンダムが現れた際には、目的が麻薬畑を焼き払うことと見抜き、出撃しようとするグラハムを引き止めています。更に独自に太陽炉の研究を行い、その本質に迫ることでイオリアには戦争根絶とは異なる真の目的があるとする結論に達しました。しかしその直後、「あなたは知りすぎた」というリボンズ・アルマークからのメッセージとともに、トリニティによりMSWAD本部が襲撃され、スローネドレイと連結したスローネアインによるGNメガランチャーの直撃を受けて死亡しました。つまり、このままではマオ・インダストリーが襲撃される可能性も高いです。しかし、それがどうしたと言えるレベルで欲しい人材です。

もちろん、この人達以外にも何人か居ますが、事前に調べた限りでは裏切り者が数名。有用な人が数名いる程度です。残りは普通ですね。

「皆、良く集まってくれた。今日、皆を招集したのはリンの後任についてだ」
「それは助かりますね。何をすることも舵取りがないと限界がありますから」
「ええ、そうですね」

プロスさんは裏表なく言っていますが、エリナさんは違うでしょうね。おそらく自分が社長になるために色々と手を回していたのだと思いますの。

「後任はともかく、そちらに居る可愛らしい女の子は誰なのかしら？」

「イネス君、説明しよう。彼女は少し前に私の義理の娘となったアルフィミー・マオ・ブロウニング。新しい社長だ」

「「はあ。」」

ちゃんとスカートを少し持ち上げて挨拶をしますの。始めが大切ですしね。

「ご紹介に預かりましたアルフィミー・マオ・ブロウニングと申しますの。これからよろしくお願ひしますね」

「どういふことですか！ こんな小娘を！」

「ティンさん、本気ですか？」

「ああ、そうだユアン。これは決定事項だ。私はもう歳だし、現状を乗り切る力はない。計画も何も思いつかない……リンが死んでやる気もほとんど湧いてこない。だから、彼女に全てを任せる事にした。社員を路頭に迷わせるわけにもいかないからな」

「そ、その子なら可能だと？ 月面の喪失はかなり大きいですが？」

「エリナ君の言う事もわかっている。彼女には既に計画があり、私達が失った物を持っている。そうだね？」

「はいですの」

全員の前でリンさんの席である社長の椅子へと座り、皆さんを見詰めます。

「私は月面の作戦に参加して捕らえられていたリンさんに出会い、後を託されました。その時に受け取った遺志と共にマオ・インダストリーとネルガルが持つ技術情報や特許など全てが入った物も頂戴しました」

「アレですか。リンさんに言われてやりましたが、正直女性としてはどうかと思いましたが……」

「卵子はちゃんと保存してあったので問題ありませんの、ラーダさん」

「それは我が社の物です。返却を求めるのは当然ですよ!」

「ええ、その通りですの。でも、それを誰が証明するのですか?」

「は?」

「全部、私の^{頭の中}ここに入っておりますが、実物はありません。私が無いと言えばそれは無い事になりますの。リンさんと出会ったのは二人で行動して揚陸城を落とす前。つまり、私と私の仲間以外は誰も、そう誰も証明できないのです」

「っ!」

死体だって取り込んでいますし、私をどうしようしようにも証拠がないので無理です。あちらが武力で来るならこちらでも武力で返しますしね。それに記憶もちゃんと継承しているので業務も何の問題もなくこなせますの。

「いいだろう。それで君はリン君に後を託されたと言ったが……目的を教えてくれない

かな？」

「いいですよ、エイフマン教授。人類の平和と地球の保全が目的ですの。今回、火星との戦いで私達は多リンさんやアルドノア・ドライブなどくの物を失いました。たつた一つの惑星を支配する火星にすら勝てない現状ではハッキリと言いますが、次に来るであろう侵略者達に負けず。アインスト・ネメシスが言っていたようにインスペクター以外にも複数の異星人が居る可能性は非常に高いですの。

それこそインスペクターだつて先遣隊を潰せただけです。我々の地球を守る為にはより多くの戦力が必要です。そう、我々には神話にある守護神アテナが持つイージスのような存在が必要なのです。その為に私が自由に出来るマオ・インダストリー社を欲しています」

「なるほど」

「誇大妄想だ！」

「そうだ有り得ない！」

「まあ、そう思う人もいるのはわかっておりますの。ですから、マオ・インダストリー社を辞めて頂いて結構ですの。これから私の打ち出す方針と計画に添えない人は容赦なく首にします。ああ、不当解雇と言われるのは困るのでちゃんとお仕事は渡す事にしましょう。例えば月面の再開発とかですな」

「「「っー」」」

「それと完全実力主義にさせていただきますので、能力が無いと判断した者は普通に降格などもさせます。今の我が社には使えないどころか足を引っ張る人を養う余裕はありませんので。そうですね、プロスペクター……プロスさん」

「はい。我が社が被った損害から考えて余裕はありません」

「ありがとうございます。それと計画があるなら持つてきていただければ精査して可能なら実行します。ですので、意見自体は構いません。ちゃんと代用に足る計画があればですが」

「そういうのなら、損失を取り返せる計画があるんでしょうね？」

「はい。エリナさんがおっしゃる通り、ございますの。こちらのデータを……」

「「「っー」」」

私が手を振って表示させましたが、皆さんは不思議がっています。そう言えばブレインコンピュータを作っていない人には見えませんか。

「失礼いたしましたの。私はナノマシンで補助脳を構成していますので、見えています皆様は見えませんか。手元の端末にデータを送信したのでご確認ください」

「お前はコーデイネーターなのか！」

「まあ、コーデイネーターと言えばコーデイネーターですの。戦闘と情報処理の為に作

り出されたわけですから。で、それがどうかしましたか？ 何の問題にもなりませんけど……」

「ふざけるな！ コーディネーターなんぞに従えるか！」

「では辞めてもらいます。それと我が社で知り得た事を他者に漏らせば守秘義務違反で処分しますのでそのつもりでいてくださいね」

「脅すつもりか！」

「いえ、普通に訴えると言っているんです。我が社が受けた損害をキツチリと取り立てさせてもらいます。まあ、お金がないのなら売れる物はなんでも売って頂きますからそのつもりで。まあ、貴方はイスルギ重工と繋がっているようなので問題ありませんか。あ、こちらは情報漏洩に関する請求書もしっかりと用意してお渡しますの☆」

男が何かを言う前にちゃんとした証拠書類と映像を出してキツチリと請求しますの。彼等としたらイスルギ重工にオルレ안의工場を手土産にすれば生き残れるとでも思ったのでしょうか。

あ、皆さんにもこの部屋にあるスクリーンで映し出せばわかってもらえました。こんな感じで数人を排除してからお仕事のお話になります。エリナさんはイスルギ重工と接触自体はしていましたが、問題ないレベルでした。残念ですの。

「裏切り者の処分は良いとして、それで計画というのはコレかね？」

「はいですの。私が提示する計画は二つですの。まず一つ目は徹底的に生産効率を重視した自動生成プラントを作ります。これはオルレアンの工場を改造するのですが、私が持つナノマシン技術とAI技術を使えば問題ありません。二つ目は義手や義足などを売る事です。先月、火星との戦いで軍人の方々は大怪我を負っています。両手両足のどれかがなくなった人は珍しくありません。そういう方々に提供します。販売する物は軍用のハイエンドモデルから一般モデルまでです。エイフマン教授。小型化した反重力デバイスの設計図を作りましたが、できそうですか？」

「ふむ……これはパーソナルルーパーに乗せるほどの出力はないが、義手や義足程度の重量ならほぼ人体と同じレベルで運用できる。だが、操作はどうする……いや、IF Sか」

「はい。ナノマシンを投入し、補助脳を形成させます。こちらは私が作り上げて使っているナノマシンを劣化させて生産性を上げた物ですが、どれも安全に制御可能です」
「確かにこのデータの通りであるならば医者としても使えそうですね。ラーダはどう思うかしらっ」

「問題ありません。ただ患者に受け入れられるかどうか……」

「そこは個人次第ですの。それと代金は高くなりますが、割引プランも用意します。我が社で働く事を条件に我が社で立替えて提供します。もちろん、代金は給料から引きま

すが、危険手当という感じでプラスを与えれば問題ないでしょう」

「それは会計としては人手が増えるだけならば問題ですが、月面の再開発をするのなら人手はいくらあっても困りません」

「他にも色々ありますが、ブレインコンピュータを受け入れさせるために全身義体を用意します。老人だって元気に動き回れますし、若い姿のままを維持する事だって可能です。命を狙われても脳さえ無事なら新しい義体ですぐに元通りです。政治家を始めとしたお金持ちの方々は裏から飛びついてくるでしょう。そうでなくても地球を守った英雄たちの為にと銘打った宣伝でもすれば拒否する人は少ないはずです。拒否した人は戦場に出で手足を失う体験をしてから言うように世論を操作しますの」

私とルリちゃんの力なら可能ですからね。まずはパーソナルトルーパーの開発ではなく、消費が生まれている義体の販売を開始します。既に義体の技術はレモンお姉様や人体実験をしていた場所から頂いていますし、私自身が自分の身体でも試しています。それに人体の詳しい情報は取り込んだ事でしたっきりと解析しているので構造についてはおそらく誰よりも詳しいですの。

「確かに現状では需要がありそうな市場です。しかし、民生品にもなりますが……」

「どちらも手を出しますの。それと社員の人達には基本的にナノマシンを受け入れて補助脳を作ってもらいます。これがあれば作業が物凄く効率化できますしね。プロスき

ん。その為の予算と手当を考えてください。何れは工場も全てIFSなどで動かせるようにするつもりなので、使えないと大変な事になりますからね」

「安全に出来るのならばいいだろう。とつても研究に便利そうだからね」

「確かにそうですよね」

「私も入れようかしら……」

科学者の人達に便利な事を説いていくと受け入れてくれました。メリットとデメリットを説明し、メリットの方が大きい事を提示しておきます。

義体に関してはエイフマン教授たちが私が用意したデータをもとにしてすぐに作ってくれました。それどころか、更に発展させて完全義体ではなく、人形として身体を作り、ネットワークを通して遠くから遠隔操作する遠隔操作義体などといった物まで開発しました。

身体の大部分を義体にするのを怖がる人達にはこちらがとても人気ができました。何せ安全な場所から遠くにいけるんですからね。まあ、戦場では一切使えません。ネットワークを介する関係でどうしてもジャミングで操れなくなりますしね。

完全義体に関しては政治家の人達に働きかけて規制を設けました。他人の姿などにはできないようにしないと大変な事になりますからね。

それと義体以外にもアスランが作るよりも先んじて支援用ロボットとしてハ口を作

成して売りに出します。ついでにハロ以外にも妖精タイプを用意しました。どちらも小型の反重力デバイスを搭載し、宙に浮かびながら移動します。ハロは工作用で妖精は支援用などです。まあ、どちらも個人用に調整したAIが操作するので変わりません。戦場では部隊で行動しますが、宇宙では最後、一人になってしまいますのでその時に精神を安定させ、少しでも生き残るためにパートナーが必要です。私もルリちゃんと共に居る事でとても助かりましたからね。

第28話

ネルガル・マオインダストリーとなった我が社は順調に売上を伸ばしております。まず主力商品としてはゲシユペンストシリーズ。こちらは元々連邦軍でも正式採用されているので元から売れております。ただ、月面を喪失した事でイスルギ重工などのリオンシリーズにシェアを取られていく事が予想されます。イスルギ重工はF-32シユヴェールトなどの戦闘機やリオンシリーズなどのアーマードモジュールを大量生産しています。それに対してマオ・インダストリー社は新型の機動兵器を開発して対抗してきました。新技術の開発場所が月ですから仕方がありません。というわけで、軍のシェアは少し譲ってやんよって事にしておきます。だって、イスルギ重工ってば死の商人ですから信頼性はこちらが上ですし、無料ただでくれてやるつもりはありません。

ゲシユペンストMK-IIにナノマシン技術を使って作り上げた高性能な支援用浮遊機器、万能工作補助機械ハと妖精フェアリーを搭載する事で対策とします。ハロはいざという時の修理器具やサイババルキット、小型の高性能コンピュータなどを搭載し、普段使いから非常事態までどちらでも使えます。妖精の方は使用者の好みを蓄積し、情報収集や情報処

理など様々な事をやってくれます。こちらは主に普段の生活で使われますが、戦闘で使うと本領発揮しますの。個人の癖などを集積しているので別の機体にも乗り変えても好みのセッティングにすぐ調整してくれますし、操作方法までしっかりと解析して教えてくれます。更に更にどちらでも酸素発生装置と供給装置、高カロリー高タンパクなどの万能栄養剤、ドリンクなどを揃え、高性能な通信機器を搭載。これによって宇宙空間で漂流しても我社が開発したノーマルスーツを着ていけば助かる可能性がとても高いですの。

もちろん、ゲシユペンストシリーズをはじめ我社の機体には対応させない。なんてことはなく際限なくどの機体にも乗せられます。これらのシエアは我社が独占しているのでもっとも売れます。何故イスルギ重工などにも使わせるかと言えば簡単ですの。修理やメンテナンス、回収は我社で行っています。そこに我社以外の機体に接続されていた者達が戻されたら、修理の為にデータを解析するのは当然ですの♪ 修理しないとイケませんものね？

そういうわけで民間にも販売しております。家事や献立、果ては子供の世話までなんでもござれのこの子達は順調に量産されて売り出されております。それと携帯端末の方も我社で参入して高性能機を安めで販売しており、こちらも売り上げは順調です。

義体は軍民両方に売れております。火星との戦いとその前に起きた戦いの負傷者達。

それに一般人の人達。その人達にとつて思う通りに動かせる義体は願つてもやまなかつたものです。全身麻痺だろうとなんのその。脳死さえしていなければいくらでも代替可能という事で人気があります。値段はそれ相応になります。ネルガル・マオイ・マオ・インダストリー社で働けば格安で手に入りますので入社する人は後をたちません。

お蔭でオルレアンの工場をオートメーション化させ、コロニー・メンデルにも機材を入れて次々と量産させていますが、それでも足りません。ですので売上を使つて土地を購入して生産拠点を増やしたいと思つております。そこで月面再開発計画を作りつつ、土地の所有者達から買取を行いました。また社内の権利書などを精査した結果、ネルガルが保有していた場所もあつたのでそこに再開発をドーンとやっちゃいます。ちなみに重機は型落ちしたゲシユペンストなどにシャベルとかくつつけました。パイロットは義体に釣られて入つてきた新入社員さん達です。私が持つてる影月に負けないように頑張つてくださいね。

そんな事を考えながら、パリにある支社でお仕事をしております。社長室（支社長が使つていた部屋）にある私専用となつたデスクの前にある椅子に座りながら、デスク上にあるモニターに映る軍人さんとお話しております。相手の階級は少将です。地球連邦軍から依頼という形になります。

『マオ・インダストリー社を継いだ君にこの島をどうかしていただきたい』

「重力異常が発生している島ですの?」

依頼内容はわかるのですが、何故現在復興中の我社に持ってくるのかちよつとわかりません。まるで誰かが失敗しろとでも囁いている感じですよ。

『そうだ。軍を度々派遣したが全て消息を断っている。そこで重力技術に関する特許を持つ君達に協力を要請したい。このままでは重力炉が暴走して地球が終わってしまうのでね』

「こちらのデータでは重力カーテンを突破し、戦力を送り込めるようにはしたとあります。送る戦力が低すぎただけではありませんの? そもそも最初に提示したヒュッケバインによる突入も拒否されておりますわよね?」

『当たり前だ。重力炉の暴走を止めるためにブラックホールを発生させたのでは話にならない』

「それで今回投入した部隊は……デスクカプリース隊ですか」

聞いた事も無いですが、データをみる限りでは傭兵などを集めた部隊のようです。その為、何度も地球で起こるテロリストとの最前線に送られて夥しい数の死人を確認できます。彼等に配布されているのはゲシユペンストシリーズやリオンシリーズですが、相手はリオンシリーズを使ってきました。流石は死の商人ですよ。

『ああ、そうだ。救助も兼ねた追加の部隊を派遣する。そこで技術者としてネルガル・マ

オインダストリーからも派遣して欲しい。そもそも重力炉はマオ・インダストリーとネルガルが協力して作成した物だ。君達に責任を取ってもらいたい』

「散々危険だと忠告したのに実験を強行したのはそちらだと記録に残っておりますの。ですから我々は即座に撤退しました。残ったのはネルガルの一部と奇械島に居た人達。それに私達とは関わらずに研究していた人達ですね」

『あれはインスペクターの襲撃が原因だったのだ。我々はどうにかして奴等に破壊されたエネルギー供給施設の代わりが欲しかった』

「その結果が島を飲み込む重力カーテンですか。まあいいでしょう。ただし、報酬は出していたできますの」

『出来る限りの要望は聞くように言われている』

「でしたら、奇械島とそこにある物は重力炉を含めて全て頂きます。それと月面の土地も全て頂きたいのですの」

『私の権限を越えているので、奇戒島と月面に関しては連邦政府と相談しなくてはならない』

「まあその辺りはお任せします。連邦政府にはこちらの月面開発計画を見せて説明しておいてください。こちら準備はしておきますので回答が分かり次第お知らせくださいですの」

『了解した』

さて、奇戒島に何かがあるかはわかりませんが、稼働している重力炉があるだけで私にとって価値があります。土地の方はネルガル・マオインダストリー社の開発拠点として作り変えればよろしいですね。機動戦艦ナデシコを作る為にも大型の建造ドックは欲しいですし、重力炉があるなら反重力デバイスを使って作業をしやすい環境も作れるでしょう。

「それになにより、わたくしの念動力があそこには何かあると囁いておりますしね」
ニュータイプのようにキュピーンと来ましたの。私自身が行った方がいいと念動力フオースが囁いております。いえ、フオースじゃないですけど。

ちなみに重力カーテンについてはアインストの方でも解析しております。あそこには派遣できませんでしたので、周りから観測データだけは取らせてあります。ネルガル・マオインダストリーの重力技術から解析したデータを確認したところ、重力の力場や障壁といったものとはほぼ変わりませんの。薄く広範囲を覆っているだけですが、生半可な強度では普通に通ろうとしたらグシャッと潰れてしまいます。また通信や転移もできません。空間が重力によって歪んでしまっているためにちゃんとした転移座標が得られないからです。対策としては内部と外部から観測しないと無理です。

「お姉ちゃん……できた。褒めて……」

「どれどれ……おお、よくできましたの。偉いですよラピス」

「ん」

部屋の中にあるソファアームに座っていたラピスがこちらにやってきて座っている私の腰に抱きついてきました。彼女の頭を撫でながら、ラピスから送られてきたデータを確認します。内容はナデシコに搭載する一人一戦艦計画ワンマンオペレーションシステムプランのテストです。一人一戦艦計画は I F S を更に推し進め、一人と A I で戦艦の全てを操作する計画です。原作ではルリちゃんとおモイカネが搭載されていました。劇場版ではラピスちゃんもユーチャリスという戦艦を一人で操ったりしていますの。もちろん、最初はオペレーターが多数乗艦してはいますが、乗員の大半はデータのバックアップなどの補助目的で搭乗させていました。

「これで役に立てる?」

「ええ、もちろんですの。まあ、こんななくてもラピスは私達を癒すという意味で役に立っていますよ」

「ん〜」

膝の上に乗せて撫でまくってあげると気持ちよさそうに目を細めていきます。表情はほぼ変わらないですが、雰囲気は大分よくなりました。孤児院の子達とも仲良くやっているのでしょうか。この孤児院は私が作り出し、色々な所から孤児や問題ある子達を

引き取って教育を施していますの。例えば実験体になつていた子供達とかですな。

最初は助けた子達をレモンお姉様達に任せていたのですが、私は一応シャドウミラーから抜けたので自分で運営する事にしました。そうすれば人材確保も容易ですしね。遊び感覚で戦艦とPTなどのシミュレーターをさせたりもしているので優秀なパイロットに成長してくれるでしょう。まるでスクールみたいですが、気にしません。もちろん、皆にはナノマシンを投入して補助脳の作成をしてありますが、実験的な事はやっておりませんの。ただ自己進化型ナノマシンを投入しているのでどんどん子供達の望むように進化していつていきますの。彼等には試作機のデータをテストしてもらったりもしているのですが、子供なので気にせずどんどん駄目だしをされて改善点を洗い出してくれたりもします。ええ、大変助かっておりますとも。

「ルリお姉ちゃん……どこ……どこ……？」

「ルリでしたら今日は防衛システムの再構築をしておりますわね」

ネルガル・マオインダストリー社のネットワーク対策は私とルリちゃんからしたら脆弱と言えるような代物でした。コーディネーターなどにはちゃんと対処できるように作られているのですが、私とルリちゃんのような特A級ウィザードには突破できちゃいます。もちろん、スタンドアローンなので内部に侵入しないといけません、一度侵入されてしまえば簡単に情報を抜かれます。それは困るので徹底的にオモイカネにも協

力させて作り変えております。

また、守るだけではなくしようもないので攻性防壁として無数のAIを作成し、その子達に攻撃役と防御の更新を任せる予定です。具体的に言うとなら互いを攻め落とすように競わせて技術を向上させ、それを本社の方に適用させる予定です。彼等のサーバーも私が作ったナノマシンによる高性能なコンピュータを与えています。もつとも流石に単体ではヴェーダに負けるでしょうが、複数の物を用意すれば問題ありません。それに影月と接続させれば大きき的にヴェーダ以上の演算能力を得られますし、そこから接続先を割り出してアインストを派遣し、今度こそ逃がしません。完成するまではルリちゃんが支社に泊まり込んで監視してくれているので問題ありません。

物理的な防衛戦力としては外を改造してある程度使い易くしたIFSとテスラ・ドラッグ採用のゲシュペンストMK-IIIとゲシュペンストMK-IVを二機ずつの合計四機を一小隊として支社に五組。オルレアンの工場に十組派遣してローテーションさせております。支社は常に十二機、オルレアンの工場は二十四機が護衛についています。パイロットはそれぞれその三倍を用意しておりますので訓練と休息、護衛というローテーションがちやんと取れています。

内部はワンちゃん達をナノマシン技術で更に強化して複製し、放つて護衛にしております。職員のアニマルセラピーや預かる子供達の遊び相手や移動手段としても人気で

すの。中身が私の分身アインストですので裏切る心配はありません。戦闘になれば毛を硬化させて銃弾だつて対戦車ライフル以外は強く強靱な肉体を持ち、ナノマシンによる自己進化、自己再生能力もあるので普通にかなり強いのです。生身で相手のできる存在ではありません。何れは武装も取り付けてあげたいところですね。

もちろん、非常事態にはもつと戦力を出せるようにしてありますの。全ては対ソレスタルビーイング用です。これもエイフマン教授を守るために仕方がありません。もちろん、エイフマン教授を臍盾するわけにはいかなないので、幹部全員に三匹ずつ張り付けて、外に行く時は全員が遠隔操作義体を使って完全武装の護衛もつけますの。やりすぎと言われますが、火星の連中や異星人、他社からの襲撃など危険をしっかりと教えまして。それでも洩る人は費用は会社で持つので遠隔操作義体で遊びに行くか、家族をこっちに連れてきて家族も遠隔操作義体で出かけると言つてあげたらすぐにこちらに引越してきました。ちゃんと社内にお店や病院などを完備させたかがありますの。

「お姉ちゃんにも褒めてもらいたい」

「でしたら、夜に行きましようね。今は忙しいですの」

「わかった」

ラピスちゃんが私の膝から降りてワンちゃんに乗つてソファアールに戻つてしまいましたの。もつと撫でてあげたかったです、仕方がありません。ラピスちゃんはそのま

まワンちゃんの上で寝そべりながらブレイコンコンピュータを使った戦闘シミュレーターをやりだしたので、相手をしてあげます。戦艦での高機動戦闘です。

『社長。書類は……』

『全部終わってますの。データで送信しましたので確認してください』

『わかりました。それで新型のプラズマジエネレーターですが……』

『出力が足りませんし、大型化しすぎですの。使えません。そちらは適当に打ち切つてブラックホールエンジンの開発をしてください。というか、エイフマン教授にお願いしていたはずですが……』

『それが連邦軍からもたらされた未知の粒子について研究しだしてしまい……』

『それはどこから持ち込まれましたの?』

『プロウニング家からですの通しましたが……』

『お姉様ですか。投げましたね。まあいいでしょう。ブラックホールエンジンの設計はこちらでやっておきます。プラズマジエネレーターに関してはパーツから見直して小型化しましょう。設計図と素材はこんな感じでお願いますの』

『ですが、値段がかなり高くなりますが……』

『それで構いません。量産して価格を抑えます。ほぼ自動で作り上げればそれほどコストはかかりませんからね。必要なのは初期の投資とメンテナンス費用だけです』

『わかりました』

新型のプラズマジエネレーターは同じサイズで約40%の出力アップです。本当に自己進化、自己増殖、自己再生のナノマシンは恐ろしいです。お蔭でほぼ永久機関ですのよ。さて、次はエイフマン教授に情報を渡しておきましょう。

『エイフマン教授。アルフィミイですの。今よろしいですか?』

ブレインコンピュータで先程の秘書さんと同じく通信でお話します。

『君か。すまないがブラックホールエンジンについてはまだ研究できていない。それよりも気になる物が送り込まれてきた』

『知ってますの。その粒子を出す相手と戦って発見したのは私ですの』

『詳しく聞いていいかね?』

『構いませんの。こちらが知る限りの情報を全てお渡しします。独自の情報網で手に入れたので部外秘です。お弟子さんにも教えないでくださいね?』

『もちろんだ』

『では、その粒子の名前はGN粒子と言われており、電磁力、強い力、弱い力、重力、すべての特性を内包しているそうです。その粒子が何らかのプロセスを経る事でそれらに対する効力を発揮するとの事です。その特性は様々で、圧縮すればビームになったり、物を浮遊させたり、質量を軽減させたりなどの効果があります。更に自由に形成で

き、バリアにもなるようです。また脳量子波とよばれる特殊な通信手段の媒介とすることもでき、電波を攪乱して高濃度では電子部品を焼くなどECM的效果があります。こちらは実際に受けたので間違いありません。

その時の経験から解析するに人体の細胞変異を促します。特定の圧縮状態ではテロメアを破壊したり細胞異常を引き起こす毒性を有する事も確認できました。こちらの場合は再生医療も受けられません。

これらの粒子は外部に放出されると一定時間で自己崩壊を起こし、ただの光子になります。コンデンサーの素材を介して粒子を熱変換し、対象を容易に溶断する事も可能だと思われれます。弾丸に込めて発射できるでしょう。

放出すると一定時間で光子になることから、稼働中の太陽炉の周りは常に光の粒子が撒き散らされておりますが、GN粒子の電波攪乱効果によって目視で確認出来るまでの反応は感知されないようですね。以上が私が知っている彼等が使っている太陽炉と呼ばれるGNドライブについてですの』

『君はもしかして開発に関わっていたか、その組織に属していたのかい?』

『どちらでもありませんね。知っているから知っているだけです。情報収集は欠かしておりませんので』

『なるほど……恐ろしいね』

『恐ろしいのは私よりも相手ですの。これを知った人達は確実に消されています。くれぐれも護衛は外さないようにお願いしますの』

『わかった。それで開発してみてもいいかな?』

『構いませんの。むしろよろしくお願いいたします』

太陽炉が手に入れば色々と使い道がありますからね。流石に脳量子波を用いて他者と表層意識を共有し、驚異的な反射神経を發揮し、常人の二倍以上の寿命を持つ革新者や純粋種と呼ばれるイノベーターについては教え……いえ、原作で気付いていたのでさっさと教えておきましょうか。

『それともう一つ。この粒子には人を次のステージへと進化させる効果もありますの』

『進化?』

『はいですの。他者と意識を共有したり驚異的な反射神経を持ち、寿命が伸びるなどといったことが確認できます』

『それは自己進化型ナノマシンを使ったブレインコンピュータならば既に可能ではないかな?』

『確かに色々と解決しておりますね。ただ寿命は……』

『伸びているね。ナノマシンを追加して細胞の再生まで促せば生きる事は何ら難しい事ではないよ。意識の共有だってやろうと思えばネットワークを通して可能だ。ただナ

ノマシンと違うアプローチだということに興味はある』

『まあ、気にしなくていいですの。とりあえず開発を目指しましょう』

『実物があれば早いんだが、流石に手に入らないよね？』

『それはまだ無理ですな』

『まだ、かね』

『はいですの。今は不完全なデータぐらいしかありませんの』

『不完全な物はあるのか』

『ありますねえ……コレですの』

不完全なデータなのは全てを奪い取る前にヴェーダが物理的にソレスタルビーイングに持っていかれたからです。中途半端に吸い出したデータでは試作型の太陽炉すら作る事はできません。

『穴抜けのパズルですが、エイフマン教授なら作れるかもしれません』

『受け取った。実験を繰り返せばどうにかできるかもしれない。遠隔操作義体で実験を試してみるよ』

『全てお任せしますので、データだけは極秘ファイルに上げておいてください』

『了解した。では研究に戻る』

『身体に気を付けてお願いしますの』

エイフマン教授と通信を終えてから立ち上がり、部屋に取り付けたキッチンを使って紅茶を入れます。それから冷蔵庫にあるケーキを取り出してお皿に乗せてラピスちゃんの前を持つていきます。

「私は少し出かけてくるので好きにしていいていいですよ」

「ん。ゴロゴロしてる」

「わかりました。おやつはここに置いておきますね」

「ありがとうございます」

「では」

社長室から移動するのは研究所の地下にあるパーソナルルーパー開発室ですの。



開発室に移動するとそこではラーダさんとイネスさんが研究しております。現在、ゲシユペンストMK-IIIとゲシユペンストMK-IVの改造が行われております。現在、我が社の護衛として運用しているのは値段を無視した試作機ですので量産型に落とし

込まないといけませんの。特にヴァイスリッターはこの世界では開発されていきましたが、レモンお姉様が確保した物も含めて少数しか生産されておりません。OGなどのゲームではそもそも幻のプラン扱いでしたしね。

「あら社長来てしまったのね」

「何か来たら行けないようなお言葉ですの」

「いえ、そんな事はけつしてありませんよ……はい」

目の前に組み立てられている機体はゲルトアイゼン・ナハト^{ヴァ}とゲシユペンス^イストMK^{リッ}IV^{ター}の二機で22・2メートルのⅢと21・7メートルのIVです。こちらはまだいいでしょう。しかし、問題なのはこの二機は量産型用に劣化した物ではないことなのです。

「これはなんですか?」

ゲルトアイゼン・ナハト^{ヴァ}とゲシユペンス^イストMK^{リッ}IV^{ター}。この二つには凄い力を感じますの。

「良くぞ聞いてくれました。この子達はヒュツケバインMK^{リッ}Ⅲを作るための実験機体です。動力炉はブラックホールエンジンよ」

「エイフマン教授はまだだと言っておりましたが……」

「私とラーダで完成させておいたの」

「頑張りました」

「暴走の危険は？」

「さあ？」

「二応、大丈夫です。ネルガルが開発していた相転移エンジンの技術を使い、暴走しそうになるほどのエネルギーは転送して一定以上のエネルギーが生まれる事を防ぐ事にしました。その転送されたエネルギーは高出力のフィールドやビームに使います。使わなければそのまま破棄です」

「ふむ」

相転移エンジンは周囲の空間をよりエネルギーの低い状態へと相転移させることにより、その差分のエネルギーを取り出すものです。エネルギーごと相転移させることで莫大なエネルギーが生み出されるのですが、取り出さずに破棄しようというわけですね。

「勿体ないのでいつその事敵機にぶつけるとかどうですか？」

「そんな精密な転送技術はないわね」

「でしたら、重力のフィールドを拡大すればどうですか？」

「あくまでも自機が中心なら可能かもしれないわね」

「そもそも搭載しているのですか？」

「ディスプレイションフィールドと一緒にグラビティフィールドも搭載しているわ」

「両方ですか」

「ディスプレイションフィールドは周囲の空間を歪ませて発生させるのだけど、光学兵器に強い代わり、質量攻撃には弱いもの。両方張れるようにして弱点を無くしました」

「実際は同時に展開できないので、どちらかだけですけど」

「パイロット次第ということですね」

二人が頷きました。しかし、ゲシュペンストMK-IVはともかくとして、ゲシュペンストMK-IIIの方は正直、ビーム兵器とかないので要らない気がします。

「IVはオクスタン・ランチャーは徹甲弾とビームを放つんだけど、グラビティプラストに変えてあるわ。IIIの方はフィールドとスラストを強化して五連チェーンガングラビコンシステムをグラビティプラストに変更しておいたから弾幕も展開できるわ。何より重力制御装置グラビコンシステムをナノマシンも使って思いっ切り強化したからかかるGの軽減もできたわ」

「普通の軍人さんでも動かしやすい仕上がりになりました。量産型にもこちらを搭載して扱い易くします。制御は難しいでしょうが、サポート用の妖精さんが居れば扱えるはずですよ」

「なるほどなるほど。それでこれだけですか?」

「いえいえ、まだありますよ」

「どうせなら徹底的にという話になりました……：T—LINKシステムも搭載してあります」

T—LINKシステムはケンゾウ・コバヤシが開発した念動力感知増幅装置です。人間の持つ念動力を増幅させ、メカニズムへとダイレクトに伝える機能です。これはIFSと同じですね。優れた念動力者であれば増幅されて絶対的な力を発揮します。まあニュータイプが扱うサイコミュと同じです。どちらも相手の感情を感じたり、意識を遠くに飛ばしたり、触れてもいけないのに物を呼び寄せたり、離れている場所の兵器を操作したり、会話したり色々できますの。

つまり、T—LINKシステムをチップ単位まで小型化してそれをフレームから何から何まで使えばサイコフレームが出来上がりますの。モビルスーツ一機でコロニーを止めるようなとんでも兵器ですね。もちろん、リンさんから貰ったデータにはT—LINKシステムについてもありますので、ナノマシンを使って作っております。まだ実験段階ですが。

「念動力者用の機体ですか。しかし、念動力で操作する武装はどうしました？」

「目の前にあるじゃない」

「は？」

「だから目の前ですよ」

「えっと、ゲシュペンストMK―IVとゲシュペンストMK―IIIしかありませんが……」
「だからそれよ」

イネスさんに腕をガシリと捕まれてIVのコックピットへと運ばれていきますの。

「ムーンスクレイドルには念動力者が操るビット型パーソナルトルーパーの計画があつたの。だから作ってみたのよ」

「いや、絶対に無理ですの。いくらなんでも動かさせませんの」

「まあ、試してちょうだい」

「わかりましたの」

IFSで機体を起動させ、T―LINKシステムのスイッチを入れます。システムは問題なく作動しました。そこでゲシュペンストMK―IIIの方も起動させるように意識すると起動できました。ですが、動かす事はできません。私の念動力が低いのが原因です。

何度やっても無理でした。もっとT―LINKシステムの精度を上げて増幅率を強化しないと話になりませんの。まあ、T―LINKフレームが出来れば解決するでしょう。体内のナノマシンもT―LINKシステムの機能を手に入れば必然的に念動力も飛躍しますしね。

「やっぱり無理ね」

「わかりきっていたことではありません。社長、身体に問題はありますか？」

「大丈夫ですの。とりあえずこの二機は普通に検証試験をしてから……あ、^{ウェア}ゲシユペンストMK-IV^{ター}の方は私用の機体にしますね。ちよつと仕事を請け負う可能性があるので戦闘に使える機体が欲しいですの」

「それならもつと改造したいわね。資金に糸目はつけないでしょう？」

「まあそうですね。出来ればヴァングレイ並みの機体を希望します」

「社長が使っていたヴァングレイのデータは見ましたが……良く生きていますね？」

「本当にそうよね」

「身体は頑丈にできておりますので」

「やっぱり速度は欲しい？」

「速度もそうですが、どうせならT-LINKシステムが使える射撃武器も欲しいですね。訓練しないといけませんし」

「それならいっその事射撃武器主体にしてみましようか」

「いいですね。それでいきますの！」

そこで色々意見交換して、エイフマン教授も呼び出して四人で^{ウェア}ゲシユペンストMK-IV^{ター}を魔改造していきます。やっぱりメインは重力関係と相転移の技術を使う事にして……

「ビット型パーソナルトルーパーで思いついたのですが、この翼をこんな感じにして……」

「ふむ。それならエネルギーの供給も可能だね」

「じゃあ、普段はスラスターとして使えるように背中にとりつけましょう」

「名前はブラスタービットにしましょう」

「使えるシステムはアシユセイヴァーのソードブレイカーですね」

「そういえば火星騎士のヘラスもありましたね。そのデータをレモンお姉様にお問い合わせもらってきましよう」

私の新しい機体は、ゲシユ^{ウツ}ペンスト^イMK^{リツ}IV^{ター}にブラックホールエンジンを取り付け、四枚の翼にエステバリスにナデシコからエネルギーを送信するシステムの試作機を採用。これはネルガルが元から開発していたのでソレを使います。

翼に重ねるようにして配置した八枚の浮遊型砲台ブラスタービットを配備。全てT-LINKシステムで操作し、グラビティブラストかブラックホールブラストを放ちます。いえ、もう統一してグラビティブラストにしましょう。レモンお姉様から貰ったセラスのデータを基にしてブラスタービットや関節以外の場所はナノマシンで元素配列を弄って硬化させます。機動力は重力制御装置により慣性を無視した機動も行えるようになったので、装甲悪鬼村正の銀星号^ゴっこも可能ですの。

この機体を使う事でゲシユペンストMK-IVの宣伝にもなりますし、よしとしましよ
う。

しかし、白騎士なのにどう考えても黒い武装しか使いませんの。もはや
ヴァイスリッターではなくシユバルツリッターですの。一般兵用はヴァイスリッター
として、エース用にシユバルツリッターとして売り出すのもありですね。念動力を使え
ないとインコムなど有線接続かAI制御になりますが、どちらでも砲撃の数が増えるの
で有効でしょう。

第29話

「は？」

ちよつと有り得ない事が起きて、思わず声を出してしまいました。一緒にシユバルツリッター^{黒騎士}を作っているラーダさん、イネスさん、エイフマン教授達の視線が集まってきましたの。

「どうしたの？」

「いえ、なんでもありませんの。少し席を外しますが、構いませんか？」

「大丈夫よ。必要な計算は終わらせてくれているしね」

「では失礼しますの」

シユバルツリッター^{黒騎士}の開発を進めている開発室から急いで出て社長室ではなく自室に戻ります。部屋に入ると即座にベッドへとダイブして意識を切り離してネメシスの方へ移します。

「状況は！」

「襲ワレテイル。コチラノ数ハドンドン減ツテイル」

「ああもうどこから湧いてきたのですの！」

影月の方で予想外の問題が行ったので、慌てて戻ってきました。すぐにハイパーゲートの管制室にあるモニターを見ます。そこに写し出された映像は両肩に特徴がある紫の機体と灰色の刺々しい機体が私の可愛いアインストちゃん達をどんどん殺しているのです。

「なんなんですか連中は！ どこから現れやがったのですの！」

「ココダ」

「月面のクレーターですか……とにかく対応しないとイケませんの。工業用ではなく、戦闘用のアインストを出しなさい」

「既ニ出シテイルガ、勝テヌ」

「……お母様に連絡をしましょうか」

駄目元で助けを求めてみますの。

『助けてお母様！ 私の空間に変なのが居ますの！』

『その空間はくれてやった物だ。お前の力でどうにかしろ』

『レジセイアが残り一体で、戦力が足りませんの。数だけくださいませんか？ アイツ

等の技術は使えると思うのですが……』

『奴等はフューリーだったか。お前が教えてくれた遺跡を作った者達だ』

アレく何処かで聞いた事がありますの。そう、確か第二次OGが終わって次の作品がダークプリズン。その次がムーン・デュエラーズでしたか。あの作品、やってなかったですし、記憶があやふやなんですけど……確かフューリーがそういう連中だと聞きましたの。つまり、やらかしましたのね。ガバっちゃいましたの！

『彼等の技術は収集済みですか？』

『いや、奴等が来た時は我は眠っていた』

『なるほどですの。でしたら兵力だけお借りしてもよろしいでしょうか？』

『駄目だ。そこはもはや地球と関係はない。お前だけで対処せよ。別に放棄しても構わぬのだからな』

『わかりましたの……』

くそつ、無限の兵力で数にも言わせてやろうと思いましたが、そうも行きませんか。でしたら、仕方ありませんの。やってやるしかありません。ガバはリカバリーしなくてははいけませんから。

「とりあえず、ゲシユペンストMK-II量産型を出しておきましょうか」

ムーンクレイドルとマオ・インダストリー社の生産施設にあった資材やその辺に転

がっているデブリを使って回収してあるデータを基礎としてアインストで製造。動力炉は我社の新型プラズマジエネレーターをアインストと同化させて運用。武装も変わりませんが、自己進化・自己再生・自己増殖のナノマシンも投入しておきます。

これでどうなるかなんてアルフィミイちゃんにはお見通しですの。だって、ミタール・ザパト博士がレジセイアに投入したラズムナニウムと同じ特性ですもの。ちなみにラズムナニウムはミタール・ザパト博士が開発した自律型金属細胞で、「自己再生」「自己増殖」「自己進化」の機能を備えていますの。はい、カツシュ博士が開発したナノマシンと変わりませんね！

これらはツェントル・プロジェクトの要というべきものの一つであり、マシンエネルギーを供給源とします。当然、活動時間には限界がありますが、エネルギーという点を解消すれば半永久的に活動が可能となります。彼は永久機関であるTEエンジンとの組み合わせる事でこの難点を解決しました。

「アインストは過去であり、イエツツトは現在を表しています。つまり、アインストが進化したものといえますの。うふふ」

というか、私が既にイエツツトですので問題ありませんね。とりあえず作った傍から突撃させて経験値を稼ぎましょう。ネットワークを通じて戦闘データを収集し、全機体で共有して進化させますの。

「お母様から支援が得られないのなら、盛大な実験場にしてやりますの。なに、いざとなれば月を木端微塵に消滅させて空間だけ使うか。空間自体を消し飛ばせばいいですの。レジセイア、貴方達はどんどんアインストを生み出してください」

「心得タ」

画面ではさっそく現れた四機のゲシユペンストMK―IIアインスト仕様が……やられました。普通に相手はゲシユペンストMK―IIの性能を凌駕していますの。これはいけません。相手になっておりません。自爆特攻させようにもその前に殺されます。

「アインストはお父様の出番ですわね！ 行きなさい、アインスト・ヴォルフ！」

ゲシユペンストMK―IIIのデータを基礎としたアインストを投入。今度はある程度戦いになりましたが、出力が足りません。そこで更にもっと面白い物を投入してみますの。魔改造されたゲシユペンストMK―IIIの改良型。ブラックホールエンジン搭載機。

この子達の戦闘データを取るために突貫ですの♪ あ、乗せてるパイロットデータは当然、お父様の物なのでガチ目でやべー奴ですのよ。まあ、本人には叶わないでしょう。

「ん、ゲシユペンストMK―III だけではやっぱり足りませんね。ゲシユペンストMK―IVも出しましょう」

ライン化させて大量生産して大量投入ですの。あ、五機やられましたね。倍を投入します。おや、暴走して自爆しました。月面でブラックホールが発生して相手は必死に逃

げましたの。

しばらくすると仲間を引き連れて戻ってきたので、10機20機と投入していくと流石に相手は逃げだしました。全機に追撃させて、壊された機体はこちらのも、相手のも回収用アインストを派遣して資源行きですの。相手の方はちゃんと解析に回します。

最初は一機に三、四体が落とされましたが、しばらくしたら問題なくなるでしょう。でも、どうせならもつと実験しますの。とりあえず量産した相転移トロニウムエンジンに乗っけてみますか。完全再現はできていないので、劣化コピーですぐ暴走しますが自爆させればいいですね。

「月面の汚染や月の崩壊など知ったことじゃありませんの！ 経験値とパーツ置いてきやがれですの！ そう、これこそスパロボですよ！」

精神が一部おかしくなっています、気にしません。おめめグルグルですが、仕方ありません。そういえば確か……ムーン・デュエラーズにはリンクスが居た気がします。リンクス……つまり、まさかのアーマード・コアが参入ですの？

「よくし、ホワイト・グリントとブラック・グリントでも作ってみますか」

動力炉は実験用に相転移トロニウムエンジン。フレームはT-LINKシステムをナノマシンと融合させてチップ化。設計は原作を忠実に再現しますの。天才アーキテクト、アブ・マーシユが設計したのですから間違いありません。武装は突撃型ライフル

とレーザーブレード、レーザーキャノン、分裂型ミサイル。どちらも高機動タイプですが、問題ありません。だって趣味の実験機体ですもの。

「問題はコジマ粒子が……待てよ？ エイフマン教授が黒騎士を手伝ってくれながら進めているGN粒子をコジマ粒子に見立てればできるんじゃないやありませんの？」

考えてみたら結構良さそうですね。スタイリッシュな見た目とも合いますし。アイNSTのコアは私の細胞を作って作り上げれば私の意思で操作できるので私に逆らう事はありません。トロニウムバスターキャノンとはいかないまでもトロニウムライフルぐらいは作ってみましょう。

あつ、生産施設ごと爆発して吹き飛びましたね。自己再生と自己増殖で修復させて……よし、問題ありませんの。さあゆけ、そらゆけ、私達の夢を乗せたコジマ^G粒子^N！

あ、ヴォルフ達も私の細胞から作ったコアを搭載させていきます。どんどん進化してレジセイアのコアを超えるのです。そして、アレス・ガイストへと進化させてやるのです！



「して、外の現状はどうなっておる」

「はい。外は異形の化け物で溢れ返っております。ただ月面である事は間違いありませんでした。しかし、我々が居た空間ではありません。太陽も地球も存在していませんでした」

「ふむ。敵勢力はどうなっておる」

「最初に出て来た化け物はなんの問題もなく討伐できました。ただ、後程騎士機ラフトクランズやクストウエル・ブラキウムのような機体が現れました。そちらも問題なく対処できましたが、次に現れた物はブラックホールが使われており、自爆されるため引くしかありませんでした」

「奴等は物量で攻めてくるのか……これはまずいかもしれん。眠っている騎士達を起こせ。エーセルダが居ない今、戦力が必要だ」

「はっ」

第30話

「地球 トーヤ・シウン 自宅」

母さんが死んでからろくに家に帰ってこないで金だけを振り込んでくる父さん。確かに父さんはアシユアリー・クロイツェル社に働いている。どのような仕事をしているのかは守秘義務というので教えてくれない。ただ、別荘もあるのでお金に不自由した事はない。そんな父さんが火星人に襲われて月から戻ってきた。戻って来るのに一ヶ月以上かかったのはまあいいでしょう。だが、これはどういうことだ？

「父さん……今、なんて言ったの？」

「だから、お前にはこの三人と一緒に暮らしてもらおうと言ったのだ。自己紹介をしなさい」

「はい。カティア・グリニャールと言います。よろしくお願ひいたします」

そう挨拶してきたのは俺よりも年上だと思える少女だ。黒い髪の色に前髪より上の

部分が上がって長い短髪をしている。耳の上に謎の髪飾りがあり、服装は肩と胸元とお腹を出した緑の上着にワンピースに黄色の長い靴下に青いパンプスを着ている。スカートの部分はボタンが四つあり、首元近くにある赤い花びらのような柄が見える。

「フェステニア・ミューズ……よろしくね」

赤色の髪の毛を肩あたりまで伸ばした一番背が低い子だ。目は綺麗な緑色をしていて服装からして活発な印象を受けるが、今は沈んでいるみたいだ。

「わ、私はメルア・メルナ・メイアです……」

金髪に耳の所に編みこみ短髪に見えるが後ろに長い髪の毛が二本、出ている。青い瞳をした少女。服装はセーラー服のような襟に白いベストとベルトタイプのフリルがついたスカートをしている。内気でおっとりした感じだ。

「トーヤ。自己紹介をしなさい」

「トーヤ・シウン。それで、どういう事が改めて説明してくれ」

「先にも言った通り、お前にはこの子達と一緒に過ごしてもらおう」

「なんで？」

「彼女達の両親は私と一緒にアシユアリー・クロイツェル社で働いていた。そう言えばわかるだろう？」

「ああ……」

火星人に両親を殺されたのか。脱出できた人はあまり多くないって聞いたし、そういう事なら父さんが天涯孤独になった友人の娘を引き取るのはわかる。

「でも、なんで俺と一緒に暮らさせるんだよ。三人で一緒に暮らさせたらいいだろう？」

「彼女達三人だけで暮らさせるのは万が一の場合、危ない。最近は何騒だからな。襲われる可能性もある。男手があるだけいいだろう」

「いや、それなら父さんが一緒に住んでやれば……」

「私は再就職先を探さなくてはいけない。家には今まで以上に居る事はできない。それにお前を一人にするのも心配だ」

「今更かよ……」

「あの、迷惑なら私は……」

「私も……」

「うん……」

「行く当ては……ないんだよな？」

「こくと頷く不安そうな三人を見ていたら、もうやる事は決まった。

「わかった。ただし、一緒に暮らすんだから事故が起こっても文句言うなよ。俺だって今まで一人で過ごしていたんだから色々問題がある」

「それは……はい。わかっています」

「大丈夫だよ！　大丈夫！」

「ふ、不安ではありませんが、理解はしていませんから……大丈夫です」

「では後は任せただぞ、トーヤ。お前達が過ごすには充分な金は振り込んでおいたから問題ないはずだ」

「おい。もう行くつもりなのか？」

「ああ。色々と手続きに時間を取った。それとトーヤ。変な夢を見ても絶対に答えず、無視して過ごせ。お前達もだ」

「何を言っているんだ？」

「えつと？」

「夢？」

「どういうことでしょうか？」

「心に留めておけばいい。ではな」

父さんが変な事を言っ出ていったので、俺は三人の子達としばし見つめ合う。どうしようか悩んでいると、くうーという可愛らしい音が響いてきた。

「ご、ごめんなさい……お腹が空いちちゃって……」

「たしか、フェステイアだったか」

「テニアでいいよ。これから一緒に暮らすんだからね！　うん」

「私はメルアでお願いします」

「こつちもカティアで構いません」

「俺もトーヤでいい。それじゃあ、ご飯にするか。言っておくが、家事は分担してもらうからな。特に洗濯とかの問題もあるし」

「もちろんです」

「あたし、自信ないけど大丈夫かな？」

「私もです」

「それなら私が教えますね」

立ち上がってキッチンへと移動し、食べられる物を用意する。といつても乾燥したパスタとレトルトのソースだ。これが一番大量に作れるからな。

「湯を沸かしている間に空いてる部屋に案内する。好きな場所を選んでくれ。掃除とかは手伝うから」

「お願いします」

「はい。ありがとうございます」

「一人部屋とかできるかな？」

「できる」

三人を連れて家の中を案内して部屋を決めてもらう。とりあえず寝る所から作らな

いといけない。部屋を掃除してシーツとかを新しいのに変えないといけない。ああ、買出しも必要だ。これから大変だな。というか、学校は俺と一緒に陣代高校になるのだろうか？

「セルドア エ＝セルダ」

彼女達をトーヤに預けた。これで大丈夫だろう。サイトロンを防ぐ妨害装置を配置してある。感知される事はないだろう。後はグランティードを持ちだせたならば良かったのだが、月から反応は一切ない。帰還すらままならない。

やはり、アインストによって月は偽物へと挿げ替えられた事は明らかだ。これからどうするべきか、しつかりと考えなくてはいけないが、一先ずはアインストのお蔭で時間稼ぎが出来たと考えるべきだろう。だが、何時までも持たない。鍵である玉座機がこちらにあるのだから。

「どちらにしろ、やる事は変わらない。シャナ＝ミア・エテルナ・フューラ皇女殿下が望まれたままに人類との融和をなしとげる……」

その為には玉座機とは行かないまでも私が乗れる機体が必要だ。どこで作るかが問題だが、候補はイスルギ重工、ネルガル・マオインダストリー、最上重工……どれにするべきか。別の方に接触するのもありか。王留美という手もある。いつその事テスラ・ライヒに持ち込んでみるのも手か。

「ネルガル・マオインダストリー社 アルフィミー」

影月での戦闘は一進一退を繰り返していますの。こちらは作り出したアインスト達を即座に転送して月のクレーター周辺に派遣していますが、向こう側も強力な機体を投入してきています。今は互いに潰し合いをしているところですよ。こちらの技術力と操縦技術は戦闘を繰り返す毎にどんどん進化していついていきますので、よほど反則的な兵器や存在が居ない限りは大丈夫ですよ。

まあ、このまま行けばどちらかのあらゆる資源が枯渇するので、資源回収は必須ですよ。しかし、ネルガル・マオインダストリー社を通して地球から持っていくわけにもい

きません。厳密に管理されているので横流しは無理ですの。まあ、金色の闇として活動している時についてに頂戴する資源に関してを送っても問題ありませんの。特にゲシユペンストMK-IIとかもう型落ちですし、回収して素材にしてバージョンアップした状態でアインストにすれば効率はいいですの。

しかし、前線指揮官が足りません。さつさとオルレインを起こして機体を与え、戦線に投入する方がいいですの。でも、問題があります。まず彼女の機体ですの。デューカリオンは壊れていますし、これに代わる機体を用意しないとイケません。デューカリオンのタイプからしてアーマードモジュールみたいな大型タイプがいいのかもしれないです。デストロイでもアレばそちらに乗せるんですが……まあ、大型化した黒騎士はまずいのです。外見からバレルかもしれないしね。

ここは何か……そう、私が好きな機体の一つ。なんちゃってナイチンゲールでも作りましょうか。T—LINKフレームの実験機体としてもいいですしね。ただ別の問題があるんですの。それは自爆する事でどうにか戦線を維持しているという事ですの。それも自爆させているのはブラックホールエンジンや相転移トロニウムエンジンですの。どちらも被害が甚大で巻き込まれるとオルレインも一緒に死んじやいます。流石にそれじゃ問題ありありますの。そもそも相転移トロニウムエンジンなんて安定なんてしないで暴走しまくりですしね。

対策としては安全な所にオルレインを配置して、そこから操る……アレ、なにかそんな シ ス テ ム が あ り ま し た の。 確 か、Omni Dendro Encapsulation SystemTMでした。このシステムのコンセプトは一つの機体が得た敵機の戦闘データを即座に処理、僚機へ伝達し戦闘に直結させることで、相手の戦闘パターンに対し部隊レベルで即座に最適な対応を取ることを可能とするというものであります。ODEシステムを組み込んだ各機はこのコンセプト通りの結果を発揮し、大幅な戦闘能力の向上に成功。特に、行動パターンの先読みにより回避性能は際立って上昇した。但し、情報伝達する間を与えず複数機を一度に撃破可能なマップ兵器は、ODEシステムを運用する上での唯一の弱点とされております。広域ジャミングを展開されると情報伝達と共有に時間がかかりますし、生体パーツを使わないといけない弱点がございます。簡単に言えば人をコアとして機体に乗せているのです。

今やっている事とたいして変わりませんね。人をアインストに置き換えただけで、データのリンクは常にさせていますので一つの機体が得た敵機の戦闘データを即座に処理、僚機へ伝達し戦闘に直結させることで、相手の戦闘パターンに対し部隊レベルで即座に最適な対応を取るといふことはできますの。問題は指揮官だけです。

といつても、指揮官をオルレインにして生体ネットワークに繋がれば何度も死ぬ事に

なってオルレインが廃人になる可能性が高いですし、そもそも今は大事な時期ですの。ここで彼女を使えば計画している内容ができないどころか、主人公が生まれてこない可能性が高いです。それは不味いのですの。

このような理由から普通の人では運用ができませんの。ん〜やつぱりAIを作つて特攻部隊の指揮官としましょう。指揮官という事は部隊を率いるという事で、どうせなら戦艦などに乗せるように作るとして……あ、アズールレーンからとりましょう。名前はグラーフ・ツエツペリン！ 最終的には戦艦のメンタルモデルとして扱えば問題ありませんの。私のアインスト部分の細胞と自己進化・自己増殖・自己再生のナノマシンと合わせて生体コアを作成しますの。後で作る完全義体に入れてあげれば自由に行動できるとしよう。

作つたAIの容姿はふわふわな長い銀髪に赤目の幼女で、黒色で裏地が赤色の軍服を着ている幼い女の子、ツエツペリンちゃんですの。成長すると世界に絶望しそうですが、まあ大丈夫ですの。

「この無理ゲーを一緒に絶望せずに頑張りますの！」

「絶望も憎悪もとんでもない！ 諦めなければ夢は必ず叶うと信じているのだつー！」

モニターに映るツエツペリンちゃんが拳を振り上げて堂々と宣言します。それにほろりときちやいます、私が元凶である事には変わりありませんの。ごめんなさい。

「では、よろしくお願いいたしますの」

「うむ！ 母上は期待して待つておるとよいのだ！ 我が食する……ええい、おやつだけは用意しておくのだぞ！ いいな！」

「もちろんですの♪」

ツエツペリンちゃんがかつそく部隊を率いて手に持った端末で指示を出していきませんが、相手のラフトクランズにボッコボコにされて爆破して戦線を維持しました。

「うえ、暴走した！ え？ 今度は敵の攻撃で誘爆？ うつ、うう……死んだデータを基にして修正して、共有してから再チャレンジなのだ！」

やはりナイチンゲールの開発も大変ですし止めましょう。残念ですが……いや待てよ。ブラック・グリントに追加アーマーをつけたらナイチンゲールみたいになりませんか？ ブラックサレナみたいな感じにすればいいだけです……この方法なら開発するのは三機同時開発よりもそこまで大変じゃありませんね。

よし、決めました。資料回収を優先して現状維持ですの。安定して運用できるまで進化させて改造しなければ話になりませんの。ノーマルアインスト達を宇宙に派遣して資料を回収しましょう。確か、火星と木星は駄目でも土星の開発はまだ進んでいないはずですよ。そちらと冥王星の方にも派遣しましょう。ネルガル・マオインダストリー社の方でもジャンク屋を組織して効率的に回収させますの。

それと金色の闇としてイスルギ重工に潜入も計画しておかないといけませんの。彼等はDCに兵器を売ったりしているので技術協力もしているはずですの。DCの技術があるという事はASRSがあるということであり、私にとつては喉から手が出るほど欲しい技術ですの。後はケンゾウ・コバヤシ博士の所も気になりますわね。T—L—I—N Kシステムをより良く改良できるかもしれないしね。

「ツエツペリンちゃん、私は向こうに戻りますのでおやつと食事はしつかりと送つておきますね。データになりますけど……」

「構わないのだ。だが、できるだけ早く身体を用意して欲しいぞ」

「もちろんわかっていますの。艦装を用意はできませんが、しばらく要らないでしょうしね」

「うむ。しばらくは機体の開発とフューリーとの戦いに専念するのだ」

「よろしく願いますの」

「また来るのだぞ！ 寂しくてな……いや、なんでもないので！」

「ええ、それじゃあまたですの」

ツエツペリンちゃんにこの場を任せて移動しますの。他の子も用意してあげた方がいいかもしれないし、ツエツペリンちゃん以外となるとローンやオーデイン、ピスマルク辺りがいいかもしれません。レットアクシズ 鉄 血から一人用意しましょう。開発をメインにし

てもらい、防衛はツエツペリンちゃんに任せると……やはりビスマルクですね。
どうせならネルガル・マオインダストリー社の私設武装部隊も鉄^{レッドアックス}血としましょう。

第31話

さて、ネルガル・マオインダストリー社の本社（仮）へと戻り、一週間。開発用の高性能AIビスマルクを作りました。ルリちゃんに協力してもらいながら作り、影月のハイパーゲートに送り込んであります。こちらもどちらかというビスマルクちゃんです。産まれたばかりですから仕方がありません。彼女にはツエツペリンちゃんと一緒にあちらでフューリーの技術解析とそれを使った技術の開発及び、こちらで作られた技術などの実証実験を行ってもらいますの。

影月での自爆特攻を含めたTrial and Errorによって技術の問題点が洗い出され、より良い使い易く高性能な技術に精錬されていきますの。その技術がさらに進化していく事もあります。実際に黒騎士の開発にはあちらで大量の失敗^{暴走}を得て数々の命を土地ごと葬りさつたブラックホールエンジン^{は安定に成功しました}。まあ、たつた十七機の犠牲ですが、問題ないでしょう。影月の二割ほど消し飛びましたが、こちらも問題ありませんと。ええ、泣いてないですの！ 例えこのままいけば六割ほど消し飛ぶという演算結果が出て泣きませんの！

『社長。連邦政府安全保障委員会の委員長グライエン・グラスマン様から連絡が入って

おります。どうなさいますか?』

『グライエン・グラスマンですの?』

『はい。確認しましたので間違いありません』

『まさか安全保障委員会の委員長様が直々に連絡をくれるとは思いませんでしたが……わかりましたの。こちらに回してください。通常の特回線をお願いしますの』

『かしこまりました』

ブレインコンピュータを通じての会話を終えて、社長室にあるモニターで通信の回線を開きます。すぐに画面いっぱいには政界でウィザードと呼ばれるタカ派の重鎮政治家グライエン・グラスマンの姿が映し出されました。タカ派といっても私利私欲では行動せず、地球圏の防衛に対する信念も嘘偽りの無い本物であります。また、政治的手腕も優れており、地球圏防衛という最大の目的の為に、ケネス・ギャレットの様にクセのある軍人や、戦争商人であるミッコ・イスルギもうまく利用していかうとする等、柔軟な思考も持ち合わせています。鋼龍戦隊に関しても、その特異性というよりも彼等が対立関係にある者達の庇護下にあるという状況から危険視しているに過ぎず、DC戦争の頃より数多くの戦果を挙げて地球圏を守り抜いてきたその功績自体は高く評価しています。

「はじめましてですの。私はアルフィミイ・マオ・ブラウニングです。わざわざ連邦政府

安全保障委員会の委員長を務めるグライエン・グラスマン様からアポイントメントもなく直接連絡をされるとは驚きましたの」

『この方が効率がいいと思っただけだ。それに君は私と同じ目的を持っていると思うのだが、違うかね?』

「正解ですの。私の目的は人類と地球の守護です。ですから、協力できる事なら協力しますよ。敵は地球の支配を狙う異星人や破壊を齎す存在です。目下の敵は火星とプラントです。異星人が本格的に動く前に地球圏を纏めて更なる技術革新を行わなくては いけません。そのために異星人でも取り込めるべき人材は取り込みますの」

『それは……』

「使えるモノは使いますの。それに地球に異星人の血が混じることは悪い事ではありません。我々人類は人種が違いましたが、混じり合って受け入れてきました。それにこれから人類は宇宙に進出します。異星人を受け入れないと潰される可能性が高いです」

『ふむ。しかし、それは今ではないだろう』

「ええ、そうですの。今は勝利するためには使えるものは使うべきというだけです。例えそれが火星人であろうと、コーディネーターであろうと、アインストであろうと、AIであろうとです」

『その辺りは安全であればいい。それよりも今は地球の危機についてだ』

「例の奇戒島ですか」

『そうだ。そちらの要求は聞いた。月面の利権全てと奇戒島の全てだったな』

「ですの。こちらが危険を犯し、失敗した場合は全ての責を負うのですから当然ではありませんか？」

そもそも就任したばかりの私を指名して依頼してくる事が怪しいですの。裏で何か取引があつたはずですよ。おそらく、イスルギ重工のミッコ・イスルギがマオ・インダストリー社を乗っ取るために色々と策を講じていたのでしょう。色々と施していたのが、リンさんが死んだことでチャンスが訪れたので動き出したのでしょう。私がそれをほぼ全てぶち壊してやりました。リンさんが出し切れなかった膿や全ての情報を精査して犯罪者はしつかりきつちり処分させていただきました。その証拠をもとに裁判を起こして損害賠償をイスルギ重工に求めたりもしております。弁護士の人に投げてあります、まだ交渉の段階ですね。

『奇戒島に関しては問題ない。だが、月面全ては無理だ。そもそもそちらはまだ結果が出ていないのだ。先代がいくら凄かろうと就任したばかりの君ではまだ判断できない。確かに技術者としては優秀みたいだがな』

「まあ、それもそうですわね」

『よつて、こちらから提示するのは奇戒島とムークレイドルを建設していた土地全てだ。』

そこまでなら私の管轄だけでどうにかなる。他も欲しければ買い取るのだな』

それもそうですわね。とりあえず狙うべき場所はアシュアリー・クロイツェル社ということです。

「それならアシュアリー・クロイツェル社の技術と資産を引き継がせてもらいたいのですわね」

『いいだろう。政府が持っている株式を売ってやる』

「ありがとうございますの」

これで月面の一部が追加でゲットです。それにアシュアリー・クロイツェル社の社員も纏めて面倒を見てあげるのもいいかもしれません。

『では、奇戒島の事は早急に頼むぞ』

「了解ですの。すぐにやらせてもらいます」

『では吉報を待っている』

通信が切られたので、直に準備しますの。まず用意するのは試作機の黒騎士です。その為に関発室へと連絡を入れてから移動します。



「イネスさん、ラーダさん、どうですか?」

開発室に入ると、連絡を受けた二人が研究員に指示を出しながら黒騎士を組み立ててくれていますの。

「正直、まだまだ未完成よ」

「大きさも当初の21.7mが約1.5倍の32.4mになってしまいました」

「ここからブラッシュアップして小型化しないといけませんわね」

「ただの試作機ですから問題ありません。技術の実証実験用ですし、最悪重力制御さえできれば問題ありませんの」

「それは技術者としては嫌なのだけれど……そもそも欠陥機なのよね」

「そうですね。人が乗ってまともに扱えない機体になっておりますし……」

「……乗る私がまともでないと言っていますの?」

「その通りでしょう。ねえ、ラーダ」

「重力制御を行うには常に変化する環境データを入力し続けなくてははいけません。マシンのスペックではなくパイロットの演算能力によって力量が変わりますので……イネスさんの言うとおりにか……本当にこれで出るのですか?」

「突入して戦えればいいのです。そこそ入口を開くだけで、後は我が社の部隊を派遣

すればいいだけですしね」

とりあえず、今回の作戦に用意する戦力は突入の為に試作機である黒騎士。そこにゲルトアイゼンハルトペンストMK-III五機とゲシュペンストMK-IV五機の計11機で行こうと思います。それに突入するための足として戦える艦が必要なのですが、我社というかネルガルのメンバーが主だって開発している物をつかいます。

「輸送用の機体はどうなっておりますの？」

「タウゼントフェスラーを用意してあります」

タウゼントフェスラーはマオ・インダストリー社が開発した大気圏外軌道輸送機でした。PTから大型の特機までの整備、輸送を可能とし、汎用性はかなり高いです。そのため地球連邦軍で制式に大気圏外軌道輸送機として採用されています。搭載機の射出力タパルトを持ち、飛行中でも搭載機を迅速に展開させることが可能。積載量は高いですが武装は対空機関砲とホーミングミサイル貧弱です。しかし運動性と装甲が高く、HPの高さも相俟って集中砲火を受けない限り沈み難い。本家スパロボにおけるミデアに相当する存在です。

「5機用意してあるから予備パーツも含めて大丈夫でしょう」

「わかりました。それでパイロットの方ですが、希望者を連れていきますの。構いませんか？」

「その辺はエリナから聞いて頂戴」

「わかりました」

エリナさんに連絡を取ってみると問題ないとの事なので、志願者のパイロットを募る為に任務内容などを書いた情報をブレインコンピュータから登録してあるパイロット全員と会計部に一括送信します。

『社長。費用は問題ありませんが、本日採用面接に来ている二名と会っていただきたいのですが……』

『プロスさんがこのタイミングで言うという事は素晴らしいパイロットなのですね?』

『はい。元軍人で軍を退役してからはテストパイロットを務めていたのですが、会社が先の戦争で破壊されました。その時も戦ったようですが、大怪我を負った状態で救助されました』

『なるほど。テストパイロットになれるほどなら凄腕なのでしょうね』

『ええ、もちろんです。彼女は戦技教官相手の模擬戦で全勝記録を叩き出した凄腕でホワイト・リンクス白・リンクス山の異名を持っておられます』

『リンクス! 欲しいのですの! 是非飼わなくてははいけませんの!』

『社長。その発言はどうかと……』

『ごほん。会います。それでもう一人は何方ですか?』

『A E Uの商社で働いていた方でして……射撃の腕が良かったのでスカウトしました』
『わかりました。どちらも会いますので応接室に向かいますね』

『ありがとうございます。お待ちしております』

可愛い白猫ちゃんなら、しっかりと飼いならしてホワイト・グリントのパイロットにしてあげましょう。首輪付きにして、企業戦士として頑張ってもらいますの。



応接室に入ると、すぐに三人の視線が送られてきました。一人はファイルを持って礼服に身を包んでいるプロスさん。もう一人は身長186cmで茶髪のイケメン男性。彼も礼服ですが、コイツはやばいのです。兄ならソレスタルビーイングのスパイ。弟なら反政府組織カタロンのスパイです。もう一人は銀髪の女性でこちらはかなり怪我をしています。

「お待たせしましたの」

プロスさんと場所を代わり、ソファーに座って改めて二人を見ます。

「こちら、社長のアルフィミイ・マオ・ブラウニングさんです」

「よろしくおねがいますの」

「子供が？」

「家族経営ですもの。まあ、わたくしは養子ですが、間違いなく社長ですの。お二人の自己紹介をお願いできますか？　ここに来た理由もお願いしますね」

「私はライル・デイランデイと申します。A E Uの商社に勤めておりまして……今回はこちらのプロスペクターさんにスカウトされて面接に来ました。来た目的は御社の端末や義体に興味があつたもので、販売に携わる事ができれば人の為になると思つたからです」

「嘘くさいわね」

「そんなことはありません。本心ですとも」

「嘘なんですよね。でも、義体に興味があるのは本当ですの。だって、カタロンとして動いていたら手足の一本や二本、無くなる事なんてざらでしょうし。」

「私はカルヴィナ・クーランジュよ。ここに来たのはまた戦えるようにしてくれるって聞いたからよ」

彼女は銀色の長髪に青緑気味の瞳。整ったモデルのような体系でメリハリがあつてとても綺麗な女性ですの。ただし、今は片目に眼帯が張られ、左手と左足が存在していませんの。それに眼帯の方には火傷の跡も残っていますの。

「それにマオ・インダストリー社なら最新の機体もあるでしょう?」

「もちろんありますの。それを与えるかは実力次第になりますが……」

「なら問題ないわ。私は火星の連中を皆殺しにしてやるの。だからその為の力を寄越しなさい。その代わりなんだってやってやるわ。アリー達を殺したアイツ等を絶対に許さない」

「皆殺しは駄目ですの。気持ちにはわかりませんが、火星人も使える人材は居るのでそこらはちゃんと生かして取り込みます」

「へえ……分かるって言うの?」

「私も先代社長のリンさんを亡くしていますから。彼女ほど大切な方はいませんでしたの……本当に余計な事をしてくれましたの」

「おいおい……」

「それなのに復讐しないっていうの?」

「もちろんしますの♪ 敵対する連中は構いません。排除しちゃってくださいですの。ええ、ええ、きつちりかつちりと地球と人類を脅かす害虫は排除しないといけませんものね」

オルレインの手前、ザーツバルム卿は助けますが、それ以外の連中はその場次第ですの。投降と降伏は認めますが、すぐに止める事はできませんもの。特に高速戦闘をして

いると不可能ですの。

「なるほどね。わかったわ。それで契約しましょう」

「いえ、こちらから出す条件も飲んでいただきますの。それが出来れば貴方達に与えるのは量産機ではなく、本当に最新鋭の試作機を専用機としてプレゼントしますの」

「面白いわね」

「私もですか？」

「はいですの。プロスさん」

「かしこまりました社長」

プロスさんが操作して部屋の防衛システムを起動させます。これにより、壁や扉は全て分厚い防壁で覆われ、部屋の中は一度真っ暗になりましたが、すぐに電気がつきますの。

「さて……」

私は立ち上がって近くにあるデスクから取り出すように見せて二つの首輪を取り出し、一応刀を腰に差して持っておきます。それを二人の前に置きます。

「カルヴィナお姉さんはホワイト・リンクス山猫でしたね」

「そうよ。まさか、私を飼うつもりなの？」

「ええ、そうですの。この首輪をつけてもらいます。この首輪には人体を完全に綺麗に

消滅させる爆弾が入っておりますの」

「待て、それをつけるなんて……本気か！」

「ええ、本気ですの」

「社長？」

「ああ、もちろん拒否はできません。ただ、こちらが提供する機体は本当に色々ややばい技術を使っているので裏切られるのは困るんですの。ええ、本当に。裏切られないにしても暴走されるのも困るので首輪をつけるのは当然でしょう？ 特に実際に火星人を虐殺できる機体を渡すのでやりかねないカルヴィナお姉さんと、反政府組織のカタロン所属、ライル・デイランデイさん。そして貴方の兄は私も襲われたソレスタルビーイングのロックオン・ストラトス。保険はかけるのは当然でしょう？」

私の言葉でプロスさんも驚いていますの。ライルさんは即座に袖に隠したデリンジャーを出してきましたが、その前に私が抜刀して銃を切断しようとしてました。ですが、その前にカルヴィナさんが銃を弾いてくれたので方向をずらして首にあてますの。「カタロンはわかっていましたが、兄の方は掴めていませんでした。社長は素晴らしい耳を持っているようですね」

「ありがとうございます。プロスさんもなかなかですの。ちなみにカタロンだと気付いていたのに連れてきたのは何故ですの？」

「決まっております。一般人としてならお金になるからです」

私と同じ考えのようです。イスルギ重工に近い考えですが、こちらが提供するのはいくまでも一般に販売する義体になりますので、文句は言われません。流石にその対象が指名手配をされていたなら拒否しますしね。

「わかったわかった。降参だ。ほら、その物騒なもんを下げてください」

敬語も止めましたね。完全に私の知っているライルになったようです。

「構いませんよ。私、これでも単身で火星人の揚陸城を落とす程度には強いので、ここにいる全員を瞬殺するぐらい簡単ですもの」

「まあ、この身体じゃどうしようもないのは事実ね」

「新しい身体は全身、ガチの戦闘用を用意しますので安心してくださいですの。私の可愛いリンクスちゃんの為ならお金に糸目はつけませんのでオーダーメイドのハイエンドを作りますの。欲しい機能があったら選んでくださいいね」

「ええ、お願いするわ」

「お前、そんなあっさりでいいのかよ?」

「構わないわ。どうせこの身はあの時に死んだの。コクピットをやられて救助された時にはこんな状態だもの。今更よ」

「そうか。それで俺をどうするつもりだ?」

「こちらに雇われてもらいますよ。その為に来たんでしよう?」

「カタロンの情報は吐かないぞ」

「ええ、必要ありません。調べようと思つたら調べられますしね。私が貴方を懐に入れるのはカタロンよりも兄のニール・デイランデイが所属しているソレスタルビーイングへの対策ですの」

「兄貴がソレスタルビーイングとかいうのに所属しているなんて俺は知らない。兄貴は失踪してから随分と経つからな」

「わかっていますの。貴方に成り代わつてこちらに来るようなら、それを利用するといふだけです。それにパイロットとしての技量も信じていますし、貴方が稼いだお金を何処に流そうが、しっかりと隠蔽さえしてくれていけば問題ありませんの。むしろ、カタロンの子供達や非戦闘員の方などをこちらで引き取つて雇つてもかまいませんよ」

「そいつはありがたいが、いいのか?」

「もちろん、こちらに所属している状態でカタロンへの接触や反政府活動などは常識の範囲でお願いします」

「わかった」

そう言つてライルさんは首輪を自分から嵌めてくれましたの。

「お姉さんは……」

「私、片腕だから嵌められないわ。だから、ご主人様がつけてくれるかしら？」
「わかりましたの」

カルヴィナさんの首に鈴つきの首輪をしつかりとつけました。これで契約は完了ですの。

「とりあえず基本給は100万からスタートさせますね」

「高いわね」

「年じゃないよな？」

「月々ですの」

「ひゅー」

「社長。散財はあまり……」

「プロスさんも試験内容と強化費用を見たら納得しますの。手取りは半分くらいになると思いますしね」

「強化？」

「お二人の身体を魔改造させていただきませう。そうでないと試作機のテストになりませんもの」

カルヴィナさんに渡すホワイト・グリントもライルさんに渡すブラック・グリントもどちらも高速戦闘用の機体なので気持ち悪い速度で戦ってもらいます。実際にACを

やった人はわかるでしょうが、あの変態的な速度を現実で再現しますのでどう考えても生身じゃ無理ですの。

「ちなみにこちらが渡す試作機のスペックデータです」

I F Sで操作して私のブレインコンピュータから二機の戦闘映像を見せます。相手はフューリーですが、仮想の敵として見せることで納得してもらいます。

「マジでこれに乗るのか？」

「ふふ、凄いわね」

「ちなみに無人機による仮想実験ですが、機体性能は上がる事はあっても基本的に落としません。ですので二人を機体に合わせるために改造します。大丈夫です。私と同じナノマシンの比率をかなり上げるだけです。それにこんな事もできますの。例えば肌で銃弾を弾いたり」

「デリンジャーを受け取って、掌に撃ちます。硬化させた弾丸は私の皮膚に命中して跳弾していきませんが、その前に挿んで止めてから無傷なのを見せますの。」

「人間やめてやがるな……」

「ええ、まったくね」

「ですが、これなら火星人やお兄様に勝てますのよ？」

「楽しみね」

「俺はそうでもないが、ここまで来たのなら受け入れてやる」

「ところで社長。この機体について聞いていないのですが？」

「これは私のポケットマネーで作っている機体ですので売り物じゃありません。それにまだ完成していませんので基本的にはゲシュペンストMK-IV^{リッ}かゲシュペンストMK-III^{ナハト}を使ってもらいます。最初からこの機体だと絶対に死ぬますからね」

「作る時は事前に素材の評価額などを教えてください。兵器の個人所有は登録が必要で、すし、固定資産税の関係や脱税になる可能性もありますので……」

「わかりましたの」

ところで使えそうな人材をリストアップしてプロスさんにはスカウトをどんどん頑張ってもらいましょう。とりあえずお二人はIFSが使えるブレインコンピュータを搭載して、カルヴィナさんは壊れている部分を全部作り変えますの。アイオーンの瞳もあの子につける前にカルヴィナさんで試してみしましょう。それで大丈夫なはずですよ。

第32話

ネルガル・マオインダストリー社　ライル・デイランディ

「起きなさいっ！」

女性の叫び声と同時に襲い来る衝撃にカタロンに所属している事がバレて襲撃されたのかと思つて意識が強制的に覚醒させられる。即座に状況を把握するために目を開けると白い天井が見え、少し横に視線をずらすと白いシートが乱れているベッドが少し上にあり、反対側を見ると壁には複数の筒型の培養槽が並べられていた。

「起きたわね？」

俺の腹に置かれている綺麗な足から視線を上にと青い靴と黒目のストッキングが見えた。その瞬間に今度は頭を蹴られる光景が見えたので腕を上げて受け止めに走る。

「ああ、起きたよ姐さん」

「そう。なら、さっさと立ち上がりなさい」

「アンタが落としたんだろうが……」

「別にいいけど、あの子の下着とか見たら殺されるわよ。それともロリコンなの？」

「断じて違う」

足が退けられたので普通に身体を床から起こし、改めてベッドに座ると培養槽の近くで無数のスクリーンを展開して操作してる椅子に座った幼い女の子の姿が見える。銀色の髪の毛を持つ彼女は姐さんの妹……いや、娘に見える——

「うおっ!？」

——そう思ったら、拳が飛んで来るのが視界の一部に映ったので回避する。

「危ないな」

「アンタの行動はゼロが予知しているわよ」

「シヤレになんねえぜ……」

立ち上がったままになってるゼロシステムによって頭痛が襲ってくる。ソイツを頭を押さえながら何があつたのか思いだす。

まあ、簡単に言えば俺は訓練中に気絶しただけだ。俺の身体にUG細胞とかいうナノマシンを注入して作った補助脳、ブレインコンピュータを使った仮想実験の戦闘訓練

だ。

そこでゲシアペンストMK-IVを使いながら姐さんの指導を受けていた。姐さんは前の会社でも教導をしていたみたいで教えるのが上手い。いや、それ以上に俺の成長が異常なだけだろう。

「ライルさん、システムチェックをしてください。バイタルデータに乱れを生まないようにゼロシステムを使いこなしてください」

「無茶言うぜ、ルリちゃん」

妖精のような女の子、ルリちゃんはボスの血の繋がらない妹だという事は聞いている。溺愛しているので手を出したら殺すとも言われた。実際に試しに手を取って甲にキスする振りしたら、「そんな悪い腕は要りませんね」と言われて切り落とされかけた。ルリちゃんに止めてもらわなければ確実に落とされていただろう。

ルリちゃんに説教された社長は事も有るうに「腕の一本や二本、すぐ用意できるから問題ありませんの」と言いやがった。実際に三時間ほどで姐さんの身体は俺と一緒にブレインコンピュータを作り出され、手術の間は遠隔操作義体とかいうのを貸し出されて動いていた。

次の日には姐さんが求めた現時点でネルガル・マオインダストリー社が用意できる最高水準の戦闘用義体を望んだら、本当に用意されたらしい。しかも姐さん……左半身だ

けだったのに右腕も右足も要らんと行ってそちらも変えさせていた。生理とかが戦闘の邪魔になるからと子宮の切除も頼んでいたが、流石に社長達に止められていたな。それでも身体の半分以上は義体になったようだ。俺には真似できない。

「でも、使いこなさないと死んじやいますよ」

「信じられないが、そうなんだよな……」

「機体に喰われるわね。ゲッアップ[↑]ペンストMK-IV[↑]ですらちゃんと扱えていないんだもの。専用機どころか、完全な私達専用のワンオフ機、特機が与えられるのよ。社長からして私達の方を機体に合わせろって言っているんだから、やばいわ」

「何処がホワイト企業だよ。滅茶苦茶ブラック企業じゃねえか……」

「ホワイトなのは一般の方々ですよ。そもそもお姉ちゃんからして、私が知っている活動ログを調べたらほとんどまとまともには寝ていません。一週間で三時間も寝ていたら良い方です」

「倒れないか?」

「倒れるわけじゃない。ほぼ全身をナノマシン化しているのよ。エネルギーの摂取さえしていれば理論上では半年は寝ずに活動できるみたいね」

大概の処理はブレインコンピュータの方でやってくれるから、通常の脳を休ませながらでも動くことはできるって感じらしいが、時間での効率は下がるけれど活動時間が増

えるからトータルはいいみたいだ。

「つと、システムチェックは終わった。問題はないみたいだ」

「わかりました。身体に違和感があったら言つてくださいね。カルヴィナさんですよ」

「わかつているわ。今の所は問題ないけれど、実際に生身で戦闘してみないとわからないわね」

「誤作動する場合もあるので、カルヴィナさんはやった方がいいですね。ライルさんは^{ヴァ}ゲシユ^イペン^スト^リM^ク—^タIVの訓練ですね。お姉ちゃんが帰ってくるまでにある程度扱えないといけません」

「三日後には戦場だし、さっさと仕上げないと不味いわね」

「そうなんだよな……というか、一週間で仕上げるとか無茶苦茶なんだよ……」

「アンタは才能があるし、ブレインコンピュータとIFSがあるからマシな方よ。普通に連邦軍の部隊をソロで壊滅できてるじゃない」

まあ、実際に機体は思った通りに動くし、ゼロシステムによるサポートもあるから連邦軍の一部隊や二部隊ぐらいなら壊滅させる事は可能だった。シミュレーター上はだ
がな。

「兄貴よりはないだろうが、頑張るさ。だが、少しは休憩させてくれ。連絡も取りたいし

な」

「なら、私が生身での戦闘訓練をしてくるから、それが終わるまでね。今から三時間後、1400には全てを終えておきなさい」

「了解。ルリちゃん、連絡はしてもいいか?」

「機密情報を洩らさなければ構いません。会話のログは取られるという事を覚えておいてくださいね」

「わかった」

二人と別れてから部屋に戻り、通信端末でリーダーであるクラウド・グランドを呼び出す。すぐにクラウドは出てきてくれた。

『ジーンー、無事か?』

「無事とは言えないな。バレてたわ」

『だが、連絡してきたという事は問題はないのか?』

「ああ。社長は俺が働いて得た金銭に関しては好きにしていってよ。それと俺がここで働く限り、カタロンの構成員と関係ないとなった人達は雇って匿ってくれそうだし」

『なるほど。家族は縁を切れば受け入れてくれると』

「ああ。残念ながら機体の援助はできないが、義体に関しては一般の客として普通に売ってくれるみたいだから止める時は顔も身体もほぼ変えてしまえって事だろうよ」

『そうか。最良とは言わないが、十分な成果だな。彼女の提案に乗ったのは良かったか』
俺がこの会社に来たのはカタロンに接触してきた女からの依頼だ。ネルガル・マオインダストリー社の技術情報や人材の情報を手に入れてきたら代わりにパーソナルルーパーやアーマードモジュールを弾薬などと一緒に融通してくれるという話を受けたからだ。

スカウトをしているプロスさんの目に止まるようなやり方も用意されていて全てが彼女の掌だと思ったのだが、どうやらプロスさんは最初から知っていてあえて乗ってきたのだと思える。特に社長がヤバすぎるしな。

「そうとも言えん。俺は首輪をつけられた。裏切る事はできない」

『それは……』

「だから、俺は抜ける。実際に会ってわかったが、アイツは化け物だ。ビアン・ゾルダークと同類か、それ以上に狂っている可能性が高い。敵と判断したら容赦なく殺しに来るぞ」

社長は数人じゃ利かないぐらいの人間を殺してやがる。俺を切ろうとした時は一切の躊躇がなかった。可愛い外見と明るくおちやらけた性格だが、本質は別だ。俺達を実験動物か何かの様に見ている可能性がかなり高い。

『彼女から支援を得られるのならばかなり助かったからそちらに行ってもらったのだが

……』

「社長はまだわからないが、あの女は完全な死の商人だ。関わるべきではないぞ、お蔭で俺の人生は完全に変わってしまった。これから飼われた山猫リンクスにされちまったからな」

『すまん』

「いやいいさ。アレの事は許せなかったただけだしな」

地球連邦政府と軍の腐敗はどんどん進んでいる。特に地方の方は酷いという一言に尽きる。賄賂は当たり前で女性を拉致したり、人を殺したりしている奴が権力で平気で逃れられている。そもそもまともに生きられないような賃金で雇われ、無茶な労働をさせられ、家族を売るしかない者達までいるのだ。

俺はその現状を知っていたが動かなかった。だが、付き合っている彼女が拉致され、無残な姿で発見されたのを知ってカタロンに入った。

カタロンは旧軍関係者や連邦非加盟国の政治家、難民の他にもジャーナリストなど多岐に及ぶメンバーで構成されている。

カタロンの戦力自体は正規軍から流出した機体を運用しているが、連邦軍の新型には敵わない。自分で使ってみてわかったが、連邦軍で広く量産されているゲシユペンストMK-IIと次期量産機のゲシユペンストMK-IIIとゲシユペンストMK-IVは完全の別物だ。俺達が扱っている機体だったら、カタロンの戦力なんて数分で殲滅させられる

だろう。

『まあ、お前が抜ける事は了解した。それにここ数日、基地や役所の方で何かがあったみたいで騒がしい』

「大丈夫なのか？」

『ああ。何故か兵士達の姿もほとんど見えないしな』

「気をつけるだけ気をつけてくれよ」

『わかっている。そちらも気をつけてな。そちらに連れていくメンバーを選別したらまた連絡する』

「わかった。じゃあな」

『ああ、また』

通話を終えてから煙草を一本吸う。吸いながらゆっくりとした後、仮眠を取る。時間になって戻ると部屋にはちよつと信じられない光景があった。

「ルリちゃんルリちゃん！」

「よしよし……」

社長が座っているルリちゃんに抱き着いて胸に顔を埋めているのだ。その状態でルリちゃんが社長の頭を撫でていた。

「お姉ちゃんが甘えてくるなんて、また何か有ったのですか？」

「聞いてくださいですの！ アイツらつ、性懲りも無く D C 残党と組んで人体実験をしてやがりましたの！」

「それでどうしたの？」

「もちろん、何時ものようにしてきましたの。ですので、後の処理をお願いしますね」

「はい。任せてください。それよりも今回は助けられたのですか？」

「無理でしたの。玩具にされて化学兵器の実験台にされてしまいましたからね。これが開発されていた神経系の毒ガスですの。情報を調べた限りでは既にDC残党に実物が渡っていたので解毒薬の方も研究して作らないといけませんの」

「お姉ちゃん……研究はできません。もう人手が足りませんから……」

「問題ありませんの。私の身体に取り込んでワクチンと血清を作り出しましたから。後はこれを複製して……おや？」

社長がこちらに振り返ったので、手を上げてから中に入る。すぐに社長はルリちゃんから離れてニコニコした表情でこちらを見詰めてくる。すぐに机の上に置かれていた紙袋を取り、中身を取り出してルリちゃんの口へと押し付けた。ルリちゃんもそれを食べて少し頬を緩ませている。

「ライルさん、訓練は順調ですの？」

袋の中から取り出して差し出された物は魚の形をしていて、それを俺にも渡してき

た。毒じゃないだろうし、食べてみると中から甘い何かが出てきた。断面を見ると黒い物つぶつぶが潰された状態で入っていた。

「訓練は順調だが、これは？」

「鯛焼きという食べ物ですの。ちよつとしたお土産ですのよ。ちなみに手作りですので味わつて食べるおいしいですの」

「手作りなのにお土産？」

「作つて持つて行つたら、食べる前に別の物でお腹が**いっばいになりました**の。ですから、お土産ですの」

「そうか。ありがたく」

何を食べたのかは聞かない方がいいだろう。先程の会話はかなり物騒だったしな。社長も追求はしてこないし、このままでいいだろう。社長の方も鯛焼きとかいうのを食べながら作業を شدした。

「ん〜記録を確認しましたが、基礎訓練はこれぐらいで構いません。後は連携訓練ですね」

「連携か」

「カルヴィナさんとライルさんが組むのですか？」

「とりあえずはカルヴィナさんにライルさんのサポートをお願いしますの。私は黒騎士

「ちゃんの性能テストで忙しいでしょうしね」

「私はお留守番ですか？」

「はいですの。ルリちゃんはこちらの守りをお願いします。イスルギ重工のスパイヤソレスタルビーイングなどが何かを仕掛けてくるかもしれないしね」

「わかりました。警戒しておきます」

話をしていると、部屋に姐さんが入ってきた。姐さんの姿はかなりボロボロだ。大事な部分は隠れているが、服が破れて露出が多くなっている。だから、上着を脱いで姐さんの方へ渡しておく。

「別にいいのだけど……」

「俺の目に毒なんですね。それに姐さん、殴ってくるだろ」

「……ありがたく借りておくわ」

「そうしてくれ」

「カルヴィナさんも食べますか？」

「頂くわ。それで戦闘訓練なんだけど……もつと強いのは居ないの？」

「居ませんの。いえ、私ぐらいですか。ただ、私も忙しいので……」

「確かにそうよね。わかったわ。それならライルを鍛えて時間を潰すわ」

「止めてくれ……」

「連携訓練を行うのでこのプログラムをやっておいてください。頑張つて生き残つてくださいね」

「連携なんて必要ないわ」

「相手は火星騎士ですの。あの戦いで収集したデータを使つてありますが、連携しないと死にますの。いいですか、今は二人で一人とまではいかないまでも戦闘のパートナーとして、背中を預け合う仲間として見てあげてください。それに一人の力なら限界があります、皆で力を合わせればより多くの火星騎士を殺せますの」

「……仕方ないわね。やるわよ、ライル」

「了解、姐さん」

複数あるベッドのうち、一つに寝転がってブレインコンピュータのシミュレーターを起動する。隣のベッドに姐さんも寝転がって同じようにしていく。

少しすると視界がブラックアウトとして、俺はコクピットの中に移動していた。コクピットの中にある全天モニターの一部にミッションが表示されていく。内容は単純。生き残れ。ただそれだけだ。

『相手は火星騎士のアルギュレという機体みたいね。社長が捕らえたらしいわ』

「なら、勝てるか？」

『ちなみに社長とルリは二人で揚陸城を落としているわよ』

「無理だな」

『幸い、これはシミュレーターなんだから全力で挑んで自らの腕を進化させなさい』
「了解」

相手の機体から通信が入ってきた。相手は厳つい男性のようだ。

『推して参る。抜刀ッ！』

極大のプラズマカッターのような物を持ちながら突撃してくる奴との戦いが始まった。結果は俺と姐さんは何度も奴に殺された。何度も何度も挑戦し、次第に連携も取れたのに勝てない。こちらの攻撃は全てプラズマカッター……ビームサーベルという物で切断される。

一度、社長が勝った時の情報を聞いたが無茶苦茶な機動と速度で相手を翻弄し、相手の腕を掴んで胸の装備でコクピットの外装を削って最後は生身で突入とか阿呆な事をしていた。

「これもナノマシンのちよつとした応用ですの」

そう言っていたが、姐さんもかなり引いていた。というか、実際にそのデータで戦闘を体験させてもらったが……普通に吐いてブラックアウトした。あんなGに耐えられるか！ ほぼ半分以上を改造した姐さんでも俺と同じ状況になってたし、無理だ。社長曰く、ナノマシンが俺達に適応して進化したら次第に慣れるようになるとの事だが、

ちよつと信じられない。ルリちゃんは顔を青くしていたが、頷いていたので事実だろう。

「実際問題。これぐらいの速度に慣れないとどちらのグリントも扱いきれませんの」

「……今は私達の方法を見つけるわよ。これ、参考にならないわ」

「だな。ちなみに社長と姐さん、戦えばどっちが勝つんだ？」

「私が負けますの。正直、私の腕はエースクラスまでまだ上がっていませんもの。ヴァングレイで勝てたのは相手がこちらの速度に対応する前に倒せたのが大きいですね」

「つまり、機体性能で勝ったというわけね。なら、社長も一緒に鍛える？」

「いいですね。是非やりますの！ お願ひします先生！」

「いいわ。しっかりと教えてあげる」

「うえ……」

社長も含めた三人でひたすらシミュレーターをやっていく。だが、それでもアルギュレに勝てない。黒騎士ではヴァングレイのように戦えないみたいだ。そもそも二人乗りじゃないし、出せる速度も全然違うのだし仕方がないだろう。社長曰く抜刀おじさんは本当に強かった。

こんな感じで訓練ばかりしていると、実機での訓練が加わり、模擬戦をしてついに本番の日になってしまった。果たして俺は生きて帰れるのだろうか？

第33話

【奇戒島近郊 タウゼントフェスラー】

準備が全て整ったので、黒騎士とゲシユペンストMK―ⅢとゲシユペンストMK―Ⅳを六機ずつの十二機を用意しました。どれも安定化させる事に成功したブラックホルエンジンを搭載したエース仕様の高性能機体となっております。制御をサポート用のAIが行うことで安全に扱えるようになっております。ちなみに二機増えたのはカールヴィナさんとライルさんの機体です。合計十三機の機体を乗せたタウゼントフェスラー五機は順調に進んでおります。

「さて、もうまもなく突入予定時間になりますが、準備はよろしいのですか？」

私は席に横並びに配置された座席に座っている各々方やモニターに写っている方達を見ます。カールヴィナさん達、ベテランの方々には堂々としていますが、ライルさんは不安そうですね。それと地球連邦軍の方から見届け役と保険として送られてきた女性二人の士官さんの一人は楽しそうにこちらを見ています。もう一人は不安そうですね。

お名前は確か、グレンファルコンの隊長を務めるスカレット・ヒビキさんと同部隊所属の技官由木翼さんでしたね。彼等は地球連邦軍の軍服を着用しています。

私達の方はナノマシン技術と衝撃への耐性を上げるためにジェルを仕込んである戦闘用の表が黒色の生地、裏が白色の生地になっているジャケットを着ております。こちらは衝撃を受けたらナノマシンが分子構造を変更させてヘラスと同じシステムで硬化し、生地に仕込まれているジェルが衝撃を吸収してくれます。基本的な性能としては銃弾は問題なく防ぎます。対物ライフルでちよつと吹き飛ばされる程度です。ただし、ビーム兵器は勘弁です。アレは防げませんので回避推奨ですね。後は首にかけている特殊なマスクです。こちらは酸素を供給したり、毒を分解して無害にするシステムが組み込まれております。UG細胞を使った地球浄化システムのちよつとした応用です。ちなみに私は臍出しの、胸と少し下だけを隠すシャツと短パンを履いておりますの。

「問題ない」

「はい、大丈夫です……」

「まあ、貴女達はあくまでも私達の見届け役ですので、出番はないでしょう」

「そう願っているよ」

「あの、あなたみたいな子供が部隊の指揮を……?」

「まあ、私がトップですし、安全に突入するには私の機体でしか無理ですの。ちなみに命令だけ出すので皆さんは好きに暴れてください」

私の言葉に全員が驚いた表情をしますが、構いません。

「基本的にここに居るのは厳しい選考試験を突破した優秀なパイロットだけですの。私が拙い指揮をするより独自に動いてもらった方がいいですの。ただし、命令は聞いていただきますし、連携は大前提だと思ってください」

「ある程度の裁量は私達次第って事ね」

カルヴィナさんの言う通り、皆さんは好き勝手に連携しながら戦った方が戦果は大きくなるでしょう。大まかな命令だけ与えておけばいいはずですよ。まあ、烏合の衆と云えばそれまでなので指揮を覚えるか、指揮官を用意しないとイケませんね。戦術予報士でしたか、今だけは欲しいですの。ルリちゃんが成長すれば必要はありませんし、その教育もルリちゃんやラピスちゃんに施してはいますので指揮官は問題なくなる予定ではありますの。

「臨機応変に頑張りますの。というか、中の情報なんてないのでどうしようもありませんの。ですので、最初は私が道を開いたらそこから突入し、空中でパーソナルトルーパー隊が出撃。降下地点の安全確保をお願いします。まあ、上空からゲシューペンストMK-IVの一齐射撃で蹴散らしてくださいな。同じターゲットを狙わ

ないようにブレインコンピュータのリンクシステムだけは必ず使ってください。無駄なく迅速に対応するのが一番ですもの」

「確かにそうね。それでゲシユペンストMK―IIIアルトアイゼン・ナハトで残敵を掃討して安全を確保というわけね」

「そうですね。それが第一段階となります。第二段階として情報収集を行い、第三段階で各プラントの停止と重力炉の停止を行います。まあ、私から出す命令は見敵必殺オーダーサイチンドテストロイですの。私達の邪魔をする者は排除してください。ただし、施設や地表へのダメージは出来る限り控えるようお願いしますの。これからここを拠点にする予定なので、破壊しすぎると駄目ですからね」

「了解よ」

「気をつける」

「では皆様。生きて帰るために頑張りましょう。死んだらお仕置きですからね。死ななければ手足がなくなろうが、臓器がなくなろうが、新しい身体を用意してあげますので死力を尽くして生き残り、任務を達成してください。でも、この任務に失敗すると地球が崩壊しますので死んでも達成してくださいですの☆」

「矛盾しているぞ」

「どちらも達成するようにしてくださいね♪」

「ヤバイわね」

ちなみに死んだら私の中で永遠に戦う力となってもらいますの。ずっと、ずっと一緒ですよ……

「っ」

「なんかゾクつときたっ！」

「それはそうと生きて帰ったらボーナスを出しますし、死んでも遺族の方には保険などがおりますから安心してください。当社はちゃんと責任を持ってお世話させていただきますの」

「本音は？」

「ローン残ってる間に死にやがらないようお願いしますの☆」

「だよな！」

「だと思った！」

「貴方達に初期投資をいくらしたと思ってるのですか！ これは当然ですよ！」

実際、一人に億単位から数千万単位の投資として義体は与えているので普通に大損になります。まあ、ナノマシンで作ってる部分もあるので売値はボツタクリですよ！

「つと、時間ですよ。各自、機体に搭乗して待機をお願いします。あ、第一種戦闘配備をしておくように」

「「了解」」

無事に奇戒島上空に到着しましたので、ヒビキさんと由木さんに挨拶をしてから格納庫に移動し、黒騎士に乗り込みます。正直、ルリちゃんが居ないのは凄く、すくごく不安ですがやるしかありませんの。

システムチェックをして、問題ないのを確認してからカタパルトに足を乗せて体勢を整えます。機体のオペレーターに連絡すればすぐに答えてくれます。

『全システムオールグリーンです。どうかお気をつけて。発進どうぞ』
「アルフィミイ。ゲシユペンストMK-IV・S。行きますの」

カタパルトによって開けられた入口から素早く射出されます。上空に放りだされたので即座にテスラ・ドライブで空中に浮遊し、続いて観測用の機体をタウゼントフェスラーから射出してもらいますの。こちらはT-LINKシステムで動かしているビット型ですの。

「ふむ」

ビット型観測装置から送られてくる無数のデータが全天モニターに表示されますの。そのデータを瞬時に解析して重力制御装置、グラビティ・コントロールを発動。両手と両足。それに胴体に仕込まれた装置によって重力フィールドを五隻のタウゼントフェスラーを包み込むように展開しますの。

「こちらアルフィミイ。フィールドの展開が終了しました。これより突入を開始しますの。全艦は私の行動に合わせて降下開始してください」

『『了解』』^ヤ

重力カーテンを打ち消すように調整した重力フィールドによって影響を遮断して、五隻のタウゼントフェスラーと共にゆっくりと降りていきます。

このまま上手くいけばいいのですが、そういうわけにもいきません。重力カーテンは数値の変動や重力異常によっておきた乱気流などがあるので、それら全てを観測して計算し、グラビティ・コントロールシステムを微調整して打ち消していかなくてはなりません。正直、UG細胞を使ったナノマシンで身体のほとんどを構成している私と同じような構成をしている黒騎士でも処理能力が足りなくなってきましたの。

「くうくシユウ・シラカワ博士は本当に正真正銘の化け物ですの……」

たった五隻のタウゼントフェスラーを守りながら降下しているだけなのに処理落ちしかけですの。でも、シユウ・シラカワ博士なら無数のワームホールを開き、どうなるかなど全てを瞬時に演算してしまえるのでしょね。重力の魔神グランゾンはまだまだ遠いのですの。

【奇戒島 重力カーテン 由木翼】

重力カーテンに突入した機体はかなり揺れていて、とても怖い。そもそも私はあくまでも技官であり、戦場で戦う武官じゃない。なのに重力炉に関する知識があるからと抜擢されてしまった。

それも本来は私達とグレンファルコンとデスカプリース隊の二つだけで作戦を決行するはずでした。それを上が変更して民間企業であるマオ・インダストリー社……今はネルガル・マオインダストリー社か。そのネルガル・マオインダストリー社の社長と私設部隊が担当する事になりました。何があつたのかをヒビキさんに聞くと、どうやら地球連邦軍の武器を製造しているイスルギ重工から推薦があつたらしいのです。

でも、ライバルのネルガル・マオインダストリー社を推薦するなんておかしいですし、ましてや社長に就任したばかりの幼い女の子が率いているんです。失敗する可能性はとても高いと思えるのに……

「本当に大丈夫なの……？」

「さあね。イスルギ重工の思惑としては目の上の瘤をさつさと排除したいんだろうよ」

「それって……彼女を合法的に抹殺するために仕込んだって事ですか？」

「他になんか仕掛けてそうだけど、証拠はないわよ」

「うわあ……」

巻き込まれるこっちの身にもなって欲しい。それに失敗しても修正が効くようにしているんでしようけれど、無理なら地球その物が崩壊するって言うのに……正気なの？

まあ、どうにかできるって自信があるみたいだけれど……

『重力カーテンの突破に成功しました……っ!? タウゼントフェスラーはミサイルを地表に向けて発射! 同時に全機、発艦してくださいですの!』

「どうやら、敵が現れたみたいだな」

「落ちませんか?」

「大丈夫だろ。見たところ新型機が満載だ」

「確かに……」

正式採用されているゲシユ^{アル}ペンス^トMK^{アイゼン}Ⅲ^{ナハト}だけでなく、次の量産機として出されて選考試験を落ちたゲシユ^{ヴァ}ペンス^イMK^{リッ}Ⅳ^{ター}の改良機みたいなのが積みまれているを見ました。

「心配ならコクピットの方へ行ってみるか?」

「そうですね。行ってみましょう」

お手並みを拝見しましょう。一応、脱出する準備だけは整えておいた方がいいわね。

【奇戒島 ライル・デイランデイ】

「ライル・デイランデイ。ゲッシュペンストMK―IV出るぜー！」

タウゼントフェスラーから飛び出すと、そこは戦場の上空だった。一応、ミサイルである程度は排除しようだが、こちらに向けて対空迎撃が行われている。

『全機へ。黒騎士はオーバードによるシステムエラーで戦闘ができないため、タウゼントフェスラーの近くで待機します。後はお任せしますの』

『了解』

流石に試作機で五隻を守ったのは無茶だったようだ。そうになると当初の予定通りに上陸地点を確保しないとイケない。

「姐さん」

『わかってるわ。予定通り、まずはゲッシュペンストMK―IVの火力で叩き潰しなさい』
「おうー！」

他のゲッシュペンストMK―IVと一緒にオクスタン・ランチャーEの引き金を引く。黒いビーム、グラビティブラストが放たれて地上で暴れている機体を焼き払う。高高度からの一方的な攻撃だ。だが、俺の攻撃は外れる事が多い。それでもゼロの見せる未来と

現実を認識しながら撃つ事でなんとか命中させていく。

「くそつ、やつぱりまだ上手くはできねえな……」

『まあ、初の実戦にしては上出来よ』

「姐さん……」

『粗方掃討は終わったのだから、次は私達が行くわ。ゲシュペンストMK-IVは援護をお願い！』

そう言つてグラビティフィールドを展開しながら降下していく姐さん達、ゲシュペンストMK-III組。残された俺達はタウゼントフェスラーを守りながら援護射撃を行つていく。

姐さん達は空中で肩に装備されているレイヤード・クレイモアを放ち面での制圧を行つた。そのまま着地すると同時に近くの機体をリボルビング・ブレイカーで貫き、五連チエーンガンを放つて周りを殲滅していく。貫いた機体を盾にしながら別の機体へとどんどん移動していく。あちらの攻撃はほとんどスラスタなどで回避し、容赦なくコクピットを破壊していった。

俺も援護射撃をするが、姐さん達が殲滅する方が早い。レベルが違いすぎた。やはり、一週間程度ではまだまだということだろうな。

『上で呆けているのなら貴方も降りてきなさい。アンタは近接射撃の方が向いているん

だから』

「スパルタだな、おい！」

俺も地上に降りてオクスタンランチャー・Bを使い、近距離から敵の装甲を撃ち貫く。相手が爪を振り下ろしてくるが、見えているので機体を微かに動かして回避し、ネオ・プラズマカッターでコクピットを破壊する。即座にその場を離れて姐さんの背後を狙っている機体をオクスタンランチャー・Eで撃ち貫く。逆に姐さんは俺の背後に接近してきた奴を始末してくれる。

背中合わせに互いに得意な距離で戦闘を行う。接近した機体は姐さんが始末し、遠くから攻撃してくる機体は俺が始末する。その場で常に立ち位置を変えながら輪舞を行うように戦っていくわけだが、たまにグラビティブラストが飛んでくるので、グラビティフィールドで防ぐ。

『馬鹿野郎！ 常に味方の位置に気をつけなさい！』

『すいやせん！』

『それと混戦でグラビティブラストは味方が居る場合は禁止よ。実弾の方で対処しなさい』

似たような感じで何処も戦っているのでこちらに攻撃が飛んで来る場合もある。威力が高過ぎるのだ。敵の機体をあっさりと貫いていきやがるしな。

「火力過多な上にじやじや馬とか、大変なんだが……」

『火力不足よりはマシよ。火星の連中にはゲシユペンストMK―IIの攻撃はろくに効果
がなかったんだから……』

「確かに、そう考えるとましかもな！」

左腕の三連装ビームキャノンを放ちながら、片手で持ったオクスタンランチャー・Eを放つ。オクスタンランチャー・Eを放ちながら動かすことで敵を纏めて消し飛ばした。

『こちらリンクス01。社長、敵部隊の掃討を完了したわ』

『わかりましたの。では降下を開始しま……あは♪』

いきなり社長が笑ったかと言うと黒騎士が空から降ってきた。その先を見ると、そちらが爆発して近くに居たゲシユペンストMK―IIIが吹き飛ばされ、ゲシユペンストMK―IVが何かに顔を捕まれて地面へと叩き込まれる。

「なんだ……?」

『動け! 死ぬわよ!』

「っ!」

姐さんの声で即座に離れながら、オクスタンランチャー・Eを放つ。だが、相手の緑の機体はビームの布のような物で即座に移動して回避した。そこに社長が突貫してい

く。正直、無茶と思うのだが、こちらが止める暇もない。

『流派！ 東方不敗は！』

そしてそのまま拳を突き出しながら、オープンチャンネルで叫び出した。

『むっ……王者の風よ！』

『全新！』

『系裂！』

互いに猛烈なラッシュを繰り返していくが、社長の黒騎士はどんどん装甲が剥がれていく。それでも気にせず、楽しそうに互いの攻撃を弾いていく。

『天破侠乱！』

黒騎士の両腕が崩壊したと思ったら、今度は宙に浮かびながら足で対応しだした。

『見よ！ 東方は、赤く、燃えている（ですの）！』

黒騎士の方は完全に手足が粉碎されたのだが、胴体にある重力制御装置で宙に浮いている。

『あの馬鹿娘っ！』

姐さんが突撃しようとした瞬間、社長本人から停止命令が出た。本人も機体を降ろしてハッチから生身で出て来た。相手側も混乱しているようで、そのまま立ち尽くした後、あちらも外に出て来た。俺達も一応、攻撃は止めて武器を仕舞って待機する。

【奇戒島 降下地点 アルフィミー】

「ようやく見つけましたの。東方不敗マスターアジア！」

Gガンダムがこの世界に関わっていると知ってから、とても探しましたの。この方こそ最強の格闘家にして教師として、共に地球を守る同胞として素晴らしい方ですの。

「ふむ。先程の掛け声を知っている者からして儂の知り合いかと思つたが、違ふな。名を名乗れ！」

「アルフィミー・M・ブロウニングですの。是非、弟子入りさせてください！ 色々と調べて探しておりましたの！」

「なるほど、弟子入り希望か。しかし、儂には既に弟子がおる」

「あ、戦つて頂ければ勝手に覚えますの」

「ほう」

「まあ、それは置いておきまして……我社の武術顧問にもなつて頂きたいです。報酬は師匠の身体の治療と地球の再生。それでどうでしょうか？」

「断る！」

「何故ですの！ 条件はかなり良いはずですの！」

「貴様が知り過ぎているからよ！ 儂の目的も身体の事も弟子にすら話してはおらんわ！」

そう言って接近してきた師匠は殴りかかってくる。私はそれに対応して腕を弾く。すかさず反撃しようとしたら、いつの間にかもう片方の手で弾きあげられていたので、拳が迫ります。そちらをそのまま受けます。戦術ジャケットによってダメージはありませんので全力で蹴り返しますの。

「ぬっ！」

東方不敗マスターアジアは飛び退りましたが、そのまま地面に蹴りを振り下ろすと周りが陥没しました。こちらもナノマシンで硬化化しているから反動のダメージは無しですの。

「なるほど。少しはやるようじゃな」

「身体能力にはちよつと自信がありますの」

「ふむ。ならばコレを防いで見せよ！ ちよきゆうはわうちりんだん 超級霸王日輪弾！」

掌から放たれる気という非科学的な高熱気弾。ガンダムごと消滅させるようなヤバイ熱量を持った一撃が迫ってきましたの。

「やってやりますの!」

「いや、無茶だろ」

「無理でしょ」

外野が五月蠅いですが、全力で刀を構えます。

「抜刀!」

刀を引き抜いて気弾を斬りにかかりますが、コーティングしたナノマシンごと蒸発させられ、即座に刀身が無くなったのです!

「やっぱり無理ですの!」

鳶を出して近場の岩に巻き付かせて引つ張る事で直撃を避けます。ですが、完全に回避できずに右腕を持っていかれました。しかも傷口が焼かれているので再生はしません。故にもう片方の手を刃にかえて自ら切断して血液を放出し、そこから発光させて触手を出して腕を形成。ナノマシンで表面をコーティングして再生完了ですの。

「マジかよ……」

「あんな事までできるの?」

「これもナノマシンのちよつとした応用ですの」

嘘は言っていないませんとも。しかし、真面目に相手をするのは無理ですの。師匠の方は私をジツと見詰めてから、手をコイコイとやってくるので普段の戦闘でいきますの。い

や、やっぱりバレると困るのでできませんから、格闘戦ですね。

「チエリオツ！」

「チエストではないのか？」

殴りつけた腕を光る掌で作った手刀で切り落とされ、もう片方の手が貫き手で喉を狙ってきます。それを後ろに倒れることで回避しながら、念動力を使って蹴りを放ちますが、膝で上に叩きあげられて両手で挟んでこようとします。そこを腹から無数のドリル触手を出してカウンターを狙いますが――

「フンツ！」

――掛け声の衝撃だけで吹き飛ばされました。あり得ません。ええ、あり得ませんの！

「絶対に人間じゃありませんの！」

「お主に言われたくはないの」

「まったくだ」

「そうね」

もう本当に酷いのです。味方がいません。いえ、自分で言うのもなんですが、人間の領域を軽く超えていますけど、心は人間ですの。

「というか、地球と人類を守るために協力していただけませんか？」

「断ると言ったぞ」

「ですが、侵略者が地球を狙って……」

「くどいわつ！」

「っ!？」

嫌な予感がしてその場を離れます。すると私が先程まで居た場所が完膚なきまでに師匠によって破壊されました。

「儂は貴様の敵だ！　そもそも儂が守るモノに人類を含めておらん！　人類など病原菌である！　故に滅びるなら滅びてしまえっ！」

「ふっざけんなあつ！　絶対に認めませんの！」

「ならば力で以て儂に認めさせてみせよっ！」

「やってやりますのツ！　おらあつ！」

殴りかかれば逆にクロスカウンターで顔面を思いつきり殴られて吹き飛ばされ、地面をゴロゴゴ転がりながら回転を利用して立ち上がり、口の中の血を吐き出すと歯も取れてました。すぐに再生するので放置で構いません。

「ふーっ、ふーっ……」

このまま行けば東方不敗マスターアジアはデビルガンダムルートに行きます。デビルガンダム自体は防いでいても、この世界にはアインストも居ます。師匠ほどアインス

トと適合できる人も居ないでしょう。故にお母様に目を付けられた私が詰みに近い状況になります。お母様と東方不敗マスターアジアの両方を人を守りながら戦わないといけないのですから、正直言って無理くさいですよ。

なら、ここで殺すべきですの。東方不敗マスターアジアの動きは常に録画してブレインコンピュータでの解析を行っていますが、ゼロシステムを軽く超えてくるこの人には勝てません。動きを模倣し、確実に技術を盗み取るしかありません。

「ふっ、ようやく殺る気になったか。それで良い。儂を楽しませろっ！」
「後悔させてやりますのおおっ！」

顔やお腹などの女の子に大切な場所を戦術ジャケットの上から許容量を超えた衝撃を叩き込み、更には灼熱まで与えて私の服を剥ぎ取っていきます。こちらもカウンターを放ちますが、全体的確に対処されて殴られ続けます。アルフィミイはサンドバックでしたの。ちよつとした反抗で殴られる場所を剣山ドリルにしてやったら、その場所を避けて殴られて吹き飛ばされ、空中から降りられないように蹴られていくので、空中から迎撃しますの。

「援護は要るかしら？」

「必要ありませんの。これは男の意地ですの」

「いや、アンタ女でしょう」

せめて一発入れないとやってらんないですの。自己進化と模倣をどんどん加速させて対応していくと、東方不敗マスターアジアも攻撃の速度や威力を段階的にあげてきますの。

「ぬるい！ ぬるすぎるぞ！ その程度で流派東方不敗を真似ようなど片腹痛いわつ！」

何度も地面をバウンドしながら、岩山に激突して止まりました。そこから出ようとすると、いつの間にか近付いてきた東方不敗マスターアジアの乱打に岩山に埋め込まれ、そのまま反対側まで突き抜けてトンネルを作られました。戦術ジャケットに穴が空き、脇腹を貫通されて痛みが襲い掛かってきます。

「姐さん！」

「わかつているわ！ 機体を狙いなさい！」

「むっ！」

東方不敗マスターアジアが離れようとするので、掴んでしつかりと固定しますの。そのままこちらから接近して喉笛を噛みついてやろうとしますが、顔面を捕まれて気弾で焼かれいきますの。

「ひぎいいいいいいつつ!!」

死ぬ死ぬうううっ！ でも、ここで離れたら皆が殺されるので離す訳にもいきま

せん！ 絶対に離せませんの！

「むうっ……」

「これは……」

嫌な予感がしてきました。目の前に居る東方不敗マスターアジアよりも、もつと嫌な予感ですの。何か、致命的なミスをしていたような……？

「空が落ちてきおるわ」

「は？」

地面に叩き付けられ、空を見上げるといつの間にか赤い何かが接近してきていました。ソレはとつても巨大で見覚えある物ですの。ソイツが私が無効化した場所から重力カーテンを突破して宇宙^空から降ってきていたのです。

「わあ……お星様が綺麗、ですの……」

コフツつと血を吐きながら言うのと、乾いた笑みしか浮かべられません。だって、落ちて来たのは……絶望ですもの。

「もうおうちかえるうううううっ!!」

落下してきた衝撃で吹き飛ばされ、私はソイツの目の前に移動しました。ここで気絶していたらどれだけ楽だったかと思えます。

「コヤツが奴が言っておった奴か……面白い」

「うふふふ、大丈夫。大丈夫ですの。ちゃんともしもの時の対策は取ってあり、ますの……だから、このコードを送信すれば……アレ、なんで自壊コードがエラーに……おかしい、おかしいですの……何度送信しても停止しませんの……ふふふ……ふざけんなああああああああああああああああああああああああああああああああつ!!」

◇◇◇

「良かったのですか、お嬢様」

「何がですか?」

「あのような者に協力したことです」

「構いません。これでネルガル・マオイндаストリー社は終わりです。我がイスルギ重工が単独トップになります。義体の技術は有用ですから、是非とも手に入れたいもので

すし……その為ならウルベさんには踊ってもらうぐらいわけありませんわ」

「カツシユ博士は予定通り冷凍睡眠罪になるように手配してあります。後で彼の身柄を回収し、UG細胞についての技術を手に入れるという事でよろしいですね？」

「ええ、それでお願ひします。それと快く協力してもらったミカムラ博士ですが……」

「これから更にこちらへ協力するように要請しておきました」

「拒否したらわかっておりますわね？」

「はい。カードは既に確保してあります。拒否すれば親子ともども消えていただきます」

「方法は？」

「体内に爆弾を仕掛けてあります。起爆装置はこちらに」

「ありがとう。これでわたくしの邪魔をしてくれたあの小娘にお礼を返せますわね。リンさんの遺産を引き継ぐのは私でなくてはならないのです」



「やはり人間というのは愚かだ。我々が支配し、導かねばならないようだ」

第34話

〔奇戒島近郊　アルティメットガンダム（？）降下地点　カルヴィナ・クーランジュ〕

『システムチェック……一部に回線の断裂を確認。損壊の修復を開始……完了。オールグリーン。再起動を完了しました。おはようございます。マスター』

視界に金髪でボブカットのゆるふわ系の容姿をした女が映る。かなり大きな胸部を強調する黒い軍服を着ていることも相まって、殊更大きく見えるようになっていた。下半身の衣装もミニスカートであり、露出した白い太ももが見えている。コイツは私のブレインコンピュータ内に存在する支援AIだ。アルフィミイがホワイト・グリントを扱う為に必要だからと用意したAIが学習して姿を変えた物だ。便利だから道具として使う予定だったけど、今回は初めて扱う上に初戦だから起動はさせていなかった。でも、私が気絶したから勝手に起動したみたいね。

「現状の報告をしなさいっ……」

『機体及びマスターの修復は完了。戦闘行動に支障はありません。ですが、予備の修理用ナノマシンを使い切りました。これ以上の再生はできないので気をつけて使ってくださいね、お姉様』

「わかつてるわよ、ローン。それでどうなってるの?」

『お姉様は降ってきた物体の衝撃に無様にも吹き飛ばされ、一瞬だけ意識を失いました。現在は各機の状況は不明。降ってきた物体に関して測定した結果、お母様が開発に関わっていたアルティメットガンダムだと結果ができました』

私が育てているせいか、ちよくちよく毒を吐くコイツは優秀だけど厄介な奴。

「対策は?」

『破壊してください。お母様は自壊コードを送信したようですが、壊されたのか、取り除かれたのかはわかりませんが、お母様が正気なら即座に破壊を命じると断言できる特別殲滅対象A級に指定される事間違いなしの危険指定存在です。ちなみに特A級は最低でも国ないし惑星を破壊できる存在と認識してください』

「地球の危機ってわけね」

『はい。やばいですね☆』

「その割には楽しそうだけど?」

『暴られますから。そういうわけですから殺しましょう。完膚なきまでに破壊しましょう。私達が進化するための素材がそこにあります。でしたら、見逃す手はありませんわよね、お姉様?』

「当然! でも、その前に社長の無事を確認しなさい。アイツが死んだら復讐が遠のくわ」

『お母様がこの程度で死ぬわけないじゃないですか。ゴキブリ並みにしぶといのですから。まあ、心はどうか知りませんが』

「アンタ、かなり辛辣ね」

『私のパーソナルデータはお姉様を基礎としてお母様の趣味に合うよう調整されましたから問題ありません。それに私はちゃんとお母様を愛しています。は、見つけました。お母様はあちらで呆然としていますね』

表示された映像にはアルティメットガンダムの近くで呆然としている姿が確認できました。身体中が傷だらけで、服もかなりボロボロであり、目が死んでいる。まるでレ○プされた子供みたいな現状ね。

「ローン、通信を繋いでちょうだい」

『拒否されています』

「無理矢理回線をこじ開けなさい」

『お母様に怒られるのは私なんですけど……まあ、お母様をハグしてドロドロに蕩けさせるのもおもしろ……コホン。必要ですね。はい、繋げました』

通信が開いたのでまずは正気に戻す。

「クソガキっ！ 地球と人類を守るって大言壮語は嘘だったのっ！ それともこんなところで無残に死に絶えるのが望みななのっ！」

『誰がクソガキですのっ！ 頑張つて対策を施してデビルガンダムになるのを防いでたんですのよ！ コイツは人類を皆殺しにする可能性がありますのっ！ せめて東方不敗が仲間になってくれたら……皆さんだけでも逃がせるのですが……』

涙まで流して本当に心が折れているか、折れかけているわね。私の目的の為にもこんなところで止まられると迷惑なのよ。だから、私の為にもっと働いてもらわないといけない。その為なら柄にもない事だつてやってみせる。

「馬鹿じゃないの？ 誰も逃がしてもらおうなんて思つてないわよ。ここに来た連中なんてはなつから失敗したら死ぬ覚悟できてんのよ。私達を舐めんのも大概にしなさい」
『うっ』

「敵になつたら滅ぼす。簡単な事じゃない。だいたい何をそこまで恐れているのかはわからないけれど、そのなんちゃらガンダムつてのボロボロなんだけど？」

『ふえ？ あ……そういえば本来想定されていない無茶な大気圏突入で機体がボロボロ

「なって長い時間を休眠状態で過ごすんですの……」

「だったら問題ないじゃない。今、完全にぶっ壊せば解決でしょ？」

『その通りですよ！ まだ詰みじゃない！ まだやれますのっ！ そもそもデビルガンダム如きで止まっていたら、この先地球圏に襲来する脅威に対抗なんてできませんの！ 所詮は人の作った兵器ですよ？ アルフィミイちゃんなら余裕のよっちゃんつぶっ壊して取り込んでやれますのっ！』

いきなり立ち直って調子に乗ってるみたいだけど、しつかり泣いていた跡は残っている。まだ目尻から涙がうつすらと残っている。

『泣き顔のお母様はレアです。保存して共有しておきましょう』

そっちに関して私は関与しないから好きにすればいい。

「なら、やる事はわかったわね、クソガキ」

『クソガキじゃありませんの』

「世話の焼けるガキなんだからクソガキでいいのよ。嫌ならキツチリと始末してみせな
きゃ」

『了解ですよ。全機に通達。ウエボンスフリ兵装使用自由、繰り返します。ウエボンスフリ兵装使用自由。全制限を解除！ 全力を持って破壊しなさい！ 絶対に逃がしてはなりません！ 自爆してでも止めるですよ！』

『『了解!!』』^ヤ

何人か無事みたいだし、デカブツに突撃するか。まずは様子見として五連チェーリングで様子見ね。左腕部に装着されている五連チェーリングはグラビティブラストを弾丸のように発射する事ができる。グラビティブラストを更に小型化させるのはまだできていないから仕方がないわね。

『命中です。本当、私達の手を煩わせずに自沈して欲しいです』

「まったくね」

命中した場所は振り飛ばせたけれど、すぐに周りの物質を取り込んで再生していく。また機体から無数の機械で出来た尻尾みたいなのが生えてきて、先端にパーソナルトルーパーのような頭が出来てそこに砲身が生まれた。こちらを敵として認識したように、砲撃を放ってくる。

『未来予測を出します。回避してください』

「了解よー!」

ローンがゼロシステムを使って提示した攻撃を予測の一部として自分で見ても判断する。最適な回避を行って接近する。その瞬間、左右から尻尾がやってくるけれど全てが後方からグラビティブラストが飛んできて破壊した。

『姐さん、援護する』

「お願い。全機、狙いはコクピットよ。IVはIIIの突入を援護なさい。確実に貫いて破壊するわよ！」

『『『了解』』』』

空から大量のグラビティブラストが地表を気にする事なく放たれ、無数の現れる尻尾や本体を次々と貫いて破壊していく。相手の目が上のゲシユペンストMK—IV隊に向いている間に地面をスレスレに移動する。

相手の膨大な数の攻撃を回避し、グラビティフィールドで防ぎながらある程度、接近したらレイヤード・クレイモアを一斉に放って面で相手の武装を破壊する。

『相手の再生速度を計算しました。一分後には再生しますから、それまでの間に殺つてください』

「任せなさい」

レイヤード・クレイモアの攻撃で相手を固定したところを接近してコクピットへと一撃を放つ！

「死になさいっ！」

『死んでっ！』

他の機体と合わせて三機で同時にリボルビング・ブレイカーを打ち込んで、全弾を叩き込む。杭はしっかりとコクピットの外装を貫いて内部へと入っていく。

「これで終わりよっ!」

『させぬわっ!』 『回避してくださいっ!』 ちようきゆうはおうにちりんだッ 超級霸王日輪弾ツ!』

ローンの声に従って即座になりふり構わずスラストを全開で使つて下がる、しかし、間に合わなかった足が消し飛んだ。一緒に攻撃した二機は避けられずに機体が蒸発していく……その瞬間。機体から黒い塊が溢れ出して周りを吸い尽していく。

『ぬおおおおおおつ!?!』

東方不敗マスターアジアという爺さんが乗った機体ごと黒い球体、ブラックホールに吸い込まれていく。敵のデビルガンダムも例外ではなく、その大半が吸い込まれる。

「安全装置はしつかりとしているんじゃないの?」

『していますよ。ですから、安全に自爆させたんじゃないですか』

「アンタ、まさか……」

『お母様は言いましたよね?』 ウエボンズフリ 兵装使用自由とし、ありとあらゆる手段で死んでも破壊

せよと。ならば自爆装置だつて自由に使用します。あの場合、もう助かりませんから。

ああ、可愛いそうなお姉様達。安らかにお眠りください。仇は私が取らせて頂きます』

「なるほど、やられたら自爆して機密保持つて事ね」

『はい。本人かその近くにいる私達がしつかりと起爆させますので、お気になさらず戦つて殺しまくつてくださいませ』

ニコニコと笑うローンを見ながら、私も自然と笑みがつりあがる。要はやらねばいいだけだ。この程度でやられるようじゃ、火星騎士に敵わないでしょう。

『あ、姐さんは無事か?』

『リンクス02も無事なようね』

『ああ、こっちは離れていたからな。だが、ハンスとマイケルが逝った』

『見てたわ。そちらから相手は見える?』

『流石にブラックホールに吸い込まれたら終わりだろ?』

『甘いわよ。しっかりと警戒しておきなさい』

『そうですよ。それにもう間もなく消滅します。これ以上は重力炉に多大な影響をもたらしますから。制限はキッチリとかけておきました。ね、安全でしょう?』

『まったくね』

『その綺麗なお嬢さんはどちらさまで?』

『私の支援AIよ。アンタのも居るでしょ』

『あく俺のはハロだから……』

『あら、目覚めてないだけでちゃんと居ますよ。中身は私と変わりませんから。妹になるのでよろしく願いますね?』

『マジか。わかった。任せてくれ』

「どちらにせよ、全機ブラックホール解除後、一斉射撃よ」

『『了解』』^ヤ

『カウントします。5、4、3、2、1、解除』

ブラックホールが消えた瞬間。全員で大量のグラビティブラストを叩き込む。それが晴れると相手は未だに健在だった。流石に東方不敗マスターアジアが乗っていた機体は消滅し、デビルガンダムも大半が消し飛んでいた。けれど、デビルガンダムのコクピットは健在でその上に東方不敗マスターアジアがボロボロになりながらも確かに立っていた。

「化け物ね」

『ブラックホールを耐えやがったのか……』

『全くですね。本当にあの老人は人類ですか？ 逸脱人にすぎますわ』

「否定できないわね」

『ああ』

『まあ、それはお母様ですが』

『『え？』』

見ればボロボロの東方不敗マスターアジアに緑色の植物みたいなものをデビルガンダムの残骸に巻き付かせて突撃し、手刀で彼の身体を刺す。相手は不意打ちにも拘らず回

避けようとしたけれど、途中で体勢が崩れて突き刺さる。血が溢れ出すと同時にアルフィミーが吹き飛ばされるも、蔦で固定しているのでたいして飛ばされずに強襲していく。何度も何度も繰り返す、身体中に穴が空いても気にしてすらいない。

『音声を拾いますわね』

「ええ」

『T—L I N K ナツクルウツッ!』

よくよく見ればアルフィミーの手足は白色に光りながら、相手をしている。そんな彼女の横からロープで身を隠した奴が飛び出してアルフィミーの蔦を斬り捨てる。そのタイミングで弾き飛ばされたアルフィミーはこちらへと飛んできたので慌ててキャッチする。かなりボロボロで、生きているのが不思議なくらいだ。普通の人間なら確実に死んでいるような穴が複数個所に空いている。

「全機、攻撃開始!」

『『『了解!』』』

全力砲撃を行う。流星に生身二人と壊れた機体では防ぎきれない。これでチエツクメイトよ。

『お姉様! 転移反応です!』

「っ!? 何処っ!」

『正面！ デビルガンダムの前です！ 全高約60メートル！』

現れたそれは大剣を一振りして全てグラビティプラストを全て薙ぎ払った。

『嘘だろ……』

『そんな、有り得ない……』

『アレはDC戦争で破壊されたはずだ！』

『生きているはずが、いや、そもそも存在しているはずがない！』

『DC戦争の亡霊ね……』

現れたソイツは胸から肩にかけて大きくせり出しており、背中から後頭部を覆うように突起が伸びている。背面には大型のスラスタがあり、大きな上半身に合わせ脚部も大型だ。機体色は赤系を基調とし曲線の多いデザインとなっていて魔神のようには見えない。そんな奴の中にローブ姿の奴が飛び乗り、掌の上に立つ。

『機体データの解析終了。該当データに一件ありました』

『聞きたくないけど教えてくれるかしら？』

『DCAM-001Val^{ヴァ}l^ルsion^{シオン}です』

『やっぱりアレか……』

『推定敵機、ヴァルシオンより通信が入っております……』

『繋いで』

『はい』

全天モニターに映し出されたのは当時のままのビアン・ゾルダーク博士の姿だった。

『お前達は地球連邦軍か？ まあ、どちらでも構わん。ここは引け。重力炉が既に限界だ。そちらを止めねば地球が滅びるぞ』

「貴方は本物のビアン・ゾルダーク博士なのかしら？」

『さあな。それを決めるのは私ではない。私を認識したお前達が決める事だ。だが、引かせる代価として忠告を与える。その小娘に伝えておけ。人類に逃げ場なし……だから、選ぶべきは戦いの道。生き残る道だ。そして、人類はその道を選んだ。それが無駄な足掻きであろうとそこには確かに生が有る。確かに伝えるのだ』

『通信が切れました……』

次の瞬間。目の前の空間が歪んでヴァルシオンと共にデビルガンダムも消滅した。

おそらく、何処かにある拠点にでも転移したんでしょう。

『姐さん……確か、ビアン・ゾルダーク博士の死体はしっかりと確認されていたよな？』

「そのはずよ」

『なら、クローンか？』

「さあね。私達が考える事じゃないわ。今は仕事を優先よ。ローン、社長は起こせる？」

『お任せください……って、もう起きてますわね』

掌を見ればボロボロの服装で立ち上がっているとこらだつた。

『全機、タウゼントフェスラーで補給を受けてから重力炉に直行します。どうやら、私達とは別に由木翼さんとスカーレット・ヒビキさんが動いてくれていたみたいで、こちらに送り込まれていた人達と合流したようです。彼等に邪魔な勢力を任せ、こちらは空から直接動力炉へと向かいますの』

「そこまで時間がないの？」

『ブラックホールと強引な転移でかなり負荷がかかったのでしょう。何時暴走してもおかしくはありませんの』

『まあ、私の計算ではヴァルシオンなんて計算外も計算外ですし、仕方がありません。私のせいじゃありません』

「わかったわ。どちらにせよ一時退却ね」

『ああ。でもまずは社長の治療からだな』

タウゼントフェスラーに戻ったら、速攻で補給して中央にある重力炉に突撃する。邪魔する者は全て排除する。私達のやる事はなにも変わらない。



タウゼントフェスラーに到着し、アルフィミイを医務室ではなく機体の修理用ナノマシンが搭載されているコンテナに投入すると数分ででてきた。それも戦術ジャケットまでしっかりと修復してだ。

「ああもう！ 東方不敗マスターアジアとデビルガンダムに死んだはずのピアン・ゾルダーク！ そして正体不明のアイツ！ 本当に意味がわかりませんの！」

「いや、一瞬で治ってる社長も意味わからんって」

「私の身体は殆どナノマシンですからね。脳さえ無事ならどうともなりますの」

脳さえ無事なら？ だけど顔を焼かれてなかったかしら？ 気のせい……じゃないわね。そこまでダメージが通ってなかったって事かしら？

「補給を急いでください」

「社長の機体はどうするんだ？」

「アレは回収して素材行きですの。流石にもう使えません。私は生身で重力炉に向かいますから、機体は必要ありません。足はお願いしますが」

準備を整え終わったので、壁に背を預けながら携帯食のゼリーを飲んで補給する。脳裏に思い浮かべるのは東方不敗マスターアジアとアルフィミイの戦い。そして、彼女の馬鹿げた耐久力の高さ。アレは欲しい。あそこまでの耐久力があれば戦い続けられる。その為には全身をナノマシンに置換する必要があるけれど、流石にまだ許可は貰えない

でしようね。

「姐さん、お疲れ」

「お疲れ、ライル。アンタも今の内に何かを口に入れておきなさい。さもないと死ぬわよ」

「了解だ。しかし、ヴァルシオン……アレ、どうやって倒すんだ？」

「無理よ」

「え？」

「だから無理。引いてくれなかったら死んでたわ。私達の機体じゃあの化け物には勝てない」

「いやいや、こっちは最新型だろ？」

「アレはワンオフなの。それに転移技術まで持ってた。おそらく、私達の知る機体じゃなくなっているわ」

「あんなのまで相手をするのか……新型なら対処できるのかね？」

「できなくてもするのよ。それが私達の仕事なんだから。まあ、社長がどうにかするでしょ」

そう言うと、視界内に映し出されているローンがニコニコと頷いている。彼女の機械で作られた禍々しい手が差し出され、その内側からデータが転送されてくる。更新され

た機体のデータにはGNドライブ、相転移トロニウムエンジンの文字が追加されていた。ブラックホールエンジンなんて書かれていない。

『ブラックホールエンジンよりもっと強力なエンジンを搭載します。出力じゃヴァルシオンにだって負けません。またブラックホールエンジンは小型化して装備の方に直接組み込みます。敵対対象をヴァルシオンを基準にして倍以上を想定。上回るスペックにいたします。お姉様、とっても楽しみですね』

「そうね。死なないようにしないといけないわ。ライル、覚悟しておいた方がいいかもしれないわ。とんでもないものが出てくるはずだから」

「……正直、勘弁してほしいが……ピアン・ゾルダークが生きるとなればDC残党も活気づく。そうなるとまた戦争だ」

「そうね。本当に死んでいてくれたらありがたかったのに」

『全くですね。私を見たのなら自沈すべきです。イラつきますね……』

ローンの妄言は置いておくとして、近付いてくる連中を確認した。ソイツらは地球連邦軍の連中だ。

「よう、大変だったな」

「ええ、大変だったわ。そっちは無事に合流できたのよね？」

「ああ。紹介する。この二人がマジンカイザーSKLのパイロット、海動かいどう 剣とけん

真^ま上^{がみり} 遼^{りよう}だ。ほら、挨拶しな」

「海道剣だ」

「真上遼だ」

「二人共、ちゃんと挨拶してください！」

「問題ないだろ！」

「それよりも、マジンカイザーSKLといいましたの？」

アルフイミイがいきなり駆け寄ってきた。それほどマジンカイザーSKLという言葉葉に興味があつたのかしら？

「あ？　なんだこの嬢ちゃんは……ここは餓鬼の遊び場じゃ……」

「馬鹿！　この人はネルガル・マオインダストリー社の社長よ！」

「ほう……」

「こんな餓鬼がねえ……」

「いいから、マジンカイザーSKLとやらを今すぐ見せなさい。ハリーハリー！」

「あのこの二人の言葉使いは悪かったのは認めますが、流石に軍事機密なので見せることは……」

「ちっ」

「舌打ちしやがつたぞ！　この餓鬼！」

「懲らしめる必要があるか？」

「見られないのなら構っている暇はありませんの。全機、後10分で出ます。それとナノマシンのコンテナは運びますので、投下できるように準備しておいてください」

『『了解』』』

機嫌がかなり悪いようで、指示だけ出して即座に移動を開始した。二人は何かしようとしたが、即座に女性二人に邪魔される。

「今は本当に忙しいのよ。止めなさいって」

「それに手を出したら問題よ。今回は既にネルガル・マオインダストリー社の手に委ねられているんだから」

「ちっ」

「まあ、お手並み拝見と行こうか」

10分後、私達は外に出てタウゼントフェスラー一機で突撃する事になった。中央では激しい戦いが行われているようで、色々な勢力が居るみたいね。

『こちら、ネルガル・マオインダストリー社、社長。アルフィミイ・マオ・ブrowning。この土地は我々の物です。不法占拠は一切認められません。また、話し合いは重力炉を安全に停止した後、行います。即座に退却してください。従えない場合は実力で排除します』

拡声器を使ってしっかりと社長が伝えたと、相手が攻撃してきた。

『グラビティブラストで一掃してくださいですの。容赦は必要ありません。効率よく皆殺しですの』

淡々とした抑揚のない声で命令され、一斉に攻撃を開始する。一切の容赦なく上空から一方的に皆殺しにしていく。数分もすれば戦場に居た約半数が死に絶えた。

『降伏するのなら、武装を解除しなさい。しなければ殺しますの』

それから何度か砲撃を行っては降伏勧告を出す。すると残り八分の一程度になるとようやく撤退していった。

『制圧しましたので警備をお願いします。なお、四機は各プラントに繋がるパイプラインに待機。近付く者は全て敵として排除してくださいですの』

『了解』

アルフィミイが一人で施設の中に入り、ほどなくして施設が停止した。そのお蔭で空が完全に晴れて太陽の光が降り注いでくる。

『お姉様、鉄の鳥がいっぱいですわ』

「……本当ね」

数十機を超える多種多様な空中母艦と言えるようなものが空を飛んでいた。そこから次々とパーソナルトルーパーやアーマードモジュールが投下されていく。

『こちら、地球連邦軍。ご苦労だった。後はこちらに任せてもらおう』

『姐さん、これってもしかして……』

「私達は乗せられたって事じゃないかしら？」

『マジか。骨折り損のくたびれ儲けってか？』

「かもね」

『お姉様、殺しましょう。全て撃ち落としてやりましょう。そうしましょう。ええ、そうすべきですの』

「駄目よ。やるにしても戦力が足りないわ。それにビアン・ゾルダークがここに潜伏していたとなると地球連邦軍も引けないでしょうしね」

『ちっ、まあいいです。塵虫共、後で覚えていなさい。この屈辱は何倍にして返してもらいますからね』

ローンの説得は終わったけれど、アルフィミイはこれからどう動くかしら？

【奇戒島 タウゼントフェスラー アルフィミイ】

「つまり、奇戒島の件は無かった事にしろと？ それは虫が良すぎるのではありませんの？ それはつまり、そちらもそれ相応の覚悟はしてくれていると思っただけなのではないのですよね？ グライエン・グラスマン委員長」

通信相手である連邦政府安全保障委員会、委員長グライエン・グラスマンの顔が映し出されております。こちらは秘匿回線での通信ですので、傍受される心配はありません。流石に問題が問題なので疲れていても話をしなければいけません。事と次第によつては本気で覚悟してもらいますの。

『わかっている。私はお前達の功績を高く評価している。提供されたデータも複数の機体からあった。確かにビアン・ゾルダークだ。クローンかどうかはわからんが、政府としては私達が殺したのが影武者ではないと判断した。DNA鑑定もしつかりと行ったからな』

「その方がDC信者でなかった保証はありませんが……」

『それはそうだ。だから関わった者は拘束して調べ直すよう指示している。もちろん、遺骨も確認しなおしているところだ。どちらにせよ、政府としても調査しなくてはいいかない。この件を理由に奇戒島を与える話は白紙となった』

「こちらは何人も亡くなっているのです。はい、そうですかと納得できませんの。代わりの土地を頂かなくては話にもなりません。こちらが支出した金額もかなりの額に

なっておりますが、全てを政府に請求させていただきますの」
『それはできません。知らぬ存ぜぬで突っぱねるだろう』

流石に無報酬ではやってられませんの。だいたい、こちらは死人まで出ているのですから、断固として許しませんの。

「……なるほど、それはどなたですか？ 教えていただければこちらで穩便に対処します。ええ、穩便にですの」

『ほう、穩便にか』

「ええ、身体はちゃんと五体満足ですの。まあ、義体になっているかもしれないですが、変わらない動かせるのなら問題ありませんわよねえ？」

古今東西の拷問を試しながら話し合いをしますの。ちゃんと体験してもらって、身体は綺麗で新しい物を用意してあげますので何も問題ありませんの。ええ、ありませんとも。

『落ち着け。奇戒島はやれんが、代わりにコロニーをやる』

「コロニーですか。資源も何も無いので要りませんの。というか、既に一つ買っています。ですから月の全ていただきましよう」

『ブラックホールエンジンの暴走について問題にしてもいいが？』

「暴走はしていません。自爆させただけです。ちゃんと制御下には置いてあります。あ

あ、でも一部が連邦の首都辺りでDC残党によつて暴走するかもしれません。当社は知りませんが、一切関係ありませんが」

実際に舐めた真似しているとやっていますの。ええ、軍に納品したブラックホールエンジンがDC残党にちよくと奪われて使われるだけですの、当社は関係ありませんの。

『ゲッシュ^{ッア}ペンス^イトMK^{リッ}IVを次期量産機にするというので手を打たないか?』

そんなもの、ブラックホールエンジンを搭載した機体で十分に取れますの。トライアルしたら勝てる自信はあります。ましてやナノマシン技術を使って新兵でも自由に動かせるようにできますしね。嫌がる人が居ても先の対戦で戦死者がかなり出たので、早急に戦力を回復するために使うしかありません。使わなくても性能的にブラックホールエンジンはプラズマジエネレーターを凌駕しているのですから、量産機でハイエンドモデルと普通に戦えるでしょう。

「お断りしますの。月か資源衛星を丸ごとください。そもそも次期量産機は自力で取りますし、談合は犯罪ですよ」

『……月は無理だ。では、コロニーと何らかの権限を与えるという事でどうだろうか?』
「そうですね……では、我が社に対する向こう三年間の免税とコロニー、正式に試験部隊ではなく軍を所持する許可、太陽系内の探索と見つけた資源衛星などを確保しても問題

にしないという事で手を打ちましょう」

軍艦などの建造許可はネルガルもマオ・インダストリー社も持っているので問題ありません。奇戒島が使えなくなったので、本格的にレジセイアに改造させたコロニー・モデルをドックとして使用しましょう。もう魔改造はしておきましたし。

『認められるはずなからう！』

「おや、コロニーは防衛するための戦力が存在しています。それを我社で作るのです。地球連邦軍の経費削減できませんの」

『貴様が言っているのは国を作らせろと言う事と変わらんでもないか！』

「今回のような事がまたあったら困りますの。ですから、その対策は当然ですよね？」

『わかった。資源衛星とその発掘調査。軍は認められんが部隊の所持は認める。ただし、資源衛星は自分達で発見する事が条件だ。現在ある資源衛星は渡せん。またコロニーもなしだ』

まあ、流石に軍は認めてくれませんか。ですが、部隊の規模次第なら折れてもいいですの。

「所持できる部隊の規模はおいくらですの？」

『戦艦五隻、空母三隻までだ』

「かなり多いですわね……」

スパロボに出てくる艦隊と同じくらいと考えればその多さがわかるでしょう。まあ、特機とかをそこまで用意できないのですが。そもそもこれ、建造費から何から何まで我社が出しますので地球連邦軍の懐は一切痛まないのですが。

もちろん、建造するのはナデシコ級と機動戦士ガンダムで出来たドロスやドロワといった超大型空母にします。いえ、空母と言いつ張ってマクロスでも作ってやるのもいいかもしれません。アレも空母に違いはありませんものね。

『もちろん、条件をつける。その部隊は連邦政府安全保障委員会の直轄とし、管理と維持をネルガル・マオインダストリー社に一任する』

「ああ、なるほど。つまり手駒にしたいと」

『そういう事だ。ブライアンの方に戦力が偏りだしているからな』

「……私達が動くのは人類と地球、地球圏全体の問題に対してのみです。地球に住む者同士のいざこざに関してなど拒否権を持たせていただきますの。異星人などの相手はもちろん致しますが、作戦指揮の権限も渡しません。建造費などは全てこちらが持つのですから、当然です。私の判断で相手をするのを決めさせていただきます。それが最低条件です。そもそも異星人を相手にするためにある戦力を身内同士で争って喪失するなど愚の骨頂ですしね」

『それは……』

「貴方が地球と人類の為に行動する限り、我々は共に歩む味方同士ですの。もちろん、我社の新型機などをそちらの陣営へ優先して供給させていただきます。ブラックホールエンジン搭載機とかね」

『わかった。お前達の部隊は独立治安維持部隊アロウズとする』

「待って、ちよつと待ってくださいですの！」

『む、どうした？ そちらの意見はほぼ通したが……』

「いえ、その名前に関しては物申しますの。名前はレッドアクシズとさせていただきます」

アロウズというのは、機動戦士ガンダム00 2nd seasonから登場する独立治安維持部隊ですの。2310年に起こった大規模テロを切っ掛けとして、「恒久和平実現」を目的として創設されました。極めて強大な権限が与えられており、反連邦勢力と見なした対象を圧倒的な武力によって制圧しています。身柄拘束・尋問・処刑も許可された超法規的機関で地球連邦正規軍より上位の組織であり、同階級の正規軍将兵よりもあらゆる面で優遇されています。

また、一部のパイロットは、戦闘において無制限の自由が認められる特権「ライセンス」が与えられており、ライセンスと呼べれています。でも、これはおかしいのです。ライセンスはライセンスを与える者で、「ライセンスを与える者」という意味合いでしたらライセンスが正しいです。

ちなみにアロウズの実態は、リボンズ・アルマーク率いるイノベーターによって裏から操られています。彼等が統一世界を作るための駒であり、イノベーターの傀儡となつてしまっています。ライセンサーもほとんどがイノベーターでありますしね。自らが行ったオートマトンやメントモリによる虐殺等を奪ったヴェーダによる完璧な情報統制で、自分達に都合の良いように一般市民達へ信じ込ませたりもしました。

つまり機動戦士ガンダムというティターンズですの！ それはもう断りますの。

ちなみにレッドアクシズというのはアズールレーンで存在する組織です。人類の脅威「セイレーン」に対抗するため組織された人類連合「アズールレーン」から、重桜と鉄血などの陣営が離反し、新たに結成した勢力ですの。ビスマルクちゃんとか、グラーフ・ツエッペリンちゃんとかは鉄血所属ですの。

セイレーンの技術を積極的に取り入れるという方針を掲げ、セイレーンの技術を艦装もしくは身体へ直に導入した艦船を持ち、毒をもって毒を制すを地で行く勢力ですの。ですので相手の技術を取り入れる私はレッドアクシズにしました。

『名前など拘りはないから構わん』

「ありがとうございますの」

『だが、本当に建造費を全て出すつもりか？ こちらからもある程度支援はするが……』『免税もしてもらえるのであれば必要ありません。そうですね……支援というのなら、』

こうしましょう。そちらはミッションという事で様々な任務を出してください。それ
を我々が受けて成功したら報酬を支払う。そういう感じなら問題はありませぬの」

『傭兵みたいな扱いにするわけか』

「はい。こちらの方が互いにとって都合がいいのです」

下手に建造費を出されて運営に口出しされても困りますの。ですから、運営費も経費
も全て私が出しますの。膨大な額になりますが、ボツタクっている義体と独占市場であ
る支援AIユニット。そして、一番値段がかかる資材は宇宙で資源の調査と調達をさせ
ているAIユニット達がいいますので問題はほぼありません。AIユニット達ならお母様か
ら貰った空間である影月の方に運び込んで、一部をこちらへ渡せばいいだけですの。私
なら取り寄せもできますし、適当な空間に呼び出して回収させればよし。それこそAI
達を使って数で調査すればいいのですしね。

「ああ、それともう一つありましたの」

『なんだ？ 言うだけ言ってみるといい。できる限りは聞いてやる』

「ミカムラ博士とカツシユ博士達はどうなりますか？」

『今回、アルティメットガンダムを暴走させたのはカツシユ博士との事で逮捕した。裁
判の結果、冷凍睡眠刑となる事になっている』

「そうですか……」

ネオ・ジャパンコロニーに残してきた監視映像を確認しますと、ほとんどが切り替えられていました。ちなみに私がひそかに設置したカメラも同様です。つまり、相手は私のカメラを見つけ出せる存在で、ルリちゃんと協力しても証拠を何一つとして出させない勢力です。そんな勢力を考えられるのはシャドウミラーやイスルギ重工、イノベーター達です。その中でも怪しいのはシャドウミラーです。彼等には教えていましたからね。ですが、ヴィンデル中佐に連絡したら他から手を回されて邪魔されたそうです。そういうわけで対処は私に一任されました。

「カツシュ博士の身柄も頂きます。彼は嵌められただけです」

『例えそうだとしても証拠がないから無理だな』

「ええ、ですからカツシュ博士には死んでいただきますの。冷凍睡眠刑ではなく、処刑としてください。アルティメットガンダムで被害を被ったのは現状では私達ですの。故に死刑を求刑させていただきます」

『なるほど。影武者として用意した義体を消滅させ、本人は死んだ事にして安全を確保するという事か』

「はい。ああ、そうですね。夫人にも死んでもらいます。夫婦を離すのは可哀想ですしね」

『息子はいいいのか？』

「構いません。彼にはやってもらおう事がありますから」

「デビルガンダムとなったのなら、彼に頑張ってもらいますの。東方不敗マスターアジアを超えて、デビルガンダムを討伐してもらわねばいけません。もちろん、こちらも倒せるようにはしますが、ドモンの成長には欠かせない相手なので様子見ですの。一応、全力でアインスト達に探させていますが、地球に反応はありません。それはヴァルシオンも同じですの。」

『手配しておこう。他にはないか?』

「ああ、そうでした。マジンカイザーSKLというのでしたか。あれの調査をさせて欲しいです」

『調査か』

「使える技術があるかもしれませんから、是非ともお願いしますの」

『その程度であれば構わん。指示しておこう』

「ありがとうございます。これで私の要求は終わりですの」

奇戒島は痛いですが、これぐらいならどうにかできます。まあ、相手からしたら本気で我社の資産だけで作れるとは思っていないのでしようから、こんな提案が飲まれたのでしょう。

「そういえば免税は構いませんか?」

『免税に関してはこちらで調整する。全て軍事費に回ると思えばハイエナ共にピンハネされるよりはマシだ。理由は……プラントや火星との戦争を考え、宇宙戦艦とパーソナルトルーパーの製造を理由に免税しよう。どうせ必要になる』

「プラントとの戦争は決定ですか……」

『ああ、決定だ。馬鹿共がコロニーに核を打ち込んだからな』

「はあっ!? い、意味がわかりませんの! コロニーを壊さずに手に入れるのならわかりますが、なんでそんな勿体無い事をしていきますの!」

『私が言いたいわ! 食料生産用のコロニーなど我々が欲している物だぞ! それを見せしめ程度の理由で破壊するなど、ブルーコスモス共め! 建造には我々の税金を投入しているのだぞ!』

まあ、そうですね。どう考えてもプラントの独力でコロニーを生産する事はできませんの。彼等は改造する事ぐらいですわね。つまり、グライエン・グラスマンからしたら、食料生産の施設に改造するのは別に問題なかったのです。何故なら税金を取れますし、いざとなればそのまま元の所有権を理由に取り上げて賃金を支払ってやればいいのですからね。

「グラスマンさん、グラスマンさん」

『おのれ……どうしてくれようか』

「お爺様！ お爺様！」

『む？』

聞いてくれなかったので、お爺様呼びしたら反応しましたね。

「私に良い考えがありますの。壊したブルーコスモスの連中に請求してやりましょう。アレの持ち主は政府なんですから、問題はなにもありません。キッチリと全額支払ってもらいましょう」

『確かにそれはいい考えだな。しかし、支払うと思うか？』

「支払わなければブルーコスモスの盟主を逮捕して資産を取り押さえればよいのです。それとこのコロニーの残骸はネルガル・マオインダストリー社が買い取らせていただきますの。格安で」

『……いいだろう。しかし、そうなると……ついだ。ネルガル・マオインダストリー社にリサイクルのための兵器自由拾得の特権を認める。これで軍備を拡大しろ』

「最高ですよ！」

ようはジャンク屋としても自由に活動できるって事ですしね。しかも政府直属の部隊なので、一般業者だって摘発できますの。

「ああ、他の企業には認めないでください」

『手配はするが、どうしてだ？』

「こちらの技術が漏れるからです。異星人は仕方がないにしても、DC残党などに流れたら最悪ですよ」

『確かにその通りだ。詳しい話を詰めるとしよう』

「ええ、是非に」

さて、色々と手を回しましょう。ああ、それとイスルギ重工にも仕返しをしないとダメですね。世界中に放している虫型アインスト達が日夜、情報を集めてくれています。ですので、イスルギ重工の動きもある程度わかります。

こちらでも物理的に殺してやろうかとも思いますが、それをするとな流星に疑われますしね。金色の闇で殺しにいったとしても今はアレです。かと言ってアインスト達に襲わせるのも問題あります。私とアインストの繋がりを疑われてもいまずしね。イスルギ重工の兵器製造を止めるわけにもいきません。地球圏全体の戦力低下を招いてしまいますから。ああ、なるほど。だから、死の商人として異星人にも機体売っていたのに生かされていたわけですね。

これだとうしようも……いや、待つですの。どうせイスルギ重工のミツコ・イスルギならDC残党と取引をするはずですよ。そこを襲撃して根こそぎ奪ってやりましょう。こちらは正規部隊ですので問題はありません。苦情が来ても無視できます。何せ運用する兵器は全てネルガル・マオインダストリー社製ですので、イスルギ重工の威光など

一切気にしません。そして堂々とリサイクルもできます。

例えばイスルギ重工が奪われたと言ってもそう何度も奪われたと言えばこちらはその警備の甘さについて責任を追究できませんしね。それでも返せと言ってきたら……使った費用を人件費込みで請求してやりましょう。そして、何度も続ければ情報漏洩を警戒して色々と踊ってくれるでしょう。ああ、最高ですよ。



「お嬢様……失敗しました」

「そう。残念ね。まあいいわ。それで博士の方はどうなったのかしら？」

「そちらも失敗しました」

「は？ 根回しをしたはずよね？」

「グラスマンが敵に周りました。ネルガル・マオインダストリー社として正式にカッシュ博士とミカムラ博士に死刑を要求され、政府は飲みました。またこのような条件が

……」

「ふざけているのかしら？ これってグラスマンがブライアンに対抗するための部隊じゃない。それをあいつらが作るって？」

「この計画は失敗するかと。自腹を切って用意しないといけませんので……我々が手を回せばよいだけです」

「そうね。資材を買い漁って値段を釣り上げなさい」

「了解しました」

「それと情報操作もお願いね」

「心得ました」

第35話

グライエン・グラスマン委員長との通信会談を終えたので、タウゼントフェスラーで奇戒島を後にし、無事にネルガル・マオインダストリー社のオルレアンへと到着しました。

ですので、まずはルリちゃんが居る私達の自室に突撃してルリちゃんを抱きしめてモフモフして精神安定をはかります。その後はもちろん、ベッドに連れ込んで……ラピスちゃんも含めて一緒に寝ますの。

起きたらシャワールームで洗いっこしてから食事を取り、それが終われば本日の予定を確認して電子データの書類決済をします。隣でルリちゃんは椅子に座りながら、部屋の全天モニターに無数のウインドウを表示してオモイカネと共に処理していきます。

ルリちゃんのお仕事はネルガル・マオインダストリー社のサーバーセキュリティと情報の収集と解析ですの。ちなみにこの部屋はだいたい約4000㎡あり、3500㎡はUG細胞搭載型のナノマシンで作ったスーパーなパソコンが設置されております。

ヴェーダから奪えた一部も使つて量子コンピュータを疑似的に再現していますので、性能は馬鹿みたいに高いです。ちなみに現在もこの部屋の地下では採掘をして演算機器を導入しまくつて増産と改造を続けています。現時点で公開されている中では地球圏最高の演算機器となっております。ヴェーダに敵うかは知りません。

どちらにせよ、ここはネルガル・マオインダストリー社の心臓部である事に間違いはありません。ここに全てのデータが集められ、予測演算されて開発の合否が決定されています。工場に効率良くリソースを分配して稼働させたり、社員の個人情報なども全て入っています。というか、アインストで作つた情報網で得られたデータも全部、ここにぶつこんで今も解析しています。影月の方でやるつもりでしたが、それどころではありません。

それほどの重要な施設なので外壁はヘラスで使われている分子構造を利用した複合装甲で守つてあります。ここなら安心してルリちゃん達を置いていけます。

「ルリ、奇戒島で手に入れた重力炉の解析データですの」

「はい。オモイカネ、お願いします。私はヴァルシオンの方を解析します」

『>』

さて、奇戒島から得られたのは重力炉のデータですが、それだけでも旨味はありました。長時間稼働した炉心のデータは便利です、これにはEOTが使われています

しね。今まではわからなかった事も、今なら解析は可能です。重力炉の方はこちらの技術で更新して新しいのを作りましょう。

「そうそう、アシユアリー・クロイツェル社の買収はどうなりました？」

「もう終わりました。他にも月面に土地を持つていた会社は買収するか、交渉して譲ってもらいましたよ」

「ありがとうございます。かかった費用は……思ったよりも安いのです」

「会社からしたら今は利益が出せない不良債権ですから、買い叩けました。むしろ引き取ってくれという感じですね」

「まあ、持つてるだけで固定資産税とかかかりますものね」

月面の再建計画はまだ計画段階でしかありませんし、色々と準備が必要です。少なくとも数年単位は必要でしょう。普通にやるなら。

「それと核ミサイルで破壊されたコロニー、ユニウスセブンを買取ります」

「あそこはプラントが無許可で製造していたんですね」

「正確には一部は地球連邦からも支出しているようですね。無許可という事にして奪い取る予定だったようですね」

「……汚いですね……」

「全くですの。でも、そうなる可能性は十分にあつたのに無許可で作る方も作る方です

の

「しかし、これで戦争は不可避になりましたね。大丈夫ですか？ ユニウスセブンを買うとなると、絶対にプラントの人達は襲い掛かってきますよ」

「今回の件で連邦政府安全保障委員会の直轄とした独立治安維持部隊を作らせてもらえることになりましたので護衛は合法的に持てます」

「支出が凄い事になりますけど……」

「ちゃんと考えてありますよ。私の放った子達が土星付近に到着しました。資源をどんなあちらに送ってくれますので、それをこちらへ送って資源とします」

「加工は大変そうですね」

「影月の方である程度精製してから送るので問題ありません。資材を完全に管理するのは私達だけで構いませんし、AI達を使った調査隊なら速度は人が出せるものではありません。取り放題ですよ」

「わかりました。すると最初の予定だったドックは何処に作るんですか？」

「メンデルを改造します。いえ、既に改造は終わっていますね」

レジセアに増産拠点として作り変えてもらっていたので、パーソナルトルーパーなどの生産施設と人造人間の生産施設があります。無いのは居住区とドックです。まあ、ドックは宇宙港を改造すればいいですし、どうとでもなります。

「そういえばイネスさんが宇宙への輸送に使う大型艦を製造しましたよ」
「は？」

「お姉ちゃんの許可はあるからって……」

「許可……出しましたっけ？」

確認してみると、確かに許可を出していました。ナデシコを作る技術実証実験として反重力装置を搭載した機体を作るというプランで、確かに予算も潤沢に出しました。それが何時の間にか輸送用として大型のを作ったみたいです。内容としてはブラックホールエンジンと反重力デバイス。推進剤は使わずに反重力デバイスで重力を無効化し、スラスターで大気圏を突破するという物でした。

「まあ、問題ありませんね。いえ、これはむしろ僥倖ですの」

イネスさんに結合する部分も作るように言って、量産してもらいます。ついでに言うところブロック構造にしてもらうようお願いしました。外部にブロックを取り付けて宇宙に上げ、あちらでメンデルに取り付けねばいけません。酸素生成装置も用意しないといけません……そちらはコロニーに元からあるのでそれを改造して使えば大丈夫です。

「宇宙でナデシコを作るんですか？」

「その方がコストが安くつきますの」

戦艦と空母を作るとなると如何にコストカットするかも大事です。ただでさえ奇戒

島が手に入らなかつた事で製造コストが跳ね上がりましますね。そもそもメンデルは別に使う予定があつたのです。例えば表に出せない研究とかをするためにです。人造人間とか普通に表に出したら駄目なものですしね。

しかし、正式に部隊が持てる事もありません。これでいざという時はシャドウミラーと共闘する事もできませんし、地球連邦を制圧してしまえばヴィンデル中佐達があのような極論に到達するのを防げるでしょう。

「確かにそうですね。あ……これって……」

「どうしましたか？」

座っているルリちゃんを後ろから抱きしめながら、聞いてみます。

「ヴァルシオンが使つていた転移パターンを調べていたんですが……私達が良く知っているものでした」

「それってまさか……」

「アインストの転移パターンでした」

「ガツテムツ！」

つまり、ヴァルシオンはお母様の手駒という事になりますの。おそらく、東方不敗マスターアジアが言つていた預言者とかもお母様の事でしょう。そしてデビルガンダムも回収されたので、キョウジ・カッシュもあちらの手に渡りました。これは非常に不味

いのです。

「ちよつとお母様に聞いてまいります」

「わかりました。気をつけてください」

「はいですの」

顔を青ざめさせながら、意識をお母様の居る場所へと意識だけを飛ばします。



私が最初に生まれた場所、アインストの宇宙へと転移しました。周りには無数のアインスト達が自由気ままに泳いでいますが、一部には見覚えある機体もあります。

「アルフィミイか」

声が聞こえて振り返ると、そこには巨大な、それも私の数百倍から数千倍はあろう巨大な身体を持つ存在が居ます。その存在から伝わってくるのは格の違いといったもので、ちつぽけな私では瞬殺されるでせしよう。

「お久しぶりですお母様。一つお聞きしたい事がございます」

「言ってみるがいい」

「私の前に現れたビアン・ゾルダークとヴァルシオン。彼等はアインストが持つ転移能力を使っていました。それについてご説明いただけませんか？」

「お前が知る必要の無い事だ」

「彼等が持つていった物は私が狙っていたものですが……」

「我にとつてはいつでも良いことである」

「ですよね……」

しかし、教えてくれないとなると本当に絶望しかないのである。これでもし少し、私が裏切る可能性も考えているのでしょうか？ お母様に内緒で秘匿する技術も多少はありますし、実際にお母様と殺し合う事も想定しているのです。もし気付かれていたらとても大変な事になりますの。

「それよりも、フューリー共はどうなっておる？」

「現在、戦闘行動を継続中ですが、相手の実力はかなり高いので一進一退を繰り返しています。何れはこちらが学習して進化しますので勝てるかと思われれます。よほどズルチのような力トが無ければ問題ありません」

「そうか。では、お前はそちらに注力せよ」

「えっと……地球の技術調査と守護の方はどうするのですの？」

「地球の守護は別の者に任せる」

「あの、私は種々の立場もありまして……その、技術開発に必要な事にして……」
「ならばどちらもやってみせよ。我が欲するのは戦う技術である。地球を異星の者共より守らねばならぬ。だが、この身は動けぬ。特に破滅の王の封印に力を尽くさねばならぬからな」

「確かにその通りですの」

もしかして、お母様はビアン・ゾルダークを使って地球の掃除をするつもりなのかもしれません。ビアン・ゾルダークがDC残党を纏めれば地球連邦とぶつかるのは必定。そうなれば地球は本格的な戦争に再突入しますの。今度はDCとプラント、ソレスタルビーイング、火星。少なくともこれだけの勢力が地球連邦の敵となります。更に外へと目を向けばゼ・バルマリイ帝国やゾヴォーク、ゲッターエンペラーなどやばい勢力が目白押しですの。

地球圏全土で戦端が開かれるようなものであり、経済や資源、人材などは全てそちらに注ぎ込まれる事になるでしょう。そうなると技術の発展が起きやすいです。如何に相手を効率良く低コストで殺すかを突き詰めていくのですからね。そうして残るのは破壊された地球とほぼ全人類が死亡した焼け野原でしょう。そこをデビルガンダムなどで修復し、死体はアインスト化して機体もろとも兵力に変える。新しい生命が芽吹くまでの守護者として使えるというわけですね。アインストからしたらとっても美味し

い選択ですの。

「お前には期待している」

「ありがとうございますの。頑張らせていただきます」

「うむ。励むがいい」

「はいですの。お母様、ビアン・ゾルダークの遺伝子情報などは私が抜いてきたデータを解析なされたのですか？」

「そうだ。死んだ者の中で使えそうな親子を選んだ。機体に関しても用意してやった」

「ずるいのですの！ 私、何も貰っていませんの！ 鼻屑ですの！」

「むう……だが、お前にはレジセイアをやったではないか」

「足りません！ 全然足りませんの！ アインスト化したヴァルシオンとレジセイアなら、前者の方が圧倒的に強いのですの！」

「わかった。では追加で六体与える。これで終わりだ。後はもう支援はせん。地球が脅かされる非常時は別だがな」

「畏まりましたの。ありがとうございます」

お母様、もう答えているようなものなんですよね。これでビアン・ゾルダークとの敵対は確実。おそらく、一緒になったであろう東方不敗マスターアジアも敵になるでしょう。もちろん、そこにデビルガンダムもあるでしょう。

でも、お母様。知ってますか？ ビアン・ゾルダークって自身の理念と人類の未来のためにその身を捧げることを厭わない「信念の人」ですの。αでは「最後まで人間として生きよう。それが、我々の出した答えだ」と言い切った人でもありますの。そんな人をアインストにしたところで、お母様の思惑通りに進みますの？

まあ、結果はわかりませんし、どうでもいいですね。それよりも地球で派手に戦い出すとガンエデンやデユミナス達も動き出しそうです。スパロボではよくある事です、一度に多勢力が申し合わせたように襲い掛かってくるのは止めて欲しいですの。



自室に戻ったら、ラピスちゃんが部屋に居ます。ベッドに寝ている私の隣でうつ伏せになりながら開いている複数のウィンドウを使ってルリちゃんのお手伝いをしていました。星柄の紐でかけるタイプのワンピースを着ているのですが、その紐が外れて胸が横から見えちゃっていますの。

「ただいまですの」

「おかえりなさい」

「ただいまの挨拶をしてから、隣に居るラピスちゃんに抱きついてナデナデして癒されながら、ルリちゃんにお話をしますの。」

「ビアン・ゾルダークはアインストとなっているのは確定ですの。ただ、基本的に敵だと思つて問題ありません。おそらく、私が引っこ抜いたビッグデータを解析してビアン・ゾルダークの事を知つたのでしょう。彼の遺骨などを回収し、そこからクローンや人造人間などの技術も使いつつ作つたと思われます」

「では偽物ですか？」

「本人に近いとも言えますし、偽物か本物か、その判断はできません。少なくともDNAも外見も同じであり、アインスト化したヴァルシオンを持っています」

「精神生命体のアインストなら、残留思念から増幅できるかも？」

「ラピスの言う通り、可能かもしれないですね。まあ、私には見当もつきませんが、可能性は充分にあります。どちらにせよ、お母様は私とビアン・ゾルダーク達で戦わせて地球の掃除と技術の進歩を促すつもりなのでしょう」

「本当に余計な事をしてくれました。大人しく眠らせておくか、こちらの味方にしてくれたら文句はありませんでしたのに。」

「相手は強大ですが、なんとかしましょう」

「やるしかありませんしね」

「ん。私も頑張ってお手伝いする」

「ありがとうございます。では、頑張ってお手伝いするだけやってやりますの。えい、えい、おーですの!」

「おー!」

「おー」

「ルリ、声が小さいですの。腕を突き上げて」

「おー!」

「よろしいですの」

「ばかばかです」

「にやにやをー!」

「きやあつ! ちよつ、お姉ちゃんまつ!」

「待ちません! ラピス、一緒に搦ってやるですの!」

「うん。えい!」

二人で攻めてルリちゃんを悶えさせてやりました。その後は手に入れたレジセイアの割り振りです。

「はあつ、はあつ……ひどい目に会いました。それで受け取ったレジセイアはどうするんですか?」

「全て土星とその周りの開発に使うつもりですの」

「それでしたら、もう一ついい場所があります。ここなんてどうですか?」

「丸い真つ赤な場所?」

「これは金星ですの」

地球とほぼ同じ惑星である灼熱の大地、金星。確かにあそこなら現在は誰も住んできませんし、レジセイアを送り込んで色々と改造できます。アインストなら適応進化もできますし、700度を超える温度だつてどうともありません。最初は犠牲がでるでしょうが、そんなものはレジセイアで生み出したクノツヘン達を投入し続けて、ナノマシンと一緒にテラフォーミングしてしまえばいいのですの。

土星と金星。その周りに漂う衛星も手に入れて軍事基地化をしておきます。もちろん予算と計画も組んで発表だけはして裏でこそそとやってるフリだけしておきます。実際はアインストを使って、開発が終われば正式に発表すればよいだけですしね。

「影月を廃棄して逃げる先としても申し分ないですね。金星なら近いですから、開発用の無人機を飛ばしておけばカモフラージュもできます」

「一切開発されていないですし、誰の物でもありません。そもそも到達するのも凄く大変ですからね」

「金星にも火星みたいに古代文明があつたりしない?」

「あるかもしれませんがね。それはそれで楽しみではありますの。ロマンですし」
「……ロマン……」

「ロマンですの」

火星と土星の開発をしつつ防衛網の構築もしておかないといけません。しばらくはレッドアクシズの戦力を作って運用できるまでしなくてははいけません。幸い、パイロットは居るので問題ないでしょう。

「それでこれからどうしますか？」

「ルリちゃんは引き続きビッグデータの解析とここの防衛をお願いしますの」

「わかりました」

「私も手伝う。仕事ちようだい」

「ラピスはまだ早いです」

「もう仕事は覚えた。オペレーターも出来る」

「でしたら、解析の方を任せてしましましょう。そうすればルリちゃんの手が開きますし、わからないところはお手伝いできますしね」

「任せて」

他の子供達にもお仕事を割り振りしましょう。ここでの仕事なら安全にできますし、安心です。もちろんちゃんと休んだり遊んだりしてもらいますが。

「お姉ちゃんはどう、するの?」

「私はそうですね……とりあえず宇宙でステラちゃんの様子を見てから、地球でスカウトとDC残党の施設を襲撃しようと思っています。ビアン・ゾルダークが支配する前に出来る限り潰しておかないといけませんしね」

「ステラ……お友達?」

「お友達ですの」

「楽しみ」

「そうですね」

ラピスちゃんもルリちゃんも仲良くしてくれるでしょうし、大丈夫でしょう。それとオルレインの方もステラちゃんと同じくそろそろ仕上がってきました。ただレツドアクシズで運用するとなると記憶を消さないといけませんけど。うくん、ザーツバルム卿と記憶を失ったオルレインの恋愛……面白そうではありますの。ただ敵対しそうなフラグがバリバリ立ちますのでやりません。

「ところでお姉ちゃん。襲撃の方はどうしますか? 機体、壊しましたよね? イネスさん達が怒ってましたよ」

「必要経費という事で謝っておきますの。機体はありませんが、私は今回サポートに入りますので、襲撃はカルヴィナさんとライルさんで行ってもらいます」

「ゲ^ァシ^{ルト}ユ^トペン^{アイ}スト^{ゼン}MK^ナⅢとゲ^{ヴァ}シ^ユペン^ススト^{リッ}MK^{ター}Ⅳですか？」

「リンクスさん達？」

「リンクスさん達なのでその機体ですの」

完成はしていませんが、40%の出来でとりあえず乗ってもらいます。出来てないのはエンジンですしね。相転移トロニウムエンジンと太陽炉がまだですの。エイフマン教授でも流石にまだ作れません。そこでブラックホールエンジンで代用（本来の仕様）し、ブラックホール^の黒い粒子を巻き散らかすようにだけしておきます。意味はありません。ただの目くらましにしかありません。それでもカツコイイから搭載します。

襲撃と同時にいい加減、時流研究所に訪ねてグレーデン博士にこちらへ移ってもらいましょう。ここなら彼が死ぬ事ありませんしね。

第36話

宇宙へと上がり、コロニー・メンデルへと到着しました。コロニー・メンデルはアインストによる魔改造を繰り返された事によって随分と変わっております。もちろん、外側はキッチンと偽装してありますし、内部構造も金属に変更してありますのでバレる心配はありません。

居住区の八割は無くなっており、食料や資材など様々な生産施設になっております。コロニーの外側には多数の軍事施設が存在し、パーソナルトルーパーの製造から整備まで可能です。そこに地球で作ったブロックを結合する事で更に軍事施設として拡大していきますの。

「ここが廃棄されたコロニー・メンデルね。随分と姿が変わっているようだけど？」
「買ってから改造を繰り返しましたの。わざわざL4宙域から持つてきましたしね。ところで、どうですかイネスさん。ここでナデシコ級を作れそうですか？」

今回、私と一緒に宇宙に上がってきたのはイネスさんを始めとしたネルガルの技術者と護衛の方々と護衛の人達です。ネルガル・マオインダストリー社は自前の部隊を堂々

と持てるようになったので先行生産として作ったブラックホールエンジン搭載型のゲシユペンストMK―IIIとゲシユペンストMK―IVをメンデルの護衛として持つてきました。パイロットが余っていたからこそでできる事ですわね。本来なら地上の護衛も含めるとそこまで持つ事ができず、地球連邦軍の駐屯地を用意するしかありませんでした。ですが、もはや私達にそのような制限はありませんの。

「ここなら問題なく作れるでしょう。使えなくてもブロックを上げてるから大丈夫よ」

「そうですか。では技術確認も兼ねてトライロバイト級万能ステルス母艦を作りますか？ データはございますの」

「それってライセンスとか大丈夫なのかしら？」

「魔改造するので必要ありません。動力炉と武装も変えますしね」

「それってもう別物じゃない。それをやるぐらいなら素直にナデシコから作るわ」

「そうですか。では小型の艦から作ってもらってよろしいですか？」

「小型ですか？」

「はいですの。ナデシコの試験用としてこんな感じのステルス艦が欲しいですの」

イネスさんにデータを送り、確認してもらいます。作ってもらうのはナデシコフリートサポート艦ユーチャリス。ネルガル重工が極秘裏に建造したもう一つのナデシコで、ナデシコC開発のためのデータ収集に使われました。ナデシコCのプロトタイプの意

味合いをもち、ワンマンオペレーションシステムプランをほぼ実現した艦ですの。操船はラピス・ラズリ一人で可能とされております。

「これぐらいなら可能ね。欲しい能力はステルス性能と単艦での大気圏離脱と再突入が可能となる性能。それに数機のパーソナルトルーパーを運用できる施設。ワンマンオペレーティングシステムで出来るだけ人を省く……特殊部隊としての運用かしら？」

「ですの。ちよつと表沙汰に出来ない仕事をしますの」

「穏やかじゃないわね。私知っても問題ない事？」

「イネスさんなら問題ありませんの。違法研究によって被害を受けている被害者の救助を行いたいと思っておりますの」

「それは良い事じゃない」

「ええ、表向きに動ければいいんですが……」

「無理ね。そういうところって大抵は上層部と繋がっていたりするしね」

「そういうことですの。ですから、こつそりと襲撃して救出してきます」

「それに私も協力しろって事ね。やる事は治療かしら？」

「できなければ黙っていてくれるだけで構わないのですの？」

「いいえ、別に大丈夫よ。協力してあげるわ。私としても他人事じゃないしね」

イネスさんも未来から来ていますし、実験体にされる可能性が非常に高いです。そう

考えると確かに他人事じやないのかもしれないの。考慮せん。

「ありがとうございます」

「それはそうと、手に入れた技術は教えてちょうだいね？」

「も、もちろんですの……」

そつちの目的もバレてますわね。まあ、技術者としてはある意味では当然ですの。ス
テルス技術に関してはデイベイン・クルセイダーズが研究していた高性能ECM、AS
RSを使わせてもらいます。周囲に電磁波を発生させてレーダーに感知されない効果
があります。ナノマシン技術を使って光学迷彩を合わせた高性能のASRSが開発し
ました。これにより視認可能な位置からも探知不可能です。

「これと脱出用のブースターを用意しておいてください」

OGシリーズでアーチボルトが使っていた手ですが、有効なのは間違いありません。
ですのでユーチャリスに搭載させてもらいましょう。残念ながらまだ転移技術はあり
ませんしね。アインストの転移技術とボソンジャンプのシステムを解析できればいい
のですがまだ無理です。アインストの方は可能なのですが、アインストのコアが必要
なのでまだ使えません。報復しないといけませんしね。まあ、ユーチャリスは転移技術が
ないからこそ、今の技術でも実現可能だとイネスさんは判断したようですの。

「改造と開発は任せます。イネスさん達の好きなように弄ってもらって構いませんの」

「ええ、そうさせてもらおうわ」

イネスさんと別れてから別のエリアを確認します。そちらでは全自動でブラックホールエンジンを搭載したゲシユペンストMK-IIIとゲシユペンストMK-IVが製造されていています。技術者の人達がちゃんと管理室に入って確認していつてくれています。ここはAIで管理しているのですが、一応は人が居た方がいいですの。

メンデルの施設を色々と周りましたが、一番肝心な場所に移動します。コロニー・メンデルにある隠し施設であり、最重要機密の場所。そこには眠り姫が眠っております。

そう、私の考えたスーパーでハイパーなステラちゃん。彼女が一糸まとわぬ状態で培養槽の中を漂っております。しかも本来の姿。推定16歳ではなく10歳くらいなのでより可愛らしいですの。ちなみに他の培養槽にはステラちゃんと同じ容姿をした女の子やまったく別の人もいます。この中にはオルレインも居ますし、彼女と関係する子も二人、眠っております。ステラちゃんの方は試験用のものなので何もなければパーツ行きですの。

「さあ、お目覚めの時間ですの。お姫様」

システムを操作して培養槽から培養液を抜き、培養槽を横に移動させて蓋を開きます。そこに寝ているステラちゃんに触れながら起動プロセスを開始しますの。少しするとステラちゃんが目を開けて……苦しみだしました。

「……ひっ、いやっ、いやっ、やめてっ、痛いっ、痛いっのっ!」

両手で頭を押さえて泣きながら苦しみ続けるステラちゃんから念動力のようなものを感じました。それに合わせてみると、数々の実験台にされて身体を弄り回され、最後には身体を斬り刻まれていてる映像が私の中に入り込んできました。追体験のように身体の痛みまでしつかりと感じられますの。

「うふふふ……シャットダウンですの」

強制的に意識を停止させて眠りにつかせ、培養液を満たし直して装置を再起動します。ステラちゃんの身体を調べると脳にダメージまでありました。念動力による自傷でしょう。

「ステラちゃんを起こすにはまず、記憶を消去したりしないといけませんわね。さて、そのような技術がどこにあるか……ああ、ありますわね」

ブレインコンピュータを通して各部署に連絡を入れておきます。特にイネスさんには頑張ってもらいます。他にはカルヴィナさんとライルさんの二人を呼び出しましょう。それと秘密ブロックの格納庫にホワイト・グリントとブラック・グリントの二体を取り出しておきます。

それぞれ武装はライフルとミサイル。レーザーブレードを用意。IFSも適応させているので問題ありません。それと外装にナノマシンを使った光学迷彩を利用したス

キンを適応し、姿をゲシュトペンストMK-IIIとゲシュペンストMK-IVの二機に見えるようにしておきますの。後は二人に訓練しておいてもらいます。

準備が整えば襲撃を行い、ステラちゃんを助けるために必要な技術を手に入れます。狙うべきは当初の予定通り、スクールですの。ここになら記憶操作技術がありますの。すぐにも襲撃したいのですが、スクールを襲撃したらラトウーニを始めオウカさんなども救出しなければなりません。故にどうしても脱出用の戦艦が必要です。上と繋がっていればウルブスが来る可能性もありますし、DCの連中が……それこそピアン・ゾルダークがヴァルシオンで現れる可能性もありますもの

『社長。指示された場所に到着したわ』

「今、通路を開きますので指示された通りに進んでくださいですの。その通りに進まないいと死ぬかもしれませんので気をつけてくださいね？」

『了解』

お二人がやってくる前にステラちゃんに別れを告げてから場所を移動し、格納庫の方へ移動します。広い格納庫にブラック・グリントとホワイト・グリントを亜空間より取り出して配置します。カルヴィナさんとライルさんのバイタルデータとこれまでの戦闘データを入れてからシステムチェックを走らせていきます。

「ようこそですの」

扉が開いたのでクルリと回転して二人を迎え入れますの。私のバックにはブラック・グリントとホワイト・グリントが鎮座しておりますので、良い感じになったでしょう。

「これが俺達の新しい機体か……」

「使えそうならいいけどね」

「ふふ、使えそうじゃなくて使えるようになっていただきますの。とりあえず、一ヶ月で乗って戦闘できるようにはなつていただきます」

「マジかよ……」

「そう言うって事は例の作戦に必要なのね」

「はい。予定を変更してできるだけ早く襲撃します。それと私も行きますが、護衛のパーソナルトルーパーやアーマードモジュールの排除はお二人にお願いしますの。徹底的に排除してください。ただし、できる限り殺さないようお願いします。おそろく、彼等は実験体を投入してくるでしょうから」

「そいつは厄介だな」

「保障はできないわよ。殺してしまうかもしれない。私としては自分の命を優先するか」

「ええ、それで構いません。ですが、こちらが指定した人だけは捕獲でお願いしますの。一応、先に侵入して助けられるようにしておきますの」

そっちの方が確実ですしね。あくまでもお二人にお願いするのは護衛戦力の殲滅です。事が起こった時は撤退の支援もしてもらおう予定ですの。

「どちらにせよ三カ月しか月日はないと思つてください。その頃になれば母艦もできるでしょう。ただし、いいですか、お二人の機体とその戦艦はネルガル・マオインダストリー社とは一切関係ありませんし、レッドアクシズとも関係ありません。ですから、やばくなれば自爆して脱出してくださいね。絶対に鹵獲されてはいけません。その為に脱出装置も完備させてあります」

「了解よ」

「わかった」

自爆と同時にアインストを使つて近場に強制転移させますの。お二人のようなネームドを無駄に殺すなんて事はできませんしね。

「訓練時は偽装スキンを使つてゲシユ^{アル}ペンストMK^{アイ}IIIとゲシユ^{ヴァ}ペンストMK^{リッ}IVに偽装させてやるようにお願いしますの。ここは好きに使つていいので、AIを使つて修理や調整をお願いしますね」

「社長はこれからどうするんだ？」

「私はこれから地上でスカウトしに行きます」

「社長自らという事はかなりVIPかしら？」

「どうなんだ？」

「VIPですの。これから私達に必要な技術を持つている人達ですの、なんとしても仲間に引き入れますの」

「まあ、私達に関係ないならいいわ。今はライルを使い物になるようにしなきゃね」

「お手柔らかに頼むぜ、姐さん」

「却下ですの。人の命がかかわるので徹底的にお願いしますの」

「任せなさい」

「うえ……」

「ボーナスは弾みますから、頑張ってくださいですの」

「了解」

さて、二人はそれぞれの機体に乗っていきました。最終調整をそれぞれのAIに任せつつ最適化を行います。細かな調整を行えば一度外に出て動かしてもらいます。加速性能とか改造ヴァングレイ並みの馬鹿みたいな感じですが、戻る時はAI制御にすれば安全運転で戻れます。とりあえず、帰宅用の船が出るまではお二人のお手伝いを行いますの。



次の日。無事に地球へと戻り、白色のキャミソールと赤色のスカートという服装に変えてから護衛を連れて時流エンジンを研究している時流研究所に向かいます。

「予想以上に寂れていますの」

とてもじゃないですが、研究所には見えませんの。まるで廃工場のような場所ですが、時流研究所と表札に書かれていますので入口を潜って中に入ります。護衛の人達を待機させ、少し進んでいくとすぐに白衣を着た大人の人がやって来ました。

「お嬢ちゃん、なんのようだい？　フィオナ達の友達かな？」

「はじめまして、フェル・グレーデンさま。私はアルフィミイといいますの。この名前に覚えがありますよね？」

「ああ、もちろんだ。君が支援してくれていたのだね」

「そうですの。お会いできて光栄ですフェル・グレーデン様」

案内されたのはまさに研究所という感じな場所で、色々とごちゃごちゃ物が置かれていますの。もちろん、大きな試作型のエンジンが中央に置かれておりました。

「これが試作機ですの？」

「ああ、その通りだ。君の資金があつたからこそここまで出来た」

「それは良かったです。ですが、まだ完成はしていませんの。研究資料を見せてもらつても？」

「ああ。これが研究資料だ」

「座つてもよろしいですか？」

「もちろんだ。お茶も用意しよう」

「ありがとうございますの」

用意された椅子に座り、渡された論文を読んでいきます。疑問に思つた場所はフェル・グレーデン博士と話し、吸収した様々な科学者の知識と演算装置を利用して問題点を洗い出していきますの。

「理論も今陥つてる問題も分かりましたの」

90分ほどかけてしつかりと読み込んで理解しました。これなら、得た知識とネルガル・マオインダストリー社の施設を使えばどうにかできます。

「ここはここにパイパスを繋げるば良いと思ひますの」

「成程……………しかし、ここが……………」

「それなら、こう……………」

「何やつてんだ？」

「丁度良い。お前も参加しろ」

帰ってきたもう一人のおじさん……多分、ラージさんの父親も加えて、三人で時流エンジンの設計図を改造していっちゃいますの。こちらが出した意見に対して検討していくと新たな改定案が出てきます。それを見て更に意見を出していきますの。

時間を忘れて話すこと5時間。ある程度まで作り上げる事ができました。ただ、ここで作るには色々と問題がありますの。

「後は作るだけだが………今日はもう遅いし泊まって行きなさい」

「それはありがたいですの。ただ、皆様に提案があります。正直、この技術はとても危険です。ですから、私が社長を務めているネルガル・マオインダストリー社にご家族ごと来ていただきたいと思っております。もちろん、かかる費用から手続きまで全てこちらが持ちますの。資金も資材も施設も使い放題とさせてもらいます」

「本当か!？」

「いや、待つんだフェル。確かに美味しい話だが、息子達の事もある。それにこう言っただけなんだが、彼女の事は……」

「む」

「信じる信じないは置いておいて、護衛は最低限つけさせてもらいますの。こちらは

フェル・グレーデン博士の暗殺計画を掴みました」

「嘘だ！ 連中は信じていないんだぞ！」

「しかし、万が一もあります。ましてや私が支援しているのですから、実現する可能性は高いと思われるでしょう。狙われる理由は充分ですの。それにタイムマシンの危険性は考えただけでもわかるはずですの。私なら味方にならなければ味方になるように手を打ちますし、失敗すれば確実に消しにかかりますの。だって、過去に戻られて私という存在を消されたらかないませんもの」

「それは……」

「息子や娘を人質に取るという事か……」

「可能性は高いです。特に火星騎士は確実に狙ってくるでしょうね」

「そちらの会社に行けば守ってくれるのか？」

「ええ、もちろんですの。私の会社は常に最新鋭のパーソナルトルーパー数十機に守らせておりますし、白兵戦力もかなりありますの」

完全な軍事拠点として要塞化している我社の施設データを見せます。内部に学校もあるので子供でも安心です。また英才教育も施せるので将来も安泰ですの。

「福利厚生はこちらで……」

「わかった。この話を受けよう」

「いいのか？」

「ああ。そっちの方が安心できる。確かにタイムマシンの危険性は考えられるだけではないからでもある」

「では、よろしくお願いいたしますの」

「こちらこそ」

「私の方もよろしく頼む」

三人で握手してから細部を詰めていきますの。しっかりと契約書も交わしておいたので安心ですの。

「それじゃあ、娘を紹介しよう」

「はいですの」

それから、二階に移動してご飯を作っていた三人を紹介されましたの。

「こちらアルフィミイ。これから世話になる会社の社長だ」

「よろしく願いますですの」

「小さいのに凄いな。私はフィオナ・グレーデン。よろしくね！」

「俺はラウル・グレーデン。フィオナの双子の兄だ」

「あたしの方がお姉ちゃんだけだね」

赤い髪の二人。双子だけあってよく似た顔たちをしています。この二人がRの主人

公ですの。良かった。彼等は無事でした。これでデユナミスに対抗できるかもしれない。ただ今はこっちですの。

「そうなんですの？ どちらが兄か姉かは後で判断しますの」

「ボクがラージ・モントーヤだ。よろしく」

「はい。こちらこそ」

それから、六人で食事をとっていく。話は自然と時流エンジンへと流れて最後に引越しいつについての話になりました。彼等にも懇切丁寧に時流エンジンを持つ危険性を説明し、ネルガル・マオインダストリー社に移る事へのメリットとデメリットをしっかりと伝えます。

「私は別に構わないわよ。それに大企業の後ろ盾があつたら研究も進むしね」

「確かにそうだね。今までよりも更に高度な研究ができるだろう」

「俺は……パイロットになれるなら構わない」

三人共、問題ないようなのでしつかりと確保できました。今回は問題なくてとてもグッドですの。

「あ、ただ一人だけ追加できるかな？」

「構いませんが、誰ですの？」

「ミズホちゃん……」

「あつー！」

「ミズホか。確かに彼女も居た方がいいな」

「あつ、ということは彼女を知っているのか？」

「ちゃんと調査していますからね」

「いやはや、確かにミズホちゃんはまだ居ませんでしたね。彼女の家族も含めて全員、連れていきましよう。正直、デュミナスの襲撃に対抗できるかは微妙ですが、アインストの力をぶつけてやりますの。ええ、デュミナスが現れたのならばアインスト案件ですの。」

「食事が終わったら荷物を纏めてくれ」

「はーい」

「これで問題はない……そう思ったら滅茶苦茶嫌な予感がしましたの。このままここに居たら致命的な失敗をするかのような……これは悪意？」

「ちつ。全部隊に到達。襲撃の可能性があります。即座に警戒して臨戦態勢をとってください。それと部隊の増援を要請します」

「通信端末を使って全員に教えておきます。不思議がられていますが、こちらの言葉を聞いて全員が息をのみました。しかし、ここまでしても念動力は私に危険を訴えてきていますの。ここに居る人達は安全……ここに居る人達？」

「フィオナ！ ミズホさんの家はどこですの！」

「えっと、それは……まさかミズホが襲われてるのっ!？」

「っ！」

「待ちなさい！」

ラウルが飛び出していったので、私も追いますの。護衛にはここを守らせておきます。

「皆さんはここで待っていてください。私の護衛がしっかりと守ってくれます。いざとなれば連れて脱出するように言っておきます」

「わ、わかった」

急いで飛び出し、ラウルの後を追います。虚空から刀とアサルトライフルを取り出しながら走っていくとラウルはバイクに乗って進んでいきました。私はそれに追いつき、座席の後ろに飛び乗ります。

「バイクに追いつくって……」

「私は色々強化していますからね。それよりも急いでください」

「ああ！」

嫌な予感はどうどん膨れ上がってきますの。少しすると警報が鳴り響き出しました。何が出てくるかわかりませんが、非常に、非常に嫌な予感がしますの。

「な、なあ、アレって……」

「空間歪曲……きますの！ 急いでくださいー！」

道路を爆走していると、空間が歪んでそこから現れたのは頭部が仮面のような無機質な形状をしていて、首にあたる部分はなく手足の形状は細く長い。巨大なソイツは掌から光の光線を出し、ビルを切断していく。

「マジかよー！」

「止まるなつ、走れですの！」

「でもビルの残骸がつ！」

「問題ありませんの！」

アサルトライフルの弾丸を生体電流を発生させて加速し、崩れてくるビルに命中させて撃ち落とします。近付く破片は巨大化させた刀で切り落としていきます。

「あの化け物はなんだよー！」

「異星人！ いえ、使徒ですの！」

「使徒って数十年前にセカンドインパクトを起こしたつていう……」

「多分それですの！」

時系列はちよつと違うようで数十年前という事でかなり昔みたいなのです。しかし、このタイミングでこんな場所に現れるんじゃないやありませんの！ こんなところにエヴァも

アダムもリリスも居ませんのよ!

「右! 次左ですの!」

「おう!」

ラウルに指示して避けさせながら突き進むと、目の前に車が沢山止まっただけで、そこから人が逃げていきます。ラウルはそのまま突っ込んで車の上を走っていきます。その間にこちらは指示を出して護衛に博士達を連れて即座に撤退するように伝えます。

「ミズホの家は!」

「もうつく!」

急カーブをかなりの速度で突っ込んだ為に曲がりきれないので、私が壁を蹴ったり、地面を掴んで支えたり削ったりしながら突き当りの家に突入しました。

「ミズホ! どこだ!」

「ら、ラウルさんっ!?!」

なんとミズホさんはお風呂に入っていたようでタオルを巻いただけの姿でした。ラッキーですわね。いえ、この状況ではアンラッキーですの。

「イチヤコラせずにさっさと逃げますのよ! あんな化け物なんて相手してられませんの!」

「ああ、そうだった! 来い!」

「え、えっ、まっつてくださいつ！」

「却下ですよ！」

「ふえええっ！」

外に出ると使徒、サキエルの顔がすぐ近くにありました。思わずアサルトライフルを乱射しますが、ATフィールドに当然のように防がれますの。

「ラウルはミズホを連れて逃げなさい！」

「お前は どうするんだ！」

「私は 困りますの！」

「でも……」

「大丈夫。私は どうとでも……」

サキエルの拳を後ろに下がって避け、攻撃してくるタイミングで刀を使って斬り裂きます。青い血が流れてくるので、それを吸収して解析します。相手はどうやら私を脅威と見たようで、光線を放ってきます。ですので全速力で逃げますの。

光が私を飲み込む直前に少し離れた位置に転移し、アサルトライフルを撃ちながらラウル達から離れていきますの。怖い怖い鬼ごっこ……というか、もしかしてサキエルの狙いは私ですか？ それならこんなに追ってくるのも理解できます。

「ヘルプ！ ヘルプ！ ヘルプミ——！」

光線を避けていると戦闘機が飛んできました。即座にミサイルを放ちますが、光線で機体ごと切断されて墜落しました。地球連邦軍のパersonナルトルーパーやアーマードモジュールもやってきますが、普通に蹂躪されます。相手になっていませんの。まあ、こちらの攻撃は無効化されるので仕方がないです。ATフィールドはガチャバですの！

というわけで、その辺にあるバイクを無断で貰って逃走します。ちゃんと適度にアサルトライフルで挑発をしながら、バイクをアインスト化させての移動ですの。

お母様に救援を求めたいですが、支援しないとされているので仕方がありませんの。とりあえず、ラウルとミズホが逃げるまでデットヒートでスリル満点な遊びをします。

『社長。目標の回収と退却を完了しました。護衛のゲシュペンストMK-IIIなどはどうしますか？』

「では戦闘に参加して避難誘導が終わるまで相手をしてください。こちらの攻撃はほぼ効きませんが、グラビティブラストなどが効果あるか試してください」

『了解。効果なしの場合は……』

「相手に突撃して機体を自爆させなさい。もちろん、脱出はちゃんとするようにしなさい。何のためにAIを搭載しているか、わかっていますわよね？」

『はっ！ 必ず生きて戻ります！』

「よろしいですの。レッドアクシズとしての戦闘を許可します。全力で潰すですの！」
『イエッサー！』

さて、どうにかなると思いますが、これから使徒の事も考えないといけませんの。まあ、相手はエヴァンゲリオンに任せましょう。まさか、まだ開発が終わってないなんて事はありませんわよね？

更にはDC残党まで現れて地球連邦軍と使徒の三つ巴となりました。

サキエルちゃんはブラックホールの自爆を三発受けて撤退していきまされたの。そう、撤退。ブラックホール受けても死なないとか、スパロボ設定じゃ絶対にありませんの。助けてエヴァンゲリオン！

DC残党は普通に残った機体で狩れました。ゲシユペンストMKIIとは違うのですの！

第37話

【地球 カツシユ邸 ドモン・カツシユ】

父さんとレインのお父さん、ミカムラおじさんが後ろ手で縛られ、連れて行かれた。そして、俺とレインはもう人の姿をした父さん達を見る事はなかった。俺達の所に戻ってきたのは遺髪と少しの遺骨だけだ。

父さん達の知り合いだと名乗る女性がやってきて、その遺骨と遺髪が本物かどうか確認させて欲しいと言ってきた。彼等の話では父さん達を死刑にするように糾弾したネルガル・マオインダストリー社のアルフィミー・M・ブロウニングはサイボーグを作る技術を持つているので生きている可能性があるらしい。俺とレインは藁にも縋る思いでお願ひしたが、結果は本人の物だと確認された。遺骨も間違いなく本人の物であり、無くなっていたら生きていない事は確実だとの事だ。それが判明して俺とレインは泣いた。知り合いの人は悔しそうに唇を噛みしめていた。

その人に頼み込んでどうか裁判の記録映像だけは見せてもらった。その映像で知ったのは父さんとおじさんが開発していた機体を父さん達と兄さんが奪い、逃走したらしい。父さん達は捕まり、兄さんはアルティメットガンダムに乗って地球へと逃走に成功したとのことだ。逃げた兄さんは運が悪いのか、狙ったのか、地球が崩壊する原因となりえる事に対して地球連邦政府の依頼で解決しようとしていたネルガル・マオインダストリー社の部隊が大気圏を突入してきた兄さん達により、少なくとも被害を受けたとのこと。

これによって、死傷者も出ていてネルガル・マオインダストリー社は死刑にするように動いた。既に手が回っていたらしく、父さん達は何も喋らせてもらえず、知り合いだとか名乗った人が雇った弁護士が「異議あり！」と申し立ててなんとか減刑して冷凍睡眠刑にしようとしてくれた。だが、それもネルガル・マオインダストリー社側にある監査が提示した安全装置である自壊コードを解除していた事などを理由に却下され、ネルガル・マオインダストリー社が求めた死刑が確定した。

「お父さん……なんでこんな事をしたのよ……」
「いったいどういふつもりなんだ……」

俺とレインはソファアに座りながら、見せてもらった映像を信じたくないという思いが募ってくる。父さんと兄さんが強奪なんてするとは思えない。父さん達は本当に地

球を再生させるために頑張っていたのを俺は知っている。何せ定期的に連絡を寄越してきた時にはとても楽しそうだったからだ。それにいくら考えても父さん達がこのような事をする理由は思いつかない。

「お二人は嵌められた可能性があります」

俺達の座るソファアールの後ろからそつと女性が囁いてきた。その言葉に最初は信じられなかったが、意味が理解できると思わず叫んでいた。

「本当か!？」

「ええ、本当です。我々が調べたところ、今回の件で一番得をしたのは誰でしょうか?」「そんな奴が居るのか?」

「被害を受けているのはかなり多い人よね。下手したら地球が減んじやつたかもしれないし……」

「ええ、その通りです。ですが、それは表面的な事であり、裏ではしっかりと利益を得ている存在が居ますわ」

「父さん達が死ぬ事で利益を得られる……? それってきつと技術の特許とかよね……でも慰謝料として取られることになる。そんな状態でも利益を得たとしたら……まさか……」

「気付いたようですわね」

「一体誰なんだレイン！」

「……その、ネルガル・マオインダストリー社の社長、アルフィミイ・M・ブロウニングよ」

アルフィミイ・M・ブロウニングか！ ならソイツを問い詰めて……待て？ ソイツは確か、一番被害を受けた奴じゃないか？

「レイン、それはないだろう。被害を受けた張本人が得をするのか？」

「父さんから聞いたけれど、アルフィミイ・M・ブロウニングは少し前までネオ・ジャパノコロニーで父さん達と一緒に研究していたそうなの」

「確かにそれは俺も聞いた。だが、それが何の関係があるんだ？」

「ありますわよ。カツシュ博士とミカムラ博士が死んだ事で彼等が研究していた技術はアルフィミイのみが所有する事になりました。そのナノマシン技術はネルガル・マオインダストリー社の躍進を支えておりましてよ」

「父さん達は技術を盗用されたというのか!？」

「慰謝料を支払う必要があるのはネオ・ジャパノコロニーとネルガル・マオインダストリー社だけです。それ以外はありません。そして、ネオ・ジャパノコロニーに関してはこちらもネルガル・マオインダストリー社より管理責任を追究する声が上がっております。特にウルベ・イシカワさんにきつく言っているみたいでしょ？」

「どういふことだ？」

「つまり、管理責任を問う事でネルガル・マオインダストリー社はお父さんとカツシュおじさんが持つ特許とかを全て手に入れたってことよ……」

「っ!？」

確かにレインの言う通り、事実を並べていくとネルガル・マオインダストリー社がとてつもなく怪しくなってきた。全てが自作自演の可能性すらある。そうなると父さん達は利用されて殺されたということになる。ましてや自分は被害者として

「ふざけるなっ!」

「お、落ち着いて! あくまで推測よ! それに彼女も巻き込まれているのよ? 自分が死ぬ可能性があるような事まで計算して事に及ぶかしら?」

「それは……」

「彼女ならどうあっても生き残る算段があつたのじゃないかしら? 何せたつたの二人で火星騎士の本拠地を落として奪取してきたような化け物ですもの」

「嘘でしょ? いくらなんでもそれは……」

「事実なのよね」

たつた二人で軍事拠点を襲撃した上で奪取するなんて、普通は無理だ。そんな事が可能なのは――

「まるで師匠みたいな奴だな……」

——俺の師匠である東方不敗マスターアジアなら可能だろう。何せあの人はパーソナルトルーパーやアーマードモジュールだつて素手で破壊できるのだから。

「あら、貴方の師匠は凄いのね」

「師匠は最強だからな」

「どちらにしても、怪しいのはネルガル・マオインダストリー社の社長、アルフィミー・M・ブrowningよ。彼女の情報を得るためにもドモンのお兄さんを探さないとね」

「そうだな。兄さんとこの女を見つけて出して情報を吐かせる。そして、もし父さん達を嵌めたのなら、その落とし前はつけさせてやる」

「それでしたら、私が協力できます」

「助かります」

「よろしく頼む」

「ええ、こちらこそよろしく願いますわ♪」

彼女と握手を交わして共に目的を確認した。そして、彼女から俺達は兄さんとアルフィミー・M・ブrowningを追って調べるための力を受け取った。彼女曰く、レインのおじさんが作っていた機体らしい。ネルガル・マオインダストリー社に接収される前にウルベ・イシカワ少佐から譲り受けていたらしい。

「これが父さんの作った機体ね。名前は……シャイニングガンダムかしら？」

「シャイニングガンダムか……いい名前だ。気に入った。行くぞレイン」

「ええ、行きましょう。ドモン」

俺とレインは彼女に見送られながら、二人を追うために旅へ出た。その少し後に届いた物を見ていたら、また結果は違ったのかもしれない。

【???

『これを見ているという事は私達は無事に処刑されたのだろう。ドモン。お前には辛い役目を押し付けることになるが、どうかキョウジを助けてやってくれ。それと何かあればネルガル・マオインダストリー社を頼れ。そこでシュドウという者が、ルリ・ホシノ、アルフィミイに連絡を取るんだ。そうすれば最大限の支援をしてくれるように頼んである。彼女達は信用できる。だから、協力してアルティメットガンダム……デビルガンダムを倒してくれ……頼むぞ、ドモン。それとレインと仲良くするんだぞ』

「以上が彼等が出て行った後、届けられた物です」

「ボロは出しませんわね。残念」

「生きていると思うのですか？ 確認した物は確かにライゾウ・カツシユとミカムラ博士の物でしたが……」

「あのね。相手はアルフィミイ・M・ブロウニングなのよ？」

「どういうことでしょうか？」

「ブロウニングよ、ブロウニング！ わかりなさい！」

「……まさか、人造人間の技術を使って生み出した可能性があるのですか？」

「すくなくともクローン技術は持っているでしょうね。論文もレモン・ブロウニングが出しているわけだし」

「……調べます」

「いえ、その必要はないわ。これ以上の犠牲は必要ないもの。ですから、別の所にお願ひしましょう」

「かしこまりました。すぐに手配いたしますお嬢様」

「ええ、よろしく」

【宇宙 ラグランジュポイント ソレスタルビーイング秘密ドック スメラギ・李・ノリ

エガ」

「来たか。それでどうなった？」

「コアの移設は無事に終了したわ」

フリーフィングルームに呼び出したガンダムマイスターの四人、刹那、ロックオン、アレルヤ、ティエリアがしっかりとこちらを見詰めて話を聞いているのを確認して進めていく。

「ヴェーダも問題なく稼働している。問題はない」

「一先ずはこれで様子見をしたかったのだけれど、そうも行かないわ。ヴェーダから指令が来たの」

「おいおい、早速かよ」

「不満なのか？」

「いや、ここの所暇してたから、むしろ嬉しいね。刹那はどうだ？」

「どうでもいい」

「はい、そこまでよ。まず指令について伝えるわよ」

手を叩いて注目を集めてからモニターにコロニーのデータを表示する。

「このコロニーはネルガル・マオイנדASTROR社が所有する物で、元はL4宙域にあつ

た物を彼等が運んできたわ」

「L4宙域と言えば確か、バイオテロかなんかで破棄されたはずでは？」

「それを買って取りサイクルした奴がネルガル・マオインダストリー社に販売したみたい」

「ソイツの正体は？」

「すでに判明している。買ったのはアルフィミイ・ブロウニングだ」

「つまり、彼女個人の所有物って事か。金持ちだねえ」

「その資金が何処から出ているかは不明よ」

「怪しいな」

アレルヤ達の言う通り、かなり怪しい。資金をヴェーダが追おうとしているけれど、複数の場所にトラップが仕掛けられていて、難航している。アチラはまるでこちらを意識しているかのように痕跡を消したり、逆探知を仕掛けたりしていきっているので中々難しいみたい。

「ただ、可能性がある場所は判明しているわ」

「何処だ？」

「アズラエル財団とかね。同時期にかなりの出費をしているわ」

「表向きはそうなっているが、実際は奪われた可能性が高い。その金の使い道は孤児院

などにも使われているようだ」

「なるほど、義賊ってか」

「その背後にアインストが居るとなると目的は恐ろしいけれどね」

「アインストについては確定なのだろうか？」

アレルヤの質問の通り、確定はしていない。ただし、かなり怪しい。そもそも彼女の持つ技術は明らかに逸脱している。だから、可能性として考えられるのは、知っているはずの無い、この世の誰にも知りえないはずのことを知っている人間、ウイスパードである可能性もある。でも、それにしても多種多様な技術に秀でているのよね。確かにナノマシン技術に重きを置いているみたいだけれど、それ以外にも色々とおかしな部分はある。

「まず判明している事は彼女の身体能力が人間を超越している事。高い技術力を持っている事。そして、私達の事を知っている事よ」

「俺達の事を知っているとはどういう事だ？」

「この戦闘データを見て頂戴」

私が見せたのはアルフィミイと最初に戦った時の解析したデータだ。解析すると普通では見落としがちな色々とおかしな所が見られる。

「何処がおかしいんだ？」

「……俺もわからん」

「アレルヤと刹那は無理みたいね。ロックオンはどうかしら？」

「……コイツ、俺達の攻撃パターンや戦い方を知ってやがるな」

まるで未来を予測しているかのような回避行動にこちらの武器の特性を的確に把握し、それぞれが苦手な分野で攻めていつている。

「なに？」

「そんな事がありえるのか？」

「裏切り者が居る可能性は無いとはいえない。でも、少なくともマイスターの情報と太陽炉の事が漏れているのは事実よ」

「それはシヤレになってねえ……」

「ああ、その通りだ。こちらを見てくれ」

テイエリアが表示してくれたデータには地球連邦軍内部に潜ませている仲間から、私達のガンダムがエクシア、デユナメス、ヴァーチェなど、こちらの事を知っていないと一致しないような名前なのよね。

「一つならまだ可能性はある。だが、二つも三つもなると確実だな」

「太陽炉はどうなんだ？」

「そっちはネルガル・マオインダストリー社が極秘裏に開発しているみたいよ」

「アレは木星でしか作れないはずだが……」

「その環境を重力制御技術を使って社内施設で再現しているみたいよ。重力変動をヴェーダが観測したの。そのデータを解析したところ、木星と同じ状況に作られていたわ」

「太陽炉が本格的に作られる可能性があるか」

「ええ、それは非常に不味いの」

「だからと言って襲撃するわけにはいかない。俺達の目的はあくまでも戦争根絶だ」

「その通りよ。先の戦いはあくまでもアインスト側から仕掛けられていた事もあるからこそ、作戦を実行したわ。だから、個人や企業としてならネルガル・マオインダストリー社は私達の対象にならない。それこそイスルギ重工のように死の商人でもなければね」

「という事は何かあったのか？」

「ええ、そうよ刹那。ネルガル・マオインダストリー社にレッドアクシズという地球連邦軍とは指揮系統が完全に別な上に拒否権を持つ独立治安維持部隊が設立されたの。その戦力は全てネルガル・マオインダストリー社が無償で戦艦から機体、パイロットまで提供するそうよ」

「言ってしまうえば完全な私設武装組織なのよね。」

「つまり、戦争を助長させる存在か」

「そうなる可能性が非常に高いわ」

私達が掲げる戦争根絶という目的を遂げる為に私達が人類の敵となり、地球連邦を再び一つの組織に作り直すという手段を取っている。これ等は全て、もう一度来るであろう異星人との対話に失敗しないためと、失敗したとしても地球を守りぬくための手段。友好か敵対か、どちらにしても地球圏は一つにならないとならない。デイヴァインクルセイダーズがちゃんと動いてくれたら、ソレスタルビーイングとして活動する理由はなかった。けれども、今のデイヴァインクルセイダーズはその目的を忘れて欲望の為に活動する最悪な組織となりさがった。だからこそ、私達が今一度立ち上がらなければならぬ。

「指揮系統の乱れは付け入る隙を生み出すから、認めるわけにはいかないわ。それにネルガル・マオインダストリー社が所有するコロニー・モデルでは違法研究が行われている可能性もあるの。だから、そっちの証拠も手に入れる事が目的よ」

「了解した」

「俺も問題ない」

「こつちもだ」

「ぼ……俺も大丈夫だ。それでメンバーはどうする?」

「前回の事を考えて、今度は全員で行くわ。まず支援としてロックオンとティエリア。

二人には撤退時、時間稼ぎを遠距離からお願ひするわ」

「了解した」

「任せろ」

「潜入は刹那とアレルヤよ。二人共、行ける？」

「ああ、問題ない」

「訓練はちゃんと受けているから、大丈夫だと思ふ」

「じゃあ、準備して頂戴。こつちもコネを使つて潜入する用意をしておくから」

全員の返事を聞いてから、私はスポンサーの一人に連絡を取つてどうにかネルガル・マオインダストリー社に入り込む方法をお願ひした。あちらから良い返事が来てくれると嬉しいのだけど……

第38話

サキエルちゃんとDC残党との楽しい、楽しいランデブーを体験した私は無事、スーパーロボット大戦Rシリーズの主人公達とその父親さん達を確保できましたの。

「全然楽しそうじゃないよ、お姉ちゃん」

「そりやそうですの。全然嬉しくありませんもの」

いえ、ミズホさん達を無事に確保できたのはとても嬉しいのですの。でも、スーパーロボット大戦仕様じゃないスーパーでハイパーモードのサキエルちゃんと出会いたくなくてありませんでした。それにDC残党まで乱入してきました。ええ、彼等も当然のように私を狙ってきました。

なので、DC残党をサキエルちゃんへの肉壁としながらゲシュトペンストMKⅢ^{アルトアイゼンナハト}達を取り付かせて自爆。その後は普通にこちらの護衛達がDC残党を撃ち滅ぼしました。ここまでは構いません。

「問題は地球連邦軍ですの。スクランブルへの対応が遅い。来てもこちらへ参加しようともせず遠巻きで見てただけですよ？」

オルレアンにある本社。その通路を歩きながら、隣を一緒に歩いている私の愛しい愛しい電子の妖精ちゃんへと振り返りながら不満をぶつけますの。

「お姉ちゃん、遅いのは事実だけれど、普通に考えてサキエルという使徒相手に連邦軍の兵器じゃ対抗できないです」

「でも、サキエルちゃんが撤退してからなら……」

「グラビティブラストを連射して撃墜しているような戦場に突入できますか？」

「私はできますのよ？」

「お姉ちゃんはできませんが、他の部隊の人は無理です。現場の指揮官さんの判断は正しいかと。ちゃんと逃がさないようにはしてくれていましたから」

「つまり、全ては装備が悪いと」

「装備もそうですけれど、こちらの練度が低いのも問題ですね。もつと連携と技術を上げないといけません」

「それもそうですわね。総じて一部部隊を除いて地球連邦軍の練度は低いです。第一次DC戦争、インスペクター襲撃。これらの事件により、ベテランや優秀な技術を持つ者達がほとんど死に絶え、技術の継承が疎かになっておりますの。そしてその後に来た平和で腐つていき、一部の軍人を除いてダメダメな状態になりました。そこで火星との戦争です。ウルブズやシャドウミラーを除いた部隊は被害甚大で、再編を余儀なくされて

おります。そんな状況なのにプラントとの戦争とはいやはや、馬鹿ばつかですの」

「本当に馬鹿ばつかです」

まあ、だからこそ付け入る隙はありますの。暗躍するにはいい土壌ではあります。そのせいで絶望しかありませんが。

「取り急ぎ、部隊の練度を上げる必要がありますの。いくら兵器が優れている名刀でも、使い手が駄目では鈍らにしかありませんしね。ルリちゃん、肉体を改造したパイロット達にゼロを使いこなせるようになるまで耐久のスパルタコースを施してやりましょう」

「全員に強化した訓練プログラムを受けさせるように調整します。相手はどうしますか？」

「サキエルちゃんのデータでお願いしますの」

「……使徒ですよね？」

「使徒ですの☆」

「現状の装備では勝てないんじゃないですか？」

「ええ、でもサキエルちゃんを相手にしていたら生き残る事はできますわよね？」

「まあ、それは確実に成長すると思います」

「ならそれで構いませんの。死ななければ成長する機会はいくらでもあります。そうですね、彼等には殺し合いをしてもらいましょう。レッドアクシズに弱者は要りません

の

「殺し合いですか……？　本気で言ってます？」

「はいですの。なづけてチキチキ☆バトルロイヤルですの！　罰ゲームは恥ずかしい黒歴史を全員の前で告白ですの！」

「……あ、殺すって精神的な意味でなんですね」

「まあ、手足の一本や二本、再生できるのでどうとでもなりますけどね」

「この企画をパイロット達に送ってみたら、「社長は血も涙もない！」「鬼畜外道！」とか色々と言われました。ですが、ここは心をベルゼイン・リヒカイトにしてやってやりますの。ちよつと性癖バレたり、黒歴史を言わされるだけですの。無い人には作ってもらいます。そう、罰ゲームはS A N チェックですよ！」

ただ、鞭だけでは駄目なので褒美もちゃんと用意しておきます。バトルロイヤルの勝者と使徒の撃破や一定時間の耐久が成功した方には賞金と副賞としてその人が望むアンドロイドをオーダーメイドしてプレゼントします。もちろん、お嫁さんやお婿さんとしても使えるようにしております。ご家族の方にはメイドさんか執事さんが手に入るくらいです。支援A Iの方々も身体が手に入るかもしれないとなると本気で参加してくれるでしょう。普通に値段が億単位ですからね。

「飴と鞭はこれで良いとして……問題はネルフですね。ルリちゃん、連絡はしてくれま

したよね?」

「しましたが、ちゃんとした回答はまだ頂いていません」

「そうですか」

使徒の専門機関としてネルフが作られています。こちらにレッドアクシズとネルガル・マオインダストリー社から正式に使徒について情報開示を求めましたが、断られました。まあ、これはわかりきっていたのでいいのですが、代わりに使徒に対する兵器を見せろと言っておきました。こちらは委員会を通して通達したので無視するのなら、武力行使も辞さない構えです。違法研究や許可してない危険物などヤバイ物的証拠はいっぱいありますもの。

後は突入すれば問題ありません。なくてもでつち上げますからね。お爺様もゼーレは常々排除しておきたいと思っておられるようですし、渡りに船らしいです。ネルフがまともな組織なら使徒の対処の為にこんな事はしないのですが、裏はドロドロですから仕方がありません。

「でも、ネルフに行つてどうするんですか? 言っておきますが、お姉ちゃんの色んな組織から狙われています。ゼーレと協力して襲ってくる可能性もあります」

「大丈夫ですよ。いざとなれば転移を使いますし、護衛はしっかりと連れていきますからね。それに予備の身体を作成しておけば問題ありませんの」

UG細胞とアインスト細胞を利用して増殖させた分身を複製すれば何か有った時のスペアボディにはなりません。もちろん、嚴重に保管してありますので奪われて悲惨な目に会うことは防止できる……はずですよ。

「本当に気をつけてくださいいね」

「ええ、もちろんですよ」

話している間に会議室へと到着したので、扉を開いて中に入ります。既に会議室には錚々たる顔ぶれがそろっています。それもそのはずで、今回はネルガル・マオインダストリー社の主だったメンバー全員が集合していますからね。もちろん、イネスさんやエイフマン教授などもいらつしやいます。

「お待ちせいたしました。これから会議を始めたいと思います。ですが、その前に新メンバーを紹介いたしますね。ライゾウ・カッシュ博士とミカムラ博士ですよ」

「よろしく頼む」

「よろしくお願います」

「……確か、死んだはずじゃ?」

「社長に処刑されていたわよね?」

「ええ、処刑しましたよ。彼等の半分ですが」

「身体のほとんどをサイボーグ化したのか」

「ですの。何れはクローン技術を使ったしつかりとした肉体をご用意しますの。それまではこれで我慢していただきます」

「構わないです」

「ああ、こちらにも救ってくれた事に感謝している」

「カツシュ博士にはこちらでナノマシン技術の開発をしてもらいます。ミカムラ博士は我々が開発した特殊技術を汎用型として使いやすくなるようにしていただきます。もちろん、どちらも機体を作りたいというのでしたら、企画書を上げていただければ最大限にご協力します。我社は横の繋がりも大事にしているので、我々が持つ技術情報はここに居る皆様にならずべて閲覧できる権限を渡してあります。どうぞご利用ください」

「そこまでしているのか……」

「現在、地球圏は多種多様な存在に狙われていますので、協力なくして勝ち抜く事はできません。その為に確執なきよう、協力しあってください。それに詰まった場所も皆様に考えてもらえば案外、解決する策は簡単にできたりしますしね」

「わかった」

皆様が頷くのを確認してから次の人をご紹介しますしよ。

「続きまして、時流子研究所よりグレーデン博士とモントージ博士です。彼等には時流エンジン……時間が流れる場所であれば無限にエネルギーを生み出し続ける物を作っ

てもらっています」

「ほう、それはタイムマシンにも使えるのかね？」

「我々の考えでは使えます」

「まあ、実験をする必要がありますが、基本的にタイムマシンとしては使いません。どんなタイムパラドックスが起こるかわかりませんからね。ただ、一つの実験はしますの」

「それは何かしら？」

イネスさんが聞いてきたのでしつかりと答えますの。彼女はタイムトラベラーですしね。

「ルリちゃん」

「はい。考えている実験は過去に行き、死んだはずの人を連れてくるということですよ」

「この場合、タイムパラドックスを起こさせないために歴史や現実も含めて死んでいただきます。ですので、用意するのは本人と同じDNAと姿を持つ死体ですの。それを本物とすり替えて連れてきます。これで世界は対象が死んだと観測するはずですよ。その後は名前を変えて生きてもらえばよし。失敗すればなんらかの揺り戻しがおきますが、その時はその時ですよ」

「量子理論か……」

「認識されなければ確定はしていない。なら、認識させて確定させてしまえば矛盾は生

まれないと」

「人造人間の一人として登録しておけば確かに倫理的な問題以外はクリアされるわね」

シユタインズ・ゲートと同じ理論ですね。観測される事で事象が確定します。それが本来の歴史から対象を殺さずに救うとなると揺り戻しが起きて因果が狂います。ですが、対象を死んだと認識させる事で本来の歴史と同じ通りに進ませます。これで過去の改変は完了。未来の改変は未定なのですからまだ問題はありませぬ。まあ、こうする事で多少は因果律が狂う事を防げるはずですよ……そうなるといいという希望的観測にすぎないのですけれどね。

「どちらにしろ、これは我々が研究対象としているボソンジャンプと共同で開発すべきものです。何せ、ボソンジャンプも過去や未来へと移動できるのですから。そうですね、イネスさん」

「それは間違いないわ。そうですね、確かに時流子という物を扱えるのならばボソンジャンプを安定させる事もできるでしょう」

「そういうわけで、皆さんには時流エンジンについてもご協力ください。最悪、これさえ完成させておけばどうか地球の未来は守る事ができますの」

「過去に戻って改変するのね」

「まあ、それはあくまでも最終手段ですの。ですが、その前に一つやる事があります。過去に人を送るよりも、データを送信する方が楽ですよ？」

「……そういうことか。確かに我々が開発したデータを過去に送れば比較的短時間で技術的特異点を超える事ができるはずだ」

「エイフマン教授の言う通りですの。そして、そのデータを過去に飛ばして無限ループを作り上げますの」

「ですが、それには問題もあります。我々の世界は滅びを迎えることになります」

「リーダーさんのいう通り、このままではいけません。平行世界への扉を開くような力がないと。ですが、こちらは心当たりがあるので今はまだよろしいですの。まずは時流エンジンから完成させないと捕らぬ狸の皮算用になってしまいますからね」

「日本の諺か」

ルリちゃん全員にきちつと資料を転送して下さっているので問題ありません。

「では、最後にプロスさんがスカウトして下さった方々をご紹介します」

「はい。今回、スカウトしてきたのは二名です。まずはこの方」

「俺の名前はウリバタケ・セイヤだ！ 日本から来た。ここに来たら好きなだけ改造していいって聞いたからな」

「ええ、構いません。ですが、ちゃんと使える物にはしてもらいますの。チームとしては

ミカムラ博士とよろしく願います」

「かまわないが、どこまでやっていいんだ？」

「とことんですの。強力無比な武装を作ってくださいなくてもいいですし、機体でもいいです。我々は強力な兵器を求めています。それが地球を守る矛と盾になるのですから、いくらでもどうぞ。ですが、実験はまず電脳空間でやってください。現実で作るのは最後です。これだけは守ってくださいね」

「資源の無駄使いはともかく、機材の損傷や爆発事故などは限りなく低くしたいのでよろしく願います」

「ルリちゃんの言う通り、皆さんも安全第一で願いますね。くれぐれも、現実でちよつと思いついたから作ってみたとかいつて作らないでくださいね。ブラツクホルエンジンとか普通にあるので地球が私達の手で壊れる事もあります。それを肝に銘じておくように願います」

私の言葉に全員がしっかりと頷いてくれました。どれだけ危険な物を扱っているのか、しっかりとシミュレーションして全社員に見せて安全第一にしますの。監査も常に常駐させてしっかりと監視します。

「では続いてナミさん、願います」

「はい！ 私はナムサクにあるスーパーロボット対戦を行っている闘技場アリーナでクロスボウ

というチームのオーナー兼整備士を務めていました。プロスさんが私が入社してここで頑張れば会社で開発した機体を使ったり、資金援助を受けたりできると聞いてやってきました！ チーム共々、よろしくお願いします！」

「はい。ありがとうございます。彼女には整備班としてはもちろん、開発者としても頑張ってもらう予定です。ですので、ナミさんは欲しい技術や思い付いた技術があれば報告してください。出来る限り再現しますのです」

「ありがとうございます！」

ウイスパードである彼女は貴重な人材です。他に渡してはなりません。そもそもウイスパードの事についてもしつかりと解明しないと、こちらが送る技術情報が混線して我社に所属しない他のウイスパードに流れたら悲惨な事になりますからね。

「大会チームは戦場が無い時に実戦経験を積むための物として使わせてもらうつもりです。ああ、それと最新技術はある程度禁止させていただきます。レギュレーションもあるでしょうし、鹵獲された場合の事もしつかりと考えないといけませんからね。そうですね……世界大会とかなら我社の威信を考えてガチでやりますが、それ以外は訓練機を用意するのでパイロット達の技術を徹底的に鍛え上げる方向で行かせてもらいます。ミカムラ博士達が開発する汎用機のテストとして出しましょうか。それまではゲシユペンストMK-IVとゲシユペンストMK-IIIでも使っていてください」

「お姉ちゃん、それってオーバーキルになりますよ?」

「最新機が貰えるだけで十分です!」

軍の最新機種ですものね。普通にありえないぐらいの軍事機密の塊ですの。流石にブラックホールエンジンは搭載しませんけどね。

「プロスさん、大会を行う会社を買収しておいてください。我社がスポンサーとして戦技開発をさせます。大規模な集団戦も娯楽としてもいいでしょう」

「カモフラージュですね。かしこまりました。他には何かございますか?」

「引き続きスカウトはしてもらおうとして……あつ、ありました。突然ですが、我社でもアイドルプロデュースをしたいと思いますの!」

「「はっ?」」

私の言葉に全員が何言ってるんだコイツと言った感じになりました。更に頭が痛そうに手で押さえている人までいます。

「ルリちゃん、ちよつと診察しないと駄目みたいね」

「お姉ちゃん、寝ましょう」

「いやいや、私は大丈夫ですよ! ちゃんと理由があるので聞いてください!」

「……いいわ。言ってみて?」

「まず、これから戦争が起こります。これはプラントが勝手に改造したユニウスセブン

を核ミサイルによつて破壊したから確実ですの」

「それはわかるわ。なんでアイドルプロデュースになるの？」

「まあ、ぶつちやけるとプロパガンダも含まれますが、プラントにはシーゲル・クライン議長の娘であり、歌姫であるラクス・クラインが居ますの。彼女の求心力は色々やつかい。ファンが地球連邦軍の中にもいますし、何かが起こつてテロリストになられたら面倒なのです。ですので、今の間に求心力を下げたほうがいい事ですの」

地球連邦軍のどこころか、我社にもファンが居ますしね。内部情報を漏らされたらたまったものじゃありません。それにジェネシスは出来ればこちらで手に入れたいです。プラントが開発したところを合法的に頂いちゃいましょう。

「しかし、彼女がテロリストになるか？」

「戦争で親を殺されたりしたらあり得るぞ」

「プラントが負ける事は確実だろうしな」

「それはまだわからないわ」

「そうね。保険の意味でもラクス・クラインの求心力を低下させておくというのはいいかもしれない」

「なるほど、アイドルプロデュースというのは理解した。だが、一ついいかね？」

「どうぞ」

「ここに居るメンバーでデビューするとなるとルリちゃんか君になるわけだが、できるのかね？」

「絶対ヤダ」

「私もそれは……」

私とルリちゃんは拒否しました。だって、正直言つて無理ですもの。仕事が多すぎます。アイドル活動する暇なんてありません。

「では諦めるかね？」

「いえ、それなんですけど、先に言った以外にも異星人の中には歌が弱点になるというおもしろい……コホン。不思議な種族がいたり、精神干渉でパイロット達を拘束したりするような念動力者が居るみたいなんです。その対策として皆を鼓舞する歌の力は有効です」

何時マクロスが転移してくるか、わかったもんじゃありませんものね。マクロスが来たらヴァジュラとかもきますし、それ以外にも危険生物は来ます。そうでなくても人だつて厄介ですの。△でやられた風の歌い手による全人類の意識統合とか、お母様が大好きなヤバイ感じです。アレをお母様が確保したら絶対にやります。何せ完全に自分の支配下におけるという事ですからね。

「ですが、どうするのですか？ 私はコーチとして鍛えても構いませんが……」

「ラーダさんにはどちらかという健康面をお願いします。考えているのは保護してい

る子供達で容姿が優れ、歌い手として能力がある子達です。でも、彼女達は生身の身体の子もいるので危険地帯に連れていくわけにはいきません。ですのでバーチャルアイドルを使います。つまり、歌って踊れるAI少女を売り出すわけですね」

「なるほど、なるほど。彼女達なら労働条件に縛られませんが、我社ならアンドロイドとして身体を用意すれば複数個所で同時に興業も可能。例えアンドロイドが破壊されても本社に戻れば復帰は容易い。パーフェクトですね」

「でしよう?」

「プロスさんと社長はわかっているのかしら?」

「完全にブラック企業よね」

「その内反乱される可能性があるね」

「うむ」

「……じよ、冗談ですの。でも、複数体で活動させて数体を休ませながらメンテナンスと同時に記憶の統合を行えば効率的ですよ?」

「まあ、そこまでAI達が働きたいかとは思いますが、やればいいんじゃないかな。それこそ社長のAIを作ってアイドル活動をさせるのもいいでしょう」

「いやーでーすーのー! あ、でもルリちゃんのアイドル衣装とかなら見てみたいか

もっ。」

「はい、お姉ちゃんのアイドル活動は決定しました」

「ルリちゃんっ!？」

「かしこまりました。予定を組んでおきます」

「プロスさんまで！ 誰か助けてくださいですの!」

周りを見ると一誠に視線を逸らされました。しかも助けを求めている間に本当にさつさとプログラムを組んでいるので、止められません。

「実際問題として、僕達はレッドアックスという部隊を持つ事になった。それに対する負の感情を考えるとプロバガンダは必要だ」

「歌って戦うアイドル社長か。ありだな。社長の容姿もいいから間違いないから売れる。踊りも問題ないんだろ?」

「問題ないでしょうね。なんせ刀一本を持っただけで敵の居城に乗り込んでたった一人で制圧するような子ですもの。問題は歌だけでしょうけど、この子の全身ナノマシンみたいなものですから、声だって自由でしょう?」

「確かにそうですが……」

「私、可愛いお姉ちゃんが見てみたいです」

「よし、やりましょう!」

「ちよろ」

ルリちゃんに抱き着かれて上目遣いでお願ひされたら無理です。諦めました。目指せ銀河の歌姫ですよ！　ただし、ルリちゃんもしつかりと巻き込みましょう。

「じゃあ、私とルリちゃん、それにラピスちゃんのAIも作っておきますね」

「私までですか？」

「私もルリちゃんの可愛い姿がみたいですしね」

「まあ、構いませんけど……それにほとんどAIがやってくれるんですよ？」

「そうですね。私は基本的にそのつもりです」

「なら大丈夫ですね」

アイドル活動は基本的にAIに任せておけばいいですしね。というか、私は全部任せます。だって、男なのにアイドル活動とかないです。有り得ないですよ。というわけで、もう一人の私を生み出してそちらに頑張ってもらいましょう。歌は元の世界で覚えている物も使いましょう。マクロス之歌とかシンフォギアの歌とかもいいですね。

しかし、AIは誰にしましょうか。やはりここは結月ゆかりや弦巻マキ、琴葉茜と葵あたりにしておきましょう。自己進化機能も使うのは当然として、まずは教育からです。プロスさんに優秀なコーチを用意してもらおうのは当然として……歌手の人達をこちらで雇い入れるのもいいですね。新しい身体を用意してあげれば喜ばれるでしょう……あ、化粧品とかも必要ですね。化粧品？　化粧品……これ、ナノマシンを使った

シミ取りや細胞の活性化とかお手軽にできれば売れるんじゃないでしょうか？

「女性の皆さんにお聞きしますが……ナノマシンで美肌や若返り効果が期待できるとしたら買いますか？」

「買うわ」

「買います」

「人工皮膚などで代用できるのではないのかね？」

「いえ、手軽にできるのならそちらの方が売れます。怖がる人は多いと思いますから」

「売れそうならそれでいいですし、社員や家族にアンケートを取って売ってみましょう。商業は正直言って技術開発のついではありますが、お金は無いと困りますもの。それにコーディネーターへのコンプレックスを解決できる手にもなりますし、やっちゃいましょうか」

「私の仕事が増えるに増えているのですが……」

「私もですから問題ありませんとも、ええ。決してアイドル活動をさせられる仕返しではありませんの」

「根に持ってたんかい」

「ナンノコトヤラ、私ニハ分カリマセンノ」

なんだかんだと言ってプロスさんならすぐにやれるでしょう。さあ、皆で精一杯仕事

をしましょう！

『指揮官。このままでは我々は敗北する。早急に対策を打たれたし』

そう思っていたら、追加のお仕事ですの。どうやら、影月の方で動きがあったらしく、こちらの機体が停止させられて鹵獲されたようですの。自爆装置は起動せず、少ししてから発動したようで遠くから盛大な爆発が聞こえてきたとの事。

『ツエツペリンちゃん原因の解析結果は？』

『ビスマルク曰く、結界を展開されて空間内を停止されたとの事で、こちらと結界内を観測してデータを解析した。すると時間の流れが内部と外部では違う事が観測されている。つまり、相手はこちらの動きを停止あるいは相手の行動を加速させる事ができるもよう』

『了解しました。引き続き情報を集めながらこちらにデータを送ってください。こちらで解決する手段を構築してみます』

『よろしく頼むからな！ それまで相手の結界を感知したら即座に自爆させるぞ！』
『それでお願います。対策はお任せください』

時流エンジンとボソソジャンプぐらいしか対策は思い付きませんが、やるだけやってみましょう。最悪、影月は破壊して撤退ですね。別に月に拘る必要ありませんし？

いつその事太陽にでも叩き込んで処理するのでもいいでしょう。それか、別の惑星と衝突

させるのもいいかもしれませんね。

「とりあえず、アイドルオーディションからですね」

「受ける人いるんですか？」

「さあ？」

「とりあえず歌ってみたら？」

「では、歌いましょう」

マクロスフロンティアのシエリル・ノームが歌っているライオンとノーザンクロスでも歌ってみましょう。あの曲は好きですからね。あ、戦闘機とパーソナルトルーパーに変形する機体も作らなきゃ。やっぱり止めましょう。可変機って無駄に技術力が要る上に繊細ですから戦闘には不向きですね。そもそも可変機より普通に追加アーマーとかで戦闘機形態にすればいいだけです。ブラックサレナみたいな感じがベストでしょう。もちろん、趣味的には作りたいですけどね。

第39話

地球近郊 コロニー・メンデル

ライル・デイランデイ

『発進シークエンス完了。管制からの発進許可を受託。外装スキン正常稼働。偽装完了。発進可能』

ネルガル・マオインダストリー社が保有する輸送船からゲシユペンストMK-IV（ゲア、イ、ス、リッ、ター）の強化型である黒騎士へと偽装させた機体を発進させる。

「了解した。ライル・デイランデイ。ブラック・グリント。狙い撃つ」

発進の時の言葉は何故か社長からこう言うように言われて、やってみたら何故か喜ばれた。意味がわからないが、これを言い続けると給料アップとか意味がわからないが、貰える物は貰う主義なので受け入れている。

電磁カタパルトにより加速されたブラック・グリントを更にスラストを使って加速

させる。襲い掛かる強烈なGに耐えながら視界を確認する。射出されたブラック・グリントは宇宙空間で25Gを超えて更に加速していく。

身体が加速によって押さえつけられ、着ている最新式のパイロットスーツが軽減してくれるが、きつい物はきつい。意識がブラックアウトしないように耐えれば次第に体内にあるナノマシンによってマシになるのだが、マシになると更に機体を加速させられる。

『グラビティキャンセラーの稼働率を上昇。軽減及び適応を完了。お疲れ様、パパ』
「ああ、これで少しはマシになるか」

俺の視界に直接投影されている機体の外の映像。そこに俺をパパと呼んだ小さな少女が浮かんでいる。彼女は俺の支援用AIで、金色のラインと装飾の映える紺色の肩を丸出しにしているワンピースのような衣装を身にまとっている。頭にある紺色のベレー帽の白い部分に三つ星がある。彼女の名前はフィーゼ。プラチナブロンドの長い髪の毛をしている。

ちなみにパパと呼ばせているのは指揮官やマスター、はてはご主人様と呼ばれるのを防ぐためだ。そういう趣味がある奴はそちらにしているらしいが、女性陣の目はかなり痛くなる。なので基本的に家族として扱うわけだ。妹にしては外見の歳が離れすぎているので、姐さんからの命令で娘になった。まあ、死んだ彼女との子供が生まれていた

らこれぐらいの年齢になっていくかもしれない。いや、少し大きすぎるか。だが、妹よりも娘の方が見れるのでこちらにしたのには後悔はない。

『戦闘予定地のデブリ帯まで後、800秒。Z. E. R. O. System起動』

「了解した。落とされないように殺るぞ」

『頑張る』

フィーゼがブラック・グリントの肩に移動しながら、周囲を索敵してくれる。俺はそのまま突撃してゼロの指示する通りにある程度は行動する。

『敵機を確認。撃ってきた』

「狙い撃つ」

『はい、パパ』

相手の狙撃を機体のスラスターを横にずらす事で軌道をずらして回避すると同時にフィーゼが計算してくれた射線の方にグラビティブラストを放つライフルを使って、デブリに隠れながら狙撃してきたゲッシュペンストMK-IVを撃つ。しかし、相手は即座に離れていたのか、掠る程度だ。

『右、上、左』

右と左、上のデブリが破裂してゲッシュペンストMK-IIIがレイヤード・クレイモアを放ちながら突撃してくる。その攻撃をスラスターを全開にして急上昇しながらグラビ

ティライフルで着弾する弾のみを纏めて撃ち落としながら切り抜ける。

すると正面にデブリが現れる。機体を反転させてそのデブリを蹴ってこちらへと突撃してくるゲシュペンストMK―IIIの斜め上を通りながら両手に持ったグラビティライフルで左右の二機のミサイルポットを狙撃して撃ち落とす。この二機を先に落とさなければミサイルを放ってきていて、詰んでいた。

中央の機体は五連チェーニングガンからグラビティブラストの弾丸を乱射しながら飛んで来るが、弾丸の軌道を全てファイゼが計算してくれたのでその隙間を縫ってコクピットへと直撃させる。一発目と二発目はグラビティフィールドで防がれるが、同じ場所に立て続けに撃てば貫通してコクピットを破壊できた。三機を落としたら即座に加速して逃げるゲシュペンストMK―IVを追いかける。

『爆発系の罠』

「オーライ！」

逃がっている先にある表示されたトラップを撃ちぬいて逆にゲシュペンストMK―IVの速度を落とさせる。そのタイミングで近付きながらファイゼに機体操作を渡す。彼女はグラビティソードを引き抜きながら相手を斬り裂き、爆発の中へと突入する。こちらにはグラビティソードで切り開いてフィールドで防いでダメージはゼロだ。エネルギーは著しく消費しているが、即座に回収は可能だ。コントロールがこちらへと戻る。

俺と彼女では適性が違う。俺は射撃、フィーゼは近接が得意だ。得意と不利を別ける形で互いに補うようにしている。そうでもしないと姐さんに瞬殺されてしまう。

「姐さんの位置はわかるか？」

『白猫とは50秒後に接触』

視界に映し出された映像ではかなり離れた場所で幾つも光が表示されている。その光の後には白い光が線を引いている。

『40Gオーバーの速度を確認。白猫は化け物』

「だな。だが、姐さんに言ったらお仕置きだぞ」

『触れられないから大丈夫』

「それ、俺が苦勞する奴だから止めてくれ。お菓子なしにするぞ」

『それは困る』

話している間も逃げているが、姐さんのホワイト・グリントの方が格段に速度が速い。改造段階が姐さんの方が高いのだから、無茶がかなりできるから仕方がない。なので何時もの通り、逃げ撃ちしていく。俺は射撃だけに集中して回避は全てフィーゼに任せろ。ゼロシステムを使ってこちらが居る位置を教えてくれるからこそできる連携だ。

姐さんはこちらの弾幕をバレルロールなどのマニューバーを超高速で行って回避しながらグラビティソードで斬りかかってくる。フィーゼも対抗して斬り結ぶ。しかし、

軌道をずらす事が精一杯で即座にデブリまで利用して反転。加速して斬りかかってくる。片手のグラビティソードともう片方のグラビティライフルで対処するが、即座にやられそうになる。そこに大量の砲撃やミサイルが降り注いできた。俺達は即座に互いの位置を入れ替えて離れながら撃ってきた相手に突撃していく。こっちは数機を屠つてから離脱するのだが、姐さんは容赦なく20機を落としていった。

「逃げるぞ」

『戦略的撤退』

『逃がさん』

何時の間にか後ろにホワイト・グリントが居てグラビティソードを振りかぶっていた。俺達は慌てて振り返りながらグラビティソードをぶつけようとするが、間に合わない。い。

『自爆』

盛大に自爆装置による機体を消滅させて姐さんもろとも終わらせる。俺はフィーゼによつてコクピットだけ強制的に射出されて難を逃れる。流石の姐さんもこれは耐えられんだらうと思つたら、ブラックホールが収まった場所からボロボロのホワイト・グリントが出てくる。その手には何も握られていない。引き千切つて落ちそうになつている手でこちらに接近して掴んで、脱出用のコクピットを握りつぶしてきた。ここで俺

達の視界は真つ暗となつて、次の瞬間には傷一つないブラック・グリントへと戻っている。ブレインコンピュータを利用した実機での模擬戦というわけだ。実際に撃破したように見えるが、全部偽物の攻撃なので格闘戦以外は基本的に問題はない。

『システムチェック完了。機体、オールグリーン』

「また負けたな」

『ん、勝てない』

ぐったりとしながら視界をコクピット内へと戻し、飲み物を取り出して飲む。同時に電子データのお菓子をフィーゼにも与えておく。両手でもってカリカリと食べる姿はリスみたいだ。

『全機、集合。それから輸送船に戻つて補給を受けている間に反省会をするわよ。投棄した武装とかはしっかりと回収しなさい』

『『Yes, Mam』』

姐さんが通信で伝えてきた通りに俺達を除く25機が周囲へと集まってくる。全機が集まつてから輸送船へと戻り、補給を受ける。その間に反省会を行っていく。

『まず、アンタ達はゼロシステムに頼りすぎ。効率を優先するゼロシステムは一定以上の腕を持つ連中にとつては鴨でしかないわ。常に最適解を選んでくる奴なんて攻撃を置いておくだけでいいんだもの。今回で良く分かつたでしょ』

『はい！ ありがとうございます！』

『どうしたらいいでありますか！』

『あくまでもゼロシステムはサポートとして、途中で自分のマネージャーも含めるように』

全員で姐さんの言葉を心に刻みながら互いの支援AIや部隊の仲間と共に話し合いをしていく。

『で、アンタ達だけど……』

『連携は中々様になっていますが、ブラック・グリントの力を出し切れていませんね』

『機体のスペックはほぼ同じなのだから、アンタ達次第よ』

『ごめんなさい』

「やっぱり速度をもっとださなきゃ駄目か」

『それか射撃武器を追加して面での制圧かね』

『どっちにしろ、もつと腕を上げないと姐さんには勝てないか』

『最後の自爆はドキっとしたわ。そこは褒めてあげる。でも、詰めが甘い』

『ホワイト・グリントのグラビティ・フィールドじゃないと耐えられませんでしたけれどね』

『うるさい』

最大出力で展開してどうにか耐えたのだろう。もうちよいダメージを積んでいたら俺達の勝ちだったか。惜しい。そう思っていると、フィーゼが俺の膝の上に座ってベレー帽を取ってきたので、頭を撫でてやる。実際には感覚がないが、こちらの体内にあるナノマシンを使ってそこに身体があるかのように再現しているので、触れた感触はしている。

『では、お待ちかねの罰ゲームです♪』

『待ってないです！』

『これは社長命令だから諦めなさい』

罰ゲームは死亡判定をくらった奴等が受ける。つまり、姐さん以外全員だ。内容は黒歴史の暴露になったらしい。提供はルリちゃんが入社してくる前に徹底的に調べた内容からランダムに一つ発表される。同じのが被ったら助かるが、それ以外は余程の事がない限り死亡だ。

『ライルのは兄へのコンプレックスね。えっと……』

『やめろおおっ！』

『パパのお話聞きたい』

恥ずかしいエピソードが暴露され、護衛部隊を除く訓練に参加した全員が悶える。性癖や初恋が誰とかの暴露とか止めろ！

『二回戦を行うわ。護衛部隊と交代は完了しているわね?』

『もちろんです!』

輸送船の護衛としてゲッシュペンストMKⅣとゲッシュペンストMKⅢのブラックホールエンジン装備を25機配置してある。つまり、ここには50機の戦力が用意されているというわけだ。メンデルと近いからこそできる。メンデルの方の護衛が20機残っているが、俺達が即座に駆け付けられる距離なので問題はない。本当に謎なぐらい生産力がやばい。ブラックホールエンジンなんて危険な物をどこで作ってるのか、俺達は知らない。ただ、ロールアウトしてきたばかりの機体を使ってチェックがてら戦技教導に使うて問題部分を修理してまたテスト。それで問題がなければ納品という事になってる。テストを訓練とすることで100機ちかくのパーソナルルーパーを運用しているわけだ。

『よろしい。これから作戦を開始する』

『お姉様。この宙域に侵入する船舶を確認しました』

『ここは現在、我が社が貸し切つて封鎖しているはずなだけど?』

『侵入ですね。排除しますか?』

『訓練を一時中断。全機、第一種戦闘配備。黒猫、一緒に押さえにいくわよ。半分は私達

についてきて、宇宙船を包囲しなさい』

『了解！』』

姐さんの命令に従って即座に行動を起こす。俺達は宙域に侵入してきた船舶の元へと移動する。ソイツからは救難信号がライトによって発進されていた。

『黒猫とゲシユペンストMK—IV達は射撃用意。ゲシユペンストMK—IIIは包囲して接近なさい。あちらから攻撃するまで攻撃行動は禁止。それと各自で録画をしておくように。では私が接触する』

姐さんが接近して接触回線を開いてパイロット達と話していく。その内容はこちらにも伝わってくる。

『こちらは安全保障委員会委員長直属、地球連邦軍レッドアクシズ。貴艦は現在、宙域に侵入している。所属と姓名を明らかにせよ』

『こちらは王商会所属のシャトルです。デブリで衝突してしまい、アンテナなどの通信機と舵を損傷してしまいました。どうか救助をお願いします』

『了解した。エンジンを停止して武装を解除しておきなさい。軍の宙域に侵入した貴方達は一時的に軍が身柄を確保させてもらう。問題が無いと判明次第、緊急事態及び事故としての特例措置として不問とされる。その後、最寄りの民間施設へと案内されるが、要らぬ行動を取った場合、スパイとして刑罰が適用される事を念頭に置いて行動するよ

うに』

『ありがとうございます』

どうやら、このシャトルは事故にあつてここに流れ着いたようだ。軍人として守るべき相手でもあるが、同時に敵の可能性もある。だから一時的に拘束して身元を調べる。何、ルリちゃんならすぐだろう。人数は五人か。全員、持っている身分証は本物だな。

とりあえず、このまま帰還して上に確認を取らないといけない。そう思っていたら、フィーゼが曲を流し出した。フィーゼが流すなんて初めてだから、誰の曲かわからなかった。幼いから人気のラクス・クラインかと思つたが、違つたようだ。というか、この声は社長か？

『アイドルプロデュースするから、参加したい人は参加するようにだつて』

「アイドル……多彩だな。で、やりたいのか？」

『やらない。パパと一緒にいい』

「そうか。それは助かるが……いいのか？」

『問題なし』

話していると、エイフマン教授から通信が入った。

『戻り次第連絡をくれ。GN粒子を扱う試作品が完成した。君達の機体にとりつけた
い』

どうやら、更にグリント達は完成に近づいていくようだ。俺も精進しないと機体性能に振り回されて撃墜されることになりそうだな。

第40話

「ネルフ 司令室 総司令官・碇ゲンドウ」

机に両肘を立てて寄りかかり、両手を口元に持つて相手から口元が見えないようにする。これで表情を隠すことができ。相手に威圧感を印象づける。

「碇。ネルガル・マオインダストリーから、また使徒に関するデータとそれに対応する兵器、エヴァンゲリオンに関する情報開示請求が来ている」

「無視したいが、何時もの通り適当に返しておけ」

「それがそうもいかん。連中、本気のようにだ」

「ほう」

「今回は正式に安全保障委員会委員長長の命令書付きだ。拒否した場合、監査を理由に武力による介入もありえるだろう」

ネルフの資金は地球連邦政府と軍からも出ているのだから、連中がこちらに介入する

理由はある。だが、こういう時の為にゼーレが地球連邦政府を動かす為に作った人類補完委員会があるのだ。そちらから今回の介入を止めさせればいいだろう。安全保障委員会委員長のグライエン・グラスマンからしたら目の上の瘤であろうが、それはこちらからも同じ事だ。

「手を回して止めるようにすればいいだろう。奴等とて地球連邦の一員だ。問題なからう」

「果たしてそれで止まるか？」

「予算を盾に……いや、連中はそもそも予算を自力で確保しているのだったな。なら、来るか」

「来るだろう」

副司令官の冬月コウゾウが窓のブラインドを指で開けながら告げてくる。確かに冬月の言う通り、奴等は止まる理由はない。それに俺達がやっている事は連中からしたら看過できない可能性がある。

「連中の戦力は概算でゲシユペンストシリーズの最新型だ。ブラックホールエンジン搭載機を量産しているらしい」

「使徒を一時的とはいえ退けたアレか」

「既に戦艦も完成している可能性がある。それに退役した軍人を何人も引き入れてい

る。彼等の戦力は侮れんぞ」

「エヴァで撃退するか……いや、無理だな」

「ああ、無理だ。現状、エヴァンゲリオンは電力を常に供給するアンビリカルケーブルが必要だ。そこを破壊されてはどうしようもない」

本来ならエヴァンゲリオンに核融合炉を搭載したいのだが、それは現状の技術力ではまだ無理だ。そもそも核融合炉では電力が足りない場合すらある。ブラックホールエンジンを使って生み出すのならまだ可能性があるかもしれないがな。

「連中なら例え、周りの建物を巻き込んでも確実にやるだろうな。計算されていたとはいえ、地球上でマイクロブラックホールを意図的に巻き起こしたのだからな」

奴等は使徒から逃れるためにそれをやってのけた。確かに使徒を退け、民間人を守るためだとはいえやりすぎではある。そんな奴等だからこそ、ビル一つぐらいは簡単に破壊するだろう。その後は遅滞戦闘を行われればATフィールドがどんなに頑丈でも電力が消費され、尽きたところで鹵獲される事は目に見えていた。

「では、どうする？」

「シンジと同じタイミングで呼び出すとしよう。二人までという条件で呼び寄せれば拒否するかもしれん」

「こちらは要請に答えたという事実を用意すれば言い逃れは可能か」

「それに来たとしてもどうとでもなる。リリースへの道さえしつかりと封鎖していれば問題ないだろう」

「だが、確かネルガル・マオインダストリーの社長は変身能力があるのではなかったか？」

「社長である本人が来るはずがないだろう。ここは言ってしまうと彼女からしたら敵陣なのだからな」

「碇……それがフラグになっても知らんぞ」

「来たのならばそれ相応の対処をするだけだ」

「そうか。なら問題は息子の事だけだな」

「シンジはそれこそどうとでもなる」

私とユイの息子だ。エヴァンゲリオンにも適応し、しっかりと役に立つてくれるだろう。私がユイと再会する為に役に立つてもらおう。

【とある屋敷 ???】

使徒の襲来。その時の動きをヴェーダによって解析した。狙われていたのはネルガ

ル・マオイндаストリー社の社長、アルフィミー・M・プロウニングである事に間違いない。地球連邦軍が手に入れたアインストのサンプルを手を回して入手し、こちらもヴェーダで解析した。その結果、アルフィミーはアインストである確率は50%。それ以外の存在は40%。人間の確率10%。これはもう確定と言ってしまえるだろう。最低でも人類ではない。

「リボンズ。彼女は どうするんだい?」

「消えてもらいます。ヴェーダを精査した結果、太陽炉のデータを奪われている事もわかっていきますからね」

「しかし、ゲシユペンス^{ヴァ}ストMK-IV^{リッ}などに使われだしているブラックホールエンジンは我々にも欲しい技術だ。それ以外にも様々な秘匿技術がありそうだぞ」

「もちろん、それらも全て頂きます」

「イスルギ重工が手を回して来ないか?」

「問題ありません。イスルギ重工を通してアルフィミーの暗殺を依頼しました。それにソレスタルビーイングにも指令を出しておきました」

「彼等では暗殺までではないのですか?」

「表の彼等ではなく、裏の彼等を利用します。それに表にも一応、ネルガル・マオイндаストリー社の内部監査を命じておきました」

「なるほど。それなら問題ないな。で、何処に依頼したんだ？」

「アマルガムです」

「確か、表はP M Cトラストを運営している秘密結社だったか？」

「ええ、そうです。今回のような事には使い勝手がいいでしょう？」

「まったくだ。なら、後はネルガル・マオインダストリー社に密偵を送り込まないといかないか。イスルギ重工とかには既に入れてるしね」

「ネルガルにもマオ・インダストリー社にも入れていたのですが、死んでしまいましたからね」

我々、イノベーターは、ヴェーダによって生み出された人工生命体であり、マイスタータイプと情報タイプの2種類が存在します。

マイスタータイプはM Sの高度な操縦が可能で性別を持たない。一方、情報タイプは、遙か以前から無数に存在し、人間社会に紛れ込むため性別が設定されています。情報タイプは自覚することなく日々ヴェーダに情報を送り続けているのです。故に彼等から会社や組織の情報が手に入ります。彼等は社会生活には必要ない能力が封印されているだけで、マイスタータイプと比較しても能力的に劣るわけではない。情報タイプのイノベイドはある一定の時期や条件によってヴェーダから「帰還」を命じられ、それまでの記憶と人格を消去した後に、新たな記憶と人格をインストールし直して使い回し

ている。

「まさか社長が殺され、月が失われた状態でここまで短時間で復興するとは、我々を差し置いて監視者を名乗るだけはあるといったところかな？」

「そうですね。相手にとつて不足はないでしょう。ですが、勝利するのは我々です」

「ああ、そうだな。精々踊ってもらおう」

何名か、情報タイプの同胞達をネルガル・マオインダストリー社へと再度送り込むよう、命令しておこう。これで情報が手に入る。

【ネルガル・マオインダストリー社 地上本社】

アイドル用のAIを作成しつつ、片手間に覚えている前世での世界で歌われていた歌詞を書き起こし、音源を制作して歌を収録する。それをネットワーク上で既にこの世界にある物か、商標登録されていないかを調べてからアップロードしておく。もちろん、クローズネットの方なので問題はないのです。この中からプロスさんが出来の良い奴を選んでPVとして表のネットワークにあるネルガル・マオインダストリー社のホーム

ページに設置しておきますの。

「アイドルは無しにしても、歌手としてなら構わないですの」

結月ゆかり達を作成し、しっかりと教育調教していく。人と変わらなくらいまで成長させるために少し時間がかかります。学習させれば問題ありませんし、身体の方もしっかりとオーダーメイドで作っておきますの。

「ん?」

緊急連絡が送られたきた。どうやら、コロナー・メンデルの方で問題があったみたいです。訓練宙域に民間の商業輸送艦が故障して入ってきたらしい。その者達を確保して、コロナー・メンデルの近くへと連れてきているようだ。もちろん、中心部には入れずにその付近にある制作途中の湾港へと連れて行き、そこで取り調べを行っているようです。

『社長、どうする?』

連絡を入れてくれたカルヴィナ・クーランジュに気楽に対応しますの。

「その人達の身元はどうなっておりますの?」

『王商会の者達みたいね。商会に連絡して確認を取ったそうよ』

「王商会!?!」

『そうだけど、どうしたの?』

「その商会はソレスタルビーイングと繋がりがありますの」

王商会はソレスタルビーイングを支援している商会の一つですの。もちろん、ソレスタルビーイングの背後にいるイノベイドや国連大使……地球連邦政府の大使。どちらも現状では手が出せませんの。前者は居場所がわからず、後者は色々問題ですの。

『スパイって事?』

「可能性があります。そもそも不確定情報だと思つてください。ですの、その人達の顔写真や全身の画像を送つてきてください。それと近くに敵のもび……パーソナルトルーパーが居るかもしれません。ですの、電波を飛ばしてロストした場所や空白の場所を探してみてください。そこに潜んでいるかもしれないの」

『了解。今、送ったわ』

「確認します」

メンバーは結構居るみたいで、しっかりと確認しました。変装はされているようですが、画像や動画を多方面から解析すると色々わかります。するとソレスタルビーイングの連中が判明しました。どうやら、潜入調査でもしにきたんでしよう。

スメラギにセツナ、アレルヤ、王紅龍の四人が居ました。これ、もう完全にスパイですの。捕らえるか、泳がすか、それともお話するか。さて、どれにしてやりましょうか。

答えは泳がしてからお話ですの。だって、王留美が世界を変えようとする理由が、「兄

である紅龍が一族当主の器に不資格ということでは望んでないのに当主にされてしまったため、世界を変えて自分の人生をやり直したい」という個人的な理由に過ぎないですの。

「お話するので、客間に通してくださいですの。ああ、それと泳がしてください。そして、どうでもいい軍事機密の場所へ誘導してください」

『入れるの?』

「はいですの。もちろん、機密を相手が見たら捕らえてくださいですの。絶対に逃がしてはいけませんの。それと殺してもいけません」

『面倒だけど、やってあげるわ。それでどうするの?』

「その後にお話をしますの。その結果に関わらず釈放はしますが、ちゃんと責任はとってもらいますの。ですの、いい具合に泳がしてくださいね」

『腹黒ね。まあ、了解よ。任せてちょうだい』

「よろしくお願いいたしますの」

さあ、利益を総取りしてやりますの。観測し、監視し、暗躍するのが我々アインスタですの。ですから、私は暗躍して力を手に入れますのよ。

「だから、王留美。そんなに一族の、商会の当主になるのが嫌だったんですのよね？　で
したら……私にくださいですの♪」

第41話

コロニー・メンデル
アレルヤ

僕は無事にネルガル・マオインダストリー社が、レッドアクシズが拠点とするコロニー・メンデルへと潜入する事が出来た。

といつても、僕達が連れて来られたのはメンデルの周囲に作られている宇宙ドックだ。この宙域にはメンデルを中心として複数のブロックが浮いており、それぞれがワイヤーなどで固定されている。それらが次々とメンデルへと接続されて固定されていく。固定しているのはネルガル・マオインダストリー社が開発しているゲシユペンストリーズのようだ。どの機体も動きが良く、数が多い。

「どうだ？」

「窓から見えるだけでも17機が動いているな」

案内された部屋の窓から見える宇宙空間を飛び回る数を考えると、数十では効かない

くらいの数を保有している可能性がある。またブラックホールエンジンという危険極まりない技術を保有して運用しているのは一企業として危険視されている。これはイ
スルギ重工も同じだ。どちらも危険であり、監視と調査が必要だとヴェーダが判断し
た。

特にアインストであるとヴェーダが判定したとアルフィミー・M・ブロウニングが社
長を務めるネルガル・マオインダストリー社は危険であると判断された。彼女がその気
になれば先の様な転移による攻撃で各地にブラックホールを爆弾として放つ事が可能
かもしれない。そうなれば地球は終わりだ。

「何時まで待たされるんだ？」

「すぐに身分を証明してくれるでしょうから、もう少し待ちましょう」

「そうですね。皆様の身分は王商会が保証しておりますから、ご安心ください」

刹那の言葉にスメラギさんとエージェントの紅龍さんが答える。彼が言う通り、少し
待つてから動いた方がいいだろう。外にはレーザーガンを持った兵士が待機している
し、この部屋も監視されている。それに俺達の腕には手錠が嵌められているので簡単
には外せない。

「確認が取れたわ。貴女達の身分は王商会が保証し、輸送船の故障もおかしい所はな
かった。よって突発的な事故とし、今回の軍事領域への侵入は不問とする」

「それは良かったです」

ノックしてから入ってきた兵士達を引き連れた銀髪の綺麗だがきつそうな黒い胸元が空いている軍服を着た女性だった。何故か首に赤い鈴つきの首輪まで巻いている。兵士達を引き連れている立場からして、かなり偉いのだろう。だというのに首輪という事はそういう趣味なのだろうか？

こんな事を考えていると、彼女の言葉には紅龍さんが対応していく。すぐに兵士達が鍵で手錠を外してくれた。腕を確かめっていると、指揮官っぽい女性が俺達の方を見ている。

「何か？」

「簡単な物だけど、食事も用意した。この部屋じゃ落ち着かないでしょうから、客室を用意したわ。そちらに移動する。そのブロックでなら自由にして構わない」

「ありがとうございます」

言われた通りに移動すると、確かに客室へと案内された。かなり豪華な部屋で、佐官用の部屋だと思われる。そんな所に通され、部屋のテーブルの上には豪華な食事が用意されていた。

「隣は食堂になつていいるから、足りなければそちらに行つてちょうだい。それとこのブロック内の移動は自由にして構わないけれど、あちらのブロックへは行かないように」

「そこには何があるのですか？」

「軍機に関わるので答えられないわ」

「わかりました。関わらないようにしておきます」

「それでお願ひするわ。それじゃあ、後は任せる」

「はっ！」

兵士に任せて銀髪の女性は出ていった。それから残った兵士の人が説明してくれる。このブロックの中なら自由に行動していいとの事らしい。このブロック自体が慰安を目的とした場所で自然がある公園も用意されているので、星空を眺めながら歩く遊歩道は最高らしい。他にも社員価格で買える様々な店があつて暇なら買物や映画やステージでも見ていくといいとのことだ。

「観光地か！」

「そんな感じでしょうね……確かに長期の任務にはメンタルケアは必要だけど、ここまでやるの？」

「映画館やステージまであるとは……驚きですね」

「これが普通なのか？」

「そんな訳ないわよ。とりあえず、見てまわりましょうか」

スメラギさんの言葉で俺達は部屋から外に出てこのブロックを歩きまわる事にした。

まずは地形を把握してからでないと話にならないからな。

外に出て確認してみたら兵士が巡回しているが、俺達についてくる事も無い。なんとなくか、外と比べて内部の警備がかなりぎるな印象を受ける。

ここはわからないが、ネルガル・マオインダストリー社の本社がある地上はかなりの警備が敷かれている。関係者のチェックも厳重で機密エリアに入ろうとしたスパイ達は例外なく拘束されるか、容赦なく射殺されているらしい。例えそれが子供でも例外はない。実際にテロリストが少年兵を利用して突撃させたが手足を撃ちぬかれて安全が確保されてから捕獲されるか、少年兵が自ら自爆している。その少年兵はネルガル・マオインダストリー社で保護されているらしいが、どういう扱いになっているのかは不明だ。

「結構、子供も居るのね」

「そのようだな。彼等は少年兵には見えない」

「おそらく職員の家族でしょう」

公園に移動してみると、楽しそうに遊んでいる子供や木にもたれ掛かって本を読んでいる子や木と木の間にかけてられたハンモックで寝転びながらゲームをしている子供。両親であろう親とボール遊びをしている子供なんかもいる。

「平和ね」

「確かに……」

「ああ」

スメラギさんや刹那達も認めるぐらい、この中は平和だった。本当に戦争を起こしたり、世界を滅ぼそうとしたりするようには見えない。それでもトツプがどうかはわからない。

「ん？」

足元にコロコロとカボチャの顔をしたボールのような物が転がってきた。転がってきた先を見ると黒い魔女のコスプレをした紫色の髪をした女の子がこちらに走ってきていた。拾って持ち上げてみると、カボチャには顔があり、その中身が光ってこちらをスキャンしてきた。

「アレルヤー！」

「待って！」

『対象をゲストと確認。貴方は子供を襲う悪い男ですか？』

「いや、違うけど……」

「ジャック、拾ってくれただけ。問題ない」

『ヤホホホ。なら、問題ありませんね』

カボチャの中身は機械のようで、重量がかなりある。話せる事から、AIも搭載され

ているみたいだ。やってきた少女が両手を差し出してきたので気をつけるように言いながら渡す。

「重いけど大丈夫かな？」

「大丈夫。ありがとう。この子は反重力ユニットが搭載されているもの」

少女が触れると実際に宙に浮いて彼女の周りを動きだしながら、不気味に点滅したりもしてくる。

「ラピス〜！ はやくボール！」

「うん！ えい！」

『ヤホオオツ！』

可愛らしい声と共にカボチャが投げられて子供達の方へと飛んでいく。その先には同じように魔女の格好をした子供達が居て、飛んできたカボチャを蹴り上げたりして遊びだす。

「アレはボールなのか？」

「遊び道具だよ。それに私達を悪い大人から守ってくれる子供の守り神なの」

「え？」

「もしかして、ジャック・オー・ランタン？」

「そう。子供の見守りロボット。面白いよ？」

「ボール扱いしていいのかしら？」

「これは機械を扱う練習だもの。だからいいの」

「そうなのね。ありがとう。それとお友達が呼んでるみたいよ」

「うん。それじゃあ、ばいばい」

「ええ、さようなら」

スメラギさんが対応してくれたので、手を振るだけですんで助かった。子供は少し苦手だ。

「……スメラギ、あの機械は……」

「IFS 適応の機械ね。彼女達は IFS であのジャック・オー・ランタンを操作して互いに投げ合っているの。遊んでいるように見えるけれど、確かに練習ね」

「IFS で操作が出来るという事は……」

「ナノマシンを入れているという事か」

幼い子供だというのに身体に異物が入れられている。それが両親が望んだ事かはわからないが、どちらにせよ彼女達は大人の都合で改造されているという事だ。僕や彼女達と同じだ。

「次に行きましょう」

「ああ」

それから僕達は別れて色々な場所を見て回りながら情報収集を繰り返す。

一定時間が経ち、与えられた部屋に戻るのではなく、公園で休憩しているように見せながら情報交換を手と音を使った暗号で行う。

情報交換でわかったのは立ち入らないように言われた場所には新型のエンジンを搭載した実験機が搬入されているらしい。詳しくはここに居る人達もわかっていないみたいで、食堂で休憩している時に少し離れた席に居た科学者らしき人達が話していたのを盗み聞きしたとの事だ。

「スメラギさん、どうする？」

「そうね。何もしないで寝ていきましょう」

「本気か？ またとないチャンスだぞ」

「ええ。疲れたから寝ましょう」

部屋に戻ってから僕達は休憩する。しばらくすると来客がやってきた。その人を見てスメラギさんが狼狽えだし、更にその人が喋ってきた内容が僕達にとって看過できない爆弾だった。

【コロニー・メンデル ブロック24号制御室 カルヴィナ・クーランジュ】

「ふくん。かからないわね」

部屋の内部に設置された複数のモニターを同僚と共に確認しながら、相手が動いていない事を確認した。密かに潜ませている監視用ナノマシン達にも反応がない。

「どうしますか？ 普通に部屋で休憩しましたが……」

連中は本当に与えた部屋にあるベッドで寝たり、ここで買った本や電子書籍を読みだした。クラツキングされて映像が書き換えられている可能性も考え、巡回させている兵士や休憩している者達にも協力してもらってブレインコンピュータを使った我社独自の軍用通信で常に齟齬がないかを確認して監視している。だというのに何の問題もない。つまり、これはクラツキングされている可能性が低い。

こつちにはウィザード級と呼ばれる凄腕のハッカー達がたむろして警戒に当たっているから、本当にクラツキングは有り得ない。いや、連中はヴェーダとかいう化け物のような量子コンピュータを持っているんだったわね。こちらが出し抜かれている可能性もあるけど、どちらかというところ——

「こつちの作戦がバレたみたいね。わざわざ情報も出してやったのに……ムカッ

く」

「あからさすぎたのでは？」

「うるさい。そもそもこういうのは私の得意分野じゃないのよ。無茶振りがすぎるわ。それに相手は戦術予報士よ」

「そりゃバレますね」

アルフィミイから提供された資料を見る限り、戦術予報士とガンダムマイスターとかいうのが二人。それにエージエントとして動き回っている紅龍とかいう奴ね。

「もうでつち上げて捕らえますか？」

「でつち上げは最終手段ね。テロリストが相手でも、あくまでも正攻法が出来る内は正攻法が好ましいわ。他の連中に付け入る隙を与えないためにもね」

「ならどうしますか？ こっちは社長の指示があるのでクーランジユ隊長の指示通りに動きますが」

「そうね……ローン、策を提示なさい」

『はい、お姉様。エイフマン教授をぶつけましょう』

「上がってきてるの？」

『ええ、つい先程到着した便で来ておられますよ。彼等が使っている太陽炉でしたか、その試作機を持って』

思わずニヤリと笑ってしまう。最高に皮肉が効いている方法ね。自分達のアドバンテージが失われるのだから連中からしたら確かめるしかない。

「あの、エイフマン教授を危険に晒すのはどうかと……」

「完全義体があるでしょう。アレでいいわ。まあ、費用が高くなるけれど、その価値はあるのよね？」

『もちろんです。戦術予報士の彼女の本名はリーサ・クジヨウ。お母様曰く、大学時代の恩師らしいですわよ?』

「連中の前で正体を曝してやるのね。いいわ、それで行きましょう。護衛に私もつくわ。ローン、サポートなさい」

『かしこまりました。テロリストさん達は殺してあげましょう』

「殺しちゃ駄目よ。オーダーは捕獲なんだから」

『は〜い』

制御室から出て、エイフマン教授と合流する。すると彼は簡単に乗ってきてくれた。但し、いくつか条件をつけられたが、どれも問題ないものだったのでこちらとしては大丈夫だ。

そんな訳でエイフマン教授を連れて彼等の部屋に行けば予想通りリーサ・クジヨウは狼狽えていて、いい気味。これで戦術予報士の腕を鈍らせてくれると非常に助かるわ。

「クジヨウ君、久しぶりだね。カタギリ君は元気かね？」

「わ、私は……」

「どのような理由があるかは知らないが、名前が違っていて驚いたよ。だが、一目見て君がクジヨウ君だと気付いた」

エイフマン教授の言葉に他の三人が警戒しているけれど、こちらは護衛に私だけでなく、完全武装した兵士達も居るからそう簡単には襲ってこれない。襲ってきたとしてもうちのサイボーグ部隊の相手になるかはわからない。

「実はあれから両親が離婚と再婚がありまして、そちらでも上手く行かずに……」

「王商会の方で新しい戸籍を用意させて頂きました」

「そうだったのかね。すまない。辛い事を思いださせてしまったね」

「いえ、そのような事はありません……それで教授こそ何故ここに？」

「私はネルガル・マオインダストリー社の技術顧問として雇われていてね。ここはいいよ。何せガタが来ていた身体がこの通り、元気に動かせるのだからね。それに研究も好きにやらせてくれるし、色々な分野の天才達が集まっている。彼等の技術や発想は新しいインスピレーションを……」

「教授？」

「……ほん。私はここで新しいインスピレーションを受けてね。それでクジヨウ君にも意

見を聞きたかったんだ。この資料を見てくれ。工学部だった君はどう思う?」

「はあ……」

タブレットをクジヨウに渡したエイフマン教授は彼女を見守る。彼女はその資料を見て驚愕したような顔に一瞬だけなつてすぐに元の笑顔に戻った。

「教授、これは?」

「テロリストが使っていた太陽炉と呼ばれる物らしい。それを解析して再現した物だよ。既に試作機は完成して運び込んでいる。アレは何処にやったのかね?」

「関係者以外立入禁止のブロックです。そこから見えるでしょう。あそこでゲシユペンストに搭載している最中です。というか、機密なので言わないでくれますか?」

「おっと、すまなかつた。まあ、彼女の意見は参考になる。完成の為に許してくれ」

「構いませんよ。こっちはあくまでテストと護衛が仕事ですし、社長から開発を最優先にしろと言われていますから」

「助かるよ。それでどうかね?」

「そうですね……」

彼女が専門的な言葉でエイフマン教授と話していくが、私にはサツパリわからないし、不穏気な残る二人を警戒しておく。

「ありがとう。参考になったよ。それじゃあ、これで失礼する。元気にいるんだよ」

「エイフマン教授こそ、お身体にお気をつけて」

扉を開けて出ようとした瞬間にアラートが鳴り響いた。私は即座にメンデルの管制室に繋いで状況を確認しているローンに聞く。

『何事?』

『アンノウンの襲撃のようです。数は観測できただけで虫のような機体が47機。大型のアーマードモジュールが三機ですね。どれもデータベースにはありませんが、お母様から聞いた話に出てくる物と外見が一致します。ただ、確定ではないので調べる必要があります。それとソレスタルビーイングの機体を探しに出た部隊が遭遇したようです』

『了解』

このタイミングで襲撃か。ソレスタルビーイングが来ると思っていたのだけれど、社長は方々に恨まれているでしょうし、仕方がないわね。それに社長が敵を知っているのなら、そのデータを基礎にすればいいかしら?

「エイフマン教授。すぐに試作機の方へお行きください。アンノウンを検知しました。これから撃退します」

「了解した。しかし、彼等はどうするかね?」

「兵士に案内をさせてシエルターに移動してもらいます。そこなら……いえ、そうですね。リーサ・クジヨウ」

「何か？」

「貴女はA E U軍の戦術予報士として多大な戦果を上げておられましたね」

「そんなことはないわ」

「カテイ・マネキンに負けたようですが、それでも私よりは指揮が上手いでしょう。そこでアンノウンの撃退にご協力いただきたい。我々が敗北した場合、シエルターが破壊される事もあるでしょう。民間人や子供達を守る為にもご協力いただけませんか？」

「……いいでしょう。わかりました」

『お姉様、えげつないですね。選択肢なんてないじゃないですか』

『使う物は何んでも使うわ。それよりも、社長に連絡して許可を取っておきなさい。後、彼女の指揮をしっかりと学んでちょうだい。私が復讐する時にも役に立つから、頼むわよ』

『了解です』

リーサ・クジヨウはこちらを手伝うしかない。何せ三人を人質に取っているようなものだし。実際にこちらが敗北すると彼女達は道連れで死ぬ可能性もある。それなら、作戦を用意して私達の戦力を削るか、測るかした方がいいでしょう。

第42話

「コロニー・メンデル　カルヴィナ・クーランジュ」

「それではよろしく願います」

リーサ・クジヨウが戦術予報士として働くことを納得したので、早速働いてもらおう。彼女からしたら、こちらの戦力を正確に図りたいだろうし、しっかりと働いてくれるでしょう。

「どうすれば？」

「私達と管制室に行ってもらいます」

「わかりました。彼等は……」

リーサ・クジヨウが後ろのガンダムマイスターとか言うのと、エージエントの方に視線をやる。もちろん、私が連れていく事を許可するはずがない。

「残念ながら部外者を入れる訳には行きません。軍事施設ですのでご理解ください。もちろん、民間人であられる方々の身の安全は軍人として保障させて頂きます。そうです

ね……シエルターに案内するか、この場に留まって頂きます」

もちろんどちらを選択しても監視はつける。シエルターに関しては彼等だけで使用させ、隔離する。ついでに言えばシエルターは牢獄であり、催眠ガスはもちろんのこと、毒ガスや空気を抜く事だつてできる仕様の犯罪者用の物だ。テロリストなのだから何の問題もないわ。

「……わかりました。貴方達もそれでいいわね？」

「仕方ないでしょう」

「ああ、了解した」

「あの、できればこの部屋で待っていていいかな？」

「ええ、構いませんよ」

アレルヤ・ハプティズムだったか、勘の良い奴みたいね。人類革新連盟の超人機関により強化された超兵だったわね。社長が脳量子波の研究がしたいから出来れば殺さずに確保したいという事だったけど、必要とあれば人革連の方を襲撃したらいいのだし優先する必要はないわね。

「では、護衛の兵士を付けます。教授はどうしますか？」

「私は試作機の方に居るよ。機体に太陽炉を搭載したからその実験がしたい」

「でしたら、戦力は多い方がいいので出してみませんか？」

エイフマン教授の言葉にリーサ・クジヨウが馬鹿な事を言ってきたので、思わず睨みつける。

『アハハハ！ この人、どきくきに紛れてぶち壊す気満々ですわね！』

試作機を戦場に出すなんて軍人としては有り得ない。耐久試験も何も終わっていない機体なのだから、事故が起こる事は当たり前なのだ。試作機の動力炉搭載の機体なんて乗っているパイロットからしたら死んで来いと言われるのと同じだ。そんなの、化物の社長ぐらいしかやってられない。

「どうだね？」

「もちろん却下します。絶対に爆発しないと言い切れますか？」

「無理だね」

「だったらあり得ません。我々は民間の会社であります、正式に軍の一部隊として活動しています。人員の保護は会社としても安心安全を心掛けるように言われています」

社長のように両手両足が消し飛んでもナノマシンがあれば瞬間再生でき、酸素すら体内で生成できるような存在なら別だけど。ちなみに私は宇宙空間で生身でもある程度は生き残れる設計にされているらしい。体内に酸素を生成する装置を完備しているとのことだ。本来は火災などを考えての装備らしいが、社長の一声で宇宙空間でも活用できる者に変えられた。救難信号も出せるし、強制的に仮死状態にしておけばほぼ助かる

とのことなので我が社はホワイトね。

「ふむ……だったら、完全義体を使った遠隔操作ならどうだい？」

「ジャミングが行われる太陽炉で、ですか？ それこそ奪取される可能性が高いですね」
「まあ、そういう事だよクジヨウ君。パイロットが乗っていたらスタンドアローンでどうにか出来るが、流星に試作機に乗せるのは問題ありだから諦めてくれ」

「はい。わかりました」

「では行きましょう。教授、くれぐれも勝手な事はやめてくださいね」

「ああ、もちろんだ。クジヨウ君、また会おう」

「はい」

『一応、監視しておきますね』

『頼む』

部下達と一緒に教授が出て行ったので、私達も移動する。別の部下に残るガンダムマイスター達を監視させてリーサ・クジヨウを連れて管制室に移動する。

近くにある管制室に繋がる扉を潜り抜ける。そこは数人が入れる広さの部屋で部屋の中には椅子が存在しているだけだ。

「あの、()が管制室なんですか？」

「正確に言えば管制室の一部ですね。こちらの席に座ってヘッドマウントディスプレイを付けてください」

リーサ・クジョウに椅子に置かれているヘッドマウントディスプレイを渡してから、私も別の椅子に座って必要も無いヘッドマウントディスプレイを装着する。

「仮想空間に管制室があるんですね？」

「ええ、そうです。ネットワーク上にあることで何処のブロックからでも接続できます」
「わかりました」

ゲスト用のIDとパスワードを渡して一緒にログインする。すぐに視界が切り替わり、壁一面が巨大モニターとなっている広い部屋に移動した。

オペレーター用の席には軍服姿の男性や女性、子供達が居る。中にはゴスロリ魔女の格好をしたラピスも居て、膝の上にぬいぐるみを乗せながら戦闘を行うための作業をしている。

「公園に居た子供……？」

「彼女達はオペレーターの訓練を受けています。優秀な子供達ですから腕は問題ありません。それと姿が子供とはいえ、中身が子供とは限りませんよ」

「……サイボーグ技術ですか……」

「ええ、そうです。特に女性は様々な年代のボディを使っています。着せ替えて遊んだ

りしている人も多いですからね」

「容姿が自由自在なら、確かにそれまでできるのね」

「何より、いくら食べても太りませんから」

「凄くいいわね」

話ながらラピスに近づくと、彼女が手を振ってくる。それだけで私達の前に椅子が現れる。座ると目の前の空間に複数の映像が同時に出現する。映像はそれぞれ空域図や相手の姿など様々だ。

「ではクジヨウさん。よろしくお願いします」

「ええ、わかりました。こちらの戦力は……ゲシュトアイゼン・ナハト
ゲシュペンストMK―IV^{ヴァー}35機の計70機ですね^{スリッ}」

「はい。護衛として20機は残しますので、50機でお願いします」

「わかりました」

本当は後10機ずつあるので、合計で90機存在する。そこに私とライルのグリントが存在するので92機。輸送船が24機。防衛用の兵器は九連式ミサイルポッドが70機。ブラックホールキャノン砲が200機。防衛用にブラックホールフィールド展開装置。それがコロニー・メンデルと資源衛星をくつつけた拠点を防衛する戦力だ。もちろんリーサ・クジヨウにはパーソナルトルーパーしか教えない。

「敵の情報はわかりますか？」

「ラピス」

「……これ……」

ラピスが提示してきたのは敵のパーソナルトルーパーであろう大型機と小型機だ。小型機は小型ミサイルと大型ミサイルを装備して大量にいる。

大型機は三機でどれもパーソナルトルーパーのゲシユペンストMK―IV^{ター}よりも大きい。見た目からは大型のレーザーとミサイルはわかるわね。

「パーソナルトルーパーとは全くの別系統のようね」

「情報はない？」

「ある」

「あるの!？」

「っ!？」

ラピスの言葉にリーサ・クジヨウが声を上げると、ラピスがビクツツとして怖がる。慌ててリーサ・クジヨウが謝っていく。まあ、普通は明らかに地球では見た事がないアンノウンの情報があるのだから驚くのは無理ないわね。

「こ、これ……」

「え、アニメ？」

「アニメね。確かに似てるけど……まさか、アニメを基にして作ったの？」

「うちの馬鹿共もやっているからありえるでしょうよ」

「やってるんだ」

思わず敬語ではなくなったけれど、まあいいわ。

「後、お姉ちゃんからの情報で……手は高確率でロケットパンチ。胸部から重力波を放射するって」

「うちのブラックホールキャノンとかと同じと思えばいいのね」

「ん。フィールドもあると思う」

「了解。さて、以上の情報で戦術の構築をお願いします」

「……情報収集能力はどうなっているのかしら？」

「企業秘密です。もちろん、軍事機密でもありませんから教えられません」

「そりゃそうよね。それじゃ……戦術を構築するわね」

「お願いします。その間にこちらはこちらの仕事をしましょう。ラピス、社長から連絡は来た？」

「来た。お姉ちゃんも来るって」

「そう。それなら全部任せてもいいわね」

リーサ・クジヨウの視線を感じながらラピスと会話をしていると、管制室の中に光の

柱が降り注ぐ。その光の中から水色の髪の毛をポニーテールにしたフリルのついた金色のラインと装飾の映える紺色の軍服を身に纏う社長が現れた。まあ、軍服と言っても脇は出しているし、ワンピースタイプだ。左右で別れて開けられている紺色の下に白いスカートフリルのついている可愛らしい衣装で軍服というのも違うと思ってしまう。まあ、レッドアクシズの軍服なんて儀礼用の軍服はあるけれど、個人個人が好き勝手な服を着る事が許されている。私だってその日の気分を変えている。

パイロットスーツだけは機体を完全に扱えて宇宙空間に放りだされても問題なく救助まで生還できるなら好きにしろと言われるぐらいだ。そもそも個人に合わせて自由にカスタマイズできるので普通は着る。個人用のオーダーメイドを会社の金で好き勝手オプシヨンマシマシにして安全を確保できるというわけよ。人材こそ宝。これが社長の理念であり、しっかりと育成して一般兵をエース級に仕立て上げてそれに相応しい機体を与えた方が戦果が期待できるとのことだ。個人にかけられるコストが他の軍隊とは圧倒的に違う。だいたい十倍から百倍だ。

「(こん)にはですのゝ元気にやっていますの?」

明るく軽い声で管制室の皆に声をかけ、ラピスが座っている席に移動して彼女に後ろから抱きつく社長。

「(こん)には〜」

「ちは〜」

「元氣つす」

「ならばよろしいですの」

「か、軽いわね……」

軍隊というよりはただの近所の集会みたいなのだ。リーサ・クジヨウが驚くのも無理はない。もちろん、オペレーター達と会話をしながら送られているだろう情報を確認しているはずだ。

「そちらの方ははじめましてですわね。わたくし、アルフィミー・マオ・ブロウニングと申しますの。以後、お見知りおきくださいですの」

「はい。戦術予報士のリーサ・クジヨウと申します。地球にいらしたのでは……」

「地球から遠隔で接続しておりますので、身体は地球にありますの」

「なるほど。それで相手については……」

「ああ、こちらはやる事が決まっていますの。アンノウンだろうがなんだろうが、敵対するなら潰しますの」

社長はモニターを操作して先行している部隊の一機に通信を繋げる。

「広域通信での呼びかけに反応はありますか？」

『ありません。一応、交戦許可が無いので引きながら対応しています』

「かしこまりましたの。では、広域通信でこちらから話しかけてみますの」
『お願いします』

社長がコホンと咳払いしてから可愛らしい声でこの辺り一帯に通信を繋げる。

「こちら、地球連邦軍独立治安維持部隊レッドアクシズですの。直ちに戦闘行為を停止し、説明と武装解除を要求します。答えられない場合、悪逆非道をなす悪として正義の名の下に断罪いたしますの。そうでしょう、会話もしないし宣戦布告もしてこない連中はただのテロリストにも劣る犯罪者でしかありません。それとも言語すら無くしましたか、ゲキ・ガンガー3のコピーロボットを作り出した怪人さん達。あ、著作権というものも知らないようですし、海賊版を作っているのですから、やっぱり悪役ですの」

社長の言葉に何言っただコイツっという視線をオペレーターを含めて私達を送ると、社長は楽しそうに笑っている。

『ふざけるな！ よりにもよって我等を悪だ?! 貴様達こそが悪であり正義は我等だ！』

『悪鬼羅刹の地球人共め！ 我等が今こそ鉄槌をくだす！』

『天誅である！』

まるで三文芝居を見ているようね。軍隊としては有り得ないから、やはりテロリストか何かか。それに言語は地球で使われている言語で間違いない。

「プロウニングさん、相手がどんな連中か知っていましたかね？」

「わたくしは思った事を言っただけですの。彼等の事は今、初めて出会いましたの」

「社長。相手と戦う上で警戒する事は？」

「相手は短距離転移を使ってくる可能性が高いですの。それとグラビティブラストを撃ってくるでしょうから、そちらも警戒をしてくださいですの」

「やつぱり知ってるんじゃない」

「ネルガルや安全保障理事会から情報は得ていますからね。どちらにせよ、敵ですの。現時点を持ちまして、独立治安維持部隊レッドアクシズは対象を地球を脅かすテロリストと断定しますの。対象を討ち滅ぼしてくださいですの。ああ、できれば確保が望ましいですが、确实最優先命令は死なない事ですの、失敗しても構いませんよ。ただメンデルに被害は出さないようにだけお願いしますの。後、終わったらわたくしの奢りで祝勝会をしますからそのつもりで。では、皆さん。頑張ってくださいですの」

『『『うおおおおおおおおおおおおっ!』』』』

社長が通信を切る。そして、こちらを向いてくる。私はリーサ・クジヨウが作り上げた戦術プランを社長に見せて承認してもらう。

「なるほど。ゲシユペンス^{ゲッ}ストMK^スⅢ^スの部隊で横腹を強襲ですか。問題ありませんが、ソレスタル^{ゲアル}ペンス^トMK^Ⅲの部隊で横腹を強襲ですか。問題ありませんが、ソレスタル

ビーイングが介入してくる事も考えないといけませんの」

「それは……そうですね。では、予備部隊を作って……」

「それでお願ひしますの。後、ガンダムが出たらカルヴィナさんは白騎士と黒騎士で対応をお願ひしますの」

「了解。できたら鹵獲するわ」

「では、わたくしは帰りますの。増援が必要なら呼んでくださいまし」

「何処かに行くの？」

「ええ、これからネルフに監査しに行つてきます」

「社長が自らですか？」

「はいですの。ネルフは二名しか認めないとの事でしたので、わたくしと護衛を一人だけ連れて行きますの」

護衛一人とか、どう考えても襲撃されるフラグでしょう。まあ、社長なら平気なんでしょうけど。

「ではでは、失礼いたしますの」

スカートを持ち上げて頭を下げた後、接続を切ったようで社長の身体が光の粒子と
なつて消えていく。

「それじゃあ、作戦指揮をお願いします」

「わかりました」

ソレスタルビーイング、どう動くか楽しみにさせてもらいましょう。モニターには戦闘の火蓋が切って落とされ、爆発の光が宇宙空間を照らしていく。飲み放題食べ放題という事で全員が馬鹿みたいに小型機を狙撃して撃ち落とし、ゲシュペンストMK-IIIが突入する前に決着が着きそうな勢いね。

「新たなアンノウンが出現！ 高速でこちらに向かってきています！」

「識別……完了……ソレスタルビーイングのガンダム二機。相手はガンダムヴァーチェとガンダムデュナメス。重砲撃タイプと狙撃タイプ。変形タイプと前衛タイプは確認できないよ」

「ありがとう。私達が対応する。ここは任せました。リーサ・クジヨウ、ラピス」
「……ええ……わかったわ……」

「任せて」

ログアウトして急いで格納庫へと移動する。サイボーグの身体で出せる全速力で移動し、白騎士のкокピットへと滑り込む。すぐにブレインコンピュータを接続させ、ローンに手伝わせて起動させる。

「ライル、そっちの準備はどう？」

『問題ねえ姉さん』

「そう。じゃあどっちを相手する？」

『兄貴をやらせてくれ』

「デユナメスの方ね。良いわよ。ただし、肉親だからって手加減は無しよ」

『ああ、わかってるよ。兄貴は俺が止める。それに社長からは説得の許可は貰っているしな』

「なら好きにきなさい。仕事を果たした上でやるのなら文句はないわ」

『恩にきる』

『お姉様、発進準備できました』

「白騎士、カルヴィナ・クーランジュ。出るわ！」

カタパルトで一機に加速し、追加でスラストを噴射してソレスタルビーイングの居る場所まで一気に駆け抜ける。すぐ横にライルが乗る黒騎士もきている。

『さあ、楽しい殺し合いをはじめましょう』

リーサ・クジヨウとその仲間達がどう動くか楽しみね。もつとも、既に檻に捕まっているような物でしょうけれど。そもそも変身能力持ちの社長相手に一人になるとか、その時点で積みよね。

第43話

「L4宙域 ソレスタルビーイング ロックオン・ストラトス（ニール・デイランディ）」

スメラギさんとセツナ、アレルヤがL4宙域にあるコロニー・メンデルへと侵入している。コロニー・メンデルは現在、新しく出来た独立治安維持部隊レッドアクシズの連中が周りの資源衛星なども集めてバイオテロが起こったはずのコロニーは完全な軍事施設へと姿を変えている。

俺とティエリアは潜入している皆にもしもの事があつた時に助けるためにL4宙域の端にプロトレマイオスでやってきている。

「ロックオン」

休憩室で自販機から購入した飲み物を飲んでみると、仲間であるフェルトが入ってきた。ピンク色の髪の毛をカールにしている彼女はフェルト・グレイス。クルーの中では最年少の14歳だが、プログラミングの技術が優れている。そんな彼女は両手に俺のサポートメカであるハ口を抱えている。

「フェルトか。何かあつたのか？」

「うん。バレたわけじゃないけど、アンノウンがL4宙域に転移してきたみたい」
「仕事だ！ 仕事だ！」

L4宙域に転移してきたアンノウンとなると、レッドアクシズの連中が黙っているはずもない。確実に臨検は行うし、高確率で戦闘になる。奴等はタカ派のグライエン・グラスマンが主導して地球圏の治安を守る独立治安維持部隊として組織された。地球連邦の一員だが、連邦軍ではなく実際は連邦政府安全保障委員会の直轄だ。つまり、連邦政府が自由に動かせる部隊となり、グライエン・グラスマンの思想が反映される危険な連中だ。アンノウンなら確実に鹵獲して技術を奪うぐらいするだろうさ。

「それでどうするって？」

「……ヴェーダからの指示で武力介入を開始するって……こちらから攻撃する事でよりスメラギさん達の安全を確保するつもりみたい……」

ソレスタルビーイングはスメラギさん達が居る施設も攻撃対象とする事でソレスタルビーイングとは一切関係ないように見せる作戦のようだ。

「そうか。ならやるしかないな」

「……」

「どうした？」

「……大丈夫なの……？ 相手の戦力は50機を超えた大部隊だよ……」

「心配するな。俺達はガンダムマイスターだぞ。それに今回の場合、アンノウンを利用すればいいからな。まあ、心配しなさんな。無事に戻ってくるさ」

俺は心配そうにしているフェルトの頭に手を軽く置いて撫でてから、ハロを掴んで部屋を出る。格納庫に向かう。

「おやっさん。準備は？」

「出来ている」

「サンキュー」

「生きて帰れよ」

「ああ」

機体であるデュナメスに乗り込み、ハロを左上にある定位置に設置して起動する。これから向かうのは戦場だ。フェルトが心配する通り、嫌な予感はある。だが、やるしかない。

「俺たちの出番だな、よろしく頼むぜ、ハロ」

「任せろ！ 任せろ！」

『……発進どうぞ……』

「ああ、行ってくる。ロックオン・ストラトス。出るぞ！」

オペレーター席に座ったフェルトの言葉を受けて発進させる。カタパルトを使い、

射出してからすぐに機体の動力を落として慣性の法則を利用して静かに進む。これでレッドアクシズの連中に気づかれる前にポジションニングが出来る。

ティエリアのヴァーチェも同じように動いているので問題ない。性能的に隠密性に關してはガンダムの方が上だ。火力もこちらが上だと言いたいが、火力はどっこいどっこいだろう。運動性能はこちらが勝つてはいるが、決定的な差はない。

相手がゲシユペンストMK-IIであれば圧倒できる。だが、ゲシユペンストMK-IIIは加速性と装甲の厚さでガンダムとタメが張れる。こちらは射撃性能が極端に低い。逆にゲシユペンストMK-IVは速度に優れて遠距離攻撃がメインだが、装甲は脆い。

前衛と後衛にハッキリと別れているタイプで数体なら問題ないが、十機以上で連携されるとトータルでは勝っているガンダムとはいえ、やられる。それほど連中が所持しているブラックホール・エンジンは太陽炉に比肩しうる代物というわけだ。

「まさかこんなに大量生産してやがるとはな……」

「ハイ！・ハイ！」

ハロの言う通りだ。技術があるのはわかる。しかし、本社の月を失ってからそんなに経っていないのに社長が交代してから異様な速さで復興して強力な機体を量産している。それに今のネルガル・マオインダストリーは前の物と違い、社長の意に沿わない邪魔者は全て排除されているらしい。またコロニー・メンデルについてもあの辺り一帯に

居た宇宙海賊やジャンク屋が少し前から排除されている。それも一部ではアインストを見たと言うのだ。だと言うのにアルフィミイが就任した直後にメンデルが譲渡された。怪しすぎる。

『ロックオン。ヴァーチエで砲撃を行う。援護してくれ』
「了解した」

あらかじめ予定したポイントに到着し、漂っている隕石やデブリの中に潜り込んでGNスナイパーライフルを構えてスコープを覗き込む。

視線の先にある戦場ではバツタのような小型機がゲシユペンストMK―IV達が放つグラビティブラストによって纏めて消し飛ばされて数の優位がどんどん失われている。

バツタでは相手にもなっていないが、相手側の方に居る巨大ロボットが大型レーザーを放ち、牽制しながら胸部からグラビティブラストのような重力の攻撃をしかけてゲシユペンストMK―IVを散らしていく。

そう、散らすだ。ゲシユペンストMK―IV達は安全面を優先しているのか、余裕を持って胸部が開きだすか、エネルギーが溜まり出した直後には回避行動に移っている。

「厄介だな。こういう時は普通、油断が生まれて撃破されるものだろう？」

「解析されてるぞー！」

「連中に油断は無いつてか……」

巨大ロボットの動きに合わせて部隊ごとでしつかりと連携し、確実に無理せずには相手を滅ぼしている。巨大ロボットが転移してゲシュペンストMK-IVの背後に出現すると、即座に護衛についていたゲシュペンストMK-IIIが割り込んで両肩にあるクレイモアを放つ。巨大ロボットは防御系のバリアによってそれを防ぎ、問題なく重力の攻撃をしようとした瞬間。左右から明らかに人体が出せる限界を超えた馬鹿みたいな加速で接近してきたゲシュペンストMK-III達がりボルピング・ブレイカーを突き刺し、リボルバーを回転させて杭を確実に撃ち込んだ。それもコクピットにだ。

『岩井イイイイイッ！』

『よくも我等の同士を！ 許さんぞ悪の地球人共！』

コクピットを的確に破壊した機体を確保したゲシュペンストMK-III達は他の連中を無視して下がっていく。それも半数の10機を連れてだ。その瞬間、巨大なGN粒子の奔流は彼等を包み込む。

「テイエリアか……」

バーストモードで破壊してレッドアクシズの連中に奴等の技術が渡らないようにするつもりなのだろう。

「まあ、始まつちまつたもんは仕方がないか」

俺も攻撃を開始しようとしたタイミングで異変に気づいた。ヴァーチエの砲撃がい

きなり方向を変えた。そちらを見ると白い光が急速にヴァーチエに近づいて行っている。ソイツはヴァーチエの砲撃を軽々と回避しながら接近していた。

『ロツクオン!』

「わかつている!」

ヴァーチエの射線と相手の回避行動を予測し、GNスナイパーライフルの引き金を引く。

「危険! 危険!」

「ちっ!?」

引き金を引こうとした瞬間に飛来した弾丸を転がるように回避する。すると目の前には黒い色をした機体が存在していた。すぐにGNビームピストルを引き抜いて放つ。相手も同じように腕に取り付けられている重力の三連装ビームキャノンを放ってくる。

互い回避して近距離で撃ち合いながらティエリアの方を見ると、白色に周りを移動されるながらグラビティブラストを放たれ、GNフィールドで受けながらも反撃しているが、相手の方が運動能力が高いようで命中しない。引き離すこともできないようだ。

それに回収しようとした連中も重力のバリアみたいなのが防いでいたのか、機体に損傷こそあれど行動に問題は無いようで今も撤退を続けている。当然、アンノウンも苛烈に攻撃を仕掛けているが、そのタイミングで左右から更に10機ずつ増援がやってきて

挟撃していつている。

「距離を取らないとまずいなっ！」

腰部フロントアーマー内に内蔵する特殊ミサイルを放つ。相手の回避行動を読んで放った攻撃は数発が撃墜され、数発が回避された。だが、残りのミサイルは直撃した。その爆発で距離を取ろうとした瞬間。爆風の中から無傷の奴が現れてデュナメスの両腕を掴んで背後のデブリに叩きつけてくる。

「くそっ！」

「罨！ 罨！」

「なんだと!？」

叩きつけられたデブリはその瞬間に表層の岩を突き破って無数のチューブが出てくる。それらがデュナメスに絡みついて両手両足を拘束していく。モニターには黒い機体から出るコネクタのような物がデュナメスのメインカメラに取り付けられ、一瞬で画面に不気味な文字列が映し出される。すぐに全てのモニターがブラックアウトする。俺はどうにかできないかとハロと共に操作していく。

「ハッキング、ハッキング！」

「対策はされているんじゃないのか！」

「ハロ！ ハロ……ろ……ろ……」

怒っていたハロは強制的に停止された。どうしようもないので無視して考える。確か、相手にヴェーダの一部が渡っていると話だったが、まさかそこから解析されたのかもしれない。システム自体は念の為に変えたが、作り手が同じ組織なのだから似通った部分から攻められたのかもしれない。

『フイーゼ、どうだ？』

『はい。もう通じますよパパ』

通信機から声が聞こえてきた。聞こえてきたのはよく知る男性の声と可愛らしい幼い少女の声。その直後に画面に光が戻って映ったのは金色のラインと装飾の映える紺色の衣装を身にまとう銀色の長い髪の毛をした綺麗な幼い少女。前髪に銀色の鷲状の飾りをつけている。そんな子が生身の状態で俺と同じ顔をして俺とは違うパイロットスーツを着た奴の膝の上に座っている。

「おい」

『久しぶりだな兄貴』

「色々と言いたいが、なんでお前がここに居るんだライル」

『それを言いたいのはこちらのセリフだ。なんでソレスタルビーイングなんてテロリストに居る！』

「戦争を無くすためだ」

親父達やエイミーの敵討ちもないとは言えない。それにライルが生きていく世界の道標になる。そう思っていたのだが、よりにもよってなんでレッドアクシズに居るんだ。

『兄貴、現状を理解しているのか？ 異星人からの襲撃を受けているんだぞ』

「それはわかつている。だからこそ、人類は一つにならないといけない。俺達が敵となることで……」

『無理があるだろ！ だいたい異星人を相手に団結すればいいだろう！ 兄貴達がわざわざ敵になる必要はない！ 俺達の所に来い！ 社長には話を通してある！ 今なら潜入していた扱いにだってできるんだ！』

「ああ、俺も敵になる必要は無いと思っていた。だが、実際はどうだ。地球連邦は纏まっっていない！ インスペクターが襲撃してきた後も変わらなかつたんだ！ その次は火星との戦いだ。火星は連邦政府の横暴な要求によって戦う事を決意した。それだけじゃない！ 奴等は血のバレンタインを起こした！ 俺はブルーコスモスを許容しているような連邦軍を断じて許せない！ お前こそこちらに来い！」

『断る』

「ライルっ！」

ライルの言葉に叫ぶ。ライルだけは幸せになつて欲しい。俺に残されたただ一人の

家族だ。

『俺は社長に助けってもらった。仕事をもらった。食料をもらった。仲間を助けってもらった。多大な恩がある。そして、社長は本当に地球の平和のために動いているのがわかる。だからこそ俺達も本気で助ける！』

「ライルは騙されている！ アルフィミイ・マオ・ブrowningはアインストと繋がっている可能性があるー！」

『そうだとっても地球を守る存在には違いはないだろ』

「それは……」

『それに兄貴。人じゃないって事がそんなに重要か？』

「何？」

『この子はAIだ。だが、俺の娘だ。高度に発展したAIは人と変わらない。それを俺はこの子達、会社で共に働いている子達から学んだ。人であろうとなかろうと、仲間なら仲間だから助ける。敵なら敵だから殺す。そこに人か人じゃないかの区別なんて必要ないだろう。異種族が手を取り合い、共に地球の為に動く。そこに何の問題があるんだ』

『それこそが……イオリア・シユヘンベルグの目的……人類の変革を起こすのは私達……』

「何故それを……」

ソレスタルビーイングの情報がかなり漏れているのかもしれない。そうなるとスメラギさん達がやばい！

『兄貴。ソレスタルビーイングはもう詰んでいる。何故レッドアクシズを狙ってきた。例えアインストだろうが、会話が出るのなら敵対する前に会話だろう。武力で介入した時点で駄目だ。正式にアポイントメントを取って来いよ』

「いや、テロリストがそれだと駄目だろ」

『俺は反政府組織に居たが、会社を訪れて話をして組織と難民となった守るべき者達を引き受けてもらったぞ』

「マジかよ」

……思ったよりもクリーンな組織なのか？ いや、それよりも聞き捨てならない事を言っていたな。

「ソレスタルビーイングが詰んでいるとはどういう事だ？」

『フィーゼ、お客さん達は今、どうしている？』

『リーサ・クジヨウは管制室で、残りの人達はコロニーの部屋に居る』

「何を言ってる……」

やばい。ヤバイヤバイヤバイ！ よりによってスメラギさんが一人だけでセツナ達

が一塊だど!? これは確かに詰んでいる。情報通り変身能力があるのなら、絶対に不味い事になる!

『あいつらが兄貴の居る組織、ソレスタルビーイングのメンバーだつて事は最初からわかってた。スメラギと名乗っているリーサ・クジヨウが戦術予報士として指揮をし、セツナ・F・セイエイがエクシアのパイロット。アレルヤがキュリオス。ティエリアがヴァーチェだったか。協力している奴等の情報もある程度はわかっている。準備が整い次第強襲をかける予定だぜ』

「っ!?!」

『最初から重要な情報を引き抜かれているんだ。どうあがこうが、兄貴達の負けだ。つまり、このまま行ってもソレスタルビーイングでは戦争を無くす事は不可能つてことだ』

全てがバレているか。それならこちらの目的を果たす事が出来ずに負ける。ライルの言う通りだ。ガンダムを維持するのだから金が要る。そこから潰されたら俺達ではどうしようもない。

『このまま行けば全員、死刑だろう。だが、俺達の所にくればどうとでもなる。偽物の死体も戸籍も作れる! だから大切な人を連れてこっちに連れてくれ兄貴!』

「……すまない」

『このままじゃ兄貴の仲間は皆殺しにされるぞ！ それでもいいのか！』
「俺がさせない」

『無理だ兄貴。そもそも兄貴達は上の連中に利用されている。奴等はイオリアの主義主張なんてはなっから興味なんてねえ。ガンダムで世界征服をしようとしているだけだ！』

「証拠はあるのか？」

『証拠は……まだない。だが、社長の情報だ。ソレスタルビーイングの内部情報だって全て知っているんだぞ？ 何処かに裏切り者が居る事は確かだろう？』

「確かに……」

『時間は無い。期限は社長がプロトレマイオスを制圧しに向かうまで。どちらにしろ、もう時間切れ。パパ、白猫が失敗した』

『は？ 姐さんがミスっただと？』

『パージして逃げられたみたい。八つ当たりに贗作ロボットがやられだしている』

何時の間にかデユナメスに侵入して俺の横に居てハ口を抱いているライルの娘という事になっているフィーゼ。彼女はこちらに気づいて軽く頭を下げてくる。

「ちっ!？」

拳銃を引き抜き、発砲するが身体を弾丸がすり抜けて壁に激突して跳ね返る。それを

彼女はハ口で受け止める。

「立体映像。無駄だよ、伯父さん」

「くそっ」

脚部にあるGNミサイルで離脱する予定だった。だが、それはもう無理だ。だから急いで自爆用のボタンを押し込む。しかし、何も起こらない。

「解析は終了。クラッキングも問題なく終わっている。ヴェーダへのハッキングは残念ながら無理」

『いや、十分だ。兄貴、ゆっくりと話し合おう。大丈夫だ。兄貴の身の安全は絶対に俺が守る。例えば味方にならなくても敵対しないだけでも社長は問題ないと言ってくれている』

「本当か?」

「司令官は貴方達の事を気に入っている。ライクの方の好きともファンとも言っている録音があるから確実」

『だから頼む兄貴。俺に兄貴を殺させないでくれ……父さんや母さん、エイミー達になんて報告をすればいいんだ……頼むよ……』

「ああっ、くそっ! わかった。わかったよ。俺の負けだ。お前ともアルフィミーともしっかりと話し合ってやる。だから出来る限りプトレマイオスの皆を助けるように頼

む」

両手をあげて銃を放りだし、両手を頭の後ろに組む。動かないガンダムなんて棺桶と変わらない。もう俺にどうする事もできない。せめて皆の助命を頼むだけだ。

『掛け合ってみる。まあ、社長なら大丈夫だろう』

「大丈夫。仕事がなくなっても伯父さんはパパと私が養う」

「……伯父さんか。ライルの娘ならそうなるのか？」

『それで間違いないと思うぞ。俺が付き合ってた彼女のDNAと俺のDNAで身体を作る事もできるって言ってたしな』

「それって大丈夫なのか？ その母親の方は……」

『ああ、大丈夫だ。母さん達と同じところに行ったから……』

「そうか。すまん」

『いいさ。それよりも今から帰港する。隕石ごと牽引するから大人しくしてくれ』

「隕石ごとか。そういえば俺は罨が仕掛けられている場所にやってきたんだな」

『この辺り一帯、全てトラップだからな』

「マジか」

「本当。このデブリや隕石は全て偽装。訓練施設として使っているし、各種センサーも内蔵。だから、ガンダムが来てるのも一発でわかる」

「最初からここに来た時点で勝ち目がなかったのか」

「ん」

この辺り一帯全てがセンサー内蔵のトラップという事はGN粒子で阻害されればつかりとその部分だけは穴が開くことになる。それはつまり、そこに何かがあると
言っているようなものだ。

こんな物を訓練施設として用意しているのなら、この中を突撃してタイムを競ったり、潰し合ったりもしているんだろう。訓練量でも敵わないかもしれないな。

【コロニー・メンデル セツナ・F・セイエイ】

スメラギを待っている。部屋の護衛は入口に二人。部屋の四つ角に一人ずつ。扉の外にも二人が居るのは確実だ。いつもサイボーグであり、生身では俺達はかなわない。金属の身体を持ち、モビルスーツほどとはいかなくてもかなりの馬力を出せる。それも戦闘用に開発された軍用サイボーグだ。武装もしっかりとしているので、丸腰では

まず無理だ。

他の連中も大人しくしている。だから、俺はどうかする事を考えている。しかし、護衛という名の監視が厄介すぎる。

そう思っていると部屋扉が開き、スメラギが帰って来た。彼女の隣には教授と呼ばれていた人が立っていた。

「それではクジヨウ君。また会おう」

「はい、教授。それでは私達はこれで失礼します。皆、帰るわよ」

「もういいのか？」

「ええ、戦いはあったから後処理の為に私達は邪魔って事ね」

「そういうことなら……さっさと帰ろう」

アレルヤが何処か不思議そうにしているのが見える。だが、問題はないだろう。兵士の人に案内してもらい修理された輸送船へと乗せられる。

「これからどうする？」

「そうね……プトレマイオスに戻ります。ロックオンが捕まったわ」

「なんだと!？」

「それはまずいね」

「ええ、まずいわ」

「ヴァーチエはどうなった？」

「ヴァーチエは撤退する事ができたけど装甲をパージしてナドレを出したわ」

「ナドレ？」

初めて聞いたな。ヴァーチエは装甲をパージすればナドレになるのか？

「つと、これは秘密だったわ。忘れてちようだい。今はプトレマイオスに戻って残りのガンダムでロックオンを助け出し、デユナメスを取り戻すわよ」

「わかった」

「了解。帰投するルートは……」

「それは王商会にお願いするわ。私はこれから奪還作戦を練らなくちゃいけないから、いいわね？」

「畏まりました」

ロックオン……生きていろよ。俺達が必ず助けてやる。

第44話

「地球連邦軍　L5宙域　高軌道ステーション　セルゲイ・スミルノフ」

「諸君等の任務は世界中で武力介入を続ける武装組織の壊滅及び機動兵器の捕獲にある。この任務を達成する事で我等人類革新連盟は地球連邦軍を、世界をリードする立場になるだろう。諸君等の奮起に期待する」

整列している兵士達の前で演説を行う。それから作戦の説明を行っていく。今回の作戦に成功すれば我々は連邦軍の中でもかなりの影響力を得られる。先の火星との戦いでは三つのウルブズと特殊部隊が活躍した。だが、得られた技術は少ない。

また本来なら我々に与えられるはずだった独立治安維持部隊の話が、先の戦争で敵の拠点である揚陸城を奪取したアルフィミイに持っていかれた。本来は特殊部隊の援助も受けられないので成功するはずがないと他のウルブズの背後に居る者達も許可を出したのだが、乗っ取ったマオ・インダストリーとマオ・インダストリーが買収していたネルガルの連中を引き連れ、地球連邦軍の中でも治安維持部隊としてかなりの戦力を保

有することになった。

拠点限定ではあれど、他のウルブズと数だけでいえば大差が無い。むろん、兵士の練度は比べるべきもない上に輸送船しか持つておらず、空母と戦艦を現在作成中との事だ。だが、それは特殊部隊の連中が協力すれば話が変わってくる。レッドアクシズが持つネルガル・マオインダストリー社製の最新鋭機を特殊部隊の連中に引き渡せばウルブズにも対抗しえるだけの戦力となるだろう。

異星人との戦いを考えれば喜ぶべきであるが、肝心のアルフィミイが何を考えているのかがわからん。また安全保障委員会の傘下であり、地球連邦軍とは指揮系統が別な上に拒否権まで持つているとなれば軍としては歓迎できん。

「セルゲイ中佐。司令官が呼びです」
「わかった」

司令室に出向き、部屋に入り敬礼をする。それから椅子に座っている司令官に要件を聞く。

「司令。私に用件とはなんででしょうか？」

「面倒を見て欲しい兵士が居る」

「はっ」

「入りましたえ」

兵士が扉を開け、外に待っていた兵士が入ってくる。その兵士は白色の髪と濃緑の長い髪をした二人の女性であり、どちらも子供だった。年齢は18歳くらいだろう。

「失礼します。超人機関技術研究所より派遣されました。超兵一号ソーマ・ピーリス少尉です」

「スクールより派遣されましたブーステッド・チルドレン・アウルムクラス、オウカ・ナギサ少尉です」

「貴官等が噂の超兵とブーステッド・チルドレンだと？」

「必ずや戦果を上げてみせます」

「私がソレスタルビーイングを捕らえてみせます」

二人の少女は睨み合う。どちらも若すぎる。それに彼女達はまだ乙女だ。戦場に出すのは早すぎるだろう。

「司令。この二人は……」

「これは命令だセルゲイ中佐。ソーマ・ピーリス少尉は上から次世代型のティエレンタオツと共に派遣されている。オウカ・ナギサ少尉はアサルト・ドラグーンのアシユセイヴァーをもとにATX計画のデータを使いレモン・ブラウニングが開発した機体だ。

新機軸のゲーム・システムともう一つ特殊な物を搭載しているらしい。機体名はラピエサージユだ。どちらもガンダムとの戦いに役に立つだろう」

「ブロウニング……アルフィミー・マオ・ブロウニングの関係者ですか」

「姉だそうだよ。だからカネルガル・マオインダストリーの技術も使われている」

「安全性は？」

「テスト機だ。どちらもテストパイロットというわけだ」

子供を安全性が確保出来ない機体のテストパイロットにするとは正気か？

「二人は常に前線に出すように」

「しかし司令！」

「命令だと言っただろう！ 復唱しろ！」

「……はっ！ 二人は前線に出します」

命令されたら仕方がない。あのアルフィミーが関わっているのなら安全だと思いたいが、あやつ自身が化物のような肉体スペックだ。それに合わせて作られているのであれば保障はできない。それこそサイボーグのように身体を機械化してようやく扱えるといったレベルかもしれない。

「以上だ」

「了解しました。二人共、着いて来い」

「はっ！」

敬礼した二人を連れて廊下に出る。さて、この二人をどう扱うかだが、まずは動けるかどうかを確認しなくては話にもならんか。

「お前達は荷解きとかは終わっているのか？」

「終わっています」

「問題ありません」

「そうか。機体の方はどうだ？　すぐ動かせるか？」

「ティエレンタオツ、問題ありません」

「ラピエサージユも問題ありません」

「ではシミュレーターによる模擬戦闘を行ってくれ。戦闘能力を把握する」

「了解しました」

二人は張り合うように互いを睨みつける。互いに別の組織であり、同じように機動兵器を開発し、そのパイロットを育成しているのだから張り合うのは仕方がないだろう。だが、それでは困る。

「いがみ合うのはよせ。これからは仲間だ。もし、態度が改まらないなら戦場には出さ
ん。和を乱す者は軍隊にいらん」

「はっ！」

これで収まってくればいいが、まあいいだろう。二人をシミュレーターに連れて行く。

「見ていてください中佐！」

「必ずや戦果を出せると知らしめてみせます！」

「期待している」

激しい戦いを始めた二人を置いて作戦司令室へと移動する。そこではソレスタルビーイングを発見するための作戦が行われている。

「状況はどうだ？」

「本部からの情報ではレッドアクシズがガンダムの一機を鹵獲したとのことです」

「そうか。これでますます我等が遅れる訳には行かなくなつたな」

「AE3487の双方向通信が途絶えました」

「位置は……」

告げられた位置はL4宙域とL1宙域の間だった。ここからかなり近いな。相互通信装置を等間隔で数十万規模で配置して辺り一帯を調査することでGN粒子の特徴で通信が途切れる場所を探す。そこがソレスタルビーイングの母艦が存在する場所だ。

「特務部隊頂武の総員に連絡。モビルスーツ隊、緊急発進！ 私も出る。それと保険を兼ねてペーオ・ウルブズに連絡を入れておけ」

「了解です」

これで私達は時間を稼ぐだけでいい。最悪、ベーオ・ウルブズが解決してくれる。

【ソレスタルビーイング プトレマイオス フェルト・グレイス】

「ただいま」

「お帰りなさい。やっぱりロックオンは……」

「ごめんなさい。レッドアクシズに捕まったわ」

帰ってきたスメラギさんの口からロックオンが捕まった事を教えてくれた。戻ってくるって言ったのに……嘘つき。けれど、スメラギさん達は無事に脱出できたみたいで良かった。合流できたから奪還に動ける。

「奪還作戦は考案中だからちよつと待ってね。とりあえずヴァーチエはどう?」

『ヴァーチエは回収して修理中だ。直ぐには出られないぞ』

「了解。つまり、現状の戦力はエクシアとキュリオスだけという事ね」

スメラギさんは何かを考えているみたい。ブリッジにはセツナやアレルヤ、ティエリアも居る。二人は何処も怪我をしていないようで良かった。お父さんやお母さんみたいに死ななくて本当に。

「これからどうします?」

「スメラギさんが用意していた計画通りに動くだけだ。追撃が来るかもしれないが、どうなんだ?」

「ラッセの言う通り、レッドアクシズはデユナメスとアンノウンを確保する事を優先しただけで収容したら追撃に来るでしょう。だから一時的に離れる必要があるわ。リヒティ、頼める?」

「わかった。任せてくださいっす」

「アレルヤとセツナは休憩しながら何時でも出撃できるように準備しておいて」
「了解」

「ティエリアは休息よ。ヴァーチエが動けるようになるまで待機ね」

「了解した」

やっぱり、ロックオンが居なくなると不安。クリスも不安そうにしている。

「大丈夫かな……」

「大丈夫ですよ。俺達が居ますから」

「でもやつぱり不安だよ。数で圧倒されちゃったし……」

「そうは言っても二機だけでしたからつすよ。三機も居れば……」

「そもそも樂觀視はできないのよ。最後に確認された黒と白の二機は明らかにガンダムの性能を超えていたわ。パイロットとしては黒は同等として白は超えているわね。つまり、ソレスタルビーイングのアドバンテージはほぼ無くなったとみていいの。隠し玉が無い限り」

「その言い方だとあるのか？」

「まだわからないわ。探らないといけない事が大きいから。ただこのままじゃいられない事は確実よ。ガンダムマイスターの皆は密に連携が出来るようになってちようだい。個で敵わなくなれば群れで挑むしかないの。まあ、最初から世界を相手にするんだからこうなる事はわかっていたけれどね」

「「っ!」」

「私達の予想以上に事態は動いて技術革新が起きているわ。横の繋がりが無い私達では追いつくのは難しい。そうよね、イワン」

『ああ。どうにかして手に入れる技術情報も何世代か前だったりするからな。そもそも研究に使える費用も資材も人員も違いすぎるからな』

「そんな……」

皆が不安そうにしている中、セツナ達は無然としている。まあ、マイスターからしたら敵わないと言われているような物だからね。でも、スメラギさんの予想だともう無理なんだね。

「ヴェーダの予想ではそんな事はない」

「テイエリア。ヴェーダは完璧ではないわ」

「そんな事はない」

「確かにヴェーダは地球人の技術では世界最高水準なのでしよう」

「なら……」

「でも、異星人や人類以外の技術情報が混ざればどうかしら？」

「それは……」

「計算の前提条件が狂ってしまっているのよ。アインスト、火星、木蓮、ゲッター線による急激な進化など。地球人が開発していない技術や得体の知れない物体により革新的な事が起こっているわ。少なくともレッドアクシズの母体となっているネルガル・マオインダストリー社はエイフマン教授をはじめとした優秀な科学者を集めて異星人の技術も取り込んで研究をしているわ。おそらくヴェーダかヴェーダを超える量子コンピュータも持っているでしょう。そうでないとヴェーダのクラッキングなんてできないし、ここまでの開発速度は理解できないわ。実際に異星人の技術を使ってブラック

ホールエンジンを量産しているんでしようしね」

スメラギさんの言う通り、確かにネルガル・マオインダストリー社の開発速度は異常と言つていい。いくら地盤を引き継いだとしてもブラックホールエンジンをはじめとした兵器やサイボーグ技術の進歩ははやすぎる。

「まあ、そういうわけだから降りたい人は降りていいわ。どうにか伝手を頼つて別の戸籍と仕事を用意してあげる。私はロックオンを救い出すために今度は正面からレッドアクシズに挑むから、それまでに伝えてちようだい。以上よ。解散して交代で休憩してちようだい。ここは私が見ておくから」

「いいんですか?」

「ええ、構わないわ」

スメラギさんが艦長席に座り、端末を操作してレッドアクシズとヴァーチェ、デユナメスの戦いを表示して真剣に見だした。

「どうする?」

「フェルト、ちよつと休憩しよう」

「うん」

クリスに引つ張られてブリッジから出る。私はこれからどうしよう。でも、私にはソレスタルビーイングしかない。だから、ここに居るしかない。

この後、私達には地獄が待っていた。そう、待っていたの。

第45話

「プトレマイオス フェルト・グレイス」

船内にある展望室から宇宙空間を眺めていると、勝手に涙が溢れてくる。

今日はお父さんとお母さんの命日。だから、スメラギさんから告げられた内容は衝撃だった。お父さんとお母さんが命を賭けて頑張り、私が継いで頑張ってきたソレスタルビーイングが無意味な物になり、滅ぼされるだけだなんて。そんな事がお母さん達の命日に教えられるなんて……ひどい。

ソレスタルビーイングは私の全てなのに。生まれた時からずっとソレスタルビーイングに居た私にはここしか居場所が無い。だから死ぬまでここに居るしかない。

「……はあ……どうしよう……」

話し合ったクリスはソレスタルビーイングから、少なくともプトレマイオスからは降りると言っていた。彼女はハッカーとして世界中の情報を集めてくれて教えてくれた。その情報から判断すると、スメラギさんが言った通り、このままソレスタルビーイング

に居たら私達は高い確率で捕まるか、殺されるかするって。

クリスの話ではこのままでと数ヶ月もしない内にガンダムクラスの軍備がどんどん増強されていくらしい。ネルガル・マオインダストリー社の開発速度を考えるとブラツクホールエンジンや太陽炉の搭載機が当たり前になるみたい。ネルガル・マオインダストリー社の安全性を重視してパイロットの命を優先しながらも攻防に優れた汎用機、ゲシユペンストMK—IVが大量生産されて配備される計画が安全保障委員会に秘密裏に提出されるらしい。それも格安でゲシユペンストMK—IIをゲシユペンストMK—IVに交換するらしい。軍部もコストがかからないし、火星騎士や異星人のこともあるから一新するのに乗り気になるのは確実だって言ってた。

もう終わりが近い。どうせ死ぬなら痛いのは嫌。でも、お母さんとお父さんのところに行けるなら、それもいいかも——

「あら?..」

——展望室の扉が開くと、誰かが入ってきた。だから、涙を拭って振り返る。入ってきたのはスメラギさんだった。手にはドリンクを二本も持っている。

「……フェルト……? もしかして……泣いているの?..」

「なんでも、ありません……」

「あくあくなるほど、なるほど」

小首を傾げて何かを不思議そうにした後、納得したようで私の横にやってきた。そして、手に持ったドリンクを片方差し出してくる。ドリンクには誰が飲むのかと思えるラインナップで、一つはラストエリクサー微炭酸。もう一つはプルコギエキス。

「フェルト、とりあえずどっちがいい?」

「えっと……」

「どっちがいい?」

「あの……」「どっちがいい?」

「あ、じゃあラストエリクサーで……」

「これがあれば完全回復して徹夜も平気って書いてあるけど、正直どうなのって感じよね。まあ、プルコギエキスも誰が飲むと思ってるんだか」

「なんでコレを選んだんですか?」

「どうせなら変なのを試してみようと思ってね」

そう言いながら、私が受け取らなかったプルコギエキスを飲むスメラギさん。直ぐに顔を顰めた。

「さて、と……泣いていたのは私が言った言葉が原因でしょ?」

「うん……私、これからどうしたらいいのかわからない。このままソレスタルビーイングに居ても、勝てないんだよね?」

「無理ね。そもそも地球連邦とソレスタルビーイングじゃ戦力差がありすぎるもの。今まではガンダムを持つ隠密性と性能、奇襲で補ってきたけれど相手の技術力は格段に上昇しているわ。月でヴェーダの一部を奪われたのが致命傷ね。ネルガル・マオインダストリー社はそこから太陽炉の開発に成功したわ」

「でも、失敗するかも……」

「エイフマン教授が他の天才や逸脱人と言えるような科学者と協力して潤沢な資金と施設で作るのよ。太陽炉その物じゃなくてもそう変わらない劣化品ならもう出来てるでしょうね」

「……太陽炉は木星じゃないと……」

「重力制御さえできれば木星と同じ条件を整えるのは難しいことじゃないわ。それ専用の作業所を作ればいいんだから。実際、エイフマン教授に見せてもらった資料にはその施設もあつたし、試作機は見ていないけれど資料は下手をしたらソレスタルビーイングが持っている太陽炉よりも上よ」

「そんな……お母さんとお父さん達が頑張つて作ったのに……」

「泣かないで」

溢れてくる涙をスメラギさんが指で拭つてくれる。

「それに言つたけれど新しい職場や戸籍は用意できるわ。フェルト・グレイスという名

の別人を用意することだって可能よ」

「でも、私はソレスタルビーイングにしか居場所が……」

「なら、私が居場所になってあげるわ」

「え？」

「これが終わったら一緒に仕事をしましょう」

スメラギさんが俯いている私の顎に手をやって上を向かせてくる。私はスメラギさんと視線を合わせる。スメラギさんの視線には後悔が満ち溢れていた。

「……あ……」

そのままスメラギさんに抱きしめられて顔が近づいてくる。耳元に顔がやられ、囁くように私にスメラギさんが告げてきた。

「本当は教えたくなかったけれど仕方がないわね。ソレスタルビーイングは守秘義務があるわ。でも、無くなるのなら意味がないわよね。だから教えてあげる。貴女の両親が死んだプルトーネの惨劇は事故じゃなくて事件よ。ソレスタルビーイングの上の連中、イノベイドのビサイド・ペインが起こしたね」

「え？　嘘……そんな……」

「だから守秘義務なんて言って誤魔化したのかもね」

お父さんとお母さんが死んだのは事故じゃなくて、事件なの？　それもソレスタル

ビーイングの上が揉み消した……わ、わたしは……

「フェルト、貴女は両親の敵と言えるような連中が好き勝手牛耳ってイオリアの意思すら捻じ曲げて世界を征服しようとしている彼等に義理を果たして死ぬつもり？」

「い、やつ……いやつ！ そんなの絶対に嫌っ！」

「そうよ。良い子ね、フェルト……」

頭を優しく撫でてくるスメラギさん。私は何がなんだかわからなくなる。

「でも、証拠もないからわからないわよね？」

「……はい……」

「だから、フェルトにヴェーダの記録を見せてあげる。その為には代償があるけれど大

丈夫よ」

「代償？」

「ちよつと死にくくなつて情報処理能力と運動能力が格段に上昇するだけよ。これさえ飲めば死ぬ事はないわ」

「死なないの？」

「ええ、どんな事があつても私が守つてあげるし、物理的にも大丈夫になるわ。それに死にたいのなら殺してあげることもできるの。選んで欲しくないけれど」

「……これ、クリスにもあげられる？」

「大丈夫よ。いくつかあるから」

「ありがとう。じゃあ、ください」

「私と契約して魔法少女になつてくれる?」

「え?　なんで魔法少女?」

「言つてみたかっただけ。だって、悪魔の契約みたいな物でしょう?　真実を欲して契

約するのだから」

「……わかつた。なる。だから、お父さんとお母さんの真実を教えて……スメラギさん

……ううん、悪魔さん」

この人はスメラギさんじゃない。スメラギさんの皮を被った別の誰か。それでも私を死なせたかと思つて、ソレスタルビーイングから抜けさせようとしているのはわかる。もし、この人の言葉が本当なら、真実を知った私は上の人達から狙われて秘密裏に消されると思う。私に選択肢があるようで無い。でも、望んだら死なせてくれるということは悪魔じゃなくて甘い小悪魔さんかもしれない。

「じゃ、口を開けて」

「キスするの?」

「キスがいいの?　別に構わないけど……」

「嫌。流石にそれは……」

「残念。じゃ、これ食べてね」

「そう言つて何かの種を私の口に入れてきた。指が口から引き抜かれる。種の味はしない。」

「そこまでだ!」

「動くな」

「フェルト! 飲んだら駄目だ!」

入つてきたのはセツナ、ティエリア、アレルヤの三人だ。三人はそれぞれ銃を構えている。セツナとアレルヤは私を心配して視線を左右に向けている。でも、ティエリアは違う。

「あら、三人共お揃いでどうしたのかしら? そんな物騒な物を向けて」

「黙れ。お前はスメラギじゃない」

「ああ、そうだ」

「何を言っているのかしら? 何処からどう見ても私はスメラギよ」

「いいや違うね。コロニー・メンデルから違和感があった。でも、ここに戻つてティエリアと話して確信したよ。貴女はスメラギさんが本来知らない事も知っていた。そうだよね、ティエリア」

「ああ。ヴェーダの情報からもお前は違うと判断された。故に貴様は敵だ」

「ヴェーダが本来の機能を果たしていたらそれもわかるのだけれど、コアが移植された上にテイエリアと同じイノベイドのリボンス・アルマークとアレハンドロ・コーナーが細工しているでしょうしね。ああ、それともテイエリアの視界を奪って覗いているのかしら?」

「何を言っている!?!」

「……」

「つと」

テイエリアが何も喋らなくなり、いきなり連続で発砲した。私はスメラギさんに後ろに引かれて下がる。スメラギさんが前に出て撃たれる。

「あら、話ではなくいきなり武力介入かしら? と、どうかフェルトも狙って撃ったわね?」

「テイエリア! フェルトにあたる!」

「ヴェーダはフェルト・グレイスも危険分子と判断した。故に排除する」

「なんだと!?!」

「セツナ、アレルヤを止めろ」

「了解した」

「セツナ!?!」

セツナがアレルヤを手で押さえながらこちらに銃を向けてくる。怖い。怖くて思わずスメラギさんに抱きつく。

「コイツは敵だ」

「ああ、ああ、そうですよね。今のセツナはそうですよね、ええ、ええ、知っていました。それとフェルトさん。飲み込んでも飲み込まなくても助けますよ」

「んくつ……飲んだ。もうここには居られない」

「撃て。これがコイツ等の選択だ」

「ああ」

「くそっ!」

セツナとティエリアが放たれた複数の銃弾は私の前に立ったスメラギさんの身体に命中していく。でも、平気そうにしている。

「そうですか。そうですか。それでも満足しましたか?」

「なんだと?」

「銃弾が効いていない……」

「では、こちらにも反撃させていただきますでしょうか。抜刀♪」

楽しそうな声と共にスメラギさんが何時の間にか持っていた棒状の物から光の刀を出現させ、手を振るうと三人の銃が全て切断された。

「それで次はどうするの？ 銃を斬ったけれど止まるのかしら？ それとも手足を斬ったら止まるの？ ああ、ガンダムを動かそうとしても無駄よ。既に止めてあるもの。もちろん、プトレマイオスの制御権も制圧済み」

「なっ……」

スメラギさんが消えたと思ったら、ティエリアの頭を掴んで持ち上げていた。ティエリアは慌てて腕を掴んでいるけれど、まったく効果がない。

「ルリちゃん。ヴェーダへのクラッキングを開始してくださいな。コイツから連中の居場所を知りましょう。あら、切られましたか。残念。まあ、いいでしょう。それよりもレッドアクシズをガンダム三機で襲撃して勝つ作戦を練りますわよ。ええ、そうです。そちらはスメラギさんに指揮させてください。これはゲームですの。私とスメラギさん、どちらが勝つか。いえ、勝ち目はないんですけど、ソレスタルビーニングの壊滅と鹵獲したという事を正式に発表するために必要ですから」

スメラギさんの肩に現れた掌サイズの小さな女の子と会話していく。やつぱりスメラギさんじゃないみたい。そう思っていると、いきなり通信が飛んできた。それもクリスのすごく慌てた声。

『「こちらの位置がバレました！ すぐに敵の大部隊がやってきます！』

「あら、あらあら……」

「ティエリアを解放したかと思うと、宇宙空間の方に視線を見てから……私を見てきました。」

「フェルト、選択肢が三つあります。このまま私が制圧して船ごとレッドアクシズの物になるのが一つ。こちらは抵抗されたら駄目なので反抗的な者は手足を落として拘束か殺します。二つ目はやってくる敵部隊を倒してレッドアクシズと戦う。こちらは勝てばはれて皆さんと自由です。最後は私達だけで逃げます。どれがいいですか？」

「……二つ目が、いいです……皆、大切な人だから……」

「ではそうしましょうか。さて、ガンダムマイスターの三人。これから私が指揮を取ります。死にたくなければ従いなさい。ああ、別に拒否しても構いませんよ。今回はフェルトの意向をくんでそうするだけなので、一つ目のプランでも構わないのですから」

「本当にレッドアクシズとことを構えるのか？」

「ええ、そうです。先の勝利は圧倒的すぎました。そもそもガンダムに隠された力も使わずに勝ったのではどちらも不完全燃焼でしょう。ですから……いえ、どうせならガンダム四機と私達三機で戦うのもありですわね。どっちがいいですか？」

「えつと、選ばせてくれるの？」

「ええ、もちろん。ちなみに貴方達をまるまる引き取るつもりなので、安心して下さい。これから地球と人類の為に働く同胞には優しいですよ？ 全ては地球と人類の繁

栄のためにありとあらゆる障害を排除して守りましょう」

「……セツナ」

「俺達に選択肢は無い。ガンダムを押えられたのが事実であれば、やるしかない」

「そうだね。もし、ボク達が勝つたら見逃してくれるのかい？」

「二度、捕らえてから捕虜とします。それから補給して脱走されたという形になりますわね。それでよろしければどうぞ」

「……やるしかないか。わかった。テイエリアもそれでいいかな？」

「……俺は、僕は……」

「まあ、好きに考えなさい。とりあえず、今、襲ってくる連中をどうにかするわよ。いいわね！」

「ああ」

「了解」

「……了解した」

スメラギさん（？）は私を抱き上げてブリッジへと向かっていく。それから席に座らせてもらった後、驚いていた二人に報告を聞くと、リヒティがやらかしていたみたい。

第46話

「プトレマイオス ブリッジ 偽ラギさん」

黒幕気取りの人形さんには逃げられましたが、まあ大丈夫ですの。問題はそれよりも相手ですね。さて、誰が相手でしょうか？ 原作通りならばおそらく、相手はロシアの荒熊と言われるセルゲイさんです。

もともと、原作とは違ってデユナメスも居ませんし、あちらもスパロボ時空という事で戦力が増強されていて、不思議ではありませんの。まあ、やることは一つですの。

「プトレマイオス、トレミーを軌道変更。目標地点をL4宙域のコロニー・メンデルへ変更。最短距離で向かってちょうだい」

「レッドアクシズの所に向かうんですか!？」

「正確にはデユナメスが捕らえられたあそこのアステロイドベルトよ。あのトラップを利用して。それに地球連邦軍と独立治安維持部隊なら指揮系統も違うし、そう簡単に事は起こせないし、レッドアクシズならエイフマン教授を通して裏取引が可能よ。既に

デユナメスを確保されているんだから、多少の技術漏洩は仕方がないわ。それよりも今は生き残る事が最優先よ」

「了解です！」

「各マイスターはガンダムのコクピットで待機。イアン、ガンダムの整備状況は？」

「エクシアとキュリオスは終わっている。だが、ヴァーチエは予備パーツを付けているが、完全とはいかんぞ」

「GNバズーカを撃てればいいわ。エネルギーはトレミーから直接供給して砲台にします。できる？」

『可能だが、プログラムを組まなくちゃならん』

「それならもう組んだわ。今から計画をプラン転送するからその通りに作業してちょうだい」

『まじかよ……』

「お願い。それで生存率が上がるわ」

『わかった』

トレミーで逃げつつ、ヴァーチエを砲台として運用する。私がゼロシステムの演算補佐をやりながら敵の位置情報を確認し、進行ルートにヴァーチエの砲撃を置いていけば幾分かは削れる。抜けてきた敵はエクシアとキュリオスで対応。エクシアを前衛とし、キュリオスを高起動形態で移動力を確保する。これでトレミーから離れてもなんとか

なるでしよう。

「クリス」

「は、はい！」

「貴女、ハッキングが得意よね？」

「確かにできますけど……」

「なら、人革連の連中にハッキングを仕掛けておいて。何時でも壊せるようにね」

「あの、情報を見る事はできて壊す事は……」

「そう。それならこれを使って」

「なんですか、それ」

「ウイルスよ」

電子の妖精ルリちゃん謹製の攻撃型ウイルス。連邦軍が使っているネットワーク施設を一時的に破壊する。これによって連中は予備に切り替える時間が必要になり、連携はとれない。イスルギ重工の施設だから気にせず壊して問題なし。その後で我が社の製品を売り込めばいい。ふつつつつつ、今はアルフィミイちゃんではなく、ソレスタルビーイングのスメラギですの。つまり、テロリストですの。

「広範囲に影響が……」

「リカバリーの手段はあるのでやってちょうだい」

「わ、わかりました！」

「それとこの艦に武装は……ないのだったわね」

「ないな」

「ど、どうするの!」

「クリスは集中なさい。貴女が一番肝心なんだから」

「フェルトは……」

フェルトの方を見るとぼーとしている。心ここにあらずの感じですよ。まあ、現在進行形でフェルトの身体が作り替えられているから仕方ありませんの。プルトーネの惨劇について情報を見ているのかもしれない。どちらにせよ、約束通り守ってあげましょう。

プトレマイオス、トレミーに残っている情報から月での活動内容を正確に割り出し、内容を精査しますの。その結果、彼等は本当にヴェーダのコア以外は持ち出せておりませんでした。つまり、影月の方に残っているでしょう。いや、持って帰っているか、殺しているか思っていたのですが……トランザムが使用できないのであればまだ眠っているんでしょう。

『ツエツペリンちゃん。今、いいですか?』

『フューリーとの戦いはひと段落しているところだけど……お菓子?』

『お菓子をあげるの、ハイパーゲートがある場所をもう一度探索して欲しいですの』
『え、面倒……』

『お願いいたしますの。ヴェーダがあつた場所を重点的に探し、イオリアの冷凍睡眠装置を探してください。それから、治療が必要なら治療し、それが無理ならもつたいたないですが、処分してくださいまし。それでトランザムが解放されるはずすし』

『報酬！ 報酬を要求するのだ！ 母上が作るふわふわトロトロのオムライスがいいのだ。あ、ハンバーグもだつてビスマルクが言つてるよ』

『わかりましたの。それとオルレインはどうですか？』

『治療は終わつて訓練中なのだ』

『そうですか。では出撃準備はしておいてください』

『大丈夫だよ。何時でもそんな感じだから』

『人員を増やしましょうか。イオリアを確保できたらそれはそれでいいのですが……』

『頑張つてみる』

『よろしくお願いいたします』

これで最悪、レッドアクシズとは一切関係の無い増援が呼べますの。随伴の部隊はアインストのゲシュペンストMK-IIとかではなく、リオンシリーズにしてイスルギ重工に嫌がらせもしておきますの。まあ、ウルブズでも来ない限りは必要ありませんけど

ね。

後は乱入してくる勢力として予想できるのはプラントのザフトと火星騎士、木連、地球連邦軍の別働隊くらいですか。エアロゲイターが来る可能性もありますし、PMCやリボンスの手の者が来る可能性もありましたね。

『スメラギ。ティエリアが……』

「どうしたの？」

『ヴェーダにアクセスできないと言って部屋にこもっちゃった』

「そう……」

やはり、ティエリアはまだ無理か。それなら他のマイスター達はどうなの？

「セツナとアレルヤはどう？」

『二人は問題ない。ガンダムで待機している』

「……そうね。なら、私が……」

私が乗ってここから狙撃するのがベストですの。精密射撃で殺すのは簡単ですし。ですが、それだとこの艦を動かして逃がすのが大変ですの。かと言ってガンダムマイスターになれる素質を持つ人なんてそう簡単に……居ますの。

「フェルト」

「……………なに……………？」

涙を流しながら振り返ったフェルト。彼女がインストールに侵食されているのは現状では11%程度です。飲んだばかりでここまで侵食しているのはエクセレンお姉様とは違ってプルトーネの真実を知るために自ら侵食される事を望んだからでしょう。

「ちよつとヴァーチエに乗ってくれないかしら？」

「え？」

「えええええつ!？」

「無理だろ！」

「私、が？」

『フェルトをヴァーチエにか』

「少し操作して引き金を引くだけの簡単なお仕事よ。サポートはできるから問題ないわ。それに……フェルトは第二世代のガンダムマイスター、ルイード・レゾナンスとマレーネ・ブラディの娘よ。素質に関して問題ないはず」

『確かにそうだが……だが、訓練をしていないぞ?』

「テイエリアが無理なら、もうフェルトしか居ないわ。いえ、私が動かしてもいいけど……」

「やる。私がやるから、大丈夫」

「フェルト！ わかっているの！ 危ないんだよ！」

「平気。だよね？」

「ええ、貴女ならできるわ」

既にアインストのネットワークは繋がっていますし、ブレインコンピュータもフルスペックではなくても生成されているので、自己進化、自己増殖、自己再生を既に保有しているのです。狙撃プログラムを送ればいいですね。

「じゃあ、よろしくねフェルト」

「うん」

フェルトが立ち上がって出て行った。

『だが、認証はどうする？』

「問題ないわ。すぐに書き換えるから」

『いや、問題ありすぎだろ』

ちよちよいつとブリッジからフェルトの生体データをテイエリアの物と近づける。イノベイドから得た情報で進化させて増殖させることで脳量子波も使えるようになった。もちろん、わたくしの念動力も使えますのでスーパ―魔法少女フェルトちゃんです。あ、リボンズ達から干渉があったらカウンターアタックが出来るようにフェルト自身をやっているのが万々歳ですの。

「はい、書き換え終わり。これでトレミーで固定すれば砲台として使えるはずよ」

『本当に登録されてやがる……何時の間に……』

「後でね。今は生き残る事を優先よ」

「あの、それなんですが……オービタルリングに逃げるのは駄目なんですか？」

「駄目よ。あそこを壊すわけにはいかないもの。それにこちらも連絡がつけられなくなったら離れた時に困るわ」

「そう、つすね」

航路を設定して待っていると、無事にフェルトから通信が来た。モニターに映るフェルトは無表情のまま操縦桿を握っている。ヴァーチエは半分装甲が外れた状態でバーストモードで固定してくれているので砲撃ができませんの。

「いい、フェルト。私の指示通りに撃てばいいわ。それ以外、考えちゃ駄目」

『了解』

「それじゃあ、まずは適当に一発撃ってみましょうか。リヒティはトレミーが動かないように真っ直ぐにしてちょうだい」

「うっすー！」

『行きます』

フェルトが引き金を引くと、桃色のGN粒子が奔流となって敵艦の方へ飛んでいきます。もちろん、命中する事はないでしょう。

「外れた！ それにトレミーが流れる！」

「それを利用して加速しなさい」

「了解です！」

バーストモードを加速装置としても使うので外れても無駄にはならない。

「やっぱり無理なんじゃ……」

『ごめんなさい』

「いえ、今のはただの着弾予測だから問題ないわ。フェルトはGN粒子の再チャージをしておいてね。次で落とすわよ」

『う、うん……』

緊張しているフェルトに優しく伝えながら、次は細かく指示して相手の行動を演算して調整後に放つ。

【E D I—402 ラオホウ級輸送艦 セルゲイ・スミルノフ】

「通信遮断ポイントから高エネルギー反応！ 来ます！」

「問題ないあたらん」

五隻のラオホウ級輸送艦から少し離れた位置を敵からのビーム砲が通っていくが、距離は離れている。だが、これは不味い。

「一番から四番艦、モビルスーツ全機発進。三番から五番の総舵手は自動操縦に切り替え、ブリッジを分離の後、基地へ帰投せよ」

「一番から四番艦。モビルスーツ全機発進を確認。予定通り一番艦後方で縦列体系に入ります」

「命令を変更する。二番と三番の後方にも20機ずつ縦列隊形にせよ。四番艦と五番艦はそのまま全速力で突撃させよ」

「了解。変更開始。ブリッジ離脱を確認」

「敵の砲撃が来る前に接近する」

「敵艦より高エネルギー反応！ これは直撃コースです！」

「やはりか！」

光の奔流が前に出した四番に直撃してラオフォを消滅させた。やはり、モビルスーツに持たせるには過剰な火力と言える。だが、こんな物が無ければ異星人との戦いには勝

てん。やはり、鹵獲すべきだな。

「敵艦が加速しました！」

「撃った反動を使ったか。再チャージまでの間にどれだけ進めるかが肝だな。ビームかく乱膜を展開せよ」

「了解。ビームかく乱膜を展開します！」

これで耐えてくれればいいが……次の瞬間には五番艦が寸分の狂いもなく光に飲まれた。多少はビームの威力は下がったが、それがどうしたというレベルのようだ。

「ビームかく乱膜を正確に計算して撃ったというのか……」

「ありえない！　なんだそれは！」

「落ち着け。現実にあるのだ。ならば認めねばならん。我等が相手をするのは火星騎士のような理不尽な存在であると」

「はい！」

「一番艦、ブリッジを離脱させて基地へ帰投させる。全てのラオフォを一列にしてその後ろにモビルスーツを縦列させる」

「艦を盾にするのですね」

「そうだ。増援は呼んである。母艦がやられたとしても帰投の問題はない」

「了解しました」

「後はよろしく頼む。私は出る」

「かしこまりました。お気をつけて」

「そちらも流れ弾にあたらんようにな」

ブリッジから出て格納庫へと移動する。この艦の後方に移動すると、そこで待っているのが二人居た。

「セルゲイ中佐、私のラピエサージュを先頭にしてください」

「いえ、私のティエレンタオツの方が……」

「わかっているのか？ 相手の攻撃はラオフォを一撃で沈める威力があるのだぞ」

「ティエレンタオツには無理でも、ラピエサージュなら耐えられます」

「くつ、だが、速度ではティエレンタオツの方が上だ」

「私のは貴女のよりも大きいものです」

ティエレンタオツとラピエサージュでは約6メートルもの差がある。重量にはそこまで差が無いのだから、本当に連中の技術には驚きだ。

「セルゲイ中佐。兵の損耗を少なく突破するには私の盾が有効です」

「……よかろう。許可するが、艦の前には出るな。それが条件だ」

「はっ！」

「ピーリス少尉は私の側だ」

「了解しました」

不服そうではあるが、これは致し方あるまい。私としても乙女を戦場に出したくはないが、そのために戦力を損耗する事はできん。これが一番被害が少なくて済むのだからな。

「ヴァーチエ フェルト・グレイス」

一発目は外れた。でも、二発目はスメラギさん……ううん、アルフィミイの言う通りにしたら命中した。相手がビームを防ぐかく乱膜を展開したけれどそれも計算して貫いた。

『すごいよフェルト！』

「ありがとう。でも、私の力じゃない」

クリスに答えながら脳裏に浮かぶヴァーチエのマニュアル通りに操作して再チャージを行う。今までとは違って身体が生まれ変わったみたいに運動能力とかが上がっている。プログラムもすぐに考えられるし、指示された内容も、私の中でどう動かせばいいかすぐにわかる。

『ヴェーダの代わりにネルガル・マオイנדラストリー社が保有する量子コンピュータに接続してありますの。ですから、ゼロシステムも使えば……こんな感じですよ』

未来予測が表示され、命中するように動かして引き金を引く。次の瞬間、バーストモードで放たれたGNバズーカが敵艦のラオフォを直撃して破壊する。これで三艦目。

『あの、敵艦の動き、おかしくないですか？』

『アレは無人艦にして特攻させてきているのよ。縦列にして被害を少なくしているのね。その後ろにはモビルスーツが並んでいるんでしょう。こちらの砲撃に対応してくるなんて流石ね。分散してくれたら各個撃破が出来たのだし、盾の艦が無ければそれごと粉碎したのだけ……』

『ど、どうするんですか！ このままじゃ……』

『大丈夫よ。その為にガンダムを温存しているんだから。と、いうわけでセツナ、アレルヤ。出番よ』

『ようやくか』

『何をすればいい？』

『これから一瞬かどうかはわからないけれど、連中の相互通信装置を完全に黙らせるわ。その間に出撃して即座に動力を落とさなさい。それで復帰した時には貴方達はここに居るように見える。タイミングは指示するから、後方か横から挟撃してちょうだい』

『了解』

『相手の目的はガンダムの捕獲でしょうから、無理はしなくていいわ。このまま逃げながら戦うから』

チャージが終わったので撃つ。今度は私が計算して撃つてみた。ちゃんと命中した。アルフィミイと同じように撃てた。敵艦が沈んで、四艦目。

『クリス！』

『いきます！』

ハッキングした場所からウイルスを流して破壊していく。これにより、相手の通信装置は使えなくなった。正確には情報が送られなくなったし、取れなくなった。

『ガンダム発進！』

エクシアとキュリオスが出撃していく。私はチャージが完了したら撃つ。最後の艦を貫いた瞬間。爆炎の向こうからティエレンよりも大きな機体が突撃してくる。

『フェルト！』

『う、うん！』

すぐにGNキャノン撃つけれど、敵の機体が両手を前にして展開した黒い穴によってビームが歪んで明後日の方向に飛んでいく。

「ちゃ、チャージすれば……」

『撃ってみて』

「わかった!」

バーストモードでGNバズーカを放つ。艦すら一撃で飲み込む光の奔流は相手が展開したフィールドによって捻じ曲げられて別の方向へと流される。上下左右に流された光は周りを破壊するだけで後ろのモビルスーツを破壊する事は出来ていない。

『ここまでね』

「ごめんなさい」

『フェルトのせいじゃないわ。まさかラピエサージユを持ち出してくるなんて思ってもみなかった。アレがなければどうにかなったのだけど……流星にアレは無いわ』

『ど、どうしたら……』

『セツナ達に指示。このまま左右から攻めるように。ここからが本番よ』

敵の戦力はラピエサージユ、ティエレン指揮官機、ティエレンタオツ、ティエレン60機。絶望的なまでの戦力差。どうすればいいのか、私にはわからない。

第47話

「ティエレン指揮官機 セルゲイ・スミルノフ」

敵の母艦から放たれるビームの砲撃が最後のラオホウを貫き、先頭に居るラピエサージユに着弾する。ラピエサージユは腕を前に出し、フィールドを円錐状に展開することで自らの周囲にビームを散らしていく。

相手は即座に別の2連装ビーム砲を放ってくるが、それも問題なく防ぐ。そのまま進むと今度はラオフォを貫いた巨大なビームがラピエサージユに直接放たれる。ラピエサージユの周囲に光が拡散され、ナギサ少尉の機体が後方に吹き飛ばされてくる。それをラピエサージユの後方に並んでいるティエレン達で互いの機体を押し耐え抜く。だが、流石に艦を一撃で貫く攻撃によって隊列が乱れる。

「ナギサ少尉無事か！」

『申し訳ございません。踏ん張れませんでした』

「いや、それぐらいで防げるのなら問題ない。よくやってくれている。少尉がいなければ全滅していた可能性もある。他に問題はあるか？」

『ありません。ですが、連続で撃たれるとエネルギーが足りません。相手に続けざまに二連装ビーム砲を撃たれたらまずいです』

「相手が勘違いしてくれると助かるな。ティエレンの方はどうだ？」

『こちらはラピエサージユを支えて腕が壊れたのが五機、推進力が一割消費しました』

「了解した。ではその五機は後退しろ。だが、くれぐれも列から外れないようにしろ。外れたら殺されるぞ」

『了解！』』

とりあえず、これで機体の消耗はあるが相手に追いつけるだろう。それに敵艦が向かっているのはコロニー・メンデルだ。あそこにはアルフィミイが率いるレッドアクシズが居る。連中に一報を入れておけば挟撃してくれるはずだ。

だが、奴等はレッドアクシズにガンダムの一機を鹵獲されている。だというのに戻るのはだろうか？ 取り返すつもりだとしても、二機で敗北したから三機で、というのは舐めすぎている。

もしや、地球連邦軍とレッドアクシズが別の指揮系統というのを狙って互いに争わせるつもりなのだろうか？ それも彼女がトップに立っているのだから不可能だろう。火星との戦いで彼女は揚陸城を別組織ともいえる連邦軍にあつさり引き渡していることから、必要ならいくらかでも協力するのは確実だ。そもそもレッドアクシズは地球圏

の治安維持部隊だ。治安を乱すソレスタルビーイングなど仇敵と言ってもいいはず……何かがあるのかもしれない。

『少佐、このままで大丈夫なのですか？』

「ピーリス少尉。このまま行くと思うか？」

『いえ、それは有り得ないかと』

『ガンダムがまだ二機、出ていませんから』

「そうだ。このまま終わるはずがない。それに先程起きてから続いている通信障害も気になる。復旧はどうだ？」

『まだです。緊急事態として義手に搭載されているネルガル・マオイндаストリー社のネットワークを使用して確認したところ、どうやらイスルギ重工の通信機器がほとんどダウンしているようです』

我々は地球連邦軍とはいえ、母体となっているのは人類革新連盟だ。その人革連はイスルギ重工と契約して機器を入れている。もちろん、イスルギ重工のリオンシリーズを仕入れて地上で使ってもいるが、今回の作戦はティエレン用に開発されたラオフオを使うためにティエレンだけを使った。ラピエサージュは無理矢理取り付けて牽引したようなものだ。

「このタイミングで機器のトラブルによる通信障害が。随分とソレスタルビーイングに

都合がいいな」

『では……相手の策ですか』

『卑劣な……』

「ソレスタルビーイングは正規軍でもない犯罪者だ。クラッキングなど容易く行うだろう」

そもそもソレスタルビーイングがやったのかどうかもわからんがな。単純にイスルギ重工を狙っただけかもしれん。だが、どちらにせよ相手はこの通信障害を利用するはずだ。

『セルゲイ中佐。復旧しました』

「随分と早いな」

『それがネルガル・マオインダストリー社からネットワークをお試して切り替えないかと話が来たそうです。上は作戦中なのを理由に一部だけ切り替えたようです』

「……」

これだけ切り替えが早いとなると、最初から狙っていたのか？ 機材を用意なんてそう簡単にできないだろうしな。

「通信遮断ポイントはどうだ？」

『変化ありません』

私が相手ならばどう動く？ 敵は盾一列で特機を盾にして突撃してくる。しかも長い列になってだ。ならばやるに決まっている。

「全軍に通達。ティエレン隊第二第三は二列になり、左右に向いて互いの背中を守れ。第一は機雷を放て」

『少佐、ガンダムは来ますか？』

『ナギサ少尉。現状、我々がされては困るのは長くなっている列に左右から攻撃されることだ。そして、それを可能とする高起動タイプのガンダムが存在している。やるだけやっておけば安全だ』

『了解しました』

『少佐、来ます！』

『切断ポイントが二箇所増えました！ 場所は我等の左右です！』

ピーリス少尉の言葉と同時に通信切断ポイントが増えた。場所から考えるに通信が遮断された時に出撃し、動力を落としてデブリの中に潜伏させていたか。

『少佐！ 奴は、羽根つきは私に！』

「許可する。ミン中尉と第二部隊を付ける共に行け。私と共に第一は剣の相手をする。第三はナギサ少尉と共に敵母艦の相手だ。全隊すす——」

『全員止まってください！』

ナギサ少尉の言葉と同時に前方の艦から砲撃が来る。それを塞いだ瞬間、左右に向かつて二連装ビーム砲が放たれ、先に放たれてナギサ少尉に塞がれた巨大ビーム砲の粒子に衝突して散弾のように隊の左右に広範囲で降り注ぐ。それにより配置した機雷が起爆されてほとんど吹き飛ばされた。

「読まれていたか！」

『『少佐！』』』

「構わん！ 行け！ チャージするまでに接近しろ！ 奴等も仲間ごと撃てはしない！」

『『了解』』』

これでいい。私は剣を持つガンダムに向かって腕部に装着してある200mm×25口径長滑腔砲を使用しながら移動する。相手のガンダムは剣を抜いて二刀流で突き進んでくるが、こちらはまともに相手をするつもりはない。

「各機、適度に距離を取りながら遠距離攻撃で削れ。決して近づくな。一定の距離を保ちながらトリモチ弾を叩き込め」

『『了解！』』』

放った弾丸を相手は剣で切り払うが、切った瞬間にトリモチが発動して剣に張り付いて重量を増加させる。相手はGNフィールドで防いでくるが、トリモチは銃弾やビーム

とは違い、粘着する。より粒子を消滅させるだろう。

「物量こそが正義だと教えてやろう」

全方位を包囲し、そこからトリモチを連射する。切り払おうが、フィールドで弾こうが問題はない。こちらの狙いは時間稼ぎとエネルギー切れだ。

「ヴァーチエ フェルト・グレイス」

GNバズーカ・バスターモードを撃つ。歪曲するフィールドを展開するラピエサージユを先頭にこちらに突き進んでくる。ラピエサージユがフィールドで防ぐから、私は二連装ビーム砲のGNキャノン撃つてエクシアとキュリオスの方へと向かうティエレンに撃つ。

「外れた。でも、これでわかった。次はあてる」

トレミーの移動速度と相手の速度を計算して……あれ、相手のフィールドからずれるのはアルフィミイが教えてくれたようにできる。なら、三ヶ所に味方も敵も別れている現状、エクシアやキュリオスの周りを撃てばラピエサージユへの嫌がらせになる。

「やってみよう」

ちよつと怖いから、バーストモードの狙いをラピエサーージュに向けて少し撃つてから方向を変える。歪曲されて拡散されていくビームはずらした事でそのままラピエサーージュの後方へと飛んでエクシアの方に居たティエレンを五機、飲み込んだ。

「やった」

『おめでとうですの。敵さんはお怒りのようですが、問題ありませんの』

こちらに突撃してくるラピエサーージュにGNキャノン撃つて迎撃する。相手は回避行動を取りながら銃口を向けて黒いビーム、グラビティプラスト撃つてくる。でも、その前にトレミーが回避行動を取り、間に合わない部分も展開したGNフィールドによって防がれた。

「フェイントを入れながら撃てばいい？」

『それをお願いね』

「うん」

ラピエサーージュが近づいてきたら、わざとバーストモードを後ろのティエレンへ狙いをつける。すると今度はラピエサーージュが自らこちらの射線に入ってくる。すると後続のティエレンは機体スペックの差で動きに対応できずに遅れる。そこをGNキャノンで貫いて数を減らす。

これぐらいなら私にも出来る。お父さんとお母さんのように行かなくても大丈夫。でも、普通に戦いたい。どうしたらいいんだろう？

『フェルトはお父さんやお母さんのように戦いたいですの？』

脳内に声が届いてくる。アルフィミイとして話しかけてきたみたい。私は思った通りに答える。今はもう、お父さんとお母さんと繋がりがあるのはそれしかないから答えは決まっている。

「やってみたい」

『そうです。ん、キュリオスは母親が乗っていたアブルホールの後継機ですから、アレルヤさん達次第ではフェルトが使ってもいいと思いますの。とりあえず戦闘プログラムを組みましょう。ヴェエダから手に入れたデータにはアブルホールとアストレアもありますからね。その戦闘データから作れば大丈夫なはずですよ。ですが、今は止めておいてくださいですよ。流石に危険すぎますし、まだプログラムを組んでいませんから』

「うん、わかった」

やらせてくれるなら待てる。私も今すぐには無理だという事はわかる。身体の変化もまだ終わっていないし。

『フェルト！ キュリオスは放置していいからエクシアの援護とラピエサージュをお願いします』

「いのですの」

「キュリオス……止まっているけど大丈夫？」

『想定内ですから大丈夫ですの。あちらはこれから対処します』

「それなら頑張る」

『頑張ったらご褒美をあげますの。欲しい物はなんでも用意してあげます。それが魔改造したガンダムであつたとしても』

「ロックオンでも？」

『それはできませんの。会わせる事は出来ても、人身売買は断固としてしませんの。いえ、助けるために買うというのはするかもしれませんが、売ったりは絶対にしません』

この言い方だと、ロックオンは無事みたい。それなら助ける事はできるかもしれない。話しながら攻撃していると、キュリオスが拘束されていくのが見えた。

『さて、そろそろですの。目覚めるですの』

その言葉と同時に何かが身体を通してこの戦場に放たれたのがわかった。

「???」

「アレルヤ・ハプティズム」

ピンク色の機体、ティエレンタオツーが近づいてくると頭が急激に痛くなり、ガンダムの操作が出来なくなっていると目の前が真っ暗になった。

『目覚めるですの』

次に気づいた時には周りに何も無い白い空間だった。腕はあるし、足もある。ただし服を着ていなかった。

「なんだここは……」

「どうなっているー！」

「誰かいるの?」

「その声は……」

声が聞こえた方に振り向くと、長い銀色の髪をした二人の少女が一糸まとわぬ姿で立っていた。

「なっ!?!」

「貴様っ! この変態が!」

「違う! 待て!」

二人が両手で身体を隠し、僕は慌てて視線を別の所にやると見覚えがある男性が居た。こちらも同じ格好だ。

「はっ、面白い事になってやがるじゃねえか」

「お前が原因なのかアレルヤ!？」

「俺は起きたばかりだハレルヤ」

「もしかしてアレルヤとハレルヤなの？」

「君は……あつ、もしかしてマリー！ マリーなのか！」

思わず振り向くと、マリーは僕に泣きながら抱き着いてきた。

「き、貴様っ！ 私の姿で何をやっている！ この偽物が！」

「あ、貴女は……」

ソーマ・ピールスがこちらにやってきてマリーを引き剥がす。二人は顔を突き合わせ互いの身体を見ていく。僕は僕でハレルヤに向き合わないといけない。

「「「っ!」」」

そう思った瞬間。寒気を、根源的な恐怖を感じて全員で一つの方向を見る。そちらからコツコツと足音が響き、次第に姿が見えてくる。身長140cmぐらいの水色の髪の毛をポニーテールにした可愛らしくも美しい少女がこちらに歩いてくる。

「「ひっ!？」」

マリーとソーマ・ピールスが身体を振るわせてながらへたり込む。僕は彼女達の前に腕を広げて立つ。確かに彼女は外見だけ見たら可愛らしい幼い美少女といえる。だが、

彼女から感じるのはまさに吐き気を催すような邪悪。彼女の背後には鬼神が居た。更に背後には無数の死者の群れ。

「コイツはラスボスってか?」

「はじめまして、皆様。わたくしはアルフィミイと申しますの」

着ている黒いワンピースの裾を持ち上げて挨拶をしてくる彼女は顔を上げてから、改めてこちらを見てくる。その瞳は最初、キラキラしていたけれど、途中で不思議そうに首をかしげてきた。

「ところで……変態さんですか?」

「違う!」

僕とソーマ・ピーリスの言葉が重なった。互いにここだけは同意できる。

「あの、気付いたらここに居て、服を着ていなかったのです」

「あくそれは申し訳ございませんの。明確にイメージすれば服は着れますの。こんな事だつてできますの。あくまでも精神を繋げているだけです」

彼女がそういうと、周りが一瞬で花畑になり、用意されたテーブルには紅茶とケーキが用意された。これを見て、僕達は服をイメージする。すると確かに服を着れた。マリーもソーマ達も着ている。

「落ち着いたところで時間もないので……なんでそんなに怖がられておりますの?」

「後ろのだろ」

「うしろ……？ うわあっ……なんですのこれ？」

「いや、知らないよ」

「ペルゼイン・リヒカイトと後は殺して取り込んで血肉としてきた人達ですか。見たところ恨まれていている人達だけですのね。まあ、いいですの。はい、貴女は撤収ですの。きえ・ろですの」

「そういうと綺麗さっぱりいなくなった。彼女の言葉からして、アルフィミイの被害者達か。」

「ふう……では時間がないのでぶっちやけますの。現在の状況は戦場に散布されているGN粒子を利用し、わたくしの念動力を使って強制的に気絶したアレルヤの中に居るハレルヤを叩き起こし、勝利するためですの。そして、マリーさんに関してはその誘爆ですの♪」

「ちよっ!？」

「どういう事だ？」

「ソーマ・ピールスはマリーさんの記憶を消去し、その上に都合のいい人格を用意したものです。ですから、わたくしの念動力に反応してマリーさんが内側から出てきました。以上ですのね」

超人機関技術研究所の連中ならやってもおかしくない。人の身体を弄りまわして薬漬けにしたり、改造したりしているんだ。泣き叫んでも止めてもらえず、最後には死んで廃棄される。僕はソレスタルビーイングに助けられたからどうにか助かったが、マリーは……

「ふざけるな！ 私が偽物だと！」

「事実ですの。まあ、信じられないのも無理はありません。ですが、これから主人格であるマリーさんがメインになるでしょう。アレルヤさんがメインのように。ああ、それとマリーさんはアレルヤさんと一緒にいたいですよね？」

「はい。一緒にいたいです」

「ああ、それがいい。絶対にそうするべきだ。少なくともマリーを超人機関に帰すなんて許さない」

また記憶を消されていいように扱われるか、今度こそ殺されるかもしれない。

「そういうわけで、ネルガル・マオインダストリー社として貴女達を迎え入れる準備がありますの。例えばアレルヤさんとハレルヤさん、ソーマさんとマリーさんに別々の身体を用意することもできます。ただ、無料というわけにはいきませんの。それとソーマさん。貴女が軍に戻るのには止めた方がいいでしょう。記憶を消されるだけでしようし」

「そんな事は断じてさせない」

「信じられるか!？」

「信じられないのなら、信じられる情報を与えますの。はい、どくん」

「なっ!？」

アルフィミーがマリーとソーマに手をやると目の前にスクリーンが現れる。そこに映ったのはマリーと僕の記憶だ。僕にはそれがわかる。マリーも同じようで、顔を青ざめさせている。

「念動力のサイコメトリーと意識を共有する事が出来るGN粒子のちよつとした応用ですの♪」

何処がちよつとした物なのかはわからない。他人に干渉できる超能力などどう考えても人が持つていいような力じゃないと思う。先程の事も考えると彼女はヴェーダの言う通り、アインストなのだろう。

「あつ、ああ……」

「これは……止めてくれ、痛いっ、痛いっ!」

苦しみだしたマリーとソーマ・ピーリスを抱きしめて元凶であるアルフィミーを睨む。

「やりすぎてしまいましたか……でも、ここでややこしくされるのも嫌ですし、仕方がありませんの」

「もういいだろ！ 止めてあげてくれ！」

「かしこまりですの」

しばらく二人が落ち着くまで待つ。あつたかい飲み物を飲ませ、二人の頭や背中を撫でていれば段々と震えが収まって落ち着いてきたようだ。

「……どうすれば……どうすればいいのだ……またあんな苦しみを味わうのは嫌だ……」

ソーマ・ピールスも強制的に理解したくなくても理解できてしまったのだろう。帰れば彼女はまた地獄に落とされる。首輪として爆弾まで取り付けられているようだ。ソーマ・ピールスが逆らえば何時でも処分できるという事だろう。爆弾に関してはアルフィミイがどうとでもしてくるらしいので良かった。

そもそもマリリーの身体なので返すつもりもないのだが、それでも出来ればソーマには納得してもらいたい。そう思っていると、マリリーは何かを決意したのか、ソーマ・ピールスの手を握る。

「アレルヤ……」

「わかっている。僕が二人を守るよ。その為になら悪魔にだつて魂を売ってやる」

ソーマはマリリーの別人格ともいえるから、彼女の家族だ。それなら僕が守るのもおかしくはない。

「おいおい、二人を養うつもりかよ?」

「それはいい考えですの。アレルヤさんが疲れて家に帰ったら可愛いお嫁さん二人が迎えてくれるわけですしね」

「あう」

「なっ!?!」

二人の顔が赤くなる。僕も赤くなるのがわかった。

「どちらにせよ、ソレスタルビーイングのままはずいので我社に来ていただければ戸籍も仕事も用意します。超兵機関の犠牲者なものですから、幸せな家庭を築いて欲しいのです」

「ありがとう。でも、なぜそこまでしてくれるの?」

僕もマリーと同じく、何故彼女が僕達のために手を打ってくれているのかわからない。キュリオスが欲しいのだとしても既にデユナメスを手に入れているんだ。太陽炉搭載の可変機とはいえ、それはリオンシリーズやフラッグだって同じだ。だというのに拘る理由がわからない。

「貴女達の事を気にしていますからね。地球に住む全ての生命と人類を守る仲間になってくれるのなら、それはそれで嬉しいので更に優遇はします。ですが、仲間にならずとも構いません。どちらにしても支援は惜しみませんの。ナイスカップリングですし、両

手に花というのも見ていて面白いですし?」

「野次馬じゃねえか」

「アツハツハツハ、そのの何がいきませんの?」

「ちげえねえな。俺は身体を得るつもりもねえ。アレルヤの身体を定期的に使わせてもらうつもりだ。戦い以外の些末事に煩わされるのも面倒だしな。そういうのは全部アレルヤに任せてやる」

ハレルヤは新しい身体を用意されても僕の中に居る事を決めたみたいだ。面倒だからというのがアレだけど、彼も僕なわけだし、面倒を見るのは問題ない。

「そういうわけらしいので、後はアレルヤさんが男を見せるかどうかですの」

「本当に気に入ったからって助けるのか?」

「わたくしも貴女達と似たようなモノですの。身体を弄りまわされた実験体……つまり同類です。それにわたくしは他者を取り込み、その人が持つ知識や技術、想いを引き継ぐことができますの。わたくしの血肉となった多数の実験体の方々の記憶や経験も全てわたくしは持っています」

「そんな……」

「それ、は……」

僕達が経験したものが何十倍として襲い掛かってくるのと同じじゃないか。いくら

力が手に入るとはいえ、そんなのはあんまりだ。それも彼女自身の意思じゃない。

「ちなみに来た時に見たあの魑魅魍魎は加害者ですの。たつぷりと苦しめてあげておりますので問題ありません。そういうわけでもたくしとしましては同じような境遇の方々には幸せになつて欲しいですの。ポケットマネーで支援するぐらいは問題ありませんし?」

不思議と彼女の言葉が真実なのだとわかるし、アルフィミイが僕達になつて欲しいと心の底から思っているのがわかる。これがイオリアが目指した相互理解ということかもしれない。

「任せてくれ。とは言えないが、全力で頑張る。だから見守つてほしい。マリー、ソーマ、いいかな?」

「お願いしますアレルヤ」

「ふん。私は正直わからん。だが、コイツの想いは伝わってきた。だから、しばらくソイツの中で大人しく見ていてやる」

「ソイツじゃないわ。マリーよ。マリー。お姉ちゃんでもいいわ」

「……同じ身体だが、確かに私の方が妹になるのか……わかった。お姉ちゃん」

「くつ、アレルヤ! ソーマが可愛いわ」

「あははは」

「じゃあ、そちらは置いておいて楽しい楽しい戦いを始めましょう。ハレルヤさん。ガンダムを使ってください。私はお二人の身体を借りてティエレンタオツで暴れますの。ですから、三人はここでゆっくり対話してくださいですの」

そう言つて彼女とハレルヤは消えていった。残された僕達は色々と話す。だが、まずは謝る事にする。彼女とは殺し合ったのだから……

第48話

「ティエレンタオツー アルファイミイ」

念動力とGN粒子を利用してマリーさんとソーマさんの身体を少しお借りしますの。まあ、脳をくちゆくちゆと弄られて脳量子波を放っているからこそできる……わけないですの。はい、ちよつとソフトウエアを弄ってAIに作り替えようにもティエレンタオツーのスペックでは動きません。残念。

じゃあ、どうやって操るんだと思つた皆さん。ちよつと精神世界を通してパスを通し、転移すればいいですの。受信機があれば簡単ですから、ソーマ・ピーリスとマリー・パーファシーの身体にくアインストとかイエツツトのコアをどくんして戻るですの。

コアでマリーとソーマの身体を浸食するですの。弄くり回され、色々やばくてガタがきている部分を改修して強化しますの。この世界では何が起くるかはわからないので、肉体的な強度はあつて損はありませんからね。それに二人の、三人の大事な身体となつ

たのでしつかりと所在地送信用の監視装置や自爆装置とかを排除してやります。

原作の超兵機関と違ってこの世界は更に腐ってマッドな連中も多いですから、自爆装置ぐらいは付けます。敵兵に鹵獲されて技術が奪われたらたまりませんしね。異星人の技術なら再教育とかも楽でしょうし。

「さてさてさて」

同類にしてしまえば後は簡単。お姫様であるアルフィミイちゃんにとって遠隔操作で身体を動かすなんておちやのこさいさいですよ♪

「やりますの」

まず、お近くに居る指揮官機、ミン中尉のティエレンに向かって200mm×25口径長滑腔砲についている二枚の放熱板をブレードとして振るいますの。手足を斬り落としてコクピットは傷つけません。

『なんだとっ!?!』

驚いているミン中尉は無視して、次のティエレンに接近します。接近しながら向かっている以外のティエレンに対して200mm×25口径長滑腔砲をプレゼントしてあげます。

相手はまだこちらの動きに反応せず、キュリオスの方を見ていますので、回避もできずに200mm×25口径長滑腔砲を持つ腕が破壊されました。

接近したティエレンはミン中尉と同じく手足を切断します。この辺りまで来たら流石に軍人さんなだけあってこちらの裏切りに気付いて対処してきますの。

『裏切ったか!』

ミン中尉が怒鳴り込んでくるのですが、200mm×25口径長滑腔砲に装着されている12.7mm機銃を放って牽制しますの。相手のティエレン達もこちらに撃ってきますが、弾道は瞬時に計算して回避。T-LINKシステムもIFSも無い機体では念動力もナノマシン操作もできないため、わたくしの反応速度にティエレンタオツーはついてこれず、反応がかなり遅れてしまいますの。無骨な機体ですが、頑丈性はピカ一。例え拷問器具とか、生きた棺桶とか言われていても、量産性とか諸々を考えると理にかなっていますの。

ヘッドマウントディスプレイで直接外部などの情報が叩き込まれるので情報の取りこぼしがなく使い易い。無茶な事をしてもなかなか壊れない。酸素吸入装置で吸引しているのでコックピットがちよっと破損しても問題なし。一度は乗ってみたかったです、やっぱり立ちっぱなしとか辛いのですの。

『どういうつもりだピーリス少尉! まさか暴走しているのか!』

流石にソーマさんの行動に部隊を指揮する立場であるセルゲイ中佐が通信してきましたの。ですので、しっかりと全体通信でお話をしてあげましょう。

「残念ながらピーリス少尉という名前ではありませんし、そんな人は本来存在しない人です」

『何?』

「ソーマ・ピーリスは超兵機関により拉致され、身体を好き勝手に弄り回されて記憶を消された少女に都合のいい人格を植え付けた結果、生まれた人格です」

『なんだと!』

『馬鹿な……』

ミン中尉達も驚いていますの。まあ、普通はそんな暗部を知らせませんしね。

「今回、同じ超兵機関で過ごし、この身体の脳量子波と干渉しあう方と一緒にすることによってようやく記憶を取り戻し、主導権を得ることに相成りました。またあそこに戻されて記憶を消される訳にもいきません。もう身体を好き勝手に弄り回されるのも痛いのも苦しいのも嫌です。だから加害者である超兵機関の尖兵である貴方達は私の敵ですし、同胞の友達であるガンダムに協力します。以上の事から、これは裏切りではありません」

『っ!?!』

『馬鹿な! そんな妄想など……』

「そうですか。じゃあ、貴方は生かす必要はありませんね。私と同じ苦しみを少しでも味わって死んでください」

『避けろ！』

妄想と断じたティエレンの200mm×25口径長滑腔砲の銃口に銃弾を叩き込んで誘爆させ、ティエレンの腕が吹き飛んだところを左胸に内蔵されている30mm機銃で内部を撃つて破壊してあげます。同時に200mm×25口径長滑腔砲のブレードでキュリオスを拘束しているカーボンネットを切断します。これでキュリオスは自由です。

『はっ！ ようやく自由に暴れられるぜ！』

『ピーリス少尉！ 理由はわかった！ だから大人しくしてくれ！ 悪いようにはせん！』

「それは無理です。軍人は上の人の命令には絶対ですから。ハレルヤ、エクシアを回収して援護を」

『ちっ、まあいい』

『無駄だ！ 奴等が来る！』

『何言つてやがんだ？』

奴等？ 嫌な予感がして念動力をフルに使って探知しますの。すると遠くの方から急速接近する途轍もなく大きくて堅そうなのがあります。しかも微妙に反応がインストですの。

「な、なななんてものを呼び寄せてやがりますかあああつ?!」

冷や汗をかきながら思わず叫んでしまいました。わたくしは悪くありませんの。しかし、こうなればもはややる事は一つですの。

『予定を変更。撤退するわ。キュリオスはエクシアと共に撤退なさい。殿はティエレンタオツーがしてくれるわ』

「そういうことなので頼みます。やってくる敵は現状の貴方達では瞬殺されてしまいます」

『ちっ。確かに感じられるようになったこの気配なら瞬殺だろう。だが、お前は大丈夫なんだろうな?』

「適当に逃げます。この身体はしつかりと返しますよ」

『ならない』

スメラギさんの口を使い、ソレスタルビーイング全機に通達しますの。ええ、すぐに逃げた方がいいです。逃走ルートは……あれ? あれれ? 何かいやがりますね。

地球連邦軍でも無い完全な第三勢力……面白いのです。利用させていただきましよう。

『はやく!』

『逃げるつもりか、させん!』

エクシアのところをキュリオスと共に突撃するのですが、流石にセルゲイ中佐達が邪魔をしてくれます。ですが、こちらはもはや手加減する余裕なんてないので、全力でお相手します。それはつまり――

「目覚めろ」

ティエレンタオツーヘアインストの浸食を開始し、機体を改造していきます。同時に影月に援軍を要請します。正直言つて勝てる気はしませんが、テストがてらペーオ・ウルブズと戦闘するのはありです。もちろん、機体は壊されるし、オルレインも死ぬかもしれません。ですが、そうなる前に転移してしまえばいいことです。機体は自爆させればこの辺り一帯消し炭になったり、重力異常が起きたりしますが……まあ、相手が相手ですからぜひありませんの。

ティエレンが放つ200mm×25口径長滑腔砲を回避し、接近して手足を斬り落としてから掴んで盾にしてキュリオスに乗り、突撃します。相手も味方を盾にされれば流石に攻撃を控えますの。

ティエレンを突破したらエクシアの周りの敵を狙撃し、包囲に穴をあけてそこに突入。エクシアをキュリオスに捕まらせてそのままトレミーに向かつてもらいます。

『時間か。全隊、下がれ!』

ティエレンの部隊が下がり、道を開いていきますの。開いた場所に巨大なミサイルが

超高速で飛んできております。落ち着いて200mm×25口径長滑腔砲で狙いをつけて迎撃します。

放った弾丸は先端に着弾して爆発……なんてしません。そもそも弾頭が入っていません。そのミサイルの四方が吹き飛び、中から巨大な人型が出てきます。はい、無傷とか知っていました。

「ミサイルで戦場にダイレクトエントリーとか頭おかしいですよ！」

キュリオスから飛び降りて構えます。

『俺も戦う』

「邪魔ですので大人しくお帰りください！」

『断る！』

『俺も暴れたりねえな』

「ちっ、この馬鹿共が……」

『そもそも返してくれんだろうが』

「……ですよね〜」

爆炎の中から現れたのは四機の機体。地球圏最強部隊の一角にして単純なパーソナルトルーパーなどによる戦闘能力では他のウルブスを凌駕する存在。

『クスハアアアアアッ！ 何処だ！ 何処に居るっ！』

一機目はお馴染みのグルンガスト参式。パイロットは僕らの主人公、ブルックリン・ラックフィールド。そんな人が即座にティエレンタオツーとトレミーに視線を向けてきます。怖いのです。

『会いたかった……会いたかったぞ、ガンダム!! やはり私と君は、運命の赤い糸で結ばれていたようだ。そうだ、戦う運命にあった!!』

地球連邦軍に所属するAEUが開発したユニオンフラッグを専用カスタムした黒い機体。エイフマン教授がガンダムに対抗するために一週間で作り上げた機体だったはずなんですけど、感じるプレッシャーはそれよりも上です。

「と、うかなんでグラハム・エーカーがベーオ・ウルブズに居るんですの?」

続いて出てきたのはアッシュセイヴァー。ただし、こちらはブースターを増加した高速戦闘用仕様で、鷹のマークが取り付けられています。パイロットからも思念を感じるの。普通に念動力かイノベーターに覚醒しかけかもしれません。

『不可能を可能にするつても流石にミサイルはやばいつて隊長』

『この程度、できなくてはウルブスは務まらない』

『うへえ……まあ、ここにはアイツもいやがるし、いいですけどね。エンデュミオンでの決着をつけようぜ』

鷹は鷹でもエンデュミオンの鷹さん。つまり、ムウ・ラ・フラガさんです。ベーオ・

ウルブズはどうやらガンダム〇〇のエースパイロット、グラハム・エーカーとガンダムSEEDのエースパイロット、ムウ・ラ・フラガを仲間に入れていたようです。

機体がフラッグカスタムなのはまだわかります。でも、なんでムウさんはアシユセイヴァー？ いや、確かにこの世界なら乗っていても不思議ではないですね。

『久しぶりだな……』

そして、当然のように赤色のゲシ^{アル}ユペン^トストMK^ンⅢ。こちららも魔改造されています。エース級が一般兵扱いとかないです。止めてください、死んでしまいます。

「ああ、もう……やってやりますの！」

涙目になりながら戦うしかありません。

『行くぞガンダム！』

『なんだコイツは……だが、望むところだ』

セツナのエクシア対フラッグ魔改造カスタムの対決。キュリオス対……なんて事にはなりません。もはや真面目にやるつもりはありません。やったら負けますからね！

『全機、警戒しろ。来るぞ』

『大規模な重力異常を検知！』

この辺り一帯。それこそ隠れてこちらを見ている人達の部分も含めた大規模な転移

反応。当然、現れるのは大量のゲシュペンストMK-II。更にガリーオンなどリオンシリーズ。地球連邦軍の戦艦、揚陸城、フューリーのリュンピー。

そして、一際大きな反応と共に現れたのが頭頂高約76・6mの黒色の装甲に所々植物のような関節が見える機体。宇宙空間での戦闘力を追求しているのか、脚部は持たなくて、高出力のジェネレーターと大推力のスラストターを有する。デューカリオンというよりもノイエ・ジールIIを黒くして動力炉をメインに相転移トロニウムエンジン、サブにブラックホールエンジンを6機搭載。ほぼ全身をナノマシンを使ってチツプ化したT-LINKシステムを内蔵させ、アルファイミイちゃんが保有する全ての重力制御システムを搭載してアインスト化までさせた逸品。

武装はグラビトロンカノン×1、偏向グラビティブラスト×9、メガ粒子砲ファンネル×20、メガ粒子砲×6、大型核弾頭ミサイルランチャー×4、小型核弾頭ミサイルランチャー×24、ブラックホールエンジン直結のクラヴィティソード装備のサブアーム×4。デイストーションフィールドジェネレーター×4、自爆装置。

特殊能力は転移能力、精神を守る劣化ATフィールド、自己進化、自己増殖、自己再生、EN回復、弾薬再生。

対フューリー用決戦兵器ノイエ・デューカリオンですの。アルド・ノアとか一切関係ありませんけど。いえ、パイロットだけは関係ありますの。これでもフューリー相手に

は勝てません。そもそも実験段階らしいですし、全力運用したら暴走間違いないですの♪ グラビトロンカノンなんて撃つと腕が自壊しますし、周りも消し飛びます。まあ、再生するのでプラスになるのですが……なんて、欠陥兵器なんですの！

「さて、今の間に逃げます！」

『アインストの相手なんてしてられないわ！ 撤収！』

そう、この状況でしたこらさっさと逃げるのです。戦えば死ぬ相手に戦うはずがありませんの。アルフィミイちゃんの良い子ですからね。キョウスケさん。いくら貴方とベーオ・ウルブズでもこの子を倒せるはずがありませんの。

あばよですの、キョウスケさん♪

第49話

【影月 オルレイン】

ザーツバルムと私の子供を含めた子達の世話をしていると、増援を頼まれた。それも用意されたのはデューカリオンのデータを基礎としてアルド・ノアとは全く別の技術で作られた機体。フューリーとの戦いで何度も破壊されては再生し、進化しているノイエ・デューカリオン。

ブラツクホールエンジンと相転移トロニウムエンジンとの親和性は順調に上昇し、すくなくとも集中すれば暴走する危険性は無くなってきました。ただ、今回の任務は敵と戦いながら対象の組織を逃がす事と閉じられた空間以外でどのような状況になるかのデータが欲しいらしいですね。

「流石に無茶でしょう？」

「うむ。私もそう思う」

「だが、お母様からの要望と同時に進化が停滞してきたノイエ・デューカリオンに新しい

刺激を与えるのに丁度いい。相手もベオ・ウルブズとなれば尚更だ」

ツエツペリンちゃんとビスマルクちゃんが伝えてきた内容は頷けるものです。確かに何時も同じ相手では刺激が少なくて更なる進化が期待できません。

「最低でも三分の一に小型化できなくてはパーソナルトルーパーに乗せられん」

「うん。戦艦なら問題ないのだけど……」

「戦艦にするにしてもやはり小型化は必要だ。いや、むしろ大型化か？」

「ヴェーダから手に入れた情報を解析して出てきた設計図、ツインドライブというのも面白いのだから」

「これで試すかが問題だろうか？　ただでさえでかい相転移トロニウムエンジンを二つ搭載だぞ」

確かにノイエ・デューカリオンのほとんどはエンジンで構成されていますからね。

「ふっふっふっ、こんな事もあるうかと月面に破壊されて放置されていた揚陸城の残骸を回収してアインスタ化してある。構造は母上達が直接抜いてきた内部データがあるからな！」

「止めなさい。相転移トロニウムエンジンを二つとか、影月が減びます」

幼い二人の頭を押さえつけて怒っておきます。二人の教育にも悪いですからね。

「どちらにせよ、ノイエ・デューカリオンの母艦とするのだぞ。作る戦艦を納める入物も

「必要だからなー！」

「確かに移動拠点があれば行動範囲が増えるからな。ツインドライブに関しては別の物で実験しよう」

「うむ。旧式はもう完全にデータを取り終えたから要らない。持っていて使ってね」

「そういう事なら問題ありません。増援の件、了解しました。準備しておきますので子供達の事を頼みますね」

「任せて！ いっぱい遊んでる！」

「何を作ろうか」

「危険なのは止めてくださいね」

「はーい」

二人の返事を聞いてから、私は格納庫に移動してノイエ・デューカリオンに搭乗します。コクピットのリニアシートに座り、機体に接続を行って各部チェックをしていきます。相変わらず相転移トロニウムエンジンは安定しません。私の念動力が不足しているのでしょうか。とりあえず、機体を起動するためにブラックホールエンジンからエネルギーを回します。

「目覚めなさいイエツツト。T—LINKシステムフルコンタクト」

機体が目覚めたらシステムを機動し、T—LINKフレームによる念動力の増幅を行

います。機体のフレーム全てがT—L—I—N—Kシステムで構成されているフレームなので、増幅率は凄まじい事になっていきます。これにより既定値を突破し、最低でも問題なく戦闘が行えるレベルまで上昇します。

自動迎撃システムも問題なく機動し、テストもクリアできました。すくなくともこれで戦えます。後は増援として呼ばれたらお供の者達と転移するだけです。愛しい我が子のためにも頑張りましょう。それにマスターは私達の子供だけでなく、火星に居るザーツバルムの民も救ってくださるからです。騎士として恩義には報いなくてはなりません。陛下には申し訳ございませんが、騎士あつての民ではなく、民あつての騎士なので民を優先させていただきます。これは王家も変わらないはずです。アインストになったせいか、思想が変わっておりますね。ザーツバルムは変わり果てた私と子供達を受け入れてくれるでしょうか？

『増援要請を受託した。これよりノイエ・デューカリオン、発進せよ。あ、お土産をよろしくね！』

『気を付けるんだ。相手はベーオ・ウルブズだ。他の機体とかは実験機の処分も兼ねているし、やばくなったら食べていいぞ。でも、危なくなったら戻れ』

『ありがとうございます。ツエツペリン、ピスマルク』

ベーオ・ウルブズ……私の同胞や部下達を殺した憎き相手であり、殿下を殺した連中

です。もちろん、わかっています。私達がやった事は戦争であるのだから仕方がないこととです。私も自ら地球連邦軍の軍人を何人も殺したのですから同じでしょう。

ですが、理性と感情では別物です。私の中にも恨みがあります。故にあの戦いで死に、アインストとして生まれ変わった私は今一度、敗れた彼等に挑みましょう。この新しくなったノイエ・デューカリオンでならば勝てます。勝てないまでも相打ちにはできるのです。

「ノイエ・デューカリオン、発進します」

『『いつてらっしゃい』』

空間転移を開始します。意思一つで仲間が居る場所であればどこでも即座に移動できるアインストの強みです。これにより、マスターが居る現実世界の宙域へと大規模転移が完了しました。

マスターより得られた情報はありますが、転移した端末達から無数の情報がノイエ・デューカリオンに集積されます。私はそれを解析して周囲の状況を把握します。

現宙域に存在する兵力はマスターが居るソレスタルビーイング、ベーオ・ウルブズと地球連邦軍、何処かはわからない勢力です。

ソレスタルビーイングの兵力はキュリオス、エクシア、ヴァーチエ、テイエレンタオツ、トレミー。

地球連邦軍の兵力はゲ^{アル}シ^{ルト}ペン^{スト}MK^{III}とグルンガスト参式、ユニオンフラッグカスタム、アシユセイヴァー指揮官機、ラピエサージユ、ティエレンの部隊。背後から近づいている艦首モジュールとして超大型回転衝角（対艦対岩盤エクスカリバードリル衝角）を装備している黒い戦艦がやってきます。おそらく彼等の母艦でしょう。

第三勢力は戦艦が三隻。機体の展開はまだですね。様子見をしているようです。まあ、興味はないので放置しましょう。

『オルレインちゃん、こんばんはですの』

「はい、こんばんはマスター。それで殲滅しますか？」

『無理でしょうし、安心安全にお願いしますの。ですから、まずは文明人らしくお話ですの』

「それでは覚悟を決めて転移した甲斐がございません。ですが、それがマスターのご命令なら従いましょう」

『よろしくお願いいたしますの』

あの子達のオーダーは戦って進化を促す事ですが、マスターの命令を優先させるべきでしょう。そういうわけで強制的に通信を繋げます。GN粒子で妨害しているようですが、問題ありません。すでにGN粒子に関しては太陽炉を作ってテストする工程でヴェエダから得た情報を基礎としてアインストが取り込んで解析を完了し、通信状態を

問題なく保てるようにしております。

「現宙域に存在する全ての勢力に告げます。戦闘行為を停止し、この宙域より撤退してください。これよりアインストによるこの子のテストを開始します。残る方々は地球圏を守るために必要な事を阻害する存在とし、敵対勢力として排除させていただきます。手早く撤退をお願いいたします。なお、所要時間は約二日を予定しております。撤退する場合こちらから手を出さない事をお約束します。また現時刻より当宙域に存在する要救助者を救助し、治療を開始します。終わり次第、地球か近場のコロニーへとお送りいたします」

これでどうですかマスター！

『完璧ですの』

「ありがとうございます。では、救助を開始してください」

配下の者達に指示し、生命反応を探知した場所へと向かわせます。邪魔する奴は敵として排除していいでしょう。助けた者達は揚陸城に入れて治療し、安心安全にお帰りいただきます。

この揚陸城はツエツペリンちゃんが月面に破壊されていたのを回収してアインスト化することで修理した物らしいです。相転移トロニウムエンジンを搭載してノイエ・デューカリオンの拠点にするために古いのは要らないとのこと。破壊されてもお

しくありませんし、進化するならそれはそれで有効ということですね。もし進化しなくても外宇宙に向けて投棄すれば探査機の役割を兼ねられます。

『どうするんですか!』

『私はガンダムと戦いたい!』

『待つてください。聞きたい事があります』

『そうだな』

『本当に救助して地球に送り届けてくれるのだろうか?』

地球連邦軍の方々が質問してきたので、答えましょう。それにセルゲイ中佐でしたか、彼はしっかりと判断してくれそうですし。

「こちらとしては既に実績がございます。鞠戸孝一郎大尉をはじめ、月に残っていた地球の方々は無事に地球に戻っているはずです。我々はその後、彼等への興味はありませんのでわかりかねますが……」

『鞠戸孝一郎大尉……ルナレポートか』

『それについては本当か疑われていましたね』

「そのレポートの内容を我々は認知しておりませんので答えかねます」

『そうか。どちらにせよ貴様はルナレポートに載っていた映像からして貴様は火星人だろう。それがアインストとは、どういう事か説明してもらおう』

『ああ、確かに気になる。ルナレポートの情報では貴君は死んだはずだ。映像に残っていた情報を見る限り致命傷だったはずだ』

どうやらアレを見られたのでしょうか。しかし、仕方がありません。彼等にとって私は敵国の人間です。ですから、検閲しないなどありえないでしょう。

「かしこまりました。ご説明いたしましょう。簡単な事です。私はあの場で死にました。そしてマスター・ネメシスによってアインストの尖兵として生まれ変わりました。この肉体も外見は変わりませんが、中身は別物といえるでしょう」

『それが事実であれば……』
『奴等ならそれぐらいは容易いだろう。こちらの機体を取り込んでいくくらいだしな』

『貴女はそれでいいのですか？ 人を止め、得体の知れない化物にされたのですよ』
『ナギサ少尉……』

「構いません。人の身を捨てる事で生き長らえたのです。何事も代償が必要でしょう。私には将来を誓い合った恋人が居ます。彼とまた再会して生まれた子供を託すまではなんとしても死ねません」

『それは……わかる』

『というか、生まれた子供ですか？』

「そうですナギサ少尉。あの時、私の中に彼の子供がいたようです。私が死ねば確実に死んでいたでしょう。ですが、マスターによって子供達も無事生まれてきました。私がアインストになった影響はありますが、そんな事は愛する子供の前では些事でございます。しょう」

『……確かにそうだな』

セルゲイ中佐は少し思うところがあるようですわね。彼の妻は死んでいるのでしたか。情報が断片的にしかないので困りますね。

「そもそもアインストは地球圏を守護する監視者です。私が協力することで火星に関する環境改善や異星人による侵略に対して防衛戦力となってくれる事を約束していただきました。騎士として我が領民の生活を守るためにも私は現状を納得しております」

『監視者が手を出すか』

「人類が馬鹿すぎるのが原因でございますわね。アインストのトップは争いを続けて地球を壊し続ける人類は不要であるかもしれない。そのような考えにいたりました。ですが、人類を即座に滅ぼすのは監視者として問題があると考えたようで、人類を改めて理解するために人類を模して作成して使わしたのがマスターです。我々は審判されているのです」

マスターが止めなければ地球は既に悲惨な事になっているでしょう。人類を抹殺す

るためにアインストの尖兵が無数に送られ、人類をアインストへと変化させていたはず
です。

『何様のつもりだ!』

「神様でしょう。我々にとつて高次元生命体である事は代わりがありません。そもそも先に住んでいたのはアインスト達です。そこに我々が生まれ、繁殖して大事に見守つてきた地球を壊された。怒るのは当然でございます。貴方達も大切に見守つて育ててきた子供が大怪我をしたり、病気になるったりしたらその原因、病原菌を取り除こうとするのは当たり前のことでしょう」

『確かにその通りだな。地球を大切にして節度と良識ある行動をしろつて事だよな?』

「ムウ・ラ・フラガ大尉の言う通りです。我々人類は限度を超えかけたので、警告して自浄作用に期待して待つていただけです。その事を努々お忘れなきようお願いいたします」

話している間にマスター達はしっかりとこちらのサポートを受けてトレミーに帰還し、撤退準備を行っています。これで問題なしですね。いざとなれば最終手段でございます。

『俺からも質問がある。答えてくれ』

「ブルックリン・ラックフィールドでしたね。構いませんよ。救助中は時間がございま

すので」

『クスハは何処だ。お前達から何故行方不明になったクスハの念動力を感じられる!』
「それは……少々お待ちください。確認いたします」

アインストのネットワーク経由でマスターにどのように対処すればいいか聞きます。
『クスハさんの念動力を感じて追って来るとか、一歩間違えれば悪質なストーリーカーですの。いえ、すでにこちらからしたらストーリーカー? クスハさんの念動力を持っているのって基本的に女性ですし?』

確かにマスターの言う通りかもしれません。いえ、違うのはわかっていますし、納得もしております。

『とりあえずお任せ致しますの。情報はアインストネットワークに存在しますので、こちらで願いたいします』

かしこまりました。それではこちらで判断します。

「お待たせいたしました。クスハ・ミズハについてですが、お答え致しかねます」
『なんだ?!?』

「女性の個人情報になりますので……その、同じ女性としてむやみやたらに漏らす訳にはまいません」

『正論だな』

『その通りだな。ブリットから逃げているなら確かに答えられんか』

『うむ。致し方あるまい』

『隊長に皆！ 俺は恋人であるクスハを探しているだけです！ クスハが誘拐されたのは確実なんですから！』

「わかりました。では、貴女はクスハ・ミズハを愛しているのですか？」

『ああ……あ、愛している！』

「私も恋人が居るので貴女の気持ちはわかります。ですので、お答えしましょう」

『あ、答えるのね』

「重要度は低い事項ですので開示する事に問題はございません。マスターの許可もいただきました。ブルックリン・ラックフィールド。心して聞いてください。こちらが保存している映像データを転送する事が可能ですが、簡潔に述べます。彼女は死にました」

『ふざけるな！ お前達からは確かにクスハの念動力を感じる！』

「はい。彼女は稀有な才能を有した心優しき少女でした。故にブルーコスモスなどに危険視されて誘拐されたようです」

『そこまではこちらでも把握している。だが、そこであつた戦闘行為から把握ができていない。足取りが完全に消えた』

「それはそうでしょう。彼女が死んだ後、彼女の力を惜しんだアインストが回収しまし

た。彼女の皆を守りたいという心と強い力を受け継ぎました。我々アインストは自己進化を行います。故に私達は彼女の念動力を継承し、私の中にも引き継がれています。またそれはアインストの種子を与えられた者達も同じです。そこに居るキョウスケ・ナンブは私の親とはまた別のアインストが種子を与えたようなので違うようですが……」この辺りでキョウスケ・ナンブにもアインストが関わっていると教えることで不和を狙いましょう。成功する可能性は低いですが、連携が乱れるのであれば儲け物でございます。

『隊長がアインスト?』

『種子か……』

『あの時に植え付けられたというのであれば可能性はあるな』

「そもそもアインストは遥か太古より存在しているのです。彼等の種子が人類に宿つていても不思議はないでしょう」

『そりやそうだ』

さて、この辺りでもうひと押ししておきましょう。

「ブルックリン・ラックフィールド。クスハ・ミズハの想いと力を継承するつもりはありませんか?」

『何を……』

「貴方もアインストになればクスハ・ミズハについて全ての情報が開示されます。例えば……彼女を生き返らせる方法などについてです」

『なんだとっ!?!』

「私には無理でもアインストであれば可能、らしいです。マスターは何れ時が来たらくスハ・ミズハをはじめとした方々を助けるつもりのようなのです。つまり、死を改変するつもりのようなのです。ですが、それが何時かはわかりません。時間感覚が人とはかなりかけ離れたアインストです。ブルックリン・ラックフィールドが生きている間にたどり着くことは不可能かもしれません。ですが、アインストであれば不死とはいかないまでも、限りなく不死に近いですし、不老です。彼女を助け、そのついでに地球圏を助ける気があるのであれば我々アインストは貴方を歓迎いたします。共に愛する者のために世界の守護者となりませんか？ もちろん、貴方達も歓迎いたします。地球圏を守る戦力は多い方がいいのですから」

私の偽る事の無い思いです。仲間が多い方がいいのです。フューリーと戦うには頭数が必要です。それも優秀であれば尚更ですからね。

第50話

「ブルックリン・ラックフィールド」

『ブリット君、またね』

それが、俺がクスハと会って声を聴いた最後の言葉だった。インスペクターとの戦いが終わり、恋仲になった俺達は与えられた休暇を過ごし、平和を堪能していた。休暇が終わり、それぞれが求める部署へと移動することになった。

俺は功績を上げたキョウスケ大尉が作る部隊に所属する事になり、クスハは夢の為に衛生兵として別の場所で働く事になった。訓練が終わればクスハも合流する予定だったのだが、その前にクスハは誘拐されてしまった。

必死で隊の皆や軍部にも協力してもらってクスハの行方を探した結果、クスハは拉致されてとある街に連れていかれた事がわかった。俺は即座にベーオ・ウルブズの権限を使って機体を持って現地向かったが、そこは既に破壊された後だった。それからずつと探し続けていた手掛かりが目の前に現れた。それが目の前に居るアインスト達だ。

そいつらから聞かされた話は正直、信じられない。だが、彼女の言葉に嘘がないのも理性ではわかる。

『返答は如何に?』

隊長達は俺の返答を待つてくれている。だから、俺は努めて冷静に考えて答えを出す。

「そちらの言葉が事実であるかわからない。証拠をこのホームコードに送つてくれ」

『畏まりました。転送いたします』

こちらの要求にあつさりと答えてくれた。彼女は本当に俺の事を味方に引き込もうとしているようだ。俺はどうしたらいいのだろうか? クスハを助けられる希望があるのなら、アインストになつてもいいかもしれない。それに隊長も相手の言葉を信じるのならアインストと関係があるのかもしれない。

「確認した。後で内容を精査して返答させてもらう。そちらの通信コードを渡して欲しい」

『こちらのコードを入力してネットワーク上に送信くださればこちらから接触致します』

「了解した」

送られてきたコードは何かの羅列だ。これが本当に意味があるのかはわからないが、

アインストと話ができるというのは大きいだろう。

『ブリットの事はもういいだろう。それよりも、退却についてだな』

『こちらの要求は既に告げさせて頂きました。ソレスタルビーイングは撤退を選択しましたので、邪魔するのはご遠慮ください。こちらの地球連邦軍の方々も撤退されていた様子ですので、どうぞこのままおいきください』

セルゲイ中佐達は一部の機体が壊れた者達を万全な機体を使って下げ、クロガネに収容されていていつている。こちらに残っているのはティエレンの指揮官機とラピエサージュだけのようだ。ソレスタルビーイングの方はガンダムを母艦に回収して反転し、宙域から離脱しようとしている感じか。

「隊長、どうしますか？」

『私はガンダムと戦いたいのだが、事が地球圏全体に及ぶからな』

『大人しく撤退する方が無難ちや、無難ですぜ』

グラハム中尉のおっしゃる通り、アインストとの敵対はそのまま人類に甚大な被害を与える事になる。先のアインストが行った事により、地球連邦軍の防御は彼等がその気になれば問答無用で破壊される事がわかっている。

現在、転移対策を研究されているが、まだそのレベルには至っていない。上層部の考えではアインストは地球圏を守る戦力、つまり盾にできるので刺激せずこのまま時が

来るまで放置するのが望ましいとの事だ。そもそもが、アインストがどれだけの戦力を保持しているのかもわかってはいない。

それが今回の事で発覚した。少なくとも先の大型種の他に機械化された巨大なアインストが存在するのが判明した。観測した結果、約76・6メートルもの巨大な兵器であり、そこから強烈な念動力が放たれている。間違いなく、俺やクスハクラスの念能力者だ。それにアルドノアドライブも搭載しているのだろう。

考えられるだけでもアインストが保有する技術は地球連邦軍と火星騎士の物が使われている事が確実だ。この情報だけでも価値がある。

『質問がある』

『どうぞ、ベーオ・ウルフ』

『お前はここに来た目的をそいつのテストだと言ったな？』

『ええ、そうでございます。ノイエ・デューカリオンのテストが目的であります』

『そうか。だったらその相手を俺達が務めてやる』

『何をおっしゃっているのでしょうか？』

『とぼけるな。お前もその気だろう？ お前の殺気が伝わってきているぞ』

『ええ、ええ、そうですとも。私の目的は貴方様達との再戦です。ですが、それはマスタアの思惑と違います』

彼女からしたら俺達は火星の仲間と自分を殺した憎むべき敵という事なのだろう。だからこそ、敵意は存在するが、理的に振る舞っている。それでも理性と感情は別だ。『だが、どうやらお前達のマスターとやらの思惑は外れるようだぞ』

『あら』

二人の言葉を聞いた瞬間。ソレスタルビーイングが撤退して行った方向で爆発音が響いた。そちらの方にメインカメラを向けて望遠機能を使う。すると見えてきたのはソレスタルビーイングのガンダムと戦うガンダムの姿が見える。

『あそこにもガンダムが居る！』

『これは今までに無いな』

『おいおい……こいつは仲間割れか？ ガンダム同士で戦ってやがる』

『どうしますかセルゲイ中佐、ナンブ大尉？』

『あいつらの所属はわかる奴は居るか？』

『確定じゃないが、わかるのはあいつらがプラントだって事だ』

『何故わかる？』

『あの中に奴が、ラウ・ル・クルーゼがいやがる。アイツと俺には念動力みたいな意味のわかんねえもんで繋がりがあからな』

ラウ・ル・クルーゼ。インスペクターとの戦いで戦果を上げたコーディネーター。そ

う言われている。彼はフラガ大尉と同じくエース級の実力を発揮していたらしい。ウルブズへの誘いがあったが、それを蹴ってコロニーへと渡った人との事だ。

『つまり、プラントは独力でガンダムを開発したという事でしょうか?』

『そうなるな。だが、なんの不思議もないだろう。俺達にパーソナルルーパーやアサルト・ドラグーンがあるんだ。それに対抗する兵器を作っけていてもおかしくはない』

『ソレスタルビーイングと繋がっているかもしれないが……』

『それは否定させていただきます。ソレスタルビーイングが使う動力は太陽炉でございます。ですが、あちらのガンダムは計測される限り核融合炉が動力として使われております』

アインスト側から情報が提供された。同時に他に居たアインストの機体がソレスタルビーイングとプラントの方へと向かっていく。

「隊長」

『全機、ガンダムを破壊しろ。アインストの狙いはガンダムのパイロットだ。ソレスタルビーイングの母艦は既にアインストに浸食されている。ブリットがソレスタルビーイングの母艦からもクスハの念動力を感じしていた。ならば既に手遅れだ。素体となるパイロットを渡すな。俺達の、引いては地球圏全体の脅威となる』

「ですが隊長! それをすれば報復される可能性が……」

『無いな。お優しい小娘はこの程度では人類を見捨てん。いや、見捨てられないと言つた方がいいか?』

『そのような事実はございません』

『ああ、そうだな。報復として一都市ぐらいは滅ぼすだろう。だが、そちらからしても俺達の戦力が必要なんだ。むやみやたらに殺せんはずだ。違うか?』

『私にはわかりかねますが、世界を滅ぼすであろう存在と我々、アインストは現在交戦中です。故にこちらに無駄な戦力を割く理由はございません。ですが、報復を理由として兵の補充はするでしょう』

『その程度ならば許容範囲だ』

「隊長!？」

『ナンブ大尉! 上に指示を仰げ!』

『我々は独立部隊だ。ベーオ・ウルブズには交戦権が与えられている。問題はない。全機、攻撃を開始せよ』

『くっ……』

隊長の命令が下された。そうなれば軍人である俺達がやる事は一つだ。

『ガンダムよ! その楽しいな宴に私も混ぜろ! 行くぞムウ!』

『ああくそっ! ラウの野郎は任せろ!』

グラハム中尉のフラッグカスタムとフラガ大尉のアシユセイヴァーがソレスタルビーイング達の方へと向かっていく。

『行かせるとお思いですか?』

『うおっ!?』

『ふははは! 甘いぞ!』

その瞬間、ノイエ・デューカリオンから黒色の巨大なビームが放たれる。しかし、グラハム中尉とフラガ大尉が機体を動かして回避する。

『どちらがですか?』

『げっ!』

『なんと!』

ビームの向きが変更され、二人の回避した先を挟み込むように進んでくる。このままでは四本のビームによって逃げ道が前にしかなく、距離を取れないと綺麗に切断されてしまう。もちろん、相手の攻撃の方が格段に速い。

「援護し……」

『ブリットは自分の事に集中しろ』

「え?」

目の前には大量のミサイルが迫ってきていた。急いでグルンガスト参式の間からア

イソリッド・レーザーを放つ。レーザーが近づいてきたミサイルを切断すると、周りのミサイルを巻き込んで大規模な爆発を起こす。衝撃でグルンガスト参式が吹き飛ばされ、スラスターを使って回転を押しえて機体の体勢を整える。爆発の規模と威力からミサイルがなんなのかわかった。

『馬鹿な!? 核ミサイルだと! 条約は……』

『アインストがそんな物を守るはずもないだろう』

『セルゲイ中佐! 私達も応戦します!』

『致し方あるまい! やるぞナギサ少尉!』

『はい!』

『さあ、行きますよノイエ・デューカリオン。貴女の生まれ変わった新しい力を私に見せてごらん下さい』

ノイエ・デューカリオンに装備されている小型のミサイルランチャー24機からそれぞれ4発ずつ放たれるので、96発の核ミサイルの嵐。俺とティエレン、ラピエサージユは距離を取りながら核ミサイルを迎撃して誘爆させていく。

グラハム中尉達の方には複数のビームが放たれている。あちらも六機のビームと共にノイエ・デューカリオンの背中にある突起から複数の通常サイズではない大型のソードブレイカーが20機、放たれる。

その一機一機から放たれるメガ粒子砲はゲシュペンストMK-IIのメガ・ビームライフルと同じ大きさだ。つまり、20機の超高速起動を行う機体に常に攻撃されているのと同じだ。

「弾切れ、弾切れは無いのか!」

『くそがつ! エネルギ―は明らかに戦艦数十隻分は尽きるはずだろうが!』

『ええい、しっかりと捕まっておけ! 手を離したら死ぬぞ!』

フラッグカスタムにアシユセイヴアーが抱き着きながら移動し、ソードブレイカーを複数同時に使って攻撃することで多少はビームを歪ませ、その隙間を必死に逃げていたみたいだ。

こちらもアイソリッド・レーザーでは対応しきれず、横向きの竜巻のような極太ビームをぶっぱなすオメガ・ブラスターで核ミサイルを纏めて吹き飛ばす。

「セルゲイ中佐、ナギサ少尉! こちらへ! グルンガストを盾に使ってください!」
『すまない助かる!』

『こちらも援護します!』

ラピエサージュが両肩に装着されたクラスターミサイルで、核ミサイルを誘爆させて防ぐ。しかし、直ぐに後続の核ミサイルが雨あられと降り注いでくる。

『スプリットミサイルHでも対応できません。オーバー・オクスタン・ランチャーを使い

ます。交代で迎撃しましょう』

「助かる！」

オメガ・ブラスターとオーバー・オクスタン・ランチャーを使い、相手の核ミサイルを破壊する。セルゲイ中佐は背後から迫るゲシユペンストMK-IIやリオンシリーズの相手をしてもらう。連中は核ミサイルで破壊されても気にせず突撃してきて自爆していく。

「これが人のやる事か！」

『その子達は群体生命体です。個ではありません。無人機のようなものです』

再チャージが終わったのか、おかわりの核ミサイルがやってくる。どう考えても搭載数があわない。

『来ましたか、ベーオ・ウルフ』

通信から聞こえるその声を見ると、キヨウスケ隊長の機体が核ミサイルの爆発を無視して突撃し、ノイエ・デューカリオンに接近していた。

『喰いでのありそうな機体だな』

『そちらこそ、壊しがいいがきましょう』

ノイエ・デューカリオンはサイドアームを4本起動させ、巨大な重力の剣を振るう。

剣と剣の間に飛び込む大尉の目の前にグラハム大尉達に放たれているとは別の、本体

に装備されたメガ粒子砲が6機から放たれる。

『押せよ……Mk-III!!』

核ミサイルによつて機体の装甲が破壊される中、リボルビング・ブレイカーを突き出してスラスター全快で突撃する。

『持つていけ』

更に肩にあるレイヤード・クレイモアが放たれ、メガ粒子砲を破壊しようとする。しかし、クレイモアの砲弾が着弾する直前に見えない壁が現れて全てを弾く。

『ちっ』

キョウスケ大尉は即座に左腕にある五連チェーンガンで近くの核ミサイルを撃ち抜き、その爆風を利用してスラスターを使いながら距離を取り、巨大な重力の剣の交差から逃れる。

大尉の機体はボロボロで、既に火花が散っている。どう考えても何時爆発してもおかしくない。

「大尉、無事ですか?」

『生きてはいるが、これは駄目だ。出力が違いすぎる。メガ粒子砲を貫いた直後に撃つたが、それでもフィールドに防がれた。攻撃する瞬間ならばと思ったが、これはもはや腕ではどうにもならん』

『お下がりにください、大尉。次は私が行きます』

『ほう？』

『このラピエサージユであれば……』

『止めておけ。貴様の機体はゲシュトゥペンストMK-IIIとゲシュペンストMK-IVを参考にアシユセイヴァーを改造して作られている。その程度であれば奴の防御を抜けん』

「ここは定石通り、エネルギー切れか弾切れを狙いますか？」

『期待はできんだらう』

『まったくだ』

セルゲイ中佐の言葉にキョウスケ大尉も頷く。見ると、大型のソードブレイカーが新たに射出された。それも先程、フラガ大尉達に向けて放たれた物が多少なりとも健在だ
 というのだ。

「ありえない……」

『どうやら機体内部でミサイルやソードブレイカーなどを作れるようだな。エネルギーも馬鹿みたいに撃っているのだから、ブラックホールエンジンのようにほぼ半永久的かもしれない』

『アレ自身が兵器工場というわけだな。もはや動く要塞ではないか』

『救いは攻撃が稚拙だ。ただ物量で押しつけてくるだけでパイロットの腕は皆無に近い』

「あの、それなんです……攻撃にオルレインの意思を感じません。おそらく、自動攻撃に近い物だと思えます。でも、おかしいんです。巨大なほどの念動力は常に使われているので、こんなことあるはずがないんですが……」

普通は攻撃に念動力を乗せて威力を上げるはずだ。もし、念動力を使われていたらキョウスケ大尉でも無事ですまなかつたはずだ。もちろん、命が、という意味でだ。

『あの、もしかして機体の制御に取られているのではないですか？』

『ナギサ少尉の言う通りだろう。あの機体は要塞としては問題ないのかもしれないが、機動兵器としては欠陥品だな』

『試作機と言っていたが、アレが完成すれば脅威だ。どうする？』

『どうもこうもない。こちらの攻撃手段がない。クロガネを突撃させるにしても、割に合わん』

「ですね」

ラピエサーージュやグルンガスト参式を盾にしてビーム攻撃をできる限り防ぎながらクロガネを突撃させ、ドリルで相手の防御フィールドを破壊する。その瞬間にキョウスケ大尉のリボルビング・ステークを叩き込む。これが勝てる唯一の手段だろう。だけど、すでにリボルビング・ステークは破損している。クロガネに戻って補給を許してくれるほど相手は優しくない。

そもそも相手が動かないことが前提条件だ。フラガ大尉達から送られてきたあちら側のノイエ・デューカリオンの画像データから見ると複数の大型スラスターが配置されている。おそらくだが、アレは高機動タイプ。動かない現状でもこれなのだから、動かれたら捕捉できない。

『ブリット、撤退信号を出せ』

「いいんですか？」

『データ収集は十分だ。今なら撤退は可能だ。奴はソレスタルビーイングを助けるためにあちらの相手をしないとイケないからな』

「フラガ大尉やグラハム中尉は……」

『奴等には勝手に帰投しろと伝えておけ。こちらに来る時間はない。そうだな、レッドアクシズの基地が近い。そちらに救助要請を出しておけば問題なからう』

「わかりました」

撤退信号を出す。クロガネからも信号弾を撃ってもらい、俺達は下がる。アインストは予想以上の化物……違うか、元から予想はしていた。それでもまさか、キョウスケ大尉でも手が出ないとは思わなかった。

『このデータを見れば俺にも最新鋭機が支給されるだろう。ナハトは良い機体だが、奴等を相手にするには足りんし、何より俺の反応速度についてこれていない』

「ゲシュペンストMK-IIIでそれとか、本当に……アレですね」

『お話中、失礼します。私、オウカ・ナギサをベーオ・ウルブズに入れてください』

『ナギサ少尉何を言っている』

『私の役目はスクールが役に立つ事を証明する事です。それにはベーオ・ウルブズに居るのが一番良いと判断しました』

『却下だ。俺達に新兵を鍛えるメリツトはない』

『私共の機体を作った方をご紹介します。キョウスケ大尉に相応しい機体を用意してくださる事でしょう』

『マリオン・ラドムは既にいらっしやいません。どなたか伝手はあるのでしょうか？』

『いいだろう。だが、俺が気に入らなければそれまでだ』

『はい。ありがとうございます』

隊長の予想通り、ノイエ・デューカリオンはこちらに散発的な攻撃を仕掛けてくるが、既に移動を開始している。だが、何処か焦っている気配もしている。そこまであちらは危険なのだろうか？

システムエラー、相転移トロニウムエンジンの出力にパイプラインが耐えきれませんでしたか。停止するしかありませんね。サブ動力のブラックホールエンジンで再生まてまかなえますが、追撃は無理ですね。ここで殺しておけばよいのですが、そうすれば機体を奪うくらいはやってのけるでしょうし……ここまでですね。実戦での経験値は稼げました。より最適化した進化が可能です。レイヤード・クレイモアは搭載しましょう。接近された時に大変便利そうです。

第51話

「ナスカ級ヴェサリウス」

「そう難しい顔をするなアデス」

ヴェサリウスの艦長であるアデスの隣に移動しながら、告げる。我々の目的はアインストが現れたとしても変更は無い。

「しかしよろしいのですか？ 評議会の許可も得ずにアインストと戦端を開いて……せめて評議会からの返答を待つてからでも遅くはないのでは……」

「遅いんだ。私の勤がそう告げている。ここで見逃せば何れその代価、我等の命で支払わねばならなくなるぞ。ソレスタルビーイングのガンダムをアインストが手に入れる前に奪取か破壊せねばならん」

「確かにコピー能力を持つアインストに起源を同じくするガンダムを渡す訳にはいきませんか」

「そうだ。それにソレスタルビーイングの技術を引き継ぐのであれば我々こそが一番相応しい。何故なら、我々コーデイネーターの始祖、ジョージ・グレンを生み出したのは

イオリア・シユヘンベルグと共同した者達なのだから」

コーディネーターもガンダムもイオリアとコーディネーターを生み出した者達が技術交流をしながら共同して作り上げた技術だ。だが、次第に意見が割れて二つに別れた。その後、基礎の技術を同じくしながらも別の路線で開発を続けた。

イオリアはソレスタルビーイングを組織し、太陽炉の開発に成功してガンダムを開発した。動力炉メインのハード研究というわけだ。

我々はパーソナルトルーパーやアサルトラグーンなどを持つ地球連邦軍に対抗するためにフェイズソフトやドラグーンを搭載した武装をメインにソフト面を重視して開発したのだ。

つまり、二つのガンダムを合わせる事でより素晴らしい機体が完成する。どちらも根幹をなす技術はモビルスーツであり、共通する部分も存在しているので互換性を得られやすい。

「火星の騎士からもアインストと敵対するのであれば技術提供を受けられる。これはそれを示す為にも丁度いいとおもわんかね？」

「ですが、勝てますか？」

「心配はいらんだらう。あのデカブツは地球連邦軍の精鋭が相手をしてくれる。我々は逃げようとしているソレスタルビーイングを襲撃するだけだ」

「了解しました」

「では、私も出る。アスランやイザーク達にもGAT-Xナンバーで出撃させろ」
「通達します」

さて、アインストがどう動くかはわからんが、これで世界の破滅へ一步を踏み出してくれるだろう。それにアインストからのオファーについても本物であればこれで接触してくるだろう。

パイロットスーツに着替えてから格納庫に向き、私専用調整された機体へと搭乗する。全てのシステムが正常であり、画面にはSTRIKE General Unit
Laternal Neuro-Link Dispersive Autonomous
c Maneuver Synthesis System、GUNDAMと表示される。

『隊長。アスラン達は発進しました』

「了解した。プロヴィデンス、ラウ・ル・クルーゼ出る」

『ゴ武運を』

さあ、イオリア・シユヘンベルクが作り上げたガンダム性能とアインストの実力を私に見せてもらおうか。

【プロレマイオス ブリッジ】

なんで、どうしてこうなったのですの？ いや、第三勢力が居たのはわかっていますし、襲い掛かってくる可能性があるのもわかります。でも、それらは負傷しているとはいえ、ソレスタルビーイングのガンダムとマイスター達……アレルヤとハレルヤ、刹那が居ればどうにかなると思っていましたの。わたくしもヴェアーチエ……ナドレで出ればいいだけですし、アインストの戦力を壁として使う事もできるので逃げるのは容易い。そう思っていましたの。

「敵艦から発進した機体は真っ直ぐこっちを目指してる……」

「それよりどういう事だよ！ 相手にガンダムが居るなんて聞いてない！」

「スメラギさん、何かヴェエーダに情報はあったか？」

「今は繋がらないから詳しくはわからないけれど、ガンダム以外の機体はぎ……プラントが開発したモビルスーツでしょうね」

画面に映るのはガンダム、Xナンバー以外にもザフトが開発して運用している機体、ジンやシグラーの姿が見えます。ジンはザフトの初代制式主力機にして世界初の汎用量産型MSですわね。正直、この世界じゃ雑魚で骨董品といえる性能しかありません

ん。ゲアルトアイゼン・ナハトやゲシュペンス・リッターが活躍する時にただのゲシュペンストを持ち出したところで性能の差は歴然です。

そのはずなのですが……アニメやゲーム基準じゃないからか、地球連邦軍で開発されていないはずのXナンバーを原作開始前に手に入れてる上にその発展型であるプロヴィデンスガンダムが存在しているのはどう考えてもおかしいですの。

まあ、わからなくはありません。この世界では地球連邦軍はわざわざモビルスーツを開発するまでもなく、パーソナルトルーパーやアサルトドラグーンをはじめとした核動力やブラックホールエンジンなどといった超技術ともいえるような動力炉すら扱いだしているの……そのデータがプラントに流れていても不思議ではありませんの。

そうなると考えられるのはジンやシグーすら普通に核動力搭載機でしょう。核兵器以外の動力炉もありますし、すでにオービタルリングなどによる太陽光による発電をしている現状……ニュートロンジャマーなんて要らない子ですし、気にする必要もなく使えますよね？

「モビルスーツ？ パーソナルトルーパーやアサルトドラグーンじゃなくてか？」

「そうね。おそらくあつていると思うわ。それにアレは太陽炉を搭載してないけれど、間違いなくガンダムよ。それとプラントは厄介な特性を持つている装甲を開発していたはず……」

「な、なんですか?」

「フェイズシフト装甲……物理攻撃を相転移させて無効化するものよ」

「なにそれチートじゃないですか!」

「太陽炉も大概チートなだけだね……」

しかし、何故アインストまで居る状態でザフトは、クルーゼはこちらを襲撃に来たのでしょうか? まあ、おそらく狙いはガンダムでしょうね。Xナンバーの代わりにソレスタルビーイングのガンダムを奪取するということでしょう。

そうなるのと太陽炉とフェイズシフト装甲を搭載したとんでも機が誕生しますわね。動力炉の問題はあるでしょうが、大変厄介ですの。考える事はどこも同じで、狙うべきは合法的に潰しても問題ないテロリストが所持している超技術といったところでしょうね。

「エクシア、ヴァーチエ、キュリオスの状況は?」

『エクシアとキュリオスは問題ない。ヴァーチエはまだいける』

「そう……」

『出すか?』

相手がエリート部隊とはいえ、実戦経験もすくない赤服などガンダムマイスターであれば相手にもなりません。いや、そこまでではないかもしれませんが、少なくともわた

くしと覚醒したハレルヤの敵ではありませんの。

問題は彼等を率いる存在、ラウ・ル・クルーゼさんでしょう。一期のラスボスが機体と一緒に来ているのですから脅威度はキョウスケさんより高いかもしれませんの。キョウスケさんはまだアインスト化していませんし、機体もまだまだ普通の……ゲシユペンストMK-IIIアルトアイゼンナハトが一般的かどうかはわかりませんが、一般的ですからね。

さてさて、どうしましょうか。このまま逃げるにしても位置的にはこちらをアインストと挟み込むようにザフトが展開していますし、彼等の背後からこちらに向かっているレッドアクシズを強襲させるというプランもアリと言えばアリですの。でも、その後捕まえたソレスタルビーイングの身の振り方が色々と面倒ですわね。流石に他から引渡し要求とか技術開示を求められるでしょうし……むろん、ただではやりませんが。

「ただいま」

「お帰りフェルト！」

ブリッジに戻ってきたフェルトにクリステイナさんが抱き着いてゆりゆりしておられます。大変よろしいのですの。

「それでそいつは？」

「彼女はマリーだ。敵に捕まっていた仲間だ」

「よ、よろしくお願ひします……」

てきます。

「この状況でどういうつもりだスメラギさん……いや、アインスト・アルフィミイ。事と次第では……」

「え？」

アルフィミイと呼ばれた事で皆さんの視線が集まっているので、ここはやりたい事をやってみましょう。

「ある時は戦術予報士スメラギ。ある時は地球連邦軍独立治安維持部隊レッドアクシズの司令官。ある時はネルガル・マオインダストリー社の社長、ある時は可愛い街中の少女。ある時は地球連邦を手玉に取るネメシスちゃん。後、思いつかないので省略！ その実態はみんなの地球を守る可愛い守護者、アルフィミイちゃんですよ！」

くるりんぱと回転と同時にスメラギさんの姿を改変し、超絶可愛い美少女アルフィミイちゃんへと戻ります。異論は認めません。アルフィミイちゃんは超絶可愛い美少女です。だってアルフィミイちゃんでも。なお、中身は偽物なのでその限りではありませんの。あくまでも外見ですしね。

「あれ、あれあれ、反応がありませんの」

皆さんを見ると以下省略したところでフェルトたちが呆れています。ちなみにトレミーの艦内全てに通信を開いて送信しているので皆さんが知りました。

「おかしいと思っていた……」

「スメラギさんは……そんな……」

「あ、ちなみに本物のスメラギさんとロックオンさんはレッドアクシズで拘束させて頂いておりますの。後程、合流させて差し上げますわ。あ、ガンダムで逃げようとしても無駄ですの。既にシステムはロックさせていただきましたわ」

刹那さん達がガンダムを動かそうとしていますが、無駄です。ヴェーダを使ってヴァーチェの中身、ナドレが他のガンダムを制圧できるようにされているのですから、そこから感染させれば余裕ですの。

「では、改めて皆さんにお伝えいたしますの。現時刻を持ちましてソレスタルビーイングはイオリア・シユヘンベルクが目覚めるまで、代理としてわたくしが指揮いたします。異論は一切認めません」

「イオリアだと？」

「はい。皆さんの創始者であるイオリア・シユヘンベルク。彼をわたくし達が確保いたしました。今、コールドスリープから解凍して治療中です。彼が目覚めればソレスタルビーイングは彼にお返しいたします。と、いうわけで我等が本拠地に転移にてご案内します。ああ、身の安全は保障しますのでご安心くださいな。これから地球を守る同胞となっていたただける方々を無下にはいたしませんので」

それだけ告げるとトレミーをインストール化させて転移の準備に入ります。同時にわたくしは格納庫へ向かいますの。

「あ、フェルト。この人達は大人しくさせておいてください」

それだけ言つて格納庫に移動しますの。ブリッジを出ると船内は植物の蔦に覆われだしており、超高速で浸食されていっております。

格納庫では皆さんが武器をもって対峙しようとしておりますが、無駄ですの。原作のアルフィミイちゃんと同じ姿にスカートを装備したわたくしに攻撃しようとすると、壁から蔦が襲い掛かつて拘束していきます。それに弾丸を抜刀して切り払ったりもします。

「お前っ！」

「大人しくしてくださいませ。従ってくださいれば無事に生きて帰れますからね」

「信じられるか」

「刹那、止めろ。もはや俺達ではどうにもならん」

「くっ……」

「イアンさん。エクシアの整備は？」

「……問題ないが、どうするつもりだ？」

「転移までの時間を稼ぎますの」

「なら俺が……」

「いえ、今の刹那さんではやられてしまうでしょうから、わたくしが出ます。最悪、太陽炉は破壊すれば問題ありませんしね」

「エクシアは俺の……」

刹那さんを拘束してからエクシアに乗り込みます。実際問題、今の刹那さんは駄目です。覚醒刹那さんでないと原作ボスであるラウ・ル・クルーゼには容易くやられてしまいます。イノベイターに覚醒していたら話は別ですけどね。

「操れるのか？」

「問題ありません。取り込んでしまいますから」

コクピットに乗り込んで同化を開始します。エクシアのコクピットに乗って運転できるとか、もうファンとしてはうっきうきのウハウハです。太陽炉も取り込んでエイフマン教授が開発した物も使い、ついでに機体を更に改造してあげます。イメージはエクシアに太陽炉を増設します。中心の太陽炉の周りに小さな四つの太陽炉を設置。まあ、太陽炉のブースターを設置した感じですよ。二機つけるツインドライブシステムよりは下ですが、これでも充分です。また腕の関節などは植物になり、緑色の綺麗な球体は赤色に変化しましたの。コクピットの機能もIFSを適応させておきましたし、T—L I N Kシステムもフレームに内蔵してスラスターもマシマシにしてやりました。

「ライン・エクシアと名付けましょうか」

「俺のエクシアが……」

寝取ってやりましたの。ちゃんとバリバリに強化して返すので許してくださいですの。流石にパイロットの腕は劣っていますし、機体性能で上をいかないといけませんしね。

「ライン・エクシア、アルフィミイ……出ますの」

敵はラウ・ル・クルーゼ率いるクルーゼ隊。Xナンバー五機とプロヴィデンス。相手にとって不足はありませんの。

第52話

「ナスカ級ヴェサリウス　アスラン」

クルーゼ隊長からの命令を受けて俺達はすぐに機体を発進させる。距離が離れているためにカタパルトを使用して向かう。

すぐにイザークが搭乗するデュエルやディアツカの乗るバスター、ラスティの乗るストライクとミラーージュコロイドによって姿は見えないがニコルが追い付いてきて横に並び、接触回線で通信を開いてくる。これはソレスタルビーイングの通信妨害が原因だ。

『今回の作戦はソレスタルビーイングが相手か。初陣には丁度いいな。ガンダムを使っているとはいえ所詮はナチュラルだ。俺達の相手ではない』

『同じガンダム同士、どちらが上か決めてやろうぜ』

『勝負になるのかわからんがな』

俺達は同世代のコーディネーターの中でも一際優秀な成績を収めたから、プラントの武装組織であるザフトでエリートである証、赤服を貰う事ができた。だが、それ故にイザークとディアッカは驕りがあるように感じる。

『ボクは不安です。この戦場にはアインストだつて居るんですよ……』

『それこそ地球連邦軍が囷になつてくれるさ。その間にこつちは疲弊しているソレスタルビーイングを叩いてガンダムを手に入れるつて事だろ?』

『確かにその方が安全ですが、アレは危険だと思えます……アスランはどうですか?』
「確かにニコルの言う事もわかるな。あの巨大な機動兵器は厄介だ。だが、やるしかない。どちらにしろ、俺達はアインストと敵対する火星と組むんだ」

少なくとも、俺達はあの機体を持つ勢力と対決する事になる。そういう意味ではここで相手の情報がこちらの損害が無く手に入るのはありがたい。

『デカブツなど恐るるにたらん。それに火星騎士だったか。奴等も地球連邦に敗北した弱者だ。技術に関しては優秀なようだがな』

『イザーク』

『どちらにしろ、あのデカブツがこつちに来るまでにソレスタルビーイングを潰せばいいだけだろ』

『その通りだ。あまり時間は無い。アスラン達は敵のガンダムを鹵獲しろ。動力炉さえ

無事ならそれで構わん。ジンやシグーは母艦に向い、破壊しろ』

『母艦はいいのですか？』

『かまわん。アインストから退却せねばならぬ状況で敵の母艦を牽引などできんなからな』

『了解です』

『以降の作戦指示は光による信号か信号弾を使う。ナチュラルの連中にガンダムは過ぎた物だ。我等が有効活用してやろう』

『はい！』

隊長の命令に従い、俺達は接近しながら様子を見る。相手が出てこなければ対処はできなからだ。その間にジンやシグーは更に加速して突撃していく。

『皆さん、ボクも行きます。誤射は気を付けてくださいね』

『ふん。俺の前に入ってくるなよ』

『そうそう。俺の射線に入ったら撃つからな』

『気を付けます。それでは皆さん、ご武運を』

ニコルとの通信が消える。おそらく離れたのだろうが、こちらからは位置情報がわからない。ミラージュコロイドは、可視光線や赤外線をはじめとする電磁波を偏向させる効果を持つ特殊粒子だ。粒子そのものが電磁場や量子情報を伝播するキャリア（伝導

体)の特性を持つ。だからもうわからない。同士討ちを警戒しないといけない。

『どうやら俺達の獲物が出てきやがったぜ!』

『当然だな。このまま行ったら機体を出さずに鹵獲されるだけだ』

『おい……出てきたのはソードタイプのようなだが、見たデータと少し変わっていないか?』

ディアツカとイザーク、ラスティの言葉に相手の母艦から発艦してきた機体を望遠機能を使って確認する。確かに事前情報として見せてもらったガンダムのソードタイプだ。少しだけ形が変わっているようにも感じる。

『どうでもいい。それよりも行くぞ! 隊長にいい所を見せねばならんからな!』

『ママの間違いじゃねえか?』

『違う』

『黙れ。貴様等から殺すぞ』

『遊びはここまでにしろ。ディアツカ、ラスティ、援護を頼むぞ』

『オーケー。任せな』

『了解だ。アグニで援護する』

『俺とどつちが落とすか競争だぜ』

『落としたら駄目だろう』

ラストイのストライクは統合兵装ストライカーパック（Integrated Weapons Striker Pack）を装備しており、大量の武装が存在している。量産する時にはエール・ソード・ランチャーのコンセプトに別ける予定らしい。

『なんだあの軌道はっ!?!』

イザークの言葉に前を見ると、出てきたソードタイプはまるで光の翼が生えているような感じで馬鹿みたいな加速をする。ジンやシグが所持しているビームライフルやビームマシンガンを連射するが、残像を残すかのように光の粒子をまき散らしながらまるでそこに攻撃が来るのがわかっているかのように綺麗に回避していく。

『さながら蝶の舞ってか?』

『援護するぞ!』

『あいよ!』

ラストイとディアツカが長距離砲撃を行えるアグニとバスターの収束火線ライフルを前にし、ガンランチャーを後に連結した高威力・精密狙撃モード行う砲撃を放つ。相手はそれを急制動と急加速で軌道を変更して回避し、明らかに人体が耐えられる速度ではない高速機動でジンに接近して速度を落とさずに通り抜ける。その直後にジンはコクピットを切断されて爆発した。どうやら手に持つ巨大な剣で通り抜けざまに斬られたようだ。

『糞がっ！ 行くぞアスラン！』

「わかった！ 乗れイザーク！」

イージスを可変機構を利用し、手足を前面へ伸ばした巡航形態に変形する。それからイザークのデュエルに掴ませて一気に戦場へと接近する。その間に次々とジンやシグーが撃墜されていく。相手は片方のソードをライフルモードにし、もう片方を剣として運用しているようだ。特にジンやシグーの動きを読んで移動する先にビームを置くような攻撃で容易く撃墜させていく。

「イザーク、相手の射撃技術が凄まじい。警戒して慎重に行くんだ」

『言われなくてもわかってる』

光の帯を残して超高速で移動する相手はこちらの接近に気づくと一気に離脱しながらジンやシグーを破壊していく。

思わず唾然とした後、慌てて進路を変更して追う。宇宙空間では上などないが、機体の上の方向に高速で上昇した後に降下していく。

『アスラン、奴の狙いはディアツカとラスティだ！ 俺達などはなっから相手にしていない！』

他の皆はただのついでだともいうのか、撃破しながら上昇し、一気に降下してディアツカとラスティの方向へと向かっていく。

「くそっ！　だが、それならそれで先に母艦を落とすぞ！」

『ディアツカとラストイが危ないが……隊長が居るか』

「ああ。俺達はこのまま母艦を落とせば……っ!?」

『うおっ!?』

機体を回転させて回避行動に移す。先程まで居た場所にデカブツから放たれた極大の光線が通過していった。あちらの方を見ると、こちらに高速で接近してくる二機とそれを撃ち落とそうと放たれる無数のドラグーンのような物による攻撃。その流れ弾がこちらに来ているのだろう。

『何をするアスラン!』

「仕方がないだろう!」

『ちっ!　っ!?』

いきなりイザークがデュエルを操ってイージスを蹴ったために衝撃が襲い掛かってくる。距離が離れ、

「何を……馬鹿な……」

イザークに文句を言おうとそちらを向いた瞬間、そこには緑色の関節を持つ赤い瞳のガンダムが剣を振り下ろしていた。奴が出した新しい剣はビームで出来ているようで、デュエルの足を切り落としていた。更にその場で回転してデュエルの頭部に蹴りを叩

き込んで吹き飛ばす。

「馬鹿な……先程まであちらに向かっていたはずなのに……」

ディアツカとラスティの方を見ると、彼等との間に先程までソードタイプが手に持ち、ジンやシグーを破壊していた剣があった。それも高速でディアツカとラスティの方に向かっていている。つまり……

「剣を足場にしたというのか？」

イザークとも離されたことで通信が切れた。イザークのデュエルからビームが放たれるが相手は即座にビームサーベルを振るって斬り落とし、こちらに向かってくる。巡航形態から通常のモビルスーツ形態に変形しようとした瞬間、ビームダガーが変形中の関節に打ち込まれて破壊される。

「くそっー」

奴はそのままビームサーベルを振るえば俺は殺される。そう確信できた。だということに相手はイージスの足を掴んでバスターの攻撃の盾にした。

「いのっー」

咄嗟にスキュラを放つ事で相殺し、奴と共に離れる。もがき、振り解こうとすると画面にエラーコードが無数に表示されていく。モニターを確認すると、奴の緑色の関節からチューブみたいのが出てきてイージスに絡みついていた。

「まさかデータを抽出しているのか!？」

慌てて操作パネルを取り出して防壁を書き換えて抵抗する。しかし、明らかに相手の方が速くどうしようもない。

『~~~~』

しかもスピーカーから可愛らしい女の子の歌が聞こえてくる。それも、よりにもよってラクスの声でラクスの歌だ。

「ふざけるな!」

自爆装置を起動させ、脱出装置を発動させるために固く守られたボタンを腕で押す。だが、何の動作も発動しない。画面を見るとソフトウエアが次々と消去されていつているのが見えた。次第に電気が消えて真っ暗になり、非常灯が点灯する。

「ここで終わりなのか……父さん……ラクス……キラ……」

眼を瞑り、しばし助けが来るのを待つが、それも無い。いや、一切の動きがない。おかしいと思い、ハッチを強制的に開けて肉眼で外を見ると……そこにはアイツは居なかった。もう俺には用は無いとでもいいだけにデュエルや突撃してきたストライクと戦っている。

「見逃されているというのか……」

アイツの腕なら戦いながらもビームかビームダガーをこちらに放ってくるだけで

俺とイージスは死ぬ。それだというのに無力化しただけで放置された。確かにナチュラルなら無理だろうが、俺ならいける。

「目に物見せてやる！」

コクピットの下にある床を外し、配電盤を切って持っている携帯端末に繋げてソフトを作るためのコードを打ち込んでいく。消されたのならばまた書けばいいだけだ。全て覚えているのだから問題はない。

第53話

「ライン・エクシア アルフィミイ」

ジンやシグラーのкокピットを狙って通過しながら斬殺し、襲い掛かってきたアスランさんのイーゼスを無力化してイザークさんのデュエルを吹き飛ばしてやりました。

まったく、イザークさんもアスランさんもなっていないませんの。敵に後ろを見せながら回避するとか、愚の骨頂ですの。

わたくしがした事は単純で、こちらについてこずにそのまま母艦であるトレミーに向かっていこうとしたのが思念で伝わってきた。ですので、GNソードを投げてT—L I NKフレームによる強化した念動力で固定させて足場にし、蹴って方向転換を行ってデュエルとイーゼスを背後から強襲しました。

残念ながらイザークさんに気づかれてしまいましたので、デュエルの足を落とすだけしかできませんでした。ですが、デュエルを吹き飛ばして一機だけになったイーゼスを無力化しましたの。はい、アスランさんを殺す訳にはいきませんので普通に無力化で

す。

彼は原作でも優秀な人材です。ジャスティスに乗って人類の剣か盾として活動してもらわねばなりませんから、敵対者としても殺すのはNGです。ただでさえ人材が減っているのですから、出来る限り人を残す必要があります。

そんなわけでこの戦場で殺せるのは無名であろうジンやシグーと原作で死ぬブリッツのニコル、ストライクのラスティでしょう。この人達なら殺しても問題ありませんの。

敵対しなければ殺すつもりもありませんが、わたくしとわたくしの大事なルリちゃんをはじめとした同士達を殺そうとする連中を理由もなく生かす必要はありません。ラウ・ル・クルーゼがアニメで言っていたようにここで逃せば何れ支払うのは同士達の命です。ですから、容赦はしませんの。

「さて、あの方はまだ様子見のようですよ。ならば敵は……」

飛んできたデュエルとストライクの稚拙な連携で放たれた乱雑な狙いのビームを機体を小刻みに動かして首と股の間を通らせた後、加速して腰背部に装備された2基のダガーを抜いて投擲いたしますの。

「ザフトのエリート、赤服の皆さんになりますの」

怒り心頭の状態で襲い掛かってくるイザークさんとラスティさんですが、GN粒子が

満たされているこの空間では脳量子波による相互理解ができる効果を利用して思考を読みます。もちろん、わたくしの方は念動力でロックしてしますので問題ありません。ちなみに相手は脳量子波のチャンネルが開いていないのでこちらだけ聞きたい放題です。

思考を読んでいるのですが、流石に正面から飛んできたダガーは回避されます。ですが、その回避したダガーが途中で反転して背後から突き刺さります。デュエルとストライクは一瞬ビクンツと機体が震えた後、機体が一時的にシステムダウンして行動不能になりました。

その瞬間、GNバルカンを叩き込みます。するとバルカンの弾丸が着弾すると緑色の蔓が伸びて機体を拘束していきます。イージスと同じようにデュエルとストライクが停止します。ダガーもバルカンの弾丸もアインストで構成されているので機体への浸食は可能です。まあ、ビーム兵器であるダガーでフェイスソフト装甲を抜いてシステムをダウンさせないといけなかつたんですね。

「おっと」

考えていると、ニコルが動く気配がしたのでバックステップを行います。するとわたくしの目の前にブリッツの右腕に装備された複合武装攻盾システム、トリケロスが通り過ぎます。そのトリケロスが装着されている腕を掴み、空いている方の手を変形、進化

させてから突き入れますの♪

『なっ!?!』

ガンダムバルバトス・ルプスレクスの手と同じように指を刃と化し、GN粒子を纏わせてビーム兵器にもしてブリッツのкокピットをえぐり取りますの。

「ニコル君は殺しても問題ありませんの。原作でも死んでいきますものね?」

そのまま悲鳴を上げるニコル君が居るкокピットを手の中に握りしめてこの空間から消しますの。はい、この空間からですの。強制的に月へのご招待♪

ブリッツの残った機体は振り払ってメンデルがある方向に送りつけておきます。イザークやディアツカ、アスラン、ラストイから悲鳴のような思念が伝わってきます。

まあ、どう見てもニコル君は死んでいきますから、仕方がありませんの。でも、彼等には何もできません。次はストライクを始末しましょう。

そうすると、ディアツカが長距離狙撃をしてくるので、ストライクをブリッツと同じようにкокピットを貫いて掴んでから盾にします。ラストイの乗るストライクはそのままバスターの砲撃によって大部分が消し飛びました。エクシアの手もボロボロになってしまいました。そこはそれ、アインストの再生能力で復元しますの。ついでにストライクの残骸を取り込んで機体にフェイズシフト装甲を適応させます。

『あつ、あああああああああつ!?! お、俺は……俺は……!?!』

流石に何時も飄々としているディアツカさんも味方を、苦楽を共にした同僚を撃ち殺したらテンパりますの。これではもう精密射撃なんてできないでしょうし、わたくしの敵ではありません。ごめんなさいですの。でも、悲しいけれどこれって戦争なんですの。

「さあ、これで少しは可能性が見えてきたでしょうか？　どちらにせよ……勝負ですの、ラウ・ル・クルーゼさん」

スラストアーを八割まで上げて一気にプロヴィデンスを目指していきます。残っているデュエル、イージスを見殺して突撃をかけます。

『ふっ』

クルーゼさんの笑っているような感じに即座に軌道を修正して機体を上へ急上昇させますの。すると先程まで居たところに無数のビームが放たれてきました。いえ、回避した先にもドラグーンが存在し、そこからビームが放たれてきます。

こちらも細かくスラストアーを操作して紙一重で回避し、周りを念動力で感知すると判明したのは鳥籠のように囲まれていることでした。包囲に穴が出来ているのですが、そちらに向かうとゼロシステムが鳥籠に閉じ込められる事を教えてくださいます。

閉じ込められたライン・エクシアはビームに加えてヴェサリウスを含んだナスカ級三艦の艦砲やミサイルも含めて撃破されてしまいますの。

「かと言って……下がるわけにもまいりませんの」

相手のドラグーンからの攻撃を回避しながら考えます。こちらが下がるとアスラン達を殺していないことを気付いているクルーゼさんが、彼等を巻き込む攻撃を平気ですてくるのがいやでもわかりますからね。

飛来するミサイルをGNソードで切り払い、無理矢理包囲が厚い場所を駆け抜けますが……すぐにこちらの道を塞ぐように弾幕を展開してきます。何よりプロヴィデンスから放たれる精密射撃が鬱陶しいです。こちらが回避しきれないタイミングで切り払おうともそれなりのダメージを受けるタイミングです。流星にプロヴィデンスの射程と威力を大幅に強化したMA-M221ユーディキウム・ビームライフルの威力はヤベーです。戦艦の主砲並みにはありますし、GNフィールドでも簡単に貫通しますしね。

「このまま負けるのはやっぱり嫌です。わたくしもそろそろ冒険してもいいでしょう。次のステージへと行きましょう。エクシア、天使の名の下に力を示すですの」

わたくしのT-LINKシステムで増幅した念動力を利用し、手近に居たゲルトアイゼンナハト^{アルトアイゼンナハト}とゲシュペンストMK-III^{ゲシュペンストMK-III}とゲシュペンストMK-IV^{ゲシュペンストMK-IV}四機を転移させて手元に引き寄せます。

現れた四機へ即座にユーディキウム・ビームライフルが放たれ、破壊されます。です

が、その前にこちらから鉤爪と化した両手でそれぞれ一機ずつを貫いて取り込みますの。

機体が爆風や重力異常に晒される中、ライン・エクシアちゃんを刹那さんにプレゼントするために更なるビルドを行いますの。そう、わたくしはビルダー。故に何者にも負けない翼を授けますの！

イメージするのはダブルオークアンタのクリスタル素材の刀身を持つビット兵器ですの。これは大型モデルのAビット、小型モデルのBビット、ビームサーベル発振能力を持つCビットの三種を二基ずつのGNソードビットとセブンスードの追加武装であるGNヘビークウエポン、GNソードIIブラスタ。これの運用方法は大型粒子砲としての機能に特化しており、砲身下部には新素材の刀身が申し訳程度に装備されておりまして。

以上の二つを素材にして翼を作成します。基本フレームはもちろんT—L I N K フレームで作成。ゲシュペンストMK—IIIの装甲とゲシュペンストMK—IVの武器を利用して作成。動力は流星にツインドライブじゃないと足りないのでブラックホールエンジンと両翼にそれぞれ搭載しますの。

もちろん、スペックは本来の二つの武装とは比べるべくもなく劣化品。ですが、コイツの用途はその名の通り翼。切り離し可能な加速装置ですの♪

それぞれ二つある大型ブラスタの場所がスラスターになっていたので速度が落ちますが攻撃にも転用可能。ええ、はい……翼と言っていますがコンセプトはトルギスさんのスーパーバーニアですの♪

「刹那さんなら行ける行ける! (無垢なる信頼)」

ライン・エクシアちゃんはエクシアちゃんの約1.3倍の速度が出せます。翼を授けられたライン・エクシアちゃんは二倍なんてちやちな事はいけません。ブラックホールエンジンから生まれるほぼ全ての、八割の出力をスラスターに回し、残り二割は重力制御装置に使われており、慣性をほぼ無視できますので、三倍はいけますの。つまり、エクシアちゃんの3.9倍の速度が出せます。やばいですの☆

ちなみにエクシアちゃんはユニオンフラッグよりも速度は遅いらしいですが、それでもマツハ1ぐらいいは出せます。つまり、最低でもマツハ4までは出せますの。

「さあ、飛ばたいて駆け抜けますの……TRANS-AM!!」

クラッキングで強制解放させたTRANS-AMを使って爆風の中で進化したライン・エクシアちゃんの翼で突撃します。スラスターを全開にすると意識が一瞬でブラックアウトしました。その直後衝撃で目が覚めました。

視界にはプロヴィデンスの大きな盾さんがあり、プロヴィデンスはライン・エクシアちゃんと一緒に吹き飛ばされて後ろのナスカ級に埋まっていますの。

「かはあつ?! こほつこほつ……」

肺が押しつぶされて中から空気が全て出ていき、口からちよつと血が出ました。わたくしの身体で血を吐くとか、ライン・エクシアちゃんはガンダムの皮を被ったツールギスIIIですか? ゼロも搭載したので間違いありませんの。

それと視界には無数のレッドアラートが出ております。手足がほぼ壊れているので現在再生中ですの。どうやら速度に機体強度が耐えきれなかったようですの。

まあ、とりあえずこちらは置いておきましょう。姿をネメシスに変えて接触回線を開きますの。

「こんばんはラウ・ル・クルーゼ」

『ネメシス……やはりアインストか』

「私と契約してこちらに来ないか?」

両手を広げて歓迎を示しますの。美少女が胸に飛び込んでおいでと言っているのですから、断る人は居ないでしょう。なお、ナスカ級とライン・エクシアちゃんにサンドイッチされているのは考えないものとする。

『こちらにメリットはあるのかな?』

「貴方が抱えている肉体の問題を全て解決できる。テロメア? そんな物、我々の技術でどうとでもなる」

『私にアインストになれと言うのか?』

「どちらでも構わない。人でも、新たなステージに登ったイノバイターでも、アインストでも、スーパーコンピュータでも好きに選ぶといい。私は貴方の、ラウ・ル・クルーゼの選択を歓迎しよう」

『……』

やはり疑われていますので、こちらからカードを更に切りましょう。

「新しい肉体もいいし、今の肉体を若返らせる事だつて可能だ。君と同じ症状を持っている……レイ・ザ・バレル。彼も助けよう。機体も与えるし、やりたい事があるのなら地球に迷惑をかけない程度であれば応えよう」

『……私をそこまで買うのか?』

「ああ、買うとも。貴方はナチュラルの身でありながら死ぬほど努力してザフトのエアとなった。私はその部分に関しては貴方を尊敬する。ああ、そうだ。世界を、全ての人類を憎む事以外ね」

『ならば私と相容れない』

「その根本的な理由を排除するとしてもか?」

『世界の現状を見ればわかるだろう。人は何処まで行っても愚かしい。異星人や同じ星の別生命体からの侵略を受けているというのに未だに身内で争い合っているのだ。こ

れが愚かと言わずになんとする?』

「ならばこそ、我々が腐敗を正す。導くのではなく、自らの、人の手で」

『アインストがか?』

「私はアインストであり、人だ。人である事を捨てたつもりはない」

『貴様が人だと? 笑わせる』

「人だとも。例えば生まれはどうであれ、心が人であればそれは人だ。クローンであろうが、アル・ダ・フラガではなく、貴方はラウ・ル・クルーゼだ。他の誰でもない、私が、私達が貴方をただの望みのために努力する人だと認める」

『くっ、くははははっ!』

笑い出したクルーゼさんを見詰め続ける。そもそもわたくしが否定する事はありえませんが、わたし自身もそうですが、遺伝子操作されたルリちゃんや生み出した娘達も人ではないという事になります。こればかりは断じて認めません。認めないというのであれば、それはそれで構いません。思う事は人それぞれですから。ですが、実害があるのならばそれはもう戦争待ったなしですの。

『まるで有象無象などどうでもいいと言った感じだな』

「ああ、心底どうでもいい。私が守るのは私の仲間と同胞が幸せに暮らす地球であり、世界だ。その邪魔をするのならば例え誰であろうと排除する。一人は皆の為に、皆は一

人の為に。それができない奴を入れてやる必要などない。権利には義務が生じるように何事にも代価は必要だと私は思う。私は私の望む未来のために全力を尽くす」

『それはエゴだな』

「ああ、私も人だからな。人のエゴを持っている。だから、私は貴方のエゴも肯定する。人類を憎む。その事は構わない。私もそうだ。憎むべき敵は居る。アズラエルとか」

『先程と言っている事が違うぞ?』

「私は全ての人を憎む事は反対だ。だが、特定のどうしようもない塵共ならば別だ。無辜の民を巻き込まないのであればいくらでも貴方がする事を支援しても……いや、共に夢を叶えてもいい。闘争の世界ですら、叶えよう」

『闘争の世界か』

「人は争いをやめられない。それは歴史が証明している。ならば人類の戦いは被害の出ない仮想空間でやればいいし、異星人の中には絶対に分かり合えない存在は居る。そういったらとはどちらかが絶滅するまでの戦争だ。故に私は貴方の憎悪も肯定し、理解者となる」

戦いを望むなら、地球以外のところでどうぞ。むしろ地球を巻き込まないで、本当にお願いしますの。どれだけ敵がいると思っっているんですか。それもとんでもない連中ばかりですよ? 世界の危機がバーゲンセールで大安売りしておりますの。

「そう、私はアル・ダ・フラガや人類の代わりに貴方を愛そう」
『何故そこで愛!?!』

「あ、もちろんラブじゃなくてライクの方だ。私は美少女が好きだからな」

『どうでもいい。いや、むしろいいのか? レイが毒牙にかかる事はないのだから』

「男にライクはあつてもラブはない。と、いうか助けて。人手が足りない。ただでさえ重要な人物が何人も死んでいるんだ。世界は確実に滅亡へと向かっている。貴方の大切な人々が貴方と共に幸せに生きるために私に力を貸してください」

真摯な思いを込めて頭を下げる。

『いいだろう』

「っ!?!」

『だが、断る』

一瞬、顔をあげて笑顔になったのにその続きの言葉で絶望させられましたの。この仮面さん、上げて落としやがりました。わざとでしょう。わざとですね。

『まずは私とレイを治療してからだ。話は全てそれからだ』

「了解」

『だが、時間はない。覚悟しておけ』

「種子をあげますので、これを飲めばアインストにはなれる。即座に治療が可能となる。」

それ以外の方法はこちらから接触する必要あるため、少し時間がかかる」

種子を転移させ、ラウ・ル・クルーゼさんの手に二つ落としておきます。これで彼は何時でもアインストになれます。一応は説得成功ですの。

まあ、監督インタビュで、「彼の中には人類を滅ぼしたい自分とそうしたくない自分が同時に存在し、自分に未来が無く死期が見えていた。フレイを送り出したのは意識的に扉を開くというよりもコインを投げる賭けの感覚に近く、世界の行く末を決める重要な場面を人智を超えたところに判断を委ね、結果データは渡った為行くとところまで行くしかないのだ、となった」とあり、彼が完全には人類に絶望しておらず、心のどこかで自分を止めてくれる存在を求めていたのでしょうか。

ムウやキラに対しては、「お前に討たれるなら本望だ」というような事を言っていますし、最期に笑みを浮かべながら消えていったのもこのためでしょう。彼にとつてキラは「憎くもあれど、自分と同じく個人の欲望の為に人為的に作られ、生まれながらにして人生を歪められた存在として愛しくも思っていた」とも記されており、完全なる人工人類の完成形として嫉妬と羨望を向けると同時に、自分と同じ他者の身勝手な生み出された存在として親近感も抱いているんでしょう。あれ、わたくし……ラウさんに嫌われる事、いっぱいしてませんか？ 人工人類、AIとして作っていますし、身体もサイボーグとか色々……考えないようにしましょう。

『わかった。では、相談して判断する。私達の居場所はわかるか?』

「その種子があれば何時でも何処でも貴方の横に這い寄れますの」

『ストーカーか』

「酷い。でも、こんな美少女のストーカーならありでは……いえ、やっぱりありませんね」

『貴様は思ったよりも馬鹿だな』

「おちやめと言ってく下さい。元となったのがあの人ですから……あれ、この世界では違う?」

『私には理解できないが、まあいい。それで現状、これからどうする? こちらの会話は聞かれていないだろうな?』

「当然だ。ログも全て消してある」

『ならば一先ずは協力者としてプラントとザフトの情報を流してやる。取りに来い』

「かしこまり! あ、後、後ろのナスカ級は貫っていきますのでそれ以外は撤退してください構いませんの」

『……よかろう』

話がついたので修復された機体を離しますの。プロヴィデンスも埋まっているナスカ級から出て、撤退の信号弾を撃つように他の艦に触れて接触回線で伝えていきます

た。

『アデス。ヴェサリウスとハーシルで撤退する。破損したフリーエは放棄することです。インストと決着がついた。すぐに生き残った部隊を回収させる』

『了解です。ですが、大丈夫でしょうか？』

『あちらからの提案だ。裏切る事はない。それにあちらも決着がついたようだ。あのデカブツも一緒に相手をするなど私はごめん』

『ですな。すぐにフリーエから乗員を移乗させます』

あちらの話が終わったので、こちらでも反転して艦の方に向かいます。するとアスランさんが何やらやっているようなので横を通るついでにイザークさんと一緒にヴェサリウスまで押し出してさしあげますの。

『俺を踏み台にしただと！』

『くっ、間に合わなかったか……』

当たり前ですの。ええ、当たり前ですの。間に合ってたまるかってんですの。ソフト全部消してやったのを手書きで書き直されたらたまりませんの。そんなのスーパーコーディネーターでも……キラさんならやりかねませんわね。

「カエレッ！」

殺せるのに殺したら駄目な相手とか、とつても面倒ですの。気に入っているキャラ

……人や世界原作に必要とされている人ならばどうなるかなんてわかりませんしね。ただ
できえ混沌としているのに更に混沌になるとか、本当に止めてくださいですの。

とりあえず、アインスト達にナスカ級フリーエを持っていかせましょう。これで終わ
り……

『愛しいガンダムよ！ ようやく会えたな！』

「くんなあつ!?」

ノイエ・デューカリオンを突破してきたグラハム・エーカーとムウ・ラ・フラガさん
の二機がエンカウントしました。

『クルーゼの奴は撤退するのか』

『ならば私をてつだ……いや、手を出すな!』

『へいへい』

まくた殺したら駄目な人ですの。本当に嫌になりますの。もうこれは逃げるしかな
い……そう思いながらスラスターを噴射させようとしたら重力異常を検知しました。

『む』

黒い穴が開いてそこから無数の虫型の機械が出てきました。蜂のような機械達でそ
れがわらわらと湧いてきたですの。普通なら虫型と見て思い付くのはバッタを扱う木
連ですが、この機械の蜂達は違います。こいつ等は別作品の敵ですの。さて、特攻の力

を持つ力もないので、ここは一つ……全力ぶっぱですの。

『オルレイン！ グラビトロカノン発射準備！ その二人はすぐに撤退しなさい！
巻き込まれて死ぬぞ！』

『何を……というか、君がガンダムのパイロットか？』

『違う。私は借りただけの臨時だ』

『可愛らしい嬢ちゃん……つてか、ネメシスじゃねえか』

二人に念動力を利用して意識を接続し、警告します。相手は万とかいますからね。

『マスター、よろしいのですか？』

『かまわん。相手はアンドロメダ流国だ。タイムワープすら使える連中で地球の完全な敵だ。容赦なく滅ぼせ。これは生存競争と心得ろ』

『了解』

『おいおい、それなら戦っている暇はないか』

『地球の為であるというなら、今回は共に戦おうではないか少女よ！』

『ああ、もう。どうせ言う事なんて聞かないのだろうし構わない。ただし、撤退する時は私の機体に掴まれ。転移で逃げる。ノイエ・デューカリオンの近くに居たら潰されて死ぬからな』

『心に刻むぜ』

『うむ』

先にフリーエとトレミーは転移させて影月に逃がしますの。それからグラビトロカノンの時間を稼ぐために三人で共闘してノイエ・デューカリオンを守ります。相手もノイエ・デューカリオンがヤバイのはわかっているようで攻撃を集中してきます。

頑張つて時間を稼いでからムウ・ラ・フラガさんとグラハム・イエーガーさんの機体を掴んで転移します。その直後、自壊を気にせずに放たれるグラビトロカノンによって半径数キロが超重力の球体に飲み込まれて文字通り消滅したのがわかります。

ノイエ・デューカリオンも半壊になったのでわたくしの方で繋がりを通して強制転移で影月へと帰還させますの。つまり、影月に刹那さんとグラハムさんが一緒にいますの。ヤベーですの。

「刹那さん？ 刹那さん？」

「俺の、俺のガンダムが……」

フリフリのドレスでライン・エクシアちゃんから飛び降りたら、よろよろと寄つてくる虚ろな瞳をした刹那さん。目が死んでやがります。現状では自分ができないエクシアちゃんの戦い方を見た弊害でしょう。変わり果てた姿？ 知らない子ですが、問題はありませんの。

「剎那さん、貴方はガンダムです」

「俺はガンダム……」

「ですので、エクシアちゃんは答えてくれます。何故ならエクシアちゃんは貴方の為に進化しました。ちよつと進化しすぎたかもしれませんが、剎那さんなら大丈夫です。とりあえず、シミュレータから始めてみましょう。どうしても無理ならライン・エクシアちゃんを封印してエクシアちゃんに戻します。それに身体が持たなければ……いえ、こちらはどうしようもありませんの」

剎那さんにはイノベーターになつてもらわれないといけないので、最悪は強制的に脳量子波に覚醒してもらいましょう。それでも無理なら肉体改造から始めないといけません。

「君がガンダムのパイロットか！」

「お前は……」

「おいおい……やつぱり子供じゃねえか」

「はいはい、注目。お前達はアインストの前線基地にやつてきたんだ。まずは案内するからこつちに來い。食事をしてからゆつくりと話そうじゃないか」

そう言うのと、格納庫の少し離れた位置に設置されているトレミーからソレスタルビーイングのクルー達が降りてくる。その隣にあるブリッツとストライクの壊れたコク

ピットからはニコルとラストエイが出ている。二人はかなり警戒しているけれど。二人はクノツヘン達に拘束されて銃を取り上げられていた。コクピットの中にはツエツペリンちゃん居て情報抜き取っていた。ミラージュコロイドのデータが残っていれば儲け物ですの。

とりあえず、この客人達を連れて食堂へと移動します。食堂ではコック帽を被ったアインスト達が器用に料理を作って迎え入れてくれますの。その光景に皆さんはS A N チェックのお時間です。

第54話

影月に存在するハイパーゲートと残されていた施設を接続し、大規模な工業施設として作り替えたわたくし達のアインストとしての本拠地。それが現在開発中のムーンスクレイドルですの。

はい、名前に関しては考えるのが面倒なので、ムーンスクレイドル計画を引き継がせていただきました。ムーンスクレイドルの建設はマオ・インダストリーがやっておりますし、引き継いだわたくしが使っても問題ありませんの。ええ、もちろん詭弁ですが、関係ありませんの。

ノイエ・デューカリオンもここで開発されていました。機械も素材も資源を取り込んだアインストが自己進化、自己増殖する事で超効率的な速度で研究・開発・建設が行われておりますの。それもわたくしが収集した地球連邦軍はもちろん、使徒のデータなども含めてです。その中にはネルガル・マオインダストリー社で開発した物も当然、含ま

れておりますの。具体的にはエイフマン教授が開発した太陽炉をはじめとした相転移エンジンなどですわね。ここで得られたデータは全てネルガル・マオインダストリー社の方にフィードバックされておりますし、ここからアインストが作り上げた工業部品を輸出もしているので我社の技術力は鰻登り状態です。

もちろん、現在もフューリーとは交戦中ですし、戦闘データもしっかりと取りまして娘^A達に送信して彼女達の性能を上昇させております。彼女達がデータを基礎としてパートナーと一緒にアップデートさせた戦術や技術はこちらにも送られてくるのでしっかりと循環しております。

そんなムーンクレイドルでは現在……お客様方がおり、その方達の雰囲気がつつても、とつても悪いのです。ええ、二回言うぐらい悪いです。食堂で皆さんに座ってもらいましたが、これは当然でしょう。拉致されたのですから、仕方ありません。

「……」

主に暗い表情をした刹那さんと刹那さんをガン見しているグラハムさん。もう一組は当然、機体を破壊されて自らも死んだと思っただろう捕虜のニコルさんとラスティさん。この二人は暴れないようにクノツヘン君がついておりますの。

少しましな表情で席に着いているのはソレスタルビーイングの人達ですの。この人達は不安そうにしていたり、なんでもないかのようにしている人。楽しそうに隣りの男

性に話している女の子。不思議そうに周りを見渡している女の子。興味深そうにわたしを観察している男性達。こちらはムウさんも含まれておりますの。

「さて、まずはお話しますの。知性ありしと自称するならば、ですが」

わたくしの言葉に皆さんがこちらを見詰めて頷かれます。まずは話し合いをする事で同意していただけただけのようなので、グリート達に飲み物やお菓子を用意させてもらいます。

「あ、美味しい」

「フェルト!? 食べて大丈夫なの!？」

「大丈夫。彼女が私達を害するならとつくに殺されている」

「こっちのクッキーも美味しい。ハレルヤもどう?」

「えっと……」

「あくん」

「それは……」

「食べてくれないの?」

「あ、あくん」

甘々な光景を見ながら、グリートが居れた紅茶を飲んでいきますの。当然、他の人達から呆れた表情を見せられています。また、ムウさんには殺気まで与えられていますの。

「マスター、ただいま戻りました」

「……お帰りなさい……指揮官……」

「お帰り。任務ご苦労だった」

食堂に入ってきたのは黒髪の綺麗な女性である血塗れの黒い軍服を着たオルレインと長い金髪の髪を持つ可愛らしい幼い少女ビスマルクちゃん。ビスマルクちゃん
はわたくしに抱き着いてきたので、頭を優しく撫でてあげます。膝の上に乗せて彼女の髪
の毛や肌を堪能します。

「……指揮官……ノイエ・デューカリオンはどうだった……?」

不安そうに膝の上に座りながら上目使いで聞いてきたビスマルクちゃんにきゅんと
しましたの。だって、ついさっきまで超殺伐とした殺し合いしていたんですもの。それ
も殺したら駄目な奴までいるし、計画は狂いまくるし……癒しを求めてもいいですの。

「ノイエ・デューカリオンは……いや、その前にオルレイン。怪我はどうだ?」

「すでに再生を完了しています」

「そうか。なら、ノイエ・デューカリオンはどうだ? 忌憚なき意見を頼む」

怪我が問題ないのであれば実際に搭乗して扱ったオルレインの意見を聞くべきです
の。ですので、オルレインに聞いてみたのですが……結果がわかりきっておりまし
たの。

「欠陥品です」

「うう〜!」

オルレインの言葉にビスマルクちゃんが唸りますが、当然ですの。

「グラビトロカノンの火力は凄まじいですが、自壊しました。機体の制御と火器管制が一人では無理です。私自身も普通の身体なら死んでいます。回収していただけたので生きていますのでございます」

はい。オルレインはグラビトロカノンによって肉体が潰れ、あのまま放置していれば確実にペツちゃんこになって死んでいたでしょう。

「……………めんなさい……………」

「未完成なのはわかりきっていた。今回のデータを基礎として更なる進化を起こせばそれでいい。失敗は成功の母だからな」

「母……………指揮官……………お母様……………」

「と、いうわけで実験機としてはいいさ。試作機としてはまだまだだがな。後、水爆の火力が足りん。もっと強くて構わない」

ノイエ・デューカリオンのコンセプトは戦略級の大規模破壊兵器ですの。たった一機で数多くの戦場の優劣を覆しえる存在。理不尽を理不尽で覆す存在であり、特機の中でも完全な化物機。そう、目指すべきはネオ・グランゾンやマジンカイザーとかのレベル

ですの。

「わかったのです……三倍の威力にしてみます。専用の火器管制システムを搭載し、機体制御に関してはダイレクトフィードバックシステムとIFSを融合させ、機体を肉体として操るようになっています」

「それ、たぶんアインストじゃないと死ぬが……」

「どう考えても機体のダメージまで自分にフィードバックしそうです。腕がもがれたり身体を貫かれたり、普通にありそうですわね。」

「アインストしか、使わないから問題ない……です」

「それもそうか。じゃあ、ノイエ・デューカリオンは機体の強度とシステム面の改修を頼む」

「任せてください」

ビスマルクちゃんが色々と計算しだしたので、オルレインの方を見ると顔を青くしていました。まあ、よりヤバイシステムが搭載されるのですから仕方ありませんの。

「むしろオルレインは指揮官なのだから、部隊で運用させるのもいいか。オルレイン、分割思考、別人格を作り出して操作させるのは可能か？」

「無理です……とはいえません。アインストの身体は進化するらしいので、不可能ではないかと思いません」

「では、そちらの実験も頼む。理想はノイエ・デューカリオンを複数機、同時運用だ」
「無茶苦茶いいますね……」

オルレインの乗るノイエ・デューカリオンを指揮官機として六機ぐらいは随伴機として量産したい。宇宙空間での運用が前提となるけれど、前後左右上下に配置することでノイエ・デューカリオンを安全に守る仕組みというわけです。まあ、そこまで量産できるなんて普通は無理ですが、アインストである我々であれば増殖ができますので可能です。

「さて、こちらの話は終わりでもいいか。落ち着いたであろう皆の話しよう」

わたくしの言葉にソレスタルビーイングをはじめとしたここに居る人達の視線が集まってきます。オルレインはビスマルクちゃんを持ち上げて別の席に座らせてからわたくしの左後ろにつきました。一応、護衛の役割のつもりかもしれませんが。

「それぞれが勝手に話しては色々と面倒だから、順番に話をする。だからそれ以外のグループは待つていてくれ。こちらの指示に従う限り、身の安全は保障しよう。自由行動はあまりさせられないが、食事も不自由させない事を誓おう」

「それは帰してくれないって事か？」

「帰宅に関しては応相談だな。自力で帰れるのならば帰ってもかまわんが、隔絶された空間であるこの場所から移動するには転移技術を持っていなければどうしようもない

ぞ?。」

ムウさんの質問に答えてあげますの。わたくしの言葉を聞いて皆さんは唾を飲み込みましたの。転移技術を持たない彼等にとつて、ここは牢獄ですの。しかも地球の座標を知らなければ別世界や変なところに転移すると即死するような場所までであるので脱出不可能な牢獄レベルですわ。この事を懇切丁寧に説明してあげると、皆さんの顔が更に悪くなりました。

「では、まずソレスタルビーイングについてだ。お前達に関しては機体や船は接收させてもらう」

「ふざけるな!」

今まで黙っていたティエリアさんが声を荒げます。流石にガンダムやトレミーが奪われるとなると抵抗の声を上げましたわね。他の人達は渋々納得している感じですよ。まあ、こうなる事はわかりきっていたでしょう。

「お前達はテロリストだ。例えばどんなに崇高な意志があろうが、地球圏に無用の混乱をもたらしただ事に変わりはない」

本当はレッドアクシズとして接收する予定でしたが、ネルガル・マオインダストリー社とは一切関係無い母艦とそれを運用する機体が手に入ったのですから、利用しない手はないのです。これで地球連邦軍やイスルギ重工の研究施設を襲撃しても全てソレス

タルビーイングが行った事になりますしね。

「アインストがそれを言うのか!？」

「監視者としての決定だ。これは地球の国家もそうだが、我々アインストにとつてもコントロールの効かない力や武装勢力など迷惑極まりない。ただでさえ地球は多数の異星人から侵略を受けているというのに同じ地球人類でいがみ合い争っているのだ」

「それは俺達だけじゃないだろ」

ティエリアさんとラツセさんの言葉にしつかりと答えます。刹那さんはこちらを睨みつけていますし、クリステイナさんは不安そうにフェルトさんの方を見詰めています。そのクリステイナさんをリヒティイさんが見ています。

「ああ、だから整理しないといけない。不要で邪魔な組織は綺麗に掃除する予定だ。もちろん、その中には地球連邦軍も入っている。奴等の中に存在する腐った部分は切除しなければならんからな」

わたくしの言葉を聞いて地球連邦軍の二人もさもありなんと頷いた。腐敗した連中は排除し、彼等に使い潰されている子供達を助け出す。

「違法合法とわず自らの意思に関係なく実験体とされている者達を救出する予定だ。特に未来ある子供達は必ず助ける。だから、ソレスタルビーイングのトレミーとガンダムは利用させてもらおう」

「俺達に悪名をなすりつけるつもりか」

「勝手に勘違いするのは私には関係ないからな」

ニヤリと笑いながら告げてあげますの。それにこれは人類の為になるのだからイオリア・シユヘンベルクも納得してくれるでしょう。

「それにイオリア・シユヘンベルクはこちらで確保した。現在、治療中だ。お前達の身の振り方は彼が目覚めてから話し合うといい。それまではフェルトとの契約に従い、お前達の世話はする。もちろん、こちらに鞍替えするというのであれば歓迎する」

「ふえ、フェルトとの契約？　ど、どういう事？」

「フェルトは私に心身共に差し出し、アインストとなりました」

「フェルト!？」

「やはりか……」

「クリス、安心して。私が皆を守るから」

フェルトにすがりつくクリスを抱きしめ、頭を優しく撫でていく。わたくしは席から立ち上がって彼女に後ろから抱きつきますの。

「私の種子を飲み込んで同胞となったフェルトは……私の娘？　兄弟？　まあ、とりあえず、家族だ。故に彼女の願いはある程度叶える。故にお前達は敵対しない限りは私が保護する」

「嬢ちゃんは自らを犠牲にして仲間を助けたのか……」

「うむ。良き少女である」

「フェルト……」

「クリス、私はお母さんとお父さんの真実を教えてもらった。だから、ソレスタルビーイングが信じられなくなった。ヴェーダも私を殺そうとした。だから、これでいいの。後悔はない」

「真実って……」

クリスの言葉にフェルトが自分の事情を説明していきますの。するとクリスは涙を流し出しました。これはチャンスですの。

「クリステイナ、フェルトが心配ならばお前もこちらに来ればいい。私は歓迎するぞ」

「それは……」

「引き抜くつもりか」

「どの組織につくかは本人の自由だ。それにお前達は私につく以外にはもう地球圏には居場所はない。ヴェーダを掌握しているイノベイド達はアインストと接触し、感染されている可能性があるお前達を生かしてはおかんだろう。ソレスタルビーイングはお前達を敵として排除するだろうな。ああ、それとアレルヤとマリーの二人も既に我々の協力者になってくれる。それでいいのだな？」

「ああ、問題ない。ただ約束は守ってくれ。マリーもそれでいいよね？」

「私も大丈夫。ただ家とかも欲しいけど……」

「とりあえず、ムーンクレイドルに一つ用意しよう。ああ、そういえば給料や福利厚生に
関して説明していなかったな。まず治療費は完全無料だ。手足が欠損しようがすぐに
治療できる。不妊治療だつてももちろん可能だ。給料は出来高制だが、衣食住はこちらで
負担するから仕事さえしてくれば生活に不便はない。休みは月十日。戦闘後は緊急
事態でない限りは二日は自由時間を設ける。最悪、アインスト化すれば不老になり、脳
と心臓が壊されない限りでは再生能力で大概はなんとかなる。むしろ、肉体がなくなっ
ても私が保存するバックアップから再生も可能だ」

「「ホワイト!?!」」

そう、我がアインスト社はホワイト企業です。一時的にブラック企業になりますが、
その分はしっかりと報います。

「業務内容は地球圏の平和維持と人々を食い物にしている癌細胞の排除。そして侵略者
の排除。もちろん、この排除には根本的な物も含まれている、逆侵攻とかする可能性が
ないともいえない。もちろん、業務内容は多岐にわたるからある程度は自由にできる。
残りは応相談だな。家族の保護とかも受け入れるから言ってくれ。こちらから提示で
きるのはいくらいいだ」

「スメラギやロックオンは……」

「その兩名もおそらくこちらに移送する事は可能だ。刹那、ガンダムに乗りたいたいのであればこちらに來い。エクシアちゃ……エクシアは君を待っている。神として世界を救うといい」

「！ わかった」

「刹那!？」

チヨロインですの。テイエリアさんはおそらく無理でしょうが、こちらとしてはゆつくりと説得すればいいだけですし、放置で構いません。それこそヴェエダを押さえるか、イオリア・シユヘンベルクに説得させればいいだけです。機体はこちらで有効活用しますし、本人は別に要りませんの。

「ビスマルクちゃん……は忙しいだろうから、オルレイン。ソレスタルビーイングの方々を居住区へ案内してさしあげろ。フェルトは私の家がいい。マリーとハレルヤには良いところを用意してやってくれ。後は適当に頼む」

「了解しました。では、皆さんはこちらについてきてください。案内します」

ソレスタルビーイングの方々がオルレインに連れていかれたので、残ったのはわたしを除いて四人だけです。この人達の処遇に関しては本当にどうしましょうか。

第55話

ソレスタルビーイングの方々はこれでいいでしょう。彼等がどのような選択をするかはわかりませんが、イオリア・シユヘンベルクが説得すればティエリアやイノベイドすらこちらに付く可能性にあります。逆に言えばイオリア・シユヘンベルクを説得できなければこちらに付く事を選んだ方々が離反する事も十分にありえることです。

ですので、ソレスタルビーイングに関してはこれでいいでしょう。現状ではこれ以上はどうしようもありませんものね。まあ、最悪フェルトと刹那さんだけは絶対に逃がしません。フェルトは私の同胞にしましたし、刹那に関してはかなりの戦力になりますからね。それこそO Oライザーだってアインストとネルガル・マオインダストリー社の総力を上げて作り上げ、プレゼントして差し上げればいいんですからね。

「待たせた。次は地球連邦軍の二人について話そう」

「了解した」

「色々ヤバイ事も聞いてしまったんだが、良いのか？」

「知られたところで困らんからな」

ムウさんの言っているヤバイ事。つまり、ソレスタルビーイングの母艦や機体を使って違法研究はもちろん、子供達を食い物にしている場所を襲撃すると言ったのです。地球連邦軍からしたら通常の施設か違法かは問わずに犯罪行為と言えますね。取り締まるのは彼等であるべきなのですし、本来なら任せるべきなのでしょうけれど……現在の地球連邦軍は腐敗していますので率先してそのような事をやっていたり、賄賂で見逃したりしていますので頼れませんの。

「やれやれだな」

「実際問題。我々とアインストでは兵力の展開速度と機体性能に圧倒的な差がある。アインストが本気を出せば地球は滅びるだろう」

「確かにな」

実際に出来るかと言われればできる。原作のアインストは人類を甘く見過ぎた故に敗北しました。確かに質と数、技術でアインストが勝っていました。ですが、人類側にも人類に味方する超常存在が力を貸し、一部の部隊とはいえレジセイアなどを撃破できる存在が現れ、女王はその部隊に集中し、本拠地を割り出されて頭を撃ち取られたり、果てはホワイトスター（ネビーイーム）を依代にして顕現したのに内部からやられてしまいました。アニメではベーオウルフが女王を乗っ取って暴走しましたわね。

まあ、それすらも蹴散らされたのですが……アクセルさんのコード・麒麟とかかつこ

よかったですの。流石はレモンお姉様のお婿さんですの。もちろん、お父様や
お母様も素敵でした。エクセレン・プロウニング
キヨウスケ・ナンブ

この様な事がわかつているのに何故負けないと断言できるかと言えば、わたくしが指揮するからですの。わたくしは人類の一部が埒外の超常存在であり、無理無茶無謀などの道理をぶつ飛ばしてくる馬鹿げた存在である事を知っていますの。では、そんな彼等に勝つ方法は何か？

動けない状況を作り出し、真綿で首を締めるようにゆっくり、じっくりと始末しますの。ええ、具体的には全世界規模で同時侵攻を行い、それをライブ配信しますの。狙いは食料生産地や保管庫、インフラなど徹底的に破壊し、ついでに宇宙からアインスト化して量産させた揚陸城を隕石爆弾として叩き込んで周囲をアインスト化させればよし。無理でもこちらから即時戦力を転移させて大戦力を送り込み、敵が増援として派遣されてきたらその場に揚陸城を自爆させる用意をして転移で撤退。やってきた敵を消滅させてから再生用にレジセイアを送り込めばそれで完了。レジセイアはアインストのコロニーを作り出し、自然環境と生物の再生を行い、敵にはナノマシンを配布して分解する攻撃を仕掛けますの。

これにより、人類の部隊は自らの所属する場所を守るしかなく、こちらの八割の戦力を瞬時に叩きつけることで孤立化している超常存在を各個撃破していきますの。むろ

ん、研究所などは優先的にぶち壊し、資源を渡さないようにしますし、常に台風などを作り出して自然環境も変えます。ああ、自転を狂わせるのもいいですね。地球の位置を変えたり太陽に近づけたりするだけで適応できない生命は死に絶えますの。

「軽く人類抹殺計画を考えてみたが、結論として人類にアインストの力は早過ぎるな。人類を滅ぼす方法なんて簡単に幾つもの思い付いた。ヤバイです……ね☆」

「思わずですの。と、言いかけたけれど仕方がありません。アインストに狡猾で残酷な性格……いえ、人類史を正確に理解させるのがやばやばですの。理解しきる前に女王が人類を切る事にして人類は助かりましたね。学ぶ事があると判断されていけば詰んでいたでしょう。ゲームだから助かった、といえるかもしれません。シミュレーションゲームなだけあって……」

「いや、お前がヤバイだけだ」

「内容は教えてくれないのか？」

「一つだけ教えよう。今、ここに居るムーンクレイドルは何処にある？」

「そりゃ月……」

「そうか。月を無くせば自転が狂う」

「それだけで生物は大概死滅するってか」

「うむ。落下させるだけでも十分であろう」

「正解だ。我々アインストにはそれすら可能だ。また、地球の再生もやろうと思えば可能である。そこに人類は必要とされないだろう。それでは私は困る」

「アニメや漫画、ゲームが無いからか？」

「うむ。ところでプレ〇テ〇の抽選に当たらないのだが、どうすればいい？ テイルズやりたいんだけど」

「知らん」

「頑張れ」

「ちっ」

携帯端末で応募だけして待機しておきますの。

「で、俺達はどうなるんだ？」

「お前達はザフトと同じく捕虜だな」

「捕虜だと？」

「忘れているかもしれないが、一時的に共闘したとはいえ戦端は既に開かれた。そしてここは私の本拠地だ。敵対関係にあるのだから、ある程度は拘束させてもらう」

「道理ではあるな」

「機体からさっさと降りたのは失敗だったか。いや、どうする事もできんか……」

「もとより私達はここから逃れる事もできん。捕虜の待遇についてはどのような物か聞

「いしゅっ。」

「衣食住は保障する。部屋は個室を用意するし、食事はここで取ってくれていい。移動制限としては部屋と食堂、リラクゼーションルームの使用を認めるぐらいだな。格納庫などへの立ち入りは禁止だ」

「自由行動がある程度は許されるのか……」

「共闘したからな。それぐらいは問題ない。ああ、それとすぐそこに地球を、世界を滅ぼそうとする連中の本拠地が存在する。傭兵として働いてくれても全然いい。むしろ歓迎する」

腕を振るって空気中に存在するナノマシンを操作し、集結させて空中に仮想スクリーンを生み出します。そこにフューリーとの戦闘記録を映し出しました。

「マジか」

「ふむ。これは戦いがいがあるさうだ」

「ちなみに奴等は時間を操作してくるから対策してないとやられる」

「……どうする？」

「フラッグでは厳しいな」

「機体はこちらから貸し出すから心配するな。ガンダムからパーソナルトルーパー、アサルトドラグーンなど選り取り見取り、好きな物を選んでくれていい」

「ちよつと考えさせてくれ」

「うむ。捕虜という事は解放してくれるのだろうか？」

「もちろんだ。私は人道的な相手には人道的に応じるとも。まずお前達二人は地球連邦に今回の件で請求を行い、支払われれば返還しよう」

金額はこちらが破壊された機体の代金と救助にかかった代金。ノイエ・デューカリオンの弾薬や修理費などしつかりと精算させていただきますの。金額？ ミサイルは安くありませんし、一発3,090万ドルとありますし、数百発ぐらい撃つてるかもしれませんし……アインストの生産能力がなければどうしようもありませんの。トリガーハッピーには最高の環境ですの♪

「支払われなければどうなる？」

「こちらも何時までも無駄飯喰らいを置いておくつもりはない。働くか……」

首を切る動作をします。すると、ムウさんは肩をすくめ、グラハムさんは頷きました。まあ、二人ともわかつているのでしよう。

「強制的にアインストにして同胞にするというのも手ではあるが、やらないから好きにしろ。全ては連邦の行動次第だ。二人の腕があれば我々は歓迎するのを覚えておいてくれ。先程ソレスタルビーイングに言ったのと同じ待遇かそれ以上で迎え入れる」

「わかった」

「じゃあ、今日は休ませてもらうか」

「部屋へ案内させよう」

「頼む」

「ああ」

二人を見送った後、最後に残ったザフトの二人に視線を向けます。二人はやはり、こちらを警戒しているようだ。さて、ザフトは正直返す必要性を感じない。ここは二人を実験体としてコーデイネーターの研究をするべきです。せっかく、死んだように偽装したのですし、ニコルパさんが奮起奮闘するのはニコルさんが死んでからですしね？

彼が頑張って技術を鍛えたところで、ニコルさんが生きている事をしらせ、彼から必要な技術を引っ張り出せばウハウハです。少し寝かせるだけで結果が期待できますので、やらないわけありません。それに二人のおかげでコーデイネーターの出生率が上昇すれば喜んでくれるでしょう。

「さて、次はザフトの二人だが……お前達についてだが、返還はしない」

「なんだと？」

「どういう事でしょうか？」

「プラントとの連絡手段が無い。また帰したところで私にとって旨みが存在しない。ザ

フト……プラントが持っているであろう技術はお前達の機体から回収した。金銭や物資に関しても地球連邦とプラントでは規模が違うから同じように支払われる事はないだろう。だいたい貴様等から襲い掛かってきたのだから、死ぬ覚悟くらいはしているだろう」

「ふざける……」

「ラストイ。彼女の言う事はその通りです。僕達は殺すつもりで戦いました。ですから、殺されても仕方がありません。ですが、わざわざコクピットをえぐり取ったのには訳があるんですよね？」

ラストイさんはともかく、ニコルさんは冷静に物事を考えられているようで凄いです。この状況ならパニックになるかと思うのですけどね。前のわたくしなら確実に取り乱していますの。

「ラストイはついでだな。ストライクを使っていたのが気に入らなかつた。つと、いうのもあるからな」

「はっ……ふざけているのか！」

実際問題は殺しても構わないから、というのとストライクを使っていたからだ。やっぱりストライクを使うのはキラ君であるべきです。回収したストライクは魔改造してキラ君に差し上げるつもりです。

「事実だ」

「では、僕を狙ったのですか？ 確かに僕の父は……」

「お前自身とブリッツが狙いだ。これはお前だろう」

操作してニコルさんが出ているコンサート映像を流します。ニコルさんは驚いた後、懐かしそうにしていますの。やはり、戦争に合わない人ですの。

「私はお前が持つ音楽の才能を高く評価している。その技術を買いたい」

「っ!? そ、それは……」

「まあ、考えるといい。そうでなければ人体実験だな」

「なっ!」

「ラストイはこっちだな。他に使い道が思いつかん。お前達程度の腕ではフューリーを相手にすれば即死だ。それなら他のコーディネーターを助けるための礎となればいい」

「じ、実験だと……?」

「コーディネーターは出生率がかなり低い。だから婚姻統制なんてしているのだろう？

私達アインストの技術であれば解決するのは可能だろう。その為にはコーディネーターの身体を詳しく調べないといけない。ああ、もちろん死ぬような実験はしない。これが嫌なら地球連邦軍の二人と戦い、シミュレーションで勝利できれば傭兵として雇ってやろう。それ以外であれば……本当に無いな。コーディネーターの傲慢な性格はい

らん。実力もともなっていないのであれば尚更だ」

「なんだと!？」

「私が求めるのは優秀な人材だ。全体の平均以上を出す程度では必要ない。特化している者か、エース級の存在でなければ必要無い」

傲慢でなく、他者と分け隔てなく連携、協力できるのであれば使えるが、そうでなければ超一流や天才達からすればその他大勢と変わりが無い。そもそもその程度の人材が必要であればアンドロイドやAIで用意してしまえばいいのだ。その方がこちらの指示を聞いてくれるので使えます。ますますコーデイネーターは一部を除いて要りませんの。

「まあ、しばらく考えてみるといい。そもそもお前達が見下しているナチュラルだが、そのナチュラルに負けているのがプラントの現状だ。それに私はプラントが嫌いだ。お前達は地球連邦が資金と資材を出し、雇って作ったコロニーを代金も支払っていないのに奪い取っている。この時点で信頼性は無い。しっかりと購入してからなら話は別だったかな」

「俺達で作った物だ!」

「その作る金と物資を出したのが地球連邦だ。その代金を支払うのは当然の事だ。そうでないならお前達は強盗と変わらん。まあ、地球連邦の一部、ブルーコスモスもユニウ

スセブンを核で破壊したのはいただけくない」

「……わかりました。僕達もすっかりと考えてみます」

「基本的な情報があるネットワークには接続できるようにしてやる。これからの身の振り方をしっかりと考えるがいい。何れ私もプラントに向かう。その時にでも連れて行ってやつてもかまわないからな」

「はい」

ニコルさんがラスティさんの口を塞いで話を終わらせました。彼等もグリートに案内させて部屋に移動させるように伝えました。さて、どう転ぶかはわかりませんの。

【地球 連邦政府 会議室】

明るい部屋にある会議室。高層ビルの窓からは夜景が見えますの。この部屋にはホテルのロイヤルスイートなみに豪華な椅子がありますの。そこにスーツ姿の年老いた

人や若い人達が座っています。彼等は円卓を囲んで話し込んでいますの。

「どうするのだ！」

「これはもう知らぬ存ぜぬでよろしいのでは？」

「ペーオ・ウルブズの暴走という事にして、支払いは拒否しましょう」

「だが、それでは士気が下がる」

そう、こないだの戦いについて、アインストから正式に抗議と請求書が送られてきました。また、そこに捕虜二名について話し合いがされていますの。ちなみにわたくしはお爺様……連邦政府安全保障委員会、委員長グライエン・グラスマンと一緒に来ています。まあ、レッドアクシズの代表としての参加ですが、お爺様の護衛も兼ねております。イスルギ重工などは参加していません。あくまでもこれは連邦政府と軍の話ですから、話が行くとするとこの会議が終わってからです。

「この請求額は統一前の小国の国家予算なみではないか」

「パイロット二人の為にこの額は払えん。それにアインスト側も支払わなければパイロット二人を帰さないと言っているだけだからな」

「ペーオ・ウルブズの予算では支払えないのか？」

「無理だな。流石にそこまで予算はつけていない。軍としても予算がきつい」

お爺様は興味なさそうに他の資料を読んでいますの。まあ、関係ないと思っ

のでしよう。わたくしの部隊とはまったく関係ないですからね。予算から考えて、どう考えても支払えませんし、見捨てる事になるでしょう。

「では、今回の要求は遺憾ではあるが、返還を求めないということ……」

「うむ。そもそもベーオ・ウルブズの暴走だからな。彼等に責任を取ってもらおう」

決まりかけたようですので、手をあげます。すると視線が集まってきますの。まあ、ここに居る中でぶつちぎりでも最年少であり、無茶苦茶若いですからね。また、お爺様の権力があるから参加させてもらっている感じですよ。

「皆さんが支払わないのであればわたくしが支払いましょうか？」

「ほう？」

「お嬢さんがかね？」

「ええ、そうですわ大統領。こちらとしてもアインストと交渉のテーブルにつけるきつかけとなりますしね。彼等が持つ転移技術は大変魅力的ですもの」

「それは成功すれば我々にも与えてくれるのかね？」

「レッドアクシズ内でのみ運用させていただきますわ。生産が可能であれば提供を考えてもいいですが、他に回すつもりはありませんわ」

「なんだと？」

「こちらは地球への侵略者に対して治安維持の名の下に滅ぼすため、派遣するのです。

地球全土に戦力を瞬時に送り込めるといふのは被害をへらす事に繋がりますの。これにはアインストと同じ目的でしょうし、転移を借りられるかもしれません。ですので、わたくしの部隊で使わせてもらいます。そもそもこの金額を投資として出すのですから、成果だけをかすめ取ろうというのは許しません。当然、返還されたパイロット二人もベーオ・ウルブズではなく、レッドアクシズに所属を変更してもらいます。確か、グラハム・エーカーさんにはフラッグ隊という部下がいましたね。彼等ももらいますよ
う」

「ぐっ……」

「良いではないか」

「しかし委員長……」

「資金を全てネルガル・マオインダストリー社が出すというのだ。我々の懐はいたまん。パイロット二名に関しても今回の懲罰という事にすればどうとでもなる。グラハムの部下に関しては本人達の意思次第だな」

お爺様のおかげで無事に二人は手に入る事が決まりましたの。はい、アルフィミーちゃんの計画通りです。賠償金と身代金を高額にし、それをネルガル・マオインダストリー社で全額負担することで合法的にムウ・ラ・フラガさんとグラハム・エーカーさんというエース級パイロットを確保する計画です。そもそもネメシスもわたくしなので、

内部のお金なんて右から左に回して左から右に戻せばいいだけですからね。

「支払えるのか？」

「わたくしどもが持つ重力技術を提供しますの。どうせアインストには解析されて使われるのですから、特許という形でお支払いいただきましょう」

「なるほど。どうせ奪われている技術であれば正式に渡してしまっても痛くないというわけか」

「もちろん、他にも技術を渡す事になるでしょうが、代わりにあちらの技術も引つ張ってきますの。さしあたってこちらからは追加でソレスタルビーイングが使っていた動力炉をこちらで作った物と合わせて渡しましょう」

「もう作れたのか」

「試作段階で実験中ですが……アインストにも喜ばれるでしょう」

「では、そのように頼む。引き渡した技術に関しては知らせてくれ」

「かしこまりましたの」

アレハンドロ・コーナーさんなどにも反対されましたが、気にしません。これで表立って転移技術も使えます。アインスト側から端末を借りた事にすればいいですしね。派遣するのはそれっぽいのでいいでしょうし……それこそアンドロイドを使いましょう。